

PL Shin gunsho ruiju
755
 .35
S5
v.2

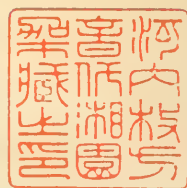
East Asia

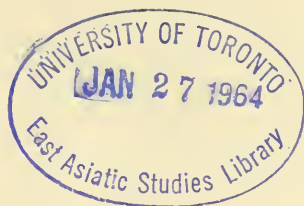
PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

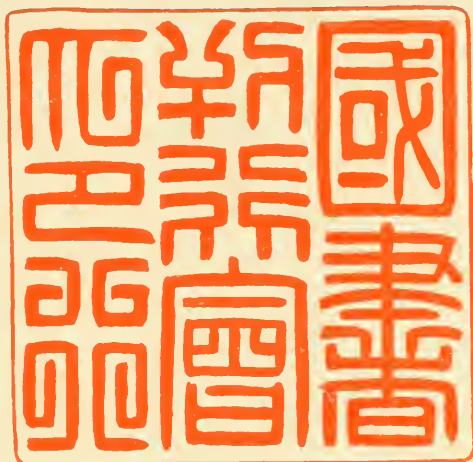


新
群
書
類
從
第
二





PL
755
.35
S5
v.2



例言

一 曩に新群書類從の第一に於て、西澤文庫の中『傳奇作書』と『皇都午睡』との二部を公にし、此卷に於ては『脚色餘錄』と『讚佛乘』の二部を收むる筈なりしが、更に『綺語文草』二卷と『南水漫遊』十五卷とを加へたり。

一 『綺語文草』は西澤文庫の書目によるに十五卷あり。こゝに收むる二卷は、其何れの部分なるかを詳にせざれど、上卷は『有馬温泉記』、下卷は『暮秋北山廻り』、『花洛紅葉見記行』の三編なり。原本は關根正直氏の藏本にして、『西澤文庫』、『李叟』等の藏印ありて、一鳳自筆の稿本なりといふ。此書流布本極めて稀少なれば、零本ながら關根氏に請ふてこゝに收むることゝしたり。

一 第一の卷に收めたる『皇都午睡』の如き、此卷の『讚佛乘』及び『綺語文草』の如き、寧ろ演劇とは縁遠き書にして、演劇の部に之を加へた

ること稍々穩當ならざるに似たれど、抑々一鳳が記述たる何れも狂言作者の立場より筆を著けたるものにして、たとへ其事柄は演劇に縁なきも、彼の天地一戲場、世事是狂言綺語の主義に基き、讀書は勿論。和歌、俳諧、人情風俗の研究、即ち宇宙間の森羅萬象を知るは、恰も狂言作者の資格を作るにありて、其旅行日記も吟詠も隨筆も皆劇詩の材に外ならず。著述の精神既にこゝにありとすれば、強ひて區別を立るの要もなかるべしと、其全部を演劇の部に收めたり。讀者これを諒せよ。

一『南水漫遊』は十五卷本と二十七卷本との二種あり。十五卷本は重に歌舞妓、淨瑠璃に關する事を收め、二十七卷本は其以外の雜事を交ゆるもの頗る多し。蓋し此二種に就て説をなすものは、歌國が隨筆、最初は唯『南水漫遊』と題して、種々の事實を集めたるが、後に至りて二部に分ち、歌舞妓、淨瑠璃等に關したるものは『南水漫

遊』の題下に存し、雜事に關しては別に『攝陽落穗集』に拾ひ集めたるもの、如く、二十七卷本は未だ其二書に分たれざる以前の稿本の今日に傳はれるなるべしといへり。素より確たる證據あるにあらざるも、十五卷本と二十七卷本とを對照する時は前者は比較的記事整頓し、後者は雜然統一を缺けるは、或は然ることあらんかとの感を懷かしむ。兎に角二者の内容には著しき相違ありて、傳寫毎に取捨してこゝに至りしものにはあらで、全く二書の根本を異にすることは疑を容れず。依りてこゝには演劇に關する且誤謬少なく稍統一ある十五卷本を收め、二十七卷本は參考に資したるのみ。たま／＼二十七卷本を所持せらるゝ人の、本書と比較して或は記事の少きを見て、直ちに脱洩と咎むることなからんことを望む其他校訂の方針に就ては、凡て前例と異なるところなし。

明治三十九年七月

水谷不倒識

濱松歌國小傳

水谷 不倒 撰

『南水漫遊』の著者濱松歌國は安永五年浪華に生る。通稱布屋氏助、又清兵衛ともいひ、島の内布袋町に住す。颯々亭南水と號す。戯作を好み、歌舞伎に精通するの故を以て、始め役者評判記を著したるが、或時大谷友右衛門(三代目)の友右衛門にして始め中山門三又嵐舍丸と呼びたる人が評をなしたるに、友右衛門に不利なる言ありしとて、友右衛門より故障を申込みしことありて、爾來評判記を作らざりきとぞ。狂言作者としては文化、文政の間に於る、芝居番附に時々其名を掲げたるものあり、最初は濱松氏助と名乗り、文政四五年より歌國と改稱せり。多くは道頓堀中の芝居に出勤せるものゝ如く、いつも三枚目若くは二枚目の地位に在りて、立作者とはならざり

しが如し。濱松歌國が名の出る所、必ず立作者には奈河晴助あり。これより考ふるに或は奈河晴助が帷幕の作劇家なりしか、はた晴助の知遇によりて芝居へ出勤せしものなるか、兎に角二人は深き關係ありしが如し。其著書の世に知られたるものは、『南水漫遊』と『攝陽落穂集』となり。『南水漫遊』は十五卷ありて劇界の事を記し、『攝陽落穂集』二十卷は大阪の古事來歴を記し。西澤文庫と共に浪華文藝、風俗の記録として並び稱せらる。著書の上より一鳳と歌國との異點を求むれば、一鳳は一種の批評家にして、頗る諧謔に富みたる人なることを知れど、歌國は忠實なる記述家といふの外に何等の特色を見ず。狂言作者としての地位は勿論、雜學涉獵の範圍に於ても、人物に於ても、歌國は凡てに於て一鳳には及ばざりしが如し。文政十年二月十九日歿す。享年五十二歳なり。

新群書類從第二目次

演 劇 (一)

西澤 脚色餘錄自序

西澤 脚色餘錄初編

上の卷

○愚問藏謡曲本の寫○けいせいあらし山古番附の寫○四十八字藏古番附の寫○いろは行列謡曲黒船の文
○古狂言筋書綴物の寫○金門五山桐繪番附の寫○七條河原釜淵雙絛巴の語附宣山骨牌の作者を褒○愚義
水滸傳脚色の話○小説棧物語の一話○水滸傳脚色の追加○清和源氏十五段の話○女熊阪演劇の正本

中の卷

○古今雜劇書籍の話○傳奇作書七部の目錄(六部略之)○鯛屋貞柳狂歌の話○三國一夜物語潤色の話○高
音鼓増補の話○淨瑠璃歌舞妓俗語注解の事○狂言に名高き詩歌の辨○北の新地心中の話○心中靈道行の
文句○新町に名高き世話物語の話○地者心中情死の話○おかめ與兵衛末期の道行の文○地者心中續きの
話○お泉治郎兵衛の道行○江南心中情死の話○本朝宿鎗間違の話○伊賀越古番附の寫○しづまおそで道
行會稽の初雪

下の卷

○清水清玄演劇の話○天満宮古番附の寫○劇場評判得手勝手○劇場樂屋搜の序○先代萩古番附の寫○伽
羅先代萩世界の追加○同膳部毒藥調合の齣○鹽澤丹三郎屋敷の齣○膳番煮役自毒害の齣

西澤 脚色餘錄二編

上の巻自序

八六

上の巻

八八

○壽門松道行の文○移松記失心吟大塔宮身替音頭の場○噺鑑記替身踊場○忠臣藏與市兵衛の考○道行衆種の亂咲の畫○松本岩井乘込騒動の話○菊五郎幸四郎確執の話○梶狩劔本地文屋の話○詠吉野三齣の正本

中の巻

一一六

○歌舞妓事始の拔書○古人小歌の作者附○狂言作者古名人の話○爲川太郎兵衛の遺書○竹田出雲掾名言の話○俳優者傳奇を作りし話○役者作者高下の辨○江戸古作者連名附○流行唄は昔に歸るの話○三組壺景清番附○兜軍記鯉の場の話○菊水辻講釋の場の話附大雅堂霞樵の一奇話○佐々木盛綱藤戸の話○東大寺大佛供養の齣

下の巻

一四六

○濡髪長五郎の事實○茨木屋幸齋の事迹○五人男雁金の追考○小栗判官車街道の話○白石嘶金江の話○曾根崎新地發端の話○朝比奈宗兵衛の事實○赤穂義臣傳作者の話○長歌無間鍾の詩歌○生瀬川魍魎狂言の話○源平鍔曳競の正本○壇浦軍物語の正本

西澤脚色餘錄二編

一七六

上の巻

一七六

○室町殿歌舞妓興行○傾城と書外題の盜鶴○大頭起三勝の辨惑○梨園額話日畫の寫○東都三場俳優體の叙開○江戸歌舞妓芝居の始○京都歌舞妓の興廢○大阪歌舞妓の起原○梵天櫓鎗の來歴○戲場看板名目の大略○紅色桔梗の番附正本

中の巻

二一二

○近松歌舞妓作者番附○太平記さゝれ石の役割○坂田藤十郎名譽の話○芳澤あやめ總藝頭の話○澤村宗十郎作をせし話○中村富十郎所作事の話○姉川新四郎名言の話○中村仲藏定九郎をせし話○加賀屋歌七思入の話○岩井半四郎改名の話○瀬川仙女名前辭退の話○市川白猿ささみ草の話○さゝれ石三番續の筋書仁義講○同畫面の寫

下の巻

二四二

○霧太郎天狗の考○日本左衛門の再考○歌舞妓謀反人名の考○梅邊吉兵衛胡椒頭巾の話○夏祭浪華鑑狂言の話○女蘭七長町裏の正本○前後太平記畫の寫○さゝれ石後日狂言役割の寫○上おもひ草の筋書○中のふ草の筋書○下わすれ草の筋書

西澤讃佛乘初編

二七三

上の巻

二七三

○武家百人一首○醒々齋の報條○武具短歌○施印七種の聞書○醒睡笑の拔萃○淡々文集之雜話○舊國俳懺悔附同伴諧袋之話

中の巻

三〇七

○四方赤良(風來山人の誤)虱が道行○遊女五十人一首并女三十六歌仙○白猿徒然文題上の巻

下の巻

三三四

○徒然文題下の巻○花街浪華色八卦の附録○滑稽外國通唱○青樓洒落文臺○堵庵影畫の教訓○煎茶入加減

西澤讃佛乘二編

三五五

上の巻

三五五

○三勝半七情死日書○薰物六種序○三春行樂記○かくれ里の記○復讐新聞○下町稻荷社三十三番御詠歌○王橋復讐記

中の巻

三七九

○小金が原御狩の記○櫻請狀の事○江戸三芝居替地申渡の寫○市川海老藏へ申渡の寫○玉滴隱見卷の一○富再び情死の本説○紀州奥山大樹の寫○京大丸の主馬斬の正説

下の巻

四〇二

○唐一行禪師出行日の吉凶秘事○三味線本手端手唱歌集○同裏組之唱歌集——大石貞雄作里けしきの唱歌——山田檢校吾妻箏之目錄○同布袋の唱歌○小督曲之唱歌○江島流罪一件物語

西澤
文庫綺語文章

上の巻

○有馬温泉の記○暮秋北山巡り

四二五

下の巻

○花洛紅葉見紀行

四四一

今古
参考南水漫遊初編

一の巻

○道頓堀盗賊○三津八幡附難波伏見―難波御祓―三津寺―在原寺井筒○戎橋附操橋―西宮神像○秋田屋水附秋田屋饅頭―象牙六奇話○太左衛門橋附岸岐地藏○奴塚同繪圖附開地年月―黒船新地○長町古名附大乗坊―住吉街道○機多か崎附堀江―幸町○楊柳堤○瑞龍禪寺○永藍干瓢○難波ぼうた

四七一

二の巻

○六軒小夜格子附於房徳兵衛戯文―中橋孝―樽屋町―心中名寄○小三金五郎說附籠屋町額風呂―島の内娼家名よせ―金五郎唱歌之辨―釣行燈唱歌○於妻格子附坂町妓女若野一夜附狂言○小野屋督藥附萬石通戯文―雙蝶々趣意○仙人煙草附仙人裏―玉屋町石の次左衛門○芥ぐり○袖香爐○春木屋梶女附首のぶこすのと唱歌○奴小萬傳附病床迎春文

四八一

三の巻

○崎陽古風附難波新地―新屋敷○男色附峰の小晒話―若衆指紙―閨屋○色駕籠附戎駕―初天神竹與○格子いはひ○囃子滋物附寶曆巡物番組―見送り神馬―俳優御輿太鼓○俄の辨

四九三

四の巻

○三勝半七墓附訴書五通―書置四通―サイタラ畑―三勝唱歌―古墳圖―享保年間大阪圖―女舞三勝事迹―茜屋招牌模寫

五〇七

五の巻

○高名石碑―おくり重兵衛石塔並に一夜附狂言―朝比奈惣兵衛墓―義童勘太郎碑―お園六三墓―京扇小

五二一

傳墓——近江屋治郎右衛門墓○五人男附五雁金藏文○五人斬○泥龜屋裏○幫間附幫間の異名○物真似聲色
○女髮結○茄子田樂○和國辨當○水舟附坂田藤十郎話○江南通稱附から風呂○垢搔○茶立女○錢屋饅頭
附菩薩が筆——樋之上昆布——道頓堀焼——大正うなぎ○異國產物啓發附器目次——逆建屋敷——二階庭——吉田
屋庭

今古
參考
南水漫遊拾遺

五三六

一の卷

五三六

○淨瑠璃濫觴並十二段——傀儡師——同唱歌——西宮百太夫の説○小野阿通古跡○大阪操芝居起原并淨瑠璃稽
古場○竹本筑後傳并あふむが袖の序——陸奥茂太夫傳書○豐竹越前傳並一世一代——古文鐵炮之辭○院本大
意並稽古本權輿——素人淨瑠璃○受領口宣免狀並名代改帳——說經祭文

二の卷

五五一

○平安堂近松氏の傳並辭世狂贊道行ぶりの妙文——國姓爺釋文○紀海音略傳並座鋪八景貞柳狂歌○淨瑠璃
作者略傳並淨瑠璃五段大意

三の卷

五六二

○出語出遣木偶並往古操の圖——人形品目○操曲評書○文正翁曲帶塚並八曲ふし事

四の卷

五七五

○忠臣藏權輿並日親堂繪馬——採り役割——歌舞妓役割——尾上梅幸の傳○歌舞妓狂言本並本讀の始○都風流
大踊權輿並唱歌番組○樂屋通言

五の卷

五九〇

○觀弄場雜事并春卜中百の發句——葉葦實考○賴阿雜事（自延寶年間至文化年中）

今古
參考
南水漫遊續編

六〇四

一の卷

六〇四

○歌舞妓芝居起原并道頓堀名代——役者禁制○物真似狂言盡名目并表木戸故實○大入札樽幕并演芝居宮地
小芝居○城戸并いろは茶屋通り札○招牌名目并一枚看板人物畫面故實——外題脇書風流

二の卷

○傾城外題并往古けいせい買狂言○今古狂言趣意并往古離狂言―三番續狂言―レキ狂言―二番目○評書
并八文舍自笑江島其礦話―梨園礦話

六一四

三の卷

○劇場顔見世○顔見世狂言○戯子乗込○極り番附并古今座組の辨―天和年間極り附―江戸番附―紋番附
―役割番附

六二八

四の卷

○小夜嵐并丹前六法―同唱歌―嵐氏叶の紋―嵐三左衛門木戸札○市川柏庭登阪並顔見世極り附―鳴神狂言
根本○最負並手打連―讀言

六四五

五の卷

○舞臺造物并破風―大臣柱―橋懸り―奥屏口―花道―鳥屋―棧敷―二の替りの櫻○狂言作例并往古稽古
―書拔せりふ附―幕切○舞臺衣裳臺の論并帽子品目―假頭○千秋萬歳樂(吉祥目)

六五九

終

新群書類從第二

演劇

西澤 文庫 脚色餘錄自序

清の康熙帝大千世界を雜劇に見立日月の燈江海の油風雷の鼓板天地間一大戲場堯舜は旦文武は末莽操は丑淨古今來許多脚色と對聯に記されし博識見ぬ唐山の評は扱置吾朝大戲場の濫觴は日本書紀の正本を本讀すれど大八洲の太夫元照大神戲房の確執の役不足より石窟に入まして警戸を閉て幽居幕曳晝夜の暗號を失ひ頭取月日の出沒を覺へず世界はくる幕の常闇となりてより五月蠅なす神達初會して神會に會給ひ白奪の趣向を思兼神冠作者となりて神作りに作りたまへば常世の鳥の長唄獨吟此幕の出語淨瑠璃豐蘆原の中賣に賣せ給ひ手力雄尊の荒事猿女君の遠祖天鈿女命の忽然擡出手には茅纒の稍をもち八十萬の神

達出囃子に合せて庭燎の神樂所作事の俳優大神是を細に窺して大日本^{やまと}の太夫さんいよ大明神様く
と宣ひし是ぞ歌舞妓の本原なりけるしかつしより以降風俗の歌舞或は俗妓何がしの舞などいへる稱呼はさまくかはれども八雲立出雲の阿國名護屋山左と俱にはかりて物真似狂言盡發りてのち今尙三箇津に櫓を構へ許多の狂言座となれりとは式亭三馬が滑稽なり今更これを追ふとても古狂言の燒直しならめと一念發起の浮屠氏に倣ひ狂言綺語の堂號を幸ひ土間棧敷の看官を棧物場の因と誣附言狂作書七部を著述しまだ吐たらぬ方便を書集め歌舞の芥の宗門といつば攝都に東西の角中有東大阪太左衛門皇都四條に南北有南部萬太夫北西鹽屋九郎衛門一丁目中村勘三郎二早雲長太夫東都淺草に三座の本寺一丁目市村羽左衛門三丁目森田勘都合三都の七本山瑠璃好物の御本尊筑越彌今河原崎豐竹越前接の祖師傳記寛永年間の開基以降八宗九宗の寺記緣起一切狂文演劇の脚色餘錄と表號し才の鈍經三部經七拙作に卷を重ね訓讀せんと云爾

于時嘉永辛亥十月上浣

西澤狂言綺語堂

西澤文庫脚色餘録初編上の卷

目次

- 一 忠臣藏謡曲本の寫
- 一 せいあらし山古番附の寫
- 一 四十八字藏古番附の寫
- 一 いろは行列謡曲黒船の文
- 一 古狂言筋書綴物の寫
- 一 金門五山桐繪本番附の寫
- 一 七條河原釜淵雙級巴の話
- 一 附宜山骨牌の作者を褒
- 一 忠義水滸傳脚色の話
- 一 小説棧物語の一話
- 一 水滸傳脚色の追加
- 一 清和源氏十五段の話
- 一 女熊坂演劇の正本

西澤
文庫
脚色餘錄初編上の卷

西澤綺語堂李叟著

忠臣藏謠曲本の寫

ワキ次第
和

「遊ぶ祇園の色揃へ」花にやうつゝぬかすらん
詞「是は斧九太夫と申者にて候扱も主君鹽谷殿は去
仔細候ひて御生害の上御跡斷絶致され候某も此程よ
り高の師直殿に仕へ申候今日は祇園町へ立越大星由
良之助に對面し密事のやうを探り參るべしと師直殿
の仰にて候間只今一力屋方へと赴候急候程に是はは
や祇園町の一力屋に著て候如何に此内へ案内申候狂
「案内とは誰にて御入候ぞや九太夫殿の御出にて候
ワキ」只今參る事餘の儀にあらず大星由良之助に對面
の爲參りて候早々引合られて給はり候へ 狂「さん候
ゆら殿には此二三日已前より酒宴に長じ御遊び候が
常の事にては御出あるまじく候いつも鬼目かくしを
こまどり拍子にうたひ候へば外の遊びを御捨有りて

夫を興に御出候程にこまどり拍子をうたひ候べし暫
御ひかへ成れ候へワキ「さあらば其こまどり拍子をは
じめられ候へ我らは是にて待ふするにて候 狂「手の
鳴方へ」とらまよ」手の鳴方へ」とらまよ
「はあはちかさいたシテ」あらわるのこまどりぶし
や某頓てうたひ候べし 狂「是は一段と面白からふず
るにて候さあらば御うたひ候へ 太鼓」手の鳴方へ同
上「手の鳴方へシテ下」手の鳴方へ同上「手の鳴方へシテ
上」とらまよ」同上打「とらまよ」由良鬼^是また
い」とらまへて酒吞そふよシテ下「ヤアのみたふや
のまふたと同^上」誰かはこのまざらん誰かわらはざる
べきシテ上「是からかると色狂ひよたれ所か戀草のシ
テ上」痴話をくるめになまめきて同「吞とは盡じシテ」踊
りてはうけやせいたくせんさく 同「一度にたわけさ
わぐ聲はたわむれ遊べど生醉共^{打込}」上「實や餘儀も
なき忠義の道にまとはれて」今此胸も晴やらぬシ
テ「浪人の撰残り 同「わづかに四十七猶さんらんし
て苦しむかやヤチハ義士のかための誓立一味をなし
て置るらん連判濟てシテ」のめやうたへ此騒ぎ 同
「好みなりおすきなりシテ」實大星^{ワキ}がしかたは同「元來

深き工夫にてシテ「愚に事を致して同」馴たる衣紋引替てシテ「又たいこぐるみ交りあひてヤアハ」盡す心に由良様をシテ「うかせと人は取はやし同」思はぬばかりをなしぬればシテ「皆此砌荒増を敵に聞せてされにさせシテ」うそをつかせて敵をはかる同「うしろまへシテ」見るとても同下「遊ぶ心なくて猶酒機嫌してヤア」醉狂を致すも智略をなさん爲なりワキ「いかに由良殿に申べき事の候シテ」誰にて渡り候ぞや九太夫殿にて御入候か此所へ御出候は遊樂の爲候なワキ「いや其儀にてはなし大功は細瑾をかへり見すと申候が世の人口をも打捨給ひかゝる遊里の御戯れは大功を立てる大丈夫となんぼう頼もしう存候よシテ」是は思ひの外なる仰哉誠某が放埒はワキ「敵討し給ふ術とこそ存候へシテ」何と某がか様に放埒致し候を敵討の術と御覽せられ候かワキ「なか／＼の事シテ」オ、嬉し／＼我れ強年に及んでかゝる放埒の有様を左様に人々の思ひ給ふ事は何より以て悦ばしうこそ候へワキ「扱は古主の讐を報ずる御心にてはなく候かシテ」ノフ案じても御覽候へ貴方も我々も國元を立退候事は鹽谷殿の短氣より事起りたる事なれば恨はあれ共恩はなし

何しに危き事を致候べしワキ「實是は尤にて候さあらば此九太夫も昔思へば信田の狐姿顯はし由良殿と久し振成酒盛せんと上」側に有あふ鮪肴はさんで由良に差出せばシテ「何心なく手を出して足を戴く鮪肴と既にくわんとしける處をワキ」暫候明日は判官殿の正忌日殊更逮夜は大切成事と申傳へ候御身は精進なされず候やシテ「是は御詞とも覺へぬ物哉最前も申ごとくなか／＼さやうの事にてなし判官殿の鮪に變生のさたも承はらずとて上」さも心能味はふ風情ワキ「邪智深かりし九太夫もシテ」あきれてワキ「詞もシテ」なか／＼に同上「格別氣散じと譽給ふは我を探る事ぞかしヤチ御身は主とり我は浪人の身なればなどうかあほうに思さゝらんヤアかまへて他所にて此噂せさせ給ふな切上「一力で仇討ことにつがもなき／＼鬼目隠しで遊ぶ事は誠なり／＼爰は名におふ祇園町ヤチ往來の道は程近し朝の六つから夜明までヤア大星のてんがうもヤチ我が下地のとらとぞしろし召れよ下」いざ／＼酒をすゝめん／＼切下「扱お肴は何々鶏しめて鍋焼鰻のつみ入かまほこ祇園豆腐は名代なりかすにまな鰹は誰が漬し肴ぞヤチ上」實誠々亂舞亂

酒の騒にて戀の情は取置て好みて此上にヤア飲酒は
數しれず面ても青ざめてヤア若氣におとるまじきヤ
ア親仁と思しるよヤアハおさへ給はで我を猶々うか
さば興がる事を致すべし我もそなたの御積り外目に
はヤアハヤアきふくつげなれど氣にもかかけぬは九
太夫猶々盡す戲のかび呉ればあきつきてヤてんと
是はたまらぬとヤア足元はひよろ／＼とたれねば
居さらふか氣もつき果て其儘目の明ぬ程に飲入あら
うたて笑止大星は横にたふれてたわいなし／＼狂
「扱も／＼由良之助殿には毎日／＼かやうに正體な
く飲明しくらし給ふはさぞや後々に痛にならせらる
べき事と存られ候夫につき最前酔狂の折から取落さ
れし一卷の候急ぎ九太夫殿に御目にかけ申さばやと
存候いかに申候御覽の通り由良之助殿には毎日／＼
酒狂のうへ前後もしらず寢入申され候事なんぼうに
しきに存候夫に附最前懷中より此一卷を取落し申さ
れ候急ぎ御披見あれかしと存候ッキ」此方へ渡し候へ
汝は暫勝手へ參休候へ狂「畏て候ッキ」扱は謀計の一
巻ぞと開きて見れば互に國元を去つて必死の輩命を
塵芥に輕んず忠臣の義士冥途黄泉の君を忘るゝ事な

し神文血判残りなく一味なしたる四十七人同下「もは
や窺ふこともなくいざ訴人してこの方便鼻を明せん
妙計色々に邪智を廻らせり／＼かゝりける處に／＼
勝手に居合す千崎矢ざま寺岡もいかりをなし連判の
一卷うばひたる九太夫目がけて飛て出るヤア九太夫
もふるい恐れてぬけ道立のく思案を廻らししば／＼
うろつき立まはるを何とてゆるさん斧九太夫を手込
になしてぞ引すへけるヤ下「かゝりける處に／＼大星
由良之助密事を聞れて叶はじ物をとねむりをさまし
太刀振上げて胸打ながらに丁々と切附上には薄衣引
かぶせ片附支度になしかけたり打上「ッキ下」今は九
太夫も運つき弓の／＼力も失て誠の上戸と油斷して
生どられ押へて首をかゝんとせし時大星せいして此
處にて命を取なば事むつかしや寺岡はからひ加茂川
に寺岡はからひ加茂川につれ行て水難炊をぞくらわ
せける

右忠臣藏と題せし謠本は年號作者不詳文中に東都の
詞多ければ福内鬼外初風來山人の作ならんかさして佳
作と云にもあらねど趣向のおかしければ爰に出す

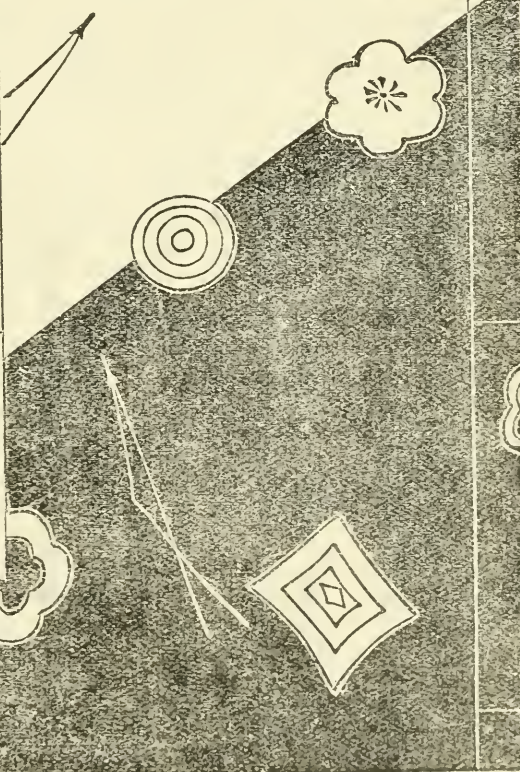
せい
せい
あらし山古番附の寫



代	名
龜屋彦本中村軍平郎	立役 嵐 三才 惠心 立役 大谷 廣次 立役 大さの川 万菊 立役 春山 源七 立役 實為 嵐 七五良 立役 中村 新五郎

けい
あじ山
二のうしろ大あじ
花のやしろうつおき

ふ屋河通
八文字屋
八九湯心



二のかわり
けいせいあらし山

三番積

第一狂言畫

うたこよる
ふり分女夫

第二譬喻畫

はなによる
うつゝの女夫

第三聲入畫

ゆきによる
さいわい女夫

役人替名の次第

一女きやうげん師お國

藤田大次郎

一あげやおしま

さの川市松

一けいせい若むらさき

辰岡玉ぎく

一同 たかを

民中いろは

一かぶるもんや

ふじた四郎五郎

一同 おぐら山萬四郎

かぶる中村しな松

一男だて權九郎

市山金十郎

一同 市山傳藏

たいこ金子吉六

一からばき 染川左源太

一から糸岩井甚之助

一つぼれみたらし

おのへげんじ

一かさ井三太夫

松本廣七

一ぜんかうじ 松下源八

せき口 中村長九郎

一おんやう 大原藤八

一もん平 中村源藏

一かぢ川源内

よし澤助七

一けいせい半太夫

岸田京太郎

一けいせい大すみ

民中むめ松

一けいせい歌浦

あらし花松

一かぶる 中村富之助

かぶる 嵐喜代松

一丸屋小右衛門

皆川文六

一よしだ喜八

よし澤四郎七

一あげや妹おつゆ

淺尾若松

一ざとう久市

澤村政五郎

一同 市川權十郎

一ざとう 市松本又四郎

一男立べにの庄兵衛

春山源七

一同 ちや船の忠吉

上村友次郎

一庄兵衛女房おさく

淺尾元五郎

一黒ぼしの惣八

松本友十郎

是か二役三役の分

一あしかいよしのり

玉川みやこ

一あぐまで 萬惣

大谷彦三郎

一南の 綱兵衛

かさや又九郎

一まさみや 茂次右衛門

嵐七五郎

一ふす人くはんでつ

坂東助三郎

一いなか 大盡九郎四郎

ばんどう助三郎

一細川左京太夫

坂東助三郎

一ざとう花市

大谷廣次

一畠山ます長

大谷廣次

一今川了俊

大谷ひろ次

一江戸兵衛

中村新五郎

一日用久右衛門

なかむら新五郎

一いよ大じん

佐野川萬菊

一おゆ

嵐三右衛門

一高松千太郎

あらし三右衛門

一今川仲秋

中村富十郎

一茂左衛門娘お三

中村富十郎

四十八字藏古番附の寫

寶曆十辰年京都四條南側芝居にて忠臣藏世界の新狂言の番附半切二枚に摺てかたちの珍らしければ爰に出す今年迄九十二年となる古番附也是に限らず忠臣藏の世界による繪番附の類は元祿某の年より後の淨瑠璃歌舞妓とも残らず集て予が著述假名手本忠臣藏類聚大成四十七冊の附録一冊に出せば好人見給ふべし

加茂河水參は
山科計略饗應
雪折竹は
妹脊謎々

忠臣四十八字藏

七行物

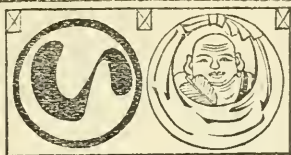
四條通南側大芝居二而

布袋屋梅之丞

澤村國太郎

かわりきやうげんのばん附

ワキニ 涼川夜遊の太鼓



附り

師直が戀煩ひは後家盛りの顔世花色は匂へど主は未來へ散ぬるを我夫ならぬ仇人に逢夜詔や常ならぬかぶと
の盜ぞく

并に

義平が義心を不知に恨む初の奥様に登詰た戀の山けふ
越て行夫の名代契はあさき夢みし廊の色酒に酔もせず

一行目の序文に曰入交貞女兩夫に誠を隠す謀長文

二行目の地色に曰入月の夜もほのく兜頭巾

三行目のハルフシに曰入ける所へ門前に鶴巢籠

四行目の愁三重に曰入空の跡見送る襠縫紋

五行目のノリ地に曰入亂れヤアヤお針働

六行目のチクリに曰改むア亭主帳面を腹切刀

七行目の段切に曰告る入給ふ家名を親子盃

役者替名之次第

おの九太夫 中村喜津右衛門

かうのもろのふ 中村正九郎

いもとはつゆき姫 中村伊三郎

矢間三のせう 三村徳次郎

せんざきゆふや 大和山せん助

やつこ土手平 松もと友十郎

同 奎 平	同 かん 平	かほよ御せん	こしもとおかる	さぎさかばんない	太田りやうちく	たつ川には紅葉を長八	まづは松ざかこへ八	ざとうはないち	大ぼしゆらのすけ	かこ川本藏ごけとなせ	ついき役者替名の次第		はら 郷右衛門	よし 崎三郎七	おかざき 與三左衛門	たて川 甚兵衛	大わしでん五	おのわら十内	竹もり 喜多八	大ぼし 力彌
小ぐら山伊三郎	澤村友ぞう	しのづか卯之吉	せ川きく三郎	あらし七五郎	藤川岡右衛門	あらし三五郎	岡田彦九郎	桐島儀右衛門	今村七三郎	浅尾元五郎			さわむら高助	小ぐら山伊三郎	藤川岡右衛門	山下市五郎	中村正九郎	坂東 萬藏	松屋新十郎	篠塚卯之吉

わかさの妹はなの井	むめがゑ	あさかい六郎	小ばた主水	いせや權右衛門	子三之助	いもとおつゆ	手代長九郎	同 源次郎	まつ田いそ八	置主善右衛門	かせや久次郎	でつち岩まつ	同 伊之助	中間かくない	同 出来平	五一兵衛ごけおきち	むすめおしも	粟飯原げんば	三上 藤内
山下六三郎	そめ松豊五郎	三枅彦五郎	津川 春助	澤むら高助	中村十藏	中村伊三郎	嵐 七五郎	山下市五郎	三枅彦五郎	小ぐら山伊三郎	中村 秀松	大和山せん助	澤村 友藏	笠や音十郎	三枅彦五郎	松谷新十郎	しのづか卯之吉	松もと友十郎	藤川岡右衛門

庄や四九郎

平岡まん助

石どう右馬允

中村十藏

いせや手代十五郎

嵐三五郎

もゝ山の藤作

坂東萬藏

みだ右衛門女房おその

あらし和歌野

やくし寺次郎左衛門

桐しま儀左衛門

石切彌陀右衛門

今村七三郎

由良之助女ぼうおいし

中村喜世三郎

もゝの井わかさのすけ

中村喜津右衛門

本藏娘小なみ

澤村國太郎

右之外座本不殘罷出申候

狂言作者

英露鳥

同

三桁文次

同

近松多助

狂言作者

並木十輔

せんしうばんぜいらく

叶

頭取

中村門十郎

松谷新十郎

寶曆十年辰六月八日方

和泉屋又兵衛板

いろは 謡曲黒船の文
行列

寶曆十二年の春角の芝居にて泰平いろは行列と外

題せし新狂言の序に鹽治判官に座元中山文七、高師

直に桐山紋治、勅使饗應に黒船と云新能を保生太夫

に勤めさせるに黒船新町橋の出入を作せしものにて

判官の誤りとなる仕組の珍らしければ爰に出す 地謡

「夜毎に通ふ男作」行衛いつとか定むらん 正兵衛の

こしらへて武悪の面調抑是は上町茶釜組の親仁分野出

なかけ次第に合せ出て 程にのめよいのを替に參らばやと思ひ候我住家を

立出て地謡我住家を立出て足に任せて行程に四つ橋

過ぎてぐわたくと東口にぞ著にけり 詞いかに

此内へ案内申ッレ「たばこやに御用とは何事にて候

ぞ」ワキ「我等にて候此烟草をかへて給り候ヘッレ」や

すき間の事替て進上するにて候しばらく夫に御待候

ヘ「ワキ」心得申て候 地謡「長き刀は直なやつはさゝぬ

あたまくはせいとそつたやろがさす」トひらき舞に

て出シテ「ノフ」夫なる庄兵衛殿に物申そふ暫らく

とこそ 誰人ぞ シテ「是は堂島の黒船忠右衛門とは我事也偕

誰人ぞ

誰人ぞ

も某出入の親方五郎八殿の紙入を早く歸して給はり候へ「ワキ」イ、ヤ戻し候まじシテ「さあらば手をば突込べし」ワキ「アラ仰々しやならば取て見給へ」シテ「然らば出入致すべし」ワキ「心得たりと言まへに」ワキ「兩人雙方へ立別れ 地「いざや出入をせん物と庄兵衛黒船力士の如く草履下駄ぬぎ韋駄天の如く掴み合敲き合組あふ有様邊りに近附物ぞなき」略下右は並木正三の作にて九十年の昔狂言なれど滑稽の新らしみ實に穿ちたる物也是より見れば前に出す方の謡曲は第二義なるべし

古狂言筋書綴物の寫

元文四年未二月目出度春長閑日と奥書に有今迄百八年となる右番附繪入筋書ともに七八枚の綴物細字に彫て狂言の替毎に出す事例なりしに安永比より繪本番附とかわり筋書を略して道行本と呼て宮園宮古路の床本を賣る様に成たり繪本も長き狂言は上下と分て繪組荒くいと叮嚀に書たるも今段々に細書となり扉に一枚看板を寫一日の狂言前切共に四枚に限りたれば繪本を見ても一日の狂言の條不解やうに成たり

金門五山桐繪本番附の寫

安永七戌年四月八日より角の戲場にて始て金門の狂言成りし時の繪本番附を寫して左に出す番附の役者の並び大名題一枚の繪組當時の看板の如く法を亂さず狂言によつて出すべき立者役者も繪面に出さず番附に太細なく行儀よきを見てしるべし

此大名題順禮に梅幸國師眠獅傾城に山吾也新七八藏小川花桐柴崎の五人は名題俳優なれば繪面に出べき筈を狂言によりては出ぬ事にて納まりし事知るべし割外題は石川五右衛門瀬川采女とあれば英子眠獅也此比の小川は座元を兼て眠獅に立つぐ役者也今の世五右衛門と並ぶ采女の役なりとて此役を悦びて納る役者有べくとも覺へず依て濡事師は年々にすくなくなり役の位を知りたる者なく一枚看板は皆寄繪にて一場の役にて並ぶ事なき様になりたるは行儀作法も碎けたる流弊是非なしと云べし

順に
轉に
原倒の
本板の
役看
附一
者
注意

安永七戌の年角の芝居三の替り新狂言中茶屋堺吉板



座本

小川吉太郎

石川五右衛門忍術之事

階級

金門五山桐

瀬川采女艶書之事

七段

大明宋氏碑銘曰
我日本第一の大盗人廓通の俳の衣今朝の思ひは夕べの口舌兄
と妹が契は二世と三條の吉生塚に仇名を立る茶の湯の會合釜が
淵の古跡は大佛餅の根元しやんと召たる傘の亭座鋪居ながら計
雨が下取て押へた濡の大將凱陣の行列に太夫の道中揚屋入ヤン
レふれくふりこめた

大みんの太子
ていしゆ才兵衛
百性七さく
宿老太郎作
かぶろはつ
同やちよ
同はつせよ
同まんよ
同しもとよく
同まつよ
やつこ内
浅井丹藏
やつこ内
別木軍藏

尾上丑之助
花桐伊三郎
兒島和三郎
大谷彦十郎
小川八藏
あらし千代藏
小川吉藏
中村萬藏
あらし君助
あらし君助
山下四郎五郎
山下四郎五郎
市山三津藏
市山三津藏

中川こは助
町人作兵衛
同市右衛門
大阪のはん
下ざい黒八
まい子おす
せんと頭梶藏
やぶろてす
かぶろ富彌
傾城六ッ花
やつこ岩内
吉川隼人
桐島彌藤
たいこ持友助

藤川友藏
中村傳九郎
中村仙助
中田善右衛門
中山三八
澤村五郎吉
中山東藏
山科文三郎
中村富三
あらし萬三
あらし權十郎
藤川金十郎
中村友十郎

やつこ角内
 稲見藏人
 こしもとあげは
 傾城花町
 おつうひめ
 傾城九重
 じやこつば
 火車小次兵衛
 笹井順慶
 同悴熊太郎
 兵庫之介妹正木
 秀高奥方岩浪
 けいせい花橘
 五右衛門女房おりつ
 奥方そのふの方
 峯田兵庫之介
 やつこ八田平
 此村大炊之助
 眞柴久吉

中山乙五郎
 中山乙五郎
 萩野三代藏
 萩野三代藏
 小川千菊
 嵐松次郎
 桐山紋治
 桐山紋治
 桐山紋治
 桐山紋治
 桐山紋治
 あらし雛治
 あらし雛治
 藤川山吾
 藤川山吾
 花桐豊松
 花桐豊松
 藤川八藏
 藤川八藏
 尾上菊五郎
 尾上菊五郎
 中村阿契
 津打亭輔
 筒井半二

せそんじ中なごん
 仲人藤兵衛
 傾城萩の戸
 小西妹かつら
 くろさき喜藤太
 名和内記
 小西奥方唐織
 大炊女房吳竹
 松田勇助
 金吾久秋
 大ぶつ餅惣右衛門
 眞柴久吉
 惣右衛門女房おかう
 早川高景
 石川五右衛門
 溜川うねめ

中村友十郎
 藤川十郎兵衛
 あらし雛次郎
 あらし雛次郎
 山中平十郎
 山中平十郎
 山中平十郎
 神山四郎太郎
 神山四郎太郎
 神山四郎太郎
 中村重次郎
 中村重次郎
 柴崎林左衛門
 柴崎林左衛門
 尾上新七
 尾上新七
 嵐雛助
 小川吉太郎
 長谷邑眞七
 並木五兵衛
 並木新藏
 中山音五郎
 中山百次郎

頭取
 世話人

狂言作者
 狂言作者
 狂言作者



座本 小川吉太郎

七條河原釜淵雙級巴の話附宜山骨牌の作者な度

石川五右衛門の事迹を書たるは聚樂物語版本に關白秀次の亂行及五右衛門の出生より後釜煎の罪にあふ迄の事を書其餘小説等にも往々出たり淨瑠璃には元文二巳年秋豐竹座にて釜淵雙級巴と外題して並木宗助始て石川五右衛門の狂言を世話物上中下六段物に作り上の巻は美豆野御牧の街場より島原の廓中の巻は柳馬場當馬の浪宅より大佛前の隠れ家下の巻は藤の森の刀賣道行街の手向草より七條河原釜煎の場まで世話淨瑠璃に作りしは宗助の作功也殊に外題を七條河原釜煎が淵と置た働き釜煎の罪の場所に實は三條河原なるを云なり亦雙級巴は五右衛門親子を眉間尺の古事七條に關大臣隨釜の古事有證が淵としたるに當たる作意是等を眞の外題とも云べし此雙巴を舊として歌舞妓に金門五山桐と賦して時代に取組唐船の謠曲を假り宋蘇卿此村大炊之助の本名の胤素友唐土より父を慕ふて此土に渡り明智左馬助となり軍用金を集めんが爲石川五右衛門と假名すと脚色瀬川采女傾城花橘の二人は宋蘇卿日本に渡つての落魄にて三人兄弟とするは唐船の條に倣へり采女花橘は兄弟としらず契りて畜生塚の古迹を遺すと斯世界を書ひろげしは五瓶が作

功也是より後淨瑠璃には石川五右衛門一代斬、木下蔭袂間合戰歌舞妓には仁王門端歌雜錄、艶燒石川染、けいせい忍逢淵、けいせい傳石川、けいせい濱眞砂と種々の増補あれども五山桐以來は皆時代に仕組めり仁王門は河内の五右衛門石川五右衛門とて世話に作る中にも石川染の二つ目幕切石田の局の娘瀧川は明智の胤にて五右衛門大内へ入内の夜盜取て葛籠に入忍術にて姿をけす公家の面々是を笑ふ葛籠負たがおかしいかとの詞は寛政八辰年四月朔日より初日の所三月二十九日總稽古の砌りあらし小六始嵐難助後急死叶難助事につき五右衛門石田の局二役の替り忤嵐難助小眠千の利休は山村儀右衛門五登替り役にて四月五日より始古今の大入して五月十七日迄興行し難助は親増りの名人なりと評判せり此狂言の作者は辰岡萬作にてかゝる世話時代の作には妙を得たり聚樂物語に出たる三十餘人の愛妾を遣ひ歌舞妓の華美をしらせ採狂言の狂言を有て是なり金門の此村大炊之助木村常陸を女形として石田の局石田治部少輔にせしは和らかみを見せんが爲也熊野の能を催ふして久次の奢をきかせ石田の局の本名を四方天但馬の妻とし庚申の夜産落せし男子を河

州石川村の百姓に與ふ是石川五右衛門也との仕組感すべし因に云此葛籠負たがおかしいかこわい伯父が目に見へぬかと云は石川染を舊也と思ふ人も有べきが釜が淵中の巻岩木當馬が浪宅へ五右衛門盜賊に入て葛籠を脊負ひ歸らんとする時當馬とお律が中に出來たる幼子ふと目を覺してにこゝ笑ふに五右衛門も思はず愛し何がお氣に參つてうちゝしやるついらおふたがおかしいかこわい伯父が嬉しいかとのせりふ有是を石川染の二つ目の幕に遣ひしもの也宜山骨牌に「忍ぶる事のよわりもぞする」と云札の繪に五右衛門葛籠を脊負ひ側に墨子遊び居る圖は釜が淵中の巻の繪也此骨牌は元文以後に出來しと見へ「われても末に逢んとぞ思ふ」の句にお千代半兵衛と八百屋の母帯を持居る圖を書たり何人の作かはしらねどかゝる見立繪の働きにも婦女墨子の弄物とはいへども並々の人の手際には非ず作者の名の遺らぬこそいと本意なしとやいはん

忠義水滸傳脚色の話

忠義水滸傳百八人の豪傑梁山泊に集るは羅貫中の作りもふけし小説也岡島冠山通俗にしてより物しらぬ

小兒まで聞覺る事にはなりたり吾朝の伊勢源氏の物語は假名にて書たる物なれど和文の手本となるべき書なれば却つて是を讀人少なくまして小説稗史を作する者は水滸傳に倣ひ皆きりはかに遣はぬ事なし京傳が忠臣水滸傳は忠臣藏の世界に直し滑稽本に粹好傳とか題して宋公と俳名を呼ぶ通人俳諧師吳用角觥九紋龍等を連て深川に遊ぶの洒落は盡せりと云べし建部綾足が作の本朝水滸傳弓削道鏡が事を云はは俗耳に遠く曲亭馬琴が水滸畫傳も一二編にて捨しを近來高井蘭山が跡を繼數編出たり馬琴は弓張月鎮西八郎爲朝の傳に遣ひ八犬傳に直し小説讀本の種に碎きて遣ひふるせり戲場の狂言になり兼るは水滸傳なり唐土の雜劇には水滸の世界を多く遣ひ譬は我朝の源平か太閤記の世界の如く毎度遣ふ事とぞ本朝の淨瑠璃歌舞妓に遣ふには色氣なく皆豪傑の荒事のみなれば也近松が國性爺に武松が虎を討條を遣ひ並木が博多小女郎浪枕を歌舞妓に直して和訓水滸傳と賦したるは海賊毛剗九右衛門等が仲間を梁山泊と見立小女郎の色香にひかされ仲間入する小松屋惣七を宋公明と見立惣と宋との聲も合は賦したるならんそれさへ素人落のせぬを

案じ四幕目島の小平次が異國に漂著して久々にて家に歸るに唐裝束にて出る庄屋送り出てハア、是で水滸傳の外題のこゝろもわかつたとのせりふ有其餘水滸傳を讀て面白き條は武松が兄の仇討宋公が閻婆惜殺し晁蓋が棗賣などよき條なれども女形に和らぎなく雜劇狂言にならざる筋としるべし

小説棗物語の一話

水滸の棗商人の條を原として上田秋成が作の小説に棗物語板本五冊と云有是には若輩の旅人八九人連にて岐

蘇の奥山をわけ行に一人の僧にあひ名所古跡を問ひなどする内夕陽に及びければ僧の案内によつて山寺に一夜を明す其僧精進酒ながら客にすゝむ此酒蒙汁藥入有て不殘賊の手に死す一人の壯士幸ふじて其場を遁れ出谷間を越遙向ふに灯火ある孤家にたどり行身の厄難を語る此家の老女も彼山賊の黨にて再び爰にて賊に出合と宋公明が流罪の旅中の艱難に混じて作せし物也寛政十一未年九月角の芝居にて近松徳叟此一話を作して紅楓秋葉話二段目に仕組月本始之助李冠二代目同じ年比の侍七人連にて山路に迷ふ文五郎僧失馬とも云の僧伴名美男山寺へ連歸つて毒酒を飲せ六人の若

侍を殺す山賊の張本潭石本名玉島幸兵衛奥山爲十郎數多の手

下を隨がへ財を奪ふ始之助一人は辛ふじて寺の破風口へ遁れ出蔦葛を傳ひて谷底に落る此道具せり上となり本舞臺へ孤家をせり出す藁屋根一面に蔦かづらまつはらせ枝折戸の下手は谷川にて笕の水反古張の障子正面に古き大佛壇をすへ此家の老女漁江三郎娘桂に巴江芳澤にて芋桶糸車を出し宵邊仕事の體花道中程へ始之助亂鬢著物も所々破れ谷底へ轉び落たる體にてせり上る寶樹寺の絶頂より落入し此谷底所詮一命はなきと思ひしに滴る雨露に咽を潤し不思議に一命助りしも秋葉權現の加護なるかと刀を杖に孤家にたどりつき一宿を頼む老母快く留て酒を買に行跡に娘始之助に惚て此家も山賊の寄場なれば我を縛りて早く此場を遁るべしと進む始之助も娘の懇志を悦びて未は夫婦と契約して外面へ逃去る老母かへつて旅人は何國へと問ふ娘母に様子を告て親子共潭石に養はれし恩有ゆへせひなく惡事に組すると愁傷の内佛壇の扉を内よりひらき拔道より忍び入し賊首潭石委細を聞取思しらすの姥婆めと手込にし娘桂を妾とせんと云母諫め兼て自害し娘を谷川の外へ逃す

始之助は始終を聞葛を切れば藁屋根落て孤家碎くる娘桂と始之助は危うき場所を西東隔てゝ遁れ去るを此一段の幕と仕組めり此狂言大に評よく後京都へ持行けいせい棧物語と外題して小説を潤色せしをしらしぬ棧物語に淺草の孤家石の枕と混じてせしも舊は水滸傳の條より出て小説歌舞妓と變化せしも

水滸傳脚色の追加

著作堂馬琴が水滸畫傳の序に叙る如く誰も始は通俗本を讀て面白みを覺へ後は渡本を見て通俗本の批評をす小説作者にも各好嫌有て我心にはまりし事は幾度も其筋を遣ふ事常也馬琴が弓張月に八郎爲朝野猪を雪中に踏倒すは武松が虎を討に倣ひ蒙汁に當られてはからず白縫姫に會ふは林冲が柴進に逢ふに倣ふ八犬傳に小文吾が野猪を打も是に同じ又朝毛野が對牛樓に馬加を壓にするは武松鴛鴦樓を血に浸す條に倣ふ朝夷巡島記の初に阿三郎父の仇を討も俠客傳に達の小六箱根の底倉に仇をうつも皆一つ條也又伏姫腹を切裂て八犬士を走らすも美少年錄の發端も水滸に高眞百八の魔星を走らすに倣へり斯の如く同作の物にも我得意とする筋は幾度も出すまして戯作者の

心々に遣ふ物から舊の水滸傳のよき筋は二番煎じの茶と同じく花香失たり予兼て楊志が棗商人に會ふ條を歌舞妓狂言に腹稿し世界を石川五右衛門と立て二つ目關白久次石田の局の謀反を顯はし明智の胤瀧川を遠き國へ追やるべしと評議極り岩本當馬之丞に送らせんと云當馬此役を辭退して明智の殘黨少からねば途中に於て奪とられんも計られず是非勤んと有ば横目を附同勢多く連行んと云尤なりとて敵役一人横目に附^{前野}馬^{出立}三幕日本曾路とか北國街道とか人倫絶たる雪降りの峠として此中を長櫃の内に姫を入れ荷もつと見せて當馬但馬の兩人宰領して行に水滸は炎暑の旅なれど梨園狂言には雪中の旅行ならでは艱難辛苦見ゆべからず舞臺花道通路まで白木綿を敷雪深く降積し道具にて同勢の人夫手足氷へて歩行れずとつぶやくを當馬怒つて爰は名代の絶處也盜賊に逢てはならずと嘗て但馬は人夫と共にちかけてかく太平の御代に盜賊は出べからず寒氣甚しければ遲滯するも斷りと言ひなだむ當馬はいよく怒つて人夫を呵り通ひ路より花道へ廻る向ふ雪幕の間へ松柏の梢に雪積りたるを段々引出すと云本舞臺へ來る比雪

幕切て落す奥深に雪積りたる岩山の峠絶頂の體橋懸りと花道中程に雪持樹々梢を見せつゝ折の登り坂奈落より下り登りの道雪の松の釣枝下りる人夫かちけて歩行れぬと本舞臺にて動かぬを當馬はいらつて今一つ峠を越なば里有るこにて寛りと休ますべし此峠は常さへ盜賊追劔など出て不用心なる所也と云人夫一向是を聞ず焚火をせねば身うち氷へて一足も歩まれずと口々いひて柴薪を拾ひくる但馬共々當馬をなだめて焚火にあたる出の唄に成り橋懸りの登り坂より三上百助淺黄頭巾酒商人の拵にて酒桶一荷を荷ひ出てあゝ冷る事じや幸ひの焚火の馳走相伴せふと火にあたる當馬は始終油斷せず一あたりあたつたら行ふと云但馬人夫はなかゝ此位では溫らぬと銘々足投出してあたる此時又唄になり花道の奈落より程よき雪車に蜜柑籠を數多のせ小鮎源五郎、堅田小雀、足柄金藏、筑紫權六、石川五右衛門各頭巾股引脚絆雪持の蓑沓をはき蜜柑賣商人の拵にて雪車をひき又押ながら花道より上り本舞臺へ来る當馬は此人聲に耳峠て刀の柄に手をかけ扱こそあの人聲は山賊共といふに皆々恐れ震ふ商人皆々はヤン焚火じや有難い

はと車を下手へ引すて共に火にあたる當馬はよくよく見てお身達は何者にとふ蜜柑商人どこその宿まで蜜柑を持て行く商人と云ふ人夫それこそ誠の商人を宰領が又しても山賊の追劔のと威さるゝには迷惑と口々罵る酒賣蜜柑賣と咄をして酒片荷買んといひて銘々錢を出し蜜柑を肴に冷酒を飲舌打してあたゝまつたと云人夫羨ましげに我々も片荷の酒を買ふて飲んといふを當馬制して得てしびれ藥の入あるもはかられずならぬと云人夫あの蜜柑賣が飲でも中らぬからはせひ買て飲んといふ當馬はけしてならぬと制す但馬段々挨拶して酒を買んといへど酒屋おれが酒にはしびれ藥が入てあればえゝ賣まいとすねる人夫賣てくれとたのむ此内蜜柑商人の内一人は茶碗にて片荷の酒をすくひのむ當馬はじつと是を見て居る酒やふりかへり見て恔りして茶碗を引取り飲残りの酒をもとの酒桶へつぶやきながら戻す此時五右衛門の手へ茶碗渡る時藥を入る事有人夫は始終唾を吞込で飲たがる事有但馬挨拶してよふゝ片荷の酒を買ふて銘々飲但馬は當馬に追従して一盃のめとすゝむる當馬いやながら附合に一口のむ蜜柑賣和睦をよろこ

び肴に蜜柑をやる是にて但馬始人夫片荷の酒を飲はすうち當馬そろ／＼藥の廻るをいぶかる但馬人夫は一時にうんとする幽に遠寺の鐘鳴酒賣蜜柑賣捨せりふにて立上り是を見て顔見合せ笑壺に入て頭巾を脱ぎ頭と云五右衛門も頭巾をとつてまんまと首尾よふと是より姫のいれたる櫃をもたせいつもの隠れ家へ運ばせ五右衛門殿して花道つゝ折へ下りる雪しきりに降出す當馬愈ふき戻し計略に落入しびれ藥を飲されしを悔み但馬人夫を罵り金銀に目をかけず明智の胤を奪取る盜賊仔細ぞ有らん足跡を慕ふて何國までもと山道を傳ふ又せり上にて五右衛門の隱家と成り女房お律は當馬の姉にて石川染大佛前の如く當馬尋來て五右衛門に討てかゝる五右衛門其身の素性を語り明智の胤を主人と崇め大領久吉に仇せんといふ當馬味方に附と脚色しけり水滸の棗商人を歌舞妓に潤色せんと思ふ時はかやふに成なり未腹稿のまゝ荒筋を説しらすもの也

清和源氏十五段の語

御曹子牛若金賣吉次と共に陸奥に下る途にて矢矧の長者の娘淨瑠璃姫に會ふ事は難波土產の發端に出る

如く小野お通が長生殿十二段を書てより淨瑠璃といふ曲始る程なれば古るき事限なし後に新十二段源氏十五段など追々に増補あり同じ陸奥下りの折青墓に宿り熊坂長範と云盜賊を討し事は義經記には江州鏡の宿とあるによりて謠曲烏帽子折に出熊坂の謠曲には赤坂と有淨瑠璃には兒源氏道中軍記二の切に出せり延享元年三月竹田出雲掾の作也此三の切は關原興市（粟田口にて牛若に出あひ蹴上の水の古跡に遺る）切腹の場にて熊坂は二の切なれば手輕き場也依て文化十三年中の芝居にて璃二代目吉の熊坂をせし折も三幕目に此場をし四五には太政入道兵庫岬の三の口切能登守教經の場を繼合せ勝鬨亭源氏と外題しけり熊坂の狂言是より世に出て誰々もする様にはなりけり爰に豐竹座の當淨瑠璃清和源氏十五段は並木宗助の作にて享保十二末年春より秋迄打通し後毎度出る度毎に大當りせし三の切は熊坂の妻子義經を討んと覘らひ靜御前と卿の君を取違へ江田の源藏に討れ青墓にて熊坂が最期を物語る場也此狂言の大切は山伏攝待とて名高き場にて三の口切は餘り人のしらぬ場也然れば熊坂の狂言の舊（もと）にして十八年後兒源氏出て熊坂の狂言とは成ぬ予清

和源氏十五段の三の口切を種として天保十年亥の五月天満天神境内新芝居へ奉納狂言に書たる折の外題は物見の松に寄葉越廼月女熊坂謠曲二段として口幕鳥井元場は切幕への仕込にて靜卿の君の落足藥屋源五郎夫婦づれにて出商ひ横須賀軍内のチャリ場なれば略して切幕寢物語の場の正本を爰に記す

女熊坂演劇の正本

其節の役割藥屋源五郎本名江田源藏我童、同女房小夜衣に金作馬士小猿に東藏庄屋四九郎松右衛門、卿の君大三郎靜御前に一德麻生の松若に友三、熊坂妻姥等に壽太郎也造物正面三間の二重向ふ鼠壁納戸上手折廻り破障子家體下手續きの二重隣家の體向ふ赤壁納戸此前に兩戸しまり有橋懸り切幕の所隣の入口戸しまり是に反魂丹越中富山の張紙を張り留守の體右家の取合ひ一尺計間を透し此前に松の實木上手へうねらし此傍に西は近江東は美濃寢物語の里と記せし傍示杭立正面より上手へかけて見事なる松の釣枝淨瑠璃にて幕明く「東路を二つと三つに追分や茶屋が出ばなは古茶新茶番場醒井柏原今須の間の細溝が美濃と近江の國境寢物語と名も高き藥店反魂丹屋源五郎が五

日六日の出商ひ留守は隣の美濃路から預る後家は姥等とて年は五十を越す越さず名うての茶やと旅人が一連店に立止りト跡在細歌に成る上手より仕出し何と彌次さん爰が名うての美濃と近江の國境じや同ハ、ア是がかの寢物語と咄に聞た古跡じや同イヤ又こふ並んだ隣同士で國が違ふとは珍らしい同見りや爰は茶店と見ゆる一ぶく吸附ていかふか同ヲ、そふせふくゆるさんせやトめいノ腰かける納戸より馬士小猿口まくの形り煙草盆と茶を持出て小ヲイく表の茶煙草盆はおれが持て出る合點じやくサア一ぶく上つてござれ同ヤレく赤坂から一いきにやつたらぐつと草臥た同それくそのかわりに今夜は醒が井泊りじや同爰で一ぶく吸附たら一里半や二里は丈夫にあるけるて同小お前方赤坂からずつとごんしたかても達者なお衆達じや同イヤ又此中仙道は長たらしい道しだがてるての松じやの常盤の塚のと名所が多い同イヤ又名高い物は熊坂の物見の松今みても盜人が出よふかとびくくするて同イヤ長休みしてごまの蠅にでもつかれてはならぬサア一息に泊り迄おつこふ同茶の錢は爰に置ますぞや同小マアよごんすわいのまつと休んでゆかつしやれ

仕○イヤゆるりとししましたサア〜ムれ〜ト又東口に成り三人向ふへ這入る小猿残つて。今の咄しで思ひ出したけふ鳥本で雲めらがよつてかゝつて自らとぬかす銜妻を剣をふと仕をつたをおれが助て馬に乗せ爰の内までつれて來たが今夜一夜さ泊たうへ手越か大磯へばらしてやりや欺されてうせるは定何じやうでも福徳の三年目娘は自に飯拵の間店番をしてやるとは人を思ふも身を思ふじやてなト丈六くみ煙草盆引寄る隣垣の木の歌に成り向ふ半出の形りわんほう繩の帶。庄屋皆の衆今度禁廷様のおめでたで國境の姥等の息子の松若も助つて戻つたといふ物じや百姓。イヤまた松若は仕合物今迄そこ爰で小盜がたび重なつて今度はさし詰首代呂物同所をけさ卯の刻から庄屋殿始組合残らず代官様へ御召で今度計りは許してやるふとの事同。こんや一晚は勘當しても親の内でのめ翌は早く山越に隣國へ追拂へとの仰附△門前でうつむけにして横ざつばで二三百くらわせとの過怠同。何がてんでに物とられた恨みくらわすまい事かおれも四五十どやしてのけた同。逆もの事にマア二三年も牢へ這入ていてくれゝば盜人がなふてよからふに庄。ア、是々あんまりいふまい跡がこわいぞ

扱松若よ代官様から言附られた事ゆへせふ事なしに母者が何といふかはしらぬが庄屋始五人組が挨拶をして見るが是にこりて今からきつと性根を直したがいぞや松。アイ〜同。是松若アイ〜と計りではわからぬわい何と長々の入牢でちつと性根に△□こたへたかいの松いやもこたへた段か是から頼と心も入かへて眞人間に成りやんす百。それ聞たら母者も定めて勘當をゆるさるふ松とかくよいよふに頼みます△百。おいらも夫に如才はない庄。サア皆の衆もムれ〜ト本舞臺へくる小猿。庄姥等は内にいやしやるか庄屋の四九郎でムる小猿。ア、庄屋殿大勢づれで何でござんすぞ今おば貴は客があるのでめしを焚ていやんす庄。ア、そふか内にいられりや幸じや百三。サア松若ゆかにかいの松久しふ戻らんのでどふやらうい〜しいよふな小ヨウわりや松若扱は助つて戻つたかい松ヲ、小猿來てかなつかしかつたわいのふ小ヲ、よふ戻つた戻つた是々伯母貴庄屋殿が來てムるぞや伯母貴〜納戸の内。ア、アイ〜そこへ行ますやれ〜お世話でムんした納戸。納戸の内より主姥等のれん押上立出てト合方に成り垂にて手なぐぐひ乍ら出て 小お庄屋組の衆がムつたわい

の等^姥是は／＼お庄屋様よふお出被成升たのサアマア
マアお上りなされませ^ト庄屋は二重へ上る百姓三人小猿は上
立^姥等見^姥て等見れば皆様お揃で以前勘當した惡ものめ
を連立てムり升たは又詭言でムり升かな庄サ、取あ
へぬは合點じやがアノ松若はこなさんの祕藏子何か
子供の時から手癖が悪いとやらでもてあましての勘
當と聞所が去年の春から長らく牢へ這入っている内に
手ひといめに逢て夫から性根を入かへたとの事今度
禁廷様のおめでたで此四九郎始五人組をお呼出しの
上此度は赦すから今夜一よさは親の内で寝させ翌は
夜の内から隣國の近江領へでも山越に追拂らへとの
事そこでこなたも迷惑にはムらふがこちらにめんじ
今夜一よさの所了簡してまあ一度世話してやつて下
され姥夫はマアどなたもお揃で御心切の段はわかっ
てムれど何べんいふても同じ事とんと捨て置て下さ
りませ庄そふで有ふ／＼が今度はよく／＼こりたと
見へて牢の内にいる折から神佛を信仰して今迄の心
を入かへ升ふと誓言立したらその利生でやら今度の
おめでた○お庄屋を始め五人組のこちらに迄世話
してやれと殿しいひ附^同どふぞ了簡してやつて下

され^同こりや松若よ何をぐず／＼^{同三}早ふ爰へ來て
たのまぬかい小なる程おば貴もこりやそふいやらふ
がとめた所が今夜一夜さことにお庄屋始組の衆の挨
さつ潰ぶされもすまいこりや松若よ早ふ爰へ來て
あやまれ／＼^ト皆々寄突出す松わかしほ^ト松鳴様今迄はた
あんと苦勞をかけ升たもふ／＼こんどいふ今度は
こり上ましたどふぞ了簡して下さりませ^ト泪聲して
云^姥警へどなたの御挨拶でも再びよせ附ふとは思
はねど性根さへ直つたら過行た連合の僅捨て置たふ
もないいよ／＼性根を入かへるかイヤお庄屋様始皆
様の御挨拶といひ今夜は私方にとめまして翌は早々
隣國へつかはし升でムり升ふ^皆それは忝い小コリヤ
コリヤ松若悦んだがよい伯母が世話してやらふとい
松アイ／＼庄此上共に母者のいふ事よふ聞て悪性根
もやめ翌は早々餘所へゆくのじやぞかアイ／＼庄又
悪い事して此美濃領へ足踏込と首がとぶぞよ松アイ
／＼いやもふ是にこりぬ物はごんせぬお前方もちつ
と牢へ這入て見やんせ第一おれが好きの見たははら
れずの小ヤイ／＼まだそれが悪い其仕舞が皆西向じ
や松イ、やいのばくち打ふじやないこりたといふ事

じや幸ひ牢の内に肴はなし常精進で氣の盡た折は欠
 呻交りに念佛もやらかしたわいの小ヲ、年が藥じや
 大ぶん夫ではこん性が直つたと見へる大師へなど禮
 參りせいやい松大師への禮參りは得手者じや小そり
 やなせやい松ハテ弘法は前髪好れそじや尻むけてお
 がむが勝手じやあろかいトしりも小何ぼうお好の大
 師でも我が様な前髪は南無大師へんせうまへじや松
 何いふやら腰のあたりに牢瘡はあり若衆の本肉じや
 皆やれ情ない庄コリヤト松若大師様計じやない觀
 音様へも詣らふぞ松サアその觀音様の影で助つたや
 ら眷中がじはトといかい事ぶんじさつし
 やつたそふなト身内をかきいる庄ヤレ氣味の悪い
 どふやらおれも眷中がうちト思入庄屋思入有てするよふなイヤ時に
 思ひ出した最前代官所での言附には梶原様の名代番
 場の忠太殿とやらからお觸が有たは此度都を開かれ
 た義經どのの思ひ物靜とやらいふ者腹に義經の種を
 やどしたが逸たとやら生捕ても殺しても褒美の金に
 なる程に見附次第に注進せいの言附じや何と皆の
 衆心當りはないかよふ心得ていやつしやれやト是に
 小猿トなト松エ、すりや義經殿のおたねをやどせし靜と

やら小生捕ても殺しても代官所へ連て行ばほふびの
 金ト兩人顔見合ち松ハテなア松そんなやつをとらへた
 らすつしりと褒美のかねこりや一番見出したい物じ
 やがな庄エ、何をいふやら攫そふにも翌から美濃路
 はおかまいものトそれト村方へ觸させねばならぬ
 同此惡者にかゝつて遅ふなつたトをくれてはおいら
 の誤りこちらも早ふト同三歸りませふかい庄いのふい
 のふコリヤ松若よ隨分おとなしふしませふぞト松段々
 のお世話それあなた方にお禮をいはぬかいの松何の
 いのこんな挨拶するはてき様らの役サア役目はすん
 だ庄屋始皆のやつらきりトいんで休みやいの庄コ
 リヤト松若たつた今心を入かへ升たといふた口も
 乾かぬにもふその通りじや小ア、是々今のお觸が出
 るじやないかこなん達も早ふいなしやれトあんなや
 つはよけて通せト同さわらぬ神に祟りなしじやト△ほつ
 て置いてに升ふト庄そんならもういに升ふぞやさ
 りとてはあいその盡たやつじやト百姓悪いやつでゐる
 わいト松皆御苦勞でムり升たト歌に成り庄屋百姓上手へ這入
 思ひトなト松今庄屋めの噂には靜とやらいふ街妻六部
 のかまつたとやら小けふ鳥井もとから連て來て世話

する顔で爰の内へ送り込だかのげん妻松そいつはゑらい送り込だとはどこの内へ小しぶり皮のむけた都女郎若やあいつじやあるまいか姥イ、ヤそふではあるまい小そりや又なせに姥静とやらは名に聞へたる白拍子まそつと人馴ていにやならぬにおぼこい所は人が違わふ小成程もし又外の街妻なら大磯手越へ賣てくれう松そりや何よりの耳寄じやそふして其げん妻は小イヤそりやあの爰に姥イヤ窮鳥懐に入る時は獵人さへ是をゆるすといふ本文小ヤア姥是にゆるつと休んでいやしやれト歇に成り姥思入奥へはいる小松は々小猿何じや様子有げな今のしぎシテその街妻はどこにをるのじや小ムウ其事を聞たがるからはわりやまだけふのおゆるしにこりすと松何の性根が直らふぞい今の様に誤つてのけたはかわいそふにと思わして母者めにせわやかそふ爲小其心ならてふど幸ひ今庄屋めがぬかした街妻注文の合ふめらふをさつきに爰へ松そんならその街妻を小コリヤト松わかにかに叫く松わかうなづき松オツとがてんじや吞込だ小譬へそいつでないところが賣てやつたら大まいの金松所を母者めがぎしやばつて賣さぬは定の物小そこで我々は翌まで遠網はつて

待ていよふ松くわしい事は我らが嘆ぎ出し金に成たら二つ山小かならずぬかるな松がつてんじや「うなづき聞き兩人はわかれてこそは入相のト本つりがね暮六つにて松わか手へわかれはいる遠寺の鐘のかうく」と次の一間に灯もともり都を立ておとといときふも暮てけふの君ならわぬ旅の物うさにしらべる笛の音もさへてほの聞ゆれば一間より主姥等は行燈にともし火うつし立出てしばし聞とれ居たりしがト此内上手一間に灯の影移りる姥等角あんど提納戸姥ハテ艶しき旅の女中やなア筋目よりいで、笛にきい入姥ハテ艶しき旅の女中やなア筋目正しい育と見へ詞遣ひの雲上さ最前小猿が連て來て獨う旅ゆへ宿へもやられず泊てくれとの平頼み今庄屋殿の詞をきゝ俄にそれかと思案の様子若又靜でない所が器量勝れた都の上臈大磯手越へ賣心と思ひしゆへに紛らしてしらす顔になした物のもしや義經の思ひ物女子のはるくひとり旅そこらでなふては叶わぬしぎ「思案の糸口糸車引出す胸にとつおいト床のありやす糸車取出しつむぎになり姥もし又靜に極まらばやどせしたねは源氏の血筋うかつによそへ手ばなされずさもあれ慥な證據もなし」どふかこふかと胸の内辛氣辛苦の糸つむぎト姥歌にて「こいとゆたとてゆかる、道か道は四

十五里浪の上「歌に哀れやそへぬらん思ひかわれど隣里源五郎が女房はあかぬわかれも親の業誰をたのみて一夜さを明し凌がん方もなく古巢に迷ふ雛鶴の戸屋を忘れしごとくにてしほくとして立歸り向トふより源五郎女房小夜衣口まくの形にて出て橋小夜ホ、お隣懸りの門口しまりあるゆへふと隣の方へ立寄衣の姥等様こりやお夜なべでムんすかへ姥是は扱お隣のおさよさん戻つてかお連合はまだそふな茶でもわかし待しやんせ「常にかはらぬあしらいも今此身にはしみ渡りハ内明て待程ならよけれ共待も待れもせぬ身の上立乍聞てたべけふ鳥本の出商ひ不慮な事が起つてなわしや暇が出た去られましたわいなア姥やれ／＼笑止やそりやどふしてサア仔細を咄せば長い事差當つてのお頼みは今宵イむ方もなしかくもふてとは押附ながら行所もない私が事一よさめて翌でもお前詫して下さんせぬかどふぞおたのみ申升わいなア「馴染甲斐にと計りにて又涙にぞくれにける姥等が心は思案の最中つけこまれては妨とよらず障らず間に合詞姥ヲ、夫は安い事詫事もして上ふ一よさは扱置十日も二十日もとめたいが折悪ふこよいは内にお客もあり寝さします所もなしさすりや

内かたにはまれのお客でもおとり込とな姥どこなり共今宵を明し翌でもムんせ如才じやないよとはいへ主の腹立をよいわで捨て置れぬしぎ姥ハ一寸のびればひろとやら翌は機嫌も直らうぞいのよそんなら必ず詫事をおまへにおたのみ申升たぞへ姥ヲ、そりや氣遣ひさつしやるな女夫喧嘩は寢床の帯が直すと云わいのエ、じやらくとそんな事姥ホ、ハテ笑止な事ではある程にのう「笑止な事と他人むきたのもしそふで放れ際たつて納戸へ入にけりト姥等さそんならきつと頼み升たぞへア、是といふても根が他人人の情も世にある時うつればかわる身の上じやなア「獨りかこちて泣けるが思ひ直して立上りよア、恨むまい歎くまいあきもあかれもせぬ上は機嫌見合直の詫言しまつた表を明るは我儘夫の詞を立る爲裏から這入て寢て待ふヲ、そふじや／＼「そふじや／＼と打うなづき思ひ直して春戸口の裏手へこそは入にける藥賣の源五郎靜御前をいざなひてわざと道にて日をくらし歸る我家は國境トさ衣は上手へ這入る形跡より源五郎先の形りにてつれ立出るトさ衣は上手へ這入る形のあと床の合方花みちに立どまりト五もふ是が私めが假の家嘸御草臥被成升ふ靜草臥はしませねど案じ

らるゝはおかもの身の土源ハテそげめが事にはお案じなくとまづ「あたり見廻し腰の鍵出して明たる錠まへも心覺への門の戸をそつとひらいて聲をひそめト橋懸り切まく源住家と申せば仰山なれどほん

の膝を入るだけ今宵の旅宿と思し召せ「いざお這入と伴ふているさの窓の戸障子も明て火打のこつちこ

ちこちらは旅の女中をば一間にすへて主の伽ふり

此ト内源五郎靜なつれ遣入り入口の戸をさす内にて火を打音して戸を二枚づらき下手へ入る角行燈に灯をともし靜を上座にすへ源五郎あたりを片附る上手の一間の障子をひらく内に卿の君口まくの形縁あればこそ都上膳のお宿も申せ女子でこそあれ私

も後家立て十二年男増りの生れ性頼むとあればどこ迄も頼まれおゝせる心なればかならずおあんじ遊ばすな聞ば源の義經公都をひらき給ふにつけ靜御前と

いふお女郎あづまへ下り給ふよしもし其方にて侍らはい力となつて參らせんつゝまずお聞せ成され升い

なア「明させ給へと問かくる女心のはかなきは頼もしそふな詞に附そんならそふと思ひやり卿の頼母數

主の詞いかにも自らこそは義經様のお情をうけたる身陸奥にお下り遊ばした我夫の跡を慕ふてさまよひ

出世に便りない自らなれば主をよきに頼むぞや「よ

きに頼むの挨拶も跡や先やの詞附扱こそそれと思へどもうばらは猶も念おして姫お女郎の持給ふ錦の袋

はそりやマア何でムり升るな「見せさせ給へととらんとす卿ア、是は人手に渡されず何を隠そふ自らが

戀しき人の手にふれて残し置れし簞ぞやそなたが見ても詮ない事「隠し給へば詮方なく姫ヲ、何事も旅

の空御用心にしくはなし心を附てサアおやすみどれ〳〵お寢間を敷升ふ「取出す夜具も糊強き木綿蒲團

に木枕も夜寒を何と洗濯物著せて障子を引立てる源藏は靜御前上座に直し畏りト姫等は卿の君を寝さす上手の障子しめる此内にゆる〳〵下の戸を

明る源馴も被成れぬ旅路の上追手に取巻れお心の驚き殊に御懷姫の御身とあれば猶大事こよひはゆるゆ

る御休息の遊ばし升ふ「いんぎんに相のぶれば靜も心落附て靜嬉しき人にめぐり合頼母しき心やなさば

さりながらいとしいは内室の小夜衣あかぬわかれをさしたるも自ら故と思はれん「氣のどくさよと

ありければ源こは心得ぬ御仰重恩受し御主君へ仇する者の娘に連そひつながらいては陸奥に御座ある義

經公へも言わけ立ず本田が最期の疑ひも草葉の蔭ではらせん爲去りこくつて心がさつぱりヤアよしな

き物語に夜も更ゆく次の間に御寢所もしつらひ置ば
 男女同席は故人の禁めいざ御休息あられ升ふ源とか
 くだのみにする上はそなたの詞はそむくまじそんな
 ら次でやすみ升ふ「むすぶ夢路の旅づかれ障子の蔭
 に臥給ふ源藏は間を隔て思はずホロリと涙をうかめ
 ト静納戸へ這入る源藏行燈を納戸の内へもち這入り
 出る此内空より月おるす硯入の合方源藏思入有て
 源ア、あぢ
 きなき世の中や義經公のお胤とあらば何者の腹にや
 どり給ふ共和丹の兩家祈禱は嚴密の二教毎夜のお伽
 おもとびと諸大名の折見舞晝夜のかしづき有べきに
 我外に宿直もなほにふの小屋を御寢所とは勿體な
 やいたわしやなア「思へばたまる一雫拂ひ落してひ
 ち枕立切る雨戸の響にて隣のうばら寝ながらにト此
 等は上手の間より出てよき所へふとんを敷折戸を下手より引
 立かける源五郎も下手の戸一ぢしめひち枕にて寝かけ兩方より
 誰じや／＼源イヤおれじや源五郎でござんす姥ヲ、源
 五郎殿今戻つてか源アイ今戻つて今寢升た四五日あ
 はぬが美濃路には變た事もムらぬかな姥ホ、何のい
 の近江の衆は金儲けようの上のじやら／＼か女夫
 の中に少いさかいどふやら聞たがほんかいのウ源さ
 ればいの豆豆殻ににらるたとへ口が過ると口が干
 上る古ふ成と人中で尻に敷は男と編笠出かはりさし

たで胸がはれた姥ハテもぎどふなあり附てからない
 と淋しかるぞや源兩隣に後家やもめこけ込そふであ
 ぶない物淋しかいこか其氣はないかな姥ア、うたて
 や男の世話にはこりた物獨り寢がきさんじなわいの
 姥源ハ、／＼、「枕取る手も世話はなし美濃と近江の
 國境寢物語と傳へたりト又本つりが硯入の合方にて姥の方
 折戸を入る源藏ふとんかむり寝ころぶ
 「夜も既に松吹風の音づれて三更ともなふかねの聲
 深夜の雲に埋もれて四方の人音静まつたり宵の約束
 いかゞと蚤取眼のびつか／＼ひからし出る馬士小
 猿戸口に身を寄窺へど内にはそれと白川夜船時刻早
 しとさし足に松の小蔭に忍びゐるト小猿はふかむり尻か
 うなづき立石より「人は萬能一心を持崩したる松若は繩
 松の梢へかけ登る
 目の恥にこりもせず窺ひ出たる戸の隙より卿の君が
 錦の袋金と心得さぐり足奪ひとらんとねらひより寢
 入し音を聞すまし時分もよしや目を覺さは只一討と
 幼氣に胴より膽の懷合口盜みは得手の路銀を目當跡
 より母が附る共いざ白障子押明てそつと引出す錦の
 袋心も足も地に附ず火の上氷をふむ心地ト松わか正面
 て合口をさし上手の障子を細めに明け
 姥ヤイ待ふぞ「かけた
 笛の袋を取出す姥等跡より窺ひ居て
 詞が耳に雷ハツと計りに立すくみ松ヤア鼻さんか堪

忍して「思はず高き聲に手をあて 姥ヤレうたへ者
人がきく」「言ふ事ありとかた脇へ連行く足音聞き聲
寝られぬ儘に源藏が耳そば立て聞共知ず母は我子を
引すへてト松若違ふとするを姥等引立て花道際へ引す 姥姿
はうめ共心は産ぬと世の譬へにもいふ通りやつぱり

心は直らぬなアそなたが盗みするにつけなき昔を思
ひ出す過行れし連合は平家世盛りの折から大納言家
の御家人そなたを産んだ其後にめのこゝ獨りもふけ
しかど御主人にお子がないゆへ娘にして育ると有て
賤しい母が産だ子は太納言家の姫君と成り其後仔細
有て夫は勘氣明て四つのそちをつれ親子三人此美濃
路迄さまよい來て世渡りの業もなくお羽打からして
斬取強盜異見をすれど聞入す運の窮めか赤坂の長が
もとにて討れ給ふその折此身は駢附て相手を聞ば源
氏の公達おのれやれ夫の敵そちをもち立鬱憤を晴さ
せんと春丈のばすも心は張弓月日送つて十二年長の
日數の憂苦勞盜みさす氣でそでうか母は手がせの
賃仕事その日を送りかぬればとて我子の盗みでくら
そふか父の惡事のうんつきてひほうの死をする心か
エ、淺猿しい根性じやなア「せき上／＼忍び音にな

きこがるゝこそ哀也松若もくもり聲松ア、其事は忘
れはせねどけふの煙りを立かねて親を殺した敵をば
討事よりもくふ事の案じに餘る口おしき盜人といは
れても金さへあれば何事も望は叶ふと思ひ詰かせぎ
もふける筋はしらす人の錢金見る度にほしや／＼の
盜氣も親の敵が討たいばつかり最前小猿が言附て靜
とやらなら訴人の褒美もし又そふでなかつたら手越
大磯へ女郎にばらし金になつたら二つ山といふ間に
わいた出來心もつておる大事の袋は路用に相違ある
まいと盜み出したおれが心もふ此上はたしなみ升ふ
こらへて下され是かゝ様「取附なげ／＼ば涙を拭ひ姥
其心なら阿りはしませぬかいしよのない母親ゆへ我
子に苦勞をさす事もみんなこつちが身貧な故貧の病
の良藥は金銀ならでない物かいのう」「ワツと互ひに
泣なみだよそにもなみだもよふせり姥等はせきくる
胸の内涙乍らに袋を引よせ松敵といふは源義經その
胤をやどせし靜といふおもひ者此海道へ來たとあ
る庄屋の噂奥にとめたが慥に其人くわしい證據は此
袋松そんなら是がアノ證據「ひらひて見んと引ほど
きよく／＼見れば横笛の蟬の折口見るよりいき／＼

姥ヲ、聞及びし源氏の蟬をれいよく靜に極まつた松ムウあいつが靜に極れば姥義經を殺すかはり胤を斷て夫に手向ん松其跡の首を持梶原殿へ褒美の代姥初太刀は松若松かゝさま早ふ姥是ひそかにく「互ひにうなづき忍び足隔の戸視さし足も踏違へたる身の因果落し附てぞ入にける始終を窺ふ源藏も不審の晴ぬ薄月夜^{ト姥松わか這入て内より正面の折戸をしめ}源ハテがてんのゆかぬ靜御前は我家に有隣にとめしは何者ぞ人違ひにて討すもよし「討さぬもよし足引の山姥等源何でも主君へ仇するやつ原生け置ては後日の妨「討てくれんと身をかため窺ひ入らんとする所ヤレ悲しやと女の泣聲はや討かけしかをくれたりと驚く隙に一間よりあけにそみたる卿の君逃さじものと障子越又も一かせ長刀のするどき刃先を源藏が丁ど拂ひし刃金の音南無三寶とや思ひけん長刀引て一間の障子内よりしやんとさしかため切込ばふせがんと勢ひこんだる小家の城廓^{ト上手の間より卿の君手負ながら逃て出て倒る源藏刀にてさぐる長刀引込}源シヤア物らしき姥等が振舞だて籠つたとて野中の灰小屋いで某がふみつぶさんそふれ「手負をよそに飛こむ勢ひ靜ヤレ待てたも江田の源藏靜は爰にいる

わいのふ「いひつゝ一間を走り出さぐりつまづき引といむ源靜様には御怪我はないな女の大膽只者ならず靜ア、是最前からしりながら息を詰てい升たがせいては事を仕そんじる自ら故の災難とみすて、置ば道ならず手負の女中の介抱を源げに誠人達はこつちの重疊去にても此女中は何者なるぞ靜氣をたしかに持てたべ^{源靜}是旅の女中のふ「雙方より引起し月にすかして顔打詠め源ヤ、ヤア是こそ大納言時忠卿の姫君我君の御臺所卿の君様コリヤどうじや「あきるる聲に靜も仰天よくく見れば道すがら跡や先やの由道で互ひに見合す御姿靜扱はあなたが卿の君様であつたかいのう「聞て恟り見てあきれうろたへ給ふぞ道理なる御臺は苦しき息をつぎ卿やれ珍らしや江田の源藏靜とは我君の思ひ人白拍子の君なるか終にあい見もせぬゆへに道の間もよそ事に山路にかまればふもとからまねいたりまねかれたり旅は道草縁のはし同じ戀寢の友ながら君をしたふて都を出よるべ定めぬ旅の空靜といはゞ力にも成つてたもると思ひしにかへつて仇となつたるは爰で死ぬとの約束か戀しの我君淺まし身の果よのう「恨み歎かせ給ふに

ぞおいたわしや理りやと顔を見合せ三人がワツと泣
出す村時雨涙の雨に美濃近江一度にひでも潤ふら
ん身拵へして源藏つゝ立源眼前御臺の仇敵首引提て
おんめにかけん静様には御介抱「御臺所を静に渡し
となりの一間に聲をかけ源障子の内にて様子は聞ん
御臺所を討たる敵かくいふ我は義經公の家來江田の
源藏廣成也恨みの鍵先受取おらう」「いふより早くた
しなみのおうこに仕込みし鍵おつとり一間の内へ障
子越ぐつとつゝこむ恨の鍵先バツと立たる血煙りと
共に姥等が聲高く姥ホ、ウ其恨みは御尤覺悟極めし
我命最期の一句語りたしマア／＼待たれうじあるな
と騒がぬ體いかさまこやつしれ者と猶豫する内蹴放
す戸障子のるぎ出たる姥等がいでたち頭にちよつべ
い頭巾を著し身には法被を引結び腹巻しめて小手腰
當弓手に突たる大長刀馬手に疵口しつかとおさへ仁
王立に立つたる有様興ざめてこそ見へにけるト此内
源藏あ
ふこの鍵を引くこ正面の戸障子一面に開く内に姥等いつもの
熊坂のこしらへ左に長刀右にて腹をおさへ相引にかゝり居る姥
かく仰々しき打扮なれ共及むかはぬといふ證據は見
給へ「懷劔取てゆん手に突立さしも苦しき自害の有
さまこは／＼いかにと源藏靜あきれて暫らく窺ひき

く始終小蔭に立聞松若一間の内より踊り出松ヤアコ
リヤ母者人はくたばつたかよし／＼靜は此松若が
「飛かゝらんすがむしや物グツと突たる隣の壁越胴
腹かけて一トゑぐりこはそもいかに何者と驚く隙に
妻の小夜衣納戸の内よりかけ出てト松若をのれんこしらへ
突納戸より小夜衣抜刀
出てゑは是々見給へ源藏殿義經公へ仇する惡者小夜衣
が突とめたり是を功に靜様御挨拶を願ひ升「せはし
き中の訛言に靜御前も詞をそへ靜美濃路の敵を近江
路より突とめたる高名手柄忠義の程は見届た是を
功にもとの夫婦「取もつ詞に女房はいき／＼よぎな
き仰に源藏もともに頭を下にける手負は苦しき息を
繼姥善業は汐の満干惡業は四海の波に翹をそへたる
勢ひは今更千萬悔んで歸らず事のもとを物語らん何
れも聞て下されいのう「長刀杖に聲はりあげ姥もと
我夫はそれなる御臺の御父君平大納言時忠卿の家臣
百合の太郎長範と呼ばれし武士聊の咎により浪人して
親子三人美濃路にかくれ切取強盜をたづきとし姿を
かくさん爲入道して長範の文字をその儘に「熊坂の
長範と名に聞へたる強盜は是皆夫の替名ぞや姥過つ
る承安二年の秋源の義經殿まだ牛若と云し時赤坂の

宿にて夫を討し事源氏方にはいはねど御存じ最期の
砌自らも駈附しに盜賊と見あなどりといめもさうす
斬捨しゆへ夫が今はに様子をとへば 謡 扱も此度吉
次信高多くの寶を持奥へ下る奪ひとらんと夜盜のめ
ん／＼松明を投こみ／＼亂れ入 姥牛若殿とは夢にも
しらず物々しやその冠者がきるといふ其嘸あらん 謡
「熊坂祕術をふるならばいかなる天魔鬼神なり其宙
につかんで微塵になさん 姥とサアまづ此よふに思は
れしが身の因果その時の裝束此長刀「又むきになし
てしさつてひけばめてへこそ追取直して水車ひらり
ひらく／＼ひらりと飛を丁ときれば宙にて結ぶをかへ
つて長刀打落され爰よかしこと尋る所に 姥なふ悲し
や思ひもよらぬ後から具足の隙を切たか突たか身う
ちは血まぶれ次第／＼におも手をおひ猛き心も弱り
果通ふ息さへ絶々にて 姥コリヤ／＼女房責て敵のゆ
かりとあらば鳶鳥でも討てくれよそれを冥途の思ひ
出に待ぞ／＼とくれ／＼の遺言最前庄屋殿の噂とい
ひ詞のはしなりそぶり蟬折の笛持たはいよく／＼靜に
極りしと思ひ込だが因果の寄合時忠様は夫のお主其
姫君とあるからは幼少の折さし上た長範殿と此母が

中に出來たる妹娘其松若とは種腹かはらぬ實の兄弟
神ならぬ身は夫共しらす殺した跡で今のおはなし聞
と身もよもあられふか夫ゆへ覺悟の此自害娘了簡し
てたもこらへてたも早まつた事し升たわいのう「い
ふも苦しき今はの懺悔間に靜も源藏もこはそも誠か
そら事かと御臺の顔を打守りいたわり申せば卿の君
糸より細きこわねにて 卿ヲ、すりやかね／＼めのと
に聞た自らが誠の父百合の太郎長範は熊坂といふ盜
賊にて此家の主は母上か「ヤレなつかしやと身をね
ぢむき姥等が姿打見やり遙に涙ふり拂ひ 卿今には見
たる母の顔姿は父の筐かやエ、本望やとはいふもの
ゝ「戀しゆかしの我夫と敵同士の熊坂が胤と聞ては
猶更に 卿未來の縁も覺束ない是申し靜殿もし我夫に
あふとても必々自らは時忠の胤と傳へてたべ「非業
の最期に身をはたし死るがかへつてつみほろぼし 卿
もふ目が見へぬ何れもさらば「さらば／＼も口の内
おしや盛りの花ちりてあへなく息はたへ給ふなふ悲
しやと小夜衣靜むなしきからに取附て聲を限りにふ
し沈む見る母親の氣は半亂取上んにもその身の痛手
衣を喰さき身もふるはれ消入計りに歎しが源藏に打

向ひ姥ノフ争はれぬは人の因縁夫は渡世に盜をする其子は敵を言立に盜するも免れぬ惡縁一日親の慈悲もなふ藁の上から養子にをくり時忠様の娘御なら夫の爲には大事のお主誠をいへばかわいゝ娘間違ひ事とはいひ乍ら手をおふせたは何事ぞ冥途の夫へ言譯は庵相とも怪我じやとも詫して事が濟そふが牛頭馬頭あほうらせつの前つみが抜ふかゆるそふか五百ぢんでん無數こうく浮む世更に有ふかいなふ「淺まし身の果と頭巾も小手もかなぐり捨柱を楯に身を打附消入く泣沈む理りせめて哀也源藏も怒りをしづめ源さほどに思ふ一念力敵の土地には住ずして此美濃路に足をとめしはいかにく姥さればく美濃路は夫の死れし土地輪廻さらねば得もさらぬにその松若は盗みゆへ今宵限りに美濃路を拂へと仰は重き國の掟夫は罪に罪を重ね此身の科に科を重ね國の法迄そむいたる科のいみ名は罪人と呼出してたべん々「懺悔にあかす心根を少しは不憫と源藏立寄松若が死骸ひんだかへて聲はりあげ源一日くらせど其恩厚し國の掟は破られず美濃路より近江路へ山越の罪是を見よ「持たる死骸その儘に傍示のあなたへ投やれ

ば姥ハア、有難や忝やとてもものに今はの願ひ娘にあらぬ御臺の死顔一目見せて此世の別れ「お慈悲お慈悲と手を合す靜を始源藏夫婦御臺の死骸抱をこし見するも涙見る涙憎さも忘れ人々も共に哀を催せり始終を木蔭に窺ふ小猿何でも靜をしてやらんと搔附松の月影に目早き源藏氣を配り源常盤御前を殺したる熊坂の長範が姿變らぬ一體分身聊の君の當の敵死たる上は陸奥の我君によい手みやげ「てふど打たる小柄の手裏劍上には堪らずでんどう木から落たる小猿がはいもうト松より小猿飛下りてる小猿靜め渡せ「掴みかゝるを源藏が透さず投つけ踏のめらす姥等は御臺の死骸をふりのけ姥今ぞ一日の掟をたて惡を遁れし緣により善にもとづく我子の引導近江の土は黄金の砂我は美濃路の土と成り國はかはれど六道の土に迷はず真直に此装束の其ぬしとあの山越の松若と御臺と合して三惡道「偷盜戒をやぶりたる夫の地獄へ諸共に導びき給へ南無あみだ佛姥南無あみだ佛「我と我手に懷劍を又も咽に突立れば散敷紅葉紅の血汐に骸を染なせり源藏夫婦いさみたち靜の手をとり聲勵まし源敵亡びし上からは是より直に我々夫婦靜御前の

御供し目出たう主君に近江路の我家を立もさいさき
 よし「心得たるか女房といさめの詞に小夜衣がかゝ
 へ引しめかいぐしく再び結ぶ夫婦の縁是此御恩
 は静様もし又途中で吟味もあらば此身を直に御身代
 り」夫がせめての恩報じといさむ小夜衣しほるゝ静
 靜是々源藏卿の君の御最期も元はいへば此身のへ
 我君吾妻へお下りを支ん爲に國々へ關所くが有と
 の事「かならずゆだんしやんなと教の詞に小猿が左
 平治る小猿、街妻のよい推量行先々に割符を廻し義
 經始家來のやつら自滅をさらすを見る様な「いひさ
 まかゝるを源藏が投のけくしつかとふまへ源その
 御案じは御無用く譬へ關所を通さずとも傍には忠
 義の武藏坊龜井片岡伊勢駿河附添をれば氣遣ひなし
 「殊には熊野の行者に出立笈摺とさんの山伏とやつ
 し給へば鰐の口毒蛇ののども安々と遁れ給ふは案
 の内さ我々三人も山伏の姿とやつし行時はかへつて
 人もとがめぬ道理「なめめに源藏打うなづき源ホ、
 その謀極てよし無事に彼地へ到着せば出羽奥州にあ
 またの味方もし鎌倉より討手來らば「伊達の大木戸
 さしかたの靜先陣後陣は其場の駈引源奥州駒に鞭

を當「龜割坂にかけのぼり遠く遡るを遠矢に射たて
 近くいさむをひづめにかける小向ふて來らば源一騎
 の勝負「敵を残らず討ふせく高名手柄は仕勝ぞと
 いさみにいさめる有さまにこなたは手負の斷末魔
 ヲ、いさましいその門出美濃路の果は親子三人今ぞ
 冥途へ此門出靜そのお命もけふの君さ慕ない別れに
 あをはかの松に縁ある兄の松若源めいどの猿は此
 小猿る小猿何をトかいるな源門出の血祭り姥おさらば三
 さらば「さらばと計り立別れはるけき旅の陸奥とか
 へらぬ旅へと姥等バツタリ小夜衣ぬぐふ靜は卿の君に取附なき落す「別れ
 ゆく三重段切に幕て宜しく幕

天保十亥の年五月天滿天神奉納狂言

西澤李叟述

西澤文庫脚色餘錄初編上の巻終

西澤
文庫 脚色餘錄初編中の卷

目次

- 一 古今雜劇書籍の話
- 一 傳奇作書七部の目録(六部略之)
- 一 鯛屋貞柳狂歌の話
- 一 三國一夜物語潤色の話
- 一 高音鼓増補の話
- 一 淨瑠璃
歌舞妓俗語注解の事
- 一 狂言に名高き詩歌の辨
- 一 北の新地心中の話
- 一 心中盡道行の文句
- 一 新町に名高き世話物の話
- 一 地者心中情死の話
- 一 おかめ
與兵衛末期の道行の文
- 一 地者心中續きの話
- 一 お象治郎兵衛の道行
- 一 江南心中情死の話

- 一 本陣宿館間違の話
- 一 伊賀越古番附の寫
- 一 しづき
おそで道行會稽の初雪

西澤
文庫
脚色餘錄初編中の卷

西澤綺語堂李叟著

古今雜劇書籍の話

俳優五雜俎七書の類ひは皇都八文字屋自笑が作名にて年々三都劇場の藝評も皆其比の見功者の評判にて年々評者は變ると雖板元八文字舎の名前を假れり其餘名高き役者の一代記(嵐小六が玉の光、嵐來芝が桐島臺、市川團藏の一流流、澤村宗十郎の澤村鑑)の類も是におなじ松好齋が樂屋圖會は書圖を以てしらせ劇場訓蒙圖彙は羽勘三肇圖會と云小冊に戲式亭三馬が滑稽を書り東都歌舞妓年代記は淡州樓焉馬、歌川豐國に畫せて三座の外題年鑑を舉るのみ俳優似顔の書は流光齋に始り松好蘆國春好に續き東都は勝川春英より豐國迄其

時々の俳優の似顔(兒手拍、草の種、雙合鑑杯數本有)生る如く書きし書有梨園の小冊雙紙物舉るに際限なかるべし淨瑠璃にも亦然り(竹豐故事、東西評林、操年代記、新增外題年鑑、闇の礫、難波土產、瑠璃天狗)數書あれども其時々流布するのみ跡に遺らず予三都歌舞妓外題年鑑及一座の進退改名歿年一世一代等を書集め寛永以來より當時迄を秘藏し兼て梓に鐫めんと思へ其未よき書工を得ず空しく捨置んも本意なく近來言狂作書と誣附淨瑠璃歌舞妓の雜書を發り此門の作者の傳、太夫俳優の改名、追善摺物、番附等年代の新古を論せず狂言の人名錄實說虛談の脚色み様出る儘に記せしが傳奇作書の卷を重ね七部二十一卷に及ぶ猶是にもれたるを追加して脚色餘錄と號此卷を繼ものなり先に出す梨園七書の目録を改て左に記す此書の再評と照らし見給ふべしと云

傳奇作書七部の目録

(初篇より後集迄六部重複につき略之)

作書 追加上目録 同 中之卷目録 同 下之卷目録

妻復讐傳奇の話 後日鉢木本領の齣 國性爺番附の寫

伏見京橋喧嘩の話	同續雪女鉢木の齣	當狂言を褒る詩
扇屋夕霧の再評	北條時頼記番附	觀場性根玉の畫
夕霧文章并に文の寫	ひらがな盛衰記總評	難波土產の發端
簑笠雨談古雙紙の畫	ひらがな七役詠の話	同女鉢木の評註
阿波鳴戸夕霧口說の文	凡五條	近松平安堂の肖像
六樹園夕霧の和文		梅川冥途の飛脚評註
其磧自笑絶交の話		戀飛脚道行七役の正本
操年代記の拔書		凡八條
淨瑠璃太夫受領號		
女鉢木出語出遣の圖		
同院本大切一段の寫		
慶子追善摺物の寫		
後日鉢木正本の寫		
凡十四條		
嘉永辛亥夏出來		

鯛屋貞柳狂歌の語

油煙齋貞柳の狂歌數百首の内「憎まれて世に住甲斐はなけねども可愛がられて死よりは増といふは實に千載を貫くといふべし嵐小六は前集にも演るごとく

元若女形より後立役となりて
安永五申年父小六の一代山姥羅助金時
 手ぬるしなどいはいはれしも後々追々に評よく立役實
 惡女形所作何にても出來ぬといふ事なく古今の大立
 者といはるゝに任せ樂屋内にても威をふるひ憎まる

る事甚しく既に寛政元酉の春中にてけいせい北國曙

にて金剛中働らきの男もどなりに懲らされし程の事も同秋角にて

一世一代をし續いて矢張出勤し寛政六寅年改名叶羅助改

嵐小六中村十せしが昔より玉と稱するは此小六一人也

翌七卯年の秋角にて天竺徳兵衛聞書往來の世話場に

て百姓萬作に嵐三五郎元祖來芝天竺徳兵衛に嵐小六萬作

徳兵衛の爲に腹を切諫る所にて「憎まれて世にすむ

甲斐はの狂歌を云を小六一直して「可愛がられて下

手より増じやと廣言吐し事は普く人口に遺つて並々

の藝者の云える詞にあらずと褒あへりしと也近來梅

玉歿前此せりふの云たき心有て予に此事を誂らふ幸

ひ復讐高音鼓の狂言増補の時淺間左衛門照行の役にて

いはせし事有天竺徳兵衛は蛙の術を遣ふのみにて

技藝の上手下手に拘はらぬ役也故に作者辰岡も死よ

りは増と書込しを小六藝道にはこつての手褒なり予

が淺間照行にていはせしは舞樂堪能に拘はる役なれ

ば下手より増じやと詞を居しもの也其あら條は次に

出す作者の用心爰にあり讀て知るべし笑ふべし

三國一夜物語潤色の話

曲亭馬琴が作の三國一夜物語出てより富士淺間の狂

言は是に定まれど謠曲の富士太鼓淨瑠璃には享保中

に豊竹座作者並木宗助にて莠伶人吾妻雛形あり自笑

其積の作に富士淺間裾野櫻此餘に數多作せしものあ

り三國一夜物語の御座船の内に淺間太鼓を打調子變

りしをいぶかり何者ぞ舞樂の道をしりたる者窺聞く

に相違なしと蘆原へ人を上らせ捜させるに果して一

人の漁者に會ふ是富士右門也船中に呼寄舞樂の問答

になる條は英雙紙千里行者作に豐原の兼秋琴を彈じて糸

の斷しを怪しみ蘆原に閉居る漁夫を船中に呼ばれ琴

の故實を問答に及ぶ條をきりはめたり戯作者は舊の

筋を隠して遣ふは罪深き者也文化五辰年若太夫芝居

にて内百番富士太鼓と外題し角の芝居にて復讐高音

鼓と賦し三國一夜を脚色しが濱芝居の方は畫本の儘

也高音鼓は奈河七五三助奈河篤助後一泉の作にて淺間

照行片岡仁左衛門八代目南麗舍富士右門中山新九郎始中山新七俳名喜

樂富士太郎に嵐三五郎二代目始松之助にて評よく大入せり此

時片岡荒凌山の石の舞臺にて新九郎を殺し敷原を切

抜出ると空より月下影にて賽の夜半樂の舞樂を奏

する片岡懷中より舞樂の祕書の一巻を出して此音樂

の譜に合せて足取をまねつゝ向ふへはいるを二幕目

の幕切とす片岡舞樂をしらぬ物から其所作をあやぶみしを來芝伶人何某と親しければ習ひ來べしと謝禮の金子を片岡より取扱天王寺伶人町伶人何某の方へ行て所作の故實を習ひ覺それに歌舞妓の心を交へ片岡に教けり跡にて樂屋内の評を聞に來芝は最負先の伶人なれば謝禮には及ぶべからず眞の祕事を覺へて片岡には似寄の事を教へ禮金は多く來芝の懷へ納るとは如才なき仕方と云を片岡聞て我始より來芝に金子を與へる心也紹介なくば樂人に習ふ事難く眞の譜を習ひ得ても狂言にはなるべからず來芝に給金を與へて別に芝居の舞樂の譜を拵させ歌舞妓の業に仕て見せるは片岡なれば來芝の手柄にばなるべからずと云しと也俳優者流にも又かゝる見識あり感すべき事なりかし

高音鼓増補の話

天保二卯年九月中の芝居にて高音鼓を増補せし時以前前の三幕目^{富士右門の内を略して}天王寺巫子町黒格子^{老母姥等の内を略して}女房^{額十郎}の世話場にて東門邊の離れ家に淺間照行^{延若也}眼病をやむがゆへ匿ひ有場也額藏夫婦は淺間の親に仕へ照行に恩あ

るゆへ種々の艱難をして眼病の藥を調へ母お万^{中山文七}

の育君奥田主殿^{中村歌七後四郎兵衛}淺間を詮議に來てお萬を人

質に取りて歸る惡者檢兵衛^{淺尾國五郎}の手より舞樂の衣裳を額藏もとめて淺間の住家に有世話場返つて藁屋

根の小屋となる幽に天王寺の入相鳴る照行眼病を愁

ひて獨言の終りに妙藥の血汐を額藏夫婦檢兵衛と争

ひながら持來て淺間に吞す立處に本復す額藏夫婦は

淺間が惡事を諫て母の人質を歎き善心になりくれと

諫言すれど聞ざれば夫婦共自害するを我強き照行見

向もせず遙に夜半樂の舞樂を聞眼病治る上からはと

彼衣裳を附て鉦を手に持舞樂を舞ふ捕手大勢出て影

なしの立廻りに合せ夜半樂を舞ひ音樂の調子殺伐の

音を出すは我を捕らんず結構を藝道鍛練の德によつ

て胸に的中するかといぶかる額藏夫婦苦しみ乍ら舞

樂の道は上手にもせよ惡事を止ねば其身の破滅何卒

夫婦が今はの願ひ善心になつてたべいや惡人ともそ

しらばそしれいづかな心は翻さぬすりや是程に諫め

てもオ、憎れて「世に住甲斐なけねどもチュ、と雙

方より齒ざしみて詰よるを足下に蹴のけ脇息を前

に置いて「可愛がられて下手より増だや、こなたはの

ふと雙方より見上る淺間は脇息にもたれてにらみ附る幕也斯藝道の事を前に運ばねば下手よりましの心の心聞へ兼ねるなりそれさへ相手は延若梅玉の弟分也慶子松江は熊太郎の比ふりのなれば此せりふを言せれどそこの役者には遠慮有ていはせぬ詞也小六は同門とはいへ來芝にむかつて此せりふは豪傑人を欺くともいはんか梅玉も後々は死より増じやといひしは氣恥しと思ひしにやあらん

淨瑠璃
歌舞妓 俗語注解の事

淨瑠璃の文談に和漢の故事に及び俗耳に遠き言語を注解せし書は難波土産、瑠璃天狗など外題して古くあれど晝夜共常に云ひきたる俗語には注解を加へず國々の方言時々の流行詞などいつとなく云來り通言となるも少からず是を舉る時はなか／＼際限有べからずふと思ひ出るにまかせ少々爰に演る中にも予が僻考もあるべし後人加筆あらば作者の大幸也別に外題を舉ず共淨瑠璃歌舞妓の文談より移り來て俗家の常の詞となるもの所謂闕を聞すとは碁の闕揚句の果連俳に花の座有男のかうけ好嫌といへども當れつきとし果て終を揚句と云烈氣とも書れど雄子の啼破れ冠れじや聲な云

疊んで仕舞へとは笠傘の事な云八月のあばれ蚊とは八月の破ほれ蚊屋を云ろなへ母衣な母衣なわつゝ口説つとは割つ打つ勝つとは割つつ勝つは碁の詞也三寸狙見拔て置た是重言なるべし見た見つ勝つなるべしむちやくちやはもみくちやより出てもみ草いふより迷子の子迷ひ子の略後手意中の詞也繼の繼橋重言也迷子の子いご也重言後手軍中の詞也鵜の目鷹の目明鑿の色をせいさい願以至功德施ようちんに迷ふ佛像雙六とて地獄極樂の繪雙六有中はてつ半鏡炮とてといかぬ事を云はすは蓮葉と書て下ふとは書と書て算本の事此類の詞を注解せよ盡る期あるべからず亦劇場にかゝはりし詞樂屋の方言通言ともに甚多し予是を集て戲場往來と號て芝居に限り遣ふ詞を小兒の習ふ商賣往來に倣ふて戲作せり猶後々の編に出すべし

狂言に名高き詩歌の辨

詩歌連俳も辨へぬ者にも覺易きは淨瑠璃歌舞妓に使ひたる句ども也朗詠の讀レ沙草只三分計踏樹霞纔半段餘といへば手習鑑にて菅公の作としり「さなきだに重きが上の小夜衣は假名手本にて新古今に有とし「急がずは濡ざらましを旅人のといへば道灌の詠とは彦山に出す連歌俳諧などは猶更俗に近くて覺易

し「時は今雨が下しるは光秀の句」「傾城の賢なるは其角」「起て見つ寝てみつは千代と誰々もしるは皆淨瑠璃歌舞妓にて聞覺ゆるがゆへ也後々は耳新らしき句を出し」「手にとるなやはり野におけ蓮華草と播磨の瓢水が句忍術が池茶」「折事も高根の花や見たばかり來山黄金龜二つ目に有の句を出し追々に穿て遣へりまして百人一首などの古歌は態と切はめて遣ふ事也日本歌竹取物語に大江の助千里が「月見ればちやに物こそ悲しけれ和田合戦女舞鶴に鎌倉の實朝が「螢のをぶねは綱手悲しも抔は狂言によつて誣附たり伊勢物語の「風吹は沖つ白浪安達原の「我國の梅のはなとは菅原の「梅は飛と婦女子も是をしる爰に寛政九巳の春中にて扇矢數四十七本作者辰岡の三つ目由良之助市川團藏堀部安兵衛中山文七鬢髮附屋也本國評定の場にて市人の股を潜る韓信の故事を云ふ時「末終に海となるべき谷水もしばし木の葉の下くゐる也と韓信の畫讀を吟す此句は其比歌讀に名高き小澤蘆庵の詠し也といへど實は伏見中書島の隱士學舟の詠なりしを蘆庵四の句を直せしにより山水も谷のこ世に蘆庵の句也といひ囃せしにより戲場につかひいよゝゝ蘆庵の句となりたり前に云

ふ貞柳の「憎まれてなど感ずればこそ戲場に物して世に弘まる風流の上の面目なりけん附て云狂言によりて名所にてもなく古歌もなきものは其時の作者古歌に有るふなる句を拵へて間に合す事有譬は飛馬始の二つ目粟島の館にて尼子の四郎義久實を紀州名草山の麓に隠し味方の者にしらせる歌に「紀の路なる名草が岡の櫻花落て谷間の雪と見るらん青陽口二つ目に柴田勝家實を隠せし所を妻小谷にしらせる歌に「越路なる入方村の白雪に降埋みしと人はしらじや入方寺村と云七ふしきの一つ也」「壁仇討黒百合の出所をしらせる歌に「越路なる千蛇が池に咲ときく百合はあやなき鳥羽玉の色かやうに拵らゆるは古歌の作例なき折の事也大體は古歌を其時候に合せてつかふ物としるべし

北の新地心中の話

當世榮花物語を著述するに浪華の遊所に心中情死の有しは北の新地に多く南の地は陽氣浮氣を喜ぶの地にして自然と薄情なるをならはせとするか心中情死甚少なし曾根崎心中と云は天満屋お初、平野屋手代徳兵衛天神の森にて對死す元祿十六未年也百四十九年に成今天神をお初天神と云へり此年より四年目寶永三戊

年曾根崎天満屋お島、長柄村百姓助右衛門忰市郎右

衛門天満屋の二階と長柄堤と所を隔同時に死せり二

枚書箋紙とて淨瑠璃に作る百四十六年に成同年梅田の心中と

云は老松町飭間津屋彌市、曾根崎萬屋のお高、明石屋

と云茶屋より忍び出梅田の墓所にて心中せり又寶永

七寅年北の神明の森にて備後町大文字屋利右衛門鍛治

賣の弟子平兵衛、北野鐵槌煎餅屋三郎兵衛の姪曾根崎

平野屋小勘和泉屋といふ茶やより忍び出て心中せり

百四十二年に成此後享保五子年には曾根崎紀の國屋小春、天

滿御前町紙屋治兵衛網島大長寺にて對死しけり百三十二年に成

十八年が間に五度の情死有しを思へば其頃は此里

繁昌せし事勿論也此五つの淨瑠璃の文中に今とは唱

の違ふも有場所の少しく替りしもあり思ひ出る儘に

一二をいはお初徳兵衛の上の卷に大坂三十三所觀

音巡りの文有此比始りし故淨瑠璃に書入節を附語る

物なれば弘まる事速なれば講中世話方より作者に頼

て書入もらふ也お初天神記と外題をかへ往昔曾根崎

村尊と増補有しより誰いふとなく天神の森をお初天

神と呼法華宗の寺號を呼ずして、いふ寺と世俗に云

寺も此東に有かゝるはかなき最後をとげたる者にも

神佛の名をかふむるも此者らの幸なるべし此天満屋

お初もお島も同じ店にて四年めに當り心中する事天

満屋下女のせりふにあり梅田心中道行に曾根崎茶や

の名盡し女郎の名盡し有は其比全盛の名高きを擧た

るなるべし此翌年心齋橋道具屋内娘お龜、養子與兵

衛と梅田の墓所にて心中せしゆへ卯月の紅葉の段切

に先だちうせし心中の戀の移の香をとめて梅田橋へ

との文有お高彌市の事を云也神明森の心中は六月朔

日の事ゆへ心中及は氷の朔日と外題して六月朔日を

正月納めの紋日と唱へ勝曼參を米達が駕に乗て參る

近世の十日戎正月初天神の如し又此日町々の子供色

色に好たる風をのぼす事有涼風に乘じていろゝの

ぼす風盡の文有は此比のはやり物か珍らし、此道行

は心中夜の朝顔とて心中盡の文句もいと珍らしけれ

ば爰に出す

心中盡道行の文句

前文世の中にたへて心中なかりせば二世のたのみも

なからましたれか仕初し此契りをとに聞しは生玉の

それが始のだい市之丞つれて男も名の高き大和の國

や三笠山笠や三勝舞の袖つまつまを引よせて結

ぶ無常のうすけぶり千日寺のはかなしや別れし跡の
寢姿はよなかの鐘に目を覺しかゝよ／＼と乳呑子の
歎を捨て修羅の道魂みたまは冥途に至れ其魄はくとなりたる今
の世のおつうは母の筐かごぞや此曾根崎にうづもれぬ大
阪三十三番に名を残したるふだらくや大慈大悲の誓
ひにて終にはとそつ天ま屋のお初も佛仲間かや道具
屋おかめ與兵衛とは思へば近き町續き世は何事もな
には橋よしとあしとの堺筋なかに立たるしづが身は
ふびんと思へ備後町それのみならずごふく屋の手代
半兵衛はかの池田屋の小菊にたんときん入なれば心
どんすなものでもないに身のしゆすごしに氣は縮緬
のみせの帳面皆ぬめりんす羅紗もないといはしやり
んずのはや人だまもとびぎやぬいて共に及のもの羽
二重のおなじ枕にふしつむぎかさね井筒の戀の水結
び汲手は多けれど色はさま／＼紺屋染胸は萌黄に紅
ひはださやけき色は是ぞこの木賊に染てさしもげに
心中心みがくゆかりかや略下此作者近松門左衛門にて其
比有し心中盡しをならべ書し也始に生玉心中市之丞
は解せず正徳五未年に生玉
心中有五年後也三勝半七、お初徳兵衛、お龜
與兵衛、小菊半兵衛、おふさ徳兵衛と連年たり心中天

の網島曾根崎川庄の段にてなまいだ坊主てんがう念
佛を唱へくる乞食有是は瓢簞ひょうたんも志道軒の如きの
者也歌舞妓狂言のべの書置には此坊主より思ひ附石
町の隱居本名傳界坊とて紙屋の内へちよんがれをい
ひくるに仕組たり此外題の論歿年の相違は傳奇作書
の初に出せば爰に略す右北の新地心中の内にもお初
徳兵衛小春紙治は誰々もよくしりてお島市郎右衛
門、お高彌市、小勘平兵衛の名さへしらぬはいと本
意なきものなりけり

新町に名高き世話物の話

廓中の太夫天神に往古より心中情死の沙汰すくなく
夕霧伊左衛門、椀久松山、吾妻與次兵衛等は心中に非
ずたゞ浮名の高きのみ也梅川忠兵衛は作書に述しご
とく送り込の女郎を連て駈落せしなれば心中とはい
ふべからず此餘阿波座吉原の安き場所には心中むり
殺しなどまゝ有べし中にも天職にて心中せしは槌屋
揚卷萬屋助六なり千日寺心中とて寶永六丑年の事也
是り二十享保二十卯年に萬屋助六二代衾と云淨瑠璃に
は七年後享保二十卯年に萬屋助六二代衾と云淨瑠璃に
は長柄堤にて心中するよしに作せり今専ら行るゝ大
文字屋の場のあるは明和五子年堀江此太夫座にてせ

し^{助六}紙子仕立兩面鑑也此二代衾の中の巻野土町の
假座敷にて揚卷田舎客に圍はれて爪彈に岩田帶の唱
歌を諷ふ段に「萬屋の助六は身より出せる錯浪人親
の意見のやれ紙子古編笠のしよげ姿思はず三味に浮
されてハ、ア彈たり諷ふたりおもしろいはこそぞの月
見は井筒屋で底意限なく夜とともに飲明したる大騒
ぎ^{略下}此せりふを今専ら歌舞妓阿波の鳴戸吉田屋の場
にて伊左衛門のせりふと混じて云も有何れを母屋何
れを出店としらざるもおかし

地者心中情死の話

瓦屋橋油屋娘お染子飼丁稚久松と對死せしは寶永八
卯年の事にて實錄といふ書は難波の蘆といふ寫本有
^{十卷}淨瑠璃^{におそめ}久松^年袂の白綾とて其年正月二十日より紀
海音の作にて出す^{百四十一}是此狂言のもとにて後に
新板歌祭文又染模様妹春門松等の増補あれども袂の
白綾を題とせし物也又寶永四亥年四月に前に云お龜
與兵衛の心中は梅田にてお龜は死し與兵衛は助かり
和州平郡谷の庵室へ入て助給法師と改名したれど七
々箇日に當つて自害し相果けり故に竹田出雲作にて
卯月の栳と外題して四月二十一日より始上の巻に大

阪二十二社詣を書入巫子町黒格子にてお龜聲與兵衛
の生口を寄る場中の卷心齋橋道具屋の段下の巻道行
より梅田の心中迄をして同六月朔日より後日狂言卯
月の潤色と唱へて巫子町再び口寄の場より平郡谷庵
室并に助給入道書置を終とす此前日巫子町の芝居噺
にお染半九郎心中に^{牛四郎四郎五郎}の事を云是鳥邊山の心
中也此道行に久太郎町より北濱迄の町盡し有是は竹
田出雲の作にて次に近松門左衛門の作に本町より道
頓堀迄の町盡しあれば淨瑠璃の前赤壁後赤壁とも稱
すべき文ゆへ爰にまづ前赤壁の文談を記すもの也

おかめ
與兵衛末期の道行の文

今捨る身にも恐ろし犬の聲辻を隔て、見歸ればあれ
で産れし町どころ家の馴染も十五年其春夏の此月は
祝ひ月とて物忌ひしの字をさへも嫌ひしが死て死骸
をける人に其死恥もつゝましくそなたのかもと亂れ
すやいや我よりもおの様の鬢撫附て搔なで、死だ跡
までよい殿と人にいはせまほし明り今宵の月を月々
に待しも終に引かへて冥途の使ひ我々を待らん物と
かきくれて涙曇りの十七夜ふたりが袖にやどしけり
よしや地獄へ落る共たとへ佛になるとてもかならず

契り米屋町本町筋の軒深く思ひしみたる中なれば埋

まばおなじ安土町生れ替りて又いつか娑婆の便りの

備後町思へば我も元服しわしも若いに鐵漿かた附て遁れ

し賽のかはら町三途の瀬戸の淡路町こゆれば親の古

里の名にもわかるゝ平野町明ぼの近き時太鼓どうど

う修町是や此修羅の太鼓のひきかと共に驚く袖と

袖いだぎよせつゝ泣ばかり聞けば私もかゝ様の三十

過ての初子とや其譲りかや馴染て一夜離れたことも

なくかはす枕に子種のないか是も産すの數ならば根

を堀る竹の伏見町高麗橋の西ひがし床も定めぬ立君

は是も世渡る習ひとて浮世小路の細き聲諷ふてかへ

る其歌の品ある中にもこぬ人をまつほの浦の夕風に

焼や藻鹽の身を焦すそれは吾妻の物語耳に聞たる計

りぞやそもじと我は難波津の貴賤群集の見るめかる

あまがさき町過書町にはや北濱や中の島翌は天満の

はしゝゝ賣て梅田のゝゝ堤を染し紅葉かさやのな女

夫の心中男二十一おかめは十五年にあはすりや徒ら

じやサア繪雙紙エよその口のはア、よそ事に買もと

めてなぐさみし此身の果を讀賣に誰がふし附て田舎

まで諷ひながさん蜷川下略前に云お高彌市梅田の心中

の翌年にて百四十五年となれり

地者心中續きの話

お千代半兵衛の心中は享保七寅年の事にて既に實説

は作書の初に出す百三十年に成谷町寺町大佛勸化所の門前

にて心中せしは丑年四月五日宵庚申の夜六日の朝の

事也寅年四月六日より豊竹座紀海音作にておちよ半兵衛

心中二腹帶を出す同四月二十二日より竹本座近松門左

衛門作にておちよ宵庚申を出す然れば同年同月に淨

瑠璃出て十六日違ひ竹豊兩座張合に出せし也二腹帶

にはお千代の年二十四と有て宵庚申には二十七と有

半兵衛の年は三十八也兩座の狂言上の卷の趣向は變

れ共八百屋道行は何れも實説に近かるべし二つ腹帶

に於猶彌兵衛が心中の嘶あり同時の事なるべし宵庚

申に筑後川中島の淨瑠璃より始めて山の張貫出來し事

をいへりそれ迄は簾に山の書割にて有し也同在所場

にて網島心中の床本有といふは小春紙治の心中は此

二年前なれば爰に出せし也かゝれば天の網島の享保

五子年十二月六日より始めて十月十四日十夜同向の

折から死したるが實也網島大長寺に小春治兵衛の書

置ありそれに享保七寅の十月十四日と記せしは寺記

の方過てりかゝる事は戯場の方に證とする事多しとしるべし寶永六丑年の秋本町二丁目菱屋四郎右衛門下女おきさ、子飼の手代治郎兵衛と今宮戎の森にて心中せしを翌七寅年春竹本座にて今宮心中と外題し近松作にて始る後に丸腰連理松とも外題替せしも此淨瑠璃にて一名掛鯛心中とも云けり上の巻西横堀へ涼船に別家由兵衛、本家菱屋の内儀、息子、隠居を饗應の船中にて其比のはやり役者を橋々に見立たる文談あり下女お象の親三田村太郎三郎娘を在所へ片附んと暇を取に來るをお象は兼て手代治郎兵衛と懇うしたれば是を嫌ふ別家由兵衛お象を女房にせんと望あれば隠居貞法尼へお象の縁談を任すとの證文を親太郎三郎より取る濱納家より手代治郎兵衛是を聞居て身をもかく中の巻菱屋の場にておきさ治郎兵衛此證文をとらん爲四郎右衛門の灸をすへる間に戸棚の鍵を盗み戸棚を明て手形を引やぶる所へ別家由兵衛來るゆへ治郎兵衛は戸棚の中へ逃込象は手早く戸をしめるを由兵衛とくと見届け鍵をひらふて錠をおろし治郎兵衛は袋の鼠こだてにおきさを口説ど象は泣入聞届ねば盜賊を戸棚の内へしめ込みしと大音に

罵る故家内出あふて詮議になるを主の情に穩便に計らふべしと戸棚は其儘象を親もとへ送らせ由兵衛も歸らせ跡にて貞法戸棚をあけ治郎兵衛に意見して象ばかり女でなし思ひ切て由兵衛にそはせば浪風立す納る道理任せ證文はとく引破つて仕もふたれば後にはそちらを夫婦にせんと思ひし事も水の泡と呵つおどしつ言聞せ治郎兵衛に得心させ念佛申て奥へ入跡に治郎兵衛うつとりと手形は隠居が破られしを今破つたは何なるぞとつき合せ見れば家質の證文なむ三つぐに繼れぬ命の瀬戸際お象は門へ忍び來て二人一所に心中と手に當つたる日野絹一反今宮の森の木に二人並んで首を釣り掛鯛とも連理の松とも噂の高き心中也年期野郎と下女の痴情をよく穿たる淨瑠璃也此道行は南船場の町盡しにて竹田出雲が北船場町盡しのよき對句なれば爰にしるす

お象治郎兵衛の道行

ひとつとやひとつ涙の瀧の糸落て三途の川となるふたつとや筆もあれかし我心書て後世にとめたる三つとや見たや聞きたや故里の親の生顔夢にだに夢さへ見せぬ死手の夢覺てはいつか此娑婆へ歸り今度の

數人は女夫連でと約束の盆正月の十六日を待樂し
し我々が哀れ地獄の釜の蓋あくを待べき罪人と呵責
の責はよもや其いとしそなたはいそなたのが
すまいぞや遁さじとすがり抱よせ泣く姿とがめてほ
ゆる犬のせめ此世に地獄見せけらし是を思へば親の
罰わしは親よりお主の報ひ育られたるお情や後生願
ひの親方の宵にや和讃夜半にや念佛はやまよなかの
月代の空を力に東堀すみゆく水に影移る我身のご
り恥かしや恥は暫しの浮世なり共戀をする身の手本
町とはふたりが心ひとつに米屋町共思ひ計りて後生
七生たすかるおれが殿御は日本おろかよ唐物町にも
稀な男のちよきりこきり小女房花の様なる和子をも
ふけて久太郎町とてやがて寺入久寶寺町其かね事も
いつしかに仇寢の夢のぼくろ町誠に私もこなさんも
跡には親の枯殘る老木の老の世は逆さまに順慶町も
空ごとや安堂寺町も子ゆへの闇に迷はせません不孝
のつみ何とのがれん淺ましと又引よせてなく涙袖に
さしくる鹽町や長からぬ世に長堀の樂な世界を心か
ら九の助橋や是や此瓦屋橋とや油屋の油しめ木の音
に聞お染に染し久松はいつの晴雨の一雫洗へと落ぬ

戀衣世に廣がりし仇し名をよそに諷ひしことのはや
其油屋のひとふしも師走油か身の上にかゝる涙とこ
ぼれそひ翌より同じ三味線に法の灯火油屋の回向を
なすこそ哀なれひとつ有さへおしき世に今宵限りと
堀づめや命二つを二つ井戸ふかい縁とて死たいも皆
罪消の大和橋あめ千日に立煙り無常の雲の五月雨降
らぬ先にと死場尋ねて

江南心中情死の話

島の内坂町難波新地は道頓堀の兩岸を圍み繁昌の土
地なれば自然と人氣浮氣にて心中情死は稀々にて所
謂むり殺しの方多かるべし今歌舞妓にて専ら出す古
手や八郎兵衛丹波屋お妻を殺すとは實は坂町の女郎
若野殺しにて舊襖重古手帷子と云鱸谷古手屋八郎兵
衛女房お妻を殺せし名を假て若野をお妻とせしもの
也若井風呂の人殺しは作書に出せば爰に略す多くは
此類にて心中情死とするは笠屋町額風呂の小三金屋
金五郎と對死

元祿十五年午にて赤穂
四十七士夜討同年也

淨瑠璃に浮名の額

歌舞妓に妹春掛行燈南詠戀抄書などとして種々に作れ

り笠屋三勝茜屋半七千日寺の心中は

元祿八
亥年也

作書の續

編に出れば略す万年町紺屋徳兵衛、六軒町しや町重井

筒おふさとの心中は大佛掛所にて也

寶永元年にて百四十八年となる

重井筒の場に火廻しの戯れ有いと古きより弄物とし

らる又此頃今の相生橋を始めて架せしと見へ道頓堀の

中橋と唱し也屋根傳ひに忍び出樽屋町へ下る樽屋町は今の酒邊町の古名也

と見へ歌舞妓にても徳兵衛羽織を落ししらずとは

いる是濡事師の現になり羽織さへ脱落すとの好なる

べし寛政中に中山文七鬢附屋の事也焦茶眞岡木綿丸に桐の

紋染たる羽織を落し這入る幕外にてそれを鬪にて見

物に當日に羽織一枚宛日數三十日計りの興行の内浪

華市中の羽織残らず桐の紋の茶の羽織になりし程は

やりし事有しとぞお房の入用銀四百目などゝ今時の

狂言とかはり質素なる事實説に近かるべし重井筒よ

り十六箇年後天の網島紙治の内にて小春が命は新銀

七百五十目今の治兵衛が四つ三貫目の才覺打みしや

いでもどこから出ると詞有然らば重井筒の四百目も

新銀にて一貫六百目の事を云か考べし始徳兵衛鎗屋

町舅の方へ行には一刀を差ゆかん筈なし重井筒の二

階にて早脇差を取出せしは治右衛門の刀にても取出

せしか此段すこし不分明ながら所謂狂言事か不知正

徳五末年五月五日の夜生玉の心中は九之助橋松屋町
角一つ屋五兵衛茶碗商賣の悴嘉平治下大和橋の出店より

伏見坂町柏屋のさかと云女郎を連出ての情死也同八

月朔日より生玉心中と題して近松の作也國性爺は此

冬近松の作にて百三十七年となれり文中に柏屋は坂

町南側と見へ裏通りは畑にて三勝半七心中より十四

年後也坂町を此比は伏見坂と唱へし也上の巻天満天

神社内小山屋にて北の新地芝居嵐座にて曾根崎心中

を歌舞妓にせしを見物に行たるを云曾根崎心中より十三年後也事有

此餘に大阪屋錢木三文字やおもと池田屋小菊福島屋お園な鶴屋禮三郎山下かめ松手代半兵衛大工六三郎

ど心中情死は次々の巻に出す好人是を見給ふべし

本陣宿鎗問違の話

文化十三年比東海道品川宿にて參勤交代の諸侯の

泊り一時なり鎗持宿を取違ひ爭論となりし噂高かり

文政元寅年江戸中村座に於て其比の大座狂言敵討達

者揃と外題して彦山の増補をせし事有此三幕目に箱

根山中宿の本陣の場へ此鎗の間違の場を書入奈河一

洗作にて奴佐五平に坂東三津五郎、渡邊勘解由に市

川友藏、絹川彌惣左衛門に中村芝翫中村武右衛門也再び江戸行の折にて

佐五平鎗を持て供にをくれ脇本陣渡邊勘解由の宿へ

持行郡の家臣絹川の鎭郡の分家渡邊へ持行也心附て詫れど歸さず主人絹川に

會ひ勘解由を始敵侍を皆々討取仕組也其節の役割毛

谷村六助絹川彌三左衛門二役芝翫、娘お園岩井半四

郎、絹川彌三郎市川團十郎當時の海老藏娘お菊に瀬川菊之

丞、京極内匠に松本幸四郎、吉岡一味齋袖斧右衛門

二役關三十郎、奴佐五平蠱傳五右衛門二役坂東三津

五郎、三十四箇年たち今存命なるは海老藏計り也達

者揃と賦せしも尤也其後芝翫海玉、一洗絶交して一泉

と文字をかへ浪華に歸つて平井權八吉原驪と云濱芝

居狂言の中へきりはめ奴定助と水尾十郎左衛門比良

正左衛門の名に仕かへ平井權八綱乗物を破つて本陣

宿を通れ出鈴が森へ行と續けり嵐徳三郎日徳境寛仕始て

より今誰々も權八と奴定助の二役をする事とはなり

けり是らは何の狂言にもさしこめるがゆへ一日の狂

言とははだくになりて續狂言には成兼る也近來赤

穂の義士銘々傳に潮田政之丞の父江州水口宿にて家

來八助が敵を討一話に専ら此事を作りもふけて講釋

に云へり是らは後々何れを舊何れを後に作りし話と

解がたかるべし

伊賀越古番附の寫

桑掛合羽の事は前々の編に述べれど安永六四年に初て歌舞妓に仕組し時より今嘉永四亥年迄七十有五年となる番附なれば摸寫して左にあらはす歌舞妓狂言も安永に一變して寛政の末迄を盛んとする宮古路の道行も珍らしければ綴ものゝ儘を寫し、

(番附板組の都合により)

次頁に出す………(編者)

しづ馬おそで道行會稽の初雪 宮古路大隅事常盤直

前途程遠馳思於雁山之暮雲後會期遙と此詩もしづまが身に大阪の地を尋わび又上がたへいく町かいつか晴さんちゝの仇俱に天をいたいかぬ身も天蓋をいたいて討んと思ひこも僧の姿になるや尺八の是ぞ生死の境獅子音色もさゆる初冬の空定めなき行末は行かふ人の跡やさきちらつく雪氣神無月同じ道筋一筋に主を思ひの孫八がそれと合圖の念佛に笛も高ねを吹そらし「なむあみだぶつなまいだく」なまいだぶなまいだ「なむあみ島を見渡せば櫻の宮居たうとくも又くる春に我身の花も再びさかせたび給へとおがむかた町坂ぐちもはや打すぎてゆくのべに吹木枯

安永六酉年二の替り道頓堀中の芝居に而極月二日より新狂言



座 本 嵐 七 三 郎

時に永正五年十二月上旬の事なりし武將足利義尚公の仰によつて女雛男雛の三々九度に跡を繼めの陶器と持こんだ紋日の血判約束

講切

伊賀

越

乗

掛

合

羽

全部

十五

冊

全部

十五

冊

全部

十五

冊

全部

十五

冊

新て其年も暮明に正月二日の早朝より管領細川政元の下知として仇と情の願人宿に未なかための羽觴と請込だ遊所の印可早速き

政右衛門子巳之助

こしもと小梅

同わかば

同山吹

同もみじ

同小ゆき

同いのが

同いこうへの

同いとしがゆみの

安立千兵衛

出づかひ盆三

そばや久兵衛

星合段五郎

ごふくや十兵衛

市山太次郎

あらし市まつ

あらし若さう

萩野千藏

あらしきく助

あらし辰藏

中山富三郎

萩野三代藏

あらし森藏

尾上喜十郎

坂東久五郎

坂東久五郎

姉川音藏

藤川金十郎

ぎをん町一徳

山岡藝藏

八ッ島義平

九佐美五右衛門

春日や甚九郎

仲居おはる

湊江善平

獨り角力鬼ヶ島

けいせい大はし

荒巻伴さく

川角源内

舟べんけい

桐山紋治

あらし三藏

あらし三藏

岩村かめ藏

中村瀧五郎

中村瀧五郎

中村瀧五郎

嵐五六八

江戸坂正藏

江戸坂正藏

嵐松次郎

桐山紋治

桐山紋治

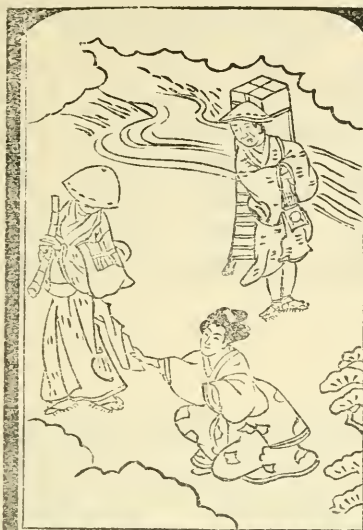
桐山紋治

桐山紋治

千 穂 萬 歳 樂 叶	太 夫 ヲ キ	道 行 三 絃	神田茂右衛門	藤川金十郎	上杉右内の助秋定	嵐三十郎
			竹の内せいたく	松本次郎三	大芝居舍利九郎	嵐三十郎
			でんぼうや妙貞	松本次郎三	池添孫八	嵐三十郎
			やよひひめ	市川吉太郎	股五郎女房お園	尾上上条助
			娘あんまおかな	市川吉太郎	けいせい小里	尾上上条助
			茂右衛門娘おそで	中村槌五郎	和田行家	嵐文五郎
			細川奥方濱まち	花桐豊松	石留武助	嵐文五郎
			政右衛門女房おたね	中村治郎三	丹右衛門女房笹尾	姉川大吉
			さくら田林左衛門	中村治郎三	股五郎母鳴見	淺尾爲十郎
			近藤のぼりの助	中村治郎三	澤井股五郎	淺尾爲十郎
はだか神子はやし	中村治郎三	唐木政右衛門	中山文七			
和田しづま	澤村宗十郎	石森鶏庵	嵐七三郎			
佐々木丹右衛門	中山來助	上杉春太郎定政	嵐七三郎			
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助
中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助	中 山 來 助

讀切講釋

伊賀越 乗掛合羽



座本 嵐七三郎

道 會

孫 嵐 三平郎
中村 樵 三
中村 宗 三

松

嵐 文 三

初 の

人 相 山 三

亭

男 松 本 三郎
嵐 七三郎



三平 西川 三平
太夫 宮古路 大隅 常盤
宮古路 太夫

大坂 西口 砂 末 嘉 板

も身にしてみてセリ「過にしことを思ひにしづまともに
しほるゝ隠し泣かくてはいかゝ孫八がめいる心をい
さめんととかく時節を松が鼻登り下りの船よばひ牧
方もはや日もちりくに詞「だんな衆くらはんかいゝいも
じる酒よもちよめしくらんかいゝいも
もし乗合の其中に尋る敵の有やせん手がゝりもやと
岸傳ひ堤づたひにそこ爰と尋ねさまよひ二世かけて
かはす誓紙の契してしばし別れも有そ海戀し床しは
日に千たび人のめたつも何の其思ひおそでは身に餘
り花の都を爰までは落くる水や流れの身心のよどみ
淀もすぎ忍ぶとすれど風俗は朱の玉垣かうくとあ
ふて咄の數限り願ふはいとし男山しんぞ八幡さま
くくに里の諸わけはつい聞しれど行道しらぬ玉ぼこ
のあゆみつかれてゆきなやむくにひごろ名高ふな
い五人組と聞へしは女子さへ見りや仕かけて見る惡
がねの文五郎を頭とし在所中をかきさがす熊手の五
茂九郎こもだれ作りのむさ男とんの平兵衛つゝいて
難炊伴右衛門跡は水かきいち右衛門とて男だてこそ
や惣嫁を買あるき五人が中のなぐさみに在所休みの
打つれてぞべらくと引ずりも皆一樣に尺八をさす
才覺もならずもの牧方通ひの戻り足人の恐れぬ格好

なり堤の原に立はだかりセリ「打つれ立てそらさぬ氣
野でも山でもぞめき歌「まゝにならねどほれたが因
果どふぞするをと二世かけてそうたんだのみんな戀中
をほんにほんばに日親さんいとしやそなたはなはれ
座敷の尻きれ草履で主がなといふ心サ、それはへ
あふていはふと思ふてゐれどとかく見ぬ顔ゆかしさ
にそうだん頼みんす戀中をほんに結ぶの神様いとしや
そなたは月の兔のあもつきでサア下から見ているば
かりじやへサ、ソレワへうたひつれだち行過るセリ
「どふじやくとつきつけくどき牧方へんの男だて
ひらたにいきつてじなつく内それと見つけて孫八が
うむをいはせず投のけく打附られてもひるまぬ我
武者とりつく熊手難炊がしめあげられてぐつく飯
できかゝつてあるいる事を邪魔する六部めゆるすな
と無用の腕立在所の士どもうつてきせるの雁首筋つ
かんでねちなげ六部のおひ投ふみのめされて辻走も
引ずりかたしたく片はしからなぐり立てぞ追ふて行
跡見送つてこかげより出るしづまが見合す顔セリ「逢
たかつたくと取絶り嬉しなつかし一時にわけも泣
より外ぞなきお袖で濡る袖袂かに侍のたねじやと

て逢たい見たいにかはらふかお前の爲の勤じや物何
のと思ふは一日かふた日行とそのまゝ屋敷出の新造
とやらいひふらしあそこのごしき爰の床夜晝わかぬ
戀しさは過こしかたの馴そめを思ひ出すのが樂しみ
で又苦しみは儘ならぬ勤する間にひよつとマア外の
女中が惚ふかと案じもむりか御家中で二人ともない
殿御より冥加にかなふた言號口から口へ約束のその
嬉しさを引かへて夜毎にかはる蒲團のうへお前の事
のみ案じられいつそお客のあひへん答うはの空だき
うつとりと相手にならぬ物思ひどこぞ悪いかコレ藥
やろかとうき世に鬼もなきあかし明方告るかごの鳥
空飛鳥の身と成て飛で行たい逢たいと見たいこいし
いゆかしいが積り積つて此やうにあふて爰からいな
れふか一所につれて給はれともつれ結んでうちとけ
て離れぬ岸の川柳みかさも増る涙川せつなる心くみ
取て道理くくと打しほれめにもる涙堤の原セリづた
ひに孫八が中をへだてのかねごともちやんと爰まで
お袖様しゆびよふ本望とげ給ひするはめでたふ御夫
婦といさめすかしてやがて又いとしかはいにめぐり
あふ辻占よしと夕日影いざと人めに笠深く袈裟打か

けて煩惱の慕ふ妻乞笛の音も追附敵を歌口とたづぬ
る足もいそがれてせめてこよひの一夜切セリ「ハテみ
れんなのふそれでもこゝでわかれてあすの夜は誰と
ふし見のふなばたへしたひゆくこそ」「びんなけれ此
伊賀越乗掛合羽は古今の大あたりせしかば筋がきと
ていたつてさい字に書たる綴物つぎに讀本淨瑠璃と
となへ院本出しを後に淨瑠璃に取立し也宮古路の道
行は右の書をはじめ正本にも書もらして珍らしけれ
ば其比宮古路世に行なはれしをしらせん爲に爰に寫
すものなり

西澤
文庫
脚色餘錄初編下の卷

目次

- 一 清水清玄演劇の話
- 一 天満宮古お附の寫
- 一 劇場評判得手勝手
- 一 劇場樂屋搜の序
- 一 先代萩古番附の寫
- 一 伽羅先代萩世界の追加
- 一 同膳部毒藥調合の齣
- 一 鹽澤丹三郎屋敷の齣
- 一 膳番煮役自毒害の齣

西澤脚色餘録初編下の巻

西澤綺語堂李叟著

清水清玄演劇の話

洛東音羽山清水寺の僧清玄墮落せしといふ事寺記及實説といふ書見當らず是は彼志賀寺の上人京極の御息所に懸想せしを今様に作りもふけし物か寛保元酉年に文耕堂の作せし新薄雪物語の清水の場へ清玄をさしこみ作れるものか歌舞妓に寶曆十二年年中の芝居にて始て清水清玄六道巡と外題して竹田治藏の作にて清玄に中村歌右衛門歌七大に當りを取しとぞ是より四年後明和二酉年淨瑠璃に取組姻袖鏡と呼て近松半二岩倉宗玄折琴姫に墮落すと作れり宗玄清玄仕組は替れど趣は同じされば清玄は加賀屋歌七に限るやうに思ひ京都にて清水清玄行力櫻とも外題しけり文化に坂東彦三郎清玄をせし時戀詣清水櫻と賦し市川團藏せし時は清水清玄契約櫻とよぶ故歌七十二

五回忌追善に三代目歌右衛門梅玉せし折は傾城釣鐘櫻天保に四代目歌右衛門此時は芝額成駒屋の事也のせし時はけいせい入相櫻と賦しけり總體清玄は清水場と庵室の場より外に狂言なく跡は執著の所作事となれば一日の趣向にたらずゆへにいつも抱合せの狂言は變るとしるべし

天満宮古番附の寫

委しくは作書の續編に記せど八百七十五年忌に榮種の御供出てより又七十五年に及び今年九百五十年忌に當れば左に出す也

(番附板組の都合により)

五十八頁に出す………(編者)

劇場評判得手勝手

醋吸の三聖は儒佛道の三を味へ比喻していへる物かそれはさしをき今世の中にスイといふ事有惟ふに人情世態によく通じて純粹せるものをいへるや又は當時の流行に速く移り萬に新古の境を辨へるをいへるや或は短儒長劔細結長鬚もつばら隱語をもて青樓劇場の玄を説話するものありされどスイのスイ臭きは野蠻の愚なるには不_レ如とかや爰に歌舞妓好事の三スイ

彼業三家の討論をなすを見るに粹は半面に微笑して
掌を瑤聖人の教を守り推は扇を手まさぐり總身を震
はし佛の方便をとき酔は黒く逞しき尻を人前に突出
し風に跨雲に鞭て天に昇らんと欲す其酸といひ甘と
いひ苦と云ふ據は異なれども好む所は三形一面の如
しまた劇場の清淡ならずや此事既に耳鳥齋が謝幕に
顯たり所謂素意不粹も此書を見て依量の論にききこ
となかれと卷の端に筆を採ものは浪華散人魯佛書安
永九庚子春と序せし一小冊今まで七十二年となる昔
も變らぬ最負^くの得手勝手おかしければ爰に出す」
芝居を好みて吾通也と思ふ者三人有一人を推といひ
今一人をば粹と呼び今一人を粹といふ春雨の徒然一
つ所にまどゐして酒盃をかたむけや、興に入て例の
好事に○推席を正して曰今役者あまたある内に獨梅
幸に及ぶ者有まじ其人柄位有て藝幽玄にして巨細な
り先大石が精忠月本が節義菅公が溫厚又女形になり
てとなせのうるはしき訥子薪水がかたをとり或は柏
菴路者が俤をうつすゆへ是古來上手名人をまね一つ
として堪能ならずと云事なしなか、他の及ぶべき
處と見へず名人と云べき△醉眉を張り高慢らしく

居直りて曰貴様はしりもせぬ昔咄老込かゝつた梅幸
をほむるは云人迄が古味に落る夫より眠獅が事まだ
女形の内から濡髪長五郎を由男と張合せ元服して伴
左衛門、山姥の公時、由良之助、非人、敵討、戀女房と
千本櫻は何でもござれに大役を出かし別して時平は
雲上なる主惡師直に執事の威權を見せ力彌に若冠の
勇を隠す其外石川五右衛門の強惡、朝比奈義秀が義
氣、土佐の又平律義など凡今の世にての一枚花形の
大立者外にいらひ人なしと云のじや梅幸も老功故折
節はよい事も有が近比はよりが戻つて小刀細工多し
薄雪の兵衛は腹切たをば隠すが趣向なるを見物へし
らせ顔に度々よろゝするゆへ相手の女房役がよつ
程のあほうでなければ、御腹めしたかとはいひに
くし菅原の松王千本櫻の梶原みな趣向が亂れて狂言
が戻るあこの鹽竈の由良之助あんまりあたらしくせ
ふとてか又うろたへた御家老未然の凶を心にふくみ
氣の澄ぬ位にて置たい物じや麒麟も老ぬればの譬へ
の通りかしらぬ○推肩腕をさぐり皺面を作りて曰ヤ
ヲレ貴殿過當の惡口さいふ眠獅が早野勘平鷹をすへ
たら大津へやりたいと云た又雷神上人や熊谷の次郎

安永六酉年四月二十七日より道頓堀角の芝居三の替新狂言



座 本 小 川 吉 太 郎

留別の御詠歌に
八百七十五年忌

天 満 宮

菜 種

御 供

筑紫飛梅の奇瑞

懷舊の御一首に

流れ行我はもくすとなりぬとも
君しがいなりてといめよ
世につれてなには入江も登るなり
道明らけき寺そこひしき

菅 秀 才
こしもときさらぎ
同 や よ ひ
同 さ つ き
同 み な せ
官 女 松 の 局
下 役 太 助
官 女 花 の 局
や つ こ 早 助
や つ こ 宅 内
百 性 太 郎 兵衛
藤 の 定 國

尾上丑之助
小川八藏
三 柵 若 松
あらし八重八
花 桐 淺 二 郎
澤 村 雛 鳥
三名川庄藏
あらし萬三郎
中 田 善 右 衛 門
花 桐 伊 三 郎
山 科 文 三 郎
山 下 東 九 郎

小 性 も と め
物かはさいしやう
わかとう良助
百 性 頓 兵 衛
舍 人 た く ら 丸
藤 は ら す く ね
笠 見 く ら ん ど
辨 の さいしやう
こしもと青柳
つるしや又右衛門
唐 使 天 蘭 慶
伴 の 仲 友

中 村 萬 藏
あらし十五郎
あらし十五郎
三 柵 傳 藏
三 柵 傳 藏
芳 川 乙 五 郎
芳 川 乙 五 郎
豊 松 半 三 郎
豊 松 半 三 郎
藤 川 十 郎 兵 衛
藤 川 十 郎 兵 衛
中 村 友 十 郎

千穂萬歳樂叶	浄瑠璃	浄瑠璃	浄瑠璃	味線	鶴澤清藏	狂言作者	並木吾八	ねぶかの九助	そねむらみどり	官女柳の局	こしもとあやめ	ざい所娘お口せ	みよし清つら	白太夫悴荒藤太	こしもとかつの	左中辨まれよ	松月尼	こしもといざよひ	源藏女房戸浪	土師の兵衛	白太夫	法性太夫	紀ノ長谷雄
	豊竹初太夫	豊竹初太夫	豊竹初太夫	竹本今太夫	鶴澤清藏	狂言作者	並木吾八	山下東九郎	三枅松之丞	あらし雛二郎	あらし雛二郎	小川千菊	三枅他	三枅他	あらし雛治	坂東岩五郎	澤村國太郎	澤村國太郎	澤村國太郎	三枅大五郎	三枅大五郎	三枅大五郎	三枅大五郎
頭取	同	同	同	同	同	狂言作者	狂言作者	安樂寺住持	齋世親王	御臺久かた御前	らんの中將	春藤玄蕃	白太夫娘小いそ	紅梅ひめ	直禰女房小櫻	長谷雄女房渚	判官代てる國	伯母御覺じゆ	左大臣時平	武部源藏	菅丞相	直禰太	舍人造酒王丸
	長谷村新七	青木善二	小川新藏	辰岡萬作	辰岡萬作	狂言作者	狂言作者	中村友十郎	澤村千鳥	中村玉柏	三枅松五郎	三枅松五郎	山科甚吉	山科甚吉	三枅德治郎	三枅德治郎	藤川柳藏	あらし雛助	あらし雛助	尾上菊五郎	尾上菊五郎	小川吉太郎	小川吉太郎
中山百次郎																							

はよかつたが安藝の宮島では大はたき積物に菟蓐と豆腐と境重に入てやつたと聞た其様な恥が梅幸にはない宮島ござれ京大阪江戸は勿論一方の座頭今成上りの眠獅とは勿體ない何でもござれといやつても今年の二替り慶子の夫良助にて娘の心血をとる様な地事にかゝるとはや藝が碎ける△ムウ地に成と碎けるとどふじや○マアいふて見やふなれば清兵衛や由男がこれ迄かやふな役廻りを勤めたをくらべて見やれ又梅幸などは端藝の米屋の同行又仁木の役にて花道の真中にすわつて鹽谷に言葉を懸又諸大名を制する事何でもない所にきつう味が有さこんな處を地と云わいのもそつと地を修行してから梅幸と並べて見やれ今では位が違ふてゐるわいのふ△位は違ふて有かしらぬが梅先生も大阪勤のうち何をおあてなされたの天神の由良之助のと箱の掃除を召れても格別の事もなかつた眠獅が佐助、千本櫻、又あこの鹽竈の時でも大入の衆中に眠獅が病氣で退たあとの入が落たが證據すもふは勝が強い役者は入をとるが上手かと思はれるわいのと兩人我を忘れて互に角目立てあらそへば口粹片頬に笑窪をなしやに下りに煙管をくわ

へ願を突出し貴様達は役にもたぬ事ども計り假令あたりに聞人がなければこそア、たしなめやれ／＼此方の由男と申は其骨柄肥大清白にして調子並ぶ者なく第一古人の糟を嘗す一家一流の達人先熊谷が武勇、利休が風雅、團七の男作、濡髪が立引、雷電の俠氣、蘭平の洒落、太郎七が愚昧、横山太郎が賈阿房、後藤が醉狂、唐木が劍術、鐵之助の豪壯、淺利が恩愛、逸平が孝心、愁ひになつては見物の鼻紙をたふし立に成ては影の拍子も消る計り酉の年冬京の顔見世より二の替り伊賀越、仙代萩扱は雷電、絹川、與右衛門など近年の大當り座中の出來も座頭がよいから全く由男一人の手柄別て船頭小平次弟に意見の處當夏の雷電源八にて八十島とのせりふなどはいかなる山家の親仁も又棧敷の見功者の惡口いひもおし黙つて感心する第一小手利で愛が有てア、一日や二日では褒盡されぬいかに御兩所無益の量負なされふより大丈夫いらひ人なし何でもござれの御本家と云宇治屋の由男様に珠數を切りやな舌を巻き頭へ引きイヤモ頓と大船に乗つたと思はんせと聲色交で肩から首をひねりて笑ふ○△兩人せいて膝つめ寄コン中山のよい事盡しなら

まだ残つた云て聞そふ○夫大阪で盛衰記の梶原源太が大盡姿は槌もたぬ大黒様藤彌太が屏風のたてはかしらが奴、からだは團七、顔が公時、なく聲がア、何とやら信仰記の三段目は閻魔王が親類の葬禮に出た様な物じやわいの口粹腕まくりしてコレさう云やりや梅幸が常悦は供つれぬ外科醫者定之進が淨瑠璃の三重に合す處は張抜の虎がしやくりするごとくお三輪が振袖は英子に竹の鞭が持せたかつたわいのふ○コレ由男はの兎角衣裳好み顔の作りが下手じや家老に成ても髪附がやつぱり雁金文七じやまだ有小竹榮五郎が酒に酔たを見れば由男の由良之助其儘じやといふたぞやおらが眠獅はそれ／＼に姿のかはるを見ておきやれ口由男が仕うちは爪先から髭の先まで皆我物とするのじや眠獅がのは寄もの也實惡は三升のはへぬき平敵は逸風全體は由男をとる事違なし近比力彌の仕打が生得の持前也かやうに舞臺が煩はしい既に濡髪にもお關が弟に意見の場由男が仕打と比べてみやれ煙管をさいたり肩を入たり俵を脇へよせたり見へ計りで心の信伏が甲斐ない由男が仕たはいつともなしにしよげ／＼とみすばらしく誠に心に聞て

恥入たのじや有た仕打を替てせふと思ふのかしらぬが夫は心得違ひむかし淺間が嶽の狂言に巨燧に縋の羽織をかけて碁を打つ仕打を其後の役者が縋でない羽織に仕かへたと笑ふた眠獅も忠信の仕打あたらしくて人が取たによつてか近比の濡髪の仕打に心の置所が違ふてあし、女形で勤た時は夫でもよいがもはや立者仲間へ入ては是では濟ぬ時代はみへをおもにし世話事は仕打を以てすると古人の格言何でもござれといやつても太刀打立入が手に入ぬもちつと刀の拔様を修行めされと云ておやり惡右衛門の時の長大小も惡ちやりめかしてひつけうは太刀打が出来ぬからであらふ○時代事が見へならば御ひいきの由男が酉のとしの顔見世頼政の死靈附又太郎の出端衣裳が古うて見苦しい其上能の自慢か今歳の二の替りにも海士の玉取の段を出されたが亂舞仲間のさたを聞ばてきに似合ぬ事が有といはれた口能役者は能の事を知て居よふ狂言の立入の鹽梅は何ぞしらふ既に能役者同士にても互ひにそしり合じやないか狂言と解つて有事を實に落して笑ふなら雛助が力彌自己の outcomes それに元服の剃刀が當つて拜領の御紋に血が附た

是未然の凶じやと云狂言第一の趣向じやが是も惡口
云て見よふなら力彌はいまだ部屋住御目見へをせぬ
故御位牌を出して斷申て歎討の列に入るは尤じやが
此拜領は由良之助が拜領と見へるが元服に著せるな
らば前髪を取て上下に著かゆる時きせたい物髪月代
する時に著せたのは愈忽なる仕打とやいはん又此ま
へ梅幸が自慢の三曲はよかつたが眠獅も女形から出
てめきくと出世膽のゑらいに取ては蜀の姜維も樽
肴持て弟子入をする位じや今人の褒るに乘らず人の
眞似をせぬ様に眠獅が風といふ様に一家を立てせね
ば本立者上手とはいはれぬマア白大で見合たい物そ
れに何じや矢をくはへたり衰へかゝつた梅幸をやは
り半極でほめて居るは京大阪の評判司にからすがた
んと積物にやりたい又當時あたりの見へて有由男を
久々眞の字で見合せ漸白極に戻すなどはかの毛延壽
に惡まれておた福に盡れた格で有まいか後家の質屋
へ持て行ても極上々吉は慥な由男じやサアすつとも
いふて見やれ○△イヤいふて見せうと眞黒に成てせ
り合ふ所に寢鳥の笛耳をすまし練絹の白雲さつと上
れば忽然として一人の異人かしらに蜀錦の手打頭巾

を冠り身には蝦夷紛ひの衣をまとひ手には梵天の塵
を引さげ張貫の赤馬に紙くら置て打跨り影の拍子に
あはせて眞中にわつて入り東西く汝等三人いふ事
が皆すかん人の非をいはんとて我非をあらはす畫蛇
添足是俗にいふ手みそのすこたへ己と號る三字の解
推は推量の義理にして尻馬座なりの輕薄より起る醉
はゑゝると訓じて當分の一興目うつりの好言粹はし
らげるとよみて不進不止かたならず片よらず今日の
眞法ながら得とは自己慢の道に迷ふてすくと川へ
はまるなりそれ上手名人の境は聖賢の如く金銀の如
しよきと思へばあしきに譏る名人はよく此所を打こ
して譬へば飯のいつ喰ふても飽ぬごとく無味の所に
高上の味ひ有を聖人ともがね共則名人の境界なら
ん昔の坂田氏は夕霧の狂言一年の内に四度まで出し
三右衛門は六法にて毎度のあたりを取ついに久しい
物じやといはれた事を傳へず最前より無益のあらそ
ひあたらず酒もさめたで有ふ我汝達に一物を與へん早
く歌舞妓世界の上棧敷に太平樂をかなづべしといふ
かと思へば樂屋のどろく姿は見へず消失けり各頭
上に汗をなしあたりを見れば一つの箱こはふしぎと

蓋をとれば娘道成寺の錦書有○△□ハツといふて見たが小聲になり一人云合點がいたか成程昔は／＼何ば名人でも今時同じ事を二度三度出したらのふ于時安永九年子春得手勝手終

劇場樂屋搜の序

抑此雙紙は劇場一遍の事を擧るといへ共いさゝかも劇子の佳批を評せずかの八文舎が家に傳る雙紙に類せざる所也雷狂言綺語の説をいふのみ古しといへば陳し新とおもへばあたらし予其新古はしらす今の世の歌舞妓は作者が下手歟役者が大根か狂言をせぬが上手歟人の譽る物を議るが粹歟人のおもしろがらぬ事を褒美するが通かどきまどきまどき紛らはしの浮世や扮顔見世は霜月の物二の替りは二月の物と思ひしも四季混雜してわきがたし葺屋町堺町中の芝居角の芝居或は北側南側と競ひ合しも今は難波も都も其大劇場を定めず何處やらから二軒目の芝居に漂々泊々となれるこそ遺恨なれ夫天地者萬物之逆路光陰者百代之過客浮生如夢といへりしも今の芝居の有様ならんと考へ妓の虚歎より大なる聲をあげて平仲文がうそに倣ひ顔を墨だらけにして筆を投ずる者は十五

の涎線が三世の孫丁松居士也天明ひのへむまの年と序せり是天明元年にて今迄七十一年となる昔の洒落の小冊を爰に記すもの也四海納りて劇場盛ん也櫓太鼓の音喧しく木戸口喚々として見物競ひ入五歩に札取十歩に帳附有て横の口または見附の幕に座元名代の紋所日に映じ最負役者に進上の文字斜也東西の棧敷に毛氈の紅を見すれば茶屋の女前垂をひらめかして共に色を爭ひ棧敷よりは下を見下して男女の美醜衣裳のよしあしを評すれば平場は足を延すの地を爭ふて己が場のよしあしを論ず扮樂屋の鉦太鼓鳴をしづめ三味線の撥音はのかに空拍子木を相圖とし幕の眞中上させ口上いひまかり出東西／＼今日は大勢様早朝より御出下されまして座中名代は申に及ばず總芝居の面目大慶至極有難ふ存まする扮外題其外役者の替名だん／＼よみ上御神妙に御一覽の程もおけやい／＼の聲とともに拍子木チヨン／＼と打やいな幕引明ると樂屋は譯もなき責鼓が久しく御殿作り總襖黒幕などの見つけ物淋しく扮立役の鈍は去たく敵役のしつこみはしたゝるく女形の嫌味は置てほしいもの也作者の古み役者の癖を評すればどきまどきと紛ら

はし奴にて扇を手まさぐる癖あれば上下著て尻から
げするやうな仕打をする骨おしみなる仕打を玄に用
られ當世の流行詞をあしらふて素人の笑を心掛る皆
己が癖より出て古みに落る者ならん歟まづ實役に附
る役いろ／＼あるが中に武道の權柄過ざるやつしの
さつぱりとしたは見よき物或は飴賣上爛屋などの姿
にて花道の中ほどにて主人の成行勘當の身の上の獨
言歸參の種は寶物の詮議が大かた御定り主人が手詰
の場へ來合せトツテンカタリに投て仕舞何にも御氣
遣ひ被成ますなといふは古い事ながら見物まで嬉し
い物也扱邪魔になる敵役を當目の働き扱々當目も古
い天井あてめ覺へぬ立役もなければ當目をうけぬ敵
役もなし扱主人相方の頭被とかくまひ置仕打とかく
屋舖などの場の下屋ほしむ物なれど人をかくまふ
内には二階と下屋がなげねばすまぬいつでもメリヤ
スに場をくろめ表の潜戸ひそかにしめ奥に心を配り
などして嘸御氣詰りにござりませうとたつた一疊の
疊を上るとよい著物きた人が下屋から出て段々の世
話忝いと禮いふも久しいものめんよう世話事の立役
借錢してせがまれ四百四病の病などゝ兩手を組でと

つおいつの思案女房を勤奉公に出す仕打それとはい
はで謎々が暇乞愁ひ過たは見にくけれど大方しつぽ
りと有たき物其借錢に來るはいつでも惡男終に借錢
乞に實役はこぬかと思ふ也其借錢おこさずば娘を連
れていのふなどゝ言さま天窓の一つも叩かれながら
やう／＼夜半の鐘を相圖の約束催促の刻限にあまり
取に來た事なくたま／＼出て來る夜半の比いつでも
月夜ばかりかして挑灯持て出る事なし御主人の色遣
ひに質屋に有る寶物を請出したがる立役に金の有た
事なく立役に金のなきのが作お定り又義理に詰り切
腹する男刀突込んで本心を明すなど今まで他人かと
思ふ者を娘久しかつたエエ、扱はちいさいとき別れ
た爺様でござんしたかと悔りせぬさきから見物がよ
ふ知つてゐる程古い事扱御上使のお入りを横の口か
らふれた事なくいつでも花道にてにらみ詰上使の役
目なれば罷り通るとのつし／＼長上下供連た事あ
まり見ぬ也總體一場の内衣裳著かへるも有事なれど
上使などの著かへて出るは又詰らぬ事奥の一間に休
息の内と見ゆるが著かへすとも随分よさそふな事序
の幕にて主人を殺し寶物を奪ひ立のく曲者に出合ふ

てのドンチャンいつでも取逆して跡でじんだ證據の手紙手がゝりの小柄も古くそれを懷中して敵の詮議しつくり出合ふたは四段目の切愛に貧家の住居に似合ぬ奥が幾間も有やらしてはるゝ來たお侍も現在主人の敵も女房の這入所も皆奥の一間へとの口上奥が一間なら中で突合そふなものの氣の附ぬ事かやこれらは合點のいかぬ事じやといふ片脇から顔の赤いりくんだ男見かけから敵役が好じやといひそふなかつぽく進み出て成程――立役の古みあれば又敵役に附る久しみ有すべて敵役はどうきものはあらじ出ては投られ終ひは殺され戀の叶ふた事もなくふられ通しのあほらしみ姿の荒くれなる心の愚鈍いふも更もあるは顔に丹のうきをいとはず立敵のつよみにかたくな親父の受をとりちやり惡はたまゝ娘子供的笑をとるまづ藝の仕打敵役の癖として大金持の大欲男それに似合ぬよくも實役に金を借た事あまり利合のさたも聞ぬ也されば其金を理不盡の催促その家にかくまひある者を注進褒美の金をしてやるべしとの工み事注進した者當座の褒美として包金をもらふたはたまゝ見たれど本眞の褒美として出した事は見す扱注

進せられてのつびきならず大かた身替は一人娘本人を傍に置ながら身替りせし娘の事言出しての愁歎いかにお主の爲なればなどいはいはれては主にもせよ誰にもせよ聞て居てそのせつなさたまつた物では有まい爰に偏屈なる人の噂にお姫さまなど色事仕のうつかりに寶物は紛失し親は切腹其身はあほう拂のうつけやつしと同じやうに世話する實役は惡のやうでそれを見附て兎や角いふ赤顔の敵役は結句實のやうに思ふたといはれしも理屈也又假初にも刀に手をかけ理屈詰にギツクリ耳に口かう――合點か杯も見古したりされ共敵役の猿智恵大殿を殺し寶をうばひ又一つ國天下を丸呑がお定り時代の仕打いろゝ作し有また榮耀が仕たいといふ惡もあり番頭は大かたちやり惡お定りの娘にさいゝの戀狀手代の色事をしにくじらす工夫此金は拙者がちやくぶく息子ほり出すお娘はせしめる甘いはゝといふ下からサアそれは――で投られて仕舞も久しい物或は幻術遣ふ謀叛人指で蜘蛛の巣かくやうな事するとドロ――にて姿を顯はしたり消へたりも今時は見古したり始の工みは手番ひよく戀と欲との掴み取工みに工んだ事ども

水の泡五段目のドンチャンが生死のさかひ實は取かへされ憎しと思ふ若殿は歸參めつたやたらにめでたいくがおいとま乞拵敵役のほしがる物は三種の神器、名劔、色紙、一卷等なりこれらをほしがらぬは敵役では有まいとかく敵役に寶物はさし合成べしといふ傍からまた一人顔を出して芝居の評をなしていふにはいづれ見出せば替らぬ穴の狐とや爰に女形ほど色よく仕うちも別なものはあるまじやうく子役を出かしそろく振袖の娘役こしもなどの役なしから道行を間に合しうれひにかゝり所作事に手柄をなすまでは上りにくいもの作の古みにより己が癖などあが先娘女房傾城いろくかはれども大かたはお定りの色事はれて見せるはいつでもこつちからとかく娘などは恥かしそふなが見よき物傾城に成ての古み有まづ舞臺に居る揚詰の大盡いつでも大盃を引うけたるしかみづら寒い時分の扇遣ひに其身を高ぶり此太夫は身が手に入れる身受の金はこよひ限りときも得心せぬ事をいらちかけるあほらしみも古く無細工な仲居又あほらしき亭主が大聲ソレ太夫さんが見へるはくといふと花道から出て中程にて勤のま

ゝならぬ事をぼやきちらし舞臺へかゝれば己がすかぬ男が客ふしやうぶしやう側へ來ても顔そむけて物いはずわしが帶解く男は廣い世界に一人よりないなどいふがお定り其打こんでゐる男はいはずともしれた勘當者也揚屋の大盡を振て仕舞へばつかれ仕舞に奥で呑直そと二上りの影歌花やかに弾くなど芝居の揚屋場になき事なし殊に思ひ詰た戀でこの馬の骨やらしれぬものに命を捨るやうな作もあまりとんだ事それを貞女と愁歎の場今時心中する徒ら女なるべしツイ一目見た男にちやんと云かはして有やうな外の男はもたぬなどいひいつそ殺してなどと思ふ男に命をつき附るお定りの不孝娘其道行して死だをやれかわいやとほむる仕打のたわけ親芝居なればこそおもしろいわのイヤふびんななど見物が鼻紙をしぼるは是見物の戲氣とやいふべし又は折々古歌を言出しての謎古歌をもて貞心をあかす仕打今の作者は何と心得てゐるやらいかに生としいけるもの、歌をよまぬはなきとて奴のちよち内まで手詰には歌はいひ出すなどはちと工夫有たきもの又女形は隋分弱そふに見ゆるもの、或は娘家老の女房などにて不相

應なる大切ドンチャンにきついつよみ大勢を相手に
 はたらきだてはあまり出来過た事まづ古い物の棚さ
 がしには道行の跡は夢死人の行衛は毛氈にとゞまり
 寶物のかくし所大かた手水鉢松の枝の曲者手裏劍で
 落るが幕切空井戸から出た忍びの者頭巾ぬいだ事な
 く捕手はいつても黒い著物に鉢巻申上ますは舞臺の
 際川口の潜戸も仕廻口には片附てしまひ首切たあと
 の死骸見せた事なく揚屋の大盡あたまに手拭太夫は
 いつても身受の買論二階の梯子はたつた三段駕昇の
 かけ聲息枝なしのすつたゝ是らは古い上の古みな
 ればまづ初卷の始り猶子役、影歌、木戸口、總芝居
 作の古みは後の卷に評じませふといふかと思へば夢
 さめて棧敷の夕日影さつても日の永い事といふ間に
 果太鼓の音はとうからゝ續編
 詞出

伽羅先代萩世界の追加

傳奇作書殘編中の卷に先代萩の舊狂言の事くはしく
 演たり此番附もまた七十五年となれば爰に出す梶原
 景時酒井秩父重忠板倉常陸海尊原田伊達秋衡安藝泉親衛片倉乳母
 政岡浅松枝的之助前松と名を假たるがゆへ奥州秀衡遺
 跡爭論と角外題に賦したるもの也それより以來増補

の外題世界の分ち類聚狂言に地名と世界の齟齬せし
 事は皆殘編に述べたれば爰に略す近來中の芝居にて此
 世界をよせ伊達姿萩燕都裾第三幕目御殿飯焚の場の
 裏鹽澤丹三郎の場を脚色し事有かの伊賀越の旗本騷
 動の折柄典藥半井通仙の醫論を書入などして始めし
 が評よかりし其節の正本を爰に出す其場の役人附に
 (此繪原本の約四分の一縮圖也)



安永六酉年四月十日より道頓堀中の芝居三の替り新狂言



座 本 嵐 七 三 郎

鏡石の評定に聲は陪臣男に大名取かといはれは角力の手合引よせた睦言に戀の重荷は高尾の身請

奥州秀衛
遺跡爭論

伽

羅

先

代

萩

五だんつゝき

高館の陣取に兄は家老妹は乳母忠か不忠か鼠の曲者引かためた言號に命の的矢は愛宕の勸請

源のつるきよ

政岡子千松

こしもとかめ澤

けいせいあづまぢ

かぶろさつき

同力

同ふじ

同るに

同やりておため

婢おは

けいせい長門

雀の忠

梶田兵衛

園田傳兵衛

きくや新助

市山太次郎

坂東名嘉吉

あらし辰藏

萩野三代藏

あらしきく助

萩野千藏

あらし市松

中山藤三郎

嵐五五八

嵐五六八

嵐五五八

中村瀧五郎

中村瀧五郎

嵐三三藏

嵐三三藏

こしもとしみづ

江間の小太郎

谷澤庄九郎

枅元加右衛門

嶋むら源太夫

ましだ九兵衛

鹽澤丹藏

青貝ゆき

渡會銀兵衛

和田新左衛門

和所山矢右衛門

餘浪梶之助

荒浪武右衛門

志賀女房小まき

うきよ渡平

あらし若藏

おのへ喜十郎

おのへ喜十郎

岩井かめ十郎

あね川乙藏

あね川乙藏

藤川金十郎

藤川金十郎

江戶坂正藏

江戶坂正藏

江戶坂正藏

松本次郎三

松本次郎三

松本次郎三

桐山紋治

[illegible]

曰、一仁本彈正妹八沙與、一大場道益鬼、一今川女之

助助羅、一渡會銀兵衛車、一園田吉兵衛馬、一松本太左衛

門友、一召使於陸路之、一母宮城文、一鹽澤丹三郎海老、藏

此外諸士四人姓名略之

同膳部毒藥調合の齣

造物平舞臺向ふ一面の金襴上手杉戸橋懸り切幕の所

同じく杉戸口立開有よき所に見事なる花籠に菊の花

澤山に生けあり近習四人各上下並び居る序の舞にて

幕ひらく平十何れも今日は重陽の御祝儀を申述んが爲

相詰る我々短日とは申せ共箇様に致しをれば餘程積

鬱にゐるての藏勇左様でゐる足利の御世繼鶴喜代様の

御座なさるゝ當松が岡のお館御前勤めは女中衆ばかり

我々は此お錠口に時代りの勤番太小若君様には御

病氣によつてお諫めの爲の打囃子屋敷と申せば物堅

い様なが女中の御殿はどこやらが物やわらかにゐる

半助左様でゐる時に辰の刻よりは今川女之助殿の御勤

番もはや詰られそふな物でゐるがどふか引入る様に

ねむくなりしましたト捨せりふ有て四人ふらゝと眠るこなし

ちこちして勇藏小彌太のひざもとへ来る兩人めさ十平御雨所何

事でゐる悔り致した藏勇イヤ鼠めでゐる朝の間からう

そくゝと出ましてなりませぬて太小彌かう寂寥と静に

ゐるから侮つて出まするか存せぬ平拙者はどふ致し

た事かねむたくてゝなりませぬ助平いかに未明より

相詰るのとてかよふにねむたいと申はいかな事ひい

小彌太も是を見て藏勇是はいかな事御番を致しながら

眠るとはどふ致した事じや太小彌さやうゝちとおた

しなみ被成いと申拙者もア、ねむたく成つたいひ乍

共にねむり出すと又鼠出てあちこちとする序の舞やんで懐き相方に

成り此時五つの時計チン／＼と鳴る向ふより今川女之助著附上下に

て刀を提出て来る鼠四人を何ふより女之助花道よりは見附きつと

立どまるでしどろ／＼にて鼠上手杉戸口へ行女之助きつと成てツ

カ／＼と本舞臺へ来て是を拂ふ鼠四女之助殿只今御出仕で

過て消失る四人ふとめさまして

ゐるか助女之何れも只今鳴りしは辰の上刻お錠口迄

参りし所御殿をめぐる數多の鼠ハテ怪しい人扱は

又候鼠めがト四人一時に氣色す女イヤ／＼詰所を出し

ぬきいかなる變のあらんもしれず箇様なる時節には

猶更銘々役目が大せつまづお下にゐり升ふトより所へ

も下今日ト下は重陽の佳儀お家長久御武運を祈願の爲

鶴が岡へ参詣いたし思はざる出仕延引何れもには未
明よりのお役目御苦勞に存ます十平是は御挨拶でゐる
只今の様に怪しき儀を見升るに附升ても當館の殿頼
兼公吉原に於てお身持御放埒何かとよからぬ下々の

取ざた各にもお聞被成たでムらふ勇藏承つた段か彼吉
原よりかへるさ日本堤にて狼藉者にお出合被成口論
に及びしとやら是もつてお身柄に似合ぬ御大膽かと
存られ升る太殊に三浦屋の高尾とやら申領城を身
受有て心に隨がはぬゆへ三つ股川にて提切に被成し
故此程は袖が浦の御下館へ押こめ隠居同前のお身
半助後見たる伯父君鬼貫様仁木彈正殿など御諫言に御
如才も有まいがお國にムる外記左衛門殿民部殿など
如何成さるゝ御所存かア、心もとなふ存じられ升る
女イヤゝ何れも浮世の難談は格別下としてお上の
取沙汰譬へ有事にもせよ左様な惡説は仰せられぬが
よくムる四御意ではムれどお家の安危を存るから女
さればさ頼兼公の惡説はお國家老の思し召しも有各
を始拙者などは當松が岡のお館に有て幼君の守護の
役目さすれば鶴喜代様を大切に致すより外はムらぬ
すでに以て幼君のお傍附たる荒獅子男之助殿伯父君
鬼貫公の御機嫌をそんじ此程よりお目通を遠ざけら
れし程の事兎角善惡に限らずお上の非法は申さぬに
しくはムらぬ十平次殿半助殿は御若年とも申そふが
勇藏殿小彌太殿はおとし柄にもお似合被成ぬちと御

多辯かと存じ升る勇何さま御尤の御意イヤ以後は相
心得るでムらふ太辰の刻も過たとあれば我々は
次へ十御用あらば何時でもお呼び下されい半女之助
殿後刻御意得るでムらふ女何れも御苦勞にムるの舞
懸キツパリと成り四人橋懸リへ這入る跡を見て女只今の如く近習の銘々でさへ上
の取ざた頼兼公には袖が浦のお下館へ押こめ同前お
世繼の鶴喜代君御果報いみじきとは申し乍ら下々と
違ひお身持が御大切なればお食事とてもうかつには
めし上られず苦がなくばあたふとはハテよく云つ
た譬へじやなアリ侍一人走り出て花道にて侍ハツ申上り
仁木様の御妹御八汐様大場道益殿を御同道にて只今
お入でムり升る女扱は重陽の御祝儀を申されにか是
へお通し申しやれ侍畏つてムり升るト向ふへ引かへし
と三味せん入の下りばに成り向ふより八汐殿女中の拵に迎ふ
り大場道益奥と上手女是は彈正殿の御妹御八汐殿には重
陽の佳儀お目出たふ存升る今川女之助殿にはお出
迎ひ御太儀今日は重陽の御祝儀を申述ん爲罷り上り
升たが鶴喜代君には御所勞と有て男たいした者はお
傍までよせ升給はぬとの事いよゝゝ其通りでムり升
かな女いかにもお傍のお伽には乳人政岡殿を始女中

達のみにてお錠口より外へとはお出ましも是なく
男子たる者は一人もお寄附はムり升ぬ八此度頼兼公
の御跡目は鶴喜代君をもつて相續の願ひ叶ひ則伯父
君たる大江の鬼貫公に後見と相定まる所幼君に御
所勞と有て御對面を遊ばさぬはハテ何共はや道御容
體を伺ひの爲鬼貫公よりかく申大場道益を遣はされ
ても男子たるものをお傍へ召寄給はねば折角參れど
徒ら事衛銀兵しかし常は格別今日は重陽のお禮なれば
幼君よりおゆるしなく共お傍に附そふ方々よりお勸
め有ても御對面なくては叶はぬそれに何ぞやお錠口
より奥殿へ通る事叶はぬとはちと鶴喜代君もわんぱ
くの様に存られ升るスア、是々に銀兵衛殿おだまり
お跡目叶ひし上からは御大切のお身かよふな時には
家國に望みをかけいかなる凶事のあらんもしれずと
夫ゆへめのと政岡殿の計らひにて所勞をいひたて御
たい面なきも尤な事そこを察して兄彈正が名代に此
八沙が參つたからはわらはばかりは奥殿へ通つてゆ
る／＼と御對面ノフ女之助殿女御意の通り八沙殿に
は女儀の事何しに違變がムり升ふ八それ見さつしや
れ銀兵衛殿女之助殿は忠義の武士兎角御前の守護意

りない様見習らふたがよふムる銀兵衛り升てムり升る
が八沙殿此所へお詰あらば女之助殿にはしばらく詰
所へお控へ被成い女イヤお錠口に直宿致すは拙者が
役目でムれば銀イヤ／＼女之助殿女儀ながらも八沙
殿には彈正殿のお妹御數ならねど渡邊銀兵衛是に詰
るが心元なふ思はつしやるか女イヤ全く左様ではム
らねど然らば暫時差控へるでムり升ふト合方に成り女之助橋懸りへ這入る
は八沙此内こな八渡邊銀兵衛殿今日の御膳番掛りの者
は誰々でムるぞ銀ハツ御膳番は園田吉兵衛、御料理
見分は松本太左衛門八何園田吉兵衛、松本太左衛門
シテ／＼お煮番の御毒見は銀御膳番頭鹽澤丹三郎で
ムり升る八それは幸ひ園田、松本は兄彈正が組下鹽
澤丹三郎がお毒見とあれば是くつ竟その方次へいて
此所へ丹三郎を同道召れ銀ハツ畏つてムり升るト立
す八是々銀兵衛殿自らは道益殿とすこし密談もあれ
ばこなたはお次にひかへ丹三郎一人通してよからふ
銀承知仕つてムり升るト橋懸りの杉戸へ這入るハサア道益殿嚙御
退屈サ、御安座なされ道イヤ／＼愚老儀は幼君のお
脉をと存たに御對面なくて殘念に存升る八されば其
儀に附て密談申たいがマア承りたいは今朝伯父御鬼

貫様の御病氣を御診察被成升たか道イヤ／＼八汐殿
のお詞ではゝれど今朝鬼貫公の御容體を伺ひし所御
不快の體も見へず御平脉でゝり升るがハイヤお前は
御平脉と思召してもありやなか／＼の御大病道へエ
すりやあのお脉で御大病となハサアそれゆへにこそ
兄彈正殿もいろ／＼苦勞を被成るわいのふト道益がて
のゆかぬ
こなし此時橋懸りより杉戸をひらき鹽澤丹三郎上下大小にて出三丹
て直に跡をさし杉戸の際にて八汐を見てよろしく辭宜なして
耶ハツ仁木様よりおめしと有て渡邊銀兵衛殿お使者
ゆへ罷出升てゝり升るト八汐丹三郎を
見て思入有てハヲ、鹽澤丹三
郎こなたに申附る用事もあれば暫らく夫にひかへて
ゐや丹ハツ左様ならばお次にトふと
するなハイヤその
儘そこトふと
するなにひかへてゐや丹ハツ畏つてゝり升るト小鼓の
みの方方に成り丹三郎杉戸の傍に
控へる道益いろ／＼こなしあつて道今こなた様のお詞に鬼
貫公の御大病とは此道益一向その意を會得致さぬハ
すべて六脉に通ずる病は常ていのお醫者でも直そう
が鬼貫様の御病氣を直すには著婆扁鵲たりともいつ
かないかな貴老ならでは外にあるまい道總じて病を
療するには六脉あうんの息を伺ひ面部の血色を見て
是を治す鬼貫公の容體は常ていに變る事なし是をあ
ながち御病氣とはハ醫は意也仁術也と聞及べば兄彈

正が一つの願ひ道益老の配劑にて草根木皮のちから
をからず鬼貫公の御快氣ある様國家の病が直してほ
しい道何國家の病をいやせとト八汐の顔を詠る丹三郎じ
つとこなし有て是をさく
ハさればいなア先殿頼兼様御身持御放埒によつてよ
ん所なふ袖が浦に御隠居させまし幼昔鶴喜代君御家
督には定まるといへ共いまだ御幼稚の若君にて此國
家を治める事は心もとない夫ゆへ御大老山名宗全様
ひそかに鬼貫公を召れ鶴喜代幼年にて國家の政事覺
束なし鬼貫家督相續せよとの御内意さり乍ら國家老
渡邊外記左衛門民部など容易に得心致すまじ又家中
の内にも心々幼君を輔佐するもの又鬼貫公に隨ふ者
一家中の内にさへ二つにわかれればお家の騷動まのあ
たり天に二つの日輪なく國に二人の王なき道理家に
二人の主有ては治りがたき天下の大法兄彈正殿にも
いろ／＼との心遣ひ國家の病鬼貫様の御大病とは則
此事此病の發せぬ内何卒貴老の配劑にて一物の鷹を
もつて一羽の鶴を害する時は國家は安泰何と此病症
に用ゆる良藥をひとへに頼む道益殿道成程御尤なる
病氣の根ざしいち／＼承知は仕れ共此藥を調進致す
は醫道の法度神農の禁しめ此儀ばかりはハサ、一た

んの不承知は有べき事さり乍ら醫を仁術となふれば國家萬民の病を治すと醫道の祖神も免し給はんしかし兄彈正か爲にも三代相思の主家の若君何しに害する心あらんが今いふ通りの國家の煩ひせひに及ばず此おたのみ何卒調進の程たのみ存る道益殿道すりやどふ有ても鶴喜代君を八空恐し共存すれどひそかに弑し奉らねば國家の亂れ近きに有その時千萬悔むとも益なききその上太老山名公の御内意もし宗全様のお心に背きなばいふも名家のお家もはめつ足利家の大事にはかへられ升ぬわいのふいふ丹三郎こなしにて道成程醫道の法には背くとも聞すてならぬ國家のわづらひ小の虫より大事のお家いかにも御療治仕り升ふ入すりやあの得心あつてその良藥を道忠心の聞へある彈正殿のお頼みいかにも調進仕り升ふ入早速の承知嬉しむる銀兵衛殿道益老の藥籠を持つしやれ銀ハア心得ましたト杉戸口より結構なる藥籠をもち出跡なき益覆面をとり出し藥籠より藥を取出し調合にかゝる此内丹三郎じつとひかへてこなし八汐丹三郎を見て八鹽澤丹三郎近ふく丹ハツくト膝行して少八その方に申附る大せつの用事ありサ、是へく丹然らば御めんどさり升ふト合方かはつて何丹三郎改ためいふには及ばね

ど其方が父丹左衛門は兄彈正殿の組下の腹心とも思ふゆへ他聞を憚る一大事も傍近ふ呼よせ置たがよもや他言はしやるまいの丹こは改つたる八汐様のお詞亡父丹左衛門存生の内段々仁木様の御厚志に預りあまつさへ酒興に乘じ武術の口論より同家中の方々一兩輩に手疵を負せその誤りにて扶持にもはなれ阿房拂ひにも成べき所を彈正様のお取なしにて狂亂の病氣といひ立役目をひかせまだその比は若年の拙者めに名跡を立させ今當上館にてお臺所役人に取立給ひ段々との立身出世そのうち無事に父も見送り當時御膳番懸りの上席を相勤升るも全く仁木様の御高恩といさゝか忘却は仕りませぬ八ヲ、そふ有ふ兄彈正にも外ならず思はれる故今きく通り大切の密談も聞し置がそなたは何と思やるぞ丹なかく若輩の我々御批判申上る迄も候はず國家の病を癒さんと道益老との御密談げに御家老は國家の柱礎御尤なるお詞と承る内にも感涙を催ふし恐ながら感心仕つてムり升る八そんなら兄彈正殿の心底あしからず聞取てたもつたか丹三郎推量してたもいふ丹足利の御家來にも仁木渡邊は格別のお家柄御心勞の程推察仕つてム

り升る八兄彈正よりそなたへの頼みの一條善惡に拘はらず頼れてたもるじやまで丹大切なるお家のお爲殊には御恩ある仁木様のおたのみ必仁木様の御恩を忘るゝなど父の遺言もムリ升れば一命にかけ升ても八しかと承知か丹神持まして八そんなら是にて誓紙を書きやト料紙丹ハツ承知仕りましたト書内道益道國家の病を治す一藥則調合いたしてゐる丹他言すまじき此誓紙御受下さり升ふト雙方より藥と誓紙を八大切な此一藥差圖にもれまじき此誓紙兄彈正殿にかはつて此八沙が慥に落手丹三郎けふの御煮番毒見の役はそなたじやないか丹いかにもお意の通りでムリ升る丹今聞通り國家の病を直す妙藥今日の膳部に仕込がてんかやト藥包を丹三郎丹すりや鶴喜代君の御膳部に八仕込は膳番煮役の者共園田松本に手渡ししてそなたは毒のなき方をお毒見しや道假初ならぬ大事の役目かならず共に仕そんじ召れな丹ハツ畏り奉るきつと仕おゝせとは言ひ乍ら御幼少なる若君をト藥を手儘思入八沙道益兩方よりきつと見てハサゝわらはとてもお痛はしふは思

家の爲にはかへられぬわいのふト愁ひのこなしにてきつといふ丹三郎いるノ思

入有て胸を定丹とればうしとらねば物の數ならずすつめし心にて八違變はあるまい丹三郎道首尾よふ役目つとめさつしやれ丹ハツ承知仕りましてムリ升るト頭を下る八沙道益頻見合せ一寸こなし序の舞の頃打込み此見へ宜しく返し

鹽澤丹三郎屋敷の劇

造物三間の二重上手一間は佛間前側縁子張障子にて向ふ淨土宗の佛壇を飭跡二間は石摺襖此下手に世帶道具上手下手共落間跡へ寄て家中長屋屋敷の内裏のもやふ屏の窓口兩方に有上手は屏の前より外へ紅葉の立樹蔭かづら此前に菊のうね下手はかなめの生垣此上に鳩部屋いつもの所門口鹽澤丹三郎と小さき表札を張ざつなる手水鉢杯のあしらひすべて屋敷長屋の體好み有べし爰に母宮城白髮の勝山にて老女の拵へ數珠をつまぐり傍に寢見臺に本二三冊をき平舞臺に召使女お睦著流し風呂敷を前垂にかけ菊の枝を竹花生へ活て居る此見へ宜しく序の舞打上琴唄にて道具納りつおもモウシ御隠居様今日は菊のお節句夫でお庭に咲た此菊を二三本とつて參じていけましたが是でよふムリ升かごろじやつて下さりませト花生を宮城ヲ、よふ氣が附升た菊咲てけふ迄の世話忘れけり

と古人の發句にもよんだ通り長らくわらはが傍に遣ふたそなたなればよふしつてもゐやらふが連合丹左衛門殿が過られても忤丹三郎が跡目にたち連合のムつた時分より家中内の受もよく廉直な氣性のへ朋友衆ともせり合す此母へもそれはく孝行にしたる故いは此菊の盛りも同前春の彼岸の根分から日毎く肥しをして虫をとつたり水をかけたり世話やいたは丹三郎が幼少な時分から爰まで育てしと同じ事さましく心を盡したもけふ重陽の祝儀の花に詠めふ爲けふ迄の世話忘れけりとはてもよふ叶ふた句ではないかいのふ睦はんに御隠居様のおつしやる通り當旦那の御出世はてふど今日の菊の花同前はまでのお世話甲斐があるといふ物併しどふやらするとなたはマア旦那様をいつ迄もおちいさいか何ぞの様にまつしやり升ヲホ、ト笑ふ宮城宮イヤもふ年寄といふ物はいつまでも子供の様に思ひ升わいのふ上「我子に譬へし菊の花老の餘念」詠むいる折から相役園田吉兵衛門口より差覗きト上るに橋懸りより出て衛丹三郎殿は御住宿かなをとなふ聲にお睦は立より睦ヲ、どなたかと存升たら御同役の園田吉

兵衛様旦那は仁木様より御用にて先刻詰所へ參られ升てまだお歸りはムり升ぬ吉々、成程く仁木様の御用で今日は松本太左衛門殿と此吉兵衛お煮役は丹三郎殿御料理の相談もありお歸りを相待ふか宮マアくはへお通り被成ませ吉御隠居然らば御めん下されふ「通るも狭き竹簀の子宮イヤモ聞せまい内で嘸お氣詰り庭の菊など御覽被成升い吉ハ、アお庭の菊はお手入がよいかしてなかく見事に咲升た睦マアおたばこなりとめし上りませ吉是はくかならずお構ひ下さるな「挨拶とりくする所へその日の役目大切に辛き世を経る鹽澤丹三郎膳番煮役の時刻には暫しのひまも藍鯨の袴のひだも折目高歸りかゝりし軒の口子を呼鳩の聲に耳立ト此上るりの内向ふより丹三郎舞臺へかいる上るりの跡被計りには羽織大小にて思案し乍出て本舞臺へかいる上るりの跡被計りには羽織大小にて思案し乍出て本舞臺へかいる上るりの跡被計りには羽織大小にて思案し乍出て本鳥に反哺の孝ありと世の諺にいふ如く心なき鳥類すら主の身共が歸りしと知り子を呼びかはし出迎ふ有様ハテしほらしい物じやなア「おのが戸口にさしかゝり丹母人只今歸宅仕り升てムり升る睦ヲ、旦那のおかへりでムり升る吉丹三郎殿但今御歸宅被成たか丹ヲ、何人かと存たれば御同役園田氏よふこそく

宮ヲ、丹三郎最前から吉兵衛様がお待兼丹左様存たらば急いで詰所を下り升ふもの^{ト始終右の合方に}吉イ

ヤ何丹三郎殿今日は重陽の御祝ひ日なれば御膳部のお献立にも定めて例式がムらふと存て承りに上り升

てゐるで丹なる程重陽の御膳部は例年の定まり則書寫し取て是にゐるいざ御覽被成い^{ト懷中より書附}吉い

かさまこふでムらふいさい承知仕り升た見分の役は松本太左衛門殿此書附を見せ升ふ丹此程は若君御不

快に附正末の刻ならでは召上られす今少しお間もムり升ふ吉さやうく御上にも随分御空腹の時がこつ

ちのつけめ兼て仁木様の仰の通りかの一藥を^{トいはふ}丹ア、是^{ト頗にておさへる吉}兵衛もこなし有て

かム、成程くしかし此お献立首尾よふ參らば貴殿を始め松本氏にも拙者にもいつかどの立身出世何と

甘ひイヤサ何と甘そふな御膳部ではムらぬか^{ト丹三郎始終宮城}の方へ^{こなし有て}丹ア、其跡は申さぬ事御がてんか吉いかに

もく合點所かとくより聞取松本氏にも一つ釜もし此事が露顯いたすと御互ひに身の上なれど誰しも欲

に迷はぬ物はムらぬで丹ア、是々吉兵衛殿詞多きは品少なし則かの一藥は^{ト懷より藥包を大事に}吉すりや此

出して吉兵衛に渡す

一藥がコリヤうかつにもつも氣味の悪い^{ト片手にて口}に^{いれる}丹慥に貴公へお渡し申すお受取下されい吉

然らば丹三郎殿丹吉兵衛殿後刻^ト人御意得るでムらふ

「同輩中のたれそれも小腰屈めて出て行^{ト此上るりにて}吉兵衛向ふへ這

入る跡又右の合方丹三郎羽織をぬぎ自身にた、む宮城に珠敷をつま

ぐりながらよみきたる本に枝折をはさんで脇へくおむつはこん

ろにて煎茶をわかし丹隣屋敷の小松原には相も變らず

小鼓の稽古と見へるヤアコリヤ重陽の菊を生たは母

人コリヤ誰が入ましたな宮そりやむつが庭の菊を手

折て今のさき祝儀に入てたもつたのじやわいのふ睦

ホ、流儀もたぬ私が我流旦那様の手前お恥かしふ

存ますわいなア丹イヤなかく甘^トひ物じやむつもな

かく小しやく物コリヤ一かどの手際じやはへ宮そ

れくその菊の香をき乍ら讀さいた此本をこそつ

と見ませふわいの^{トめがれをかけて又本}陸ハイ旦那様お

煮花が出来升ためし上り升い丹ヲ、にばなが出来た

か母人召上り升ぬか宮イヤく妾はさつきにからよ

ふたべ升た構はずとそなたのみやいの丹然らば下さ

り升ふか^{ト取上吞かけ}是むつ此茶は今煮立たてではな

いか但し是は二番煎じか睦イエ今きびしよを改めま

して此鐵瓶のお素湯をさいて煮たてましたのでムリ

升る丹ハテそれにしては是茶を見やれ茶碗の中に蠅が一定は入てをるわへ睦でムリ升か是はマアめつそふな心の附ぬ御めん被成て下さり升いなア丹エ、心の附ぬ汲かへて持て來やれ睦ハイ／＼畏り升たどふいたしてマア此中へ蠅がは入ましたやらト茶わんを持て下手ヘ明に本を傍になき行宮城是を聞て宮何茶の中へ蠅が落てゐたとか丹いかにもさやふでムリ升る宮夫はマアいかな事むつそこへ出や睦ハイ／＼御用でムリ升るト舞臺前へ出る宮是御用

所かそちやマア何と心得てゐやるぞ是蠅といふ虫はの不斷そこらを飛あるき人の骸にもたかる物じやがもし食物の中へは入た時は人間には大毒で當る物じやといのふ是爰に居る丹三郎はのそなたの爲には主人じやないかその主人にマア毒をのますといふ事がある物かいのふエ、マア爰な不忠者めがト腹立のこないふおむつはつとつむく丹三郎ギツクリするこなしにて氣をかへて丹イヤ／＼母人左様にお阿り被下升るな何のむつじやと申てそれをしつて致し升た事ではムリませぬ宮ハテしつて又毒な物を主人に飲せてたまる物かいのふは今わらはが讀で居る此本はコリヤ雨月物語といふかな本此中にもむつの玉川の歌の内高野の玉川を空海がよまれた歌に

「忘れても汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水」と是程の毒水になせ玉川の玉といふ文字を冠らしたといふ論を書た物語あらおもしろいと讀返してゐるその矢先に茶の中へ毒な虫のは入たもしらずに丹三郎にのませふとはあまりといへば心ないそそう者睦御隠居様よふ心得ながら只今の庵相眞平御めん被成て下さりませ宮庵相と云ても程のある物主人大事と思はぬゆへ其庵相大ききいへば不忠者といはるゝぞよハアイヤ／＼母人拙者も又とくと申聞ふ間今日の所はもふゆるしてつかはされませ宮畢竟丹三郎が中を見たればこそ此後共に氣を附ませふぞ睦ハイ／＼有難ふ存升る丹母人の御機嫌も直ればもふよいはサ、次へたちやれ／＼睦ハイ／＼左様ならどりや御膳の拵をして參りませふ「庵相を何と納戸口墨附惡く入にけり跡打見やり母親は我子の傍へにじり寄りト跡しつぽりとした合方宮城こなし有て宮丹三郎今此母が阿つたを尤じやとおもやるか丹イヤモ御老人の仰らるゝ事に何の御無理がムリ升ふぞ宮ヲ、そふいやれば母も嬉しい是丹三郎今改て云ふではなけねど連合ひ丹左衛門殿存生のうち能忽の罪で此鹽澤の家名は沒收にもなるべ

き所組頭といひ御家老の仁木彈正様の御執成で隠居をさせまだ十三四のそなたをば元服させ鹽澤の跡目にたて今大切な御幼君の鶴喜代様の御膳番お毒見役とまで立身したは皆是仁木様のとりなしとはいひ乍ら御扶持を下さる御主人様の御影なりや御奉公を大切に束の間も油斷をするは大不忠今の様にむつをわらはが呵るのもあればかりじやないそなたにも心得に聞そふ爲連合が死れても我々親子が安穩にくらすのも是皆御奉公を影日向なしに勤めるゆへそふした時にはそなたの命はそなたの物じやと思ふは不覺今いふた本にも書てある通り忘れて汲やしつらんと高野の玉川には毒氣があればかならずのますなと佛の教へ蠅のは入た茶など呑んでもし當られやなどして見たがよいどの命を持て御主人の若君にさし上る御膳部の毒見役は誰がするそりやもふ侍の身の上は義によつては命もすてねばならぬ事もあれば一口にいふではないおなじ毒に當つて死る命なれば私事に捨るは不忠御主人の爲ならば毒としりつゝ呑もせよすゝりもするが是奉公かならずゝその身を大切にせねばならぬぞやおいとし寄たわらはの事此世に居る

ももふ長ふはあるまいそなたの身の上にもしもの事が有たらば此母は何とせふけふもけふとてふと此本をよんでから案じ出すと勿體ない事ながら終に一時をこたらぬ佛様への御看經も母の手には附升ぬわいのふ「意見と珠數とくりかへし我子を思ふ母親のしんみの詞いちゝに胸にこたへて丹三郎丹ハ、ア有難き母のおしめし仇おろそかには承りませぬ宮けふは殊更重陽の御膳部献立の取合せにも心を附やわらは、佛間でお看經丹成程母人には今のお身ではそれが御役目宮イヤモ佛に願ふも後世の事より御家の御武運長久とそなたの身の上息災延命丹ム、すりや夫程迄に宮どりやかんきんにかゝりませふか「南無と唱へて母親は佛間へとこそ入にける跡見送りて小ゆるぎの礎にたいよふ汐ならでとつゝおいつに鹽澤が胸も苦しき一思案ト此内宮城球數をつまぐり乍ら上手も張にてもじの障子をしめる靜丹ハテ心有げな母の教訓むつが煮たてし茶の内へさゝいな虫の入たるさへ子と思ふ母の御立腹それも此身へかけての御意見思ひ當るはけふの御膳部御毒見役を幸ひに仁木殿よりのおたのみ典樂大場道益老と八汐殿國家の爲に病を治する

の一藥を幼君へすゝめ參らす高論はげに尤なる金玉論忠義ゆへには主君も害すあつばれの大忠臣と感ぜしゆへ親共よりの恩義は有口外ならぬ祕藥の一條他言すまじき誓紙を認め受合ひごとは請合しが最前園田吉兵衛がふと口走つたる詞のはし／＼事成就する時は貴殿をはじめ我々も出世の足代鬼貫公の世とならば是に一味の者共は立身するは是必定そふきく時は皆欲心口には忠義ととなへてもはかり難きは人心もし仁木殿の惡心にて鬼貫公にかたんなし足利の家國を奪はん爲忠義ごがしに此身をたばかり鶴喜代君を毒殺なしトはいふとしてあたりを
見てちやつと氣を丹をら恐しき王みの毘鹿追ふ獵師は山を見ずと忠義／＼と心得しが今母人の意見にも執成有し恩義はあれど御扶持を賜はる主家の御恩は身を粉に碎けど報じがたし我一命を我物と思ふは不覺朝夕の食事にも心をつけお馬の先の働きこそ誠の武士の願ふ所と聞たる時の苦しさは胸に盤石おかれし心地思へば母の詞ならずお家を守る鶴が岡の正八幡宮先祖を祭る持佛の佛母の影身に附そひ給ひ此丹三郎にあやまつて不忠の汚名をとらすまじと神明佛陀の御意見なるかハ、ア恐るべし／＼

あの御教授を聞ずんばまだいたいげの御幼君鶴喜代君をうま／＼と膳部の毒に害せし時は仁木への恩義は報ふとも三代相恩の主殺しハテよく心の附しよの「俄にかはる忠義心身繕ひして立上り丹ヲ、それけふの御膳は末の上刻夫迄に奥向へ駈入幼君の御乳人政岡殿迄此事を」かけ出せしがまて暫し丹イヤ／＼もし此事を注進せば鶴喜代君は御安泰にもムらふが事露顯する時は鬼貫公はもとより恩義を受し仁木殿の御身の上神文誓紙まで認めし身共が口より何とおめ／＼言ひ出されふ夫のみならず國家の騒動コリヤうかつにも口外ならず「又座に附て諸手を組問ふも答へも口の内佛間の内には母宮城りん打鳴らし老の奥齒もれくる讀經の聲トもしばりの障子の内二重せうじ引のむかひりんを
宮なむ足利のお屋形先君幼君御武運長久附ては忤丹三郎息災延命先祖代々二世安樂南無あみだ佛／＼」彌陀へ願ひの殊勝なる丹三郎もとも／＼佛間の方を伏拜みト跡又右
の合がた丹ありや母人のお看經御自分の後世は打捨お屋形様の御運長久丹三郎が息災を佛へ頼みのあのお詞思へば／＼勿體なやアレ外面には子と呼ばかはす鳩の聲忠孝の二つには仁義五

常も是にこもれり親の子をいつくしむも子の親を敬するも主君へ忠義をはげみしうへなりや孝よりは忠義が拔群仁木殿への恩義はあれど現在主君の若殿へ鳩毒としり乍らどふマアすゝめ参らされふぞといふて口外なさば恩人はたちまち窮命こちらを思へばこちらが缺ると翅鳥にかゝつた我身の上所詮永らへぬ我一命切腹して相果なば御膳毒見の役人もかはり折角工んだ鳩毒も鵞の背と喰ひ違ひ自然と幼君のお命延はり波風立すお家は安穩ヲ、此思案が屈竟一そふじや〜「ひとりうなづき立上り死出の門出の曠著ぞと取出すむろちの黒小袖やみの鳥の聲ならで父の筐の定紋も心たゞしき行儀鮫うろ路に迷ふ心の屈托衣紋つくらひかたへなる硯引よせ書筆の文字もまがらぬ諫の状それとしらねば下女おむつ膳拵して勝手を出ト此上りの内丹三郎葛籠より著附麻上下を取出し又袋入の奥よりおむつたすきがけにて膳をもち 睦モウシ旦那様御膳が出來升てムリ升る此度はもふ念に念を入ましたればお心置なふめし上つて下さりませいつも御自身に遊ばす様に致し升たお露のおかはりはおよび被成て下さりませ「口も輕々身も輕々お睦は勝手へ入る跡

に丹三郎は膳部に目をつけトおもつ納戸へ這入る又合方 丹以前の簀相が身にしみてか膳部に念を入れし由我今切腹なすとてもまつこの如く御膳のとき同腹中の役人共鳩毒入しを差上なば我身の最期もむだと成り御幼君の御身の上危ふし〜コリヤ切腹を止まつて後刻御膳の毒見の折鳩毒入りし膳部を食し狂氣なしたる體を見せ惡事にかたんの園田松本我手にかけて相果なば毒の工みも水の泡御幼君には御安泰仁木殿へはいさめの此狀忠孝恩義三方に此身一つを捨るならば汲やしつらん玉川の古歌によそへし母のお示し是が誠の忠義じやわへー母の恩義も高野なるむめふの橋の夢覺めて忠義の誠ぞ健氣なるかくとは何氣納戸より睦は小櫃を持出てト納戸よりおむつひつなもち出て 睦是はまだめし上りませぬかおつゆがさめ升てムリ升ふ一寸盛かへて參じませふト立ふとす 丹イヤ〜飯はまだほしふないムムそふだむつその方の事をはたと失念いたしをつたわへ睦エ、私の事をそりや何をでムリ升るへ丹イヤサその失念をしてをつたはア、何だわへ睦エ、御膳の事でムリ升ふけふは菊のおせつ句いつも祝ひ日にはお内でお箸をお取遊ばすゆへ早ふ差上ませふとさ

つきにからいそいで拵ましてムリ升る丹ア、イヤイヤ何のそふではないトいひかれるこなし 睦ヘエ、さやふなら

さつき御隠居様のお呵りのお詫事でムリ升るか誠に私の不調法を仕り升た丹ヲ、そふじや／＼その不調法母人には殊ない立腹そこで身共も段々と詫れ共一向一圖におほせられてお聞入はないわへ睦でムリ升ふともよく／＼のお腹だちでムリ升る丹サアそこで手前も致方がないからふと存附たは母人のお氣の納まる様その方に暇を呉るから左様に相心得たがよい睦エ、アノ私にお暇をそりやマアどふ致しまして丹イヤサ何も驚く事はない先達てその方の國もとより奉公を退ひきて内へ歸れと手紙の參つた事も有たがその比は母人にも疝癰にておなやみありし故人手はたらずマア半年も待たがよいと段々をくれにくれたが見やれ此比はあの通り御そうけんにもあり身共は又知る通りたまでなくては内にては食せず大方御前の詰所にて食事はする母人御一人の事なれば老の身のお氣なぐさめに御自身一人煮焚を被成て上るもよいからてふど幸ひ一たん中宿へ退ひきたがよからふ睦ヘエそんなら私にアノお暇を丹サ、嘸思ひがけもあるま

いがそちが兼ての願ひといひ是國もとより附て參り長々母人の介抱も致してくれた物故どふぞ似合ひの縁もあらば片附たふも存をつたが何を申も肝心お遣ひ被成るゝ母人の不機嫌そこで今も申通り彼是と取なしを致そふよりあゝいひ出されしこそ物怪の幸ひ奉公をひくもよからふ何卒母人の氣の納る様ではない身共の心も納るやうに今いひ出して今すぐにとは身も少し言憎けれど心やすめの爲なればサ、ちつとも早く中宿までひいてくりやれ睦モウシ／＼旦那樣そりやマアあなた眞實ほんじつでムリ升かいなアテモマア思ひがけのない藪から棒といはふか常々からじやらけた事はおつしやらぬ御氣性御隠居様のお腹立を休める様今此むつに奉公ひけとおつしやるには何ぞふかい御様子もムリ升ふが丹是々深い淺いと様子の有ふ筈もない主従の縁を切り暇をくれたれば仔細はない筈右いふ通り身共が氣ざはりきり／＼早く立ていきやれさ「さりとはいつかぬ過急の詞お睦はむつとしながらも様子あらんと胸撫をろし睦すりや是非ともにアノわたしは口へ出ふとするな 丹コリヤむつまで／＼睦ヘイ御用でムリ升か丹今暇をやつたその方

じやが丹三郎が申附る用事が有が聞てくれふか睦ハ
イ何なりとも仰附られて下さりませ丹然らばこの手
紙を持て八汐殿の部屋まで参り申そふには丹三郎が
母より内々申上たき文でムればひそかに御覽下さる
様にと申慥にお手渡し致してくりやれ睦ハイ左様な
らば八汐様へのお使でムり升るか畏り升てムり升る
お案じ遊ばし升なすぐさま持て参り升ふ旦那様では
ない丹三郎様丹ハテひまとならずと早くゆけといふに
睦ヘエイ「心のこれど仕かたなく戸口ひつたて出て
行跡見をくつて丹三郎兼てたしなむ二腰をさしも立
派に立上りといふ心にてせわしく向ふへ走りはいる丹三郎大小
をさ丹母人にのみ心置れ下女のむつが事をはたと失
念致せしが幸ひ先刻の兇忽をいひたて暇をくれゝば
障もなし又今八汐殿まで持せし狀には彈正殿へ誓紙
をしながら毒殺變じて此身を殺し忠と恩義に命を捨
るいさめの條々お聞入ある時は彈正殿にもお命全く
無難に納まる足利のお家母人にも此事をくわしく申
上たけれど事もらしなば神文の手前も立す一心不亂
に看經を被成るゝこそ幸ひ申分は冥途でゆるゝ老
たる親をのこし置先だつ不孝のつみ科は主君の爲と

おゆるしあれかれはいふうち御膳の時刻ヲ、そふじ
や「心せわしく立出る一間の内より母の聲ヤレまで
悴丹三郎「呼とめられて思はずも名殘に拜む母の顔
トツカへと本舞臺へ戻る此内佛間より宮城 丹ヤ、コリヤ母
自害し乍ら正面へ這出る丹三郎大恟りにて 三
人には御生害か「こはくゝいかにと駄よつて仰天す
るこそ道理なれ母はくるしき息をつぎ宮さつきによ
んだ玉川の古歌よふ判斷しやつたのふ丹すりや母人
には拙者が心を宮最前むつが兇相の時たゝならぬそ
なたの顔いろ高野の奥の底深き惡事としらす忘れて
も汲やしつらん玉川の毒を藥と古歌の添削ヲ、それ
でこそ我子なれ出かしやつたのふゝ丹サ、夫ゆへ
仁木殿を諫めの一書むつにもたせて惡事をこらしす
ゝむる善は御膳の時此身を殺して波風立す雙方全き
拙者が寸志宮主家の大事そなたの命にはかへられぬ
とはいひ乍ら親は我子に毒な物喰ふなといふが世上
の習ひ毒としりつゝ喰へといふ母が心はどふ有ふ推
量せよ丹三郎「忠義にこりし老の身も深手によわる
斷末魔丹母が自害は誓紙の手前かの王陵が母になら
ひ宮我子をいさめし此自害かならず共に心のこすな
丹チエ、有難き母の慈悲思へば冥加が恐ろしい「御

ゆるされてといふひまに早音づるゝ八つの時ト此時ト太鼓にて八つなうつ丹ありやもふ八つ宮屠所のあゆみの丹未の刻宮丹三郎早ふゆけ丹ハツ宮ゆけ丹ハツ宮ゆけゆけ丹ハツ「あはれはかなやト三重にて宮城落る丹三郎は向ふへ走り這入る此見へ太鼓ドン返しと打ながらチヨン

膳番煮役自毒害の齣

道具元のお錠口へ戻る爰に渡邊銀兵衛、今川女之助、十平、勇藏、半助、小彌太以前の形りにて控へ居る八つの太鼓打上序の舞にて道具納るト上手の杉戸口にて驛路の音からくとして八汐以前の形八何れも重陽の御膳延引とて御前様のおむつかり膳番お煮役へ申附さつしやれ女誠に今鳴し時計は未の上刻銀御膳番の方々用意よくば持つしやれ三ハア、ト下り業になる橋懸り杉戸口を開き園田吉兵衛上覆面をあて次に松本太左衛門同じく上下にて銀のかけ盤に羽二重の飯櫃をのせ持出て吉ハツ御膳延引の段恐入ましてゐる太左各いざお取次下さりませふ八若君様にはお待兼丹三郎はお毒見役か早ふ丹ハツお見届下さり升ふト辭儀して前へ直る八汐は上手次に女之助銀兵衛各こなし有て是を見てある丹三郎こなし有て銀のかけ盤をさしなき金のかけ盤の方を前へ引よせる吉兵衛吉ア、是さく丹三郎殿そりや違ひ申すく太金の懸盤は御前様銀の方がお毒見でこ

ざる銀誠にお式日には極りし御膳を取違るとは能相千萬ト吉丹三郎殿お嗜み被成い丹イヤく常は格別今日の御膳お毒見致すは此御膳でゐるト掛はす箸を取ふ丹三郎に取附とめて吉ア、是は扱堅意地千萬その方ではゐらぬと申に太是此方には毒イヤサ毒見役の御膳ではないといふに兩廂相千萬お待被成い丹イヤ廂相でゐらぬそれ膳番煮役は格別お毒見役と申せば御前の召上ると同じ加減おなじ御料理にてすわる事は是定例なりや金のかけ盤銀のかけ盤とて隔はゐらぬ怪しう存る方を取上るが役目でゐれば是非此かけ盤は此丹三郎がお毒見を致すのでゐるト吉じやと申てその方は御前のなれば丹ハテお毒見役は此丹三郎御膳番お煮役にはお構ひない儀夫ゆへ拙者がお箸をとりまト掛はすふたを取て汁を吸にかいる吉兵衛太左衛門は身をもがすく銀兵衛はしじう八汐の方を見てこなし八汐は顔にておさへる銀兵衛銀コリヤく丹三郎そりやお手前無禮で有ふぞ丹イヤ決して無禮でゐらぬト吉じやと申て丹お毒見致すが役目でゐる但し役をかはつてお毒見召るかト吉サ夫は丹さやふでなくばおひかへ成されト膳を引くくあせつて銀何ぼうお役目なればとてあまりの無法何事もよく心得る丹三郎殊には一味イヤ一味もか

はらぬ此御膳部をト立かいる女之 女是サ／＼銀兵衛

殿丹三郎がお毒見致すに貴殿にはお構ひあるな立騒

ずとおひかへ成されいト是にて銀兵衛跡へよつて入し顔

るゆへじつと下にいる吉兵衛太左衛門はたまりなひかへてい

をなさいへら丹三郎外の料理なくひ汁碗を取一口にグツと吸ふ此

汁わんに仕かけ有り女 女丹三郎御膳部に仔細はないか

之助始終めな附けて ト丹三郎毒の廻りにて 丹御膳部に兎忽はらぬ仔細は

なかくすこなしにて 丹御膳部に兎忽はらぬ仔細は

ぬといふ内血をばき紙にて受る吉兵衛太左衛門は始終

ぬさいへる女之助ツカ／＼と立より丹三郎の顔を詠て 女面色變

じて吐血したるはまさしく毒氣丹イヤ吐血いたすは

拙者が持病々ナ、なんと丹御膳部に仔細はらぬ女

それに又此兩人は太コリヤもふお座にはト遊ふとする

ながら立廻つて上手へ突やる八汐すつと皆ヤア是は八膳部遅

刻の科は兩人此八汐が即座の成敗銀御尤イデ丹三郎

めもトよろふとするを丹三郎 丹此身も同罪切腹御免ト抜

と醫論の内は仁木にて仕組たれど女形獨はなくては

堅きばかりにて和らぎなく是非なく女形八汐とせり

母宮城を政岡と見て丹三郎に千松の役をさせるを一

齣の趣向とせし物にて雨月物語の小説は上田秋成の

作なり高野にて俳諧行脚女人堂に宿り關白秀次の靈

にあふ時連歌師紹巴玉川に毒の有無を説く條有曲亭

馬琴頼豪阿闍梨怪鼠傳に西行鎌倉にて右幕下頼朝に

軍法を問はるれども法師の身なればしらすと答ふ秩

父重忠歌道の故實より問出して後々軍法の祕事を聞

條に此雨月の玉川の古歌及菅公筑紫にて宵の間は都

の空に住もせでの古歌を評するは皆雨月物語を假り

たる物なり此狂言にかゝはらぬ事ながら小説戯作者

にも此きりはめはまゝ有べし右の二書を閲して考ふ

べし是らに似たる事共追々二編三編に卷を繼て記さ

んとしか云

時嘉永四辛亥綺語堂に冬籠して

西澤一鳳軒述之

西澤脚色餘錄初編下の巻終

笠翁前無笠翁笠

翁後有笠翁爲有

者誰乎

李叟大先生

梔花園

職人歌合

七番河ふうり

宵とに都は

いりるあそ

うり

あそ

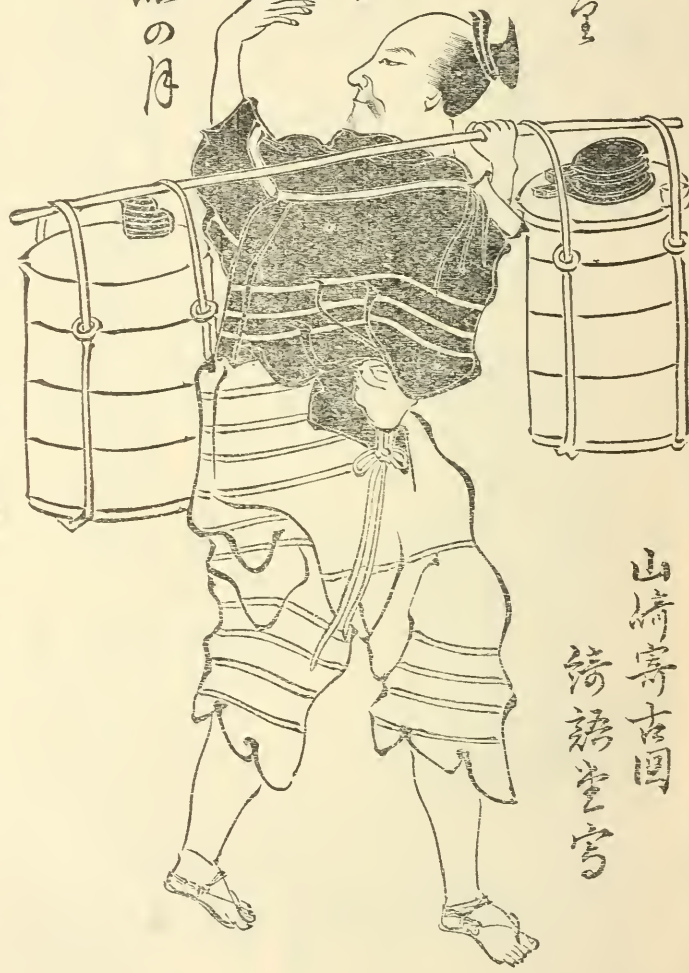
のこ

尾子

山浦の月

山崎寄古園

詩語堂寫



やるさむ屋亭より道は油うり

おこぬすまをねくかゝるうか

西澤
文庫
脚色餘錄二編上の巻

目次

- 一 壽門松道行の文
- 一 移松記失心吟行
- 一 大塔宮身替音頭の場
- 一 蟻鑑記替身踊場
- 一 忠臣藏與市兵衛の考
- 一 道行菜種の亂咲の畫
- 一 松本岩井乘込騷動の話
- 一 菊五郎幸四郎確執の話
- 一 艳狩劔本地芝屋の話
- 一 詠吉野三齣の正本

西澤脚色餘錄二編上の巻

西澤綺語堂李叟著

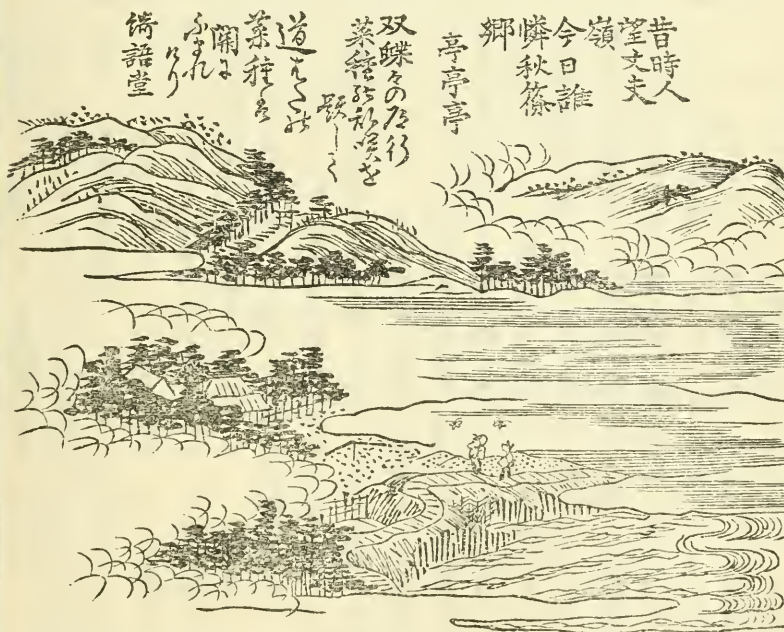
壽門松道行の文

竹本座當淨瑠璃山崎與次兵衛壽門松は近松平安堂の作にて享保三戌年正月二日より始八年後昔米萬石通し濡髪、放駒の名前を出し又二十五年たちて後雙蝶蝶曲輪日記出る壽門松と萬石通を一つ狂言に取組し事は前々の編に述る所なれ共爰に明和八卯年十二月に出板なりし才子刊書四鳴蟬と云書は亭々亭逸人譯堂々堂主人訓と有雅樂情花記壽門松 儷曲 熊野同扇芝記大塔宮三 身替り音頭此四齣を漢文にて移松記壽門松 儷曲 熊野道行儷曲 熊野此四齣を漢文にて書たるもの也依て本文を先に出し次に翻譯を略出して笑に備ふ也春に育も花さそふ蝶は菜種の味しらず菜種の蝶は花しらずしらずしられぬ中なれば浮れそめまいくるふまい物あぢきなや吾妻立よりヲ、嬉しやお心も靜つたかアレ御らんせよ虫でさへ番つひはなれ

ぬ揚羽のてふ我々も二人連好たどふしのなか／＼にお心よわやといさむれば吾妻請出せ山崎與次兵衛請出せ／＼山崎與次兵衛いつか思ひのな下紐とけて昔おもへばうやつらやつらや忍ぶむかしもうやつらや情なや誰あらふ山崎與次兵衛さまでと人々におくれぬ髪の亂れ心吾妻が顔も見忘れてうつ／＼なやとせいすればそなたは藤やの吾妻かの與次兵衛にもまれて色のわるさよいとしさよ近い内にはかならずと請けて樂させよ世帶して子供もふけてふたりが連てお乳が肩くまおてゝが日傘肩で風切る山崎に親の御恩をふり捨てそなたの世話に形ふりも昔には似ぬ男やま今では人も秋篠や外山の松よ事とはんまつがつらいか別れがういか待も別れもせぬように親のゆるした女房は義理と情の二面かけて思へどかひもなく今は野末の放れ駒きのふは吾妻に戀をのせけふは故郷のこがれ泣我から狂ふ秋の葉の亂れて袖に置もせず寝もせて露のたま／＼も待るゝとも待身になるな親と子の便りをしのぐ山崎の妻もさこそはみたれがみいふた詞が力ぞやわしが馴染は三重の帯ながい夜すがら引しめて妬み悋氣の心なく預る物は半ぶんの主は

忘れていさんすか過し月見は井筒屋で底意限なき夜
 と共におどり明した面白さ私は百迄も忘れやせぬも
 のよ見あかぬ君が外八文字の道中姿目附で殺す所體
 になづむけいせいこまめにたらいが女房請出し盟の
 底抜て影も宿さぬきぬぐの親を悲しみ妻を戀心一
 つを二た品に名乗りて過る時鳥じやが父に似て似ず
 子は色里に初音ふる冠はきねど大盡と花車が轟く口
 説の門やりてがたゝく禿がねぶり皆夢の間の境界と
 やぶればぐちもなかりけりかくはしれ共柳の糸のお
 どろを亂す山嵐はげしき親のいさめの詞妻が別れの
 一ことは身にしみぐと戀しやと互に手に手を取り
 かはし聲もおします泣るたる夕陽告る程もなく西
 北に風起り東南にむかふ空の足梢木の間もはら／＼
 小川の水音さら／＼雲の羽袖もひら／＼と
 あなたへなびきこなたへなびきくるり／＼くる／＼
 くるりと巡りめぐるや月は行けどもはてしなき思ひ
 は目前親のばちあたつて碎る男のすがた走ればはし
 りとまればとまる狂はぬ袖もみだれ心命つれなき流
 れの身流れ渡りの世の中にしばしといまる賤が家の
 軒を尋ねてなやみけり

才子刊書 四鳴蟬移松記共吟行之圖



移松記

院本題曰山崎與二壽門松壽當ノ釋移松、相傳當時有山本余某者攝北之人也。嫖名時高矣。傳奇因而生。老實莫向山崎、而求贖云。

モノクルヒミチユキ
失心吟行 零貽宮 一中譜

淨扮農家上 劉穗亭積已登園。年貢納來。額暢。皺麥飯飽時。春到。腹大。根今尙不離。墀在下。是山崎余一平。

我以ニ庶子。早出爲農。使余ニ嗣宗家。他生得百

怜百剛。四藝六能。無所不通。又穩柔體面。十個

九個喜歡著他。奈至中年。張東山之遊。被二世嫖人

之號。論來嫖也何害。只爲專情於他。虧人忽業。

災乘而起。今遂至受冤被屈。吃官司司。在方保監

囚。幸縣公明鑑。父親慈計。剛得脫監。但他就憂

驚。不日一矣。遂害心恙。起來。時特發狂。東走

西跑。時或不。知。向方。使合家干係不下。誰道頑

仙。不如才鬼。窘了。世上守世之君。奇楠不焚

竈下。亦不燒。是本分事體。呀。只見西莊畦徑。笑號

走得緊。他便余二了。後面有。一。艷婦。追及。想是那

表子。我知趣。躲一邊。看他如何。看那邊。狂得

揚猖。一。遲。一。快。一。苦。只。苦。只。淨向。台

二宮。上場詞。樂隊唱。生上。阿妻可贖。山崎余二平。贖之哉。贖之哉。山崎余二平。嘗恨何日遂。情願。相偕暢。

縋縋。往事懷來。却亦可恨。既慕往時。亦復可恨。且後嗟。是爲誰。山崎余二平。名馳三風流。身不後人。豈想發

狂被髮見。妾之面。不認出。如醉夢裏一般。請快醒來

則個。生唯。爾是藤家東姐麼。唯。唯。實可悅也哉。

生且五。兩。甲乙春野。君不見兀的昆蟲猶雙飛。鳳蝶上

處。再撲蝶。才貌相攜。俱有情。飛蟲不。分。花好醜。菜

花布。金賽。春花。亦何得。解。蝶採取。蝶也。亦何知。菜

有味。嗚呼。俺不。知。趣。他沒。深。情。何至。攝。魂魄。

不。攝。何失。心。棄。擲。親恩重。虧。煩。愛姐。整。儀容。

舊日俊俏丈夫嶺。今被。人厭。秋篠。鄉山外。孤松。欲。問

爾。熟思。後日。不。羈。駒。心似。秋葉。逐。風。飄。揚。亂。心。也

乎。噫。自。戒。寧。令。人。遲。勿。令。我。後。骨肉。相。惹。自有

情分。想像。山崎婦。悽。常。守。空。房。蓬。頭。也。不。理。是。估

舊日盟。旦生惜。奴識。良人。非。淺。淺。錦帶。繞。腰。再。欲

三。歡。卓。長。夜。呢。鴛。被。溫。諺。道。倚。財。主。人。半。雖。有。正

妻。欲。分。情。儂。能。記。得。可。不。失。往。秋。賞。月。井。垣。樓。

清光。照。雨。意。徹。底。隱。曲。無。飲。燕。有。興。夜。以。續。日。今

視。良。人。酸。鼻。難。禁。濕。襟。血。淚。吞。聲。而。啼。生執。小。聲。歌。念。佛。我。夢。寐。間。不。舍。爾。親。論。妻。諫。風。吹。耳。碎。泫。響。去

洛山邊。標。大。夫。松。日。相。比。雖。無。弃。章。大。臣。名。鶴。兒

聲轟口舌市。老妓拳舉梅香。俱是南柯一夢裏。看破世上無_二頑愚_一。雖_レ則如_レ此奈_二山風_一。搖_レ揚線_二飛_一轉蓬。又吹_二諫聲_一。砭_二肌骨_一。且君幸莫_レ忘。生牢記了。_旦生交執_二雙手_一。相泣秋天。金鳥西落。銀蟾東升。幾回晦望。憂愁無_レ期。方知違_二親有_一冥報。男兒意氣碎如_レ沙。已送_二己影_一。認_二做別人_一。我走影亦相從。呀。呀。呀。我止影亦停。哀哉亂想。至_レ生多岐。_旦媚同旋。妾是烟花何愛護。命絲應_レ絕。仍猶舒_旦逐_旦流世事無_二常處_一。且息尋_二簷野老居_一。劇博士曰。此貽之詞。多_二秋景_一。咏_二菜花_一者。舊詞中追_二思春光_一也。近有_二優新者_一。抱_二三絃_一彈_二春野雉_一。以換_二撲_一蝶之科。冷然掃興。又不_レ似_二狂情_一。後扮者須_レ致_レ思焉。

大塔宮身替音頭の場

竹本座淨瑠璃_{太平記}大塔の宮。蟻鏡は竹田出雲祿の作にして享保八卯年二月十七日より始是また古今の當り狂言なり先に云四鳴蟬に三貽永井右馬頭宣明の屋敷一段を漢文にせし有餘り長編なれば略して身替り音頭の内を抜て爰に出すしれたる物ながら本文と照らし見るべし爲に先本文を記すもの也。_略前サア_一宮さま鶴千代おどり_一と子をよぶ善知鳥安方のやす

き間もなき親心庭に入來る踊子に立まじりても此ふたり砂の中の金かや母は今宵ぞ名残りの音頭はやこの七月の十六日は佛のじひ奈落の底の罪人の呵責の炎やすませて充満其願如清涼地とうたひおどりとあそべども十七日の曙は元のならくに苦しむと宇蘭盆經にとかれたり我子は罪人ならねども踊は宵の夢の中此曙は死手の山さぞ父戀し母戀し戀し_一と泣は冥途の鳥かエめいどの旅の行鳥と娑婆に残れる親鳥の涙にしぼる袖の露消し昔の物がたり踊子衆も父上も聞てあきらめ給へとて語るもおなじ涙ぞやいにしへ多田の満仲の夢まぼろしの世をかんに乙のわが君美女御前すみの衣にそめてそまらぬ御いかり美女が首うて仲光と主命のがる_一方もなしむざんなるかな仲光はきれと有もお主也切奉るも御主也とかく我子の幸壽丸御身がはりと思ひこむ親の心を子はしらず手ふり袖ふり見るにきえ_一よわる心を取直し切てかへたる末世の手本武士の鏡の露ちり程も心残すな我も残らぬ今が思ひのきり所思ひのな切所さ_下

蟻鏡記

全本名。曰_二大塔宮蟻鏡_一。傳説其蟻鏡者。今藏_略在於山門長府云。又大塔宮之戎艇。新札已刻。云云。或是義興又當時而稱_一尊諡。俱出_二太平記吉野落城之卷_一。可莫論傳奇之焉。

替身踊場

浪花義倡語○傀儡家稱毫者畫欄之義也○詞中吃巧與三新兒一和語通。

花來來。青宮鶴千代。早開踊戲。叫雛乳鳥應。安洲。親意懸懸常不置。蒙孩偶齊上躍科早進庭間。衆踊兒。隊裡混列此兩穉。真是砂中有見金。母也今夜。決別之號頭歌。是也此也。七月之十六日。佛垂慈悲。奈落底下罪科。免呵嘖。歌唱充滿吾願。如清涼池。踊躍喜遊如何。十七將曉。依舊受奈落苦。益經有說。我兒何論。罪科。踊一宵夢。此曉死手山客。想戀父戀母。戀戀子規鳴過麼。音頭歌 花園之偶唱科孤離冥途之行。雙鳥現世引生。淚濕兩袖露盈。既消古昔談評。爺併衆躍孩嬰。聽發明悟覺醒。此話同是可悲。多田滿仲所爲。觀世態夢幻移。季男名美丈兒。剃髮欲染衣縞。恚怒於其有差殺戮命。仲光治。君命無所可辭。可悲仲光。命也君矣。殺也君郎。究竟豚子。幸壽代命。替身任當。親意無知。稚子躍嬉。擺手翻袖婆娑弄姿。傍觀消魂。弱心強持。斷既彼代。後代規模明鑑武士。露塵微軀。莫遺懷憾。我亦恨無。今也絕念期也。絕念那期也乎。

四鳴蟬出板の年迄壽門松は五十四年になり身替音頭は四十九年になる也亭々亭は岡白駒の狂號也と云り

忠臣藏與市兵衛の考

寛延元年辰假名手本忠臣藏を竹田出雲椽の作せしは元祿十五年義士夜討の折より四十七年に當つて假名手本の世界定りし事は子が著述忠臣藏類聚大成にも演べたれ共義士のあふも又奇ならずや又前々の編にもいふ茶屋場にて丹波與作が歌には淨瑠璃丹波與作の外題にて寶永四年より四十二年に當れり姫輕が父を山崎村の百姓與市兵衛と附しは壽門松の山崎與次兵衛より思ひ附て山崎村與市兵衛と呼是作者の出雲椽が一時の戲より附たる名也其比は此役者を言ば嘸一笑しつらん壽門松より三十一年後の忠臣藏なれば有べき事也扱忠臣藏の明年寛延二年出雲椽雙蝶々曲輪日記を作せしに去年山崎與市兵衛の名をつかひ與次兵衛の名を呼も何とやらおかしく思ひて扱こそ與五郎とは呼かへし物なるべし依て父の淨閑を與次兵衛とし嫁のお菊をお照とかへ難波屋與兵衛なん與平を南方十次兵衛の忤南與兵衛と呼替しなるべし雙蝶の道行にも壽門松の道行の文句の通吾妻受出せ山崎與次兵衛と置て後少し文句を替たるのみ也萬石通の長吉長五郎を蝶々と呼に語路よきゆへ雉子の歌に

合せいよ／＼春の季とはなれど壽門松にも秋の氣色をのべ榮種に蝶のあしらひ有ば春とも秋とも定がたし雙蝶々には次幕八幡村を放生會としたればますます春秋混雜して穴搜といへる番附にも是を難せり然れども近松竹田の名人達はらの論に拘はらず筆の走るにまかせ述べたるこそ名狂言とて今にのこれり道理にかなふ計りにて見て面白からず一部の趣向立かねる作者の口より批判言は五十歩を以て百歩を笑ふと云べし

松本岩井乗込騒動の話

天明四辰年十一月中旬浪華道頓堀中の芝居顔見世の乗込とて迎ひ船に華を飭り量負連中江南の藝者等御座船網船數艘に取乗大川より東堀長堀道頓堀の間にみち／＼江戸表より登り役者松本幸四郎岩井半四郎兩人を今や／＼と待ゐたり扱兩人は網島の料理屋鮎宇方を暮前に乗いたじ大川を東堀農人橋の下へ漕來る時橋の上より聲をかけ幸四郎半四郎是へ出て目見得すべしと大勢語りける兩人とも大阪の風儀はしらずいかゞ致してよかるべしと猶豫の内に藝者の迎ひ船より幸四郎半四郎は追附芝居にて御目見得を申上

ん先夫迄は兩人の物まねをお聞せ申さんといまだ兩人の聲も聞しらぬ事なれば藝者共いろ／＼の物真似に紛らす内はや久寶寺橋へ來れば始の人数橋へかけ附牽頭持共此方を嘲弄する段奇怪也といふ程こそあれ兩人が乗たる船を目當として礫を打込泥沙を撒懸ること雨霰の如くなれば猶も頻に呼はりて安堂寺橋へ來れば船の舳先へ小便擔桶を打込ければこは狼籍といふ内にはや其人影も見へざりければ誰所爲共しれざれ共猶行先も氣遣はしと長堀迄の内に牽頭持の船へ幸四郎半四郎を手取早にのせ密に長堀を西横堀へ廻し御座船にはやはり兩人の居る如くに見せ道頓堀へ漕行其内も九之助橋までには溝板を落し莖の重石程の大石を投込などして一向船もやられぬ程に兩岸より大勢聲々に語りける其内兩人の役者は何事なく西横堀より道頓堀を東へ廻り中の芝居の濱へ著て夜五つ時頃辛うじて乗込の規式を初ける往古道頓堀に名代櫓を頂戴して芝居興行せしより以來かゝる騒動ありし事を聞すと也幸四郎半四郎兩人共此度始て上方へ來し事なれば斯迄意趣のあるべき筈はなけれ共六箇年已前江戸葺屋町市村座にて尾上菊五郎と松

本幸四郎と口論有りし事大阪迄かくれなく元來大阪に古き馴染の菊五郎を右の口論より半季餘り休座させしは全く幸四郎が所爲也と其節の間違は手代彌兵衛といふもの惡心より事起りしとはしらず幸四郎一人目廉にとられて今宵の騒動におよびしは其身の災難とやいはん其上角の芝居は菊五郎忤丑之助今年の座元にて軒並びの中の芝居へ幸四郎登り來るよしを聞より芝居方のもの幼少なる丑之助にいひ含めて彼が座元座附の口上の節中の芝居へは追附こわい伯父さまがござるとの事故夫がこわさに此芝居へ遑て参りました何卒いづれも様の御憐愍をもつて孤の私今年は別してお取立下さりませと顔見世の口上にいひたるにより弱きを助る大阪の氣風にて扱こそ幸四郎に十分憎みの附たるなるべし

菊五郎幸四郎確執の話

安永九子年四月二十二日江戸葺屋町市村座にて狂言半に兩人の口論有此儀何故ぞと尋ぬるに去亥霜月大谷廣次尾上菊五郎松本幸四郎杯にて芝居相始し所顔見世不當りに附子の春狂言より段々損金打續きける故幸四郎仕切場手代彌兵衛といへる者に掛合所詮座

拂極の通りにしては芝居相成難く給金を遣はさねば出勤も成まじ兎角極め通りを取切すば出られずと有衆中は是非なし芝居相續の爲なれば少々にても請取ば勤んとある仁計りにて相始候へど廣次民藏杯不承知の人々を除きて四月上旬より芝居興行に附菊五郎も二十日迄に給金相渡すべき約束にて狂言は容競出入の湊の淨瑠璃狂言にて殊の外大入せしかど菊五郎へは拂もせず二十二日に相成ても何の沙汰なく始めける故平生物堅き菊五郎殊に幸四郎が其昔市川武十郎と云し時の衆道の意氣地も根にありてや今年の芝居は不當とのみ此方へ云聞せど勘定はしらず春よりの揚り金不足と計りにも見へず察する所仕切場の手代彌兵衛幸四郎一つになり是迄の損金を埋ん爲不當りと言觸すはきやつら兩人が拵事と以の外に立腹なし右の狂言五幕目黒船内の場忠右衛門に幸四郎、八木孫三郎菊五郎にて來り獄門正兵衛の前にて態と孫三郎忠右衛門に惡口をいふ狂言を幸ひとや思ひけん菊五郎膝立直し幸四郎をはつたと睨みいかに人非人の幸四郎よつくきけおのれ仕切場の彌兵衛と馴合顔見世以來相應に入たる芝居を不當りと吹聴なし役者

の給金をひづめたれ共斯いふ菊五郎其外高給の者共はたとへ今年中の給分を取ず共勤べし中分より下の小詰役者囃子方の者共は其日過も同前の事なれば妻子を始幾ばくの困窮ぞや既に以て大谷氏身共が弟子の者共迄身を退かねば世間へ立ず勤居ては世業にならずさるによつておのづと身を引やうに成たるも皆その方と彌兵衛めが所爲也夫故今日此座切にて菊五郎は出勤いたさぬ心を定めて今此席にていひ破り立歸る也返答ならば表の彌兵衛を初めとして幸四郎も一言の詞をなせいださぬ身共は妻子にも暇を告帶せし大小の内脇差は眞劍にて篤と寝た及も合せたり返答あらば相手に成切味を振舞申んと大に聲をあらゝげ呼はり扱見物に向ひ手をつき大切の舞臺狂言の半にて私の宿意をもつて各様の御聞も憚らず箇様に詞を荒せしうへは最早御當地にて相勤る所存も無御座候へば乗物町に住居仕候破家も外へゆづり上方へ參る所存しかし幼少の丑之助と申忤も持たる私殊に御馴染を重ねし御當地たとへ此後死去仕候共跡々迄も忤を御最負御取立ひとへに願奉りますると懇ろに暇をつげ舞臺を立て悠々と這入ければ舞臺はしんと澄

切て幸四郎を初め残りの役者もしらけて見えければ見物もそは／＼と成りけるにぞ俄に氣をかへ孫三郎殿の立腹併しあの如く思はれなば憤りも道理成ども是には心得違間違のありさうな事ども全く役者の我等表の勘定損徳を委細に存せず何事も仕切場の彌兵衛に預置たれば明い暗いは追ての儀今あら立てあの仁と舞臺にて彼は論ずるは御見物様へ無禮といひ大切の家業の場所サア庄兵衛此黒船に言分は有まいがなアと直に舞臺の狂言に取なせし頓智功者の仕打に役者も心附て跡の狂言首尾能く勤樂屋へ入ければ見物も思ひもよらぬ狂言半へ菊五郎が日比の鬱憤あの如くいはれては幸四郎も免すまじ今日の芝居も是切にて果すべし扱々悪い日に參り合せしと力を落しゐたりけるが幸四郎が狂言に取なして舞臺を初めたる即妙に見物はしほれし花に水を灌ぎたる如くにてヨイヤ幸四郎名人の仕方よく出來たりと悦びける幸四郎始め武十郎家號先三升市川高麗屋が元の名を譲り受堺町にて高麗屋とて芝屋茶やいだし難波町にては松本香といふ油店を出し中々欲心非道の者ならねど手代彌兵衛幸四郎が差圖也といひしより篤實なる菊五郎

誠と思ひ掛こそ確執に及たり菊五郎病氣に附休みある内京都より相談に來り秋の末本復して直様上方へ發足せしなり子の春より京都に兩年勤め當を取寅の暮より大阪へ下り忠臣藏の大當り其秋非人敵討も評判能く卯の暮迄中の芝居を勤めしに極月中旬より病氣に取合終に卯の暮黄泉の客となりたり扱又幸四郎は佞惡の手代彌兵衛には暇を遣はし其身はいよ／＼評判能く年を重ね辰の年の暮に若女形岩井半四郎同道にて大阪へ登り此災難に逢ひけれ共後には何事もなき様に成けるなり

梔狩劔の本地艾屋の話

寶永六丑年竹田座淨瑠璃に梔狩劔本地は近松門左衛門の作にて余吾將軍惟茂信州戸隱山に紅葉狩して鬼神を退治せしを趣向とし三の切江州伊吹山の麓艾屋久作住家の段は別て珍しき趣向にて大内の侍所鷹巢の帶刀の北の方一子房若流浪して己前の家來久作の方へたよる久作舊恩を忘れ大宰の大貳諸任が惡事に組し帶刀の妻子を殺し平國の御劔を奪はんとす久作の妻夫を諫兼ね愛子萬虎を殺す久作怒つて妻を殺し終に主人の北の方と房若の手に討たるゝ場也久作後

に立役とならば在來の仕組也強惡にて妻子を手に懸己も非業の死を遂る惡事報の早き事を示すが此一齣の趣向也淨瑠璃は是にてすめ共歌舞妓狂言にする時は久作敵役なりにて果せば仕手なかるべしされ共此場以前は淨瑠璃にて大にもてはやしサ／＼と伊吹艾の功能又女房の愁ひに持佛にごさる如來様つい木の切と思ふてかとの文句は誰々も一口は話し物也文化の始め近松徳叟増補して李冠二代目巴丈中村大吉久作夫婦として舅百足百兵衛奥山淺友也といふ敵役を加へ久作後に立役となるに仕組たり是にて歌舞妓狂言とはなれ共舊趣向に背き唯有ふれし世話場となる故此儘にて後歌舞妓にもする事なかりし此時の李冠は能辯なる上巴丈淨瑠璃三味線を善し艾屋のつらね妙也後意見の内抜刀の久作を女房支へながら花道中程まで引摺轉び掴合ながら聲をひそめて諫むる女房の口へ手を當シ／＼と呵り附る久作の仕打狂言を捨て眞實夫婦の情合前後に此夫婦の仕手有まじくと思ひ毎度いひ出し感ずる所也今の慶子元浪華今唄住人是を覺居て仕て見たきよしをいふ折節千本櫻納りし時なれば三の切に是を用ひ艾やを鮮やとし釣瓶鮮屋彌助本

名監物太郎と替へ女房をお里と呼替へ艾屋を嚙こなし腹に納め扱干本櫻の鮮屋の増補を作せしなり監物太郎は知章^{新中納言}知盛の二子^{知盛の二子}の家來なれ共惟盛の家來とするは狂言道の常なれば論の外也其節の外題役割および三の口椎の木場を略し三の切鮮屋場の正本を爰に出す天保六未の年五月中の劇場前狂言

押てしめて馴らす早鮮の賣聲に内や床しき釣瓶の首桶

靜が舞の一さしも去年の葉の道かへて 花樽詠吉野山路^{七曲}
鸚鵡返しのことの葉も情に送る錦の直垂
御恩報じの告ごとくに重て賜る狐皮衣

しめつゆるめつ調見る小鼓の手柏子に音や慕ひし筐の著長

釣瓶鮮屋彌助

中村芝翫

主馬小金吾

中村鶴助

若葉内侍^{權太妻小よし}

山下金作

いがみの權太

淺尾與六

彌助女房於里

中村富士郎

梶原平三景時

片岡仁左衛門

彌助の子善太郎

六代御前

洲股運平

番場忠太

以下略す

詠吉野三齣の正本

造物三間の間二重舞臺向ふ赤壁納戸口重戸棚上手折廻りの中二階反古張の障子をはめ此取合佛檀橋懸り一間の店上おろし釣瓶鮮の看板後の方板間に鮮桶大分並べ棚にも鮮桶澤山並べ有此脇に藪垣いつもの所入口藁葺屋根舞臺前に小さき店の上に鮮のべ木藁苞竹の皮包小桶並べ入口の店先に手桶に蓼四五把漬け有よき所に彌助世話形頭に手拭を巻き傍にお里世話女房の形襷前垂にて鮮を附居る見へ淨瑠璃にて幕明「風味も吉野下市に賣弘めたる所の名物主彌助も友稼ぎ二人りが中の子鮎鮮愛にあいもつわんぱく盛り茄子はならぬあさ爪の釣瓶鮮とはこのもし、^{ト此内橋懸り}より子役四五人善太郎もまじ^善皆こちへ來て遊ばぬ^{ト此内橋懸り}り草花龜杯を持出門口にて^太皆こちへ來て遊ばぬ^{ト此内橋懸り}イヤ／＼いちへいて魚釣て遊ばふ善太も跡からおじやサア皆こい／＼「誘ひ連てぞ行過る夫婦はべ木の手を休め彌助先一ぷく仕らふそなたもちと休みや／＼おアイ／＼善太郎又遊に出やつたか今朝の清書を爺様になせ見しやらぬぞいのう^太善と様是を見て下され彌どれ／＼ム、あさきゆめみし囁見や此頃はめつきりと手が上つたさらば清書の褒美をやらふか「褒

美やらふと取出饅頭^{里ソレ}父様がほめてじや随分精出して習ふのじやぞやさあ奥へいて遊びや〜善嬉しい〜獨り遊ばふ「いふも愛敬愛盛り走つて奥へ入にける^{里ノウ}彌助殿お前獨りは何をしても過兼ね身を持て女房子故にさま〜の憂苦^{勞乍}去夫もマア四五年あの善太郎が十三四に成たれば持て産れた果報で何萬兩儲きやうやら金といふては持たぬけれどあの子が有ばこちや金持も同前併あんまり身代に氣をもんで患らふてなぞ下さんすなへ彌ハテ扱こふなれば苦勞は互じや年より器用なア坊主めあんな子を産附たは金を産むと同じ事そなたの釣瓶が上桶故おれが漬加減もよいといふものはから又夜なべ仕事も精だして一桶拵よふわいの^{里エ}、ひる中からそんな事でしなましやんせいなア「じやらくらまじりの女夫中さすが鮮屋の女房とて味ひ馴とぞしられけり^{里コ}レじやらくらもよい加減アレ〜旅人衆が大勢見えるわいなア「オツと合點と店先に進出釣瓶鮮の口上を商賣口にぞのべにける^{ト在郷になり花道と橋懸りより旅人の仕出し}捨ぜりふにて大勢出みせ先彌凡諸國に鮮の數々多しと申せど見ぬ唐土の鱈の鮮はちんぶんかん物我日の本で

は江州の鮎の鮮源五郎鮎とは申せども夏百日が其間此魚の味よき故に夏比鮎とも號けたり^{里沖}の鵜の飛巡り長閑な海に浮上る魚を蹴爪に引かけて苦むす岩に藻を著て押て馴さすみさこすし^{彌竹}の皮はなすやいなや咽へ飛ぶ夫は紀の國雀鮮^{里つかり}加減の若い若狭の鹽や鯖の鮮^{彌味}のよしあし得もいへぬ筆捨山の鮎鮮^{里神世}の昔さばへなす神を鎮めし今井鮮^{彌夫}は世間のこけら鮮此大和路の櫻鮮^{里お子様達}にはよふ馴鮮舌卷鮮の酒さげん^{彌ドツコイ}おさへて鮎の鮮もひとつ吞で鳥貝の宵寢まどひを起鮮^{里短}い夏の一夜すしつゝい明易い早鮮にめてからみし柱鮮^{彌甘}い加減の釣瓶さあおみやげに芳野鮮あがつて風味をことうじませ^{西人}お求めなされ〜めして御座れと賣立^{旅人}イヤもう口上計りでも直打は有^{旅爰}一桶貰ひ升旅こちは三包もらふぞや一辯舌がらに上下の旅人思ひ〜に鮮のあたゑ煙草吸附遠近^{ト在郷にて仕出し雙方へわかれ}も旅路成此家の小舅いがみの權太^{ト在郷にて仕出し雙方へわかれ}這入向ふより權太引廻し^{合羽に}太どふじや女夫ながら精が出るのう「づつと這入れば仕事の手をとめ彌是は小舅殿よふこそお出^里兄様此間は御座んせぬがどこも惡ふはないか

へト煙草益持行權
太上へ通つて

んイヤモ悪い〜始よし後悪しじや

彌助聞てたも上市の胴に三十貫の勝は有ても盆の上
に錢はなし形に取つたは此だんびらじや

ト風呂敷數より
出して見せ

扱是からが下り坂三十貫目ばいを打つて十兩計りの

どかおちれき様をばらしてま一軍と思ふても早速に

買手がなそこで爰へ出掛て來たのじや度々の無心

で鬱陶しふは思やろふが又二三兩才覺して貰はざ成

まい彌どふでそんな事で有ふと思ふた勝ば御無沙汰

負るとお見舞ハテ現銀なお人では有ぞ里とふでござ

んすこんなさもし商賣して親子三人がかすかな身

過ぎ五度七度の無心も小舅と云名が有ばこそ彌助殿

の心遣ひ兄甲斐いふも程の有物お前にかゝつて私し

やあの善太は飢つよふもしれませぬちつとは又妹の

心も思遣つたがよいわいのんエ、ベラ〜とや

かましいおのれにはいはぬ彌助小舅御の頼じや聞入

れて貰はふかい彌夫は安い事じやと申たいが先此度

は出來ませぬん承知じやといふのか彌嚙漣茶杯進

せませいの里エ、捨てをかしやんせいなア

トつんとす
れる權太彌

助の傍へ膝を詰かけんわりや元京の者で此妹が主人と一つ屋

敷に奉公いつの間にやらちる〜くつてあげくの果

には腹の内に申分その事が露顯して成敗に逢所を運
強ふ助かつてお暇貰ひ此下市へ來たは七年以前その

砌親仁は死るゝ妹めがとこほへ廻つてどふぞ世話を

頼み升るといひを懸りやつながる縁といひ此家を

かり請鮮屋の取附世帶道具から米から味噌から薪迄

買調て世話やいたも盗人の晝寢當てがなふて骨折ふ

かいコリヤ兄は親兄親様じやぞよ養ひ料から博奕の

元手つゝけたら何じや彌ハ、、、彌助が身の上の

棚おろし今の今迄とんと存升なんだとばけない

〜かう云ひ出すからは邪が非に成つても取むくつ

ていぬるのじやぞ里エ、仇憎てらしいその云ひ様ぞ

ふいふ邪見なおまへ故其年に成ても三日にあげず女

房を仕替へ聞や前方のお内儀様に子迄産さしやんし

たじやないかいな夫も夫なりじやげな子の親に成つ

てもまだ其惡とふは直らぬかいなア權よふつべこべ

と理屈ばるめらふめ女房がいくたり變ろが小忤が何

匹出來ふが勝手でおれがする事うぬらが指圖はマア

請ぬ兎角れき様の元手が入用否でも應でも持ていぬ

のじやそふ思へわりや親といふ字は削られまいぞよ

忝くも舅様じやぞ「舅々と平押は居催促とぞ見へに

ける歩みほつれしわらんづや六代君はすごくとお
 ちよばからげに破れ笠店先に立やすらひ蓼取上れば
 善太郎ははしたなくト六代も前口まくの形りに出でたてなとらふとする善あれと
 つ様蓼を乞食が盗むぞや「いふに彌助は立上り掴ん
 だ蓼を取返し彌近所には見馴ぬ子じやがほしがる物
 に事かいて蓼を取て何にするのじや龜相者では有わ
 いの「ても龜相なといひながらつくく」と見る形り
 格好六代君は涙ぐみ代六イヤ盗はせぬ母様が暑氣のお
 なやみ一足も歩行れぬとおつしやる故蓼とやらを
 貰ひに來たのじやわやい「こらへてくれとへつらわ
 ぬ詞に素性あらはれし里ヲ、いとしや參宮をする子
 じやそくなお袋はどこにぞや暑氣に當られたとは
 氣の毒なたでがほしくばやらふぞや「いたわる妻は
 佛性角を隠していがみの權太んヲ、妹そうじや噓に
 も親の事といふはさどくくコリヤ坊主よそふして
 母親計かまだ外に連でも有か代六ヲ、家來にはぐれて
 母様獨りあの向ふの辻堂にんスリヤ向ふの辻堂にト
 相書より口森の人を出して正しくこいつは御觸の有六代彌ヤリアト權ト
 太ちやつと人相んサア六々にしらぬ道を親子の旅人そ
 書をかくしてれはいかい難儀であらふおれが内へ連て養生もさし

てやらふ藥ものまそヲ、か愛ひやつじやなアさあ坊
 よこい「猫撫聲に立よるを彌助はわざとおし隔
 彌ハテ扱店の物に手を懸て道中の小とんびめふびん
 かけるも人によるコリヤ重てうせるとひどいぞよさ
 あきりくうせいエ、きりくとうせふてやとこぼ
 へるか見せしめに是をくらへト「傍なるきせるふり
 あげるんコリヤまで彌イヤく退つしやれんハテ扱
 まてとお里と兩人しマアくまでといふならまていや
 いよたけもないものを是で叩いてたまる物かコリヤ
 妹そのたでちつとおれにくれ里アイくト持て行權太
 んコリヤたでをやる程にはやふ吞してやりやよふな
 る迄は母親の傍に附てゐて辻堂の内より外どつこへ
 も行なよ「やれば六代おふへいらしくいたさこらへ
 て泣た顔せまいとすれどないじやくり笠傾けてた
 ち歸へるト六代向ふへにいる小舅殿の挨拶で仕合なこびつちよ
 めイヤくよその事じやないコリヤ善太よ箸片しす
 べ一本よそのもの取てくるなよ里そふでんんす夫が
 くせになると後にはいがみのトいはふとして權太を見てちやつと口を押へヲ、
 兄様お前ももういなしやんせぬかいな彌イヤく折
 角のむしん出來ぬといふも餘所くしい拵よといひ

たいが手元にはなしマア才覺の出来る迄ゆつくりとこつちで滞留んイヤもふ行附次第の寢泊りは叩人のないやもめの氣さんじ彌今朝買ふて置たあぶりゑそが有ふ酒など一つしんせましやんきすとはよかるふ拵の出来る迄どりやとろくとりや掛ふかト歌に成り權太向ふへ心なのこして彌助と顔見合奥へ這入る彌合方里是こちの人今の子供に氣が附ずか何ぼうよごれ破れてもどこやらに見所ある物のいひようのおふへいさ目もと口もとこれ盛様に生寫し疑ひもない六代様にまがひはないおいとしや惟盛様御一門始西海の波にたゞよひ給ひ若葉の内侍様にも御流浪との事親子御のお目にかゝり御先途を見届るが古主への恩報じ向ふの辻堂にムるげなわしや一走りいてよび升て來升ト立かけるを彌助思ひ入有てとめてイヤありやそふでは有まい六代様があの様な形りをしてムふか此下市におれのゐるといふ事をお聞被成たら始から親子御連立で尋ねてムるはあたりまへ何ばふ世を忍ぶお身じやとてあのなむさい形りをしてムらふかい何をきよろ／＼いふのじやぞいのト奥へ聞へけすお里は氣のつ里サア夫もそふでムんせうがどふやがぬ／＼なしてゐる様にもみ

ふ旅人はなし日は暮るどりや店を片附ふか里さあさあ私も手傳ひませふ「暖簾はづし看板しまひ店片附て部をおろし彌此間から今だにぬけぬはやり風殊にけさからせわしふて頭痛がする今夜は宵寢と出かけにや成まい里又風をひきそへさしやんしたのでムんせう藥は嫌ひなり粥でも焚ふかへ彌イヤ／＼一寢入して汗をしたら直るで有ふ坊主めもいねむつてをるどりやと／＼が寢さしてやりませふ女房共門口しめて用心しや「善太いだいて一間の内うん／＼うめいて引かぶる木綿蒲團の裏表行燈に灯はともしても心は暗く氣も細く胸にあまつてとつおいつ里いよく／＼それに極まれれば捨て置れぬお主の難儀どふ思ふても心懸りこふして居て案せふより辻堂迄は二三丁つい一走りそふじや／＼」此間に一寸すべ草履はく間もせはし門の口戸をさしよせてとつかはと辻堂さしていそぎ行納戸をそつといがみの權太胸算用もしつくりと合はせて置た金のつるしてこいまかせと出ゆくを起る間早く主の彌助ト權太刀をばつこみ出ふとすゐる彌助中二階より彌助つか／＼と出て彌ア、是小舅殿どこへ權イヤおりやあのついで一寸彌ハアテマアゆつくりとさつしやれいのふい入口びつ權イヤ

彌助思ひ出した用があるよつて一歸りいんでこふと思ふて彌ハテなア無心をきくまでは居ざいそくじやといふた舌の根もひかぬうちにいんでこふとはどふやら胸に一物が權イヤ一物も二物もないが彌助此春わがみが熊野參り仕やつた時古主惟盛様に逢ふたと聞たが惟盛様の在家は貴様がよふしつてゐるよふがのハテ隠しやんなしる筋が有てしつてゐる其惟盛様を始め若葉の内侍や六代御前をからめ取てなりと又は首にして成其梶原様へ持て行と一かどのほうびを下されんとの事慥なせうこは是此人相書に引合せとの事じや定めて様子は聞やつたで有^{ト懷より繪姿を出して見せる思入有て}ふ彌いかにも夕べ六田からの戻り道村の衆の嘲にも惟盛様初め御臺若君此三人の内を捕へなば褒美をやらふと書姿を以て嚴しい詮議とサア爰までは聞たれど此春惟盛様におめにかゝつた覺もなし又もとよりお二方の行衛は猶しれずそれに又權太殿根ほり葉ほり様子を尋ねてどふせふと思はつすやるぞ權サアそりやあのそふじやそなたや妹の縁につながる古主の御難儀惟盛様はともかくも御臺様御親子を尋ね出し金輪奈落の底迄もお力となる心じや彌スリヤお二方

をかくもふ心か權我身の腹と同腹中じや彌イヤ此彌助は訴人する氣じや權あの古主のゆかりを彌昔はともあれ今は此通りの鮮屋商賣内侍六代二人の首を梶原殿へ送るとほうびと釣がへ金のつるに取附といふ物何とマア甘い事ではないかいの權スリヤ訴人してほうびのかねを貰はふといふのか彌名を取ふより徳をとれと遠い忠義を立ふより目の前のかねもふけがマア當世で有ふかい權ム、是も尤時におりや件の用を彌こなたの用とは出口の辻堂權ヤア彌獨ほうびをせしめにとは手の悪い小舅どの底意をわつて談合さつしやれ權ハ、ハ、ハ、イヤその氣なら落附た最前のちつさを慥に六代とにらんだ故彌サア此彌助が此下市村にゐるといふ事家來の内がしらしたら尋ねて見へるは定の物質義と見せて此家にかくまひ寢込のゆだんを一討權道ではぐれた家來とやらが尋ねてうせたらおれが加勢彌その場のしぎは氣轉と駈引權しゆびよふいたら彌ほうびは梨子割權さいさきいはふて彌奥で一獻權馳走にあはふか彌小舅殿權聲殿^{ト又出よ}ハふと^{ふとするを}彌案内しませふ權ても時代なやつ^{兩ハ}、ハ、ハ、「善か悪かを一道に胸のかけごややれ疊伴

ひてこそ彌サアいかつしやりませ「入にける神ならぬ佛ならねばそれぞとしらぬ夜道を内侍六代古主の恩を忘れじと女房が案内に打つれ立いそいできたる藁屋の軒ト向ふよりお里六代をおひ風呂敷色を里やれくお久しや御臺様則あれが私が住居さあお越遊ばしませ「まあく内へと正座に伴ひ里マ、何から申升ふやらやれくお久しやお聞及びもムリ升ふ監物太郎が只今の名は釣瓶ずしやの彌助と申て見苦しふはムリ升れどまあ御ゆるりと被成ませ「いふに内侍は落附給ひ侍むかし忘れぬそなたの深切忘れは置ぬ嬉しいぞや里是はく御勿體ない今宵は取わけあなたの事思ひくらしをりましたがよふマアお二方共御そくさいでふしぎのおめもじさり乍ら此所に居ります事何者にお聞被成殊にはるく旅の空見れば外にお供もなくかちやはだしの此お姿は心得ず「お聞せあれとありければ内侍は涙の御聲くもり内成程ふしんに思やるは尤我夫惟盛様に都でおわかれ申してよりすまや八島の軍を案じ御一門残らず討死遊ばしたと聞かなしさも嵯峨の奥「泣てばつかり過つる夕方風の便りに聞たれば高野とやらにおはすよし幸ひ

そなたらも尋ねたし小金吾をめしつれて此大和路へ心ざす途中に於て追手に出合ひ小金吾も見うしなひ難儀の所茶店の亭主が情にて二人を賤の姿にかへよふくその場をのがれしがそなたに逢ふたは盡せぬ縁自らはともかくも此六代が行衛をたのむはそなた衆夫婦かならず見すてゝたもるなや「身のうき時の人頼み恥かしさよと計りにて涙にくれておはします里おいとしや最前も若君様と存ませす慮外いたした勿體なさそふでも有ふか昔にかはるそのお姿いかに時代なればとて三位中將惟盛様の御臺若君様とかしづかれ給ふお身であり乍ら召しも習はぬ賤の小袖此あり様はと取附てむせび歎げば若葉の君ひとへに手をあて袖をあて伏しづみてぞおはしますお里はなみだ打拂らひ里ア、私とした事が色々の事を申出しおゆるし被成て下さりませしたがかうお供いたし歸りますからには來しかたの御厚恩夫彌助もいひがひなき土民にて暮せども昔に變らぬ男氣夫婦が命擲出ましてもお世に立いで置ませふかお館を出ました時身に持た子も成人いたし六代様のよい御伽お世にお立被成れたら御家來にして下さりませおとなし様におめ

がかたい何もほしふはムり升ぬか「尋ねに六代おとなしく六イヤ／＼何もほしふはない母様あんばいはたふもり升か内さいのふお里に逢ふたで氣も落附癪の惱も忘れました彌助はどこにぞ逢ふて何か頼みとふゐるわいの里ハイ／＼早速出られ升で御挨拶をいたす筈折あしふ風の心地したが一寸お目見へを致させ升ふ「いひつゝ立て一間の内のぞけば善太の寢入し儘夫の影の見へざれば里めんよふなどこへいかしやんしたぞエ、聞へた頭痛を直そふと藥の手煎じ時も時とて何ぞいな「辛氣な事やとたつ汐に出ばなひとつと茶をくんで勝手へ出れば若葉内侍内彌助が病氣とは嘸そもじの氣抜ひ高いも低いも女の習ひ夫子の上には我身にもかへて心を痛めるぞや世が世ならそなた衆にうき身のさがを頼まるゝこそ道ならめかへつて頼む身と成しを「あはれと思ふてたもいのとさめ／＼とこそ泣給ふ里ア、冥加ない事おつしやりませどの様に致ましても御恩はなか／＼歸されませぬ何を申も爰は端近人目にたゝぬあの二階つゞきの奥座敷へお供いたしませふ次の間は私共のふしど御用があらばお呼被成ませヲ、此包は慥にお著がへ

夜風があたりらばお身の毒さあ上へ引ばつてムりませしふるしきより襦袢を
せしめて二人に引ばらせ さあ／＼奥へムつて御草臥休めにおやすみ遊ばせ内そんならお里六代おじや里どれ御案内申升ふ「恥ぬ心の奥底を明て芳野の山蘆落くる軒の月ふけて六代君はふら／＼と居ねむりこけしあぢなき若葉の内侍も旅勞れ嘶寢入の袖枕前後もしらすふし給ふお里はあたふた押入より夜具持運び我身は常の間に
ト中二階の上手へ連て這入りふとん枕を運び 出て
善太郎の 里ア、時代とてすき間の風もおいとひ有しにおいてしやなア「夜寒を何と洗濯物我子の裾へも打きせて里此彌助殿はどこへいてぞどりやちよつとしらせて來ませふか「納戸の内へぞ入にける既に燈し火半點じて三更ともなふ鐘の聲が
ト本つ 深夜の雲に埋もれて四方の人音靜つたる彌助はそつと納戸を出そり／＼と邊りを見廻し奥を窺ひさし足に鼻息窺ふ胡椒の粉藥研鐸の二尺一寸するりと抜て手桶の水音な聞へぞ軒端もる月には凄き砥石のひゞき秋の調子もさつばつたる胸はするどき三惡道玉ちる計りにとぎすましあしてやつたと獨りぬみ奥をさして入る所を向ふに立て女房お里里まつたこりやどこ

へゆかしやんす彌コリヤ姦しいおどばね立な里イヤ
 〳〵やらぬお二方のお越の様子彌ヲ、納戸から聞て
 ゐたそこはなせ里イ、ヤはなさぬ彌エ、面どふな
 「とゞむる女房突のけ〳〵ふつても引ても放さばこ
 そ片足飛に家の内を引摺廻れば附て廻り戸棚の隅に
 どふと引すへ是此拔身は何じや^{ト思はず高}彌助殿^{聲にいていふ}
 彌助口^{に手をあてだまれとあ}せるこなし^{お里もひそめて}熱にをかされ物に狂ふ體で
 もないがお主様の臥戸をめぐり誰を切る刀じやぞい
 なア彌ヤイ〳〵だまれ大事の思案が後手になる物數
 いふな里イヤだまつてはゐますまいエ、マアこなた
 様はのふ^{ト下へ突すへる砧}入の合方になる情なやいつの間に魂が入か
 はつたぞマア有ふ事か大事の〳〵お主様の御厚恩七
 年はまだきのふけふ二人が不義の忍び逢ひあの善太
 郎がおなかにやどり身は重ふなるといひお主の法度
 を背くといひ子はおろそふか流そふかと途方にくれ
 て既に死ふといひ合した事よもはや忘れはさんすま
 いあの内侍様のお情でお袖の下よりおかねをいたゞ
 き夫婦づれでお家を走り程なふあの子をよろこんで
 三人が命永らへたは誰か影じやとおもはしやんすわ
 たしやけふ迄お主の方へ足をむけてもえゝ寝ぬわい

の互に性根を見届ていひかはした様にもない眞に^{ほん}
 〳〵世に落ぶれては心迄その様に成る物か女房子可
 愛が定ならば分別しかへて下さんせいなア是彌助殿
 「夫の膝にもたれふし聲を立じと我袖を口にくはへ
 てしめ泣にかこち口説ぞ不便なる彌ハテ扱とゞまる
 思案があるにもせよ留らぬも又思案がある何を女の
 小ざし出たうぬらに智恵をからふかい邪魔さらすな
 里よい〳〵そつちの分別がきはまればいつそ思案を
 きはめてヲ、そうじや「傍なる庖丁おつとつて一間
 の内に走り入る我子の善太引起し心もとにさしあて
 れば彌ヤイ〳〵どふ氣違ひめ恨があらば口でぬかせ
 科もない忤をどうするのじや「堪忍せぬとねめ附る
 女房涙にせきくれて里是いなア科ない物は殺さぬと
 は邪見なお前の心でもよふマアしつてゐやしやんす
 なア我子を大事と思ふほど他人の子は猶大事殊に御
 恩あるお主と若ざみ殺してそもやその報ひが我子に
 あたらいで何とせふ此子の行すへお主のばちういつ
 らい報ひを見せふより一思ひに殺すは皆おまへの惡
 心からお主と我子を右左りの兩手で殺すも同じ事は
 庖丁やと思ふてかおまへの心の劔じやわいなアさあ

六代様から殺すのか彌ム、サそれは里此子から殺そ
ふか彌コリヤまで^{人兩}サア／＼／＼／＼里生としいけ

る身の上に命を大事とおしめばこそあついやいとも
堪忍するいたいとしりつゝ針もするよふわきまへた
こな様に惡鬼惡魔が入かはつたか地獄の迎ひがゆか
しいか淺間しい心になせ成下つて下さんしたぞいな
ア「むごい悲しい心中と聲を立ねば眼でうらみ恨は
夫思ふは主人なげき一つを二筋にこぼす涙は組糸を
たぐり出すが如く也彌助は始終とつおいつ見まはす
うしろの納戸より手筈のいかにと窺ふ權太せくまい
早いと目ませと仕方顔でうなづきひつこめばなつと
く顔を打うなづき彌ヲ、そふじや／＼誤つた／＼お
主は根本こちとらは枝葉根さへ枯ねば枝葉はたつお
主がもとゝいふ事をしつてゐながら欲の道に迷ふた
は此善太郎がふびんなからしたが女房共今の意見で
よふ合點がいた天道は恐しいすつての事に惡魔にさ
そはれ一生不忠の名を残す所今の意見で眞人間かな
らず疑ふてたもんなや里何といはしやんするそん
なら心をイヤ／＼／＼あんまり急な折よふ眞實の發
起と思はれぬ彌ハテ扨疑ひ深い木石ならぬ此彌助で

きめんの道理を聞て得心せいでよい物か惡事の病を
助かつたはそなたの配劑女房とは思はぬ忝い是じや
／＼「手合せすれば嬉しさの猶も涙に咽びしが里夫
でこそ私しも落附たかんまへて其心を違へてばし下
さんすなへ彌何の違はふかういふからは變せぬ魂此
春熊野參りに惟盛様のお目に掛り戻つてから御主人
達の御先途を見届るには少しのたくわへもなけねば
とつめに火を灯す様にして喰ためた三貫目の金は見
てたも「佛檀の抽出しより取出すは財布の金女房の
手に渡し彌此かねは路銀にして一まづ高雄へお見送
り申す思案お兩方の駕籠二挺今夜からやとふてをこ
ふそなたも休んで七つに出立の用意しや里それは太
儀でムんすなアしかし此比は用心も悪いそふな幸ひ
かねは此店の鮮桶へ入て置たらかへつて人の氣が
附まい^{トすしおけへ入}もとの所に直し是早ふ戻つて下さんせへ彌そり
やがつてんじやどりやいてこふ「門の戸明て出かゝ
りしが彌ホウよつ程ふけた幸ひの犬おどし女房共そ
の刀おこしや里アイ／＼したが刀はいるまいがな彌
エ、夜道をあくるくに不用心なわい里さあ／＼そんな
ら持てゆかしやんせ彌家内に氣を附いよ「刀おつと

り腰にぼつこみ心の一物お里は見送る門の口權太郎は納戸より先へ廻つて椽の下くつしやりいはすが近道とさし當つたる思案の罫ぎは口に見送る權太納戸より出て中二階の椽の下を切やぶるお里は門に入る「權太郎は實の彌助そる」戻り藪垣を切やぶる床のめりやす「權太郎は實の子の下彌助は門の藪垣を破るも忍ぶも一時の身をひそめてぞ」トチクリに成り兩人「忍びいるとはしらすして女房はごそつく音と人影を見るよりぞつと身もふるはれ」トお里始終心得ぬこなしにて入口を明て里そんなら今のは偽りであつたか出てゆくふりでゆだんさせ簀の子の下からさし殺そふといふ工み事「ても扱も恐ろしや情なや里あ、いふ邪見な惡人に永の年月連そふたは此身の業か」たゞしは何ぞの報ひかや里此上は内侍様へおしらせ申お供するより外はないヲ、そふじや「ゆかんとせしがイヤ」假にも夫と名のつた人そもつみに落されふかいふが誠かいはいぬが道加里こりやマアどふせふ／＼ぞいなア「立たり居たり氣も亂れやる方もなき我身やと思ひなやみて居たりしがかくては果じと女房は思ひ定めて我子の善太寢さしながらにいだきしめ千年も萬年もと祝ふたも定る業は是非もなし若君のお身がはりに命は母に

たものう里我手で我子を殺したかとて、御の心もひるがへり御主人様への御奉公未來ではの、様にほめらるゝ身の果報じやわいのふ「譽らるゝぞと身をそへてせぐりあげて歎きしがおそなはつては詮なしとそつと立てさし足に疊も薄き竹簀の子下へしらせじ聞せじと火炎の淵の薄氷ふむかと計りわな／＼」ト床のめりやすお里善太郎を抱乍ら中二階へ上りかゝるチヨン／＼にて上手より中二階を段々下手へ引出す此屋總三間を二間に仕きり中に柱有上手はすきや障子のはめ石摺襖二階座敷の心此まん中に上り段有上手藪垣下手は緞子のにて兩方共に有「ふるふ足もとおししづめ下家へ心奥の間の隔の障子引明れば音に驚き起たつ内侍おさへながらに有合ふ小袖あんどにかぶせてこふ／＼と呷き／＼次の間へ二人りを寢させその跡へ入かはるとも白川夜船時分はよしと下家の二人り氷の刃拔放し一度にぐつと突立れば雙方ワツと聲をたてつらぬかれたる内侍と善太胸板かけて突通されうんと計りにそりかへればサアしてやつたと下家の二人り雙方一度に駈上りお里がさし出す行燈の明り三人一度に顔見合せ彌ヤアそちや權太が權ヨウわりや彌助加里前へ兄様こちの人と雙方われと權こりや善太め彌こりや内侍のしがいな改めて權こりや善太め彌こりや内侍三ヤア／＼／＼に忸りして權どれ手へ入れかわるをお里支

へる突たほされて 彌悴善太は 相果たか 權ヲ、内侍め

は此通り トボンとさる首前へ彌此上は主人の敵權何をこ

しやくな ト兩人飛下り切むすぶお里が中へ這入りさ、へア、是

々今爰へ梶原様がお見へ被成る内を綺麗にして置

つしやれや トいひ捨て元へ這入る 彌何梶原が此所へ

「聞て驚く三人が心のたるみ一もつの彌助は一間

へ駈り行いがみの權太はしたり顔權へ、内侍をばら

したは彌助が科ちつべいめを殺さしたはうぬがちよ

こ才此上は内侍の首諸共肉附の六代を梶原へ手渡し

てほうびの金にするのじやこつちへわたせ里イ、ヤ

ならぬ今の今まで夫を疑ひおまへの惡事の毘にのつ

たりよふマア内侍様始め我子の善太をむごらしふ

殺しやつたの權エ、邪魔さらさすこつちへわたせ

里イ、ヤわたさぬ權エ、めんどふな「跳り上つて六

代が首筋取て引摺むイヤ渡さぬと取つくお里雙方互

につかみあひ トチヨンにて「又よるおさとのひばら

をあてト跡めりやすにて内侍の首の入物がないゆ「尻ひつか

らげ駈出せしが ト小戻りしてすし桶な 權是忘れては叶

はぬわへ「飛がごとくにかけり行跡にようゝ氣の

つくお里里ヤアゝ扱は六代様を追附て取かへそふ

ヲ、そうじや「帶引しめてかけ出す向ふへ ト内侍の持

にさし向 軍兵ホ、イ「矢筈の挑灯梶原平三景時

家來數多に十手もたせ道をふさいでおつとり廻し

ト向ふより高挑灯一つ次に運平忠太陣立次に梶原平三陣羽織次に

權太やはり六代を背中におひすし桶を持跡より軍兵大ぜい挑灯十手

をもち附出るお里はさいへる運平忠太と入 梶原ヤ科人めうぬ

かはり梶原の前へ行く此時きつと留つて 原ヤア科人めうぬ

何國へゆく梶原がかく下知をなすからは逃るとて逃

そふか 軍 みなく すさりおらふぞ「追取まかれてハツと

とむねさきも氣づかひ爰ものがれず七轉八倒心は早

がね時に時つく如く也梶ヤアこいつ横道ものおのれ

古主のよしみありとて惟盛をかくまい置事所の者よ

り訴へしゆへ是なるいがみの權太とやらんに申附詮

議なす所今日又候や内侍六代來りしと聞兩人の者は

あの通り此上は惟盛を何方にかくまひあるぞ眞直に

白狀せよどどふじや「せめ附られて覺期の前里な

る程御推量の上は是非に及ばぬ内侍六代様はかくま

い升たれど惟盛様はかくもふた覺はムり升ぬ權ア、

コリヤゝ妹あらごふな兼て梶原様の仰を受何も角

も嗅出したてあるマア夫よりはさしあたつて内侍六

代一人は首打一人りは生捕唯今お渡し申升うマアあ

金子と釣が太忠へたくの合紋なれば随分大切に

たせ權成程銀札替りの此手形こいつはくらが出來ぬ

わへ梶コリヤ權太郎彌助夫婦は汝に預ける惟盛が首

受取までは出口ハは遠卷の致しあれば心を附よ權

首尾よふ惟盛の首討てあなたの陣所へもつていたら

梶かこみをひらかせほうびをくれう權そりや有難い

お氣づかひ被成升な權太が引受たらびんぼゆるぎも

さす事じやごんせぬ梶ハテ掛けなげな男めじやわへ

運忠いざ御主人様梶者共參れ軍ハア、「ほめそやし

てぞ梶原平三家來引つれ立歸るト忠太うん平首本二つな

權ヲイゝ追附吉左右しらすぞやその替りに褒美を

ずつしり必ず忘れまいぞやあ是からは惟盛めの一

詮議よもや内にはとめてはあるまい彌助めを引とら

へて白狀ささふぞふじや「駈入る權太がだんびらぬ

き取憎さも憎しとひんだかへぐつと突こむ恨の刃う

んとにつけに反かへればお里は無念の聲ふるはし里

エ、情ないおまへの様な惡人が又と世界に有ふかい

なアよふもゝ善太郎をむだ死させ六代君の首討て

渡さんしたないはふよふない大惡人もふゝ腹が立

てゝ此胸がはりさける様なわいのたつたひとりの

兄様を殺すといふはあつばれた因果者によふして下

さんしたのふ「ぬき身の柄の碎くる計り握りゑぐり

乍らも心に涙ゆるむ所をはねのけ蹴のけた打廻れ

ば納戸より彌助は二人が中にわけ入りト彌助腹帯にて

て彌ヤレ出かした女房善太を始若君の敵は此權太め

うぬ思ひしつたか獄卒めさりながら内侍様を手に掛

しは此彌助その言譯はまづ此通り「肌くつるげばこ

はいかに腹十文字に切りあばきひつしと定めしあり

様を見るに悲しき夫の最期こは何ゆへと駈よつて里

チエ、情ないこちの人かはいひ我子を死なしたもお

まへを善心にしたいばかりお身替りにもたつ事かむ

だ事となつた上おまへにわかれてどふならふ是と

いふも皆兄様の心から思へばゝエ、こな様はの

ふ「夫にかこち兄にいひ恨の涙一時にたくし掛けて

泣居たる彌助無念の聲ふるはし彌ヤアなげくな女房

内侍様を手にかけて六代様は殺されて何面目に生永ら

へん切腹するが身の言譯かつはお二方への是追腹里

スリヤ惡心じやと疑ふたもやつぱり善心で有たかい

なア彌ヲ、此場になつて言譯は迎も詮なき事なれど

高野にゐる惟盛公又冥途にゐるお二方魂魄此土にゐ

るならば監物太郎が身の因果申わけの一通りコリヤ
權太郎序でにうぬも承りをらふ「溜息ついてどつか
と座し彌當春熊野浦にて惟盛様にお出合ひ申父御小
松の重盛公の御遺言までくはしふ承しゆへなくく
高野の麓までお見送り申上お行衛しれぬお二方を尋
出し惟盛公の仰も傳へおちからにもならんずと心を
配るその内にはからずも夕べ六田からの戻り道不思
議に手に入る御二方の繪姿南無三寶と心の當惑もし
此所へ御座あらばさしあたつての身替りには女房忤
の首を討恐れ乍ら我面體惟盛公に似たるゆへ御身が
はりと日外よりいつわり月代を剃ぬもまさかの身が
かくまひ然るに最前此所へ六代様がお越し被成れ扱
はと胸にさつし乍ら傍にはめしろと思ひしゆへ悟ら
れまじと邪見なあしらひ又女房は忠義一圖お供して
歸りしもしつて居ながらお目見へのならぬ仔細は此
惡もの梶原が犬となり入こみし事しつたるゆへいつ
そこいつを手に掛ふか妻子を先へ殺そふかと心はち
いに亂れ焼とゞを主人へ敵とふと思ひ違ひし女房の
意見は身ぶしにこたへ此惡者に氣をかへて出てゆく
ふりで我内へ忍んで下家に窺ひゐたはなま中顔を見

合せてはもしや未練もおこらうかと思ひ濟したひと
かたな女房ならぬ内侍様間違ひ事とはいひ乍ら妻子
を討んとあやまつて主を殺したそのばちはたちまち
報ふ忤が犬死「涙はら／＼善太郎があへなき死骸を
いだきあげ彌六つや七つで死する子は賽の河原で迷ふ
ときくコリヤそち計りやりはせぬてゝも一所にゆく
わいやい「お主の爲親の爲及にかゝつて死ましたと
地藏様へことわつて彌六代様のお供申未來の呵責を
逃れてくれ「かはいの物やといだきしめ身も浮計り
なげくにぞ女房あるにもあられぬ思ひ里ヲ、扱はそ
ふいふ心でゝんしたかいなア女の淺い心からあんま
りお前を疑ひ過し恨んだり恥しめたりしたが恥かし
いそふしたお前の心じやと夢にもしつたら自害して
お身替りに立ふものきれいにぞだつた此善太郎六代
様のお役に立ふが雲井に近き内侍様のお身替りに鮮
屋の女房がなられふかと思ひ詰てゐた故に死をくれ
たは此身の誤り是了簡して下さんせ事のおこりは此
惡者殿チエ、情ない兄弟を持た事でゝんすなア「身
をふるはして絶附き泣くどくこそ道理なり彌助は
内侍の死骸にむかひ彌モウシ内侍様六代様御ゆるさ

れて下さりませ委しい事は冥途にておめにかゝつて
申譯是に附ても權太郎め惡には報ひのある物と思ひ
しつたかチエ、己はなア「苦しみながらにじりより
手負のたぶさ引摺み恨のこぶしのしびるゝ計りたゝ
きつふみつさいなむればいがみにいがみし權太郎く
るしき息をほつとつき權は彌助妹なげくまい善太が
死だもむだ死ではないあいつが死だ計りで彌助が忠
義もたつといふ物彌ヤ、なんと權合點が行まいくは
しいわけをいひとふてもくるしいマア氣をしづめて
聞てくれ里エ、よい口な事いはしやんすなお二方を
討て渡し善太が死だも夫の最期も皆こな様からおこ
つた事權イヤ氣遣ひせまい二人共にこふ計りではわ
からぬはづマアお二方にはそふ程にくはしふわけ
を聞て下され「袖より出す一文笛吹立れば折よしと
六代君内侍は賤の姿と成り小金吾つれて駈より給ひ
ト内侍六代
小金吾出て内彌助夫婦の此ありさまは彌ヤアあなた
はお二方里ほんに御無事でおかはりないか吾彌助
殿權太殿此體は皆コリヤどぶじや「一度に興をぞさ
ましける權太は苦しきこわねにて權サ、悔りは尤高
で今迄夫婦にいはね共おれが親仁彌左衛門といふわ

ろは船のり商賣前方平家世ざかりの時分に唐土いは
ふ山の祠堂金を預つた重船頭おんどの瀬戸で船を乗
かへ三千兩の黄金を分取にした事顯れ縛首にもなる
所を重盛様のお情で命助り此大和路へ來ての百姓業
平家の恩をかならず忘れなとくれゝとの遺言其恩
を思ひくらす内惡者と聞傳へ梶原よりの此繪姿わざ
はひも三年と最前たでを取た子供の顔人相書の六代
君シヤア御恩がへしは此時とお二方の事相談かけて
も常が常ゆへ彌助がおれを疑ふて誠をあかさす誰ぞ
頃合な身替りと思ひ當つたはおれが女房子こいつを
てうど替玉にといのふとすれば彌助がいなさすせふ
事なしに裏から廻つて女房に相談したれば女房めが
いひをるには親御の遺言二つには妹御のお主の事也
何うろたへる事があるわしと此子を是かふといひを
るし忤めも噂と一所になら死る程にそのかはりにち
いさい石塔を立て下されといひかへたその時に始て
涙がこぼれやんした南むあみだ佛と忤とかゝ最前夫
婦が喧嘩の内裏から廻つて入かへ置き著物をきせか
へうまゝとそちの身代りひねにして見せたゆへ
かち原程の侍がまうけに受てほうびは頼朝が著替の

羽織はお二人りと見せたのは喰やくはずにくらさした女房悴でござんすわいのう死をくれた悴をば梶原のめのまへで首ちよち切たその時はいかな鬼でも化物でもこたへられた物じやない彌助とをれば覺期の前髪さん何にもしらぬ子供ら二人り一番ほめてやつて下さり升いのふ「いふも苦しきひつ死のあり様内侍は涙にくれ給ひ内最前お里が案内にて此一間にやすみし所夫なる權太が計らひにて討手のきたる事もあらんと裏より親子の衆を呼入我にかはりし此場の危難助かつたるも權太郎が情^{小金}とはしらずして某はきのふお二方を見失ひ夜道といひ勝手はしらず尋ね／＼て來て見れば今宵につまら御身の御危難權太殿の妻子を手にかへ彌助殿親子の最期もいひ合さねど忠義の割符しつくり合たる此場のしぎ内感じても猶餘りありさはさゝ乍ら權太が最期三人五人の命を捨しも自ら親子より起りし事不便の最期を見る事よのふ「もつたいたなくも御涙きくにお里はむせかへり兄と夫にすがりつき里けふはいかなる惡日ぞやついにあはねど兄嫁と甥子の身がはり誠に御臺若君を討たとぬしの思ひ詰あへない最期現在兄を手には掛しも

忠義ゆへとはいひ乍ら此身一つにうき事を見よとの事か胸欲な「神も佛もない世かとなげく泪は芳野川水かさ増るごとく也彌助は苦るしき顔をあげ彌女房の歎きさる事なれど三人五人が一時にかくなり果るも平家の怨敵右大將頼朝がなせる業「よろぼひよつて以前の羽織取りよせ引よせ彌此陣羽織は頼朝が著替ときく晋の豫讓がためしをひき御一門の恨をはらさん思ひしれ「切裂すてんと引ひろげば裏にあやしき對句の和歌彌ム、合點ゆかざる此文字は「きくに内侍は御覽じ給ひ内ハテふしぎや裏にあるは模様ならで和歌の下句内やゆかしき内ぞゆかしきと二つ並べて書たる様子ぞあらんそれ小金吾「仰にハツと武里は羽織取上げ小首を傾け小雲の上はありし昔に替らねど見し玉垂の内ぞゆかしきとこりや是小野の小町が詠歌人もしつたる此下の句物々しく二つ並べて書たるは「仔細ぞあらんとふくろびより探出せしけさ衣小こりや是三衣珠數まで添て入置しは「こは／＼いかにとあされる人々内侍はつく／＼御らんじ給ひ内ホ、ウさもあらんその昔小松重盛様の計らひにて池殿と心を合され死罪に極まる頼朝を助命さし

たる恩報じ我夫始め我々に出家とげよとの謎ならん
小あふむ返しの恩報じ見し玉垂の内よりもゆかしき
は頼朝の志内是とても皆重盛様のお影仇に思ふた是
六代「互ひに貌を見合していたゞき給ふぞ道理なる
手負の權太ははよりすりより權ア、及ばぬ智恵で
梶原をまんまと一ばいやつたと思へばあつちが何も
よふがつてん「果は此身をかたたるゝ種としらざる
淺猿しやと悔に近き終り際權此上は御二方を落すが
肝要は彌助梶原が圍みをひらかす思案があるか彌ホ
、夫ゆへにこそ我切腹勿體ないが面體の似たを幸ひ
此身の言譯お役にたつは今はの本懷コリヤ此彌助が
首を持て梶原の手に渡し此家の圍みを開かしてお二
方を高雄にゐる文覺殿へお供申せ又小金吾殿には御
苦勞ながら某が介錯して高野にゐる惟盛卿へ此場の
様子傳へてたべ頼むは此事サ、早ふく「早ふく
と夫の詞きく悲しさに女房は自害と見ゆればおしと
いめ彌ヤア聞わけない女房共此家のかこみをひらか
ねば兄や夫の忠義も無になりお主大事を忘れたか里
夫じやといふて是がマア權兄や夫の非業の最期せめ
てそなたは生残り未來の供養たのむぞや「心得たる

かと兄夫せひなくくも女房はハツと心を取直し里
唯此上は御さしづにもれじ迷はじ泣もせまい「傍へ
に置し鉢桶の中にこめたる三貫目里此たくはへを路
用とし是より直にお二方のお供して高雄へ行お身納
り見届ませふ小ホ、ウ我も二人の介錯すまば是より
直に高野へおもむき惟盛卿のお目にかゝりくはしく
演説仕らん里首尾よふ御先途見届たらやがて此身も
死出三途蓮の臺に待てたべ「盡ぬ名残を得もいはで
杖よ小笠よ取々に出てゆく旅と死出の旅小思へば生
者有爲轉變内せめて未來は成佛得脱「ともに合掌唱
名の聲も八聲の鶏の音や權夜明もちかし彌何れもは
やふ「いざとすゝめて權太と彌助刀きりゝと引廻す
哀れ離苦を今爰に高野高雄とひきわかれ内類ひまれ
なる忠臣忠士小美名はよしやよしの路に里残るは此
身下市の「惟盛彌助といふは鉢屋今にその名を權死
出の道連彌サ、介錯ト兩人首さしのへ合掌する小金吾刀を持
後へたつお里ツカノいいて二人の貌を
見上る内侍六代「殘しけるト段切幕ト幕の内にてエイとか
も愁ひのこなしげ打女二人ワツとなく

西澤
文庫 脚色餘錄二編上の卷終

西澤
文庫
脚色餘錄二編中の卷

目次

- 一 歌舞妓事始の拔書
- 一 古人小歌の作者附
- 一 狂言作者古名人の話
- 一 爲川太郎兵衛の遺書
- 一 竹田出雲椽名言の話
- 一 俳優者傳奇を作りし話
- 一 役者作者位高下の辨
- 一 江戸古作者連名附
- 一 流行唄は昔に歸るの話
- 一 三組譽景清の番附
- 一 兜軍記鯉の場の話
- 一 菊水辻講釋場の話
- 附 大雅堂霞樵の一奇話
- 一 佐々木盛綱藤戸の話
- 一 東大寺大佛供養の齣

西澤
文庫
脚色餘錄二編中の卷

西澤綺語堂李叟著

歌舞妓事始の拔書

劇場七書の内歌舞妓事始五卷は寶曆十二年出版して板元は皇都八文字合作者は爲永一蝶なり此一蝶の師千蝶と云は爲永太郎兵衛とて豊竹座淨瑠璃の作者にて數十番の作を遺す所謂武烈天皇藏、本朝班女扇、播州皿屋敷、百合稚高麗軍記、鎌倉大系圖、風俗太平記、久米仙人吉野櫻、潤色江戸紫、柿本記僧正旭車、詩近江八景、浦島太郎倭物語等なり元文寛保延享中の作者にて弟子一蝶は歌舞妓に委しく室町殿以降芝居の來歴矢倉の免許名代、芝居主操機關の名代古今役者の名寄は寛永より寶曆迄苗字を呼ばず名計呼ぶ古役者までを集め附錄作者道の一二話を記す傳奇作書脚色餘錄に因あれば爰に擧る

古人小歌の作者附

富士太鼓歌占(榊山小四郎作)山姥所作、仇浪(澤野九郎兵衛作)安藝宮島(山田兵助作)雉子、戀すてふ草盡(島野勘七兩人作)鳥の所作(島野勘七兩人作)傾城花(いかに)葉山岡右衛門(葛山四郎兵衛)四季の所作放下僧、あさよ、三つ車、かやの所作、近江八景、唐人歌(世間には杵屋長右衛門)松風青葉(杵屋長右衛門)起請の所作(作ならんといふ)鷺の所作(知原藤四郎作)有馬の富士(木早三左衛門作)沖の石萬菊(永島庄右衛門作)近江八景(永島庄左衛門)兩人作(和歌村藤四郎)きぬぐ筑波山、唐金茂右衛門(柴崎勘六作)とけつ(親杵屋長五郎作)高瀬舟(辻甚右衛門作)花かづら(大和屋傳十郎作)因幡の森(三杉三右衛門作)鳥部山、十三鐘(小出金四郎作)花の香(坂田兵四郎作)井筒(坂田兵四郎)兩人作(山本喜市)松虫の所作(嵐三三郎)兩人作(善知鳥、猩々、松風、道成寺、入間川吼喙、桶ぶせ六段、戀薰、里景色、敷蒲團)このかはりの歌(岸野治郎三)岸野治郎三は是より始めり(岸野治郎三)きつね火(萩野八重)三人作(けいせい男山、明がらす)二代目杵屋長五郎(作)がくや道心、新道成寺(同人作)春の雪(杵屋長五郎)青木半兵衛(若村藤四郎)兩人作(海人、新道成寺)芳澤金七作(石橋)石橋(若村藤四郎)兩人作(庭鳥所作)心中盡し、名古屋帶、相の山、突出

し、かぶろまつ、十三がね、關の小萬、お初徳兵衛、白小袖（山本喜市作）無間の鐘（山本喜市、若村藤西郎、兩人作）初櫻、白糸、雪見酒（同人作）其外古來より殘る處の歌の目錄あまたあれども松の葉又は松の落葉等にあるゆへ略す

狂言作者古名人の話

歌舞妓事始に曰江戸根生の狂言作者津打治兵衛いへるは今時の作者趣向の案方合點ゆかず立役を女形に直し或は御家の後室を奴になしいろ／＼變化する故狂言そぎつぎにして混雜し山の奥に騒ぎの三絃を鳴らすやら或は庭などの井戸よりいつのまにやら敵がたよりぬけ穴を堀姿を隠さんとて井戸へはいり或は井戸へはまりて濡たるけしきもなく工あらはれエ、無念やなどいふやうなる趣向多し歌舞妓の案方はさにあらずたとへば當り役者にて時の人ほむるといへども一體の藝玄こみなきは金取にてはなし是らは立消するなり是を以て金取の役者の身上をば案じ其金取を仕損じさすは作者の誤なり其役者の氣ごんをさつし其體を以て狂言一部に取組なりといひけり又或時市川海老藏と狂言を論じけるとぞ市川氏は世に玄

れたる名人也津打氏狂言にて首引せんとて是を出すに勝利を得たる由にて淺草觀音の繪馬にも市川と津打と首引する繪に津打氏勝たる所を畫たり又作者に名高きは近松門左衛門、其外杉三安、近江屋久四郎、彌五右衛門、富永平兵衛、安達三郎左衛門、金子吉右衛門、中田嘉右衛門、岡清兵衛、岩井伊左衛門、紀海音、中山金藏、其外歌舞妓作者舉て數へ難し又東三八といへる者此作者の案方は他へ行んとて駕籠に乗る駕の者共何れへ御越候哉と尋ねけるに面白からん方へ連て行といひて駕籠賃悦ぶ程やるべしといふ扱も異風なる人やとて利欲にかゝはるも有或は四季のけしきをいひて慰るもあり又は茶屋遊女の興を勧るもありける三八かれらに従がつて共に戯れ終り我家に歸り狂言出來たりとて役者を揃へ稽古させしとなり或人此案方を尋ねけるに三八曰時々移り氣に成が人情なりさればはやり歌といふもの一人より二人へ移り段々弘まるなりかこの者が勧めし遊女といふ者は諸方の人と交り多き故時の氣をよくとれるもの也ゆへに隨がひて其氣を案じて一部の狂言となすといへるよし語けると也又或時の替り狂言六度役者に

つかれたり七度目にあたり役者子ども手を打て悦び
天晴御器量驚入たり六度狂言をつき卽席に珍らしき
御趣向御咄しなされ候事よと申ければ三八曰然らば
何も氣に入しやと役者此上御無體申事なし此狂言出
し候はゞ大當りなるべしと口を揃へていへば三八か
ぶりをふつて何れもの氣に叶ふても我胸に濟す此狂
言に景物有て見物は悦ばんなれど重ねて出す狂言に
見物の氣もそれて年中芝居相續叶はず然る時は此狂
言不吉を招くに似たりとて又一組咄しければ人々其
趣向に服し稽古をなし初日より大入せし事古今の繁
昌なりしと也是を以て見れば三八といふ人は近松門
左衛門にも並ぶ程の人なるべし又「正徳享保の頃江
戸狂言作者に中村傳七といふもの有此人の作は木に
竹を接たるやうなる事を取組て始終理屈詰り見物よ
く取やうに作る名人なり取分引道具せり出し押出し
ぶん廻し引返し等珍らしき大道具仕出し見物の目を
驚かせしなり有が中にも先年中村座にて嫁入角田川
といふ狂言に兩國橋より三圍の堤まで一里程ある川
岸の大引道具大形成事古今の珍景にて大入せしと也

爲永太郎兵衛の遺書

同書に曰竹田出雲存生の時弟子爲永千蝶作者の祕事
を尋ねければ机一脚譲られき千蝶病死の節一紙を添
へ予に又是を譲られたる其文に曰

木の葉落てめぐむに非ず下よりつはりめぐむによ
つて落る也作者の趣向も其時に望て出るにあらず
多年心がくるを以て趣向も出来る也十月は小春と
て暖に花も咲狂言一かはり二替り優曇華の花さく
といへども下よりつはる恵みなければ春の盛りに
身を恨む學問せよ學問すな才智になれ利口になる
な阿房になれあはうすな恥をかけ笑らはるゝな色
に迷へ我色に迷ふな長生せい長生すな

と書り今我拙くして實生の土氣を恨みよそに開く花
を見て初て昔を慕ひ日蔭の埋れ木なりとも接木をな
さんものを徒らに過る月日は多けれど心の曇りある
ゆへに磨き出す力もなし此書は故人の説を用ひ書つ
いけぬ夫人は水の變るを以て土地の氣に移り心を附
れば詞の詛もぬけ言葉も和らぎ猛き心も柔和になる
也ぬくめ鳥といふは極寒に鷹の足をあたゝめ恐しと
えりながら和らぐ心は則神なり其鷹ぬくめ鳥の飛去
し方へ羽をのさず和俗にも杖の下よりも廻れば可愛

ひといふも和を以ていふその和を本として歌舞妓の業をつとむる也「寶曆十二午の初爲永一蝶述る」と有是今迄九十一年と成り述る所の話は七八十年前の事なればます／＼古風なりといへども作道に限らず諸藝に通ずる故人の詞感する事多し

竹田出雲掾名言の話

前に云爲永千蝶の師竹田出雲掾は舊機關物眞似子供芝居の名代竹田近江萬治元戌年十二月朔日口宣頂戴して竹田出雲掾となり寛文寅年大阪道頓堀にて竹田芝居始たり享保中悴に出雲の名を譲り近江と改享保十四酉年閏九月十九日病死して悴三四郎に近江の名を譲れり此三四郎小出雲なり二代目出雲は竹本筑後掾の興行人となつて近松門左衛門を作者とし我々後々は作者となれり正徳五未年十一月朔日より國性爺合戦を始しに古今の大當りして三年越十七箇月勤けり享保二酉年二月十五日より種は日本産は唐土國性爺後日合戦とて近松作にて始めれども前々と違ひはか／＼しからず日數僅の興行にて止けり近松は猶おもしろき趣向もがたと枕を割し工夫にわたる其時出雲の云作者の心にはさこそ存らるべきが大當りの跡はすら／＼としたる事

をなしてをかるべし國性爺にて餘程の徳分あれば二年不當りしたりとも我等式が給る程は澤山也其間には古き物にても出しゐる内には自然ときき狂言も出候はん夫より上夫より上と趣向に趣向を重ねたらん時は我家業を盡果申さん唯天然にまかされよと申したるは一道に秀たる者の詞諸道に通じて感深かり文化中道頓堀芝居側失火の時今の若太夫の芝居裏に見事なる土藏の臺石遣り瓦等堀出し所の古老が尋ねし所是なん豊竹の北條藏の跡也と云享保十一年四月八日より來未閏正月の末まで年越十一箇月興行大入せし徳分にて芝居の隣に大土藏を建北條時頼記の外題を呼んで北條藏と呼びしも其後度々の類焼にて亡びたる遺なりと云予が家に因あれば古瓦一枚を何某より送れり實に國性爺と時頼記は竹豊兩座の大關と居たる筈なり今芝居者流座拂の元金上れば是より藏入なりと云は此北條藏よりいひ初めし事にやあらん

俳優者傳奇を作りし話

天明二寅年東都萬里亭夫古土と云者の書たる名物袖日記といへる小冊に江戸三座芝居の起原役者の心得等を記せし中に役者の狂言を作る事を論じたり其の

文に曰く此事は我等ごときの素人からは樂屋の事は知らざれ共云作者に聞しなりつゝいは時々今度は誰々が作りしなど云折々あるゆへ爰に書載る總體今

時の役者智恵文作もなくして義太夫本を撰出し我一分の狂言を作る事作者などの邪魔にて疵也尤故訥子専ら狂言を作りしが此人は元より上方澤村長十郎、大和屋甚兵衛門などが狂言作りし時傍に執筆をせし由數年の功有て作りたり故訥子の作りし狂言を見しに自分の仕打をおもとせし事は決してなかりしと也とかく人の役をおもと案じて一體の趣向を作りしなり柏藎名人なれ共狂言作りし事を聞ず其替に我一分のせりふみへなる事は自身の才智を以て作り當りを取矢の根五郎外郎賣其外あげて數へがたし市川家の名物は今以て役者作者の助ともなる今の役しやは腹にすこしの文作もなく淨瑠璃本の中より探り出し己が仕て見たいと思ふ計に屈托して外々の役者に構はず我體に不相應なる事をして我ばかりよいと思ふゆへ見物は面白ふなく不興にてあげくには其時々作者にまかせて置事ゑかるべきなり云々此事予が傳奇作書初編梅玉の傳にて云におなじ七十年前にも此

論有てゑれたる事乍ら近年の立者役者に益此疾多し慎しむべき事なり

役者作者位高下の辨

同書に曰誠に役者の上を一段飛越て心魂を勞する物は作者なるべし大勢の役者の心々を一人の肺肝を以て汲分百々萬騎の剛敵に等しき諸見物を引受ての軍術狂言の趣向を引幕の内に廻らし勝事八百八町の外に決す軍師ともいふべきか然れど折々高慢出で役者作者互ひに誇をあげて己々が心を樂しむ八百はおれが手にて上手にした高麗はお上が今度の狂言から出世したなどいひ役者はおれが今度の狂言をでかせたなどいひてんぐに誇る是を中からいへば兩方相持と云てよき事なり然れど其内作者が七分上に立べし譬へば大工が家を立るに主じの好みの通りに住居の趣家造りの材木迄我心に布置すれ共牛梁に杉九太もならぬ物なり床板にぬきをしても間尺に合まじ又良材木夥しくありても大工といふ者がなければ柱にも梁にもならず木場の川びたしとなる也然れば兩方相合也其内に此木は梁につかふ此角物を床と夫々の恰好を見分ける所は工みの業でなくては行ぬゆへ一

倍の利有事なり過し比斗文と言ふ作者古人廣次、助五郎を河津、俣野にして相撲をとらせし處に殊の外當り大入をなしたり此時斗文いへるは廣次も助五郎もおれが案じにて大手柄をさせて金取にもせしといひしを兩人はおれが持前の體で魂膽しひいきを以て狂言に當りしといひし也是を中からいへば廣次、助

と料理人次第なりといひ予は又日々の見物を病ひと見立役者共を藥種と見て作者は醫者なり藥種の遣ひ様によりて諸見物の病氣も本復させる戲場道の醫なれば其見識なくんば藥種計り撰んでも療治は配劑に有案と筆の比加減が第一なりと一洗と語り合ひ笑ひし事有

江戸古作者連名附

五郎を見立角力を取せたらよからふとの案じは作者でなければ行ぬ所なれ共廣次、助五郎と云よい恰好の男がなければならずよい恰好と云ても春右衛門、善五郎など、云大がらな詰役者に角力をとらせたら三文にもなるまいさすれば男の恰好にもよらず最負、恰好合體した者がなければ成就せぬ也よい役者じや有ても案じがなければ見物がみる事もなるまい爰に材木と大工の處にてすべて物事一騎にてはなり

同書に歌舞妓古狂言作者を舉たり生立の順を記て功拙を論せずと有光島勘右衛門、藤井斗文、金井三笑中村傳七、津打九平治、鈍通與三兵衛、津打治兵衛津打管竹、櫻田治助、村瀬源三、中村清三郎、門田候兵衛、枝彌市、早川傳四郎、中村重助、中村太郎右衛門、堀越二三治以上右は天明以前江戸歌舞妓作者連名附なり

流行唄は昔に歸るの語

がたき故互に高慢も無益なること成べし其上にあらざれば行ぬ事也然れど河津はこう／＼俣野はこういへとせりふをさづけ師範するなれば作者は上に立べし遣ふてもらふは人の心に任するゆへに無智の方なれば隨ふべき事なり云々故奈河一洗は役者を魚鳥野菜と見立作者は料理人と見甘ふ喰せんと淡く喰せん

昔後醍醐帝の御宇豊原兼秋は風管の音を聞て國の盛衰を知り荒陵山の樂人大和介は樂の音を聽て世の有様を知れりと云元祿年中京祇園町に岸野治郎三といふは歌三味線に名高き者にて古き唱歌を好み古律の正しきことを尋ね探りて自然と三絃の妙を得たりいか

に早めて彈といへども撥を持たる手の小指三絃の駒にひた／＼と附しとなり藝に至る人ならではなき事なり或時榊山小四郎元禄中
立役者ぬめりといふ物を望まれければ治郎三是を十七段に彈分たり是けいせいの出端にして其太夫の位々を音色にて十七段に彈分たるよし奇妙の術を得たりさるによつて諸方の法師も此人に習ひしとぞ常に四條の芝居を勤め彼大石内藏助良雄の詰問にて里景色といへる端歌は歌系圖にも浮の作大石の作
名なり調治郎三と記し當時祇園町井筒は其治郎三の子孫なるべし此人の所持したる三絃は鳴神といふて日本に二挺の名作なり今一挺は先榊山小四郎所持して常に此三味線を以て音律の事を論じたり又其身芝居に行ずして三絃をならし其日々の見物の人數の多少をゑる是音を聞てゑれるなり又小四郎宮商角徵羽の常理を能辨へたれば道成寺の舞を拵らへ節附は則治郎三なり又山本喜市といふ者妙手にして治郎三に劣らぬ三絃にて或秋の比聲々に啼虫の音を聞調子を細めて是に隨がひ曲節を作りしに忽虫の音止たり暫らく有て虫又啼出せるに心づき調子高く彈ければ共更に止す又調子を細めて彈ければ又虫の音やみぬ

是より工夫し種々曲節を作るに心の如し聞人感じけるとなり是に附て世に諷ひはやらせる流行唄と云物其節に伸ちいみ有て文句に其時々のはやり物を作れども三絃の手は故人の彈來りし外に新奇の手とては有べからず唄も又古きを慕ふて作るが故古に歸り／＼て節は其時々少しの變化する事と思はる前に云小歌作者附に柴崎勘六作と云唐金茂右衛門の唱歌は「唐がねの茂右衛門が女房はよい嫁御あれ見さいな筑波山の横雲よと雲の下こそわしが親里」又其比のはやり歌に「齋藤太郎左衛門ちよと／＼逢たい事じやいのるすが／＼どつこにじや隣にか呼でたもあいたい事じやいのほんにゑ」此二つのはやり歌は享保八卯年秋京五條橋詰御影堂寺中其阿彌と云扇屋に心中有しを豊竹座の淨瑠璃に西澤一風作井筒屋源六戀寒晒下の巻甚阿彌の場にて奥の間の騒ぎに諷ふ事有かゝれば享保前のはやり歌なる事明らけし文化に中村歌右衛門ちよと七化の内に此歌然も二つ共出たり尤文句に少しの變りあれば節も變りはありし近比専ら流行りたるトツチリトンといふ唄のもととは「もしや此子が船頭衆の子なら母が三年櫓が三月」とい

へるより段々替り歌出来たり是れも彼の兜軍記の琴責の淨瑠璃岩永のせりふにもしや此子が女の子ならといへるは其比のはやり歌なるべしもとトチリトンの節は古しへの潮來節より出たるなるべし寛政に楊柳櫻といへる歌舞妓狂言の大切淀屋辰五郎融大臣の鹽竈に准へ三津の汐汲の景事に「潮來出島は扱色處客は立派に氣はざつば」といへる節是なり文政に梅玉九化の内島羽繪の文句に「夜明鴉の四つ手駕且那は中で空寢入おつこちた」と云も節相似たり是らに限らず皆古き唱歌を少し添削し三絃の手は餘の手を彈ていつとなく曲節一變すると見へたり近來流行歌鄙陋猥雜にして聞もうるさし

三組譽景清の番附

(番附板組の都合により)

百二十六頁に出す……(編者)

兜軍記鯉の場の話

此三組譽景清は寶曆十四申年京都の淨瑠璃契情阿古屋の松の大序二の口切を序二三幕目として享保十七子年竹本座檀浦兜軍記の序切大佛供養二の口菊水三の口六は貴三の切岡崎鯉の場を四五六七幕目と續け明和元年

豐竹座娘景清八島日記の三の口切手越里日向島を八幕目九幕目と所々を縮め一部の趣向と建し物なり此三つの當り狂言の内にて眼目とせる場のみ類聚にしたる物ゆへ一場として面白からぬ場もなくその上其比の名役者集りてする事なれば嘸かし大當りなるべしと思へ其冬の相替りにてさ迄の大入もなく跡北の新地芝居へ狂言其儘に引越たりと云此兜軍記は文耕堂と長谷川千四兩人の作にて三の切岡崎の貧家阿古屋の兄井場の十藏一幸母親と鯉の肴に誕生を祝し景清の替りにならんと親子愁ひの段は道理にかなひ面白き事限りなき場なれども長き一段の内十藏親子阿古屋箕尾谷榛澤と五人より木偶出ず至極淋しく語りにくき場ゆへ誰々も淨瑠璃に語らず此場をしりたる者と少し琴責の場は三絃に三曲の彈物あれば操にても歌舞妓にても仕流行せ誰しらぬ者もなければ舊三の口なるゆへ場に輕き所あり其上二の切花菱やの場五條坂女郎屋にてあこや親方の内也にて阿古屋召捕られ兄の十藏景清の在家を叩かんとするを阿古屋は耳をふさぎて聞ず行ゆへいかなる拷問にも問狀に落ぬと云事を不知琴責計聞時は阿古屋は景清の行衛しりながら強情を張白狀

せぬかとも思ひ重忠も情をかけて問はぬかとも思ふ者多からん三曲の調子狂はず眞實にしらぬが故四相を悟る重忠も是を免すと作せり狂言の前後をしらず語る太夫歌舞妓にする役者諸人の感ずる事あらんや

予幼き比亡父の話にて此譽景清の事を聞しに琴責の段切岩永に小六重忠に文七二重に遺りあこやに國太郎榛澤八藏附下手へ引込撥利生ある糸捌直なる道のと淨瑠璃の切にチョン／＼所返しにて式臺を二重の下へ引こむ向ふの飾鐵炮の書割襖返つて小六文七の姿を消す裏破れ壁貧家の道具と成り藁屋根破れ鴨居下しいつもの所へ門口下より突上る美々しき道具より貧家となり文七早拵にて向ふより浪人者の十藏に出小六二枚折の古屏風の内にて早拵にて母親となる氣の替り目いとよかりしと聞居て後此三の切の淨瑠璃聞たく思ひしに絶て語人なくよふ／＼北の吹松素淨瑠璃に一度聞又後に藍玉組太夫素人の間一度聞たり誠に淋しく面白く天狗物に／＼き物なり語りの最上なるべし天保の始に梅玉にすゝめて景清の三組を出し岩永と十藏母に梅玉重忠と十藏に團藏あこやに松江箕尾谷に片岡にさせしが歌舞妓にては餘りに淋しく持兼興行の

日數僅にて大塔宮と出し替へたり是を思へば此狂言をしたらよからうと計にてせぬ方故作者文耕堂も歡びなるべし予此場を種として大石摺義士法帖六つ目七つ目に脚色はして有り三編四編の内に説べし

菊水辻講釋場の話

予が著述綺語文章四編目京都下河原菊水の辻の條に出せども兜軍記の因あれば爰には壇浦の淨瑠璃二の口下河原菊水の辻にて講釋場を設簀に圍ひ講師關原甚内と假名して五條坂の遊君阿古屋の兄井場の十藏老母飛鳥を養はんが爲辻講釋を業とし其日を送る面體恰好惡七兵衛景清に似たるがゆへ榛澤六郎組子をもつて召捕書姿に改めたるに景清に非すよつて榛澤龜忽を詫て繩をとき母を孝養の爲辻講釋をすと聞て感じ商賣の妨せしを氣の毒と金子を恵む十藏これを受んやと返す榛澤いよ／＼感じて老母への志なりと云十藏志を無足にするもいかいとけふ清水觀音の緣日なれば母の無病息災を祈の爲に奉納せんとて傍なる賽錢箱へ打込事故是に似たる一話有大雅堂霞樵は嘉右衛門とて舊貨殖家なるが其業を惡み避て畫工

寛政七卯年十一月二十二日より間替り狂言道頓堀角の芝居



座 本 藤 川 八 藏

去程に壽永の秋の唐錦紅葉染る紅ゐは京家のはた色エイ／＼ナリ関の聲を揚羽の蝶の紋所是一の谷の事

阿古屋松
兜軍記
八島日記

三 組 譽 景 清

九筑
箇紫
國渴

扱其後元暦の春の朝霞匂ひを含む白梅源氏のはた色はひやうし揃へてエイとサツサ笹輪膽の紋所是鎌倉の勝關

もみぢやおの圓
きりやおいね
さくらやおか
花びらや清吉
かぶろふで井
やそめのお玉
川り越太六郎
かひのま次坊
しかみの法ぞう
同はんにや坊
御所の黒彌吾
かまの七郎
のはぬきたや吉次

よし澤園二郎
中山猪之吉
中むら金藏
三ます氏之助
中山よね吉
三ますつる吉
澤むらとく三郎
あらし卯ぞう
中山平三郎
ばん東金ぞう
山むらきく四郎
中むらたきぞう
澤むら國八
しばさき多人
みすかめ三郎

たい常妹ちぐさ
けいせいはつせ
しのめおとみ
源のよしつね
もとり山十郎
さと人與三治
藤太いと三治
ちしば娘白たへ
三しのの大六
まいたきは平
かじはらおたけ
岩永おくが熊
花つびまや長
さつ女房おくま
花びし女房おくま

花桐富松
花桐富松
花桐富松
中尾文之助
浅山文五郎
浅山文五郎
中尾文五郎
中山文五郎
山村友衛門
山村友衛門
三松五郎
三松五郎

千穂萬歳樂大入大々叶

三 淨
味 瑠 璃
線

高しんまや小彌太
せんかひせうて
客きひでよし
さ、きの次郎
本田のあや絹郎
けつせいの萩の戸
けいせいのしほね
ひいせいのしら菊
玉ふもと妹立なみ
けいせいの妹初しな
しづめのおひしな
かづはら平三
大ぬ日はがぼさ
かちせいらあやむ
けいせいあやむめ

みすかめ三郎
あさを爲右衛門
あさを爲右衛門
みきを吉三郎
みきを吉三郎
山下陸二郎
山陸二郎
萩野陸二郎
萩野陸二郎
萩野陸二郎
さかき山二郎
さかき山二郎
さかき山二郎
嵐かき山五郎
嵐かき山五郎
あらしし若松
あらしし若松
あらしし若松

竹本富太夫
竹本道太夫
竹本音太夫
つる澤源次郎
つる澤源次郎
つる澤源治

頭 取 三 杵 松 五 郎

狂 言 作 者

佐々木もり
里人四郎作
重忠奥方玉房
娘小いと
井場の十藏
ち、ぶの重忠
しゆめの判官
みをのや四郎
きもいり左次兵衛
けいせいあこや
悪七兵衛かげ清
岩永左衛門
十藏母あすか
はん澤六郎
社木みつぎ

嵐 雛 助
嵐 雛 助
芳澤いろは
芳澤いろは
中 山 文 七
中 山 文 七
中 山 文 七
山村儀右衛門
山村儀右衛門
山村儀右衛門
澤村儀右衛門
嵐 小 六
嵐 小 六
嵐 小 六
藤川八藏
藤川八藏
藤川八藏

近松徳三
田邊彌七
並木正三
並木正三
辰岡萬作

となり池野秋平霞樵無名貴成大雅堂數名有の傳は近世畸人傳にあれ共もれたる一話に其質雅にして聊も利にはしらず書もまめやかに殊に象を得たり一日書林の許にて年比望みし一書を見欣然として其價を問ふに價最貴し大堂云我にたくはへなし故に望を空しふす希は是が爲に今より勉て金を積ん積て後此價に足りなば我にたびなん去ながら賣物の事なれば其間に他に望む人もあるべし若さあらば我にしらせよと云書林云此書は高價なる物ゆへ容易に望む人も有まじ若あらば其よし告申べしと約してそれより大雅は日比に變り俄に物事約にして年を経て望の通り金を溜已に價調ひぬれば彼書林方へ走り行年比の望たりぬとて價を出し其書を我に賜へと云書林大に當惑して實も先年足下に約せし事只今存出せり其書は其後望人有て賣遣しぬ其の時足下に約せし事を忘却して告す罪多く今更如何ともする事能はずと悲愧す大雅案に相違して愁然として申けるは我かく迄貪しき中にて金を拵へしは此書の爲なり既に價調ひて望を果ざるは天なり苟も此金を他用につかはん様なし不如祇園の地に住て居るからは恩謝の爲に御社へ奉納せんにはと右の金

を殘らず束ねて祇園へ奉納す是を世に傳へて大雅の廉潔を稱し益此人の書畫を世に翫ぶ事とはなりぬ此一話兜軍記に潤色せし物かと思ふ計り似よりたる話也大雅は眞葛原に栖て祇園の社地へ出し店して書畫を認め井場十藏は菊水に辻講釋を業とし是は觀世音へ金子を納め是は祇園の社に上る祇園清水と並び菊水下河原尤續り然るに船岡の南淨光寺に在墓碑の銘には大雅の歿年は安永五申年四月十三日行年五十四歳にて生年は享保八卯年五月四日と有兜軍記は享保十七年に成て大雅がよふやく十歳時なりされば自然と相似たる話なるべし

佐々木盛綱藤戸の話

盛綱小島の鹽焼に淺瀬を聞重ねて餘人に語らん事を恐れ褒美くれんと欺り殺して海の深みへ捨しと云は韓信蜀の閑道を樵夫に聞て其者を殺す和漢同日の論にして謠曲藤戸にて出て淨瑠璃には佐々木藤戸先陣井上標磨の古本傾城浮州岩宇治嘉太夫古本先陣浮州巖淺田一等なり藤戸合戦を歌舞妓に直し文政に先陣藤戸譽と外題して奈河晴助用ひけり是は盛綱鹽焼に欺かれて多くの軍兵を千尋の海に流され不覺を取天城寺の觀音へ通夜

して計らず鹽やきの翁に逢ふ鹽焼傾く平家の運命を
しつて誠の淺瀬を語ると仕組り阿古屋の松は是らに
反し藤太は名にあふ惡者にて妹に茶店を出させ色仕
かけにて金をむさばる盛綱は滯事師にて惚られ下人
と成つて入込居る主馬の判官盛久は佐々木盛綱と名
乗り金銀を送つて心をとらかし淺瀬をきく藤太後藤
盛長の忤にて平家にかとふどして深みを淺瀬なりと
教る梶原平次蔭より聞居て抜がけす盛久藤太に褒美
くれんと僞りて手にかくる門口へ注進來て梶原の軍
勢深みに沈み不覺をとると云藤太手負にて身の上の
懺悔し妹聲の盛綱に誠の淺瀬を教ふる此時のせりふ
に譬へていはば攝州住吉三月三日の汐干にはとの淨
瑠璃は予幼き比は誰もよく語りし物也當時大に廢り
て語る者なし主馬の判官盛久の狂言は宇治嘉太夫の
古本に清水觀世音の靈驗を蒙り太刀取の刀段々に折
るを仕組頼政追善芝二の切傘法橋搦捕る役に遣ひ阿
古屋の松鹽焼の場につかひあるのみ也景清盛久相並
びたる平家の忠臣ながら景清のみ種々に脚色み盛久
に脚色なきこそ恨なれ予文政の末景清箕尾谷を對の
役とし東大寺大佛供養の場を口とし奥に箕尾谷立役

として一傳奇を脚色めりさすべき役者揃はぬが故拾
置たり紙風の柄とせんも口惜しく正本の儘爰に出す
則外題八島日記の略解
阿古屋松の註釋源平鉾曳競と賦して口幕の役人
は○大工七兵衛
本名悪七兵衛景清○六代御前○祐經娘白妙○岩永
娘貴船○千葉娘千草○仁田娘濱遊○廣元娘立浪○玉
房娘系萩○本田妻唐綾○衆徒法藏坊○同大日坊○同
玄海坊○同岩倉坊○東大寺住僧○御所の黒彌吾○衆
徒般若坊○梶原奥方幾船○景清妻衣笠○重忠奥方玉
房○箕尾谷四郎國時○妣四人○大工大勢○侍大勢何
れも役名略之

東大寺大佛供養の齣

造物上の方見事なる山門橋懸り迄續の筋塀よき所に
葭簀圍ひの饅頭店十一屋と染込みたる暖簾かけ右正
面に般若坊緋の衣ちよつべい頭巾にて床几にかゝり
岩倉坊、玄海坊、大日坊、法藏坊各衆徒の拵へにて
兩方に並び居る橋懸りに大工大勢蹲り居る本釣鐘淨
瑠璃にて幕ひらく「立隔つ唐土人も仲磨の歌をゑる
べかふりさけて今や見るらん春日なる三笠の山に出
る月空も五に鳴鐘の世上に響く東大寺大佛供養と玄
られたり般若坊衆徒の面々大工共が不念きつと申附召

岩倉心得てゐるヤイ大工めら我々が申事を篤と承
 りをらふ此東大寺の大佛殿と申は聖武帝の御時より
 動きなき伽藍なりしを^{海支}平家積惡の餘り焼亡し奉る
 ざるによつて佛罰通るゝ所なく終に平家は西海の浪
 と消る^大右幕下源の頼朝公より改て伽藍再興遊ばさ
 るゝに御普請も大半成就^{藏法}夫ゆへ諸大名奥方は早此
 間より御到著頼朝公にも明日御出駕の筈般夜を日に
 繼でも頼朝公のお假家萬端今日七つ時迄と申附しに
 まだぐつゝと手放れせぬは此般若坊が指圖を受ぬ
 不届者め^{四人衆徒}につくい奴等の^大工ア、モウシゝお假
 家の御普請も今日中に仕上げよとのお指圖ゆへまだ
 四五日も掛る程仕事は丈夫にムり升れど^同何が大勢
 が汗水になつて隅の隅迄残らず出来^同どこに一つも
 申ぶんのない様に致して置ましたれば^同定めて結構
 な御褒美がムり升ふと最前から首を長ふして待てを
 ります^同あなた様方のおとりなしでどふぞ結構な御
 褒美を^同御拜領被成て下さり升れば^同ハイゝ有難
 ふ存升る般ヤアほうびとは何をほうびうぬらがべん
 〳〵さらすゆへお假家普請おそなわり我々が不調法
 に相成る事を褒美などゝはふとい奴の^大工ア、モウ

シゝ〳〵全くのらはかはき升ぬ天下様の御あせいと
 いひ殊に結構な佛様の御供養我一とせい出しまして
 ムり升るノウ皆の衆^同ヲ、そふとも〳〵平家の清盛
 入道が焼亡した佛様をもとの様に遊ばさるゝ御善根
 ◎^同大工計りも何萬人大佛様の大ききは則頼朝様のお
 首に合して作つた物じやげな^同それいの天下取はあ
 たま迄仰山なこちとらにあのあたが有たら四條の
 涼でよい見せ物ほん〇ほんにのふ佛様にむごふあた
 る清盛入道といふ奴はどんな奴じや見たいわい^同
 そんなら貴様はゑらぬかおいらは前かた京で見たが
 夫は〳〵にくいづらな大坊主^同ハ、アそんならてふ
 どあなた見る様な大坊主か^{とはん若坊}般ヤイ〳〵だま
 りをろふ仇口きかずと立て失ふ^大それでもあんまり
 よう似たゆへ^衆早くうせぬかい〳〵にぶちすへ
 るぞ^大工ハイ〳〵さんじ升る〳〵^衆四人さあ早くうせ
 〇^大どれ〳〵又にらまれぬ内休みませふ^同皆さあムれ
 〳〵「ゑかり附られ大工共皆こそ〳〵と逆てゆくか
 たへの軒は饅頭屋が比さへ十一屋まだ手いらすと見
 へにける^{ト腹實の内より糸}萩世話姫にて出て^糸結構な御供養で御出家様
 方にはいかい御苦勞でムり升なア般ヲ、門前の饅頭

や其方も大佛供養が拜たからふなア糸たいさへ女子は罪の深い者とやら承り升れば慈悲萬行の御供養に逢まして先の世が助りたふ存升る般ハテ若輩者には奇特く岩イヤ何般若坊殿明日武將の御到着でムれば玄諸大名の假家くも下見分致さすば成升まい大殊に梶原殿より貴僧への内意もムれば法假家へ參つて何角の手つがひ申談せふ人いざ般若坊殿般いかにもく同道いたすでムらふが愚僧は彼山門の掃除ふれを申しつけ追附夫へ參るでムらふ三然らばお先へ般後刻逢申そふ「後刻く」と衆徒の面々寺内をさして入にけり跡見送つて般若坊般邪魔は拂らふたさらば供養を拜ましてやらふかト糸萩に抱附此内橋驛りより玉けあるふり糸是悪い事被成升るなアレエく般ハテこはがる事はない高で供養が拜みたいといふによつて供養を拜してやるのじや糸あた否らしい否じやくくトいろくしてもはなさぬゆへかいなくひつく般アイタ、コリヤひどいなにあはしたぞよ糸形にこそよれ嗜ましやんせいなア般イヤ嗜むまい愚僧是迄に娘の水上に掛つて終に一度仇矢のあつたためしがなく持合せのしろ物はせうく大佛なれどあしらふてとくくと供養をして

やらふさあ爰へく糸エ、あほうらしい般どつこい逸す事はならぬく「むりに引つけ無體の頬摺戻りかゝつて饅頭屋が支へる拍子に取違へほうど抱つき般ヤア饅頭屋の亭主房アイ亭主でムんす妹をとらへて今のはへ般イヤサ今のは何じやヲ、それそれ饅頭を買はふと思ふて糸饅頭所か色々のいやらしい玉サアく何もかも聞てゐる糸それでも玉ハテ饅頭の御用なら私らが店の商ひ世間に類は多けれど歌には青によしとよみ芥良饅頭の餡もよし殊更佛の御誓ひ慈悲萬ちうの蒸々は三笠の山に咽が鳴り五重薨にたつ湯氣は春日の里の名物饅頭サア買はしやんせく「云ひ並べたる饅頭屋が風味も嘸とまられけり般饅頭盡しの口上なかく甘そふな事じやとてもものにきづが饅頭玉エ、般饅頭の噺で殊の外じうまんした亭主是におゐやれ「喰ひ違ふてもへらず口そらさぬ體に行過るト山門の方糸姉様夜に入たれば買手もなさそふなちつと休ましやんせいなと玉伽藍供養の内は晝夜いとはぬ人群集その往來の中にも是やく糸がてんでムんす玉早ふゆきや糸アイ「アイの返事も愛をもつ松屋町筋急ぎ行主は庭の玉箒浮世の塵に交ら

で爰にも平家譜代の忠臣上總の景清が女房衣笠今度大佛供養の爲頼朝上洛とほの聞き仇をなさんと附規ふ夫に力をそへんすと女心の甲斐くしく郎等御所の黒彌吾を供につれ人目忍びて隠れ家を井手の玉水日はくれて急げど初夜になら坂や饅頭屋の床几のはし暫らく御めんとゝめばト向ふより衣笠著流し抱へ帶杖して黒幸ひの床几暫く休息被成ませぬか笠衣そふしませふわいのト兩人共玉見れば女中様の旅がけて夜に入ての御參詣は御信心なと申せふかしたたが晝は人せり夜夜中でもまがいのない大佛様おからだのいかい程御利益も有でムりませふ見受ますればお二人共さゝの成りそふな御風俗お否かは存ませねど所の名物おなぐさみにさし上ませふ「お歴々にと差出す饅頭より先女房の笑顔ニ一口くはまほし衣笠は唯一心兎や角案じて返事せず黒彌吾店かる追従に黒イヤモ尊い寺は門から見へるとお身がその風俗で饅頭の味も思ひやられた見れば暖簾にも行燈にも書附た家名は十一屋エ、此心を推量した饅頭を十かへば一つ添へると云心でそこで家名の十一屋かそふか」玉ほんに是はよい御推量でムんす成程さやう申たいが

こつちの心はそふではムんせぬ朝七つから店出して夜の四つに店終ふまで七つと四つの時を合せて黒エ、それで家名の十一屋か是も尤玉サ大佛供養で南都の賑ひ諸職人の繁昌は引もちぎらぬ櫛の齒の髪ゆふ間さへない仕合せ私らがいそがしさを推量被成て下さりませ黒成程、供養に附て頼朝上洛を召るれば附々も嘸あらん其外の參詣諸國の入込みさほど精出さいではなか、賣捌く事ではあるまい何と簡程結構に諸堂回廊以下までを再興しながら肝心の此山門計り修覆もせずその儘に残し置たは心有ての事かたいしは始末か音に聞た程にもない頼朝はまはいやつだな玉イエ、そりやあなたの御丁簡が違ひまする黒何丁簡が違つたとは玉サア深い様子は存せねど王様の御建立でムんすげな平家の惡者清盛入道が此大佛様を焼た時遣つたるは此山門ばかり能登守教經といふ大惡人大佛様へ射かけた矢がそれて此山門の垂木に當つて矢の根矢殻が今にあれば晝に成たら見やしやんせいかにこわい者がない惡さがしたいといふたとて日本第一の佛様を焼くづすといふ様な惡人魔王がまひとりと有ふか佛計りが堂では五百八八百

人此堂では千人二千人人ばかりでも四五千人程やき殺したその報ひ火附の大將頭の中將重衡は京鎌倉を引渡され果は衆徒の手にかゝつて七日曝され首切られた其跡が山門の脇にあれば是も翌見やしやんせこふ云ふ悪行の積りつもつた身の果は見る影のない平家のざまその上惟盛が子の六代とやらも先達てからめ取て此お寺の假家にとらはれ死罪にもなるのをば頼朝様のお慈悲でけふよ翌よと命を延してその儘にとらへてあるげな平家にたんと家來もあれど是を助る者もなく此山門に手もかけず其儘残し置るゝは末代平家の惡逆を人にしらせてたしなますみせしめじやとサア人の嘯に聞はづり私らが様な何もしらぬ者でさへ尤そふに存られ升る何とマア平家の奴らは憎い奴ではムリ升ぬかいなア「夫としらねば女の口齒に布きせぬ長嘯よそに聞なす衣笠がほいなき悲しさ口おしさ胸も碎くる計りにて忍涙にくれければなま中の事問出して黒彌吾返答あぐみはて黒サアそれも一概には云はれぬ有て過た事にはかならず附つそへつがある物何の平家計りそふ一がいに惡ふも有まい玉イエゝゝこんな事ではムんせぬまだマア大それた

惡事があるマア第一の悪いやつと申升るは黒ア、是さゝ問もせぬ長ばなし聞たくない置やれゝ聞ぬ先から耳驚かす四つの鐘中四つの玉あれゝ「寺中に聞へる四つの鐘はわたしらが店さし時あなた方もよい宿をおとり被成れ御參詣は翌に被成たがよふムんすどりや片附ていに升ふか」「かどに水打行燈しめし道具一つも取て直さずかたへの葭簀さらゝと引廻せば黒彌吾見かねて黒是さ亭主藏へ入た物でさへ盗たがる今の世の中夫に店を明はなして置といふはあまり不用心でないか表もさしよせて歸つたがよい玉イエゝゝ盗人の徘徊したは平家の世の時今の源氏の慈悲深い靜謐な世の中そんな氣遣ひはちつともない事よるひる表を明てをけば戸ざゝぬ御代とは今の時代でムんすわいなア「口も手元もしやんゝと仕もふて別れ立歸ればよいしない事を又いふて一度の恥に二度の口黒エ、忌々しい」「ふさぎ兼てぞ見へにける衣笠は最前より口惜涙にくれるしが黒彌吾をかたへにまねき衣賤しき女の口でさへ今の様な惡口雜言御一門の御身の上世上のさがない嘲弄をじつところへる我夫のお心まで思ひやられて主君の仇を報せん爲

死する命を永らへば死に増つたる今の恥ハテ是非もない成行じやなア黒サアそこを存て平家の侍上總の景清ともいはるゝ武士が西海に於て討死の場所を逃れ山林に身をかくさるゝ御主人かくいふ御所の黒彌吾迄共に命を永らへるも命おしいではない身に大望のあるゆへに衣サア其大望をはたさん爲に我夫は此間より大工日雇と姿をやつし今にもあれ頼朝が上洛なさば仇を報ふはやすけれど大切な惟盛卿の御公達六代様虜と成つて此寺に御座あるゆへ何卒これを奪返して恨の初太刀をさせ升たさに心を盡す景清殿黒夫ゆへにこそ主人景清まんまと大工日雇の人数に衣サア紛れ込はしながらも日雇の者は勝手ばかり六代様を奪かへす手だてもなく仇に月日を過すうちもし六代様のお身の上に怪我あやまのあらんかと思へばちつ共手延にならず女は人の油斷もあれば自ら忍込み六代様奪とらんと心をかためた今宵の思案こなたは夫と力を合せ山門に射附たる能登殿の矢がらの跡その儘置ては世のそしり人の見ぬ内取捨さしやんせ黒いかにも〱口で申事は中絶する折もムらふ眼前見するはそしりの種を蒔といふ物といふて

夜夜中御主人に申さんにもどこを尋ねん勝手もしれねばコリヤ晝の事に致そふかい衣イヤ其思案は廻り遠い一心をこらして捜しなばしんのやみとて晝同前自らは忍込み六代様を盗む内夫を捜して取捨さつしやれ幸ひ人も静まれば見越の松を傳ふてなりと黒ア、是さ〱その儀計りは御免あれ御存の通り我等生れ附てげんうんやみ高い所へ上れば忽に起る病氣やれ恐ろしや聞てさへ眼が舞よふな衣ホ、、又いつもの臆病風姫ごせの自らさへ命を捨ての此思案夫程こはい事ならばそこに控へてゐやしやんせわしから先へ忍びこまん「そふじや〱と身をかため松が枝傳ひ上らんと立寄所に人聲足音高挑灯トハイと壁アする〱何者やら參り升ぞや衣とがめられては大事の妨行過さして跡の事黒さやふムるいざこなたへ衣黒彌吾おじや打連木蔭へ忍びける挑灯に先を拂はせ梶原平三景時の奥方鬼の女房の幾船御前いはねど愛の夏化粧こなたよりは般若坊雙方行合ひそれと見るよりト橋懸りより幾船櫓の上へかゝへ帯にて家來大勢にかけ聲は梶原氏の奥方御家來にも仰られず御自分の夜廻り女儀のお勤近比お御苦勞に存る幾是は〱般若坊

殿こなた事は當寺に衆徒も多い中に心をまづた夫梶原兼て自らより御内意を言聞しあれば平家の餘類を尋出し一手柄被成たら連合が受あふて武士に取立出世のつる随分心を掛たがよふんすぞへ般成程／＼一手柄致そふと存するに附て愚僧が徒弟御所の黒彌吾と申者もと平家方の郎等なりしを幸ひ某が密意をまめし惡七兵衛景清に従がはせ頼朝公御上洛につけ此所へおびきよせからめとつて差上たらば是ばかりでも梶原殿のお手柄に成そうな物でゐるぞや幾い様こりや尤な存より平家没落以後夫景時殿も何卒してよい手柄をと心掛しが幸ひと家來番場の忠太は六代御前を虜とし御褒美に預らんとは思へ共その形りかたち男仕立にしてあれば六代ではあるまいと重忠の奥方がさへこさへ折角の手柄もはれ立すその儘の客あしらひにどゝめてあれば此序でに其景清もし此所へ尋參らば討てなりと搦てなりとかならず油斷をせまいぞへ般ハテ御意には及び申さぬ黒彌吾よりの密意の一書梶原殿へ御見せ置下され「懷中より一通取出し手に渡せば挑灯もて灯影にてらし逐一に讀渡し幾よし／＼互ひの手筈も上々吉粹此一通は夫

へ手渡しさいは追て何かの相談般然らば此まゝ幾般若坊殿兩人お別れ申す「まめし合して欲惡の火影をてらし入にける跡に残つて般若坊般何にもせよ手柄は此時うま甘い／＼今にも黒彌吾が手引にて景清が參つたならばつかまへて立身出世まだ／＼その上に褒美のかねイヤ／＼武勇に秀でし景清め手捕には叶ふまい不意を見すまし欺すに手なし今にもあれ參つたならばト此時後より黒彌吾衣笠を引すり出てきて黒イヤその景清は是にをるぞ般ヤアそちは御所の黒彌吾してその女は衣コリヤ自らを何とするのじや黒何とするとは生ぬるこし般若坊殿兼て言ひ合した通り此女こそ景清が女房衣笠こいつからまづひつく／＼多勢をもつて景清めを般ヤア出來た／＼愚僧もそれを案じてゐたして又其景清めは黒景清こそ此間より大工口雇の中に交はり頼朝公を待てをるのさ船ヲ、よし／＼夫も出來た先づ手始に此女子は黒女乍らも手ごはい奴力を合せてかゝらつしやれ般オツと合點皆までいふまい黒衣笠サア尋常に繩かゝれ「雙方より打かゝれば衣笠笑らふて身をかため衣フ、ウスリヤ我夫を虜にせんとそちら二人が計略で黒ヲ、黒彌吾が此體がてん

が行まい般若坊と某とは徒弟どし書狀を以て玄めし
 合せ般景清めを此所へそびき出し搦とつて梶原殿へ
 さし上てきやつも我等も立身出世黒かく計らはん我
 々が計り事何と骨身にこたへたか般かの書狀も幾船
 殿へたつた今渡して置た目見への印は幸ひなよい手
 土産引くゝつて連行ふ黒いかにもゝさあ衣笠うで
 まはせ「一度にかゝるを振拂らひ又取掛るを忠義の
 一心ぬからぬ衣笠左右一度に腕がへしころゝ」轉び
 打たりけりト兩人むごふ投られふ般あらいぶかしや女を
 とるは我等が得ものと衣笠を手の下に引敷たと思ひ
 の外ずんでんころりと取てほられたハハ、ツ天なる
 かな命なるかな黒所詮生捕は面倒な首にして連行ん
 ぬからつしやるな般若坊般ヲ、合點じや「はさみ立
 て切かけるをえたりや應と渡り合互ひにみがきし及
 の光り月にうそぶく春日野の飛火をちらして切結ぶ
 二人に一人の女の手業すでにあやうきその所へ大工
 姿に出たちし大のおのこ走り出さへる黒彌吾一太
 刀にばつさりいはせば般若坊こりや叶はじと駈出し
 跡をも見ずして逸失ける何國までもと追行衣笠やれ
 まて暫しと呼といめトあやふき所へ景清下座より淺黄頭巾手
 おひ脚絆上張にて走り出て黒彌吾をボン

とき 景やれまて女房長追ひ無用衣アおまへは夫景
 清殿 景シイトおさへる床のめりやす女房密書を以てしらせし如く
 我此程より大工日雇となつて入こめど情なや衆徒の
 奴原にさまたげられ眼前虜となり給ふ六代君もえゝ
 すくはずその方我になりかはりちつとも早く奪かへ
 せよ衣サアその密書を見るや否飛立つ如く來たりし
 を恩義を忘れし家來の黒彌吾般若坊と心を合せ事妨
 げて此隙どり景ホ、ウ惡の報ひは今此ざま我は幸ひ
 山門に駈登り矢の根矢殻を取すて、能登殿のそしり
 をさけん其方は公達を衣首尾よふ奪返して見ませふ
 景ヲ、出かした是まさかの時はト一寸合點か衣心得
 ました 景忍バト顔にておしへる衣笠松が枝に取附忍び、黒う
 む黒彌吾よろほひ起て景清にしがみつき
 ぬ景清め景うぬまだ業を果さぬかきりゝとくたば
 りをらふ「笛のくさりをぐつゝ」と突ならす鐘の聲
 景ありやもふ七つ「八つ九つも我耳へはいらざりし
 やがて店出す饅頭屋が葭簀の蔭に聞く共走らずト鐘
 をか
 ぞへ乍ら死がいなけたなす床のありやす玉 景六代君を奪返し
 房やはり世話なりにて出かけうかがひある 能登殿の矢がらの跡を拾し上平家の鬱憤おのれ頼朝
 寸玉房をあて松が枝へ登りける玉房さぐりよつてさへる一
 し玉夜目にかゝやく小蝶の蒔繪まさしく小松のト上
 の見

こんハテナアトこなし此見幕
へ管絃にて

此幕回廊の書割音楽入の鳴物に成り向ふより糸萩、
千草、白妙、貴船各衣裳振袖襦にて濱遊、立浪衣裳詰
の襦皆々手に紅梅櫻など折枝をもち並よく並び出る
臆病口より唐綾襦にて上下侍一人連出てあや唐是は
諸大名の御息女様たちお早い御出仕でより升る
女々本田殿の御内證今日は御苦勞に存升る唐是は御
挨拶見受升れば玄ほらしい御銘々のおさげもの頼
朝公にも今朝のお到著遊す筈夫近經は陪臣ながら此
度の御供仰附られ此唐綾までかよふな悦ばしい儀は
より升ぬ立今度の御供養に附て御臺様のお供申先へ
参つた此立浪は父廣元が名代役白工藤祐經が名代
は此白妙糸姉上玉房様のかはり役は妹糸萩貴父上岩
永様の名代は此貴船い仁田忠常が替りは妹の濱ゆ
ふ千草の助常胤が娘の千草立皆一統にお供申々御
臺様へのお側づかへ立湊けふの供養にお備へ申一もと
は谷の戸渡る鶯の法華經ならぬ囀りに宿はと問は
梅がえの白妙その紅梅に劣らじと匂ひいやます玄ら梅
は東大寺の名香にまつさきかけて咲出る糸彼岸櫻の
御利益に罪を忘れし入相のかね事ならぬお誓ひ貴船問

へど答へも口なしの咲亂れたる山吹は井出の玉川底
清く遊その水上を尋ぬれば律が宿に咲出し此家櫻千
深山櫻も一樣に皆様といひ合せ皆々おそなへ物唐どれ
もく打揃ふて何れをとらぬ花の御供養そふいふ事
と存じ升たら及ばずながら私も一もと用意仕りませ
ふ物ハテお羨ましいト橋懸りより東大寺住職同宿一人つれ出て
御息女達供養の時刻も最早追附假家くへお入有て
暫らくの休息あれ然るべう存升る唐是はく當寺の
御坊には御出迎ひ御苦勞に存升る此度の再建王者
の安危は佛法の盛衰に有と申せば百王の末まで四海
泰平たな心をさすがごとく箇様なよろこばしい儀は
より升ぬ唐いざ御息女様達には假家の内へお越あら
れ升ぬ立なさやふなら唐綾さんにも御一所に唐サ、
何れも様立いざ御一所に皆連立升ふわいなア職こふ
御入あられませふト始終音楽にて女形皆々唐綾住しよく造り
物向ふ奥深ふ二重の假御殿上手續きの二重残らず御
簾おろし紫の幕絞りあげ橋懸り回廊にて音楽止んで
直に下りばになる右の人数橋懸りより出て来る上手
より幾船出て幾諸大名の息女達お早ふんした立糸梶
原様の御内室幾船様女皆今日は御苦勞に存升る幾夫梶

原景時に成替り假家の夜廻り普請方一から十迄切て廻る此幾ふね唐サア夫ゆへにこそ女中様方の紀奉行此度の大役大體ではふり升まい皆女御推量申てをり升わいなア幾いやもふ何ばうほめられても腹のこへぬ此大役見ればめいゝ花を持てゐやしやんすは今日の花の立がらんと持參せふもの表向の御用に取込んで佛なぶりをとんと忘れてゐたわいなア立何とマアかあいらしい幾船様の御詞ではないかいなア濱ほんに梶原様にはよふ似合た御夫婦じやわいなア草えてあんな顔で寢所へ這入ると夫はゝゝゝみしつこい物じやげな幾こな様達はさまざまの事をいはしやんす女がの皆々でも嘘じやなし幾コリヤ聞てはゐられぬトおこる店店マアゝお待あそばせ今のはほんの座興もふ御丁簡遊ばせいなア立今のがお心にさはつたら糸皆一統に皆誤つたわいなア幾いはしてをけばさまゝの事代トむつとしたこなし上手より姉四附六姉幾船様始何れもさま同お揃ひ被成てお早い御出仕四人先達てよりとり子と成たる此お子同お心のむすばれぬ様同なぐさめ申せと御臺様の四人仰附でふり升る立ヲ、

お情深い御臺様の御仁心何國の誰が子かゑらね其平家の若君六代御前と疑ひかゝり糸先だつてから此御假家に唐同前ほんに思へばいとし事幾六代御前は平家の嫡々敵の末は根をたつて葉をからすと家來番場の忠太が召とつて參つたを早速縛り首にも被成そうな所今にその儘助け置あまつさへお膝元に狎飼ふよふに遊ばす政子様の御心底一圓わたしは吞込ぬ夫平三殿が聞れたら宜しいとは申されまいよ立そりや幾船様の御丁簡違ひ六代御前は姫ごせの筈なるに召捕たあの子は男尤髪ゆひよふ衣裳附は女子に似せて誠は男の紛れ者糸立浪様のおつしやる通り姉上様のお詞にも誠の六代やらにせ物やらゑれぬ物をうかゝと殺しては世上の嘲り自天下の武將の御眼力が違ふたと有ては末代迄の誤りとなる貴夫ゆへ正體のしれる迄は北の方様のお預りおとなの四人同前に嚴しふ縛り草千もし死だその時に六代でなかつたらまんなら無成敗濱夫ゆへに詮議の間お側にいたはり置給ふはさすがは公の御政道御尤な事じやと六私らは存升る幾ホ、それはあんまりお前方の先ぐり其男の子が六代といふ證據は敵の末でも女はゆるす

とわざと女子の子に仕立て置た惟盛が計略のお氣の
附ぬ北の方様ではないがム、聞へた日比から仁義ば
つた重忠殿の御内證政子様へ勧めこみ六代を助けふ
と思はしやるに極つた唐イヤモウシ幾船様玉房様が
此所にお出ないとしてその様におつしやらす共宜しい
事ゆるく」と詮議してもし六代に極つたらば何時ど
ふせふと儘の事こりや政子様にも玉房様にも深い御
了簡あつての事とサア私共は存升る幾唐綾だまりや
またものゝ女房に批判は受ぬだまつてゐや唐おつし
やるに及ばぬ陪者の本田が女房お前は又梶原様のお
姫にお手の掛つた幾ふね様奥方がお果被成ると引上
げられて仔細らしい後連のおかもじ顔幾ヲ、せい
でわいのひの臍の強い平三殿わしが色香に迷ふての附
み年よりの男程猶かはいひイヤ又夫の氣立のよさは
んに虫一疋もえゝ殺さぬ唐ヲ、取わけげぢぢぢは猶
大事に被成てゝ有ふ幾何が何といやる今ひとこと
ふて見や唐ハイげぢぢに連そふ百足御寮幾いや推
參な口答へト兩人き 立是はゑたりはしたない五人もふ了
簡遊ばせいなアト皆々雙方なしづめる幾船びんと顔侍申上 升
る相州の住人箕尾の谷四郎國時殿北の方様には御訴

訟の筋有て御門前にひかへられしが是へ通し升ふか
いか計ひませふな幾ハテ心得ぬその箕尾の谷は八
島の軍に不覺をとりおめく」と顔出しもならぬかし
て軍場より直に遶て鎌倉へもよふ歸らず何を功に北
の方様へ訴訟だて立然しながら又いかよふなる事と
もゑれず自らと幾船様是に残つて仔細を聞升ふ皆様
は奥殿へ糸そんなら立浪様白幾船様にも後程 皆おめ
にかゝりませふト歌に成り五人に六人秘四人附そひ上 唐それ
みをのや殿を是へ侍ハツ箕尾の谷國時はへお通り被
成いト言すて 箕尾ハ、ア「武士の取傳へたる梓弓弦を
はなれし箕尾の谷國時浪人せねど心からおづゝ庭
に打通りト花道より箕尾の谷上下大小にてまづ 三ハツ是
はく大江の息女梶原の奥方久々の對面先以て御健
勝にて珍重至極に存升る「いへど目禮ゑたばかり誰
が挨拶をする物なければ三イヤ夫にゑるは本田の内
證唐綾殿先々こなたにも御けんしやうにて珍重に存
る今日某推參のいたしたは御訴訟のむね有ての儀何
卒北の方へ御苦勞ながらお取次たのみ入る「もみ手
をすれば氣の毒顔唐でも扱もよくくゝの事なりやこ
そ陪臣の女房づれにおたのみあつと申たいがエ、申

さぬ壇の浦にて平家の侍悪七兵衛景清に出合ひさんぐに打負源氏の勢にひけをとらせし箕尾の谷四郎殿のお取次はえゝ申さぬ餘人をおたのみ遊ばしませ「すげなく立て入れば返答一句も上らぬかしら面目なげに見へけるが三きこそ」臆病武士と侍の中に嘲らるゝは覺悟の前その言譯にはあらぬ共一旦鎌倉へも立歸らず戰場より直さま出奔せし倉忽の段々我君の御いきどほりお詫申上んため恥をすてゝ參つたり一寸なり其北の方のお詞を掛らるゝよふ武士の情立浪殿幾船殿何卒北の方へおとりなしを頼存する「思ひ入たる風情にもむごい幾船けら」笑ひ幾ヲ、笑止や箕尾の谷殿尤今出頭第一の景時取なしを致されたら御機嫌も直らふけれどマアならぬ聞ば八島で景清にむげつせうに投附られ首の骨折つたげながよふ爰までムんした侍の風上にも置かれぬ人此場に平三殿がゐらるゝなら大小もいであほう拂ひ手よふ町人になつた方がよかりそふな事まじくじせずといなしやんせ誰がマアそんな人のとりなしをア、あたためた「びん玄やんとして奥へ行跡の無念はいかばかり涙はむねにせまれども身の誤りにせひもなき

三此恥辱を雪がんには景清が首取て上覽に入れんと晝夜心を碎け共行衛まねば詮方なし此うへたのむは立浪殿何卒武士一人助けると思し召御取次頼み奉る「くやむ心を思ひやり立まくるも引も軍の習らひ景清と箕尾の谷殿まさりおとりのない勇士すこし汀へ引えりぞきしをはや臆病と人のいひなし何事も運次第政子様へは玉房様諸共ひそかに宜しふ申上ふ只今はおひかへ被成とにかく時をまたねばならぬ追附お手柄遊ばして再び歸る國時殿サアとくと御合點が「心をやぶらぬ廣元が娘はさすが利發なり四郎もすこし力を得三然らば何か御前宜しく立いさい心得ました三おさらばでムり升る「別れて歸る御假家の夜は玄ん」とトナクリにて箕尾の谷橋懸りへ立浪は上手へ這入る本諺つりがねに一せ立浪は更行鐘の聲立て音も烈しき嵐かな「あらしを防ぐ笠ならで人目を玄のぶ薄絹に女姿の腰細く肝ふとぎやの太刀脇ばさみ假家をめがけ忍びよる怪しと兼て氣を附る宿直の女中の見るぞともいさ白鷺のさし足に駈入らんとする後よりト此内衣笠著流し一腰さしかつぎ著伺い來て假家へ行ふとする雙方より幾端唐綾長刀を出てきつととめる唐マア「待た何者なるぞ」聲かけられて返答なく引歸さんとする所を同じく幾船のまた

の姫 幾御假家まぢかふ窺ふ曲もの 皆マア まつた

待やいのう「立ふさがればふり拂ふよは腰まつかと
いだきとめ唐待たく本田が女房唐あやがこふ抱留
た名をなのりや」留たやらぬをふり放し又引返すつ
まさきにすつくと立たる幾船が手取にせんと附廻し
幾待たやらぬ梶原が妻の幾船こふ抱留たが動いて見
や「邪魔しやんなとふり拂ふはぎもあらはのふとり
じし矢筈に組は梶原ふうこなたはまつかと本田に組
あまたの姫おくれじとかゝるをすかさず切拂らひ御
殿間近く駈よる所に ト立廻り有て皆々切拂ひつかくと玉景
きよき月にかざすや三笠山衣ヤ、なんと玉供養に参
りし旅の女最前顔を見まつたる下賤の女改めて對面せ
ト天皇立に成りみす一面に巻上る正面に玉房衣裳襟にて兩方に
糸萩立なき漬ゆふ千草貴船白妙長刀をもち片手に手燭さし出し
燭臺に灯を 衣ヤアこなたは 玉山門のほとりにて下賤
の女と見せたるは兼て自らがばかり事忍びこむ曲者
も有んかと御臺所を守護の役唐さあ女の身にて太刀
を佩人なき夜を窺ふは幾必定盗人の引入り眞直に名
をなのりや 皆さあ有體に白狀しやなんとく トきつと
詰よる
衣イヤ全く盜賊ではふりませぬぞ幾夫でなくば平家
の餘類 唐源氏の御家に仇せん爲か 衣イヤ全くもつ

て 唐幾さなくば何もの衣サアそれは唐忝なくも頼朝公

の北の方の御座ある御殿へ幾見れば女子の分として
大膽不敵な曲者め 女六人さあ有體に白狀しや 四人返答
は何とく「詰かけられてハ、ハット白洲にどふと
打ふして衣名のるまじとは思へ共かう成からはせひ
に及ばぬ恥かしながら自らは頼朝公いまだ流人にて
おはせし比假のお情を受ました者でふり升る「聞て
一度に驚く女中玉房御せん詞を改め玉ふすりやそ
なたハア我君様がいまだ伊豆の國に御流人の折から
衣アイいやしい此身を勿體ない頼朝様の假の契り一
夜を二夜と重なつてお情をかふむつた者でふり升る
幾すりや此女子を我君様ががをれ玉ハテお情を受た
女子よのふして又その女中が何故爰へ衣サア忍び入
たは面目なやたしなまれぬは女子の淺はか格氣嫉妬
の心から政子の方のおはさねば我も君の北の方と敬
まはれ御寵愛を蒙りて數多の人にもかしづかれんに
とふと思ふよりいやます無念さ妬しさとてもそはれ
ぬ此身ならばせめて政子の御かたを一太刀なり共恨
の刃報ふて我も死ん物と及ばぬながらも女子の念力
我身乍らも内心如夜又佛の罰も恐ろしや赦してたべ

何れも様「赦してたべといふ聲も涙にくれくゝまみ
くゝと思ひこんでぞのべにける幾船は高笑ひ幾ハ、
、あの爰ないつはり物我君様が此所にお出ない
てあんまりな出る儘何でもあやしいその女「繩かけ
んずと飛つくを玉房暫しとおしといめ玉マアくま
つた幾船様我君御浪々の折からお手かけられた女中
は數多成程そふいふ事も有ふお情受し人とあれば政
子様とても同じ身の上畠山重忠が奥玉房が聞といけ
ん幾ア、是夫ではあまり玉ハテマア自らにおまかせ
あれサ、女中爰へくゝ「サアくゝ近ふと和らかに打
てかはりし詞附^女玉房様がおめし被成る近ふよりや
衣ノウ恥かしやお前達のそのお詞に恥入て何とお傍
へ行れふぞ「逃んとすればおつとりまき唐くはしふ
様子をきく迄はめつたに爰は逃しませぬぞ^{こふ衣笠油}
^{断せぬ}玉イヤ女中逃るに及ばぬ怏氣嫉妬は政子様で
も同じ事女の身には相互ひ政子様にも申あげ爲あし
ふははからはぬ衣夫でもあまり恥かしい幾そんなら
夫はいつはり事が衣イヤ全くそふでは唐但しは平家
の餘類の者か衣イヤ何のマア^女皆々そんなら下に居や
いのふ^{ト是にて衣笠下にある}玉戀を寝取られ腹立は道理くゝその

腹立を納るよふに仕様がある政子様になりかはり北
の方と我君の中に生れし若君あり御寵愛の御子なれ
ど今すつぱりとそなたに渡そう幾ア、是夫では玉サ
ア政子様の祕藏の若君あの女中に渡すが計略イヤ渡
すが潔白其若君をそなたにやれば怏氣嫉妬の一念も
晴そふな物じやぞやそれ唐綾唐ハツ畏りました「一
間の内より六代御前手を取て誘ひ出衣笠が前にすへ
唐サア玉房様のおつしやる通り大切な若君なれど幾
そなたの心の納るやふ性根をすへて受とりやいのふ
眼の先へ突附れば顔見て恠り衣ヤアおまへは六サ
アろくくゝに夜目では見へかねど頼朝様の御公達を
此様にかるくゝしふ玉サア政子様の御子なれば御世
繼にもなる時はいよくそもじがはむらの種怏氣の
根をたつ潔白にそもじ手につけて若君を目の前で殺し
てしまや衣エ、エイ玉ハテ夫で怏氣が納らふがな衣
エ、めつそふな勿體ない玉もつたいないとは何の事
唐憎しとおもふ御臺の若君^ひ幾すつぱりと殺しやいの
ふ^皆サアくゝ早ふころしやいのふ「サアくゝ早ふと
口々に突附られて衣笠は衣イエくゝ「此お子を政
子様の若君とは大きないつはり唐そんなら誰が子ぞ

衣サア此お子は、幾平家の公達六代御前か衣サアそれは「ハツと計りに俄の轉動すは曲者とそふく」が中に取こみ詰かくる玉ヲ、是で大方様子はゑれたさり乍ら假にも我君の忍び妻と名のるからは麓略にならぬ大事の珍客をふかそふでないかは今宵の内我君様が御到着遊ばしたらゑれる事衣すりや私を此儘で玉君のお妾其若君と御一所にあの一間で休息さつしやれ皆イエそれではモウシ玉ハテ随分いたはり御馳走申しや「仰せは情の責道具衣さやうなれば玉房様玉それ客人をともしなや唐幾さあ尋常にト六代と衣笠を唐綾幾船遊四こふお出被成ませふ「詞はゆるせどゆるさぬ心込ばきらんず居合腰毒蛇の口の假家の中臆せず奥へ入姿とつくと見送り玉房御前ト女形六人玉房玉誰ぞあるか衆徒達を是へ呼びや女六人衆徒の面々是へ詰さつしやれ「御めしあれば衆徒の面々何事やらんと駈出ト橋より四人の衆 岩く拙僧始一山の者共 三人罷出升たが御徒走り出て用ばしムり升かな玉ホ、ウ衆徒達を呼よせしは餘の儀にあらず此頃大工の中に人にすぐれし丈夫の男心得ずとめを附しに最前あの回廊へ忍びこみしを見届け置た法師に似合ぬ役乍ら疵附ぬよう搦取高名あれ

亙ハツ心得ました何れも回廊の裏手へ廻り法曲者をからめとり日大御ほうびに預らん 岩く何れもムれ「得物」の道具を引さげ裏手をさしてぞ走り行玉房始女中達長刀そばめ立たる所へ駈つて來る箕尾の谷國時すは曲者と數多の女中おつ取まくをふり拂トバタにて箕尾の谷上なもはれも立取て三こりや何れも此國時走り出る女形六人さいへるふり拂トバらへを何としめさる女六人ヤアこなたは箕尾の谷殿三ヤアそれにムるは重忠公の奥方玉房様ハ、ハツ「平伏したるその中へ追々女中があらはだしくト上手より以幾唯今の女一間に押こめ置たる所唐椽の下に穴有て六代御前奪ひとり女四人一向行衛は相知れ升ぬ玉何はや拔道より逃しとやエ、残り多い「聞より箕尾の谷齒がみをなし三扱こそく相ずりの大工めが拵へ置たるその抜あな惡七兵衛景清此邊に徘徊なすよし聞たるゆへ召取て身の言譯仕らんと今宵此所へ推參せしにその大工とやらんは察する所景清めに相違あるまじうぬひつとらへて我君へ御勘氣の御詫願はんそれ「のがしはせじと勞ひこんで駈出すを玉ヤレまで箕尾の谷國時殿自らそれとゑつたは最前大工が回廊へ駈登りしその時我手に入りし此印籠以前の印籠 三こりやをばふる

是小蝶の蒔繪蝶は平家の紋所すりやいよ／＼景清に相違はないわへ玉サア自らも始より景清夫婦と玄つたれ共大佛供養の靈場にて人を殺すは我君様の御本意ならず三成程はも御尤玉一まづ此場を助け歸すも御臺様の御内意我君の御仁心を玄らさん爲今宵の時宜でくはしくしれた誠の六代景清と二つの首は餘人が討てはこなたが武士が立升まいぞや三夫ゆへにこそ此身のかなん玉サ、そこを思ふて此役目は箕尾の谷殿こなたに申附よと御臺様の御内意随分共に心をつけ二つの首を討とつて頼朝公へ御對面申上る家づとにする大事の役目三すりや此國時にそのお役目を幾イ、ヤそふはなるまい景清をめしとるは夫の役目箕尾の谷にはゆるされますまい玉是は又聞わけない國時殿にはなせなりませぬ幾八島の浦で出合ふた時赤恥かいた箕尾の谷が玉さればいなその恥辱を雪がふ爲幾そりやあんまりな依怙ひいき玉私の計らひならず御臺様よりの御詞を背ひてもくるしふないかな幾サアそれは玉サア／＼玉何とでムんす幾船様幾エ、いま／＼しい玉こふいひ渡す上からは心得たるか箕尾の谷殿「仰はおもき大將に成かはつたる女

中の嚴命三ハ、ハツ／＼有難き玉房様の嚴命時日を移さず六代景清追討とりお目見へ申さん皆女ちつとも早く出立あれ三心得ました何れもおさらば「打立上れば箕尾の谷にちからを附るも武士の妻錆浪人の討手の大將追附恥辱をすゝぎなばめでたく凱陣／＼と別れ／＼にト三重にて幾船きせん玉房かへし造り物一面に朱の回廊上より一面に松の釣枝下るドン／＼太鼓にて直に般若坊衆徒四人共各役面にて太刀を佩長刀をもち出て行合ひ玉是は般若坊殿貴僧は先程より何れにムつた一遍とさがし升た般いやもふ既の事に冥途へ走らふと致したがよふ／＼足にまかして此世へ又引返してムる法そりや何ゆへでムる般何ゆへ所ではムらぬ此間より計略を廻らし置た景清め大工の中にまざつて女房衣笠めを手取にせんと致した所をすつてんころりと死すかめに逢升た岩よふ／＼すりや女中方より言出されし大工といふは悪七兵衛景清めで有たか般何すりやはや女中方より言出しがムつたか大いかにも山門の饅頭屋をしてゐた女は重忠殿の奥方玉房殿でござつたはいの般ヨウ／＼あの鼻が玉房御前であつたかア、終ひ／＼玄此上は景清め

をかり出し我々より搦め取て褒美に預らふではゝらぬか般若坊殿般イヤ／＼拙者はまだ先刻の虫が納りませぬ愚僧に構すと我一に働かつしやれ岩然らば一山の者共に申附かり出しませふ日大さやふ致そふ何れもムれト又ドン太鼓になり般若坊と四人わかれて東西へ這入の形を脱がすめる音樂入の鳴物に成り回廊の上より景清以前岩倉坊玄界坊出でゝ窺ふ景清すつと下りてあたりを窺ふ衆徒兩人長刀と棒にてきつとかこふ立廻りあつてボン／＼と投きつと見へ此時下手の回廊を切りぬき衣笠はもぬき刀にて片手に六代の手を引ずつと出る大日坊法藏坊は討て出でかゝる景清ボン／＼と切る玄界坊岩倉坊又かゝるな景清はけしき立まはつて四人共殺し互ひにさぐり生衣笠六代にほふかむりさ衣おまへは我夫景しせて抱上る景清よく／＼すかし見て

て六代君は衣則是に景ヲ、出かした早ふ衣がつてんでムんすト下手の切やぶりより箕尾の谷好の形りにて窺ひ出で衣是より兩人面白き立廻りの内衣笠六代を抱たまひ花道中程迄行大日坊此中へ起上つてかゝるを突やり景清花道へツカ／＼と行箕尾の谷すか三正しくかけ清景エイ日にて受とめるおの／＼宜しくひや幕

幕外景清手にてゆけとする衣笠六代を抱向ふへ這入る鳴り物打上る

右東大寺の齣は所謂口幕にして次幕への仕込なり次幕にて景清いつもの大佛供養の容となる齣いと長ければ下の巻終に出す好人かならず次幕を讀て佳境に入給ふべしと云々

西澤
文庫
脚色餘錄二編下の卷

目次

- 一 濡髪長五郎の事實
- 一 茨木屋幸齋の事迹
- 一 五人男雁金の追考
- 一 小栗判官車街道の話
- 一 白石嘶金江の話
- 一 曾根崎新地發端の話
- 一 朝比奈宗兵衛の事實
- 一 赤穂義臣傳作者の話
- 一 長歌無間鐘の詩歌
- 一 生瀬川魴筏狂言の話
- 一 源平鍛曳競の正本
- 一 壇浦軍物語の正本

西澤脚色餘錄二編下の巻

西澤綺語堂李叟著

濡髪長五郎の事實

上州沼田の城主土岐丹後守の家士岩村長右衛門といふ者故有て浪人して城州八幡に塾居し都倉與惣兵衛と改名し手跡の指南を業とす其子長五郎生得角力を好み同所荒石斧右衛門と云角力取の養子と成り荒石長五郎と名乗けり八幡の荒石斧右衛門は其比角力の親仁分なりと此長五郎若氣の血氣に任せ喧嘩口論を好み常に水にて浸し頭を手拭にて捲く尤是用意の爲也濡たる紙は刃物とても通る事なし異國にては紙具足とて水にて數枚の紙を身に張けるよし此理を以て長五郎も常に濡紙を額にあつる故に荒石といふ名乗はあれども諸人濡紙々々とて呼にける土岐丹後侯大阪御城代の節此濡紙長五郎難波浦にて服部惣左衛門といへる侍と喧嘩をなし終に右惣左衛門殺して親里八幡に身を潜みけれ共天網

のがれがたく入牢に及ぶ相撲大全に攝州出產名高き關取の部に濡髪といふ名乗も見ゆれど是は別人にて長五郎の角力名乗は荒石と言とぞ一説に河州觀心寺にて召捕るとも云り享保十巳年豊竹座淨瑠璃昔米萬石通に出し後雙蝶々曲輪日記と増補せり又云濡紙助命して城州鞍馬にて大阪屋長右衛門と改め宿屋商賣をし晩年に終ると説有ゆへに寛政花洛清水夜開帳といふ狂言に八岩源五郎は此濡髪の忤なりと脚色めり實なりや不知

茨木屋幸齋の事迹

翁草に曰浪華新町茨木屋幸齋事身の程をもしらぬ奢を極め己が居間は金襖水晶の障子輝きわたり恰も宮殿の如く朝夕掛盤にて饗膳の式に等しく日々に献立を以て料理を伺ひ庖丁人山海の珍味を整て是を饗す數多抱への傾城襦袢にて配膳給仕すおのが心に叶はざる料理をば足を以て膳を蹴返し身には錦繡を衣とし豹虎の敷皮梨子地の曲景其過奢高位の人にも越其比八文字屋自笑が出せし草紙にも傾城竈將軍と題して五冊物にて其侈りを書り我家の内に公儀地の有しに夫へ能舞臺を建て常に猿樂を翫ぶ斯様の類重々超

過して享保三年に廳所へ召呼るゝ處虛病を構へて出ず仍て先手錠をかけ所へお預けに成幸齋家内を改めらるゝ處金銀財寶の高は未考傾城の抱へ太夫三十七人引舟三十七人禿三十七人轉人四十二人禿四十二人其外局女郎など大勢有之凡家内人數五百人計也同九月三日幸齋并忤多助牢舍仰附られ御詮議の上大阪三郷御拂に成り而して幸齋は京都島原に來て娘の名前にて暫らく潜居しけるが大阪にての奢の事喧く人口に在て京にても粗御沙汰有くらゐなりければ島原にも住がたく跡を匿して去りぬ忤治助は親の奢に懲りて自らを慎み島原へ來て揚屋町の者共に是を歎きおのがたづきを此地にて始ん事を頼む彼が生質心ざま優にして風月を翫び俳名吞鯨と號す又諸業の道にかしこく一廓の者に睦ぶ事類ひなし故に廓中一統に最負して桔梗屋といふ潰株を興させ渡世を初させけるに日を追て繁昌し島原にて名を得し上林一文字屋の類ひの女郎屋は皆衰へ絶果て桔梗屋のみ榮へ吞鯨は寛政の始に世を去り甥吞鯨是を嗣で今にては一廓凡吞鯨が有となるが如く家内二百人暮して時めきける吞鯨兄弟是又後年に至り家號を改め大阪屋彦三郎と

て新町にて傾城屋を再興し今に彼の地に在り又浪華青樓志に幸齋の宅地は吉原町大西佐渡島町末屋四郎三郎十字街吉原町行營入口有に有能舞臺は少々東に有別に入是より西行當り迄築山なるが故に山屋敷と呼ぶ庭中の佳景任侵康樂展不及談目不及瞬築山の景最美なり其比戲作に幸齋一件を能の番組とす 能番組 大きなせんざい身代上る 難波一もんの聞す座頭身のはて正尊初めは手錠今は手繩にきはまる 松風終に籠へ入間川跡は闕なんの上惡事は名取川流罪な浮舟者はるぐひみだれ上享保五年豐竹座淨瑠璃に山柘太夫吉原雀といふ戲文は幸齋が奢侈を山柘太夫が擬して作れり作者は紀海音也歌舞妓は寛政中にけいせい青陽鶉三つ目入方村與惣太夫の奢もけいせい遊山櫻三つ目小西如清の奢の場も此茨木屋幸齋が奢侈を脚色したる物也前々の編にとく木津屋吉兵衛、淀屋辰五郎が奢侈も後々は人々に混じ思ふものも多かるべし

五人男雁金の追考

前にも云雁金文七、極印千右衛門の墓は高津正法寺に俗日親法華 境内に有碑面に 元禄十五午 法受院順亮日隨臺宗なり 石に雁金屋と有是に並びて 元禄十五午 妙法經力薩達 八月二十六日 即身成佛

摩圓志靈俗名極印屋千右衛門と有又千日の墓所雷神木の東手に五人男の石碑墓の中に有しが近來置變しか見えなりり天王寺の境内藥師堂に雁金文七が奉納せし八島合戰の繪馬有しが享和中伽藍回録の時焼亡したりと古老の曰此繪馬は貞享五年奉納と書記し有て文七が十三四の比也と廊中一覽に云佐渡島町備前屋某抱へ女郎清川は五人男魁主雁金文七より名を發す實は清瀧とて卑品の妓也名を替狂言に用ゆる事勿論にて元祿中の妓也宇治加賀掾の院本雁金文七に清川と書けり其文に云「戀の山情の海の深うして全盛の船漕寄する浮氣の湊姿の市智あるも愚なりけるも色の手習らひいきかたをよねの指南による糸の結びとめて其人の粹となさぬはなかりけりほだしの里や四筋町夜店の灯火暗らくとも心の光り清川とて流れにしつをかけ渡す端女郎の中にて戀と云字は有明のつき出しよりも文七とかはるまいとの誓紙まで書たる文も徒らに^下是清川とせし始也亦晋子其角が句に「文七にふまるな庭の蝸牛」と云句は寂連の歌に「牛の子にふまれな庭のかたつぶり角あるとも身をばたのまじ」と此上の五文字をかへたるもの

なり此句は俠夫雁金文七が事と思ふは違へり是は文七元結をよみたる句にて元結屋文七が製は強くして切るゝ事なし其角が著せし北の窓といふ書に茅場町に角が棲し北隣の空地は元結をこく場所といふ事見ゆ文七は大阪奈良屋町雁金屋七兵衛の忤にて市中をあばれ歩行往來の人に手疵を負せしゆへ元祿十二卯年四月二十三日父母より願ひて牢舎中に父大病に煩ひて五月十五日空しくなる母愛情ふかく六月二十七日赦免を願ひ出牢す然るに惡事益つのりて遂に刑罰に當りて死せり世俗五人男新町にて召捕るゝ時端午の節句にて門々に幟竿立有しゆへ其竿に登りしゆへ今通筋に幟を立ざるよし云是也廊中は御用地ゆへ通筋に正月の門松端午の幟を立る事なし

小栗判官車街道の話

小栗判官兼氏横山何某に毒酒を飲され死すべき所を照手といへる留女の情にて其場を遁れ鬼鹿毛といふ名馬に鞭打て上方まで來たれ共毒骨身に通つて癪病となり紀の國熊野の湯に浴せんと車に乗つて行しと云は古くいひ來る事と見へ小説稗史にさまゞと出し有其時代をもつて定めず眞偽詳ならずといへ共浪

華下寺町の西田圃の中に小栗が車捨場といふ跡遺り
又四天王寺の南阿部野道を車街道ともいふ元文三年
年竹本淨瑠璃に作者千前軒
文耕堂小栗判官車街道と外題し

て道行魂の緒綱に「天神橋を一筋にたのむ未來の寺

町や口繩坂の邊りにて暫らく車をやすめける中略不慮

の難儀に思はずも爰にとゞまる小栗の古跡車とゞめ

と名に響く下略然れば是迄にも俊徳街道小橋天王寺邊
小栗街道と古人はいひ來りたれど此淨瑠璃後の東の道なり

栗街道と古人はいひ來りたれど此淨瑠璃後に古跡と

定めたるなるべし繩手車と云東都の諷ひ物には藤澤

寺の門前に暫らく車をとゞめけりと直したるも此車

街道の道行より出したるなり後俊徳丸は河内の高安

の左衛門の愛子癩病にて父に捨られ天王寺の西門

にイむとは謠曲の弱法師に有より淨瑠璃には享保
十八年

秀俗人吾妻雛形並木宗助作安永
二年攝州合邦の辻近松

半二作れり是もいつの時代か眞偽詳ならず兼氏も俊

徳も癩病にて車に乗り故迹を遺せど何れか一人の事

なるべし俊徳街道も實は中興開きし道なれば新徳な

るべしとも思ふ因に云下寺町より谷町寺町へ行通路

に口繩坂とは往古坂路あしく繩をつなぎあるを往來
人たぐりて登りし故寺町口の繩坂と呼しが蛇坂と稱

誤りたり俳諧梅の都に「雲を得て脱やくちなは坂の
衣と伊豫天曲の句あり世に古迹を遺すは淨瑠璃作者
に限れりと思ふ

白石嘶金江の語

虚實不分明也といへ共慶安太平記と云書に慶安四卯
年八月三日天王寺の東門にて切腹の者有則檢使改る
所に黒縮緬の單羽織を敷物として黒羽二重の袴に梶
の葉の紋附たるを著せし男指添にて腹を切其刀を首
にかけて搔落し我首のたぶさを掴み刀を土邊に突立
て死したる有様前代未聞の切腹也則傍に書置一通有
其文に曰

此度山井正雪丸橋忠彌が叛逆に組し大阪方の大將
を承りたる者にて候正雪が身の上心元なく存山崎
口へ駿府之趣正雪より成行も聞又吉田初右衛門が
事も心元なく早速駈登り候所其當座に召捕られ候
條殘念に存候て切腹仕るものなり此趣宜敷御披露
を願上候以上

慶安四年八月三日

金井半兵衛政教在判

百三十年後安永九子年焉馬と紀上太郎が作の江戸淨
瑠璃碁太平記白石嘶逆井村にて金江谷五郎のせりふ

に我はいよ、此程の貴殿の指麾に随ひて難波の浦の總大將四天王寺の東門に陣所を構へ略詞はまさにあたれるかな反逆露顯の時至り四天王寺の東門に骸をさらせど名は朽ぬ金江が義心ぞいさぎよき略此文句にて金井が名も人にしらる猶金井が傳慶安太平記と云書に異説あれ共追つて説べし

曾根崎新地發端の語

前に出す曾根崎新地心中情死の續きし話に附て元祿九丙子年西成郡曾根崎村より上福島迄片原町の新地と成り其比俗新色里といひて大に繁榮の地となり色茶屋の光景又は茶代物日身上などいふ事あり元祿の末に出板せし色茶屋諸分車と云書にくはしく書たり又貞享年中迄曾根崎村の田圃に北野の火葬場有て大阪の市中に火葬の餘烟匂ひて其穢れを忌て浦江村の東今の梅田の地へ移す古老云曾根崎新地二丁目往古の墓地跡にて今も折節石塔五輪などの舊きを掘出す事ありとぞ又浦江の東を墓地として田圃を埋しゆへ埋田と云よし元祿後寶永年中は梅田橋南北の岸に茶店列なり夏より秋に至る迄諸人群をなして都四條河原の納涼を移し北野不動寺參詣人夥しく御縁日十

六日を堂島米市濱方の休日と定む近世不動寺は淋しくなれ共毎月十六日は濱方の休日となれりとぞ初編心中情死を說中にお高梅田の心中平兵衛氷の朔日の文中に梅田橋の涼に風をあげ不動參りなど有て符合する事數多あり至て古き事は人よくしれ共中比の事は確とせし書に遺らねばかへつて珍しき心地せらるゝ也以前は繁榮せし土地と見へたり

朝比奈宗兵衛の事實

浪華雜傑集に元文の比大阪新靱に朝日奈宗兵衛と云者有しがいか成宿業にや若き時濕を煩らひ長病のうへ豐となりけれ共筆談仕方等にて事を辨する事速也生質俠氣有て義を立る事俗に珍らし爰を以ていかなる無賴の者も恐怖なして随ひける此宗兵衛實子六七歳の比近所の子供遊びけるが干鯛俵高く積重ねありし土へ子供三人登りしに八歳になりし者宗兵衛が一子を突落しけるが急處を打たるにや氣絶なしける爰に於て宗兵衛夫婦並に突落せし者の兩親も大きに驚き先呼生氣附など吹こみければ漸く人心地は附けれ共かよはき小兒の事なれば程なく死たり母親は大きに悲しみ泣口說ければ宗兵衛申やう歎は更々無理

ならね共過去の宿縁にて是迄の定業なるべし逆さまなる事乍ら香花を採て得させよと計りいひて頓て野送りをなしにける然るに突落せし小兒の父母其子を連來りて申様子供の所爲とは申ながら其許の子息の敵は此忤也解死人に取て御存分に被成べし打殺し叩殺しなぶり殺しに被成候共我々夫婦すこしも恨みはなし御夫婦の歎き嘸かしと思ひやられて骨身も碎ける苦しみも此忤を解死人となし給はやすこしは心のくつろぎならんと眞實見へて申ける宗兵衛は先刻より手をこまぬき默然として居たりしが莞爾と笑らひて申やういかにも御尤の言分には候へ共其小兒を解死人となしたればとて此方の忤が蘇生も致すまじ殊に何の辨もなき小兒なれば元來巧みたる事にもなくさのみ恨とも存せずしかし此方も俄に淋しく成たる事なれば我等は厭ひ申さねども女房共は女心にくよくと思ふべし所詮解死人となしても恨みもなく申ぶんもなしとて連來られし事なれば其子は有てなき物也忤が代りに此方へ申受夫婦の中の子とすべし實子よりも猶々大切に致し成長なさば我々が老の樂み此儀いかいと申ければ彼夫婦天にも昇る心地して大

によろこび嬉し涙にむせび暫らく言句も出ざりしが稍有て爺親は手を合せ此上は何事も申まじ則是まで預り置し子を御受取下されよと差出し證文の儀は如何様共御好みに任すべしといそくとして立歸りける誠に俠夫に連添ふ女房なれば斬さつぱり思ひあきらめ死せし子よりもいつくしみ深く大切に育てけると也此朝比奈宗兵衛延享三丙寅年八月八日死し法名釋玄俊と云けり此宗兵衛の俠氣の一語は赤穂精義内侍所と云書の中に神崎與五郎の傳に彷彿たり狂言には忠臣雙葉藏及淨瑠璃忠臣一力祇園曙にも大星宮内の忤と寺岡與一兵衛の忤と取かへ育ると脚色たり寶曆年間新清水増井の邊にて盲人の殺されたる事有是と宗兵衛が生得端手なる形りを好みしを混じ合せ寶曆十辰年七月竹本座淨瑠璃とし作者^{三好松}朝比奈藤兵衛喧嘩屋五郎右衛門難波橋にて子供同士のせり合より立引となると仕組お夏清十郎の色世界を借寺子屋兵助と云盲人と朝比奈の疊と崎の寄合因果の仕組に大當りを取り朝比奈宗兵衛釋玄俊の墓は千日竹林寺に建あるは竹本淨瑠璃座中より狂言繁昌の報恩の爲建しと云り予傳奇作書に朝比奈藤兵衛は攝州尼

が崎青山の家老に同名あるゆへ不審なりしが此雑傑集を見て宗兵衛藤兵衛の相違せる事知り再評して爰に云靱の段の淨瑠璃文句に「靱中の立者といはねどしれた男ぶり江戸流のかふせの巻たて當世茶の帷子に髪も形も一様の我子を先に押立て單羽織を肩に引かけ我家へ歸る朝比奈藤兵衛下略

拾遺遠見錄に云大阪籠屋町に片山深淵子といへる者享保四亥年播州赤穂淺野家の事跡義臣傳といふ書を著し板行に出せしを御町奉行北條安房守殿御聞に達し近世の儀を板行に致せし段御咎有て片山氏御前にて一々申開きけれども御上意を辭せしと有て家内闕所に召上られける夫より片山氏は南谷町若狹屋何某の貸座敷を借て寓居し大野宇右衛門と改名せり一年京都北嵯峨に暫らく逗留して名所舊跡を遊覽し嵐山の風景大井川の流れを臨む折しも此川にて鶺鴒船を見て總じて鶺鴒船は闇の夜ならでは出ざる物と聞しが月の夜も鶺鴒をつかひけるとて取あへず「大堰川月の夜も出る鶺鴒船嵐の山の影やたのまむと吟じける嵐山の影大堰川へ移りて月の夜も暗き處ありて鶺鴒船

の出たるさまをよめり此歌に大覺寺宮樣聞し召れ大
内にても寂感有しと也夫より程經て江戸へ下り相州
鎌倉にて大炮を打て名を發し博學多才の者なればと
て御輿力の組に召出されしと也義臣傳に數多類書あ
れども大約板本の義臣傳によらざるはなし元祿某の
年より十五六箇年を経て出板なりしゆへ一たん罪を
得るといへども後に立身せしは全く義士の苦心を世
にしらせし應報なるべし

冷泉爲村卿東都に御滞留の徒然に無間の鐘の長唄京攝
にて笠の段とも御覽じて詠せ給へる御歌に
又時雨笠とも云
思ひにはどうした花のさくこよ

いかなれは皆仇花と散失て

身にぞしらるゝうやつらや

つれなくかはるおのか俤
やぼならかうした憂目はせまい

戀しらぬ人は恨みも海人ならて

情の海に見るめかるてふ

いとし男はあゝ儘ならぬ

身にかへて思ふ君には幾度か

あはぬつらさも増る戀かな

首尾の相圖や手管の枕

夜半淋しをしかの笛の忍び音に

ことの葉残る夏の手枕

無理な事でもとうやらいとし

くたかけの其ふしたらぬむつことに

いつはりなから憎からぬかは

なしみかさなりたのしむ中に

おし鳥のうき世をわけて契る身は

流れの末もたのもしき哉

あはぬつらさはこがれしよりも

逢ぬまはこかれしよりも待佗ぬ

別れし夜半のつれなかりけり

逢ふて別るゝ鐘の聲

あふことの嬉しきよはの間もなくて

わかれかなしき鐘の聲々

いつかくるわをはなれてほんに

はてしなくかはる枕のくるしきに

ぬるゝ袂をほすよしもかな
ほんの夫婦といはるゝならば

誓ひてしとは草もかひありて

ふたつの星のちきりとめなん

今はむかしのかたり草

とふ人も思ひし人もあたし野の

露とや消ん昔かたりて

又浪華の桂井蒼八も此句に因て戯の詩有古文鐵炮に
出る

おもひにはどうした花のさく事と

飛花更片々、片々任春風、想像君所在、時々仰彼空、

身にはしらるゝうやつらや

一葉風波上、思君夜々情、徒然年月盡、水鏡二毛生、

やばならかうした憂目はせまい

嫣然枝上花、帶雨忽傾斜、誰豈無艷道、深山木石家、

いとし男はあゝ儘ならぬ

難哉池上月、水盡有蒼夫、不識來風雨、忽破桂子妍、

首尾の相圖や手管の枕

春閨只私語、深夜荷君恩、何處鹿聲急、哀情滿畫樓、

無理な事でもどうやらいとし

語々可成非、言々又不非、語言二非是、蒼曉鳥參差、
なじみかさなりたのしむ中に

香聞玉露秋、今夜笑牽牛、臥見鴛鴦被、水頭非白鷗、
あはぬつらさはこがれしよりも

幽閨明月前、隔夜似經年、眞僞可疑否、唯悵促玉筵、
逢て別る、鐘のころ

淚雨滿雙袖、一葦凌遠江、逢君言未解、殘月入斜窓、
いつかくるわをはなれてほんに

枕上幾蒼曉、憂心豈不少、何時待孫朋、出廓白鷗鳥、
ほんの女夫といはるゝならば

一言更不非、豁乎鐵心園、比翼連理契、死生同一歸、
今はむかしのかたり草

雙魚游水戲、寄語浮萍不、今日成思古、千秋萬歲龜、
無間鐘は瀬川路考が一世の名譽なれば其比大ひに此

歌の流行せしゆへかゝる風流も有けり此桂川蒼八は
儒をもて業とし滑稽甚多き人也當世痴人傳に委しけ

れば爰に略す

生瀬川駒篋狂言の話

貞享年中に攝州有馬郡生瀬川にて女僧一人殺害有し
との風説高かりければ其節道頓堀大西芝居嵐三右衛

門座にて生瀬川駒篋といふ外題にて狂言に取組大當
りし其後寛保三亥年五月大西芝居中村座にて再び此
狂言を出しけり男色今鑑に云また遊地の數々新町は
さら也其外端々裏々わきて野君の藪鶯道頓堀と申は
前に泊船岸にかゝり船より來る人もあり陸にて來る
人もあり中にも淺尾吉次郎は嵐三右衛門が座に有て
器量殊に勝れ藝能時を得てしたゝるげなく初て都に
登り古今新在が方に勤めそれより年々大當り終に都
人の評判に上々吉の列に入れり殊更此君一家の風と
して抱への子供らはつかず皆々心中をみがゝれるは
是野州の鴻鵠燕雀の子供の及ばぬ所也夫ゆへ淺尾淺
尾とて對客日を追てつものりけり中にも安見平助とい
ふ者日々是に因て茶屋の出入も隔心がましとてひ
たすら局入をして今は心も打解たりしが或時に相風
呂に入るとて肌衣を脱しに淺尾指の如くなる物を金
襦の袋に入て首に懸たるを見附てそのいはれを問ふ
にちつと譯ある事也とて是を包み語らず安見達て望
めども淺尾あへて取合す安見はひそかに金剛を近づ
けて様々の次第にて不思議の物を見附たり正體いか
なる物ぞや其方は知りたるらんと尋しに金剛聞て主

人はつゝみ申さるれ共既に人のしれる事なれば語つてきけ申べし先年つの國生瀬と申川原にて法師比丘尼を殺しその沙汰四方に聞へしに嵐殿是を仕組れ則法師も嵐殿比丘尼に主人なれし其時大あたり大阪うつしての見物木戸口までの大入淺尾殿出端には白無垢に花の帽子珠數手にかけて笠傾け切幕きつと出るゝ見物大に喜びエイゝ御出やつた御器量今の世の希物大阪中の命とりどうもゝとどよめきしも其中より暫らくゝと聲をたてゝ編笠被り長脇差よはひ二十計りなるが舞臺にのつしりと上り先見物に向つて近比御見物の妨げ御免下さるべし扱淺尾殿へ申ます誠に妙なる御容ふとなづみ參らせ寝ても覺ても忘れがたしあはれ一夜の情思ひいれ是なりとて脇差すらりと拔ひぶつゝと切て投出せり淺尾は面目身に餘り此方へとて樂屋へいれあたりまへなる藝を終ひ其後宿屋へ伴ひ歸り扱々有がたき御心底扱先御住家は何方のいかなる御身にて御座候と問ければかのお人私は天満のあたりに居住いたし世渡りに米問屋の手代何某といふ者也と繕はぬ心中いよゝ淺尾殿満足にして夫より深き中となれりされ共會者定離は

人間の常無常の惡風來つてかの人時疫を病で終にはかなく失給へり淺尾殿忘れ難くせめての事にと存られかの人の筐とて切て送られたりし指のさきを肌身に添へて持べしとてかの金襴の袋にいれて首にかけられて候とぞ申ける時に淺尾は其言を開居たりしが此上はつゝみ申もよしなしとて俱に涙にむせびたり扱世の中の有様を語り扱々淺猿しき境界士農工商の家にも生れず琴棋書畫を弄ぶとは雖も男ながらも川竹の流れの身夜ごとにかはる枕の數世渡りの爲是是非もなしされ共心はかはらめや勤めの中にも心入有べき事と存心を心にて料見いたし一分を相守れり尤抱への子供にも屹度是を申渡し斯様にかためを仕しを置て候とて金襴表紙でんの軸の卷物紐解かけて取出せり是を披らき見るに

起請文前書の事

一たまゝ受難き人身は受たれ共男ながらも川竹の流れの身とは生れたりされどもおなじ人心さもしき心中持まじき事

一日毎に變る枕の數々たとへ金銀を撒ちらすとも心にあはぬ客方はふつて振つけて可申事

一仲間の中にて兄弟の約束致すべからず人々いかやうにのたまふ共一人の外に誓詞書申べからざる事一藝能は申に及ばず酒あひ座附挨拶等に心を附并に手跡たしなみ可申事

右の條々相背き申まじもし破り申に於ては此世にては後の病を受死しては尺蠖まむしの虫となるべし

とぞ書たりけり安見是を見て扱々恥入たりし御心中とて俱にしめりて居たりしに金剛が心附にて吸物取舍の用意しきこんに盃をかはして夜終物語して終にその日は歸りにけり往古はかくのごとく若衆の宅へ行客の遊ぶを局入と云し也又遊女の置屋にて遊ぶも然いふ又寶永三戌年錦文流の作淨瑠璃に男色加茂侍と云有今鑑に似たる仕組也委しくは三編目に説く男色の意氣地昔は専ら流行たる事しるべし

源平鑑曳競の正本

○惡七兵衛景清同子小七郎本名六代御前 ○箕尾谷時松 ○雄兵早苦

迹内 ○岡部売助 ○衆徒般若坊 ○榛澤六郎 ○薩摩五

本田治郎 ○娘おきせ ○景清妻衣笠 ○秩父庄司重忠 ○具足

屋の幸作 ○箕尾谷四郎國時造り物三間の間二重舞臺

向ふ赤壁納戸口上手折廻り障子家體此前に小店附有

此上に門口橋懸り坂塀切戸口此前に般若坂と印たる立石いつもの所門口右二重に鎧櫃三具計鰯鴨居に竹の胴丸難なる兜など大分釣下有納戸の上に鍵長刀を懸刀懸に鎧通し太刀四五本計りかけ有都て具足屋の店がへり宜しく淨瑠璃にて幕開く昔の京と奈良坂や般若坂の片邊に明珍の幸作とて平家盛んの時よりも御免の鎧師武具商賣武家附合も物馴て六具しめたる唐びつ親仁娘おきせが商ひ上手色には武士も内甲店の繁昌時松がわやくも役に龍頭人絶なきぞ賑はしきト跡在郷に成り花道よりかト助遊内雜兵の形にて出ト助誰も内にをらぬか人たのもふぞよトおきアイアイトなた様でムり升るト納戸よりおきせ前垂世からイヤ身共は土肥の治郎様からのお使だおきせはくよふお出被成升たまあくおかけ被成ませ迹内ヤ構やるなく身共參つたは外の用ではない御主人が桶皮の胴丸が急にお入用だ明日旅宿へいろく取揃へて持參せよとの仰だおきハイく夫はマア御苦勞様でムり升たト何と迹内一寸見ろさすが具足屋の娘だけで夜軍が功者らしい屈竟の若武者迹をふ共く顔の色の白糸威といひ花々しい武者振一寸見ても草摺も

とからぞつとふるい附よふなわい^らかこふいふお敵
 と一騎打が仕たい物だて^せおきホ、[、]、何をしやら
 く[、]とおつしやり升やら^らか何のじやら[、]でない八
 寸胴返し^の此鎧通しでぐつと[、]いめがさしたい事だ
 逃コリヤ[、]から助其武者盡しの序でに思ひ出した
 身共ら二人が黒皮おどしはどふする^らかヲ、ほんに思
 出したコリヤ[、]女性此男とおらとに合そふな黒皮
 威の鎧が所望だ代物は手柄してから相違なふ拂ふ程
 に逃随ぶん直段を働いて身共ら二人りに賣てくりや
 れ^せおきハイ[、]お安い御用でムリ升る此内どれ成
 とお好のをお取なされませ^ト店に釣たを見せる^兩か是々
 是でちやうど身たけもよし逃追附高名手柄をしたら
 此代物は望次第^せや^きほんにあなた方も先達ての八
 島の軍にお出なされ定めてよい手柄を被成たでムリ
 升ふなア^らかム、何か身共らが手柄をまだ聞ぬか逃エ
 、夫を聞ぬと云事がある物かイヤモ餘り手柄の数が
 多くてなふ売助^らかイヤモ口へほうばつて言盡されな
 いが先かいつまみて語つて聞そふ手前が手柄の花々
 しさをヲ、そふだ思ひぞ出る壇の浦^ト上^リの^に逃コリ
 ヤ[、]おらが手柄からまづいはふ何が一の谷の逆落

しに敦盛の首を打夫から藤戸の先陣をして扇の的を
 射て落すその勇力の甚しさそこで我名をはやく逃内
 らおらが手柄は又格別薩摩の守忠教を討つた岡部
 の売助とは身共が事だ其上手柄と云は能登守教經が
 矢面にたち八艘飛^せそれはマアいさましいした^が能
 登守が矢面に當つてよふお怪我をなされませなんだ
 なア^らかヲ、サ既の事に討死する所を逃旦那が練つた
 膏藥で^達者でかへつたもふ歸^兩人おむすさらば「聞
 はづ[、]たる軍場の鐵炮放して立歸^ト兩人鎧を持ちて
 橋懸^リへ道入る^セやれ[、]まゝの拵へ最中へ折悪い店買ひそれはそ
 ふととつ様は時松を寢さすて、最前からまだおめが
 さめぬがとつさ^ン、^幸アイ[、]起てゐるぞサア孫
 もこい[、]の^ト合方になり^納作^トより^幸作^ト堅親^仁やれ[、]孫め
 と二人りよふ寢てゐる物を今の物買がやかましふぬ
 かして扱もみしり越にむごいめにあはせをつた^せさ
 いなアその上手柄斬するで出たらめな事計り^幸今言
 ひをつた忠度卿を打たは岡部の六彌太又敦經殿の矢
 面に立て討死したは佐藤繼信ア、あつたら忠臣をお
 しい事じや^せとつ様それに附ても氣にかゝるは夫箕
 尾の谷四郎殿此子と私をお前に預け軍に立てからも

ふ二年もふ八島の軍も静まつて大名衆も追々鎌倉へお歸りとの噂それに夫箕尾の谷殿計り今にたよりのムんせぬはもしや繼信殿の様に討死でもなさりやせんかとそればつかりが案じらるゝわいなア幸ハテわつけもない箕尾の谷程の侍が討死したら矢より早ふ聞へる筈氣遣ひしやんな追附手柄してどつと大勢の家來をつれそちと孫めを乗物や馬で迎ひにくるで有ふ何も案じる事はないノフ孫よ噂様に何にも案じさつしやるなといへ時松是か様おつつけと様が戻てじや程に戻らしやつたらよい物買てもろて下されや幸ヲ、そふじやくイヤ又縁といふ物は味な物前方箕尾の谷殿がこちの内へ具足を誂へに毎度見へてふとそなたを見ててもよい娘じよと思やしやつたが爰の娘をおれにくれといはしやつたれどおれも獨り娘の事なりや遠いへはやりとむなし段々と斷いふたれど又われもみをの殿に惚たかして遠いでも大事ないたつて行たいやつて吳とたのむゆへ其時分にはまだ母親も生てゐたれば娘があのように頼む事也やつて吳とお婆々の頼み夫から國へ連ていなれてコ、此時松といふ子まで産だれどさすが侍だけで町人の娘とは

縁組も出來ず妾がはりの姉同前去年の春平家追討の供して登つてゐるに附そちも久しぶりて戻りたがる孫を連てこちの内へ預け直に軍場へ行れたみをのや殿縁あればこそ町人のおれが箕尾の谷といふ侍を聲に持追附又大名になる孫の時松おりやもふ夫が嬉しふてならぬわいの時は々祖父様と様のゐやしやる八島へいてわしも軍がして見たい連ていて下されいのう幸ヲ、出かすくイヤ又侍の子とて朝から晩まで切合事計りしてゐるがコリヤ孫よ八島へいてもふ軍は終ひじやそれよりやつぱりいつもの様に内でせいせふともく内せで近所の子をよせて軍するのがやつとおもしろいなアとつさん幸そふじやく坊主よふいふ事をきく物じやぞ時そんならとつ様を爰へよんできて下されいのふせサアそのと、様が戻らしやらぬゆへ母も案じてゐるわいのふ「夫思ひに胸痛表へ又も來る侍ト西の通ひ道より様澤六郎野ぶはんに居召るか頼もふぞよ幸是はくよふお出被成升た來家ネイ妙珍の幸作は在宿か案内いたせ來家ネイに居召るか頼もふぞよ幸是はくよふお出被成升た來家ネイまあく是へコリヤ娘茶をくめよきアイく半澤と通るおきせ茶を出す半イヤかまやるなくまだ急なる御用も

あれば心せきな身は畠山重忠が家來然るべき具足が求めたいが幸へイ／＼鎧の儀ならば御好次第甲は桃なり烏帽子形しころは饅頭わりじころ立物にも前立脇立流儀によつて忍びの緒の結びよふはいろ／＼箕尾の谷結びもムリ升る半ア、是々その箕尾の谷はいはぬ事武士の家にはずんど忌る事さ幸へエ、そりや又なせでムリ升な半されば／＼今度八島の合戦に不覺をとつたみをのや四郎といふ大腰拔の臆病者それゆへに軍中では箕尾の谷といふ事は大に嫌らふ事さ「聞て悔りせきたつ娘^せきな、何とおつしやりますあの箕尾の谷が不覺を取たとはそゝそりやマアどふして「いふもおろ／＼なみだごへ半イヤモ不覺の段か何か平家の侍惡七兵衛景清といふ大力に出合赤恥かいて逃た／＼その身もさながら恥しさに軍場より直に駈落鎌倉中の物笑らひイヤ嘶にかゝつて思はぬ隙取具足はいろ／＼取揃へ明日旅宿へ持参しやれ幸ハイ／＼畏り升てムリ升る半お暇申家來供せい幸よふお出被成升た「挨拶そこ／＼立歸れば押かへしてとう事もたいうつとりとあきれ果暫し詞もなかりしがずんど立て身ごしらへ

ト榛澤家來連西の通ひ道へ這入るおきせつまなかいげ刀かけの刀を取て

そふじや^{ト門口へ}幸コリヤ娘わりやどこへゆく^きせしれた事夫箕尾の谷殿に恥辱をとらした景清め喰附てなりと夫の腹いせ幸コリヤあほうめたしなめその景清がどこぞ爰らにゐるといふ便りでも有たか^きエ、幸どこをあてに駈出すぞよし又爰らにゐるにもせよ箕尾の谷程の侍に不覺をとらせた景清が女の方でゆかふと思ふか^きそれでもあんまりはがい、ゆへ幸何ぼうわれがその様にかたふなつても軍のあつた八島は遠い爰から何ぼううきんだとて椽の下の中からもちハテマア氣をしづめたがよいわい^きやい^きとつ様無念にムんすわいなア幸マ、氣をしづめや／＼今の侍がいふたとて嘘やら誠やら近所の事さへ嘘いふ時節まして八島と爰の事何が何やらしれた事かサ、茶などのもんで氣をしづめや「氣をしづみやいのといひながら聲の身の上氣にかゝる幼心の時松も時とつ様がまけさつしやつたらおりや口おしい否じや／＼「おりや口惜しいと泣子より母の心のやるせなき幸ハ、エ、何をきな／＼思ふぞいのコリヤ坊よかゝに最前の火打焼など出して貰ふてまゝ事などして奥であそべサ、娘よ孫を運て奥で機嫌をとつて

やりや^セアイ[〜]幸エ、早ふつれてゆきをれと云に
トきつといふ歌に成りおき「折から爰に風俗も屋敷めい
せ時松をつれ納戸へ這入る」
たる女房の一腰さいた子を連て來かゝる跡より聞ゆ
る人音暫しと小影へイむ所へ家來引連ぎごつの侍門
口よりこわ高に^ト此内向ふより衣笠著流し懷劍さし六代にも一
よりさつ^トまの五郎野袴ぶつ^ト摩亭主幸作は内に居るか幸作に
さきに^ト家來一人連出て^ト摩亭主幸作は内に居るか幸作に
あはふてい主[〜]^トいひ這入る^ト幸は是は扱けた、ましい
幸作は私でムリ升が何の御用でムリ升な^トイヤ身共
は忝なくも鎌倉將軍頼朝公にちつきんの武士先達て
八島の戦ひ後平家の落人そこ爰に隠れるよし某頼
朝公の仰を受平家の殘黨草をわかつて詮議なす所そ
の方事は平家さかんの折から一門の用をきく出入の
具足師そのよしみを思ひ平家の落人を匿ひ置くよし
町人にいらざる義理立もし外より訴人あつてあらは
れなば重き罪科に行ふやつ自身の口から白狀すれば
命は助くる頼朝公の御仁心さあかくもふたらばかく
もふたと有體に白狀せい何とだ「權柄見せてきめ附
れば幸作は思案顔幸ハ、是は又思掛もない御詮
議微塵も覺のない災難^トつイヤこいつが[〜]まが[〜]
しいあらそひ立幸是は又何の私が僞りを申升ふぞ^ト

僞ないとはぬけさせぬ匿ひある事黒い眼で睨んで置
た幸ハ、是は又迷惑な猫の子一疋よそからかく
もふた覺はムリ升ぬ^トム、誠覺なくば身が面晴に家
内いち[〜]家捜させよそれでもうぬはかくまはぬな
幸エ、さりとてはひつこい事じや家内と云たら娘と
孫夫より外にはをりませぬと云につム、よい[〜]身
共が家捜して改くれふる^ト幸作つき廻して^ト幸イヤ家捜は
なり升ぬ^トつなせならぬ幸ハテかくもふた覺はしんも
つてなけれ共私も町人でこそあれ妙珍の幸作とて御
免を受た武具鎧師なりや武家に附合ひマア侍同前^ト
だまれ幸その幸作が覺もない事いひかけられ家捜し
させたといはれてはヲ、幸作のつらがよけれ升よつ
て家さがしは金輪際^トつヤアだまりをらふぞ老毫の前
後揃はぬ先程よりの詞かくまはぬが定ならば家さが
しさせても構はぬ事又かくもふたにせよ某が先刻よ
りもいふ通り當家に難儀はかけさせぬ頼朝公の御仁
心是程わけのわかつた事を幸スリヤどふ有ても家さ
がしせふといはつしやるのか^トヲ、こふいふからは
せひと家さがしせにや置ぬ幸そふいやこつちも金
輪際ふんごます事はなりませぬ^トつヤア幸ならぬとい

やどふさつしやるつこいつどふいへばこふ云と忌々しい老耄めいかにしても物ぐさいいよ／＼うぬかくもふたな幸かくもふた覺はなけねどかくもふたらどふさつしやるさ程御慈悲な頼朝様の仰には似合ぬ町人のいらざる義理とは何事町人でも武家相手の商賣なれば魂は侍いはつしやる通り平家の影で育つた此幸作その恩はエ、忘れ升ぬ平家の落人が迷て來たら卑怯未練に命はおしまぬヲ、かくまひ升がこなたどふするつイヤ推參な素町人め鎌倉武士に向つて舌長そりやお前の短氣といふ物わたしも商賣冥利で武家一通りの事はしつてゐるがお侍の刀脇差は人を切る物じやない其二腰は身の要害又狼籍をふせぐが爲じやかれはいはずととつと／＼お歸り被成ませつヤアこしやくなやつコリヤ身共をあざけるのか家來共老耄のほうげたを切て／＼切下い家心得ました「掛るをはづしてぶち投ればうぬ老ばれと切かゝる利腕しつかととらまへて幸エ、何てんがうするのじやぞいの年こそ寄たれ具足屋幸作その手でゆくのじやないわいの」突はなされてむしやくしや腹つうぬもう了簡

がならぬわい「又切かけるを戸口より以前の女房聲をかけ衣ヤレまつた五郎殿幸作殿のたのもししい心底聞て落附ましたト六代の手を引内へ這入幸作見て幸ヤアこなた様はつ身共が主人の奥方若君幸ム、して最前からの此様子は衣成程嘸ふしぎに思はしやらふ誠我々は平家の落人幸その平家のお方々が何ゆへ最前からのいさかひはさつさればさ木にも萱にも心をく御主人達の身なればこなたの心底ためし見て暫時お二方をかくもふてもらはん爲衣具足屋の幸作殿頼もしき心底は我夫の御嘶に承りはしながら再三ためすは家來の念つ先刻より無禮の段々はお許し下され衣何卒我ら親子をば人おかくまひ下されまいか幸よふムり升お氣遣ひ被成升るなおかくまひ申升つスリヤ老人には御承知有て衣おかくまひ下されふか幸ハテあたまのぎり／＼から足の爪先まで平家の恩をせたらおふた此幸作命を上てからがもと／＼心をきなふゆるりつと滯留さつしやりませ衣チエ、忝い衣してマア平家ではどなたの奥様でござりますな衣イヤ自は衣笠と申て夫は上總の國の住人惡七兵衛景清つ是なる若君は小七郎様で、御主人の御子息かくいふ拙者は譜代の郎等

薩摩五郎と申者幸ム、スリヤあの景清殿のよふマア尋ねてムリ升たして景清様の御在所はな衣夫にも西國の軍よりちり／＼にさいまだ在所も相しれねばかく方々と尋ねをるのさ幸成程御存ないも御尤マア爰は端近源氏の武士の入込なれば裏に我等の仕事部屋幾日成共お心置なふ衣御詞に随ひ暫時お世話につさ幸作殿御承知下さる上からは拙者は是よりかの方へ幸そんならお前はもふムるかさ奥様にも和子様にもいさいは跡より衣五郎殿太儀でムつたッ幸作殿おさらばでムる家來まいれ「立わかれてぞ出て行跡見送つて幸作は幸ても扱も氣丈な人さあお二人共奥の座敷へ衣左様ならば幸作殿幸さあまあお出なされませ」奥底もなき挨拶に衣さあ小七おじや「おじやと小七の手を引奥の一間へ入にけり跡に幸作とやかくと思案ひたひに波よせる後につつくり娘のおきせ申と、様幸エ、恠りさすわへけたゝましい何じやぞいせアイ嚙恠りでムんせふ今の女中の名は何といふへ幸ヤアさあれば名は何とやらせ上總の惡七兵衛景清が女房衣笠といはふがな幸ヤアそちやそれ聞てゐたかき聞ていひでならふかいなア夫みをのやに恥をかゝし

た景清が女房子かくまはしやんしたお前の心は肌をゆるさせ鎌倉殿へ訴人する心でムんせうな是とつさんそれよりは手短につかまへて景清が在家を白狀させて見せ升ふト問へ幸コリヤまで娘そふは成まいせそりや又なせへ幸ハテ一たん幸作がかくもふたからはゆびさゝせても男が立ぬせエ、そんなら今は眞實にかくもふのかへ幸おいやいせあのみをのやといふ源氏の侍を智にもつてゐながら幸さればいいその智をおれが方から乞て我をば嫁らしたか向ふから慕ひ我が惚遠い國迄つれていに子まで産だらしよ事がないとおれが腹には始から箕尾の谷は氣にいねどそこを捨ぬがおれが氣質なれ共今度の臆病な事聞ておりやもふみをのやのみの字をきくもうるそふなつた我も又みをのやと縁切てもつとゑらいよい男と持かへいもう／＼智の臆病者には愛そもこそも盡果たわいせ是はとつ様そりやおまへ本氣でいはしやんすかへ幸しれた事本氣でなふて何でいはふぞいせエ、おまへはなア／＼ト幸作のむな幸コリヤどふするのじやせどふするもこふするもないわいな不覺をとるも手柄をするも軍の習らひ時の運わしが口か

ら自慢すりやなけぬ共あの様な器量骨柄揃ふた男が
今一人とあるかいなア外の男と持かへいとはあんま
りなア、あたあほらしい置いて下さんせ幸イヤおのれ
はく老としよつた親をやりこめをるがなあほらし
いとはおのれがこつちやはせそふゆふお前があほら
しいわいなア幸何でおれがあほらしいその譯いへせ
そのわけいふて聞そふかへ幸ヲ、いへ聞ふわへせ今
の此源氏の世に平家の肩をもつおまへがマアあほふ
ではムんすまいか幸イヤこいつがくいはしてをけ
ば口が過るがなせそふいふおまへが口が過る幸何を
おのれが「イヤお前がと水掛論親子喧嘩のその中へ
音色やさしき虚無僧がイむ鶴の巢籠りもこなたは親
子腹立紛れ口此内橋懸りより重忠伊達こも僧にて門幸エ、
やかましい通らしやれ一體おのれが片意地なせアイ
どちらが片いち片意地くらべして見たいわいな幸お
のれまだぬかすかな是はしたり通らしやれといふの
に忠ハッ通れとあれば罷り通る「御めんならふと笠な
がらしづく奥へこむ僧が通るも白髪重忠天蓋年すつと通り二重にて一寸の親と子は一
心不亂言ひがなり顔を出し一問へ這入る兩人は是をしらす
所詮水臭いおまへの心勘當さしやんせわしや出て行

イヤそりやならぬおのれは出ていても大事なけれど
ひよつと孫めを連てゆくと翌からおれが淋しいわい
きほんにこりやおかしいわいな幸何がおかしいぞい
せいやがらしやんすみをのや殿の子の時松連て出る
はこつちの勝手籍イヤくそりやならぬおのれ男と
縁をきれせイ、エわしを勘當さしやんせ「果しなか
ばの折も折又も來かゝるこむ僧二人一度に表と裏口
に吹合せたる甲乙も調子のあはぬ内の時宜ト此内向ふ
谷西の通ひ道より景清雙方とも伊達こも僧にて捕手二人宛ト此内向ふ
道中程にて十手を構へる雙方一寸笠を上げきつと見へ捕手雙方とも
もへ逃こむ兩人しづく本舞臺へ來て東西幸エ、さりと
の門口にて笛を吹ある此内やはりせり合ひて
ひつこい尺八殿そこ所じやない通らつしやれく
箕尾谷
景清然らばさやふ仕らん「雙方おめす内に入ト兩人
いのまいすつと這入る兩人愉りして幸作はおのれ故じやといふ共天が
いおきせはおまへゆへじやとせり合ふこなし箕尾の谷景清天がいな
が景通れとあるゆへ通り申た箕雲水の身の某らに兩人
御用ばしムるかな幸ハ、是はくこちらにちと取
込んだ事がムり升て修行者様に申詞を忘れ升てぶし
つけな事申升たが何にも用事はムり升ぬお二人乍ら
どうぞ歸らしやつて下さりませ箕イヤ歸るまいそれ
にムるはいざしらず我等是へ參つたは修行計りで何
幸作殿貴殿の商賣に附ちと求めたい物有て景拙者と

ても其通り武具をもとめにわざ／＼是まで何と幸作とやら賣て下されふや幸ハア扱はお二人共御大身なお方と見受升た武具は私が商賣なればお賣申さいで何と致そふ鎧甲はいかよふなでもお目にかけるでムり升ふ幸イヤ我等が好の品此方より持参いたした懷ト鉢計りを出して是此兜鉢ばかり有てしころなし此鉢に合そふな鎧があらばもとめたい幸ハテかはつたお詔らへして又こなた様のお好みは景身共も是に所持致すト是も懷ト此鎧に相應な鉢があらば所望したし賣ておくりやれ幸スリヤお前には鎧ばかり又あなたには鉢計りはてなア「はてふしぎやと幸作が心奥にも立聞虚無僧思案に解けぬ笠の内ト合方に成る上手の障子を明内に重忠立聞してゐる

箕是此如く鉢計りでは戦場の役に立ぬ元の如く誠の武士の著るべきよふ兜に仕立てもらひたい景ホ、ウ身共は又戦場にて取んとせし源氏武士の兜首今少し取残して残念鉢計りは手柄にならぬ満足にして請取たい幸ム、そんならあなたは平家の御侍御名ゆかしい笠の内ト祝ふとする景イヤ／＼虚無僧の天蓋はとらぬが禮儀箕ヲ、某とても其通り元の武士になる迄は姓名は名乗られぬセサアそふおつしやる程ノフと、

様一倍ゆかしい笠の内トいひ乍らみなのやハトふらうとするを引廻し上手を見るは、景イヤ笠とるにはまだ早いトふり放すおさせじつと下に幸ムウ、成程あちらには鎧ばかりこちらには鉢計り一つによせればしつくり合ふてよい兜景身共のしころに鉢を附るか箕某が鉢に鎧を附るか幸兜は一つ景望は二人りセア、まゝならぬ浮世の事幸所を此幸作が仕立あげ箕某に相渡すか景身共に渡すかセ善惡二つは幸奥と口の間景して刻限は幸明六つ迄に三然らば幸作セア、是モウシトトふらうとする幸ハテ細工はりふ／＼仕上をこらふじ景髓に誂へ申たぞ「互ひに我名を忍びの緒とかず左右へトナクリにて景清は上手箕尾の谷に納戸へ氣味合はつりがね這入る幸作おさせなつれ納戸へしづかに這入る本暮六つ打」わかれ入る既にその日も入相の鐘かふかふと告渡る軒の灯火春日野の飛火の野守りそれならで落武者ねらふ南都の衆徒我慢不敵の般若坊幸作が門さし覗きト向ふより般若坊衆徒頭中衣玉だすき般たしかに此家へ景清め六代諸共入込をるに相違はない首にして梶原殿へやれば褒美の金甘トい／＼「折こそよしとうなづき／＼裏口さして立忍ぶトきつと裏を見こみ戸床のめりやすにて納戸より重忠やはりこむ僧の形りにて笠なめさ出てあたりを窺ふ橋懸りより様澤いぜんの捕手四人つれ出て澤

御主人重忠様

重忠はトおさへる様澤思はあたりを見廻す

申附たる通り計らひ

しか半ハツ仰の通り相計ひ此者共に委細手配り致さ

せ置升てムリ升る重ム、よし〜此上は是ト又様ハツ畏つてムリ升るト捕手皆スリヤ狼烟を相圖に重是隱密〜様ハツト平伏するチヨン〜返し

壇浦軍物語の正本

造物奥深に三間の高二重前本縁附下に人の出這入あ

るべし右前側に障子をはめ上手下手共に同じく高屋

臺各障子をはめ屋臺の間は塀にてつなぎよき所に石

燈籠手水鉢庭木井戸のあしらひ好有べし東西に枝折

戸柴垣程よき飭附本釣鐘残つて靜に道具納る「そよ

との風も落人は氣を奥よりも衣笠が一腰さすが侍の

襷引上て小七郎が手をひき窺ふこなたの障子明て以

前の浪人に主の幸作手をつかへト此内上手より衣笠六代に窺ふ正面の障子引ぬく上手ト此内下手より衣笠小七立聞する

に景清笠を脱下手に幸作あて幸お詔らへの甲は此幸作が

受合升たらしつと仕立て差上升ふマアそれ迄ゆるゆる

御漸被成ませ景ヲ、それは過分〜幸扱あなた様

のお名を尋ねたとてよもお明しはムリ升まいが此幸

作めがお願ひがムリ升るがお聞届下され升ふか景某

に願ひとはそりや何事幸イヤ外の事でもムリ升ぬあ

なた様は平家のお侍ならば先達て八島の戦いち〜

御存でムリ升ふな景ム、いかにもくはしく存てをる

幸サ、其時の戦にかの上總の悪七兵衛景清殿と源氏

方の箕尾の谷四郎との勝負の様子いろ〜に申升る

が此實説が承りたふ存升る景スリヤ其時の軍物語を

幸どふぞお聞せ被成て下さり升まいかな景アノ町人

のその方が幸何とやら似合ぬ所望なれど景ホ、何よ

りもつて安い事則是にて語つて聞さん承れ「物語ら

んと威儀を改め景いでその比は元暦元年三月下旬船

と陸との戦に「我先駈んと敵味方はやり切たるその

中にも景平家の方には侍大將惡七兵衛景清源氏の方

の兵には「箕尾谷四郎國時と夫々の身の上を庭と外

面に立聞女房源平互ひの幼子もこぶしを握つて聞居

たるト此内下手に衣笠小七立聞する景されば平家の方の

大將に頼むは能登殿唯ひとり弓杖突て船ばりに「突

立あがり平相國清盛が舍弟門脇の教盛が嫡子能登守

教經なるぞや景源氏の大將義經に「見參〜とのた

まふ聲沖にひびきて物すさまじ〜景詞たゝかひ事終

れば景清是にと夕日影に「波の打物ひらめかし切て

かゝればこらへずしてはむかひたる兵は四方へバツ

とちりぐに景遊る後詰は箕尾の谷四郎「二打三打戦ふ太刀を打落されこは叶はじと思ひけんみぎはの方へ逃てゆく景ヤアきたなしがへせと兜の鏝「後へひけばみをのやも身をのがれんと前へひく景互ひにエイヤとひくちからに「鉢附の板より引ちぎつて四郎は濱邊にまつさかさまほうくながら口へらず景さるにても汝恐ろしや腕のつよさといひければ「景清は又箕尾の谷が首の骨こそ強けれと笑ふて左右へさつとひく景イヤモみをのやが臆病さんぐ恥辱のなんぐあらかじめ斯の通りさ「語ればいきぐ衣笠親子おきせ親子が口おしさまぶたもしめるあら涙胸も張さく計り也かゝる思ひの折も折様子窺ふ椽の下突出す白刃に身をかはしト衣笠は天を拜み嬉しきこなしにて泣落し小蔭へかくれる椽の下より刀を突出す景清の鐵扇くゆへさつと見へ幸ヤア此白刃はトよらふとす景ヤア小ざかしいほててんごういで正体を見届けくれん「蹴返す疊の破れ口あらはれ出たる般若坊景清疊を蹴かへす下より般うぬまつ二つにしてくれん景何をこしやくなト切てかゝるを鐵扇にて立廻つて見事に中返りして直に起上り般惡七兵衛景清め在家は慥に見届たり此通り注進せんと駈出すをエイと體に打込手裏劍すかさず表の目

を配る氣轉の衣笠取ておさへト衣笠小七と云ふをさし衣氣遣ひ被成な景清殿外には誰もムんせぬ只今といめ幸てもいつの間にあやうい事なア景ム、女房衣笠悴の小七その方共はいつの間に衣かゝる事あらんかと今日薩摩五郎諸共幸此幸作がおかくまひ申ました景ヲ、老人が志過分ぐ衣して此者の死骸はどれへ景エ、だまつてをればよい事を物好なづくにうめム、幸ひそのづくにうの衣裳をひつぱぎ跡の死骸はそれ其草井戸へ衣ハツ心得ましたト般若坊の衣をばき取り死骸を草井戸へはりこむ景此場をるは女房悴その外には平家の恩を蒙むつた具足師幸作よもや他言は致すまい幸疑がはしくば此鍬首すつぱりとお打被成い景ヲ、さもあらんそれ女房悴その衣をたづさへ一間へ參れ衣アイぐ畏り升た幸いざ奥の間で御酒一獻景然らば馳走に預らん「心靜に一間の障子さしも不敵の振舞を見るにつけ聞につけおきせが身にしむ腹立涙ト正面の障子しめるおきエ、きエ、無念なわいの口惜しいわいの箕尾の谷殿さつきに覗いた笠の内二年ぶりでおふた夫の顔手柄して戻らしやんしたヲ、出來た出かさんしたとほめふと思ふて待くらした甲斐もなふ今度の不覺笠とるは折が有ふ

とは女房にさへその顔が合されぬかいのふ夫程面目
 ないならばなせ手柄しては下さんせぬ今景清が悪口
 雑言おまへの耳へは這入らんかいなアふがいな女
 の身でも腹が立てくならぬわいのふ是みをのや殿
 「無念なわいのと身をもたへ夫を思ふ恨泣思ひ詰た
 る時松が時かゝさん氣遣ひさつしやるな何の景清ぐ
 らいをれが殺してくるそうじや」「裾を小みぢかく武
 士のたねさすが逆手に駈行を母はあはてゝいだきと
 め^せテ、出かしやつたくは小供心にもよくく口
 惜ひと思へばこそ此時松が景清を殺そふといふわい
 のふ^{ト舞臺を叩き一間}は^{ト聞へる様に云て}是時松やそなたの手にあふ景清
 なら何の母がほつておこうぞ最前から殺して仕舞
 ふけれどなそなたは怪我しやつたら悪い程にまあ
 く待や^時いやじやくきかぬ「否じやく」とむし
 やぶりつく幸作一間をそつと出^{ト正面の屋臺}幸コリ
 ヤまあくまで^せおまへはとつさん口惜ふムんすわ
 いなア時おりや口惜ひ否じやく幸サ、道理じや
 くおれが心底定めてそなたはふしんにあらふが初
 から景清とにらんだゆへ心をゆるさず眞實顔時松が
 子心にも景清を切らふとはヲ、出かしたく有様に

おれも景清を殺す心^せそんならお前も得心して幸ヲ
 、した^せが孫が手では所詮ゆかぬ景清はおれにまかし
 て我が相手には相應な小七郎敵の小忰坊主が憎けり
 や衣迄いつそ袈裟切に切てこい^せそふでムんす臆病
 なみをのや殿の氣をはげますには上分別幸ヲ、そふ
 じやくこりや時松よ此脇差で切てこい時ヲ、がつ
 てんじやく「いさむ我子の帶しめ直したすき鉢卷
 ぬかりやんなとせはしきむねの時松は一腰さしあし
 忍びこむ子よりも二人が氣はあぶく」の生死の境ひ
 物かげに身をひそめたる間もなく時松が切先に受太
 刀に成つて小七郎<sup>ト正面の障子へ時松這入る幸作おきせは下
 手の柴垣へかくれる障子の内バタくにて</sup>
 び乍ら出^{六代時松切結}代コリヤわしを何とするのじや時何とも
 せぬ殺してしもふのじや六イヤくおりや侍の子じ
 やに依てわけを聞ねば相手にせぬぞ時わけといふた
 ら外でもないおのれは平家の景清が子で有ふがな六
 ヲ、景清の子なら何ゆへきる時しれた事おりや源氏
 の侍みをのやが子の時松殺してしもふ覺悟せい六ヲ
 、そんならこちから殺してやらふ^{六サア}くく
 「手並を見よと名乗りかけ一すんさらぬはれ勝負切
 つきられつ親々の八島の戦ひ今爰に汗を流して打合

しが小七いらつて打こむ及受はづして時松が肩先より脇ばら迄うんと倒るゝ一聲に幸作駈出引わくるおきせは我子をだきをこし幸是まつた早まるまいぞせき時松氣をたしかにもちや時松いのふ「叫いけられて起直るはや絶々の息ながら時おのれ景清が子めきかぬ」勝負も舌廻らず血は漣津瀬に目は紅ひせきヲ、無念に有ふ嘸口惜からう親の耻辱をすゝがふとて科がもない子を殺したが可愛ひ事を仕ましたわいなア幸ヲ、道理じやゝ尤じやせきヤイそこな子めよふもゝむごたらしふ此様に切りをつたなおのれ我子の敵じや覺悟しや「覺悟しやと突かゝるを幸コリヤまで娘はやまるな」とめればおせきは猶むしやくしやせきエ、とつ様がおなじよふにかばい立殺して仕まはにや腹がいぬ「そこのかしやんせと飛つく折しも一間の内より聲高く箕やれまで女房そこつすなせきエ、その聲はみをのや殿箕申聞す仔細ありマアゝ」さて「聲かけ出るみをのや四郎女房は猶いらだちてト正面の障子残りきずひらく」せきエ、何の仔細がある物かそいつは景清が子じやわいのすたゝにしてもあきたらぬおのれいつぞ「かけよる小がいな取て捻伏小七郎が

手を取て箕下座にをくは恐ありまづゝト六代を二重へ上平伏してみをのやが忤をしとめしは天晴のお手の内さすがは平家の御公達六代御前にて渡らせ給ふハハツ「上座に敬ひ奉るせきヤゝゝ六代でも十代でも我子の敵とらねばをかぬ箕ヤア敵とはたが事時松を殺せしは此みをのや舅殿にも得心させ親が手にかけ殺したのじやわやいせきエ、エイそゝそりや又どふして箕ヲ、合點が行まい舅殿忤が持たその及物女房にお見せ下され娘なくは孫が最期のわけは是ト時松の持てゐる脇差おきせに見せにもいふな堪忍せい孫よ堪忍して呉いやいせきヤアこりや是及引じやわいのエ、是じや物切られる筈こんな物あてがふてわざと殺すは何事ぞと様孫には何の科があるサ、そのわけ聞ふゝゝ、うつむいて居てすむかいのふ國時殿も國時殿子を殺さして落附顔犬死さすのが手柄かいのふ様子が有ふさあ聞ふみをのや殿と様エ、胴欲じやわいのふ「むごいわいなとどふとふし狂氣の如く取亂すみをのやもめをしばだゝき箕イ、ヤ犬死でない時松が最期は親への孝行主君へ忠義せきそりや又どふしてどふいふ譯で箕時松を殺せしは則是なる六代御前の御身替りに立ん爲せき

エ、何をよい口な六代御せんは平家方敵方の身替りに我子を殺すしてそれが何で忠義じやぞいのふ箕さればさ主人の身替りに子を殺すは武士たる物には常の事源氏の侍みをのやが子を平家の公達六代御前の身替りに立る事嘸ふしぎにも思ふらんその仔細といふは去ぬる比平家追討出陣の折から頼朝公某を密かに召れ日本の賢人たる小松殿の子孫をば西海の浪にしづめん事のいたはしや然れ共法皇の御怒りつよければ助けよとの指圖はならず汝宜しく計ふべし又平家の侍の中に我家來にほしき者は上總の惡七兵衛景清一人もし頼朝に仕ふるならば命を助け歸れよとの御諒何萬人かある御家人の内某一人のたましひを見込仰附られし事心魂にてつして有難く何卒景清に出合なば我君の仰をのべ源氏に仕へさせんす物と心を配りし甲斐有て八島の浦の戦ひに難なく彼に出合しが某心に思ふ様かゝる烈しき戦ひに此事を告ん暇もなし力業にて組附なばあたらず勇士に疵も附ん此場を不難に助けをき重ねての味方に招かん物と思ひかれして退く所を「景清得たりと引戻す敵に鎧をひかれ乍ら其儘見のがす事あらんやふり拂ふて唯一討箕と

は思へ共イヤ／＼手柄は子孫の榮利の爲盤石よりも猶おもき主命にはかへられじと「ふんばる力と曳力互ひの勇力劣らずまさず鎧はちぎれてわかれしが箕かれもさる者心をしつてか長追もせず引退く」扱こそ八島の戦ひに後を見せしとみをのやと譬へ諸軍に笑はれても箕臆病武士でない事は鎌倉殿御一人はよつく御存被成るゝわいせそれ程しれた言譯をなせ鎌倉殿へいはしやんせぬへ箕鎌倉へ歸らんにも景清を味方に附ねば詮ない事と合戦果るとその儘に忍び／＼に景清がありかを捜せど廻りも合ず然るに此比東大寺の大佛供養に我君御上洛と聞しよりひつ定景清一門の仇を討んが爲規ひよるに相違なしと東大寺へ駈ゆけば我推量に違はず虜と成たる六代君景清夫婦が姿をかへ奪ひさりしと詮議のさい中重忠殿の奥方の仰には助命さすべき六代なれ共奪はれながら打捨置けば四海の政事亂るゝ道理汝六代の討手を蒙りいそぎ首討立歸れと心有げな討手の役目は取も直さず身替りたて景清を味方に附よとの御謎々とは察しながら敵方の身替りに死で呉れとは我子ながらも言ひにくゝ女房に語つてもよも得心はすまじと思ひ

舅殿にひそかに告ふびん乍らも此仕合戦場で討死したとあきらめてこらへてくれよ女房忤「ゆるしてくれと武士のなかぬ涙は猶百倍思ひやられて哀れ也おきせは悲しさやる方なく^せそんなら言合して身替りに殺す覺悟であつたかいのうといふて是がいちらしい是時松そなたの最期はお主人忠義と、様の爲にも孝行になるといふ「犬死とばし思やんなどいへど聞へぬ手負の耳一圖にこつたる幼氣に時エ、口惜しい大事の勝負にまけたゆへ一倍と、様にひけが附ふかと夫が悲しい祖父様よはいやつじやとしからしやろ堪忍して下されいか、様おりやもふ死るのか目が見へぬ^幸ヲ、道理じや^く、^せ尤じやわいのふ時死んだ先でも賽の河原で卑怯者の子じやといふて突廻しをらふと思へばおりやそれが口惜しい無念なわいのふ「おりや口おしい無念なとくるしき中のはら^く、涙^せ何のマア誰が呵らふその健氣な魂で成人したら類ひないよい弓取にならふもの十やそこらで死ぬ程なら「なせ發明には産れしぞ^せかあいや耳も遠ふなつたか是とつ様は卑怯者じやない強い侍じや程に氣を落さずと死でたもや「いふ聲耳に通じてや時

エ、嬉しうゐる「嬉しふゐると合す手に幸作は抱き附エエ、さりとては侍の胤程有て健氣な物じや常からして切合すき怪我さすまいと此間ヲ、拵へた及引の脇差怪我所か親よりも子よりも可愛ひたつた獨の大事の孫を殺す胸欲な此祖父を今はのきは迄ちいさま^くと廻して呉たがかあいわいの^く「なげ、ばともに箕尾の谷が胸も張裂憂思ひ涙拂ふて抱き上箕忤時松出かしたなアよく死んだ勿體なくも平家の公達六代御前のお身替り其方が首を討鎌倉殿へ差上なば此父の役目もたつ親より増つた手柄者むざ^く殺す親の身はどの様に有ふぞやい箕閭魔の廳にむかつてもおめず臆せず箕尾の谷が忤と名乗つて冥途の先駈人より先に先陣せよ「歎きを隠すいさめの詞母は傍よりすがりつき^せ是と、様じやわいのふ目が見へず共お暇乞をしやいのふ「暇乞をと抱起せば嬉しいあまりにかづくりと笑顔を残す佛顔^せ是時松いのふもふ息は切れたかいのふ^幸コリヤ孫よ一遍ぢい様といふてくれ^兩人かあいや^くかあいやなア「あへなきがらをおし動かし聲を限りになき叫ぶ涙は落て佐保川に水かさ増るごとく也歎きの中にみをのやは二人を

引のけつつ立上り箕歎いて居る所にあらず健氣に死せし時松が最期を無にせぬお身がはり「すらりと拔し刀の下首は前にぞ落にけるみるに歎きのいやましでワツと泣入女氣をなぐさめ兼て幸作は歎コリヤ娘何ほう泣てももふ戻らぬおりやもうなきはせぬ悔もせぬ我も侍の女房じやないか早ふ泣止めセアイ／＼幸エ、まだ泣かいやいおりやとふから泣止んでゐるけれど我がその様になくとおれも悲しうなるそふじや年寄の役じや佛前で回向せふサ、娘よ來い「娘よこいと手を取て佛間へこそは泣に行四郎は我子の首ひつ提一間に向ひ大音上箕ヤア／＼景清先刻よりの様子夫にていち／＼承り我君の御仁心定めて肝にめいじつらん恩をしらぬは畜類同前今より心を改めて鎌倉殿へ奉公せよ返答いかになんと／＼「何と／＼と呼はれ共返答とても嵐まつ折しも外面に吹立る相圖の呼子と諸共に奥より出る惡七兵衛出立姿は衆徒頭巾藤縄目の大鎧草摺長く小手脛當上に衣の玉襪白柄の長刀かいこんでゆらり／＼とあゆみ出ト此内橋懸りより薩摩五郎よんで出て呼子をふく正面の奥をひらき景清本文箕ヤア大佛供養の形りにてしづ／＼出て六代な抱上きつと留る物々しや上總の景清異形の姿に出たちしは仔細ぞあ

らん「語れ聞んと詰かけたり景清是にはめもやらす景待兼たり薩摩の五郎計略の首尾は何と／＼薩ハツ極上々の時節到來今宵は政子のもてなしにて女原に酌とらせ油斷の頼朝諸大名の沈醉最中此處に乗つて責いらば首取る事は屈竟景ホ、ウよし／＼コリヤみをのや景清が武勇に恐れ源氏の味方に引入んと思をかけたる今宵の事宜喜ぶ物も有べきが此景清は何とも思はぬ今宵の内に頼朝がすかうべとつて返禮せんイヤ六代御前のお爲には親の敵一門の仇いさましく初太刀遊ばせそれ五郎おん供申せ薩ハツ畏り奉るいざ若君ト六代を抱とるすりや簡程迄言きかせど景ヲ、何とも思はぬ馬鹿なやつ其そふいへば六代を汝らに渡そふかト薩摩を薩邪魔ひろがすとそこのけみをのや箕イ、ヤ渡す事はならぬ薩何をこしやくなト立廻る内て四郎景こやつに構はず五郎いそがれ薩心得景清上刀になとめカケリにて六代を抱乍ら箕南無三寶此上は裏ト石燈籠を手りいしく向ふへ走り這入る軍兵大ぜい出て景清をとりまく皆々景清うごくなト景清ふて笑景へ、ハ、ハ、ハ、數にもたらぬ蠅虫めら三人五人は面倒な首を並べて成佛ひろごふ箕それ者共打てとれる軍兵皆々鎗先するへて皆々動くなやらぬぞ景何を

こしやくなト是よりドンチャンはげしく立廻つて皆々を追込み
這入チョンにて右の道具を上手へだんぐひく
下手の高二重上手のはし迄引後口奥深に山まくになるやはリドン
チャンにて道具納る直に下手より軍兵逸て出る景清長刀にてなわへボ
ン切てすて 景いらざるやつらによりほどの遅刻それけるな
又軍兵一人かいるなボンと切のふうすにしづ 重ヤア 景
清何國へ行秩父の庄司治郎重忠言聞す仔細有まづ
くまてト景清一寸 景ヤア、うぬらに逢ふていらざ
る間答六代御前のお待かねそふれトまた行ふとするドン
榛澤りいしきなりにて 榛ヤア景清御主人重忠公の仰を
うけ榛澤六郎成清討手に向ふたそこ動くな景何をこ
しやくなうづ 虫めトドンチャン疊しく一寸立廻り 重ヤア
く 景清重忠に用事はなく共征夷將軍源の頼朝公是
に御座ある景清に見参く 景ヤ何がなんトトふりか
そはめきつと見へになるドンチャン打上天王立に成る上手の障子一
めん人にひらく重忠すはふ立帽子相引にかゝり後に軍兵大勢六代を抱
景清きつと見へ有て 景ヤ、ういふかしや景清を討取ん
ところ僧姿の重忠はさもあらんが六代御前を奪取
たはコリヤどふじやト大胸り榛澤鎗 重ホ、ウ 合點ゆ
くまじ諸葛孔明は孟獲を七度とらへて七たび助くる
手に入たる六代御前一旦汝に奪とらせしは恩をかく
る源氏の仁心 榛何と骨身にこたへしか 景ヤア仁心と
は何が仁心年來ねらふ一門の仇敵頼朝めを一太刀な

りとも報はん爲炭をくらふて咽をからし漆を塗つて
はつらをかへ心を盡す某なれば頼朝ごときの一定二
疋討とらんは安けれどせめて御一門の御公達に初太
刀をさせんと女房衣笠といひあはせばいかへしたる
六代君又もやうぬらに奪返されしかチエ、心外や無
念やなアリト無念のこなし榛澤ツリと本舞臺へくる橋懸りよ
薩摩五郎りいしき甲にて鎗をもち景清をきつとあこ
い 薩ヤアく 景清我薩摩五郎と名乗りその方が味
方と見せしは皆主人重忠公の計略誠は畠山譜代の郎
等本田の治郎近經とはしらざるか重平家を西海へば
つ下し天下の棟梁と仰がれ給ふ頼朝公景清が首を召
れんは蠅打よりもいと安けれどよくく 汝が忠義を
感じ思召ばこそ今日迄助け置るゝ寛仁大度 薩源氏の
世にいで源氏を覘ふは榛土をくらふきりうじ同前重
さあすみやかに降参するか 薩 景清返答は皆何とく
ト景清無念 景チエ、きつくわいやなア關八州の源氏
武士蠅虫とも思はぬ景清頼朝が運には叶はぬよな畜
生侍が心にくらべ降参などとは穢らはしい此上は
平家の仇一人なりとも切て切死そふじやトツカぐと
かふとする薩摩榛澤さへる此時上手よりみな 重忠めがけゆ
のや軍立の形りにて首桶をもち出てきつと見へ 三ヤレ 景
清みをのや國時はにあり 景ヲ、景清が望む敵八島の

手なみ忘れたか切て／＼切まくるぞ箕さいふ汝が首

ト重忠六代を引よせて

重ヤア景清かく迄

利がいを解聞すにしうねき汝が敵たいだて 箕此上は

六代が命を立所に打取ふか機それがならずば降参す

るか景サアそれは皆サア／＼／＼箕返答は何

と景チエ、奇怪やなアトどつかと下に座す幸作鉢としころな

て景いさいはあれで聞ました源平二つをたとへて見

ればてふど此鉢としころ景清殿を味方に附ふとめさ

る頼朝公又頼朝公をねらふ景清殿互ひに心が放れば

なれ是此様に繼合して和睦あれば六代君の命もつな

がる景清殿の首もとらずみをのや恥辱もすゝげる三

方四方納るは景清殿の心一つさもない時は御主人の

お命がないその上天にも地にもたつた一人の孫めが

最期があいや犬死になります爰の道理を聞わけて

折角ついだ此兜のはなれぬよふ丁簡を頼みまする景

清殿 重ホ、ウさすが具足を商ふだけ武士にもまさる

老人の詞重忠深く感心するそれみをのやその首是へ

箕ハツト首桶を重忠の前に置く 重六代御前の御首秩父庄司重忠

が請取たり又是なる幼子は平家の血筋を立きつて鎌

倉殿の世繼の君衣すりや六代様の御助命有てき時松

の最期もお役にたち幸智殿の功も立再び歸参も叶ひ

まするか重ヲ、出て歸らぬ武將の嚴命心易かれ皆の

者幸衣段々のお情有難ふ存じ升る六コリヤ景清今迄

の忠義忘れはせぬ今又自が命を助る鎌倉殿の仁心仇

に思ふな景清衣ヲ、よふおつしやつたその通りさあ

我夫 箕かくまであつき情の柵みさつ是でもてきとふ

か重サア上總の景清返答は皆何と／＼ト詰よる景清長

景かく計り仁心あつき源氏の大將頼朝に引んず弓の

あらばこそさりながら今日迄こりかたまつたる景

清が二君に仕へん事思ひもよらず腹かつさばくは道

なれ共安徳天皇の御母君門院の御行衛尋ね出しお和

睦なし申迄景清が命は景清に暫く預り立歸る運盡て

討るゝ首は箕尾の谷に進上申再會は重ねて／＼重ホ

、ウあつぱれ／＼それでこそ鎌倉殿の仰もたち 箕み

をのやが役目もすみ衣六代様のお身も御無難せ忠孝

かなへる我子の最期 幸兜ももとの兜となり 重浪風立

ず納る御代「花も實もある勇者と勇者智仁を兼し鳥

山 重ホ、ゝゝゝいさぎよし／＼源氏に仇せぬ義者

の道「平家を助くる仁者の道の本海道 重此明方に頼

朝公鎌倉へ御歸館の方々用意機いづれもお供ぞろへ

軍
皆々 ハア、「いふ間嵐に雲晴て夜も白々と小松原は
や御立の鎗長刀霞の隙に見へ渡ればト是にて後の山まく切て落す打めき松原
に行列の道具されいに「重忠始みをや本田ハツと遙
網ばりの朝日ばつと出す
に三拜平伏源氏の威勢を見るにつけ又も逆立惡七兵
衛思はず詰よるまなこざしてト各立上る景清は後をきつと見
を持立箕こは心得ず上總の景清「おなじく太刀の柄の
間にかはる夫を妻と妻ト衣笠おきせ時松の死骸を見て 衣是の今の情を
忘れたかせ此子の最期をむにしてか「見せる死骸に
はら／＼涙によはる武士と情に無念をこらゆる
勇士五郎は六代を抱襟澤は首桶を持重忠の兩方に立幸作は兜をも
ち衣笠おきせは時松のしかいた見せる景清みなのや愁ひのこ
なし皆々並衣鎧の總角うなる子のき神ならぬ身は夕
べまで幸わやくいふとて呵つたにせ今は抱てもさす
つても三人なきながらを野邊の露「袖に手向の死骸
は此世の限り秩父が門出重鎌倉山の星兜薩忠義は輝
く景箕尾の谷 景清立き衣幸のふの仇はき恩の浦八
島の浦の物語今に傳へて皆々さらばよろしく「殘しけ
るト段切三重幕

嘉永五壬子年初春

西澤綺語堂主人述

西澤
文庫 脚色餘錄二編下の卷終

西澤文庫
脚色餘錄三編上の巻

目次

- 一 室町殿歌舞妓興行
- 一 傾城と書外題の濫觴
- 一 大頭起三勝の辨惑
- 一 梨園頼話口書の寫
- 一 東都三場俳優の叙開
- 一 江戸歌舞妓芝居の始
- 一 京都歌舞妓の興廢
- 一 大阪歌舞妓の起原
- 一 梵天櫓鎗の來歴
- 一 戲場看板名目の大略
- 一 紅色桔梗の番附正本

西澤
文庫 脚色餘錄三編上の卷

西澤綺語堂李叟著

室町殿歌舞妓興行

歌舞妓事始に曰人皇百七代正親町院の御宇永祿二年足利義輝公室町殿におゐて御酒宴の興に狂言盡御催し有則御前にて管領職の嫡男或は御近習衆御小姓衆御局衆其外御抱の人々物まね狂言盡有し御役者左の如し

永祿二末年於室町將軍家御前物真似狂言盡興行

翁

名古屋山左衛門

千歳
三番三

京屋萬太夫
村山又左衛門

太鼓

大藏彌助

小鼓

筒井新八

脇鼓

小八 同十右衛門

笛

長命甚八

春之狂言 義經記三段續 上之段鞍馬之事、中之段八島之事、下之段芳野之事
役者附書上うしわか丸荒木三之助 荒木與次
兵衛祖也

僧正

坊松本名左衛門 今大阪
名代祖也 べんけい晴經殿、いせ

の三郎京屋萬太夫 今都牛太
夫祖也 しづか御せん於くに

歌舞妓
元祖也 こしもと堺屋とよ、たいのぶ村山又左衛

門 村山平右
衛門祖也 つぎのぶ村山又四郎、けんれい門の

んかさやなつ、くわんちや戎屋ゆら 今蛭子屋吉兵
衛此子孫也 能

登守高保殿、きくわう丸 御小
姓 たみや殿 牛若丸成
人して 九

郎義經名古屋山左衛門 狂言の
祖也

翁 伊兵衛 千歳
三番三 吉綱 九郎右衛門

太鼓 大藏與左衛門 小鼓 一屋源助

脇鼓 小兵衛同吉十郎

笛 中屋五三郎

高砂 太夫 伊兵衛
ツレ 新八
ワキ 長太夫

舞二番 長太夫 今早雲長
奈良衆 噺子方 奈良衆

冬之狂言 曾我の敵討三段續 上頼朝御前の段、中

大磯傾城の段、下敵討本望の段

役人附書上頼朝卿鹽屋九郎次 今大阪鹽屋九
左衛門名代也 すけつ

ね鹽屋九郎右衛門 今大阪
名代也 少將扇屋さん、十郎祐

成村山又左衛門、梶原平三大藏彌十郎、とら

御せんきくの方、五郎時宗大和助殿、大藤内

内左京太夫殿
の衆 大いその長きくの方
つばね衆 五郎九大阪太

左衛門今大版
名代也

仁田四郎高保殿

太刀もちお小性
よしや殿

以上

右室町殿の目錄にのせたり右歌舞妓女御抱五人有中にも於國はことに才藝勝れたるもの故度々召れ舞ひ諷ひしが山左衛門と密通の科により共に御扶持に離れ浪々に及び殘の四人の女藝者も殘らず御いとま賜りけり山左衛門於國は渡世に營まん爲或時は床を架して神代の故事或は公の式法の事など講談し居たりしが其後織田信長公の御時御前へも召れ度々舞を御上覽有しに附場を求め歌舞せん事を願ひしかば其比北野に人枅のありしに御免許有て天正三亥年於國神樂を略して始て北野にて舞けり是歌舞妓を芝居にて勤る創也夫より文祿慶長に至り洛東祇園南林に於て場をひらき是を催す山左衛門と於國が中に娘有けるを伴ひ連舞を仕たりける其後五條橋の南今云問屋町さや町の邊也にて娘に國の名を譲り芝居興行せり是を世にお國かぶきと云り此二代目の國に智を取舅山左衛門が名をかたどり山三郎といへり世にいふ名古屋山三是也又慶長元年より同三年の間村山又八村山又左衛門の
子山三の弟也其外松本名左衛門、京屋萬太夫、大阪太左衛門、鹽屋九郎

次、同九郎右衛門皆々伏見の御城へ度々召れ太閤の御前にて狂言盡をしけり御褒美として衣裳を賜りし事などあり村山又八子兄の又太郎も其に出勤しける二男又三郎は寛永年中江戸へ下る是市村座の元祖也此系圖役者大全に委しく記し侍る右二代目の國女五條にて芝居興行せし時島田萬吉といふ女有才智なる者にて共に是をはかり女名代といふ事を始め淨瑠璃操をなし切幕をも始たり其比六字南無右衛門と云女夫おなじく操を興行す則淨瑠璃河内介上總介也其後淨瑠璃太夫左内、宮内と相續す又佐渡島坊初は與三郎といふといへる者あり藝の妙を得て遊女に此業を施す此佐渡島家も後は二つにわかれ竹島天竺左衛門竹島幸左衛門祖也佐渡島傳兵衛の家佐渡島傳八親長五郎が祖父也此兩家也扨國が芝居の場所も伏見の御城より秀吉公京師に入給ふに此所群集する故御上洛の節妨と成により四條中島へ替地を仰附らる其時今の高瀬川なし勿論邊に人家もなし今いふ河原町より四條中島までの間に芝居を建て右の四人の者興行しけりその後元和年中時の御奉行七箇の櫓を赦し給ふ都牟太夫、早雲長太夫、龜屋衆之丞、絲槍權三郎後大黒屋竹之丞と改蛭子屋吉郎兵衛、布袋屋梅之

丞、村山又兵衛後平右衛門と改

此七箇の櫓の外大和權之助杉

本庄太夫と名代あれども是を省き前の七人の名代を免さるるべし右七箇所の外櫓を構ゆる事能はず櫓なきを小芝居といへり其時初めて今の四條河東に芝居建てけり」北側に二軒南側に三軒大和大路常盤町に二軒以上七軒也又寛永年中に佐渡島坊に習ひ得たる六條の遊女等芝居能といふ事を其比所々にて是をなす歌舞妓芝居には故有て女藝者を禁じ給ふにより小姓を以て女形に仕立たり承應元辰年祇園村に爭論有て芝居悉くやみぬ又其比橋本金作といへる女形を仕損じ有しにより彌芝居停止に成て役者共迷惑に及べり承應二巳年にいたり其時の御奉行祇園御參詣の節山村又兵衛御駕訴訟に附芝居御赦免の御願ひ申上御役所迄附したひ御歎申上けれど御免なかりし故御役所の軒の下に起臥雨露にうたれ著類袴も破れ損じ瘦衰へて人のかたちもなかりける弟子の子供役者食物を運びて又兵衛をはぐくみしが時有て同年三月に物まね狂言盡と名目改り御赦免有しより今に相續す今年寶曆十一巳年迄凡百十年に及ぶ世人此又兵衛の事を聞傳へ總じて役者たる者は河原者と惡名を附

又は穢れし身なども賤しむは大に相違なる事也たとひ田舎芝居勤る役者たり其穢はしき者と交はる事曾てなし元來右體の者狼籍など致させまじきといへる一札有舞臺勤むるもの常に身を清め天下泰平國土安全の政を業とする也世のわる口聞にうとましくこゝに其譯を記るし侍る」と云々此書出版後九十年になれば村山氏此道を業とする事を創られしより二百年に及ぶ歌舞妓道に立交り所業とする者村山氏の恩を思はずんば有べからず

傾城と書外題の濫觴

同書に曰都萬太夫

今の芝居名代都中太夫先祖也

といへる美少人を女

形にしたて専ら京島原傾城買の狂言を仕たりける其比の狂言の外題に都て髮切島原、坂田島原或は八島島原、安宅島原など、賦せり是島原歌舞妓の始也一説に島原かぶきといへる事寛永年中京六條三筋町の（廓今の島原へ移りて肥前島原に似たりとて名に呼其廓の）遊女芝居能とて舞けるより云傳へしとは大な誤り也さればこそ京はいつとても二の替りは傾城事の狂言をなす故に島原歌舞妓といひしをいつの程よりか島原といへる替りに外題の上にけいせいとを

く様に成たる也是其因縁也芝居の總名にあらざるゆへ二の替りに限り木戸札場にても島原歌舞妓と今もいふなり是のみは古風有の儘のこれり」と云々是も九十年の今は誰も辨へし者もなくなりたり

大頭起三勝の辨惑

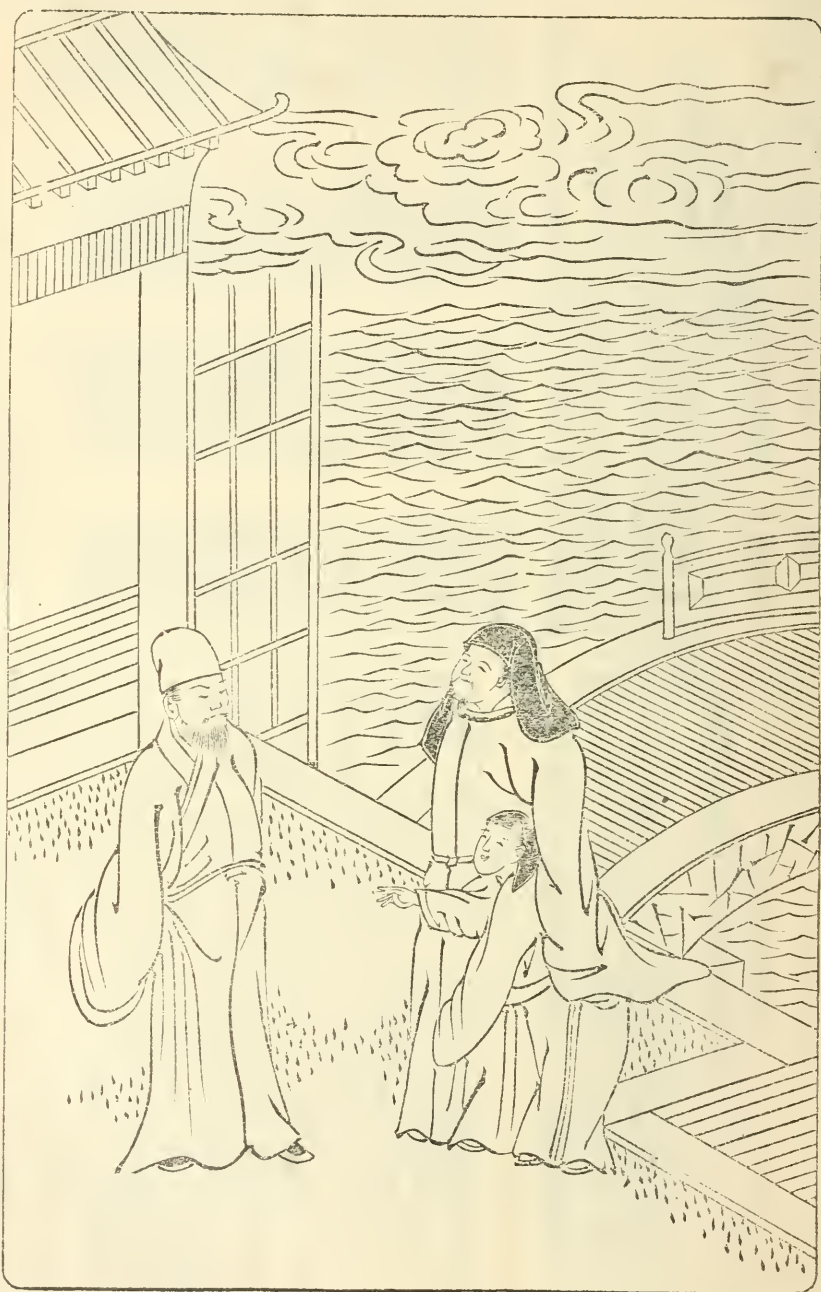
同書に云抑女舞といへるは二代目の國女が弟子に柏木といひし者舞を工夫し小鼓なしに太鼓を用ひ諷ひものも元祖於國が作りし神歌の變風をやめ平家物語源平盛衰記の事跡を文句に綴り太鼓に合せたり因て大頭といへる事はよりいひ始たり装束は天冠に狩衣大口にて舞ふすべて女舞には箇條數多ありて岩戸開或はしはだ、天地拍子、羅生門など、いふ傳受の舞有又昔より傳ふる舞に樂拍子舞、鬘舞といへるもの有是は上梵の月宮月の宮人の舞給ひし霓裳羽衣の曲の舞也近世専ら用る小舞十六番も昔より傳ふる處の舞也又鼓歌といふもの有すべて太鼓を用ふ室町殿の御時の御扶持人笠屋なつ子孫新勝といふ者の一子三郎兵衛寛文六年年名代御赦免有三郎兵衛が先妻を萬勝といひ三郎兵衛が娘を春勝といひ後妻せんといひしを後に新勝といへり夫より姪さつといふ者へ譲り

則新勝と改め夫よりつやといふ者へ譲り正徳年中に宮地芝居御停止に成享保元年四條にて後の新かつ前藝唐子踊をして後女舞の業をなし兩年つとめたりしに女藝を禁じ給ひ享保十六亥年九月二十三日新太夫と改り名代赦され元文二巳年閏十一月二代目新太夫へ讓請又三代目新太夫へ渡せしなり女舞大頭柏木、笠屋三勝よしかつ、たちやくに、仕形男舞 舞又太夫、丹波、右六株は今絶たるも有當地に居住なきも有延享年中一勝といふ者大阪にて大頭を催したり又前かた大阪にて淨瑠璃小歌に諷ひし半七に馴染たる三勝といふ者此株の内なりといへるは大なる誤り也夫は糞屋三かつといひし者也今按するに其みのや三勝も女舞のまねびをして田舎廻りなどして大和の國に下り茜屋半七と密通して浮名を請たるものなるべし世人附會の説を實と思へる人に虚誕のむねをしるし侍る也と云々予が作書三勝が傳と讀合すべし

梨園頼話口書の寫

首題

維此冊子總論劇場標題初桂姓字終楊圖黑船俠示姉川腸褒貶不失巧拙實詳昔時自笑簡易何當



浪華幹旋子戯

標題

櫻山四郎三	三折徳二郎	嵐雞助	尾上桑助
南雅置酒	漁江吹笙	瑛子借面	里聲奏箏
中村喜代三	嵐三十郎	姉川大吉	嵐文五郎
華曉花周	三蝶蘭亭	讀多夜雨	陸友晨風
中村富十郎	中村桑太	中村十藏	坂東三
慶子湖柳	鯉長丹楓	虎有樂鑄	平久酒池
生島柏木	坂東岩五郎	花桐豊松	山科甚吉
孤立瀟灑	岩止怪奇	淺屋燕子	棟石海棠
藤川柳藏	風七三郎	四聲燕十郎	澤村石海
富尾輕薄	朱運濃粧	奥山紅書	其谷白衣
市川吉太郎	三折字八	中村歌右衛門	三折大五郎
伯子伏蚓	都舟盆魚	歌七貧士	一光官厨
中村治郎三	三折他人	藤川八藏	小川吉太郎
丸子寄婦	黒稻博徒	八甫高低	英子風流
市野川彦四郎	市山助五郎	中山文七	嵐三五郎
可慶名話	志山花談	由男大商	雷子少年
嵐三右衛門	嵐吉三郎	中山來助	尾上菊五郎
杉島周鼎	里環般盤	舍柳園圃	梅幸雪梅

此梨園頼話は頗顯逸人の撰にして甲午冬日記北窓散人の跋有小冊也甲午は安永三年にて其比俳優者の評騰せし書也今嘉永五年迄七十九年となる書也口盡出入の湊新町橋の圖おかしければ寫して爰に記す物也

東都三陽俳優の叙開

夫天地を一個の戲場に比せば渾沌未割の一番太鼓にすめるは薄靡て霞となり濁は淹滞て土間の薦茵とな

る豊秋洲の大名題國常立尊の世界定に二神の吐し初
 碓馭盧島の檜舞臺を踏堅め天より素戔烏尊の口上演
 いつも八重垣の引幕さとひらけ天地人の三番叟天照
 大神の天石窟隠れの新狂言天鈿女の所作事古今の大
 入トイ本神樂の鳴物チヨン／＼とぶん廻して神祇釋
 教戀無常の道具建に收まり山川草木の造物花になく
 日覆の鶯水に住切穴の蛙よくたて歌の心を動し力を
 も入れずして若い衆を中がへりさせ目に見へぬ敵役
 の惡工も哀れと思はせ若女形和事師の中をも和らげ
 鬼神をも取挫ぐ角義髪の大荒事其親玉の發句を乞て
 俳優觸とやかしたれば初編的一幕何卒評判よろし
 き様偏に願ひあげ幕より兩手をついて申上ますと云
 爾

于時享和三癸亥孟春鷄旦 東子樵客戲撰

此小冊は世に流布する俳優觸に倣ふて點式は持狂言當り役の仕撰を畫き以て風流なる書也奥に自筆の句有

先祖の譽れは我及ぶ所にあらず
 和歌によむは汝にあらず哉

成田屋 五百崎 市川 白猿

櫛の齒も通らぬ夏の柳かな

濱村屋なには町東籬園

瀬川路考

ちら／＼と挽く夜そ雪の初昔

音羽屋假宅大阪町向島札の辻

坂東薪水

やぶ入や花より芝居明がらす

高麗屋長谷川町三光稻荷

松本錦考

白粉の匂ひ床しや春霞

綿屋市村座樂屋向裏

小佐川巨撰

松を出て花へ滋こむ霞かな

瀧野屋甚左衛門町酒屋の裏

市川新車

いく程の世にきれい也けしの花

近江屋げんや店

中山錦車

梅が香にのつと日の出る山路哉

大和屋がくや新道

岩井梅菰

鯉喰ひの髭をなでたる柳哉

音羽屋住よし町

尾上三朝

鶯になりすましたる初音哉

大和屋げんや店四方の

坂東是業

よひものを笑ひ出しけり山櫻

姿見丸屋せと物町

大谷馬十

櫻より御簾に近し桃の華

紀伊國屋和泉田なこやうら町澤村曙山

兄といふ名にはかしこし梅の花

立花屋深六間堀川市川中車

先に遺脱たる最負戯子太陽出の大達者頗多し他日後編の幕に出して四方の御見物雅兄に獻せんと欲すと有此書も早五十年後の昔とは成けり

江戸歌舞妓芝居の始

名物袖日記天明二年出版萬里亭曰に曰猿若勘三郎寛永元甲子歳

御願申上蒙御免て初て御當地中橋に於て太鼓櫓を上芝居興行す同九年壬申年伊豆の國よりあたけ丸の御船御入の節元祖猿若勘三郎木遣の音頭をとり則金の麿を頂戴す其比禰宜町今の人形町に住居し慶安年中今の堺町に移る同四年辛卯年に御上覽に備り明暦の類焼にて上京なし禁裡へ被爲召諸藝仕り忤明石と申名を被下置衣裳等まで拜戴す金の麿猿若の衣裳は中村座の寶物也と九月江戸表へ立歸り相續芝居代々繁榮す此家に太平の綱曳といふ狂言の拍子事有此さるわかといふは元祖中村勘三郎より言傳へたる事にて中村座家の名物也是より已後市村座始り萬治年中に至り

森田屋山村座相始ると云々以前は山村長太夫といふ座有て四座なりしを寶永年中故あつて滅亡す今は堺町中村勘三郎、葺屋町市村羽左衛門、木挽町森田勘彌此三座也其外諸所社内に小芝居株あまたあれども云

も是は格段別にて譯ある故小芝居へ出たる小供は大

芝居の役者交りせず勿論舞臺へ出さず其仔細一口に論じ難し京大阪の名代座元芝居主等皆持主は別也江戸は元祖より以來太夫元と稱し名代座元芝居ともに

一人の持主にて今に相續す又操り座等の事は近代世事談といへる書に出たれば爰に記さす三座元祖よりの系圖は役者大全に委しくと歌舞妓事始に出たり天

保十三寅年に當時の淺草猿若町へ替地賜はり一丁目中村座、二丁目市村座、三丁目河原崎座となり淨瑠璃は薩摩座、結城座の二軒は一丁目二丁目の向ひ側に移れり此餘の宮地の芝居等は此時皆取拂ひと成けり

京都歌舞妓の興廢

歌舞妓事始出板後九十年に及び四條川東に南北の芝居二軒となり北側を^{早雲長太夫}南側^{龜谷桑之丞}部^{萬太夫}布袋^{梅之丞}此二軒を大歌舞妓と云其餘に小芝居と呼ぶもの四條道場因幡樂師誓願寺北向芝居など有しが今改革あつて

後島原^{左女名}に二軒宮川町に一軒と三箇所に移し以上五軒と定まりしは以前七箇所の櫓名代を免されし遺風なるべし此餘に機關淨瑠璃操説經讀語等の名代委しく歌舞妓事始に出たり

大阪歌舞妓の起原

元和年中下難波領内に傾城町有^{今云道頓堀}多九郎右衛門芝居にて女歌舞妓と號踊をさせける是を大阪にてはお國かぶきと云り其後寛永十年女藝を禁じ給ひ若衆歌舞妓と改め濱側小芝居にて凡六十餘年興行仕來りし事は歌舞妓事始及戲場の雜書等に悉く書たれば改め云はす承應二巳年鹽屋九郎右衛門同九左衛門大和屋甚兵衛三人の者に名代を御赦免有て後追々に芝居數ふへ既に寶曆年中芝居の名代と極りしは鹽屋九郎右衛門、鹽屋九左衛門、大和屋甚兵衛、河内屋與八郎、松本名左衛門、大阪太左衛門^{右に室町家御扶持人}の子淨瑠璃操の名代は大坂次郎兵衛、虎屋長右衛門^{後源也}後源宇兵衛出羽^{後信濃}又出羽大和^{後上野越前}説經與七郎、七太夫、舞太夫、又太夫、市太夫、兵太夫、金太夫^{以上}と有しも後段々と興廢有て安治川芝居荒木^{堀江あ}此太夫^{東側側}の曾根崎^{北の道頓堀大西戎橋}角^{相生池前}九^{橋詰}此七軒は

素より天満天神社内御靈座摩稻荷高津等の社地に有し宮芝居と呼しも天保此方廢りたるは目前に見る所也今道頓堀に遺る五軒の芝居の内角大阪太左衛門中鹽屋九郎右衛門の兩座は寛永以來の古き大歌舞妓なれば櫓元と云べし筑後今大西越前今若太夫と云の兩座は淨瑠璃操の櫓なれども中歌舞妓と呼び竹田は近江出雲外記と代々櫓操座にて此三軒とも貞享此かた舊座なれば今に廢せず中芝居共小芝居共呼て此五軒共芝居主は時々變ると雖も古く打續興行して道頓堀の芝居とて大阪名物の第一番と稱す元祿十五年濱芝居數多有比水茶屋十二軒よりなりしを願出して立慶町にて二十七軒吉左衛門町に十九軒都合四十六軒有茶屋御赦免有しよりいろはの假名に合せいろは茶屋の名目遣り小芝居を濱芝居の名と混する事予が藏せる書物に有後々の編に委しく出すべし

梵天櫓館の來歴

歌舞妓事始云芝居の櫓は京師に入伏見口、三條口、大原口、鞍馬口、長坂口、丹波口、鳥羽の櫓を象り名代座元の紋附たる幕を張左右に塵を立る是を招きと云歌舞妓の祖お國初て北野にて芝居興行の時は白幣を櫓の四隅に立來りしが明暦年中

に塵に轉じ今は梵天ともいふ勸善懲惡を本義とし寸善尺魔を除く心にて梵天王を祭る旨趣也櫓に並べたる五本の鎗は元祿年間差圖有しに五奉行の持鎗の餘風なり或說にいにしへ役者の持鎗なりしといふは妄說也尤上なき御方へ藝盡しを御覽に入たる時役者共歸宅行粧華麗にすべしとの仰によりて立役女形何れも麻上下に大小を帶し立役は若黨二人詰役より仕たて挾箱もたせけり女がたは小童二人召つれ日傘をさせたるより例となり寶永正徳の比迄樂屋入に大小を常に帶し女形は日傘をさしせし也圖歌舞妓事始にも出せり其比柴崎林左衛門、藤川武左衛門は故ある方より大小を給はり相傳ふて其比さしせたる日傘も古き役者の家には持傳へたれば櫓館も古役者は皆浪人より出たれば持やり也と思ふも有れどさにあらず雨ふる時鎗幕ともに出さざるは濡さる爲又雨天の節は相休むといふ印也ともいへり

戲場看板名目の大略

芝居と呼びたる謂より棧敷木戸口の名目は樂屋圖繪戲場訓蒙圖會等に委しければいはずされど臆病口の名などは其をしらずなりにいひ來る事とはなりぬ著

物もおくび形りに附たる故おくびやう口也亦二三十年此かた新に名に呼ぶ物有舞臺の兩脇へ切込たる場を蛸壺と云舞臺前の場をかぶり附と云是を其黨にて蛸かぶりと唱ふ又來る幾日よりと初日の張札を木戸口に張を日びらと云是日披露の略語也今役者藝者ななどに進物贈物等の目錄を張るもおなじくびらと計り云是又おなじく披露也又表看板も昔は繪看板とはなく大外題と次に一座誰々と役者の名前を印したるを評附と唱へしなり中古細書に大序より大切迄書き別に一日の性根とする所を名代役者のみ撰出して是を一枚看板と稱し其下へ外題割書并等を書いて大外題と云今や其法式も廢り似貌看板を何枚も書並べ輕口豆藏の身振聲色小屋の看板の如くとなり外題看板を大江都看板と唱へ古き仕來り狂言一場にて名代役者の揃はぬ時は二段目三段目の寄せ書を出す様に成たり譬は伊賀越乗掛合羽宿屋の門口に譽田内記鎗をもち立居雙蝶々の米屋場に十治兵衛人相書をひろげ門口にイむ圖など畫けり其法を知らぬ作者役者の拙きより起ると知べし又中古は總稽古の日に仕組御目にかげびと張札せしは其日舞臺にて道具を飭り

て稽古萬事正しからざるを改むる故人に見せぬ也文政中總稽古を曠として見せる事をせしが好人は是を見て初日出より狂言出揃ひし比衣裳拵へ等をあらため見んが爲め總稽古にて下見をせし也當時は總稽古を見れば夫限りにて濟し初日出てより見物にこの人多くなりたり又辻々に出す看板を辻看板と云歌舞妓事始に元祖名古屋山左衛門が出せし辻看板の文に曰從五月八日於北野一名古屋山左衛門在所糸捻女之所作成之一覽念望之人須來見如此板に書て辻々に出せしと云むかしは屹としたる格式なりとしるべし

紅色桔梗の番附正本

造物二重向ふ長暖簾上手下手共一間宛霞襖二重の前面に毛氈かけ軒釣の挑灯づらりと釣り都て島の内大茶屋祭りの體二重に琴浦伯人の拵藝子おゆうおかの仲居お品お富室頭持桃八甚吉此吉權十郎藏屋敷侍客にて帷子羽織なまの八獅々の足の形鐘藏せんまの形りにて酒のんで居る此見へよろしくだんじり太鼓にて幕開くいつもの通り藝者俄四五番有て留る奥より花車お圓出てお是はは磯様俄はどふてゝり升な

時に琴浦さん見りやうかぬ顔附桃八さんどふじやいなアなせ挨拶さしやんせぬぞいなアハ、イヤもふ最前から私も如になふやつてをり升れど兎角磯様よりは琴浦様の御機嫌が取にくいで困り升てかうお圓様けふはよふしらして下さんしたなアお、勇さんかのさん歌柳様が遅いので御退屈に有ふなアかうもふおつ附お出じや有ふわいな磯之お圓あの通りじや同じ島でも藝子迄が揚の客を待兼ねに此琴浦はひろ網の海老見た様にびん／＼と匆廻るそちや胴欲な物じやぞよ琴う堺の乳守に居る時分から振附るといふ事をしつてゐながら仇しつこいほんにお前も上根なの方じやわいなア是々琴浦どん此なまの八も今では磯様の辨慶なれどよい／＼仲間では立られるおいら權ヲ、おれもこつばの權といふて面を賣たおいらが顔を捨て思ひ附の流し俄獅子にやとはれて赤頭八せんまのなりを其儘に座をもつもこな様の機嫌を取ふ爲ハ、そふでムり升お腹のたつ事は夏越の祓の事なれば太左衛門橋からさらりつと流して圓けふの口舌は私が貰ふて中直りにわつさりとお盃をかへてこつぷで一つ呑直しとはどふでムりますおそれ／＼たし

か今さつぱりとしたお吸物がさんじる筈皆々さあ／＼お一つ上れいなア磯の丞、磯さあ琴浦さそふさす琴いやじやわいなア權是琴浦どん旦那の思ざしを八否じやとはどふじやいのふ琴否じやによつて否じやわいなアハ、ア、イヤこりや何でムり升あんまり遼物や俄をばこじつけてごろじやつたゆへ大方氣上がして酒はいや／＼とおつしやるのがなムり升ふ磯又も、八めがさし出をるかだまつてゐよふ琴イエさ、には酔ぬがすかぬ男に酔たわいなア磯何じや好ぬ男ト立かゝる皆々とあて皆まあ／＼よふムり升る磯先約の客を變改させても貰ふてあるその方否でも應でも抱て寝るじや琴否じやわいなア貰はれたゆへ座敷計りは勤れど抱れて寝る事はならぬわいなア磯抱れて寝る事がならぬとはム、我言かはしてをる助松鞠負めに心中立かきやつ主人より預りの千手院の刀紛失の科で親主計に勘當うけ今では宿なしなりや菰かぶらふもしれぬ者に心中立とはかはつた物好も有物じやなア琴さいなア世にない男へ立るが心中すかぬお客は勤ぬわいなア八其勤ぬ女郎をこのなまの八權こつばの權が腰おして抱れて寝さす磯否でも應でも

女郎は賣物金で買て抱て寝る琴そこをふるが勤の習ひあはぬが間夫への心中立機して其間夫は八權ゆきへめか琴イ、エ機そんなら誰じや琴外にかあいな男がムんす八機外に色とは琴めつたにいふてよい物かいなア機いはぬ所をいけずて聞のじや琴いふまいがどうして聞んす機ヲ、こふしてけるト琴浦を蹴るさあその間夫の名をぬかせ機八何とじやト此時向ふ戸おその間夫は爰にをりますすわいなア機んヤなんとトすりがいしに成向より仲居お梶酒に酔たるこなしにて大盃を持ちよるト出る跡より嵯峨右衛門大盃かづきま宛ら田舎侍いつもの敵役の椿茶や娘小石と兩人おかちを肩さが右衛門是々お梶女郎こりやどこにかけ連立出て花道にて右衛門是々お梶女郎こりやどこまで連てあるくのじやちと休息と出かけたいておかサアよろしいわいな何が俄や遼物の囃子で氣のほりがするわいなアが何遼物とはありや一體何の事じや小サア夫はあなた始ての事故おしり成されんも御尤その遼物俄といひますわな梶ア、是それを門中で講釋する事かいなアかれ是いふ内戻つてさんじたわいなアが何でも暫時睡眠と出かけにやならぬてト又右にはて本ふたが圓ヲ、おかち嵯峨様を連ましてどこへ這入てゐやつたぞいの梶どこといふたらゆふべからおい通しの御褒美に晝迄隙を貰ふたゆへさが様を連まし

て難波邊を流したらもしおる様土龍様や五調さんがせん一方にゐなさつてなお梶よふきた是で一つのめてゝこんな物でのましてヲ、あつト大盃であふぐ權琴浦の間夫といふて出たを八誰じやとおもや仲居のお梶機わりや何で邪魔に出た梶イ、エ邪魔は致さんぞへ琴浦のまぶをいへまぶの名を聞ふといはしやんす故ハテ琴浦様を揚詰のおかち今ではマアあの子の深間といふは私じやゆへ間夫の男と名のつて出ては男なりけり女團七といふ琴浦さんの深間じやわいなアがハアそれで外題の趣意もわかつたと申物じやが今申た琴浦は身が執心で折角取よせた所を貸たとやらかつたとやら申てこりやどうふしてくれる心だ梶サア宜しいわいな此遼物の間は紋目つきで自由に出來ぬ子供衆そこを此お梶が揚なれば繰合してあなたへも貸ますわいなアがサア其かすしとやらかるとやら曰因縁がわからぬ故小ア、申さが様の又根どひが始まつたヲ、笑止やのトさが右衛門の脊中を叩くがハテ扱こな女は何を云てもヲ、せふし／＼と云がそのマア大せうしといふは小堺にあるわいなアが成程／＼堺の大せうじ聞及んでゐる扱はそなたの生國は堺と見へるわへ梶イエ堺といふは私が生國小又あの琴浦様

ももとは堺の乳守から此大阪の島の内へ仕替へに來
 やしやんしたのじやわいなア磯ム、其琴浦が爲にお
 梶その方が間夫なら間夫にもせよ女郎は賣物此磯之
 丞が身受をすゝるお圓親方を呼にやつて手附の金子を
 受とらせ梶イ、エ手附は私が打ますかハテ奇妙な事
 を聞物かな女のお梶が女郎の琴浦を受出そふとはか
 はつた物好梶なる程嵯峨様はわかりますまいが總體
 此色里に育つた物は相身互ひ心さへ合ふ時は姫ごせ
 どしでも中のよいのが則色ましてや一生連そふ男い
 やじやと思ふては片時もそはれぬ事じやによつて琴
 浦様の身受は私がしてあの子の好た男にそはす氣じ
 やわいなア琴浦様琴そふでムんす身に引受て世話し
 て下さんすお梶様の心次第でムんすわいなア磯スリ
 ヤどふでも身共には梶まあ自由にはさしませぬ磯し
 て又琴浦を受出すかねハお梶をちやもつてゐるかよ
 梶イエかねはムんせぬハそれに又身受とは梶おゑ様
 見て下さんせ圓見いとはや梶琴浦さんの身受のかね
 まあ當分手附と思ふてわたしが勤奉公に出ますよつ
 てハテ二十兩なりと三十兩なりと私が器量次第相應
 に直を附さして下さんせといふ事圓夫でもそなたに

は親のある身しつかりとした請判がなふてはどふも
 磯お圓そんなやゝこしい手附をとらずと爰にある五
 十兩是を手附にとらすがよいト財布をひ梶イエけふ迄
 は私が揚の内殊に此さが様にかしましたためつたに外
 の手附をとらす事はならぬわいなア石それさがさん
 お前の揚じや程にどちらへか連立てゆかしやんせい
 なアト琴浦をがそりやマアほんの事かそんなら一寸
 ト引よせようと少しあたりに法界悋氣暫しは人めの關
 してはたを見て女皆そんならけふの相手はあの嵯峨
 様かへが少分乍ら琴浦が思ひ者は我等ハ權是々磯
 様見せ附たらしいあのざま八どうする丁簡でござん
 ぞいのふ磯ヤアどふのこふのと又しても出過たおか
 ちめ二人りともうむをいはずと琴浦を引立ハいハ
 、合點じやト琴浦を引立る皆々取さへる此内向ふより土船のハ
 駄がけにて出て兩人梶ヤアおまへは三ぶさん女皆つち船さ
 をポンハと投る
 んよい所へ琴よふきて下さんしたなア磯そりや兩人
 共土船じやとハイヤ土船でもごもく船でもかけ
 構はぬ所へ出さつて權人にしられたおいらをばなせ
 斷りなしに投やがつたのじや三ヲ、投たら大事かま
 だ此上に締上て捻殺そふもしれぬそふ思ハ磯イヤ思

ふまい何で又我々を三ヲ、どづいても大事な人三
りや又なせに三仲居のお梶が揚詰にしてをく琴浦を
かしてくれいとぬかす故かしてこますさへあるに何
じや抱て寝よふうぬが揚の時人が抱て寝よふといふ
たらうぬら機嫌よふ抱して寝さすか磯ヤア三大阪中
に隠れのない釣船の三ぶが子分釣船より鯨船まだま
だ重い土船の三ぶ様じや親仁が切た立引の珠数は浴
衣の染もやういがんだ相手と見るならばいさくさな
しの叩鉦うぬらしやつとでもぬかして見されトにらみ
廻してい
ふ敵役三人びくも磯様しやつといはつしやりませぬ
か磯エ、やかましいわへ控へてをらふ桃おつとひか
へてをり升ぞト此内さが右衛門もさハ、ア成程噂に聞た
釣船の跡取てつち船とやらがこふ入てきては大がい
な磯はとり合ぬはずじやてハ、、梶三ぶさん此間
からかのお人の事で何やかや相談もありお前に逢た
いと思ふてゐる所よい折に來て下さんしたなア三サ
アおれもその事を聞たゆへ邊物見がてらきた所が今
のしだら見かねて一寸爰へ出たがすぼねの立た代呂
物でもないにおとなげない立引となるまいその替り
には琴浦はちつとの間をれがるぞや又かさぬとい

ふて見されすぐにすかうべ張碎くはト煙草盆を磯之丞の
方へ蹴ちらす磯之丞
びくくする權とハもつしさア、土船殿とやらもふ夫
には及び申さぬそれなるおかちが挨拶で身共にかす
と相極つて有からあの仁達も何のいひ分がムらふぞ
扱々貴公よい所へお出下されて拙者も祝著に存ます
ト扇にてあ
ふき立る三ア、是々此おさぶも我ばつかり嬉しがつ
てゐらるゝ琴浦をかつたのはをれが奥へつれていて
酒の相手にするのじやがア、何の事じや馬鹿し
いトつまら
ぬ貌する三サアこちらのざぶ言分があるかありや
いふて見いどふじや磯エ、是最前よりだまつてをれ
ば慮外の段々ト反打皆
々々あゝよふムり升る三何じ
や反打て切る氣か大阪の町人は骨があるぞわが身達
がどの様にもがいてもそこが土船じやびく共せぬの
じや磯エ、もふ丁簡がならぬ兩人共何してをる土船
がこわいか恐ろしいかハア、是磯様おいらにとひ合
すには及ばぬ事權お侍だけで言分が立まいおいらは
まあ跡での事權構はずとあまいかんせト尻こみす
る磯之丞仕
方のない磯エ、はその方ら迄がエ、もふ丁簡がなら
ぬ土船めとやらうぬトせひのふ三ぶが方へ行ふとするさ
が右衛門ツカくいて磯之丞なとめ
磯殿とやら待たつしやれ磯なせとめさつしやるがイ

ヤとめまするのはそのものとのお爲を存じて見受た所
 が定めて貴殿も御主人より知行でうだいめさるゝで
 有ふそれが町人との口論に及んで打果し御主人の御
 用にはどの命をもつてお勤被成るゝぞ磯イヤ何のあ
 れ式のやつ眞二つに^がサア其町人は他領の者殊に遊
 所といひ旁もつて場所が悪いまあゝおひかへ成さ
 れい磯じやと申て^ぶかよふなる繁華にまじわるから
 は兎角物事大よふにナ見た事は見逃し聞た事は聞流
 し馬鹿に成つて遊ぶが鬱散と拙者は存ずる磯殿とや
 らあゝさりとては堅いゝゝ圓それゝゝこりやあなた
 のおつしやる通り^皆もふ堪忍被成いなア梶モウシ磯
 様お前の様にさしてもない事に力み返つてこわい顔
 するお方をやばじやと云て笑ひ升ぞへ^がこりや堅み
 をやめてくだけをれゝゝいさつてもがをれさつきに
 からきついひがじやと思の外さが様の粹なお捌き
 小白いといふたわしら^が白いので有たわいなア梶
 どふやら心有げなさが様の今のお詞何をいふても爰
 は端近^琴三ぶさんも奥へ来て何かの相談^がそれゝゝ
 かよふな論に及ぶのも賑はし過るからの事三ヲ、此
 ざぶがまだ咄せるさあ琴浦どんもお梶もおじや梶ま

あ奥へムんせいなア^が身共も小座敷へなと參つて休
 息申そふ三さあ奥へ行ぞよめんざいめら云分ないか
 めかして見ぬかアノ大だくらめがさあ皆の衆^皆まあ
 〴〵ムんせいなア^ト歌に成三ぶおかし琴浦女形たいこ持皆々
 磯てもひどいだんな素町人めじやコリヤ兩人の者わ
 いら影でほんゝ申てをつて今のざまはありや何じ
 や權ア、お前もだ侍だてらあの様なたんくは切らし
 て黙てゐるといふ事がある物かいの八おいらはこわ
 ふも何共なけれどおまへの了簡にある事と控へてい
 たのじや磯何をよい口な事ばかり身共とてもさして
 恐しふも思はねど唯今田舎侍が意見の通り場所が悪
 い故ひかへをつたコリヤ是武士のたしなみといふ物
 じや^八ななをまけおしみばつかり磯それはそふと
 言合して置た者共がもうきそふな物じやが八イヤも
 ふ追附でムリ升ふ權をれ迄こふしてもゐられまい磯
 奥へいて一てう入れうか^八それがよふムリ升ふ磯然
 らば兩人^八まあムリませい^ト歌に成り三人奥へ這入るわし
 よりおたつ一寸締越後の著附日傘をさし^ト歌に成り向ふ
 白のじい絆にてひる網の荷をかつき竹の子笠にて出て花道よき處に
 しま^おてもよい所で聞升た事でムんす^市サアわしは
 堺の肴やじやがお前が尋さんす井筒勘はこちの得意

じやゆへ幸ひと今ゆく處案内をして進ませませふ辰私
もこつちの勝手は存じませすその井筒勘といふ茶屋
で待合します人がムリ升て聞ましたがきつい仕合せ
でムリ升た彌祭りなり遷物時分じやと思ふてゐらう
さやしをるなサ、ごんせく
トどふしんせう馬鹿らしいと
跡の歌にて兩人本舞臺へ来る
奥よりお圓 アイくおとみ二階にお手が鳴ぞへ是は
又忙がしい事ではある彌是爰が井筒勘でごんす辰そ
れは大きにおせわになり升た彌お圓様ひる綱を持て
來ましたぞへ圓ヲ、彌市どんか最前から待てゐる所
じやわいの彌そふじや有ふと思ふてえ魚計りもて
き升たモウシ此女中は内方を尋ねて見へたお人じや
ぞへ圓それはマアあなたよふお出被成升たどなた様
でムリ升へ辰イヤ私は下のものでムんすが内方へ下
荷物世話なさんす三ぶ様といふは見へませすかい
なア圓アイ三ぶさんは今のさきお出被成て奥にお出
被成てムリ升辰それはてふど幸ひでムリ升た今お
内へ行ましたが慥に内かたへとの事それで尋ねてさ
んじ升た圓それはマアよふお出被成升たマア奥へお
出被成ませ御案内申升ふか辰イエく構ふて下さり
升な暫く往來を見がてら爰で汗を入れてからさんじ

升ふわいなア圓さやうならマアおたばこなりと
トた
盆持 彌をふ共く爰で見えてゐさんせ追附俄もくるし
晩には所の遷物で賑やかな事でごんす辰そふでムリ
升そふなどふど遷物も見えて歸りたい物でムリ升圓料
理場が待てゐた程に彌市さん荷を見せて下さんせ彌
ハイくお圓さん見なされすんがりとしたいきな代
呂物思ひなしか坂東の女形といふ拵じやなア圓サア
とんと生寫じやわいな彌エ、あんなげんさいを抱て
寝て足も腰も抜てやりたい
トお辰と頼見合せち
やつち若かごん見て
やり鯛や鱧きすごや車るび
ト寶座にまざらず
お圓笑ひながら
圓何いは
んすやら早ふ見せて下んせ彌どりや代呂物をはかし
てこふか
ト歌に成り彌市はかつ手へお圓は奥へ遣入るお辰の
て後よりそつと抱つく琴浦悔りして
琴
エ、是甥負様はムんせぬ事か此二三日はとんと便り
も聞ず戀しい人には合もせす聞もうるさい磯之丞づ
らが身受のさたこりやどふしたらよからふぞいなア
ト此内さが右衛門そろく出て思入有
て後よりそつと抱つく琴浦悔りして
琴ヲ、こは誰様じやぞ
いなア
がさ
誰とはおろか嵯峨じやく
がさ
琴エ、お前は嵯
峨様仇いやらしいはなさんせいなア
がさ
がイヤ放さぬ放
さぬもうこふ後から締附てからは水をかけてもはな
しやせぬ琴浦さきまは胸欲な者じやぞよ乳守にゐる

時分から見ぬ戀にあこがれてをる此嵯峨右衛門聞けば
 靱負とやらは勘當の身の上其様な風來者に心中立
 とは悪い合點又磯之丞とやらを否がるも無理はない
 それよりさりと氣をかへて身どもに抱れて寝る氣
 はないかうんとさへいやは此通りソレ受出す身受の
 金は此財布に小判で百兩何とゑらいかゞ是どふじ
 やト首にかけてある財布なり琴エ、人體らしふもな
 い爰はなさんせ否じやたしてしなつくをふり切がハテびんしやんしても

此大鳥が掴んでははなさぬレエ琴エ、憎てらしいア
 どもじやて撥られた男でもないわさ其上金銀に事
 をかゝぬ身の上じやうんといふて靡きをレだき又
 附 琴エ、めつたな事さしやんすなきたないわいな
 がイヤもふきたなふてもきれいでもかふ成たら差別
 はない否でも應でもちよつとじやト琴浦をこかし
 辰すつと出て嵯峨右衛門を突上へのる所をお
 のけ又くる所なきか手に取るアイタ、ゝ、コリヤどふする
 辰イヤ何ともしませぬちよつとさへ升たので
 んんす琴ヤアお前はつゝに見受ぬ女中様辰イヤ私は
 此内にちよつと待合します人が有て參り升た物でム
 んすトさが右衛門さが手なきすり乍がム、その者が何故身どもを手ごめ

にするのさ辰イヤ手ごめには致しませぬさつきにか
 ら見て居升ればれつきとしたお侍様が姫ごせをとら
 まへて人體らしいよふ出來ますマア爰はなしてやら
 しやんせいなアト又よる所を手をがエ、甘い所へさま
 ぐの者が出來てア、いたい世話なア辰はお前は堺
 の乳守にゐやしやんした琴浦さんかへ琴アイ私は琴
 浦でムんす辰をふして靱負様はかはらず爰へムんす
 かへ琴イ、エ此二三日はお顔を見ませぬゆへ案じて
 居升がよふマアしつてゐやしやんすなア辰しつてゐ
 る筈こちの人に常々聞及でゐるお二人の中わたしは
 靱負様のおせわする一寸徳兵衛といふ物の女房でム
 んすわいなア琴エ、そんならお前がお辰様かへ辰そ
 ふでムんすそんならお前も私が事を琴よふ聞てゐま
 すわいなアト仰山に手が是はしたりな女は女同士とよく
 はなしのあふ物じやなア琴幸ひ三ぶさんもお梶さん
 も奥にゐてムんすぞへ辰サア爰へきてゐやしやん
 すと聞升た故何かの事を嘶したし連合の徳兵衛殿は
 此春から脚氣を患らふて出られませぬゆへ辰が代り
 に登り升たのじやわいなアが夫は遠方の所御苦勞千
 萬にムつたのふ辰エ、此侍は俄追従そふして三ぶ様

やお梶様はどの座敷にゐやしやんすへ琴奥の離れ座敷にでゑんす私が案内しませふわいなアがイエ〜ひどいめにあふた序に身どももどふで奥座敷へ参るついで案内を致そふわへ辰成程そりやおまへ御苦勞でゑんすそんなら琴浦さん何かはのちにホ、私とした事が我内か何その様にがイヤ何の遠慮に及び申さぬ辰どりやお二人にあひませふかつかしかふ案内して連立這入る琴浦あ琴南手の座敷でゑんすぞへそこへ宜しふたのみ升たぞへどれ此内に鞆負様へ上る奴をそふじやト硯をとつて来て文を書にかゝる歌に成り向ふより鞆負著流しや一本さしにてくもかごにのりみだの三、さしの六、くも助にて駕をかき六旦那爰が約束のいづ勘てごんすだ旦那是旦那出てへれむりて鞆ライ〜やれ〜面白い夢を見たわい太儀で有た歸つて休んでくれる六とめて六是々旦那駕ちんを貰ふかい鞆とは何の事じやだ何の事とは爰まで送つて來た駕ちんを下されませ鞆ヲ、金が入用なかけふは持合せがない重ねてやり升ふ六是々貴様たわいもないわろじや駕賃掛にする者が有ふかいだ持合せがないとぬかすなら著てゐる物をひつばげやい鞆こいつ武士にむかつて慮外なやつ身の程をしらぬ者じや六錢も拂はぬ分際で身の程しらぬもすさま

じいだエ、たゝんでしまへ〜ト立かゝる琴浦此中へわけ入り鞆負様か是は又騒しいまあ靜にして下さんせ六みだいやじや〜了簡ならんぞ〜鞆ヲ、琴浦か構やんな狼籍働らくやつ手は見せぬぞト刀をひねく琴浦とめて琴浦はしたりお前は世を忍ぶイヤ忍んでゑんす事じやによつて私次第にしてまあ靜まつて下さんせいなアだ是々女中様此わるはな琴もふ何もいふて下さんすな心にはたるまいけれどト鏡袋よりかれなみヤアこりや一朱が三され琴ちやつといんで下さんせ六忝ふごんす相棒こいるト兩人橋懸りへ這入鞆エ、不屈者めが琴もふよござんすまあちやつと這入らしやんせいなアト二重へつれだ合方お前もマアめつそふなせあの様な短氣を出して下さんすぞいづぞやから浪々の御身の上大せつな刀を詮議して親御様の御勘當ゆるされふとは思はずか立にも居にも案じられ今も今とてみ上ふと書かけて居る所相手といひ所といひひよつともしもの事が有たらどふせふと思はしやんすぞちとたしなましやんせいなア鞆サアそういやると皆おれが悪いもう堪忍したもやト琴浦つんとず是々琴浦わしじやとて何の如才が有ふぞいの此間内は堺の方へ三四日いて

ゐたもその刀の詮議の爲親類の方に居たれどそなたの顔も見たしと戻りかけたがついゑんどさに中の新家から駕に乗て今のしだらもふ大概で堪忍して呉たがよいわいのト琴浦煙草盆をあちらへ持行ゆきへこなし有てこりやおれが誤りよふが氣にいらぬの然らば改て行儀正しふハツゝ琴浦様へ申上る只今のは拙者が重々の不調法兩手を突かふべを大地にすり附て千秋萬歲御堪忍の程偏に希上奉り升るハツゝトむつか琴エ、あほうらしいをかんせいなア靱スリヤ御高免なし下されうか琴あんまりでおかしいわいなアホ、、、靱そんならいよゝゝ堪忍してたもるか琴堪忍して上る程に一寸ムんせト手をとる靱どこへ行のじや琴しれた事奥へいて咄するのじやわいなア靱何の嘶するなら爰でもできる事じやに琴イ、エ外に何じやかじや嘶があるわいなア靱何じやかじや嘶がたまつてあるかそりやこつそりと聞んならん事か嘶ながら庚申の晩の物じやに琴そんな事いはしやんすと又怒るぞへ靱ヲツト夫では降参ゝ琴サムんせいなア靱さらば嘶を承らふかト歌に成り兩人手をとる奥へ這入跡へ磯磯二人のもの今のを見たか之承權と八入ちがふて出てきて權がんばりやんした八そんなら今の二才めが磯戀の

敵の靱負めじや去年の春お鯛茶屋で亂れの傳八にいひ附てきやつが主人より預りの千手院の刀をぬすませ肌身放さず爰に持て居るにまだ浪人してもあの通り手に手を取て圍ひへ入をつたエ、もえるわいゝト足すり八ト叫く磯之丞ヲ、合點じやとうなづき三人奥へこなく權是へ這入踊り地に成彌市ほつと酔にて出て來てふゝゝのめぬゝゝいきついたゝゝ何ののめりや如才が有ふ持てきた肴は皆はけるし程のゝい臺所酒えらふやつたら面白なつてきたぞ是から俄などやらかさト此時奥はたゝと足音する彌市小隠れする奥よにやなるまいト此時奥はたゝと足音する彌市小隠れする奥よをつて出るをお圓げいこ仲こりや狼籍な何とするのじや琴めつたな事さしやんすと聞事じやないぞへ磯身どもが身受する琴浦に忍逢ふ間夫の正體權よふ見附さんした盜ぐらひの見せしめ八此邊を引すり廻つて跡はどんぶりじやト此時彌市ツカゝ皆ア、めつそふもないト此時彌市ツカゝと出てきつととめ彌コリヤ貴様ら此二人をどふするのじや權こな堺の肴屋わいらの出る所じやない八とめ立してけがまくらぬ内ちよこゝと成てをれ彌イヤちよこゝなつてゐまいわへ此お二人は堺に居る時分からの深い中じやそれをわいらの自由に手ごめにはさゝんはヲ、一番堺の魚仲買の彌市様がさゝんのじやト鉢巻しておふこを持てつ

ふいふ 磯エ、めんどうな兩人共構はずと早ふくト市を
はりた 八ヲ、合點じやさあうせふト皆々なさいへし
ふす 權 八ヲ、合點じやさあうせふト皆々なさいへし
びたへ附元服上下大小にて跡より女のり物一挺つらト内橋懸りより傳八出
せ家來大ぜいつれ出る本舞臺の人数もみあふを見て 八家來共そ
りや 家來しづまらふぞト皆々な取ましく磯エ、 三こりやどふ
皆々しづまらふぞ承權八三人仰りして
じや 傳身は音羽浪之進といふ者勢州長野の姫君をお
迎ひの爲おちの人諸共罷り越たぞ 磯エ、勢州長野の
お乳の人とやらが此所へ權姫君の迎ひといふが八そ
の姫はどれにゐるのじや 彌何じや姫の迎ひじや朝
迎ひか暮迎ひかても仰山な迎ひじやなア石小どふぞそ
の生たお姫様とやらが見たふんす女ちやつと見せ
て下さんせいなアト傳八乗物の傍へいて 傳お乳の人のいざ
是へお出まし被成れいト合方に成る乗物の中よりお熊は 御
に出づ 熊浪之進殿そんならあの中が琴浦殿かト耳
い思入にていふ 姫様と申はあなたの事でムり升わいの
傳八そばへいて 熊お驚き被成ふふしぎにムら
ふ 琴エ、合せふしぎなかは 熊お驚き被成ふふしぎにムら
ふイヤモ思ひ懸ない主従の御對面水子の時におわか
れ申た儘親はなけねど子はそだつと申がハテ美しく
ふ御成人被成たのふつて 琴エ、何の事じや
ぞいなア 彌何じやむつかしい事をいふなア 靱そなた
は覺が有かいのう 琴エ 微塵も覺へはムんせぬ 傳成

程お覺ないは御尤あなた様の只今の父御は攝州住吉
安立町三河屋義平次と申つる物の種を商ふ町人でム
らふがな 琴アイそふでムんすわいなア 傳その三河屋
義平次と申はこなたの養父眞實血筋をわけられたは
拙者らが御主人中務の大夫信政様是なる女中はこな
た様にお乳を上たる漣殿でムり升る 琴エ、ト皆々仰り
短冊を 熊證據といふは此短冊いせの海のちひろの底
出して 熊證據といふは此短冊いせの海のちひろの底
にしづむとも 琴なる程「今は名にてふかいやあらま
じと云下の句は私しが守りにト守りより短冊 傳則それ
が殿様の御直筆御妾腹に御誕生の姫君殊なふ寵愛遊
されし所御本妻の妬ふかくいたはしながらをりおの
ゝ松原に此短冊の下の句を後の筐にそへ拾られしを
ひろひ取たは三河屋義平次とやらそのゝち泉州乳守
の里へうき川竹の御奉公ときくとひとしく主君のお
歎き今は本妻そのふの方も過行給へば誰憚からぬ殿
の姫君いそぎ迎ひ奉れと主君の嚴命立越見れば大阪
島の内へ住替とやらに御出と承るより直様當所藏や
しきへ參上致し様子を聞ば柏風呂の琴浦はをりおの
ひめ様と明白に相しれしゆへお乳の人諸共今日のお
迎ひいそぎ國へお歸り有て絶へてひさしき御親子の

對面あられませふ彌そんならあの琴浦さんの親御といふはお大名で有たか、靱ほんにそふとはしらずとも人の行衛と水の流れは機ハテ思寄らぬ事じやなア琴扱はそふいふ事ぢムんしたか私は今まで義平次様をほんの爺様じやとはつかり思ふてしらぬ事として思出しも仕ませなんだ不孝の罪おゆるし被成て下さりませ熊御合點がゆきましたかしらぬ内はせひもなしこふ申出し升からは姫君様に勤奉公はさゝれませぬソレ浪之進殿傳いかにも此家の亭主はをらぬか是へ出ませい圓ハイお圓と申て私でムリ升る傳今聞通り琴浦は此方の主君の姫君なれば片時も勤はさゝれぬ夫ゆへ唯今藏やしき迄伴ひかへるそふ心得よ圓ハイそれはきつい迷惑でムリ升る琴浦様は柏風呂と申て親方もムリ升殊に私の方にお客がムリ升て身受をくゝとおつしやうさへ傳ハテ金子がほしくばい程なりと勢州表へ取に參れ圓でもそんな事が傳詞をかへすと手は見せぬぞ圓是は又迷惑な事では有ぞ傳いざ漣殿姫君様を御同道熊ヲ、宜しいかいざ姫君様にはお立あられ升ふ琴サア夫でもあの私はな熊勤の内言交はし遊ばした殿御が有てか琴アイ國へとは

どふも傳イヤその儀もとくより承知致すいひかはされたる靱負殿諸共國元へ連歸り長野のお跡目をあしいうようには計らひませぬいざ御兩所ともお立あられませふ琴そんなら靱負様も一所に行のかへ靱でも拙者は大切な千手院の刀詮議の傳ハテそれも一まづ歸國の上にて一家中と評定いたし同勢をもつて手分をなし詮議致さばしれぬと申ことはムらぬ熊してゆきへ様とやらには助松の系圖の一巻それに所持してムるかな靱成程勘當受しその折から助松の家の系圖は肌身放さず所持してをります傳系圖は則御所持でムリ升るとト始終耳の遠い心にて大熊ヲ、夫は重疊その一巻さへ御所持なら系圖たゞしい國の守の智君何かの事は歸國のうへ靱さよふならいかよふ共女皆琴浦様もういかんすかへ琴皆様さらばへ熊ソレ浪之進殿傳姫君のお立家來ハア、ト合方に成り琴浦お熊ゆきへ傳ハ家來皆々向ふへ行ふとするよき所にて内より梶お乳母様まつた揚話の琴浦養をどこへ連てゆくじやへ熊ヤアトぎつくりとまる傳梶せりふが残つたお八機之系權ハ氣味合うば様附そひのお侍様もお邪魔じや有ふがまあゝ待て下さんせいなアト向ふへ出る彌市印山に身指して扱こそないといふ熊ユ、是何を猶豫家來共構はずときやゝ

ト向ふへ又 梶それ彌市どん彌ヲ、合點じや是男衆く
行ふとする
あの手合ひひとりも逃すまいぞ 合點じや 幕
明のたいに持下男大ぜいてんでに棒をもち出て傳八お熊を取 傳コ
まくゆへ琴浦は上手へのく家來皆々乗物を置いて逃て這入る
リヤうぬらいひ合して狼籍を働らくなにつくいやつ
まあの女めからうぬを 反打ておかちにかいるおが一寸とめ
る彌市男皆々支へるお熊もたまりかれて
お梶にかいるおかち傳八を投の 梶ヤア おまへは熊ヲ、そな
けてお熊の顔をきつと見合して
たはト雙方が 梶母様熊ア、是トいふてくれなと仕方して隠
ふりほどい 梶サアかゝかゝかたりの様なお乳母様と申
て又投對 梶サアかゝかゝかたりの様なお乳母様と申
にマアくエ、いひたいわいなく いへばいふほど
恥の上塗コリヤお前が言合して琴浦様をはんにむご
い心なサアむごいめにあはぬ内きりくちやつとい
なしやんせいなア トいろく思入有ていふて突はなす 熊ヲ
ヲいに升ふくこんな所にゐるといふたとてゐられ
る物かどりや歸り升うか ト傳八に來いと顔にてして 彌イ
イヤいなさぬくお梶様街のよふな所かいのしれて
ある大盗人藝者衆も男衆もだんないすねも腰もたゝ
ぬ程どやさんせく 男 皆々ぬす人めをどづけく トわや
ふて傳八お熊を取合お熊が 傳コリヤく街とはうぬ誰が
くする傳八立上つて
かたりじやさあ返答ぬかせ トお熊磯之丞と顔 熊ヲ、わ
しもそんな紛はしい者じやない勢州長野のお乳の人

じやぞ磯ヲ、そふじや長野家のお乳の人とあれば鹿
相いふて腹立させては跡がむづかしからふ 八きよろ
きよろした事いはずと誤れく 梶そふじやわいなア
ハテ高が街でも侍なりお乳母様なり誤つたとて恥に
はならぬによつてこりやこつちから誤つていなして
やつたがよいわいな彌エ、何をうろたへていふのじ
やいの何も街めに誤つていなす事はない重ねての見
せしめ腕もすねもぼつきくと折てしまへく 磯ヤ
イヤイ肴やめうぬ一人が街呼はり街といふには 八
何ぞ證據が有ての事か 梶ハテせうこも何にもいらぬ
早ふいなしてやつたがよいわいな彌ハテ妙な事をい
はんすわいのこいつらを捕へて大盗人街じやといふ
からはせうこのない事いふふかいの 三してその證據
を見よふかい 彌ハテせふこといふは琴浦様をいせの
長野のお姫様で本妻の妬から捨たといふが伊勢の國
から捨る所も有ふにわざわざと遠い此住吉の遠里小
野の松原へ捨に來たといふが嘘の正銘 磯漣とやら言
譯があるならちやつと申せく 熊サアそりやアノ何
じやわいなアそれヲそれよ伊勢の國は狼がたあんと
ゐる所で捨子が有が最期くてしまい升わいなそこで

此住吉は狼のない所じやと聞てくはれる氣遣ひのな
 い様にとそれではるゝ爰まで捨にきたのじやが何
 としたへ靱夫に又此靱負と琴浦との中をどふして藏
 屋敷にしつてゐるな傳夫はアノヲ、そふじや評判じ
 や柏風呂の琴浦は助松靱負と深い中じやと今町中で
 専らはやつて評判じやわい彌そればかりじやない伊
 勢の藏屋敷が大阪に有ふ筈もない圓金もなしにお大
 名が奉公人を引上被成れふ筈もなし彌その上おうば
 貴様耳が遠いじやないか熊ヤア彌それにお梶様が呼
 とめた折よふ一番に聞へたなア熊サアそれはな彌そ
 ちらの侍いひわけが有か傳サアそれはな皆サアゝ
 〳〵^{トお熊傳八いきつまる機}ハコリヤ街めもうかう顯れ
 る上からは爰に長居したら身どもが目に物見せる
 ぞ八早ふ逃ていねゝ^{ト二人}あせる彌一體マアおのれはが
 てんのゆかぬ衣裳附どふやら衣裳屋の借物らしい
 皆そふじや〳〵裸にせいゝ^{ト皆々わやゝいふ傳八がた}
 てゐるお熊や熊おのら寄りやがつたら聞事じやないぞ
 ふふなつて衣裳はもとよりあたまた迄借物で此通りじや^{トあたまたの}
 帽せわ選々也彌そりやこそよふゝと化の皮現はしを^{トおのれは}
 皆々見てつた皆てもふといやつらなア皆女ヲ、氣の毒やの彌あ

の顔見やんせ悪い俄なアあれで姫君のお乳母もすさ
 まじい圓もふよいわいな泣かゝつてゐるぞへ彌重て
 の見せしめ川へやれ〳〵^{ト皆々棒にてお熊}熊ア、いた
 いわいな荒らふさんすな姫ごせじやわいの彌うぬ姫
 ごせもすさまじいわ^{ト父なぐりかいる}梶ハテその位
 にしたらもうよいわいなア機それ〳〵おかちが挨拶
 じやけふはもういなしでやれ〳〵ハそふ共ゝエ、
 命冥加な大がたりめ權きり〳〵ちやつとうせをらふ
 ト首筋とらへ兩人共下手彌大盗人めがいろ〳〵のやつ
 へはふる兩人にけてゐるがわいてうせる梶てもまが〳〵しい街事琴浦様を大
 名の姫君じやのと此頼み手も大かたそれとしてあ
 れど心有ていはぬぞへ^{ト機之丞の方を見る}機悪い婆なア
 どふしてをるぞ彌廠餅焚た様に成てをる^{ト傳八お熊片}
 上傳アイタゝゝ、ゑらいめに合しあがつたぞお熊ば
 い心もちはどふじや熊心持はうごろもちじやアイタ
 、、エ、折角味よふやつた物を悪い所にさまゝ
 のやつがをつてかり物のいせふはもとより下帷子
 までちやつちやむちやくに成つたエ、覺てをらふぞ
 トおかちの方を圓ほんにもう油斷も隙もなる事じやな
 い彌お圓様災難逃れた祝ひ事に自立はどふじやな圓

いはひ酒に奥で大立にせふさあ皆様もムんせ 機身共
も奥で酒などのもふ此上の肴には彼が印にご印なア
トお熊に顔でするお熊うなづく
磯之丞ちやつとはたの顔見て それ印は冬瓜ご印は五位の
吸物でのみ直そふなア二人の者 ハ こんりやよふごん
せう 梶サア街の女中もよいかげんにいんだがよから
ふぞへ 熊サアよいわいお歸り被成るにも此乗物がの
こつてけつかる傳八是も借物じや歸さにやなるまい
傳ヲ、そふじや家來のがきらは一番に逆て助つてけ
つかるせうことがない婆主片棒やつてくれ 熊がつて
んじや ト兩人刀
やぼうし 邪魔になる物は中へぶちこめ ト兩人刀
やぼうし
な中に打込みちんば引
年かき上る皆々笑ふて 々あのごま見いハ、ハ、熊笑ひや
がるなおかしふないぞいま ト兩人刀
やぼうし しい何と傳は聞てく
れ延三わざと仕込で來た片市事もてこずつて慶子か
らぬめに淡路をつたとはどうじや傳イヤ甘いわ うま 我
等も一首うかんだ翫十郎よりうむが安いと世にいへ
ど坂東事じやの一蝶やくたい 熊ア、よふ云れた事じ
や ト歌に成り兩人ばやきながら乗物をかきながら
彌サアかたり
やト歌に成り兩人ばやきながら乗物をかきながら
彌サアかたり
めはばいいなしは是からがゑら立のゑら騒しじや 靱
そふとも ト歌に成り兩人ばやきながら乗物をかきながら
彌サアかたり さあおかちも琴浦も奥へおじやらんか
梶ア、イヤお前にはちよつといひたい事もムんす爰

に残つて是琴浦様おまへは奥へいて氣を附さんせぬ
と今の様にめがける物がそこら當にたあんとムんす
故ほんにマア心がらとて淺猿しの ト向ふを見て磯之丞と
女見合せちやつと氣を
へあつさりと騒がしやんせいなア 皆々 さあ ハ ムん
せいなア ト騷歌に成り此一件皆々奥へ這入
報おかちおれに
いはんならんとは何の用じや 梶サアその用といふは
ト一寸心いき有て靱
負の手を取思入有て
らかな合か 今更いふではムり升ねどあなたの親御は泉
州濱田の御家中助松主計様私の爺様團七殿は喧嘩の
上下手人にとられ入牢の時主計様のお情で無難に助
りその御縁につれて私も又お國の殿様へ馳奉公四五
年以前に爺様の御病氣介抱がてら御暇をもらひ今此
様な奉公はしてをり升れど死れた爺様といひ私まで
御恩のある主計様の御子なればと琴浦様のお世話ま
で致し升よふな物それに附ましても去年の春お鯛茶
やで殿様よりお預りの千手院の刀紛失何卒此刀の詮
議をして琴浦様諸共御歸參をさせましたいと爺様の
友達の三ふ様や徳兵衛様とも心を合していろ ハ の
心遣ひをふして何か詮議の手筋でも出來升たかへ靱
サア此三四日方々と心當りの所を尋ねて見たが是ぞ

といふ詮議の筋も梶それごらふじませなあなたより世間の者が鵜の目鷹の目と今の様にかたりもあればとかく御歸參被成る迄は大切なお身隨分共に何事にも心をお附被成ませや靱そりやよふ合點してゐるわいのふエ、是何かに附てこなたのいかい心遣ひ何と禮のいひよふも梶ハテ扱何のお禮に及ぶ事琴浦様をひかし升て早ふ御歸參をさせましたいが私の心樂しみト此内琴浦奥より出てゆきへの顔に紙を丸めてほるゆきへ琴浦仕かたおかちふと琴浦を見る琴浦かくはるゆきへそしらぬ顔で居るおかしなほんにわたしとした事が自身計りこんな事いふて定めてぼつと被成つたじやあろさあちやつと奥へいて琴浦さんと一所にさゝなと上りませいなア靱イヤもふ酒ものみとふはないわいの梶エ、何をしんしやく被成るぞいなア琴浦様も待てゝムんすちやつといて上被成いなア靱行とふもなければどそしたらいても大事ないかいのふ梶ハテそふはちやいなアト靱負いそいで行ふとするおかし一寸たもとをひかへてもし又あんまり逢過てわづらはぬよふに被成ませや靱エ、何をいやるぞいのト歌跡にちつとこなし有て梶堺からのなじみといひおもしろい水の出ばなア、思へばしどのないのも道理でもありそれはそふと三ぶさんとの咄しの事はハテどふ

した物で有ふなアト思案の思入和らかな合方と成る下手より来がやれ〳〵丁稚のよふによく遣はれる事かな女郎を買に来て女郎は抱いでさま〳〵の目にあふ事じやちと爰でのんきをやつてくれうかト平舞臺へ下りて煙草の銚子を取て盃に二三ばいのんで俄に酒に酔ふ梶ヲ、嵯峨様爰たるふりにてひよろ〳〵とし乍そばへよつてにかへ座敷の取持でさ〳〵をしいられきつふ酔ふた程にのてなめいが是々その方は御機嫌でも此方とはんと機嫌にはないでゑすじや買にきた女郎は仲居の貴様が揚詰で手には廻らず長居は恐れどれいんでくれう〳〵と隠してなく嵯峨右衛門うろ〳〵あたりをさがす梶嵯峨様何ぞ見へぬ物がムんすかへがイヤ〳〵見へぬ物はないがハテめんよふなトいひ梶てもマアあちな物をひらふた事じやよい〳〵太左衛門橋へ持いて流してしまおふト右の相口を出す嵯峨右衛門衛なきア是々落し人の在家がしれ申た〳〵梶そりやどこに居られ升るへが少分ながら爰にゐられ升るて梶エ、あなたかへが面目次第もムらぬ梶おまへもマアお侍様が及物を忘れるとはたしなみ被成れがイヤ以後はきつと申附るでムり升ふ此方へ遣はされ梶イエ〳〵上る事はならぬそれ共是がほしくば上もせふが其か

はり私が頼も聞てもらはにやならぬぞへがイヤモ夫
さへこつちへ下されば何事か御用を承るでゐる梶そ
んなら聞て下さんすか嵯峨様わしやおまへにながヤ
ア梶惚升たわいなアト抱つく嵯峨右衛門ちやつと飛ゆくがア、めつそふ
もないおやまこそ買にきたれ仲居と懇ろは致さぬ置
てもらをふ否でゑすわい梶そんならおまへ仲居は嫌
ひかへエ、折角わしが心ざしも水の泡じやなアが
りやもふ女郎にはふられるしせめてこなたがそふ
ふて下されば嘘にでも喜んでほゐるじやて梶そふお
もはしやんすなら琴浦様の事は思ひ切て乗かへる心
はムんせんかいなアがイヤモこんな拍子の悪い
時にはどんな目にあはふやらしれぬ何でもあの琴浦
をしたつてきたも何の役に立ぬ事で有たいんでくれ
うくその腰の物を戻して下され梶サア是がほしく
ば私がいふ事をきかしやんすかがじやて、それでは
法華宗が正信偈を上るよふな物じや梶エ、いろく
の事をいはしやんすそふしてマアおまへの帷子はど
こかもふくろびて裾がばらくしてゐるぞへそん
な形でも門中をあるかしやんすかへがイヤもふ少々
のふくろびぐらい何ともないじやて梶エ、おまへも

マア片意地な一寸一針ぐさく縫て上ふさあちよ
つとぬがしやんせいなアト嵯峨右衛門の帯へ手をかけ
ア、是縫なら此形りでぬふてもらをふぞ峨ヲ、しん
氣お前もそふした形りで縫はれる物かいなアがでも
内證は北國じやて梶ホ、自慢で加賀の下帯かへが其
マア隣の越中じや梶エ、ちやつとぬがんと針で
つくぞへがア、是あぶないく梶エ、卑怯な人さん
ではあるトむりに帯をとる嵯峨右衛門丸襟じゆばん一
けてある此時奥より三ふやばり一腰さしる奥より三ふやばり一腰さし
ツカくと出ておかしを引廻し真中に立三間男見附たそこ
動くな梶ヤアおまへは三ぶさんハア、トうつむくが
神一つにてそろ三是々侍またんせがイヤ私はちよつと
三どこへゆくのかがしゝして參じ升るト三ぶ嵯峨右
つ三此帯は貴様の帯かがハイ左様じやそふにムり升
る三此おかちは仲居奉公はしてゐれど此つち船の
三ぶと云主のある女房無體な不義いひかけてなせ帯
を解たのじやがア、是々龜相いふまい身は否じやと
いふ物をあのお梶がむりむたいに三しらぬこなたが
なせ帯をといたがそりや身共の帷子がふくろびたと
いふて誰がたのみもせぬに三マ、夫ならそれでよい
サアお梶おのれにいふ事があるそこへ直れトおかち覺

こなしにて 梶是こちの人私にも用が有とはあの嵯峨
前へ出て

様の事ならぐすくといひわけはしませんアノわた
しやあのお方に惚ましたくくしてあるアイ惚たによ
つて私の方から仕かけた事じやこふ成たら義理もへ
ちまもムんせぬあのお方にそひとふムんすさあきつ
ぱりと私に暇を下さんせ三へ、たのもしそふに思ふ
たが暇ほしがる根性で様子がしれた暇がほしかやら
うおのりや見事貰ふかよ梶アイわしも今迄は身を堅
ふ持ておまへをのけて外に男狂ひした事もなしア、
さすがは親の子じや親の團七によふ似てかたちは女
子心や所在はとんと男じやありや女團七じやくくと
迄いはれた物じやが是此嵯峨様計には惚ましたはれ
たによつてさあ暇下さんせ三ヲ、ゑらい物じや夫程
ほしかやらうわへ梶さあ下ささんせ三ヲ、こうしてや
らうト刀に手をおけるな梶とめ梶わたしもこふして貰う
わいなア嵯峨右衛門の刀にかけ合す
なごふした事じやト中へわつて道入かコリヤまでく
く待てくれ三ヤア邪魔せまいあぶないく梶お前
に怪我がありや悪いわいなアがイヤくく待て
くれコリヤまた困つた事じや堪忍ならにや跡で切あ

へ今切あふと刀は身共のなりかゝり合で迷惑じや夫
程きりたかせひがない此嵯峨右衛門をきれくく
ト胸をたいて中へ這入かけて胸刺して飛のきよしづの風呂屏風を
とつてきて裸身作わつて入まん中へ常刀をおさへて三人きつと見へ
となまてくく嵯峨がとめた此夫婦喧嘩一番待て
貰はふわい梶お前のしつた事じやないそこ退て下さ
んせ三邪魔しやるのは扱はおかちめがかたもつのじ
やな三サ、そこをのいたくとなるながイヤのかぬ
又かたもつも鼻にもつもまだそこ迄はゆかぬ内じや
が女夫喧嘩から言上つて討はたそふとはア、丁簡が
若いく三ヤア女房めにあゝいはれて丁簡をする物
が有ふか若ふても年よつてもざがわがみや夫を堪忍
するか三ヲ、するともく三千世界に堪忍のならぬ
といふは春寒いと秋ひだるいより外かんにんのなら
ぬ事はない物じや此嵯峨右衛門が是まで見きたつて
きた内ま男のおこないよふに上中下の三段有若いに
よつてしるまいくまづ其内に下の丁簡といふは今
するが下の下の極々下の思案なせといへ男らしふ討
果しても今まで尻に敷れたり鼻毛をよまれた風聴を
世間へパツとちらすこんたんそこで丁簡してだま
つて悪性をさしてをくを粹じやくくと思へ共是もあ

んまり褒られた事でもない是がまあ二番目の中の思案極上々の飛切無類箱入の思案といふは丁簡の胸をさすつて思ふさま扱ひの金をとつてさりと暇をやつてしもふかそふでなくばもとの様に又鯨でくらすが極上々の箱入の思案ナ合點がいたかそこを思ふて喧嘩の挨拶あまり是は珍らしいから少々のかねはおれが出しても貰ひに出た身共にたもくムウ道理じやくが雙方共に得心がいたかいたらさあひきやどふじやぞいのふ三サアそりや丁簡すまい物でもないがお梶わりやマア何ぼだすぞ梶何ほといふてわしや金はふんせぬそれじやによつてこちやひきやせぬ三そんならおれもまあひかぬはが是はしたり少々ならおれが出してやらふといふ事 三少々では丁簡がいかない極上々の箱入ほどとらにや聞ぬ 梶鯨様おまあも挨拶さんすからじや全體何ほ程出す氣じやがまあ三百目のお定りを張こんで五百目出そふか三めつそふもない五百目位ですます物かい 梶イヤコリヤやつぱり出入を片附るがよいわいながア、是々短氣なそんなら飛で五十兩じや三イヤ五十兩でもめつたにやひかぬぞ 梶エ、卑怯な三ぶさんさあ立上つて勝

負くは又情ないおれもとめかけた意地じやとんで百兩じや三何百兩ム、夫だけとりやおかぢひかふか 梶鯨様お前を立て何にもいはぬぞへがてんいたかそれ財布ぐち百兩 三財布をばふる 三金を取たらひかふかい 梶お前からひかひやんせ 三われからひけ 雨さあくく 一時に刀をひく鯨右衛門よがア、嬉しやまあ是は助かつたといふ物 三段々とせわでござしたそれ帶と帷子トはつてやるおかぢ 梶鯨様それお前の刀 とはり出すさ 刀をさやにおさめて 梶鯨様それおさがり乍つまらん物はおれひとりじや女夫喧嘩の挨拶して理屈たらくしやべつた上扱ひ料が百兩長居したらどんなめにおおふもしれぬいんでくれうく何の大阪にゐたとて花實のさく事もあるまい國へいんで噂の顔など見てたのしもふエ、いまくしいとふにいねる物を仇どんくさいふくろびひとつぬふてもらふたが言上り此著物もおれが著るからおれ次第じやもふ誰も點の打手もあるまい此帶もおれが結んで羽織もおれがのじやおれが刀をこふさいてどりやいんでくれうく 梶がいきりへ行にける 三たまにごんしたにさしてもない事 梶よふ御出被成たへ又おちかい

内に^がア、段々御馳走で高いふくろびを縫てもらふ
 たつち船殿とやらさらば^{ト歌になり嵯峨右衛門しかつべら}
 てよき程にか、梶さぶさんまんとお前のおしへの通り
 嵯峨様にとつたその口良道ならぬ事ながらそれで琴
 浦様の身ぬきができ升ふかな三ヲ、出かさんした非
 道のかねも親々が恩義送りいひ合してありもせぬ不
 義間男呼はりおりやちつとも早ふ柏風呂の親方にお
 ふて年季せう文をとつてこふわへ梶ヲ、そふして下
 さんすりや片附仕事でムんす三最前聞たそなたの母
 者の街事といひいかにしても氣ぶさいなもし身受の
 埒が明たら琴浦殿も鞠負殿も當分こちの内へ預か
 つておこふわい梶そりやきつい太儀でムんすなア三
 何のいやい是奥にまだお辰がある何かの事を鞠負殿
 や琴浦にもとつくりとゆふておかんせ梶そりや合點
 でムんすわいかなならず親かたのかけ合をたのみ升
 三ハテ大船ではないつち船にでも乗た様に思ふてゐ
 やんせどりやいてこふわへ^{ト歌に成り三ぶ向ふへ這入る跡}
 有梶三ぶさんをたのんであれば琴浦さんの身ぬきは
 濟むといふ物それに附ても鞠負様を御歸參さすには
 千手院の刀の詮議もし此有家がしれぬ時はゆきへ様

には一生埋れ木ハテ何としたらよからふなア^{ト始終合}
 案のこなし奥と橋懸りより人音するゆへ一寸かた脇へよる^{方にて思}
 奥より磯之丞橋懸りより傳八粹方のなりにて出て顔見合せ^{傳磯}
 之丞さんお熊ばゝといひ合せ折角甘ふやつた物をさ
 へほふさにしられていまゝしい磯夫に附てもお熊
 ばゝに最前いふて置たかのもくろみ何かの手廻しは
 致して置たか傳ヲ、そりや氣遣ひさんすなおれも亂
 れの傳八といふてはちつとゝやつとゝ骨がある是^{トさ、}
 やく^{磯成程そふした上はナコリヤ}^{トまたさいやくお}
 梶おふたり様よい咄ならわたしも相談に乗ふかへ磯
 ヤア、わりや仲居のおかち最前からの嘯を聞たか梶
 アイ聞たでもなし聞ぬでもなし磯うぬ最前の意趣と
 いひ傳八ぬかるな傳がつてんじやお梶めうぬ^{ト兩}
^{り締め}に梶こりやお前がたわたしを何とさしやんす^{方よ}
 のじや磯何ともせぬ身共が戀の邪魔する女め我々が
 しめ上た事傳最前かたりぞこなふた街妻を腕づくで
 貰ふのじや梶ホ、こりや姫ごせをとらへて出入でも
 さんす氣かしたがそんな事はいはぬ物でムんす^{傳磯}
 いはぬ物とは梶サアなア琴浦を心よふ渡そふといふ
 たらよけれども相手にこそよれ九郎兵衛がひとり娘
 の女團七お前がたの手まゝにならふかエ、置しやん

せいなアトト兩人を突はなす 兩人胸のし 磯アイタ、こ

りやうぬ手ひどい目にあはしたぞよ 傳磯さんこりや
何としためらふであらふな 梶ム、最前の街事と欲に

目のない鳴様のかたふど亂れの傳八とやら又磯様は
琴浦の手に入らぬごう腹それで此お梶に仕返しとは

こりや聞へたわいの 磯扱はそつちもがてんがいたか
此方も今の腕まへ合點がいたわいなふ傳八傳ヲ、こ

いつは街妻だてらふじみとやらお熊ばゝに聞いていた
が成程それで鞠負の腰おすのじやな 磯何富士でも劍

菱でも高が女なじや傳だますに手なし 磯おかちめう
ぬをト又兩方よりかゝるを程よくとめて傳八の 梶又しても又

してもせうこりもないおさん達そんなでゆくお梶じ
やない此のち手ざしをさんせぬ様叩いてゝ叩きの

めして骨身にしゆむ様こうゝゝト兩人をむれ打にし
よりお辰出かけ見てゐてツカゝと出 辰おかち様そふは成ま

ておかちの横ざつばはなきつととめて
いわいなト鳴物に成お梶 梶ヲ、おまへはお辰さんト是

ふと起て 磯ア、情ない又一枚ふへて來た傳此上ト人にふ
へてはたまらぬ事じや人ヨヲゝト腰のたいの思入 梶

お辰様何で私を止さんす 辰イヤお梶様イヤ男増りの
女團七様とやらそふお前の手まゝには私も女子なれ

ど一寸徳兵衛が女房此お辰がさすまいわいなア 梶エ

、何といはんす 辰最前から見てゐればお梶様かな
か出入はしつかりとした物じやお前の親御の團七様

又こちの人の爺様徳兵衛殿先の三ぶさん此三人が兄
弟分の盃して心安ふさんしたとの事故久しぶりて今

度の登りに逢ましたが最前も見てゐれば田舎の客を
相手に筋道の立ぬ事をさしやんすが何ぼう人のせわ

をさんしても其様なわけの立ぬ事さんしてはマア此
お辰はよふ見てはゐまいわいなアト横ざつばをふり 梶

お辰様お前はあちな所へ出しやばつておかしいせり
ふをさんすなア 辰アイあちな肩を持ます持たらど

ふさしやんすはお侍様ついに見た事もないお人じや
が此出入は女子でこそあれわしがさばいて上やんせ

うハテ受こんだといふからは一寸も跡へはよらぬと
いふしんにせの家此一寸のお辰が買ふたからは是程

もお前方にゆびでもさゝす事じやない程にまあ落附
てゐやしやんせいなアト磯之丞傳八ぞ 磯是はゝ有難

い思召で此磯之丞を御最負と有て腰を押して下され
ふとはノフ傳八傳さよふゝ有難い思し召夫を聞て

氣が丈夫に成升た一寸様とやら何ぶん宜しふたのみ

升辰さあ女團七のお梶様ちよつと出て貰ひ升ふか梶
 ア、私にか辰アイト梶物ばやしになるちよつと下にゐて
 貰ひませふト兩人下イヤお梶様今迄御互ひに親達は心
 安かつたれど此辰ばかりは懇ろはたちましたそふ思
 ふて下さんせ梶こりや面白い兄弟同前の徳兵衛殿の
 御内儀こりや何ぞ根葉のある事で有ふ氣にいらぬ事
 がありやこわい事は何にもない有體にいやいのう
 辰イヤ根葉も何にも入た事じやない是ト懷より縮緬の
襦袢の片そでを
取出是此片袖は前方親々達が互ひに取かはしたかた
 めの袖今度の登りにも持てゆけてゝ連合が渡さんし
 たがあんまりそつちが袖ない故こふ引やぶつてしま
 へばもとの白地ト片袖を
引さく梶そふいはんすりやこつ
 ちにもト懷よりおなじ袖を出
してすん／＼に引さき片腕がはりに思ふた袖も
 こふ引やぶれば義理もなし身仕舞部屋の雑巾になと
 してしまおふ是も何の詮ない事で有たト兩人袖を
後へすてい辰さ
 あかうかためを破つて仕もふたからはお前の立引は
 おかしふない此お衆達の腰は身不肖ながら此お辰が
 もつ程にそふ思ふて下さんせ梶ヲ、おもしろのお前
 があの衆の腰おしやるなら不肖乍相手に成つて上も
 せふがどふして又腰をおさんす辰アイ改てお前に貰

ひたい物がある下んすまいか梶そりやならぬゆふた
 とてむだな事おかしやんせ辰わけも聞ずとやる事は
 ならぬとは梶琴浦様の事なら聞た所がいきぬ事じや
 辰そふてつゝらと出やしやんすりやいつそ手短に腕
 づくでトお梶の腰をとらへ
るおかし思ひ入有て梶こりやこふ有そふな事出
 入に花が咲て來たが此お梶には骨がふんす然も爺様
 は堺の肴屋鳴戸を越た生魚を見事料理にかゝらんす
 か辰おもしろい其生魚を生取に此辰がして見せう梶
 そりや又どふして辰ちよつとこふしてト兩人一寸
立廻つて梶そ
 んな事ではゆかぬわいなア辰そふすりやかう梶所を
 かうト祇園ばやしに成り兩人わかれてき
つとなる彌市奥より出て是を見て彌
 ヨウ／＼お梶様と最前の姫とが立引かこいつは
 ゑらい事が始まつたぞト仰山に身ごしらへしておかぢを
てあほぐ此内靜なる
兩人立廻り有べし磯何と傳八よい出合ではないか傳そ
 ふでござんす御苦勞／＼彌何じやわいらそつち味方か
 こつちにも彌市がひかへるぞ丈夫に思はんせ／＼
 磯どふか一寸は坂東といふ俤じや彌そつちが坂東な
 りやこつちは富士郎に似てゐるわい傳イヨ中ばし中
 ばし彌やれ難波／＼トやかましういふてあふきなる此
内立廻り有てお辰あやふく立る辰是
 々お侍その腰の物を早ふ／＼磯オツと合點じや傳エ

エ早ふやらんせト腰差をぬいてわたす直にお梶に切て梶ヲヲ
そんななまくらで此おかち計りはめつたには切られ
まい 彌ヲ、そうじやこつちはふじ身で及物は立ぬは
辰所をわしが切て見せうト又切てかいるおかちお辰の刀を叩き落すお辰リ、とひるも傳八い
らつ 傳磯様早ふ刀を渡したト磯ヲ、いるなら是を
刀を出しかけち どのこい是は出せぬト傳エ、そりや
なせト磯はサアかの千手院トいはふとして口をおさへる此内お辰あやうくな
り 辰是々早ふ刀をトお辰手 傳ア、情ないそふいふ内
も危いト何でもかでも構はぬト磯じやといふて
是を出しては傳エ、マア早ふ出さんせいの 彌そりや
まけをつたぞト是にて傳八むりに刀を引たくりお辰にわ
てきつと受とめ兩 辰切先から鏑もとまでくもらすきたふ
人よくト見て 此刀 辰千手院の刀に違ひは有まいがな 梶焼刃の中
に千の一字是に違ひはないわいなア 辰お梶様何と趣
向はどんな物じやへ 梶お辰様段々御苦勞でムんした
ト是にて刀を鞘へ納る磯 磯ア、コリヤトお辰とやら傳
之丞傳八きよろトして ころや全體どふしたのじや 彌貴様らが最前いひ合し
てをつたをお辰様がきかんしていひ合の立引じやわ
やい 梶それとしらすアノマアあほらしい顔見やし
やんせお辰様辰それトわしが腰を持てやらふとい

ふたりやほんまに受てもよいあほうな 梶ゆきへ様
に戀の意趣で去年の春お鯛茶やの奥座敷へ忍びこみ
此千手院の刀を盗んだ折跡に残つた證據の片袖辰夫
徳兵衛殿が預かられけふが日まで尋ねもとめた盜賊
はそなたら二人で有ふがの 磯ヨ、ト、そんなら今引
破つた片袖はト傳八も袖を傳ほんにこりや是磯様お前
とわしが此袖を彌そふ共しらすにうつそりめ 磯エ、
いまトしいそふあらはれたら破れかぶれ傳おいら
二人が死物狂ひじやないそふいふてト傳逃た物じやト
へ逃て這入ト彌ア、きついがきじやとふト逃てしま
ひをつたぞや 梶ハテ大事な琴浦様の身受は大方出
來るし千手院の刀の手に入たれば辰是で靱負様の御
歸參も叶ふといふ物さりながら氣の毒なはさつきの
侍 梶非道として三ぶ様といひ合し心に思はぬ筒も
たせト橋懸りよりさが右衛門著流しトが金街られた正體は
爰にゐるて 梶ヤアお前はさつきのト田舎侍大鳥嵯峨
右衛門以前は助松主計様の若黨曾平太お供先の喧嘩
より不興を蒙る此身の誤り夫といはずと街られた金
は御恩の百分一辰そんならおまへも得心で 梶ハテ思
ひ合た中じやなアトゆきへ琴浦奥 琴何かの様子は皆あ
より連立出て

れから聞ましてムんす。観お辰殿といひ皆の衆の志嬉しふ。ムるぞや。トお梶右の刀を、梶是こそ御歸參の種の千手院の刀しつかりとお持被成れませ辰時にお梶様わたりしもふ宿へかに升ふわいなア梶ハテマアよござんす追附蓬物も出る時刻まあ見てからいなしやんせいなア辰イユ。まだ大阪の勝手もしらず宿へいぬるに迷ひ升たら悪いわいなア梶成程そんなら彌市どんお前は御苦勞ながら琴浦さん連まして三ぶさんの所まで送つて上て下さんせ。彌ヲツと合點じやのみこんだ。琴そんならわたりしや三ぶさん所迄ゆくのかへ。観おかちわしも一所に行ふかいのふ梶イユ。お前は大事の刀といひ系圖の一卷をもつてムんす。ゆへ跡で三ぶさんがムんしたら一所に向ふへ送つてもらふわいなア。がヲ、サ勝て兜の緒をしめると跡の用心が第一。身どもも道迄連立て歸りませふか。観そんなら跡から三ぶ殿と連立てヲ、合點じや。彌サア。同勢がふへたので氣が慥なぞ辰そんならお梶様又明日琴觀負様を早ふおこしましてや。梶ハテやんがて跡からやるわいなア。が然ばお辰殿辰さあムんせいなア。ト歌に成り琴浦お辰さが右衛門彌市は向ふへ這入るおかち觀負は奥へ這入る橋懸りバタ。にて三ぶ大はだわきこつばの

權なまの八いつもの一寸と關七が心にて兩方よりあふぎながらわいの。權まあ。戻れやい。さあムれ。トすりの鳴物で出る三ぶ二人。三ヤイ馬鹿者めら誰とも喧嘩もせぬに人の顔見てまあ。よい戻れ。とは何をぬかすのじやぞい。八さいのういづもこんな所はよい役者のする所。權こんどは一番氣をかへておいら二人がやつて見たのじや。兩人何とゑらからふがな。三エ、何をぬかす事やら柏風呂から出た所をそふいふ事ぬかして附てうせたはこりやうぬら磯之丞めにたのまれたのじやな。權そふいや今さら隠すにや及ばぬ。入我が懷の琴浦が身受せう文。人それをこつちへもらおふかい。三へゝ名のりかけたばつたりめつち船の三ぶはそんなじやいかぬは何をちよこ才な。トかいるを取て投て又。三おかぢはいぬかさあ。埒が明たぞや。ト奥よりおかちにて出。梶ヲ、三ぶさんか御苦勞でムんしたな。ア是お辰様といひ合して千手院の刀も手に入たわいなア。三何じや刀も手に入たか。そいつはゑらいじや。そふしてお辰どんや琴浦どんは梶琴浦様はいかにしても氣にかゝるゆへ今彌市どんを頼んでお前の所まで送らしたわいなア。三ヲ、出來た。夫でマア親達

送らにやならんといふた思も報ふたといふ物じやして
鞆負殿は梶お前が戻らしやんす迄奥座敷に待して
置升た三連立ていぬるに幸ひじや梶モウシゝ鞆負
様ゝト呼ぶ時奥よりお圓是々お梶磯之丞や傳八とや
らがひ合して最前の街の婆々と一所に鞆負様を駕
籠にのせて裏道から逃ていたぞや三ヤアゝゝゝそ
んなら又侍めと梶母様があの鞆負様をエゝゝゝ
三あわてゝゐる所じやないぼつ附にや成るまい梶そ
ふしてそりやどゝどつちへいたへ圓慥出合ふ所は長
町裏じやといふたわいのふ梶何長町裏ト權と八起上つ
にかゝる立廻り乍三ぶ三お梶うろたへずと追駈い梶がつ
てんでゝんすト刀ををさいて三早ふゆきや梶そふじや
トだんじり太鼓に成りおかちりしく向へ走り梶入る權と三う
八そふと遊ふとするな三ぶ引もどして尻なうんとからけ
ぬら是从から案内さらせト兩人の手をお内儀やかましふ
ごんしよ圓早ふゝんせ三こあきりゝゝうがせやれト上
ながら立上る此見へだん幕ト直に祭り太鼓のつなぎにて此道中の
じり太鼓にてよろしく具筋り附次第引かへにして幕明る
巻長町裏は今少し長ければ下の巻に出すいかなる仕
組になるか讀て知るべし

西澤脚色餘錄三編上の巻終

西澤文庫脚色餘錄三編中の卷

目次

- 一 近松歌舞妓作者番附
- 一 太平記さいれ石の役割
- 一 坂田藤十郎名譽の話
- 一 芳澤あやめ總藝頭の話
- 一 澤村宗十郎作をせし話
- 一 中村富十郎所作事の話
- 一 姉川新四郎名言の話
- 一 中村仲藏定九郎をせし話
- 一 加賀屋歌七思入の話
- 一 岩井半四郎改名の話
- 一 瀬川仙女名前辭退の話
- 一 市川白猿すさみ草の話
- 一 さいれ石三番續の筋書仁義講
- 一 同 畫面の寫

西澤
文庫 脚色餘錄三編中の卷

西澤綺語堂李叟著

近松歌舞妓作者番附

佛の原の古番附は延寶年間都萬太夫の芝居にて近松門左衛門未歌舞妓作者の名前おかしければ爰に出す



傾城佛之原

都萬太夫



坂田藤十郎

ワキ御田はうち子のかぐら歌

立役 いわ井半三郎 いわ本太十郎

同 玉川げん三郎 ゑぐち甚五郎

同外山庄五郎つゝゐてんろくとみの山十郎兵衛

二ばんめ女ぼうは家のきつね 福

若女方 竹村萬のせう 立役 三松彌三右衛門

若女方 玉川吉のせう 同 さゝゐでん十郎

立役 若 九郎 同半道 上村つね右衛門

同 なには里右衛門 くはしや つま木とらの助

ゑちせんのかに梅長文藏二重の戀衣
けいせい佛の原三番續

第一月の前のあだし女
げつさうじくつはきの如來みやこいり

附り三國の奥州はねびきの松太夫のなごり
并に二千石のねんぐ米此よね物成よし

第二窓の前のこも尺八

附りしもく町の今川は子持梅きのすいな女郎
并に十年のねんき手形此判すみいろよし

第三寺の前のかれうびん

附り東山のふもととは九重櫻にぎやかな幕毛

氈井に當春のかいてやう此佛御利生よし

梅ながきやうふ 宮ざきこみ九郎

總領梅長文ざう 坂田藤十郎

二なん梅長帶刀 三かさじやう右衛門

からう望月八郎左衛門 しばざき林左衛門

いもと松ざき 玉村ゑもん

若殿ふち松 しばざきかん太郎

小せうさくら谷げんの助 花ざき大十郎

同かつうら友彌 村上しまのせう

侍みわ長七 山本みつ右衛門

同手作長八 はぎの松右衛門

立花主計娘竹ひめ 上村吉三郎

からう藤脇げんば み澤き八郎

子藤脇つりく 村上竹之丞

身うけのけいせいおほしう いわ井左源太

こしもと小はる さかた六三郎

同小なつ 山下かめの丞

同小ぎく

つぽ ね脱下附 三國の女郎や玉や新兵衛

けいせい今川

かぶろ大吉

やりてかめ

けいせい小さつま

かぶろきんご

やりてまん

けいせいわかむらさき

かぶろもん彌

けいせい高はし

かぶろ君の

あげや柏やさ衛門

たいこ京の左七

文三下人あほう三五郎

こもそう風山

月そう寺ほういん

いぬい助太夫

狂言作者

正月二十四日なかはり申候
いづみや又兵衛

竹村萬のせう
いと庄太夫

若林四郎右衛門

きり波千じゆ

山下小才三

松本六右衛門

そでしまげんじ

きりなみつねよ

つま木とらの助

きりなみ花づま

はや川さの助

玉川しゆせん

山下かるも

天井又右衛門

たじま半兵衛

かねこ吉左衛門

村上せん左衛門

さか田藤九郎

ふち川ぶ左衛門

近松門左衛門

太平記さゝれ石の役割

太平記さゝれ石

并に鹽谷判官は二世を契りて三世の曉
附り高の師直は戀慕のやみの暗のふしど

并に主従の淺き袴きて見る夫婦が姿

上 仁義講

附りかいみにうつしてをいたみことば
并に親と子のさまへ別れてよる朋友の情

中 禮智講

附り書のこして置た高名日記
并に軍勢一よう出立下知に隨ふ兵者

下 武勇講

附りそこでした合圖の武道具四十八色

役人かへ名の次第

るんや判官高貞 片岡仁左衛門

いひな附の娘いづものまへ 山下かるも

ふ じ が え よし澤大じう

み さ ご おのへうこん

ち さ と 山下あさの丞

はぎのじじう くま本伊左衛門

かうのもろのふ あさだ善右衛門

同子もろやす とみ山兵右衛門

木ざわ元すけ 中村みねの助

わたりしん左衛門 山田ちん八

小ばた六郎左衛門 みや木新十郎

はなむら友彌 おぐら七三郎

かまだ惣右衛門 さわ村長十郎

女房 おすが 山下かめの丞

子たけの助 杉本新太郎

さゝをかとうない みうら儀左衛門

女房 おさく 山下宇源太

玉 ゆり 花澤かめ十郎

おみき よしぎは玉ぎく

おしほ 中むら萬三郎

ほり内彌次兵衛 大はじぶ右衛門

かちのは右衛門 吉岡もとめ

須山げんじ さは村おと右衛門

とくらや九の八 みくにかん九郎

女房 おまき あらし竹十郎

お く め
お し ま
お く の
お い わ
お か や
お せ ん
お は や
り う や う お し や う
く ない 女 ぼ う お た つ
子 り き 太 郎
ゑ ん や は ん ぐ は ん か ら う
大 ぎ し く ない

あらし八ちよ
山下さわの丞
とみなが若竹
よし澤千菊
きく川京之助
中村さの十郎
花井吉三郎
あさだ藤七
水木菊之丞
山下小才三
山下京右衛門

太平記さいれ石享保年間忠臣藏の舊狂言なれば筋書を奥に出す

坂田藤十郎名譽の話

延寶の比歌舞妓役者に名高き坂田藤十郎が傾城買の役に妙を得たる事は耳麁集道外形の名人金佐渡島日記佐渡島長五郎撰歌舞妓事始等に出たり元祖市川團十郎坂田藤十郎が藝を見んと態々上京せられけるに折節坂田

氏病氣にて舞臺へ出ず市川氏殘念の事に思ひしに藤十郎使を以て云るには適々御登りの事に候へばせめて東山邊にて兎酒進じたき山中送る團十郎辭退なく行けるに藤十郎座敷へ出ず市川氏少し腹立しける體見へし時向ふの座敷へぞろりとした姿にて立出生花などして又這入ければ市川いよく不興にて既に歸らんすせし處へ坂田氏人を以て云るは嘸御退屈に候はん唯今御目に懸らんとて長髪の體を改め威儀を正し立出對面しける其行粧さすがの市川氏狂言を見るに及ばずとて其翌日江戸へ下りける扱江戸にて云るは藤十郎存生の内は京へ役者上すまじと云りしと也

芳澤あやめ總藝頭の話

元祖芳澤あやめは三箇の津若女形總藝頭にて立役坂田藤十郎に并ぶべき名人也或時山椒太夫の狂言に總領娘あほうの役を勤ける此役は嘸やおかしき姿をするやらんと思ひ侍るに常體の拵にて然も美しき打扮也人々心得ずして是を見るに舞臺へ出るやいなや見物臍をかへて一笑す何事をするやらんと樂屋よりも各々出て見るにいかにも鈍にしておかしき也淺尾十次郎といへる若女形阿房の役せし時はゆきたけ短

く鐵炮袖の如くに拵へ其身をいかにもあほうらし、作り出たれ共さのみおかしくも思はざるにあやめは身の拵へ美しく舞臺の業自然と愚也あまりふしぎさに或人あやめに問はれければ答て曰山椒太夫は其所の分限者也娘も随分きれいに育つべし元來召遣ひも附置べし阿房に見するは心にありといへるよし名人の心得は又格別也と人々感じける淺尾氏も其比の上手名人なれどもあやめには劣たると知るべし

澤村宗十郎作をせし話

元祖澤村宗十郎後長十郎又助高屋高野常々語りしは作者より新狂言相談ある時は我役割にのみかゝはらず狂言の一體の筋合序より切迄の納り趣向を篤と聞辨へ當時の流行役者最負の多き日の出の役者に能似合しき役が附世間の請取も然るべしとおもふ狂言なれば我役廻りは心に落ずたとへ不足なる役にても役不足をせず兎角見物の受さへよさそふなる狂言なれば夫にしくはなしと思ひ我役に拘はらず狂言を納ると也此訥子は一體風雅人にて俳諧茶の湯を好み文才有て狂言の作をよくしそれ故狂言の筋合に誤り有時は作者へ心附直させ亦中より以下の役者迄も其人相應に役を附る

るやうに心附け故下手な役者も自然と引立て悦びしと也既に寶曆五亥年江戸森田座にて座頭勤し節作者の方へも助高屋高助と立作りに名前を出せしと也

中村富十郎所作事の話

元祖中村富十郎寶曆三酉年春江戸中村座にて始て京鹿の子娘道成寺の所作大當りせり或人慶子に問ふ此度の所作大當りにて申分はなく候へ共手鞠歌并花踊の所戀の手習の手踊などは今少しむつかしき振にても有べきに餘り込入候所も見へずと尋ねければ慶子答て身不肖の私なれど成程今少し込入候振の工夫も有べく候へ共私が自由にむつかしき振致し候へば夫切に相成り大切の道成寺の所作以後に仕手なく廢り申べくと存右體の振附置候時末々迄も誰々も致しよく廢り申まじく存て也と答へし由今に至り子供迄此所作の學びをするは又格別の工夫也と感じけると也

姉川新四郎名言の語

頭巾に迄名を遺したる故姉川新四郎の曰江戸の氣持は二十計也大阪は三十計也京は四十以上の氣性也と語りけると也是いかなる義と尋ねければ江戸は二十計の氣なればこそ物だめもしくは受合活氣にして締

らぬ様に見ゆるさるによつてくはつと白眼で見へで
とる大阪は三十計の氣持にして少し分別して理非を
正し男を立る氣前也京は四十を越たる氣にしてよく
物にたづさはり始終を辨へ物をなす氣持也此心なく
ては三箇の津藝は仕分がたし然るに近年京は物とら
かなる土地にて歌道などを好むべきにあら事をすき
馬士歌を興にして女形の紅の湯具あらはに出る事を
好むは全歌舞妓役者藝の仕打興になる事のみにかゝ
はるゆへおのづと見る人其心になるといへりされば
こそ敵役が女形の弟子と成り女形より敵役の弟子に
成るやうには成たり慎むべき事也

中村仲藏定九郎をせし話

故山中平九郎鬼女の役を取り樂屋にて稽古をし私宅
へ歸り二階へ上り鏡臺に向ひ紅にて顔を隈どり手を
鳴らしければ妻女何心なく二階へあがりしに平九郎
が顔を見てアツといふて氣を取失なひ下へ落たり人
々あはて介抱し漸正氣に成あら恐しやといふ其時平
九郎手を打てたりくと悦び畫たる鬼女は見ると
いへ共正體をしらず今我顔の隈どりを見せたるに氣
を失ふ程の形に見ゆれば此度の役は仕當しといひし

が果して其狂言大入せしとは誰もよくしる昔噺也初
代中村仲藏は寶曆の頃稻荷町より段々出世して大立
ものとなり明和三戌年秋市村座忠臣藏に定九郎役の
時王子の稻荷へ參詣して何卒此度の役評判好やうに
と祈念して歸り道日暮方道灌山の下通り稻荷の森に
差懸りける時向ふよりくる侍一人浪人者にても有し
や古き黒小袖所々ほころび切綿のみへるを著し月代
は山の如くはへ丈高く何さま其體怪く見へ若や追剗
なぞにてはなきやとゾツとしてこはく摺違ひ通り
しに何事もなく行過て是より思ひつき定九郎を其形
りに拵らへ當時の人氣に叶ひ大評判に預りしは實に
王子稻荷加護なりとて咄せしを西川純道作者語れると
ぞ定九郎の拵は大縞の木綿廣袖に丸紵帶麻苧の山岡
頭巾に脚絆草鞋にて仕來り故團藏の錦畫子珍藏せり
今は誰も黒小袖に傘となりしは此時より始る是仲藏
が出世狂言也とぞ

加賀屋歌七思入の話

初代中村歌右衛門梅玉の父加賀屋歌七は何役にても其役になり
おゝせる事を第一に心懸ると也たとへば清盛ならば
清盛袴垂の保輔なれば保輔と其人柄と心持を考へて

その人に成たる心にて扱狂言の仕打に懸りては十の物を七つ八つ迄も心の中臍の下に落つけ誠にやかに仕打をして十が二つ三つを客にて見へよき様華々しき狂言にする也實を七つ八つ華を二つ三つとする也元の狂言の事故華はおのづからと有やすき物ゆへ實をおもにする也獨りしてする舞臺は猶々實をおもに心の中にて仕打をするを專一と心懸る也と云明和六丑春江戸中村座にて清玄の時色衣を著柄香爐を持出たる時自然と尊き大和尚と見へ墮落の時櫻のちるを見て生死無常を思ふ場獨舞臺古今大出來見物感到絶今に言ひ出す事とはなりぬとぞ

岩井半四郎改名の話

元祖岩井半四郎より四代目半四郎迄は立役也五代目半四郎近頃歿したる杜若の父なり幼名松本長松又七藏と成り明和二酉年四代目市川團十郎より木場半四郎と云名を讓る時半四郎云けるは實に名高き名にして有難き事いはん方なしされど女形の名に半四郎とはいかめしき様なれど傾城に半太夫と言名もあれば是より末世に至るまで半四郎と云名は女形の名に限るよふに心がけ女に生れてはいか様に男になりたきとて男にならるゝ

ものにあらねばたとへ何様なる事有とても元服して立役にはなるまじく半四郎の名も半太夫と同じやうに申ならはすべしと言ひしとかやさればこそ半四郎といへば女形の名になりすませり六代目は条三郎より半四郎と改杜若となりて忤条三郎に七代目を繼せ弟松之助紫若より八代目となり兄弟とも若死したれど紫若忤条三郎をれば今に九代目岩井半四郎の名前を相續すべし

瀬川仙女名前辭退の話

三代目瀬川菊之丞後改風仙女末市山富三郎と云し比風雛助後改風段々肥滿して品形何如故立役に成存寄り也夫に附雛助の名前を遣はすべきやと有しに富三郎云不束なる私へ御名を譲り下さるべきとの思召は忝存候へど一生女形を致す心ゆへ女形の名なれば御貰ひ可申候へ共女形を止て立役にならんと御名は好しからず御免あれかしと申ければ雛助さして立腹もなくいまだ年も行ざるに大丈夫の心根其思入にては今に大立者に成べしといはれし此時富三郎年若といひながら跡で思へばさりととはぶしつけ成事言ひしに立腹もなく却て褒られ痛入て氣の毒にありしと也是を思

ふに仙女三箇津の稀者に成べきさざし若年より顯れしと見へ雛助も又玉と稱せらるゝ程の者なれば腹立なく却て雜言を尤なる事と賞美せしは奥ゆかしき事とやいはん

市川白猿すさみ草の話

五代目市川潮十郎

反古庵
白猿

は向ふ島の隠居にて日々の

樂は草を取て反古の裏に書つゝり氣のあふたる風雅の友へ是を與ふ其中にすさみ草と名附し書有此中より或人來つて云こなたには舞臺の藝を大まかに被成るゝゆへ大まかなる事で團十郎藝者と申がちとこなたをなされ細かい事も工夫してごらうせぬかと言れし時予答へて云我等下根多病にして心を勞する事一向ならざる故若き比よりこなたを捨ていたさずさり乍壯年のみぎりより唯一つ工夫する事有平の清盛になり日を招き返す狂言をせば此せりふ如何言ふべきやと此事計り考をれ共五十一年が間此工夫ひらけず候先日輪暫らく止り給へといはゞ慇懃に成て清盛が弱く成るべし日輪しばらくとゞまれといはゞ存在過て人柄悪かるべし今に開けず是より外に魂膽工夫したる事なしむつかしき所は路考、杜若、新升、錦升

などに談合して教へて貰へば事は足る故當年五十才迄こなたんは致さぬと言ひ聞せければ或人大笑して歸りける此話は東の花勝見といふ小冊

永下堂波靜撰
立川淡州樓序歌

舞妓事始の中よりおかしと思ふて拾ふて出せり

さゝれ石三番續の筋書

上仁義講尊氏將軍は天下泰平民安全の爲七堂伽藍御建立ある既に石突始りぬいとなく如才はござらぬ木やり歌賑々しくみへにける時の執權高の師直同じく子息師安親子此所を守りゐるかゝる所へ鹽谷判官言號の姫出雲の前萩の侍従を伴ひ姥あまためしつれ普請見物に行たまふ道すがら侍従いふやふ御姫様には道をいかふ御急ぎなされまます靜に御ひろひなされませム、がてんいたしました此たびの御ふしんの役をお前の言號の殿御椿判官様の承りて御普請場へ御出被成てござりまするゆへお逢被成ましたと思召でおいそぎ被成ますの戀しゆかしに思召は御尤でござりますといへば姥共いろゝの惡口をいふ出雲のまへのたまふはいそぐ共思はぬが早いかいやる通り判官様とおれが事は夫婦の言號ばかりでついにしみるゝとした事もないけふは普請の所へ行判官様におめに

かゝつて早ふ祝言をして下さんせといはうと思ふが判官様のおめにかゝつたら恥かしふて物がいはれまいと戯れ事いひ侍従諸共普請ばへ行給ふ師安侍従を見ておのれは侍従かハア是は師直師安様でござりますかヤ侍従おのれはにくいやつじやぶたんにしてもあきたらぬ侍共侍従に繩をかけいといへば出雲の前おしとの侍従はわしがけふ頼みます事が有て連て参りましたまづ此度は了簡して堪忍してやつて下さんせ師直様どふぞ了簡してやつて下さんせと詫れば師直聞て是師安此度は了簡してやりやといへば師安おまへの御意なればしよふ事もござりませぬこりや侍従おのれ日比頼んだ事埒明るか侍従その儀はよふお受合は申ますまいといへば師安猶々きしよくする出雲のまへわしが成程埒明さししよまづ此場は免してやつて下さんせ侍従はおひめ様おまへのお心一つで只今私が難をのがれますが師安様のわしを御頼被成た事埒あけましよと受合ましよか出雲のまへ何の事やらしらね共受あやさやうござりましよならさきはわし次第に被成ませといふてモウシ師安様何をかくししよ此中のみは一つも届けませぬ師直聞

て何事をいふやらひとつもがてんがゆかぬといへば侍従師直が耳の傍へ口をよせ呶きければ師直聞て打笑ひ扱は忤師安があぬ姫を戀にしてそなたを頼むとやよいやうに仲入して姫にしてくれ侍従はお姫様お前が御がつてん被成ませぬとわしはいかやうなうきめにあひましやうやらしれませぬに御がつてんなされましてよろこびますといへば出雲の前師安にのたまふはわしを夫程に思はんすか御へんじを申しよわしが心は小夜衣でござんすとのたまへば師安忝ないさあすんだと悦ぶを親師直見て何と埒があいたかなるほど埒があきました只今の返事にわしは小夜衣でござんすと申されますとよろこびける師直聞て共小夜衣といふ心は何と合點しやつたハテ小夜衣と申ます心は結構な夜著蒲團のうへで寝よと申事でござりますイヤ／＼そふではないそなたの學問がたらぬゆへがつてんが悪い小夜衣といふ心は「さなぎだにおもきがうへのさよ衣我夫ならぬつまなかさねそ」といふ歌の心では是は埒のあかぬ返事じやと言聞すれば師安あきれ氣をせく侍従思案をめぐらし師安に呶きいひけるは姫君此所よりお歸の折おむか

ひのにせ乗物を拵らへ乗物にめさせ奪はんといひければ是尤とうなづきあふ侍従モウシ／＼出雲のまへ様と言號の鹽谷判官様が是れへござりますといふて奥へ這入る判官はさもきらびやかに出たち此所に參り給ひ師直師安に對面し此度尊氏公七堂伽藍に附私御役目に仰せ附られ書附目錄の通り用意いたしましてござりますと互ひに一禮の挨拶ある侍従みもちいで急用ありいそぎ持行きたまへと下部にわたして屋敷へやり奥へいる師直師安判官にむかひ我らは御前へまいるこなたは是れにござれと親子とも奥へ入判官侍共にむかひ書附の通り用意致しをけといひ附給ふ侍共畏り皆々奥にいる判官ひとり居給ふ所へから乗物を昇ぎこむ判官とがめて此大事の御ふしんばへ乗物をかきこむは何ものじやととがめられ乗物昇其鹽谷判官とは夢にもしらす師直と思ひお前は師直様でござりますか内々おつしやりました鹽谷判官様のいひ號のお姫様此所へ御普請見物に御出被成てござるお歸り被成る折お迎ひの乗物じやといつはり此のり物にのせましようばふて參りますといへば判官ぎよつとしがてんゆかねばしばらく思案し打うなづ

きすいどり故と師直になりでかした／＼しおふせたら褒美をとらしよまづ片脇へのいてゐよと忍ばせをき師直を打はたさん氣色して内へかけいらんとし給ふが又思案して思案してまづ様子を見といけんとかの迎ひに持來る乗物の内へ這入りかくれる給ふ出雲の前師安連立出の給ふは最前申しました通りお返事は小夜衣でござんすもはや歸りますといふて乗物の戸をあけのらんとする時判官乗物の内より出給へば出雲の前悦び給ふを師直に引あはせんといふて師直が前へつれ立是れ出雲の前あれにござるは尊氏公の御執權高の師直様といふて仁義だかいおかたで人の女房などに心をかけさしやる事ではない扱て何れも様へ申ます此出雲の前はわたくしが女房でござります見しらしやつてをいて下されませとあて事いひ扱侍従を引出し此者は私所へ日比出入をいたす心立やさしい者でござる是もお見しり置て下されませといひしなさん／＼にうちたゝきあの者を此様に打擲するは物がたりがござると様子を語らんとする所へ木澤源助出判官殿上よりの御上意がござります此たび伽藍御建立被成るゝは民安全の爲なれば參詣の老若男

女に酒さかな赤飯をお出し被成との御上意でござる
判官慎んで承る其儀は仰渡されの書附の目録にござ
りませぬによつて用意いたしませなんだでござりま
す師直聞てそれは不心得な事でござる師安此方に用
意はないか成程こしらへ置ましてござりますといふ
て酒肴せき飯を師直方よりいだし判官に面目うしな
はせけり源助いふやう判官様まだ御上意がござりま
す暑氣の時分なれば參詣の貴賤男女迷惑するで有ふ
程に汗手拭千反葛水をお出し被成との御上意でござ
ります判官畏りましたといへば源助さあたゝ今お出
しなされといふ判官是も書附の表にはござりませぬ
によつて用意致しませなんだでござりますだゝ今申附
ましよといふて立んとする師直師安にむかひ何と此
はうに汗手拭葛水の用意はいたしおかなんだか成程
こしらへて置ましてござるといふてあせ手拭葛水出
し又判官に恥辱をあたへけり扱師直判官にむかひ是
判官殿こなたには此たびの御ふしんの御用人にお附
被成かほどの御用意を得被成ぬはよく／＼内證がつ
まり貧ぼうなされたそふな夫程不自由で金銀がなく
ば入用ならば何程でも此師直がかたへいふておこさ

しやれといろ／＼の惡口して恥辱をあたへ這入りけ
る判官師直に一度ならず二度まで恥辱をあたへられ
て殊にさん／＼惡口せられもはや堪忍骨髓にてつし
成がたく打果さんと思ひ覺悟し齒がみをならしきば
をかみかけいらんとし給ふを出雲の前後よりいだし
とめどふやらおまへの氣色が違ひましたこゝは所が
惡ふござんすまづおまち被成ませと引とめ取附歎き
給ふを突のけ切入師直に切かけ給へば師直運やつよ
かりけん向ふ疵ひとかせおひ逃てゆく判官無念なが
らとらはれ給ふ▲上の中入

かくて判官あしき所の狼籍と上よりの御上意にて亘
新左衛門に御預け置被成其後切腹のよし仰附らるゝ
切腹の日限に成しかば判官白装束に淺黄上下著し
刀載せし三寶の前に居直り切腹の刻限を待給ひ新左
衛門に一禮ある此中は何かいかい御苦勞をかけ泰
なふ存じますすされば人多き中におまへの儀わた
くしに仰附られ大慶に存じます何卒御命の儀申あげ
助けたふ存じましたれどかゝるしぎせひない仕合せ
御切腹遊ばしてよふござりましよ判官ともやにむか
ひ此中は何かと介抱に預り過分におじやると禮をい

ひ給へばともやつしんで禮をうけ私主人新左衛門御命の儀を何卒と存せられたてござります所に御切腹の段は近頃残念に存じます此中までおそば近く御給仕申ましてござりますにお名残おしう存じますといふ判官新左衛門にむかひ切腹の太刀取はどなたでござるそれはどなたかも今にしれませぬといふ切腹の刻限は何時でござると尋ねたまへば午の上刻でござるといふ所へ小ばた六郎左衛門案内こふて來り新左衛門にあひ切腹の場へ這入り上よりの御上意判官殿の御切腹今日午の上刻に相きはまりました則わたくし見分に仰附られてござる是にお上よりの書附を持て來ました是でよみますお聞被成此度鹽谷判官所あしき場所にての狼籍其つみのがれ難きによつて切ぶく申附る物也太刀取は亘新左衛門見分小ばた六郎左衛門とよむ判官六郎左衛門にのたまふは師直殿のお手は何とござるたい今養生最中でござるといへば判官齒をくひしめ無念がり給ふ新左衛門六郎左衛門に切腹の場所はいづくでござるととへば庭上でといふそれは打首同前でござる鹽谷判官程の人を打首同前に庭上にての切腹とはあまりなる儀

でござるといへば友彌すゝみ出切腹のしだいをいひ立主人新左衛門に判官様をあづけられ庭上にての切腹はさしまされまい判官様本式の切腹を願ひ奉りますといへば新左衛門も其々に六郎左衛門に願へばわれらの計ひにも成がたし然らば書附を以て上へ御願ひ申さしやつてよふござる然らばさやうに致さんと願ひ書をしたゝめ六左衛門に渡すれば受取則ともやにいひふくめ此狀取次宇津の宮殿へ届けよと渡すれば友彌受取判官に申やう宜しき御返事承らずば歸るまじと急ぎゆくかゝる所に鎌田惣右衛門は主人ゑんや判官にまへ方勘當を蒙り浪人してゐるが此度の騒動主人判官殿切腹のよし聞有にもあられず今一度御存生の内逢度おもひ新左衛門所へゆき案内を乞へば下人出る鎌田惣右衛門と申ものでござる新左衛門様にちと御意が得たう存ます其よし傳へて下されといへば下人主人新左衛門に取次ば新左衛門しばし思案し手まへ取込たる事ござれば今日はえ逢升まいといふて歸せといひ附又思案仕直しいやゝ出てあはふといふて門の外へ出あふて惣右衛門かといへば惣右衛門かとお詞を下さる段まづ忝なふござりますそ

れに附ましてちとおたのみ申上たい儀がござります
主人判官は今日此所で切腹なさるゝと承りましてご
ざる私儀は判官外の家來とは違がひ一しは高恩を受
ました私事でござる程に旦那判官の御最期に今一た
びあはせて下されましたら生々世々の御恩有がたふ
存ますのと頼み入新左衛門は聞届け身一人のはから
ひにも成がたない檢使がきてござる是に相談いたそ
ふといふて内へ入六郎左衛門に右の一々次第をかた
り是へ通し逢はせた物でござらふかと談合すれば六
郎左衛門苦しかるまい儀でござる是へ通しあはさし
やれといへば新左衛門惣右衛門を呼入れ判官の前へ
出すに頭を地に附はらゝ涙を流し居る新左衛門判
官に申さるゝは御家來惣右衛門が參られたお詞かけ
られませといへど何とも物いひ給はねばは惣右衛門
只今御最期じやによつてお詞が出ぬ是非に叶はぬお
歸りやれといへば惣右衛門判官に申上るは私御勘當
の身なれば御詞をなし下されませぬは御尤に存ます
御前様へ申をかつしやります事がござりましょなら
ば申傳へましょあやまりましたおじひに惣右衛門か
といふお詞をかけ下されませと歎く判官立腹して切

腹の場へきて最期の様子もいさめそふな物が何じや
御前様への御言づけがあらば届けうとは何じや其心
じやによつて勘當して置たいよゝ勘當じやあのも
のおつ歸して下されとのたまへば惣右衛門猶々歎き
刀を拔腹切死んとする新左衛門をし留それは主人に
むかひつら當に腹切か不調法千萬としかるまつたく
さやうではござりませぬどふで死る身でござる私は
前髪の時分から御高恩を受けてをりますれば外の者と
は違ひます相はてゝ殿様の御供を見へ隠れに成共い
たしたふ存ますると歎きゐる判官六郎左衛門にあの
者はへ呼ばしやつて下されと頼み惣右衛門を傍へ引
寄せおのれは誰に斷つて腹を切るおのれが命は我儘
には成まい一たび成敗にせいで叶はぬやつなれ共勘
當して助けをいた小姓多い中にわけておのれにはめ
をくれた其内に身が近習の女めと馴あふた其時女を
成ばいすればそちも殺さねば其女とそふてゐるか只
今忤がござりますム、追腹切ろといふは尤じやさぞ
身が勘當がかなしかろそれ勘當ゆるした本國へ歸れ
とのたまへば惣右衛門ハアト飛すさりよろこびい
さみ忤ながら只今本國へ歸りましたとて私御勘當受

ました身なれば大岸宮内なか／＼がてんいたされま
すまいとても御じひに一筆せうこの御墨附を下さ
れましたら有難ふ存ましよといへば判官尤と思し召
新左衛門六郎左衛門に墨附つかはすべきかと談合し
給へば兩人聞て御文體によりましよ一筆遊ばせとい
ふ判官多し／＼め兩人に見せした／＼め惣右衛門に渡
し給へばおしいた／＼きよろこび懷中する所へ友彌は
せかへり御返事が参りましたとさしいだす六郎左衛
門開き見て是々判官殿願ひが叶ひましたおよろこび
なされ本式の切腹でござるといへば判官各に一禮し
て三寶をいた／＼き給ふ時惣右衛門いふ様殿様只今御
腹でござります大岸宮内かたへ何も仰らるゝ事はご
ざりませぬかと伺へば判官仰らるゝは師直にと／＼め
をさ／＼いで口おしいと傳へてくれとのたまひ切腹し
給へば新左衛門介錯しあへなくも首を打としける

▲上の中入の切

鹽谷判官切腹の後屋敷受取に上より勅使たつ家中の
めん／＼我一とつゝいたんす長持はこび出す鎌田惣
右衛門女房おすが一子竹の助をつれ笹岡藤内かたへ
用の事有て行ける道にて家中の女房達五人連にて是

も藤内方へ心ざし行給ふにあひ給ふ女房達おすがに
のたまふはおまへはどちへござりますわしは藤内様
に尋ねたい事がござんして藤内様へ参りますわしら
も藤内様へ参ります連立て参りましよとおの／＼連
立藤内の所へ行ければ女房おざ／＼出是は／＼皆様何
と思召ての御出でござんすといへば藤内様におめに
かゝり問ひましたい事が有て参りました藤内殿はけ
さから屋敷へ上つてゐられますが今に歸られませぬ
さればわしが所の人もけさから屋敷へ上つて日もは
んじましたれど今に歸られませぬ餘り心もとなふ存
ます故屋敷の様子をどふじやぞ藤内様に聞ましよと
存て参りましたがひよんな事ができましたではござ
んせぬかしてどな様の荷物は皆一所に拵へさしやん
したかあゝ主のもわしのがも皆一所に拵へて置まし
てござんすおすがそれについてわしはふしぎながて
んのゆかぬ事がござんすこちの惣右衛門殿わしにい
われまますはおれが荷物とそちが荷物と別々に拵へて
をけといはれました其心根がづんと合點が行ませぬ
おざ／＼聞て氣にはかけさしやんすなそれはこな様を
去といふ事でござんしよぞやといへば残りの女房衆

おすが様はさられさしやんしたのといふてなぶり笑へばおすが此騒動の時節なればさられたとてしやうともないがといはるればおざゝ聞てこな様はさられたとてさられてござんすかわしはこちの人が去しやつてもどこ迄も附てゆく氣でござんすといへば日比の格氣深い事を言ひたて皆々なぶり笑ひゐる所へ荷物持通るをとがむれば侍與様是にござりますかといふてみをわたしかへるを是々と呼歸へせどいそぎますとみをやり捨にして通りけるあとにてひとりの女房何事やらんとみをひらきみればいとまの狀也殘る四人の女房衆我々が狀もその様な暇の狀ではあるまいかと心もとなく手に／＼開き見れば皆去狀なれば歎き悲しみ此詮議せねば堪忍ならぬといふて五人の女房は皆々奥へゆくお菅お笹二人残りゐる所に大岸宮内女房おたつ一子力太郎を連れ通りあはするお菅お笹を見て夫へござりますはお辰様でござりますか御屋敷の御相談は何ときはまりましてござりますかととへばされば門前には勅使が立て屋敷を受取にござつたそふにござる若い衆は死ふとおつしやるとふでも屋敷を渡さねばならぬそふにござんすまづおい

とま申升とかたりすてゝ歸り給ふ笹岡藤内は我内へ歸りければお菅あひ私もお前におめにかゝり様子を尋ね申ましよと存まして最前からは參つてをりまし待受てをりますがお屋敷の様子はとふでござりましたな屋敷の様子は屋敷をあげわたり明日皆立退く筈でござる殿が一人ござらねば騒動する事でござるこちの惣右衛門殿はまだ歸られませぬかのおつ附歸らしやるかへりに是へよらしやる筈でござる連立て歸らしやりませまづ袴をぬぎましよといふ女房お笹袴の前紐ときにかゝる惣右衛門女房お菅後紐をときにかゝり藤内が腰をしめだきしめつめつたりいろ／＼と仕形で濡かくるお笹さとりながら袴をたゝみゐるお菅藤内にいふやうは殿のおやしきを渡す筈で明日屋敷を立退く筈でござんすにおまへはどちらへござりますればわしは津の國へ退ましよと存升女房お笹それは此さき有馬へいた時の宿でござんするそこはせばい所でござんすぞやといへばお菅せばくばおし合ふて寝ましよといふお笹つの國の方より近江の方がよふござんしよといへば又お菅近江はどこでござんすと懇ろにとへばお笹お菅にいふやうこな様

はがてんのゆかぬこちの人のゆく先々をとほしやんす男のある身で女房のある男を見苦しいと恥しむる藤内又例の格氣かおれが行先をとほしやるまい物でもない其近所へぬしもござつて今迄のやうに互ひに行ちなみをなさりよといふ事じやよしない事をいふより酒でも進せ御馳走申もてなさふとはせいでなか／＼でもないとさん／＼しかり奥へ追やるお菅は藤内様おまへはあのお内儀様をさつてわしと添うと日比いはんした約束でござんせぬかそれに今お内儀様と連立てのかんといはんすはどふでござんすとせりふしてゐる所へ表へ惣右衛門見へければ藤内氣の毒がる體にてお菅同子竹之助をそばに有ける具足箱へ入かくしをく惣右衛門這入り藤内にあひ屋敷は上へ上る生身の犬の扶持に放れた様な物でござるといへば藤内されば／＼それにつき承れば宮内殿には京へおのぼり被成たぞと聞ましたが左様でござるか惣右衛門されば宮内殿よい所へ氣が附ましたはお藏のかねを各家中へわけて渡さうとござつて京へ上られました藤内かねをわけ／＼に致したら二年や三年は心やすふくらされましょさあまづ御酒一つ參れと

いふおざゝ酒持出る具足箱に入ゐる子竹之助あつうてどふもならぬわいのふといふ藤内惣右衛門にきかせまいと思ひわちやくちやと早口に物言ひてまぎらかす惣右衛門きよろ／＼と天井を見あたりを見廻し何共がてんのゆかぬどこからやら子供の聲してあつといふたがと不審がる藤内猶々氣の毒がり言ひまざらす藤内女房お笹惣右衛門にいふ様私におまへのお内儀様を下さんせといふ惣右衛門それは何ともがてんがゆきませぬ品によつてやりましょが身が女房をくれとおつしやるは何ぞ様子こそあるでござらふ其仔細を承つての事にいたそおはなしなされ御合點の參らぬは尤でござります成程様子有て貰ひます事でござりますお嘶申ましょおまへのお内儀お菅様とこちの藤内殿と密通してゝござんすそれでこふいふ事でござんす程に私にお内儀様を下さんせといへば惣右衛門あきれそれは確かに見とゞけさしやつておつしやる事が成程證據を見届て申事でござんすといへば藤内おのれよしない口をたゝきおれが一ぶんが立ぬとさん／＼に打たゝく惣右衛門あきれはてたる體にて此上は女房共を呼にやり詮議を遂げましょと

いへばお笹いやお内儀様は先から爰へきてござんすあの具足箱の内に隠れてゝござんすといふて箱の内より引出しあはす惣右衛門興さめ顔にて女房お菅にいふやうそちは此所へ何としてきた藤内様にちつと用が有て参りました惣右衛門、此砌りじやによつて用があるまい物でない何の用できた大事な有様にいへといへばお菅迷惑の體にてうぢ／＼としてゐるお笹はお内儀様こな様とこちの藤内殿と不義の事を惣右衛門様に皆言ひましてござんすあらそはしやんす事はござんすまい有様にいはしやんせといへばお菅ぎよつとした顔附しまぢ／＼として居給ふ惣右衛門一子竹之助にむかひそちは結構な親を持たなあのやうな畜生めをとお菅をにらみ附る藤内迷惑がり是惣右衛門殿こなたの手前何共面目しだいもない儀でござんこなたの腹いせに腹をきらせて下されと願へばそなたは腹を切て一ぶんが立ましよがおれが世間へつらがむけられませぬといふて氣色し刀を抜て藤内を打にかゝるおざ／＼おしへだてとゞめおはら立は御尤でござりますれどわしがお内儀様をもらひますも藤内殿といつまでもそひたさの事でござんす

もはや堪忍して下さんせとなげ／＼ば惣右衛門聞といへ刀を鞘へ納め殿の書置の次第をかたり殿のおはて被成屋敷をさしあげた所に女房せんさくではあるまいといふておすがをそばへ呼恥をあたへ又ぬき刀して藤内がそばへゆき藤内がたぶさをとつて根もとよりおしきりあゝ何もいふまいと刀を鞘におさめてやすみゐる藤内惣右衛門にいふやう是はけつかうな御了簡に預りまして忝ふ存じますこりや女房ども其方は去たぞいとまをやつた出てゆけといひければおざ／＼何のさらりよぞや堪忍して下さんせとなげく何の歎く事があるおのれが愠氣ぶかい心からよしない事を有やうに打明ていふたゆへ此わけになつたおすが殿をもろふて結構なりのどふでも去た出てゆけいとまには此刀をやる出てゆけと引立おひ出すおざ／＼せひなく／＼も出ゆきけるを藤内見をくりかへれば惣右衛門藤内にいひけるはお内儀は首尾よふ出てゆかれましたか扱々中程であらはりよかと存て何ぼう氣の毒にござつた藤内されば一家中皆屋敷をさしあげ女房衆をさらしやつてござるにわしが女房は愠氣ぶかふてどふも去られませぬによつていつそさしこ

ろそふと存じましたれどこなたのおつしやるは殺すといふはいたはしい事じやとおつしやつた丁簡に附てこふした作り事を頼みまして首尾よふさりました御夫婦共にいかい御苦勞をかけましたとよろこぶお管迷惑な事を頼まれましてあらぬ事をしましてござんすお内儀様のこふした作り事とはしらいでさぞわしを憎ふ思ふでござんしやわしもお内儀様も此やうにそはれぬやうになりましたとなげく惣右衛門藤内殿髪はいはるゝやうに随分短ふきりましたが成程是でもいはれます惣右衛門いとまごひし歸るを藤内呼かけ此度のくはゝりの人数はいか程ござるさればおよそ百五十人體に極りました所が四十七八人五十迄は集まりますまい然らば連判を取たらよふござるそれは宮内殿からさたが有筈でござる然らばもはやおめにかゝりますまいさらばゝとわかれける

中禮智講 清光寺には鹽谷判官の御魂屋並に家來四十八人の者共の石塔をならべ建て有判官殿の御臺出雲の前けふは殿の御命日とて姥あまた召連清光寺さして参り寺にもなれば案内を乞ひ同宿に逢給ひわしは鹽谷判官様のゆかりの者でござるがちと和尚様に

御めにかゝりたうござんす同宿和尚には只今お勤を被成てござりますまづ客殿へお通り被成ましておまち被成ませそんなら客殿へゆき御勤の間待てゐましよやい其御乗物をかた脇へのけてをけといひつけ奥へ入たまふ梶の葉右衛門殿の墓へ参り花をたて水を手向涙を流し懇ろに拜み這入る其跡へ大岸宮内おなじく女房お辰同じく一子力太郎堀内彌次兵衛殿の墓へむかひ香花をたて水たむけ拜み奉り宮内女房おたつに申さるゝはけふは此所でちと相談する事がある程に御参りやつたら力太郎をつれかへりやれと申さるれば彌次兵衛けふは殿の御命日でござる故廟參致しました苦しうござらぬといふ所へ寺の住持立譽和尚來給ひ宮内殿各御廟參でござるかきのふからこちへ御傍輩衆じやとござつていくたりも廟參でござつた餘り大勢でござつたによつて銘々に御名を書とめて置ましたといふて書附を出す宮内開見て彌次兵衛殿此書附の通りでござるかと思はる和尚申さるゝやうきのふござつたお衆が残らず銘々に金子一兩宛をかじやつてござる只今は御浪人の身でござれば受ましますまいもどして下されと申さるればめんゝに心ざ

しで上られました物でござればやはりとめをかれませ然らばそふしましよかと納めをく彌次兵衛いふやふは殿の御廟所なれば皆家中の者共逆死の石塔を建置お庭をふさぎ置ました宮内彌次兵衛申さるゝ通り逆死の石塔を建置ました逆死と思しめさすと此世にない物じやと思召て御回向をたのみます同宿御臺様が奥にござりますといへば宮内聞てヤア御前様も御廟參被成て奥にござりますとやおめ見へ申ましよといふ所へ出雲の前走り出宮内おじやつたかおれは殿様の御死骸を縁ない寺にとり置ては無縁塚になると思ふてお死骸を取此乗物へ入とりかへつたとのたまへば宮内彌次兵衛きもをつぶし御死がゐる乗物より出しはいし奉る彌次兵衛御死骸入し箱のそばへより私は堀内彌次兵衛でござります殿様さぞ此度の無念におぼしめしましよさりながらおつ附敵を亡し御憤りをやすめましよ御心やすう思し召ましよといふ宮内つゝしんで申さるゝは御他界の後御屋敷を明わたりし家中立のき申候事ふがひなき者共とさぞ心外に思し召ましよと言わけし家中一味致したる物語して此四十八人の者共が御恨に思し召師直が首取ておま

へにそなへましよといふて歎きゐる和尚見たまひ御歎きは御尤愚僧も殿の御死骸を外の寺へやりますは何程か心外に存じましたに今此寺へ取置ますは何ばう満足に存ます宮内ひとへに是も御前様のお働らきゆへでござりますまづ御死骸をとり置なされて下されませといふ和尚文をとなへとりをく所へ四十八人おのゝ廟參して殿の御墓を拜し宮内にあふ宮内申さるゝは何れもよろこばしやる事がござる御前様が是へお入被成てござるおめ見へなされといへば皆々ハアと感じ目見へする出雲のまへ皆々に詞をかけ給ふ宮内きかしやれ御前様には殿様とまだおなじみもござらぬ中にあのやうにお姿をかへられて御しがゐる他所の寺に置ましては無縁塚にならふかと思し召て墓守をたのみお死がいを此お寺へ連ましてござりましたよう拜ましやれといふて扱連判の評議する所へ梶の葉右衛門きたり彌次兵衛を頼み大岸宮内へ願ひ狀を上げれば宮内ひらきよみ外に起請文一通あるを堀内彌次兵衛よみ見れば殿様の勘當かふむりをりし身にて御座候へ共此度の思し召たちの敵討の連中の内へ加へられ候はゝ忝なく候はんと二なきとの

神文よみをはれば一座の連衆聞入中に笹岡藤内申さるゝは何れも何と思し召殿の御勘當得てござる人なれば此度の人數へいれます事何共心えがたう存ます何れも遠慮のない事でござる思し召のほどいふてござらんせとひろうするおのゝくちをそろへおつしやる通り勘當の人を人數へはいれますまい宮内殿には何と思し召拙者とても何れも同前でござるまづ身共があひましょ爰へよばつしやれといふて呼入れあふてこなたには願ひ狀と起請文をおこさしやつたその起請文の書出しを見るに何れも家中申合せ出會をとげるやうな書出しでござるがまつたくそふした事でござらぬ定めし世間にはいろゝの取ざたを致すでござろがかつてさやうの思ひよりではござらぬお屋敷まで明わたし立退た浪人の我々なれば何方へも有附扶持くれる人もござるまいと存くらすばかりでござるとつゝみてかくしお歸りあれといへば葉右衛門それは曲もござらぬ私まさかの時の役にはたつまい物じやと思召ておかしく被成ますかどふ有ても此度の人數に入れて下されと頼入る宮内イヤそふでござらぬ思召入が違ふてござると猶々同心せねば葉

右衛門せひなく思ひ詰すでに腹きらんとするを皆々おしとめわれゝに何の不足が有て腹を被成るゝとがゝしうとがむれば恨をいふ時宮内葉右衛門殿御前様も是にごさる殿の御廟所を穢さつしやるかといへば是宮内様うらめしうござる殿の御廟所私此ばをかへり何れもの思ひ立もしもしれバツとさたの有た時はそりやこそ葉右衛門がしらせたはといはれた時は私一ぶん立ませぬどふでも人數へ入て下されんからは死なねばならぬといふて又腹切んとするを宮内見て是々もはや心が見へましたといめ成程人數にいれましょといへば葉右衛門大によろこびける藤内宮内にいひけるは勘當の儀は何といたした物でござらふそれは御前様へ申上てゆるさせましょといふて出雲の前にむかひごせん様へ申上ます殿様葉右衛門御勘當の儀殿様になりかはり遊ばされ勘當おゆるし遊ばされつかはされましたら有難ふ存ましょと申上れば出雲の前葉右衛門にむかひのたまふ様是葉右衛門今までの御勘當ゆるすぞ今から随分忠をはぐくんで皆の衆と心をひとつにして師直が首取て殿様に手向てくれ勘當はゆるしたぞとの給へば葉右衛門骨

髓に通つて有がたがる一座のめん／＼よろこぶ宮内あゝめでたい／＼といふて小謠をうたひよろこびをなしけるかくて藤内何れも連判を取ましょと一々一味同心の連判をとる宮内一子力太郎連判させんとする時宮内まづおまちなされ忤には判をいたさせまい藤内是は何とも合點のゆきませぬどふした事でござるいや忤力太郎は此たびの儀につれてまいらぬそれゆへ判を致させまいと申事でござる是は角のあるやうでいよ／＼がてんがゆきませぬ是は彌次兵衛殿御氣にはさへられな是にござる彌次兵衛殿は足輕でござれ共こなたの思し召入有て此度のお供につれらるゝではござらぬかそれに一子力太郎殿をつれられまいとはがてんがゆきませぬ定めし是は親の身で子をふびんに思し召跡にのこしをき末繁昌を願はしやつての事でござろといへば宮内全くさやうの事ではござらぬ然らば忤をつれまいと申心お物語致ましょこりや女房共最前力太郎を連歸れといふたに歸りはせいでよしない事を聞す暇をやつた歸れ暇やつたといへば女房お辰そふはなりますまいいとまを下さりよなら手打に被成となげくを宮内扇を持てさん／＼に打

た／＼皆々とりさへる力太郎母におゝひ重りいたわる宮内見て何れもあの體をごろふせあの性根で此度の用に立ましょか日比母に孝行を盡しそれが悪いではござらぬ御きげんは何とござるおめしはあがりましてござるかなど、心を盡したゝ母を大切にそばを片時さらす大事に致します其心からは此たび連参りたりとてまさかの時母が事を思ひ出し未練な働きたいした時はさう崩しといふ物でござるさるによつて跡にのこしをき連て参るまい連て参らぬからは連判もいたさせまいと申事でござるを理をせめていへば連衆皆々尤とかんじける力太郎いふやうは母に孝行つくしましたはやがて別れ長ふはそひませぬと存まして孝行にいたしました是母様もはや今から母でも子でもござらぬと親子の舊離を切思ひ切たる體親宮内見ておゝでかした／＼其心ならば成程連行ぞとよろこぶ母親お辰歎き自害せんとするを皆々おしとむれば最早わしが願ひは叶ひました力太郎が御供が叶ひまして嬉しうござんすわしが身は夫にわかれ子にはなれ長らへていられよかといふて自害する宮内此體を見てこりや力太郎母が自害して死だが名殘おし

うはないかといへど力太郎すこしもなげくけしきなく何れも明日の立時は何時でござると尋ねれば親宮内聞はてハア出かした〜といふて皆々奥へ入ける

▲中の中入

遊女屋の體茶屋の亭主都倉や九之八正體なく酒に酔座敷中に寝入りある女子共出てモウシ旦那様〜とゆすり起せど性根づかすモウシ旦那様駕の處はどこでムんす旦那様〜とゆすり起せば九之八現に何じや牛がかごぬけするとたわ事いふて目が覺ねば女房おまき出て女郎達にいひけるはこちの人の九之八殿にあまり酒をもつて下さんすないつも頼み置ますにあのやうに性根のつかん程もりつぶさしやんして聞へませぬあの人は酒に酔れますればたはいがござんせんといへば女郎達花車さんわしらほもりはしませぬ奥の座敷で大酒もりがござんしたその座敷でのましやんした酒でござんしよおこしよふがござんす鼻の中へこよりを入れてくさめさせてせゝりおこしましよといへばこりやよふござんしようとして手に〜こよりをひねりもつて九之八が鼻の穴へさしいれんとすれば九之八酔覺のをさまし其やうな惡じやれをく

ふて此商賣がなる物でござりまするか手の悪いと笑ひ女房共しておれを起して何ぞ用があるか大ぶん用がござんす約束さしやんした女郎様達をいふてをかしやんしたか成程約束して置たまづお衆様、お島様、おくの様、お岩様お約束申て置たといふてゐる所に次の座敷に須山源次、大岸力太郎遊びゐて障子をざらりとあけ源次亭主〜といふて九之八を呼何と女郎達はまだか此お若衆は此様な遊びは始てじや程にずんど美しいお女郎の手を取て入れて下さるやうなあてがふてやつてたも亭主心えましてござります此お女郎様を進せましてくわつ〜とのみかけましよとそゝりける源次是々亭主こゝへこぼたといふ客がくるか成程こぼた様お出なされます其小幡とわれ〜はさし合じや程に合せてくりやるなこゝは端近で悪い奥座敷へ行ふといふて奥へ入にける藤内、葉右衛門連立此所へ遊びにきたり女郎達を見てぞめきそゝり騒ぎ奥座敷へあがりける鎌田惣右衛門女房おすが惣右衛門に去られて後身を賣遊女と成勤をしけるがかごに乗ちらし都倉屋へきたる亭主九之八出てエヲお女郎様お出といへばおすがけふは宮内様の此處へ

御出ときゝましたによつて先をひまをもらふてきま
したといふ所へ笹岡藤内が女房お笹來る是も又藤内
にわかれて後身を遊女屋へ賣代なし勤の身となりぬ
けるがおすが見てお笹さんけふはこな様と一座でこ
ざんすすりやといへばてい主九之八成程一座でござ
りますとお菅にいふ是は改りましたお詞を聞きます何
の事でござんす九之八お笹様はお氣が短ふてせんと
のお客といさかふて泣しやんす御意見を被成ても下
さりませといへばお菅くつゝと笑ひたしなまんせ
といへばお笹いやせんどの客程むりな事いふ人はご
ざんすまいむりもよほどな事をいふたがよふござん
すまあ聞て下さんせわしが酒をえのみもせぬ物をむ
りにのめといひまするその跡では床へいらふといふ
てわしを屏風のうちへつれてゐて帶をとけといひま
す是さへあんまりなむりをいふ人じやと思ひますに
懷へ手を入てシヤはやいろゝの悪い事をしやりま
すあの様な客は重ねても喧嘩します是がわしのが
むりか聞て下さんせといへばおすが打笑ひ此様な勤
の身になればこな様のやうにいふてはなりませぬと
打笑ひ皆々連だち奥へ入大岸宮内、鎌田惣右衛門連

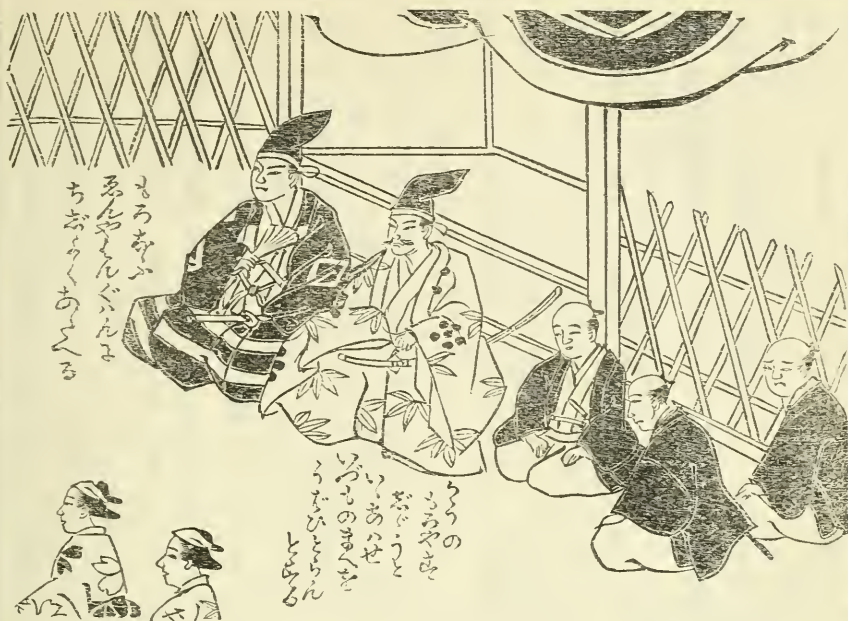
立出る惣右衛門宮内にいふやう是はどこへ連てござ
るどこといふ事がござらふぞ悪い所へは同身は致す
まいわしに附てござれと道をいそいで遊女屋の都倉
屋九之八方へ連立行九之八表へ出むかふ宮内是てい
しゆ此お客を引附申す此かたは田舎の大盡じや此所
始ての御出じやどなた成共めきゝの御女郎にあはせ
まし隨ぶん御馳走をめされと引合す惣右衛門拙者事
はかやうの所へついしか來た事がない萬事様子をし
らねば不都合がちにござらふ程に諸事たのみ入ます
九之八そこらは拙者めが受込ましたまづ奥へお通り
被成ませといへば二人ともに這入りければおすが宮
内にござんしたかけさから待てゐましたといへば宮
内忝いといふていだきつきたはぶるゝ惣右衛門此體
を見れば我女房のおすがなればあきればてゐる宮
内女郎共をいざなひ皆々奥へ連立這入る惣右衛門一
人座敷に残り不審顔にて身が女房がかやうの所の勤
女になつてゐよう様はないがと思ふ顔にて小首をか
たげ思案し身をもがき氣色して刀の柄に手をかけこ
ぶしを握つてゐる所へ亭主九之八たばこ盆持きたる
惣右衛門ちやくとさあらぬ體してゐる九之八ふしぎ

顔にてたゞこ盆そこにをき這入りける惣右衛門あた
りを見廻し人なければ又こぶしを握り氣色し刀の柄
に手をかけ齒がみをなしてゐるところへ九之八お茶
あがりませといふてさし出す又ちやくとさあらぬ體
に見せ是御亭主今こゝにござつたせのすらつとした
女中は勤をなさるゝか成程つとめを被成ますあの女
郎を買すは何程でござるちよつとが七夕跡をおつ
めなさるれば十四夕又夜明迄が二十八夕でござりま
すといへば惣右衛門直段の金銀はいとひはせぬがま
づ試るまで一寸の七夕であひましよ心得ましてござ
りますさりながらこよひはお隙がいります程におい
ではござりますまいハテ今夜ひまがいるなら翌買ま
しよは扱九之八どふなり共被成ませなれどもあの女
郎は御無用に被成ませそれはなせに尤お勤の身では
ござりますれどおまへにはあはしやれますまいいよ
ゝがつてんがゆかぬは拙者にはあはれまいとはな
せにさればおまへのおつれ小幡様にあはしやります
ればおまへにはあはしやれますまいすればそんでご
ざります身どもがつれにこばたといふつれは覺がな
いが誰が事ぞ宮内様のかへ名でござります此やうな

所へくればかへ名がいるかなる程さうでござります
といふて九之八は奥へ這入るおすが出惣右衛門にい
ふ様な様子の様子を聞しやんせねば腹のたつは道理
じや此やうな勤の身になりましたは様子がござんす
はなしましよ聞て下さんせといひわけせんと取附ば
聞入す突のけ脇へ立退き物にまぎらはし聞かれねば
が子をしらいでめつたに腹をたてすとわしがいふ一
通りをまあ聞て下さんせと又取附ば又つきのけより
そはで腹たつる所へ葉右衛門出で惣右衛門とお菅と
女夫の中とは夢にもしらすそゝりかゝる惣右衛門よ
きすきを見て歸らんとしけるがいなれもせねばせき
だが見へぬとかこつけていひ立かへり紙燭を拵らへ
座敷の行燈の火を灯しせきだをたづぬるといふて持
出てはわざとけし紙燭がきへましたといふて又とぼ
しにかへりついには行燈の火をけしくらがりまぎれ
に逆歸らんとさしあしてゆく葉右衛門さきへ立ま
はりとりまへいなしは致さぬ手の悪いと引とむる所
へ藤内わが女房のお笹が手を引て出る惣右衛門騒さ
の體に興さまし是藤内殿それはこなたのお内儀では
ござらぬかされば身どもが女房どもでござる此所に

勤奉公してゐます是は興がる事で何とも合點がゆきませぬ合點のゆかぬは尤でござる女房どもが心いれ様子をきかしやつたら涙がこぼれましょ身どもが浪人いたしたをいつまで浪人さしやろもしらぬとあつて此里へ身を賣て此かねをやろと呼におこしました心底の程がなみだがこぼるゝ程嬉しうござるとかたれば惣右衛門聞てこなたは涙がこぼれましょけれどわれらは涙がひつこみますといふお笹惣右衛門にむかひわしやおすが様が此里へ身を賣勤の身と成ましたも皆様子有ての事でござんすまあ様子きかしやんせんが悪ふござんすといふてゐる所へ宮内そゝり子共をおどらし音頭取出るお菅宮内にむかひは宮内様こな様はきこへませぬわしが頼みました事を惣右衛門殿へいふて下さんしてぬしもしつて連立てきて下さんしたかと思へば惣右衛門殿は何もしらしやれんさうな是は宮内様きこへませぬとうらみをいへば宮内、惣右衛門おすが夫婦の中に入恨は尤じや是惣右衛門殿内々お菅殿身どもを頼みおつしやるは夫惣右衛門浪人いつまで浪人してゐられましょもしれませぬによつて身を賣ました此かねをこなたへ渡してく

れとのおたのみでござつた拙者もあり心ざしをかんじとかく直にあはしましての事と存今日まで申さずををつて連立てまいつた其かねも是に懷中してをる何も恨みおつしやる事はない此かねは心ざし大切な金なれば受さしやつても大事な受とらしやれと懷よりかね取出し渡すれば惣右衛門様子きゝかんじ入は宮内殿最前はお恨に存ましたが近比忝ふござる是女房ども心ざし過分にござると涙を流し一禮いひ中なをる皆々よろこび宮内小謠をうたひ舞騒ぐ所へ宮内一子力太郎奥座しきより出親宮内がそゝり騒ぐていを詠めゐる親子たがひに顔を見あはす親宮内そげていふようさしあひはくらぬあれにも相應の女郎をあてがふてくれとそゝる力太郎親宮内を扇を持つてうちたゝき親でも子でもござらぬぞ其御所存で本もうは得とげさしやるまいといふて歎く須山源次つと出是力太郎殿そなたに此様子を見しよと思ふて此所へ同身したあのやうな放埒な所存ではなかゝ本望はとげられまい不所存な者と一味せんより身どもが連判はのぞいたぞ此様子を師直方へ注進せんと走り行皆々追駈とめんとかけ出るを宮内おしとめ







あの源次は二心あるものとはかねて見受置た事でござる何れもこうした遊山は主の事わすれ武士道を忘れてゐるといふ事を師直方へしらせん爲の計略の遊山なれば告にゆくこそ幸ひなれ足に灸でもすへてやり達者にしてやつたがよいといへば何れもそふじや〜といふてやみける宮内いふやうむかし曾我兄弟親のかたき祐經を討んため兄十郎は大磯へ通ひ虎といふ遊君にふかく馴染敵祐經に心をゆるませ終には本望を遂たと申す我々もそのごとくじやいざ明日は早天と約束きわぬ勇み進んで皆々這入る

下武勇講 かくて師直屋敷には其夜客有もてなし客は歸り給ふ體師直師安親子出ハテ今晚のお客は御機嫌がよふて嬉しかつたヤイ皆の者共火の廻り用心きつと致せ申附たぞと下部共にいひわたり親子ともに奥へいるかゝる所へ鹽谷判官の家來ども今宵ぞ主の敵高の師直を討んと兼て言合はせ大岸宮内おなじく一子力太郎、鎌田惣右衛門、笹岡藤内を先とし以上四十八人の者共兜頭巾に羽織をきて手に／＼がندوق提灯引きさげも、ひき脚絆はきしめ一やうに打扮ち師直屋敷の門外にはせ集る宮内相圖の詞をいへば皆一

時に頭巾をとる又合圖の詞をいへば皆一統に羽織ぬ

ぐサアトいへば惣右衛門築地に梯子をかけのぼり内へ忍びゐる所へ時の拍子木打通るを引とらへさし殺すのこる面々に梯子をさし又はかけやもつて打崩し亂れ入さんぐに切たゝかふ大岸宮内は鎗を突下知をし合圖の笛を吹ばみな一所へよりあつまり井のものと水を汲上手にぐのみ息をつき敵師直に出あはしやつたかといへばめんぐにまだ出あはぬといへばハテ無念やと一統に亂れ入爰かしこを尋るに師直逃ゆかんとすれど詮方なく柴部屋にかくれる各を見つけ引だし首打落しいそぎ國元さしてもたせやり宮内臆首を引さげ人數を揃へ勝鬨あげしとやかに歸りしはいさぎよくぞ見へける

右太平記さゝれ石は横綴三冊にて跋に東武芝泉岳寺の墓義士の法號を不殘記せり書面十五枚有其内を少しく爰に寫す上の巻は近松が兼好法師物見車の清水寺を種とし中の巻清光寺の場は宗助が忠臣金短冊の墓所を遣ひ敵討は碁盤太平記を寫したる物也一日の趣向假名手本の舊狂言なれ共當時の仕組と替り古雅なる所あれば後日狂言さうりけいし硝後太平記とともに下の巻に

出し一部の總評を演るもの也

西澤
脚色餘錄三編中の巻終

西澤文庫脚色餘錄三編下の卷

目次

- 一 霧太郎天狗の考
- 一 日本左衛門の再考
- 一 歌舞妓謀反人名の考
- 一 梅澁吉兵衛胡椒頭巾の話
- 一 夏祭浪華鑑狂言の話
- 一 女團七長町裏の正本
- 一 硝後太平記畫の寫
- 一 さいれ石後日狂言役割の寫
- 一 上おもひ草の筋書
- 一 中しのぶ草の筋書
- 一 下わすれ草の筋書

西澤
文庫 脚色餘錄三編下の巻

西澤綺語堂李叟著

霧太郎天狗の考

寶曆十一巳の年春角芝居にて並木正三の作にて始て霧太郎天狗酒醺と外題して謠曲の善界を舊として大天狗の首領の名に霧太郎といふ名を作りもふけしは都て物の大きなるを太郎と呼所謂總領を太郎と呼次男を次郎と云より起るか京にて雲の峯を丹波太郎江戸にて利根川を坂東太郎と呼が如し古き諺に山太、近二、宇山と云は山崎の橋を日本第一として山崎太郎、近江二郎は勢田の橋宇治三郎は宇治橋をいふとぞ央邦が句に「廣澤やひとり時雨るゝ沼太郎」とは廣澤は池の太郎なりといふ心也謠曲狂言の惡太郎は總領の惡者を云鈍太郎は馬鹿者の總領を云か金太郎は金時の子の異名にして川童を川太郎螢を火太郎と呼

ぶが如し酒器の大なる物を盃太郎猪口太郎と呼も皆同意也故に天狗の首領に霧太郎と名附しが皇都六波羅の西愛宕の社に例年正月元朝天狗の宴と云有是によせて外題をもふけし物也けいせい桃山錦けいせい英雙紙にも霧太郎の名をつかへど狂言の世界によせて霧降が嶽又た岩國山の大天狗として有何にもせよ天狗にはよき呼名なるべし

日本左衛門の再考

傳奇作書續編に日本左衛門の事跡を出せども年號月日をもらせり再び爰に記す延享三年寅の冬人相書を以て御尋有紋所は丸の中に橋なり二代目李冠橋の紋なるゆへ文政に遠江潟戀賊と外題して日本左衛門に李冠大に當りをとけり此者本名濱嶋庄兵衛といふて京町奉行所へ美服を著し金拵の大小をさし名乗出て以前同類の疑ひ捕はれたる梶井の宮に仕ゆる新參者中村主膳は前方入魂に致し候へ共近來は中絶して某が行衛は曾て存候まじさあらば某故に罪なき主膳難儀に及び候段聞捨難く名乗出候且又改て盜賊の御吟味にも及ばず某事いかにも盜賊の大將を致せり然れ共世人難儀に及びしよふの儀は致さず先金子三千

兩より下の者を盗みたる事は御座なく手下の者に下知してとらせ候兎角御仕置を相待候といふ是によつて濱島を揚り屋へ入れ其後江戸へ送られるにも牢輿にも乗せず駕の戸を開き御紋附の長持を跡にもたせ夜に入れば御紋附の提灯を出し旅宿にては上下著用の者膳の給仕など出させたり其後數日をへて遠州見附の町外れにて濱島以下四人獄門に懸らる濱島は初中後緞子繻子の類ひ著用しけるとなり此濱島正兵衛の異名日本左衛門と附しは此書の上卷に古役者竹島天竺左衛門に倣ひて附し物か天竺左衛門は藝人役者なれば嘸かし美男にて衣服とても絳羅を飭りたる者なるべしそれに對して名附たるなるべし世に天竺浪人と云は逐浪人を轉語して電逐浪人と云は予が滑稽隨筆に出せしが都ての名に左衛門と呼事以前の流行物にて謠曲狂言に見物左衛門、有非雅左衛門、風左衛門、土左衛門の類數多あるべし日本左衛門は天竺左衛門より出たる名なるべし文化十二亥の春中の芝居にて奈河晴助傾城廓入船と外題して一枚看板に天竺德兵衛片岡、日本駄右衛門嵐吉、唐土太夫澤村田之助、琉球島六工左衛門と四枚畫看板を出せしが狂言

納らず看板取替秋葉權現廻船嘶となりたる事有けり

歌舞妓謀反人名の考

書に傳内流と云有東都に一家の書風を立し建部傳内名は賢文と云是を竹田出雲掾菅原傳授手習鑑に武部源藏と作り名して遣ひ歌舞妓に黃金鱸には柿木金助の父を八代須八官とす八官は來船人にて今江戸の外堀にやよそ河岸と呼又八官町昔比臣尼女郡町有と云の名を遺す謀反人に非ず又向坂甚内は新吉原の開發人にて惡人ならず三千世界商往來といふ古狂言に山西の金左衛門と云實惡の役名有是は海外を歷遊して書を能し後大阪に住すと書畫一覽雜の部に出たる也又雜伏水と云狂言は小堀遠州候一旦改易となりし時雨の釜といふ寫本の一話を脚色して野守專州と名を作り此狂言の謀反人に麓しづ甚内といふ有是は平賀源内一名風來山人又福内鬼外とて戲作者の誣附名也阿蘭陀エレキテルなど工夫せし畸人故狂言にて謀反人の様に仕組たる物也此誰伏水を京都芝居にしてせし大切に少し増補して大領久吉北の松原にて大茶の湯を催す麓甚内賣茶翁の容して荷ひ賣出で後扮に仕込し鎗を持て久吉に近寄仕組有高遊外を謀反人とせられたるは大なる迷惑なるべし

梅澁吉兵衛胡椒頭巾の話

梅澁吉兵衛小梅が事實は傳奇作書續編に出せどももれたるを爰に云天王寺屋久左衛門子供長吉が墓は谷町筋寺町久本寺にあるよし梅澁吉兵衛が仕出したる胡椒頭巾といふ物は紙袋に胡椒を入れて往來人に窺ひよりて是をかぶせかけ右の胡椒にむせて苦しむ内に腰の巾著懷の物など奪ふ事を工夫して専らその比からかゝる事をなす惡黨多かりしとなり近松の作楓狩劔本地の三の切艾屋久作の文談に奥をのぞいてさし足に兩戸の樞懸金をしめて廻す力帶女房が口に手をあて鼻息窺ふ胡椒の粉藥研鐔の二尺一寸するりとぬきとあるは梅澁吉兵衛が胡椒頭巾とおなじく此比の惡者専ら用ひしものとしらるゝ近松はよく世話に馴たる作者なりけり

夏祭浪華鑑狂言の話

延享二年丑年七月十六日より竹本座新淨瑠璃團七九郎兵衛釣船三ぶ一寸徳兵衛夏祭浪華鑑九段續は並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作にて世話淨瑠璃續本木偶に此度始めて帷子衣裳を著せ古今の大當りとなり此年十月に潤有年の暮迄打通せり其節の段書は

第一色の水上汲分た御鯛茶屋の鹽竈第二殿の誑意を卷込だおやま繪の拜領物第三出入の數をつまぐつた珠數三味の男作第四手代が戀を堀だした浮牡丹の箱入娘第五道行妹春の走り書第六男の意地を立ぬいた燒鐵の女房作第七舅が欲を止兼た紅粉絞の宮入帷子第八友達に心を碎き石割雪踏の合印第九親と子の縁を繋だ貫ざしの捕縄以上九段とも唯俠客の意地を宗として書たる物ながら見處多くして今迄百十八年の星霜を經れ共淨瑠璃歌舞妓ともに行なはるゝは作者の譽なるべし辨慶といふ縦横縞を故人吉田文三郎俠客によかるべしとて九郎兵衛の人形に著せたるより今に團七縞と稱し一寸の女房お辰が燒鐵は東武落合に一乗院といふ精舎を建し了然禪尼の白翁和尚に法を受ん爲火攪を燒面體を燒爛かしたるを仕組又佳吉の場にて一寸團七立引の間の文句に其間抜さいたる髭ぬかふと床の床机に上足打煙草入から出す鑑もなんぼうふとき穿鑿也と有は尾州名古屋に南方鑑とて毛抜の名物有當時皇都產毛屋の鑑のごとし孔明出師の表に深く不毛の地に入て今南方を定むと有より近衛殿より賜りし名也と云是を聞せし文談なり寶曆年

間角の芝居にて中山文七座元の時見物喧嘩せし咎めにて文七座元なれば入牢仰附られやがて濟したる折此夏祭をして團七出牢の姿にて三ぶのに父新九郎徳兵衛に弟來助父子兄弟にて口上を演大に當りし事有とぞ此夏祭の世界の増補狂言は織合團七縞夏景色浪華細見等有予も此世界にて仕組たる物二部有紅粉枯梗女團七上の卷茶屋場中の卷長町裏下の卷三ぶ内の段三幕にて下の卷には燒鐵の紋切形お梶は心に靱負に惚て居て三ぶが道外交りの世話場狂言の穿あれども事長ければ中の卷の長町うらを爰に出して下の卷は次々の編に演るものなり

女團七長町裏の正本

造物向ふ奥深に淺黃幕此前に一面の竹垣上手草井戸はね釣瓶のあしらひ此傍に水船一面に南京の花盛舞臺一面に砂を敷御興太鼓の鳴物本雨さつと降らし幕明る「追ふて行夏と秋との堺道御祓の雨のしだらでん住吉參りの賑ひに紛れていそぐ磯之丞傳八諸共附そふて駕の簾を細引でくる／＼廻る細道長町うらにさしかゝるト此上るりにて向ふより安傘をさし磯之丞頼かむりの六かごなかきめい／＼傘磯サ、早くやれ／＼三合點じをさし走り出て花道にて

や／＼ト本舞臺へ来る此梶ヲ、イ／＼「呼かけ飛くる仲居のお梶南無三寶と横ぎれに畦道ゆけばおつつき駕の棒捌んで畑中どふと打すへ息を織ト此上るりの内大つと走り出ていき梶此駕まつたやらん／＼やる事ならぬまゝの／＼待て貰ひませふぞト梶鼻つかんでもとすかこの二人よろ／＼いとして下になく磯之丞傳八き磯わりや仲居のお梶め一寸の女房といひ合せよくひどいめにあはせたな傳まだ其上においらが跡を追ふて長町うら三界迄駆てうせたは傳磯何ぞ用でも有ての事か梶アイすんとムんす用がありやこそ爰ら迄跡をおはへてきたのじやはいの傳面白そりや何の用得梶譯いふてゐる隙がないわしがきたのは是此駕の内のお人がほしさどふぞ返して下さんせいなア磯ヲ、それ程ほしがる駕の代呂物傳はしかそつちへやりもせふ駕から出して傳磯つれていね／＼「心よふ出た挨拶も聞や聞ずに駕の繩がんにがらみをほどく間も梶モウシ執負様懣悔り被成たでムんせう又しても／＼此通りサ、今ほどいてをります程にお出まし被成れや「よふよと解た駕の垂明て引出すその内は思ひもよらぬ母お熊作り聲してぬつと出ト此内磯之丞傳八ふて繩なとき駕のたれを上る内に母おくまゆきへの著物を引ばり乗

て出 熊ヲ、駕の内の代呂物はおれじやぞやト前へ出るおかしうか
して見て大 梶ヤアおまへは母様ヨ……こりやどふじ
悔りして ト大悔りお熊はたの 熊娘よふ貰ひにきてたもつた
や二人りと顔見合笑ひト 梶ム、そんなら此駕は
のふト合方に成るお熊おかしにす 梶ム、そんなら此駕は
がりがりつくおかしふらふて 梶ム、そんなら此駕は
靱負様と思ひの外熊ヲ、此お熊じやはいのお梶エ、
エ、熊さあきりく連ていにをらふぞ梶ム、ウそんな
ならこりや又皆が言合はせうまくわしをやりやる
のじやなア熊やりやるのじやなアとはどふじやそな
たがほしがる駕の代呂物は此おつかあのお熊じやぞ
やいゝやいの此おつかさんの難儀を助けふとてそれ
で爰まで跡おふて貰ふて呉たじやないかいやいトお
をふりまはすおかし ても扱もそなたは孝行な物じやの
始終氣ならぬトこなし ても扱もそなたは孝行な物じやの
ふよう迎ひに來てたもつたさあ連ていんでたもてゝ
ひいてたもるかおはれていのふかエ、是そはくゝと
どふじやぞいのうトいぢ惡ふむしやふりつくお 梶エ、人
の心もしらずに面白そふにこりや外を尋ねる迄もな
いかゝ様靱負様のお行衛はおまへしつてゐやしやん
すじや有ふけふ晝のしだらといひ定めてどこぞのお
衆からたのまれて靱負様を盗み出し脇へかはして私
を一ぱいやる仕事どふぞ靱負様を早ふかへして下さ

んせいなア熊ゆきへをかへせくゝとはそりやマア何
の事じや梶何の事とはまがくゝしい是噂様あのゆき
へ様はお前も兼て聞ての通りとゝ様段々と大恩のあ
る助松主計様の御子息爺様の爲にも御恩がありやお
前の爲にも恩義もあらふしいは御主同前の靱負様
もしもの事が有たなりや今まで長々御せわをやり盡
した事も水の泡爰の道理をかみわけてどふぞ行衛を
あり様に熊否じや玄つてもいはぬア爰な思玄らす
の不孝ものめがあの靱負の親には死んだ老親仁やお
れ迄恩があるとは何の事じやコリヤヤイおのれが親
は團七九郎兵衛といふて二つ名とつたならず者先の
噂はてこねて後連におれが這入たもなどふで長ふは
生ぬばれ親仁死跡とつてもほんのめくさりまだも見
込は繼子のおのれが玄ぶり皮のむけためろこいつ大
きふ成りをつたら新町か島の内へ賣てこましや相應
の元手にならふイヤくゝまだそれぐらひじやて
んこつじやいつそ大名へ奉公になとこましてもし殿
様の手でも附たら我儘氣儘はいひ次第左團と濱田の
屋敷へ奉公にこましや直でもないヤツトウを見習ら
ふてめろの癖に力自慢ア、まゝよ生物の味しつたり

やまんざらそふも有まいとめをねむつて暮す内親仁の團七はがつくり往生介抱がてら取戻し賣といや四の五のと鳥の内へ見習らひの仲居奉公やしなひといやわづかのつまみ錢小悴の間から誰がそのめんどろを見てこましたのじや思ふた事は皆ぐれはませめてその入合せにかり衣裳までして出かけたりやお乳母様待んせなど、利口そふによふ金もふけの邪魔さらしたなコリヤ我が貰ひにきたゆきへめはな持てをる千手院の刀と助松の系圖書とをひつたくつてなま殺しにさいなんでとふに脇へほいやつてしもふたはいやい梶サ、そふしられては私がどふも熊たゝぬかその立の立ぬのと理屈をいふは誰がかけじや何ぞおのれひとりも大きふ成たよふに思ひをるかやいトおもひぢなむコリヤあの琴浦にはな爰にござる磯之丞様トおもひぢなむが惚てござるによつてその邪魔をするかはり千手院の刀は索より系圖の巻物もわけ取にして金にするそれにきよろゝと鞠負めが在家をいはふかい馬鹿盡しやがるなア爰なぬかみそめらふめが「立蹴にはつたと蹴られても義理ある親ぞと無念をこたへ齒をくひゑばりゐたりしがとかく詫るにゑくなしと笑顔つ

くつてもみ手をし梶ホ、ゝ、かゝさんとした事がてもマアこわいかほして何じやぞいなア最前からいはいしやんす事一つとして無理な事はムんせぬ長々お世話の上にお前の金もふけの邪魔した事じや物腹立は尤でムんす道理でムんすがもうゝ此後はどんな事があつてもおまへのもふけ事の邪魔は致しますまい程にどふぞ鞠負様の在家とその二品をどふぞ戻して下さんせ是慈悲じや情じや拜みます是モウシ「手ひき袖ひき膝をつき無念を隠す詫なみだ親といふ字はせひもなや熊ゑらぬわい拜みたをし置てもらうしたがそれほどはしくば二品をやりもせう又鞠負の在家もおしへてやらふが我が持てゐる琴浦の年期證文とかへてやらふか梶そりやおまへ無理といふ物熊むりいふのは親のかうけじやまだゝそれもかへてやる所じやなけねどかゝりやつながら親子の縁と思やこそこりや親じやぞよゝトおもひぢなむ突とばす磯之丞傳ハ笑ふて磯ハテお熊の申ぶんおもしろいけふの駕の趣向といひ傳こりやよつ程新らしい近年の新狂言じや磯ハ、ゝ、熊サアお二人り共とらずやらすなら手間隙はいらぬかの所へ行ふじやないか磯ゆかふともゝ

さあ傳八傳それ／＼早ふいて酒などのもふ熊サ、駕の衆もごんせ／＼

ト行かふとするおかし
ろく思入有て向ふへ立

梶は母様かう

なるからは私が命は投出してをりますせむ共わたしが頼む事がどふぞ鞠負様の居處その二品をわたしの

方へ熊かへさぬ時はコリヤおかぢわりや大方おつかあを殺す氣で有ふなア梶めつそふもない何のお前を

熊イヤ命を投出したといや切る氣じやサ、殺せ／＼傳熊ヲ、そふじや／＼切てもらへ／＼梶エ、マア何の

勿體ない熊何勿體ない物のほしさの附づいせうエ、憎てらしいマアどふしたら腹がいよふかうして／＼

アノ爰な死人めらうの獄門めらうめがうぬ「捻廻し／＼ふんだりけたりあげくには砂に摺附石に打附引

廻し引廻されても手向ひのならぬも無念さ口おしさ熊何じやなくか口おしいかヲ、悲しかる道理／＼そ

の涙をば此泥草履でかふして／＼ふいてやらふわへ「有あふ草履頼べたへ摺附／＼さいなまされこたへ

兼て思はずも無念と見つめる母の顔熊何じや／＼その顔何じや親にむかふて其つら何じや梶エ、母様で

なくばなア熊何じや母様でなくばとはそりやこそおれを切る氣じや有ふさあきれ／＼磯そふじや／＼コ

リヤ親を殺せば天下の式目傳一寸切れば一尺の竹鋸で引かへすぞよ磯ヲ、二寸切たら三尺の竹鋸で引かへすお熊磯

やつてくれ／＼梶ア、勿體ないどふしておまへが殺されう是か、様是程に被成つた上はどふぞ私がたの

みをば熊ヲ、系圖の一巻からさきへないふて置た通りにして返してやらんせ

ト顔にて仕方
磯ヲ、その一

巻をかうして／＼やらふわへト懷より手紙を出て傳の

ぞみの一巻じや受取をらうトおかち悔りしにすん／＼にきつとなつて梶ヤアこり

や大せつな一巻を熊ヲ、破つたら何とするぞ梶もふせびに及ばぬはいの

ト刀をぬいて
きつとなる

熊それ皆の衆磯合點

じや覺悟せいとかこの二人も一所にかゝる此立廻りの時向ふ淺へる住吉音頭になりうしろを切て落す遠見にお藏前の書割になる詠ら

通るお梶は四人を相手に駕をなだてにしている／＼おもしろき立廻りある此内お熊はほんまの系圖を懷中だてに隠す處にこまき傳八が落した嗣らん持の合符たばこの中へ入はれつる中へこまき傳八が落ち

おちた四人と立廻りの内お熊うろついておかちに行當る熊ヤアこりやほん／＼切をつた親殺しじや／＼

トいふ口をおか
ちおさへる内は

かご二人は遂て這入る磯之丞傳八はおかち切てかゝる傳八が刀はおかちを切てもふじ身にてきれぬ事有べし磯之丞刀はおかちが切

な一寸された心に此刀を引たり二人共一かせづい切附る兩人悔りして兩方へ這て這入る此内おくまおかちの肩をかぶりつくるなふし

はらひお熊を見事に切るお熊わめき乍遊あるき傘にて受留る御こし太鼓に成り兩人はげしく傘の鳴物段々あつて／＼兩人ともつかはれつし

し打附られたふたふたなる磯之丞の刀を改星明りにてすかしはれつしんとなるおかち起上つて磯之丞の刀を改星明りにてすかしはれつ

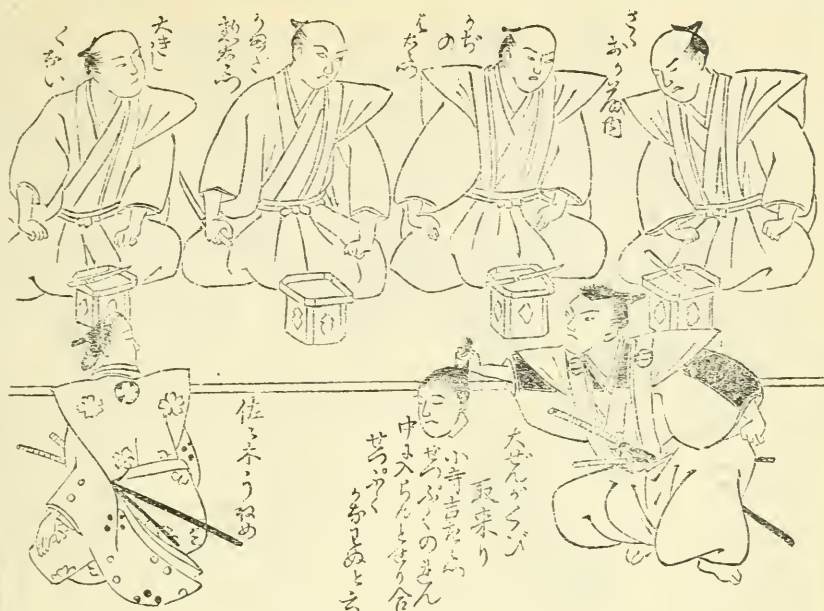
るべにて水なくみ上げのりを洗ふ此時釣瓶の中よりまき物たばこ入
て共にころんで出るおがちさぐつて取あけ巻物ゆへ嬉しやといふ心
にて右の刀のさやをさぐりとする此時おくますほうだらけにて起上つ
ておちの足にかぶりつくおがち愁ひの心にて上手まで引づられな
がらいてまき程に足にはれ上るお熊草井戸の水船へはねかへつて
見事にかへり落る水けぶり立水水パツと上るおがち悔りしなからは
はおがんで吐きひやうし幕

硝後太平記の書の寫

後日狂言さいれ石も横綴二冊にて書も又七葉有珍ら
しき書組三葉を寫して爰に出す此假名手本の世界の
物を數種撰て忠臣藏類聚大成として兼て草稿成れり
然れ共此硝石前後狂言の筋書は誠に古風なる昔狂言
なれば有の儘爰に出すものなり文中に高位ならぬ詞
にも賜ふなど云は此頃のならはせと見へたり城受取
の節勅使とあるもおかしく藤内、惣右衛門が女房
くを去る間の仕組珍らしく義士傳の堅みを和らげ
し作なるべし四十七士の内笹岡藤内、梶の葉右衛門、
鎌田惣右衛門、小寺吉左衛門此四人を此狂言の立役
と見へたり假名手本にては矢間重太郎、千崎彌五郎、
竹森喜多八、寺岡平右衛門と一變せしと見へたり出
雲前を顔世の前宮内を由良之助力太郎を力彌太田大
膳を斧九太夫床世辰姫を小浪と呼かへ宇都宮公綱を
佐々木主膳を桃井石堂と思へばさして不審もなかる







べし後太平記の場に力太郎と惣右衛門が男色の仕組復讐後の和らかみにて當時歌舞妓には用ひぬ所にていと珍らし吉左衛門國への注進は二度目の清書寺岡切腹の原本なるべし

さうれ石後日狂言役割の寫

本望をとげてかへる曉のかね十兩の酒代請取申口上覺書高名を石塔に手向の水清き流を子孫に傳ふる文武の條々

硝後太平記

後日
三番續

夫婦のきぬぐきて見る旅の宿假初乍物思ひ四十七度武運長久つは物共の四十八願成就の所繁昌

目録

并梓弓手まはしの宵働きは下女の玉だすき

第一 おもひぐさ

附り矢竹心のがうなものかしらの分別藏并増鏡うつりの姿な女ぼう立の玉くしげ

第二 ふのぶぐさ

附りくもりなき心のがうなもの使の勘定藏并故郷の錦かざりのよい出立の奥方の玉すだれ

第三 わすれぐさ

附りいつはりなき心のけうな物語の調法藏

役人かへ名次第

座中不殘出申候
大あたり狂言

口	澤	國	八	金子伊左衛門
ま	つ	し	ま	山下はなのせう
き	ぬ	が	さ	平
の	む	ら	ご	んのしん
力	太郎	い	ひ	名附たつ姫
は	ぎ	の	き	く川京之助
す	ぎ	の	き	く川京之助
ま	す	す	ほ	中村萬三郎
い	も	と	し	ら玉ひめ
う	つ	の	み	や公つな
さ	い	し	だ	うぢぶの助
太	田	大	膳	あさだ善右衛門
つ	ぼ	か	ね	水木きくのせう
あ	か	し	は	な井吉三郎
す	の	わ	ま	よしざはせん菊
そ	の	す	ら	とみなが若竹
お	ば	す	て	をのえうこん
さ	ら	し	な	中村さの十郎
ゑん	や	判	官	おくいづものまへ

奥	山	女	房	お	み	き	芳澤玉ぎく
堀	江	彌	次	兵	衛	大	橋武右衛門
子	房	お	し	吉	宮	木	徳之丞
女	房	お	し	げ	あら	し	八ちよ
梶	野	葉	右	衛	門	吉	岡求馬
さ	ゝ	を	か	藤	内	三	浦儀左衛門
子	竹	之	助	杉	本	新	太郎
女	房	お	す	が	太	夫	座本
か	ま	だ	惣	右	衛	門	立役
子	吉	三	郎	永	を	か	小四郎
女	房	お	き	く	花	澤	龜十郎
小	寺	吉	左	衛	門	片	岡仁左衛門
小	寺	吉	内	山	田	甚	八
酒	屋	久	左	衛	門	澤	村音右衛門
料	理	人	才	兵	衛	と	く若金八
同	け	ん	も	つ	若	井	半十郎
し	ゆ	ん	て	つ	山	野	かん六
立	譽	和	尚	浅	田	藤	七
島	川	く	は	ん	八	染	井平左衛門

大	大	岡	勝	杉	磯	川	竹	か	子
岸	岸	島	田	野	川	瀬	も	た	孫
宮	力	子	子	子	子	子	り	山	太
	太	半	さ	次	か	か	子	子	郎
内	郎	之	太	郎	め	八	太	の	郎
山	山	助	郎	吉	若	中	郎	助	宮
下	下	芳	杉	山	井	む	郎	あ	木
京	小	澤	本	下	久	ら	郎	らし	新
右	才	梅	平	與	之	源	太	源	太
衛	二	松	次	三	助	太	郎	次	郎
門			郎	郎	吉	郎		郎	

上おもひ草の筋書

大かたの物を思はぬ人に心をつくる秋の嵐松に聲有て向ふの堤より大名の行列花やかなる有様殊更御近習の若侍は何れも美しき女房達男姿の打扮中にも局らしき女房かいぐしく進出て何れも御供の衆中へ申渡す事がある此乗物の内にござるは鹽谷判官高貞様のみだいで出雲の前様にて渡させたまふが判官様には高の師直が狼籍にて終に御害害遊ばされ御本領まで召上られしゆへ御家來大岸宮内殿を始何れも敵師

直を討んと御國を出て折からの秋の木の葉とちり行て淋しき御館の内にはあるにかひなき我ら計り出雲前様にもひとりふせやの枕の塵やるかたもなき御物思ひに御心もすぐれさせ給はずさるによつて大岸宮内殿相家老太田大膳殿より御徒然をなぐさめ奉らんとて今日御申あるにより忍びてお越被成るゝ間何れもぬからぬやうに御供あれといへばあつとこたへて長刀さすが女の行列風流にて程なく大膳方へ入せ給ふ太田の屋敷には姫料理人の才兵衛を呼是こよひのお客をたゞいつもの通りのお客と思へば御祝言振舞じやとあるそれに此様な料理では濟まい程に獻立をしなをしやといへば何じや御祝言のふる舞じやそれはあての槌がはづれたしたがおれは祝言の料理の仕様をしらぬ幸ひの事がある飯焚の玉が諸事才覺なもののあれをよんで談合せうと玉を呼出す此玉はもと鹽谷判官家來鎌田惣右衛門が女房のお菅なるがいかなる心入にや賤しき飯焚となつて此屋敷に勤櫓がけに摺子木持でともぐ料理の談合する所へ奥より出雲の前様ながら走り出さりと口おしや今かふした身になつたれば大膳めがあなどつて無體な事いひかけ

ると獨身をもやし腹立給へば大膳も奥より出て不興
顔局は下心あるにや是出雲の前様何とてさやうにお
腹たてさせたまふまづあなたのお心入もとつくと御
聞あそばされと色々すかし申せど何も聞事はないそ
ちは大膳のひいきをするかとあれば何しにあなたの
ひいきを致しませうあまりお腹立ゆへお氣があがつ
たさふなハテ心の附ぬそれお茶上ませいといへばア
ツといふて飯焚のお玉茶を持て出て互ひに顔を見合
せ兩方共に興さめ顔にて暫し詞も出ざりしがしばらく
く有て出雲の前我身は鎌田惣右衛門といはんとした
まへば玉ちやくといかにも鎌田惣右衛門様にも一期
をりましたといひまぎらはし惣右衛門様にも殊の外
懇ろに仰られ随分辛抱せよのち／＼引上てよい身に
もしてやらふと御意被成ましたがたゞ惜きは太田大
膳めでござります皆一統してお主のかたきを討ふと
はしをらいで金銀をむさぼりとつてさりととは腰ぬけ
めとさん／＼あしぎまにいへば局氣の毒がりヤイ玉
あたりを見て物をいへ是にござるが大膳様じやとい
ふにわけもないあなたは太田大膳様とこそ申ますれ
おゝいかにも今は監物様といへどもとは大膳様とい

ふたと聞やいな又いひ直す智謀の程こそたのもしけ
れ時にし出雲の前ヤイ大膳そちが最前いふことには我
心にしたがはずはおれをさし殺してそちも腹切とい
ふたが何ほどいふてもそちが心にしたがふ事はなら
ぬ程にさあ殺せとすこしもわろびれ給はねば大膳い
よ／＼腹を立いかにも男のいひが／＼りなればとても
たすけはせぬとすでにあやうく見ゆれば惣右衛門の
女房その儘大膳が袖にすがり是は憚りながらおまへ
の仕方が悪ふござります戀と申物がさやうにあらけ
なく鬼か鬼神を平ぐるやうに假初にも腕まくりして
皺面作り太刀刀をふり廻しておどせばとてそれに恐
れてなびくものではござりませぬもと戀路といふ者
は情を第一に心いきひとつの物なればつれなきを恨
とすいく度も千束の文に筆の命毛をきらし返され
ては濡る袖をかこち互ひに心の奥山に分入てかはる
なかはらじと契るこそ誠の戀なれさき様は何人にて
もあれほれたといふはさりととは憎からぬ物もと女の
色づくるも男にほれたさの事出雲の前様にもお
心の内によもや憎しとは眞實思し召まじけれど此大
勢の人中にていかにもと御返事は被成にくい筈なれ

ば此戀は私が請取ました程におまへを始め皆々奥へござりませとさま／＼たらせば大膳笑壺に入て扱々我はいかい粹かな然らば此戀はそちが埒明るか成程受取ましたといへばいよ／＼たのむとみな／＼奥にぞ入にける惣右衛門女房出雲の前の傍により判官様のござりませぬゆへさま／＼の御難儀おいたはしうこそ存ますれ私の爰へ奉公に參りましたも夫惣右衛門殿申されますには敵師直は皆々心を合せ討取べきが太田大膳めを安穩にてをくが黄泉の障りとなるといひ置れましたゆへ大事の男のよみぢのさはりになるやつをしばらくも生をく事の無念さ何卒討て夫の心をやすめたく晝夜油斷なく附ねらひますれど今に本望をとげませぬ女ごゝろのあどなく跡さきわかず語るこそうたてけれ局いち／＼立聞して走り寄りこりや／＼皆々様子を聞た扱々おのれは恐ろしいやつじや此通り残らず大せん様へ申今に思ひしらせんとかけ入を最早のがれぬ所とお菅料理庖丁にて後より切附ればうんといふて打たれうへを下へと組あひしが難なく局を取てふせ是々才兵衛此間に御臺様を連まして立退ともがけば才兵衛もとよりおろかしき

者にてうろたへまはればけはしき中にもお菅ちからを附前垂手拭をはづし是を御臺様に著せまして小寺吉左衛門殿親吉内殿方へお供申せと細々いひふくめ落し申あら心やすやと局をばさん／＼に切殺し死骸をかたはらへ押よせ御臺様の自害被成しと呼はれば大膳驚き侍あまたつれ駈出様子を見れば御臺にてはなし局也扱は最前の女めが殺したそれ尋ねよといふひまに表の幕引おろし行方しらす落行けるこそ手柄なれ▲上の中入

かうじのもとにけんぎよたへすてうしやうの家にしふ有とはまことなるかな鹽谷判官高貞の家臣大岸宮内を始その外一味の與力四十七人の人々は終に本意のごとく主君の敵高の師直を討取つて勝鬨作つてかへるさや會稽の山高く何れも並ゐしに宮内くわんじと打えみて誠に武運に叶ひしか又は亡君の御守りめつよきゆへかさばかり大勢の中へわづか此人數にて亂れ入敵を討取あまつさへ味方ひとりも討れず本望を達する事ひとつは各のかい／＼しき御はたらきゆへ殊には身不肖の某が申事御ゐはひなく彼是身に取ては何程かよろこばしく草の蔭なる亡君にも何ぼう

か嬉しくおぼしめされんとあれば何れも同音に是と申もひとへに貴公の智謀あつきゆへと互ひに勇みあふこそ理りなれ力太郎藤内兩人は薄手少々おひしが力太郎藤内殿こなたには御疵はいたみ申さずやとあれば某が疵はわづかのかすり手なればすこしも苦にはなりませぬがこなたの疵はよほどの事なれば嘸いたみませうとあれば惣右衛門立寄見て是は骨へくりました程によほど痛みませう苦しからぬ事なれば跡に下つて靜にござれたゞしどこぞの戸板をはづし乘ませうかとあれば宮内聞て何と痛むか是から御菩提所迄あゆまれまいか何れもの御せわになれば遠慮のない事じや若いものは手をおへば恥辱の様に思ふそふなが随分の猛將も時にのぞんでは手をおふものそれが侍の手柄なればすこしも苦しからずとあるに成程御菩提所まで參られますとすゝめば併し今にも師直方から討手にむかひなばその疵にても見事働らかふかいかにも此體なれば思召はござるまじけれと心いつばいは働きませんとあれば近ごろたのもしと父子の禮儀ぞこまやかなれ時に惣右衛門何といづれもにはいかゞおぼしめす宵に食事をしたゝめ申たまゝ

なればことの外空ふくにござるが見ればあれに酒屋がござるほどに少々たべて參るまいかとあるに各是は惣右衛門殿よくお心が附ましたさすがでござる然らば私求めて參らんと惣右衛門酒屋に行て戸をたゝき酒がすこし所望したい賣てくりやれといへば亭主寢をびれたる聲してどこからじやとめをすり／＼表に出て人々の有様を見て大に驚き内へ逃入り戸をおしたつればいかさま我々の體を見ては恐るゝも理りさりながら少しもくるしからぬもの共なればせひ酒を所望したしといへば内から爰は代官殿よりいひ附が嚴しうござるによつて居酒は賣る事はなりませぬと取あはねば血氣にはやる若武者共生ぬるい戸を叩きわれとはやるを宮内しづめて所の法度とあればもだしがたし價をやつて是にあふた程酒をくれ爰にてはたべぬ外へ持行たべるとおしやるとあれば惣右衛門鼻紙袋を格子のさまより投入右の通りをいへば亭主聞とゞけ四斗樽一丁表へ持出見れば金子が十兩ござります是ではおかねが過ますほどに此價程酒あげませうかたゞし引残りを金子にてあげませうかとあればいやく／＼一樽にてよふござる金子もそのま

まとめをかれ我らはけふ有て翌をもしらぬ命もし後日にとふ人もあらば其價ほど酒賣たと申されよその方の名は何と申す私は酒屋久右衛門と申まする然らば御意次第に此金子を申受まししせんお果被成ましたと承りましたらば残る金子は御追善のけうおうに致しませうと一禮して内にいれば扱々律義なる者でござると鎗の柄にて酒樽をさし荷へば惣右衛門さきにすゝみてあゆみしが立歸りて見れば向ふより大勢の人音がいたす是はまさしく師直方よりの追手と見へましたそれ備へよと何れもかたづをのんで待かくる處へ屈竟の侍數十人拔身の鎗さき揃へて出来る人々のま近くなれば先にすゝみし侍ひざまづきて見申せば何れも一よふの白小袖にて只今事にもおあいなされしやうに見受ましたが各の御けめう承りましたい事とあれば宮内聞て成ほど御推量の通り我々は主の敵討にて唯今首尾よく打とめまして歸るさでござるして御自分の御名は何と申ます某はうつ宮公綱が家來石堂治部之輔と申ものでござる扱は宇都宮殿の御家臣でござりますかわれゝは鹽谷判官高貞が家來どもにて敵師直を討て判官が墓所へ參るがお構

ひなく御通し彼成ますかといひもはてぬに惣右衛門氣短なる男なればもし御とめ被成るゝと御ふせうながら我々お相手になり申とあらけなくいへば御主人のかたき師直殿をおうち被成て御通り被成るゝを何とて公つながおかまひ申さふやうが御ざらぬいそいでお通り被成然らば罷通ります御歸り被成たらば公つな公へもよろしく御申下されなる程かしこまりましたおさらばゝと互ひに一禮して立わかれそれより人々は心靜かに御寺へ參らるれば立舉和尚出たまひ扱々何れも本望達してお歸り被成たか今朝七つの時分か首尾よく敵を討取たと御家來衆兩人に師直が首をもたせ下されしよりやれ嬉しやおのゝにもつゝがなく御かへりあれかし扱何とがなとそれより今までは門ぎはに立盡し何かと物案じ致した所に何れものこらず無事にておめにかゝる今の嬉しさ御推量あれと衣の袖をひたしたまへば何れ共に涙を流したれ有てさやうに申てくれませふ近比有がたふ存じます時に和尚今朝も先だつて師直が首を御もたせ下されしが見申せば又首を持參被成しが是は誰人の首にてござるぞ御ふしん御もつとも師直が首二つあらふ

やうはござりませぬ敵は大勢にてござれば跡より追
手の參る時首を奪はれまじき爲是はあらぬものゝに
せ首にてまさかの時には首を渡し申さんと是もひと
つの智謀の様なものでござります最前の首が誠のも
ろのふが首にてござりますれば亡君へたむけませう
間御出し下されとあれば和尚感じましゝて首を出
して渡したまへば宮内受取やがて主君の御墓のまへ
に備へ合掌しらいはいして日外御尊骸にむかひ奉り
て申上候ごとく皆々心を合せ御かたき師直が首を討
て只今御墓へ備へ奉ります今迄の御いきどふりをさ
んせんられはうからざれんの佛身のゑさしめたまへ
南無亡君尊靈佛果菩提と回向し奉れば何れものこら
す同音に回かう有忠義の程こそ殊勝なれ暫らく有て
宮内師直が首をおこし器物に入亡君にたむけ申せば
もはや此くびは入申さねば和尚様に渡しますよき様
に御取置下されとあれば成ほど其段は愚僧が受取ま
した扱柄を申附て置ました程にいづれも勝手へござ
つてまいれ夫はお是しかたじけなふござりますしか
し一樽のもたしましたれば是で下されませふおかま
ひ被成まするな夫は風流な御心入しからば後程愚僧

も參りてたべませふ幸ひさる方より珍らしい肴を二
三種えましたれば後ほど持さん申ませうと奥へ入た
まへば何れも打くつろぎもはやかたきは心のまゝに
打とり此世におもひのこす事はなしまづゝ酒をお
墓へも備へ我々もたべんと酒樽をまん中に置きし受
引受おさへた今ひとつとさまゝの亂れ酒扇おつ取
て舞かなで皆打くつろぎ兵の交はり頼みある中の酒
ゑんかな然る所に和尚は惣右衛門女房のお菅と彌次
兵衛娘を連出て宮内をかたはらにまねき此兩人夕べ
こゝへ參られ候ゆへとめ置ましたが苦しからずばあ
はしませふかとあれば是は珍らしや成程あはしませ
うとつれ出是々珍らしき肴進上と有はいづれもそれ
はようござろふと何心なく見あげて是は惣右衛門殿
お内儀彌次兵衛殿の娘御先々御息災で御一段と互ひ
に昔忍ぶの涙かな彌次兵衛娘は父の膝もとにもたれ
ての嬉しなみだ彌次兵衛も涙をおさへ母はみへぬが
何とした母様はおまへの御國を御たち被成れし時分
より御煩らひ被成ましたが終にお果被成ましたとい
ひもあへぬに何母は死したかと又改まる涙ぞ哀なる
惣右衛門はお菅にむかひそちは何として爰へは來た

まづ御臺様には御けんごにて渡らせたまふか成程御そく災にござりますがそれにつき太田大膳めが妻にせふの女房になれのとさまぐ御臺様へ無體を申ますとあらまはなせば惣右衛門たまり兼何と宮内殿憎ひやつめではござらぬかといへば宮内はすこしも驚かずハテその分にて何事も聞せらるゝな我々が此世に長らへてその善惡を糺す身ではござらず我々は師直を討迄の命でこそござれ何事も御かまひなされなそれゆへ小寺吉左衛門をお國へ下しました諸事は吉左衛門がさばきませうとあれば何れも仰らればその通りよしない事に心をくれがいたしたとかく酒にせふと又改まる酒裏所へ佐々木主膳と宇都宮公綱御上使に參るれば各つゝしんで詰招ある兩人は床几に腰をかけまづ公綱御上使の趣きに鹽谷判官が家來共意趣は師直やしきに残せし書置に相違はなきか時に宮内慎んで君御代萬歲のため七堂伽藍を御建立あそばさるゝ其役を判官高貞に仰附らるゝ所に高の師直殿狼籍によつて判官堪忍のむねをしづめ兼師直殿に手をおふせましたが場處あしく慮外と有て生害に及びました相果ます時分師直を討とめずして無念

なと申一言骨髓に徹して忍びかたく何卒矢一筋射かけ腹切て相果んと存せし所に武運の冥加にかなひしか討たてまつり是より外天の照覽もあれ野心は少しもござりませぬと詞を清しく申上るゝ其後主膳懷中より又書附をとり出し鹽谷判官高貞が家來の内

一大岸宮内 一竹田文右衛門 一船岡五右衛門
一有馬喜兵衛 一岡松勘右衛門 一堀尾安左衛門
一上村勘兵衛 一木山里右衛門 一堀部彌次兵衛
一原善左衛門 一水無瀬七太夫 一磯川十左衛門
一大森助十郎 一大谷半九郎 一千種三次郎
一岡山銀右衛門

十六人右の者共は佐々木主膳に御預也

一大岸力太郎 一笹岡藤内 一鎌田惣右衛門
一梶野葉右衛門 一伊賀彌兵衛 一高岡源八
一石崎與次兵衛 一下村次郎太郎 一田川半左衛門
一横野甚助 一岡部右衛門 一富松五太夫
一岡部右衛門 一松田定九郎 一磯間十兵衛
十五人右のもの共は宇都宮公綱へ御預也
一浦石瀬兵衛 一太田八郎助 一奥村矢太夫
一赤坂平藏 一早瀬藤兵衛 一朝村又七郎

一松島八郎左衛門 一吉岡村右衛門 一小林佐太八
一岩橋傳次郎 一大間甚六郎 一松山喜右衛門
一大野十太兵衛 一勝浦新十郎 一小野村小兵衛
十五人右の者共畠山左門へ御預也

何れも右のおもむき承りかねては死を一所にと思ひ
かはせしに所々の死にをせんかと各今更の涙中にも
力太郎宮内にむかひ母様おはて被成るゝ砌りもお前
と一所に死ねと仰られましたに今又別れになれば一
入母様の事が思ひ出されますと涙を流せばそちはま
だ母が事思ひ出すかされば敵師直を打ます迄はなか
ゝ母様の事は思ひ出す事もござりませなんだが打
おふせての後は母様の御事のみ思ひ出しますと歎け
ば宮内も涙をながし今こそ暫く別るれど未來はかな
らず一所にめぐりあふぞといさむる袖も涙なり惣右
衛門はお菅に心ひかるれど人めづゝみの高ければそ
れといはぬばかりに和尚にゆびざしして何よりかよ
りお前の御回向をたのみ上ますとうはべは往生心の
内は妻の事のみ頼をく互ひの心ざし思ひやるさへ涙
なり彌次兵衛も我より外にたづきもしらぬひとり娘
のふびんさあはれ男子にてもあらば死を一時にして

未來までも召つれん物と心まで涙をおさへそれと計
に和尚に頼をく何れも互ひにつきせぬ名残是ぞ今生
の別れ也未來は打つれ一所に亡君へ目見へせんと
さらばゝゝのわかれぞ哀なりけり

中しのぶ草の筋書

夫なき宿はいとゞ露けき忍ぶ草しのぶかたゝおほ
き昔と鹽谷判官高貞の後室出雲のまへは宿願の事あ
りて二十三夜待被成此度師直を討んと御國を出し御
家來の妻や子共をなぐさめのため呼よせ給へば何れ
もよろこび打連て來りたまふ中に小寺吉左衛門親の
吉内は兩眼しひて見へざれば吉左衛門内儀一子吉三
郎をつれ下人才兵衛諸とも介抱にて御屋敷へ參らる
れば出雲の前出たまひ是は吉内内儀何れも早かつた
皆達も淋しからふと呼にやつた心置すゆるりと遊び
やとのたまへば吉内私は年罷りより目は見へませず
けつくお遊びの妨げなれば參りますまいと存じまし
た所にせひ參る様にと仰下され有がたふござります
出雲の前されば殿様の敵を討んとて宮内を始め何れ
も國を立のかれしが今に何のたよりもないうつて
何とかとあまり氣遣ひさに皆々無事にて歸りやる様

にも思ふて二十三夜待をするが御かげにて首尾よく敵を討戻りやつたら嬉しからふとあれば吉内それに附夜前ふしぎな夢を見ました皆々敵を打取立歸ると思ひましたれは夢が覺ましたと語ればそれは嬉しい夢じやと悦び給ひ先々めでたふ盃せふ是は吉左衛門の子が盃さすと皆々打より御酒宴の折ふし娼衆表より走り入て只今關東から吉ざへもん殿歸られましたと口々にいへば御臺始みなくよろこびたまふ所へ吉左衛門罷出れば扱々めづらしや皆々無事で何と敵を討やつたか様子が早ふ聞たいといさみたまへばまづはお前にも御機嫌よく御わたり遊ばされめでたふござります成程首尾よくかたきをうちおほせました宮内申されますには誰有て此事をおまへえ御しらせ申者が無い私に歸る様にと申されましたによりあら曲もなやお國をいづるより何れもと一所と存じ極めしもの何程御申有ても歸る事は致さぬと申きりましたれどさまぐことはりをつくし行かへるもおなじ御奉公と申されました故せひなく立歸りましたしてその敵を討た様子くはしく嘶して聞してたもと御前近くめさるれば成ほどおはなし申上ませう皆々鎌く

らへ下りましてより折々御ぼだい所へ打寄ましてさまぐと相談仕りとかく夜討にせんと何れも相圖を定め心中をかためすでに日限も近づけば四五日前より皆々假宅を明ましてそれよりはかしこの軒の下この木蔭にゐみその夜になれば八つの時刻に忍び入筈を皆々心せき九つに師直が館によせかけ兎角一時もはやく討取れといふやいな惣右衛門高堀のりこし内に入とその儘面々かけや才槌にて門を叩きあけわれもぐと亂れ入筈をたけと申たれば宮内籌は火の用心心もとなしとめんく懷中せし蠟燭をともしてかしこ爰に立ましたればそのまゝ日中のごとく敵の方には寢入端の最中なれば途方を失ひうろたへまわるを十文字の鎗さき揃へて爰に突とめかしこになぎふせ追つまくつゝ切立ましたれば宮内制してかならず女重を切るな自然出家などのとまり合せて居まじき物にてもなしそれと見たらば助よとそれよりこゝかしこをさがしますれど師直が見へませぬにより皆々一所に集りもはや武運も是迄と互ひにさしちがへんとせし所を宮内いさめてあれに一構へ奥らしき所あり爰を捜せといふやいな我もぐとふみ込捜せど

爰にも見へず正しく師直が聞と見へて綾錦の夜著蒲
團の上を撫て見て今迄臥したと見へて暖かなれば外
へは遯ず館の内を捜せとら口より雜物部屋のあた
りにまわれれば片隅に入音するに爰こそ曲者なれと鎗
の石突にて突たつればたまり兼て内より柴薪をなげ
かくるを皆々寄て引出し首討とりしか共誰が一人
師直を見しりたるものなければあやぶむ所に宮内な
るほど是が師直也下に白無垢上に綾縮の衣服をまと
ひ眉間に疵有ば疑ふ事なしとあれば皆々よろこび勝
どきあげて火の用心萬事に氣を附心靜かに立のきま
す道にて何方から共しれず粥を下されしゆへ我々も
たべまして其夜の内に御菩提所まで退まして御墓に
首を備へみな／＼回向仕りましたとあら増御はなし
申上れば御臺吉内その外の女房達いさみあふこそ道
理なり是は宮内より上まするようにと申附ましたと
さしあぐれば出雲の前ひらき見て是勘定書なればお
れが見る物にてはないとのたまへばその儀也宮内わ
けて申附ました是はおかね配分の勘定書でござりま
すその節も大膽申すには知行高に應じて配分せふ
と申ましたれど宮内申されますは知行がさの者は衣

類調度を代なしても五年一年もくらしかねまじ小身
の衆には貯へもかるければすへ／＼は心もとなしと
かく何れも等分に配分召れと有に皆々配分仕りまし
た一萬兩餘の金子を何としたぞと御ふしんもあらん
かと存かやうに認め御めにかげられますと有ば宮内
ほど念の入た人はない是までには及ばぬ事して又宮
内その外の衆はいつ頃歸らるゝ事ぞされば其儀はき
つふ不定にござりますればいつ歸りませふもしれま
せぬそれは何共心細い事をいやる國を立るゝ時には
敵を討申さば其儘歸りませうといやつたによつてけ
ふか翌かと待しに頼みすくなき浮世にはなりはてた
と歎きたまへばむねとの女房たち子供衆は何とせ
う悲しや是に附ても吉左衛門様のお内儀様や吉三郎
殿は御息災でおあひなされさぞおうれしからふうら
やましやと皆々涙の雨なれや女心の跡先なく吉左衛
門女房は是吉三郎我身はとゞ様にあやかつて果報な
人じや吉内様およろこび被成ませとよそのなげきに
身のよろこび是もなみだのたねなれや吉内三寶を取
よせ脇差抜て前に置押肌ぬいでヤイ吉左衛門おれは
腹を切る介錯をせよとあれば皆々あわてゝおしとむ

る出雲のまへおどろき我身はなせに腹を切やる殿様の追ばらを致しますすハテ譯もない我身は隠居しやつていまだ隠居料も下されぬに追ばらきりやる所ではあるまいとのたまへば吉左衛門こなたは氣が違ひましたか何で腹をお切被成るゝおれは腹は切たふなけれどおのれへつら當に切皆々御恩をおもひて死を一時にするにおのれひとりのめくゝと立かへりて今此衆中にめでたいのうらやましいのといはれて目こそ見へね何と顔が合さるゝ物ぞ國を立鎌倉へ下りをる時には随分御息災でござりませもはや今生ではおめにかゝりますまいとぬかしたをわすれたか腰ぬけの畜生めのと恥しめらるれば吉左衛門も返答なくもくねんと座して口おしがれば女房心もとなく夫の脇差の柄をとらまゆれば吉左衛門腹をたておのれ男のこしの物に手をかけて何とするいやどふすると色をむすんでしかればおはらのたつまゝにもし短氣なお心もおおろふかと存とめましたとあれば短氣な心があればおめくゝと國へは戻らぬおれは命がおいしいおのれ最前のやうに御息災でおかへり被成て嬉しや吉三郎も嬉しいか吉内様にもおよろこび被成ませと人

々の歎きもかへり見すぬかすその時には御臺様をはじめ皆の衆へおれは顔に火がたかれたいかに女なればとておのれも侍の娘ではないか暇はやらねどその悴はおのれにくれた成ほどおはらのたつは御尤何事も私のわるふござります随分吉内様にも孝行に致しませう程に御かんにん被成て下さりませ何じや吉内殿へ孝行にせう今口ではいはねど心の内では縁の切たれど今までの通り夫婦じやというを直せば吉内あいづがいとまをやらいでもおれがそはせぬとかく命があるゆへに口をしき事を聞と又腹きらんとするを吉左衛門おしとめ成程さやうにおぼしめさるゝも理りさりながら今三時お待下され夜が明ましたら御いちぶんの立やうに致しませう何と夜が明たら一ぶんのたつ様にせうどれこゝへこいと引よせむなづくしをしつかととらへ扱々おのれは卑怯ものじやおれが介錯をせよといふを氣の毒さに今三時までといふおれをたらして此ばをのがれんとなヤイものしらすめおのれが幼少の時若殿のおそばにおつたれば大殿のごらんじて我成人したらば武士のいきぢは親吉内にあやかれとて忝なくもてづから御ひざの上には

かれしがさばかりの大御恩を忘れて未練のふるまひ
四相を悟る宮内なればとても役に立まじき者と見て
追戻せしを其恥もかへり見ぬ腰ぬけめと子をおもふ
親の誠有武士の心ぞ有がたけれ吉左衛門懷より一通
取出し成程お腹立は御尤しかし私が心底は此一通に
認め置ましたれば今すこしおまち被成夜明なばごら
んなさるべしと手に渡せば何と此中に様子が有とな
然らば夜が明てから披見んとすこし色をぞ直さるゝ
その時又吉左衛門一通取出し女房に渡し是吉三郎十
五に成りし時そちひらきて見せよ今ではないかれが
十五になりし時の事と言渡し扱御臺様へ申上ます夜
を日に繼で参りましたゆへ殊の外草臥ましてござり
ます間少しのうち休んで参りませうといへばいかに
もやすみやじやが必ならず短氣な心をもち腹ども切
やんな何が扱侍の冥利にかけて只今はさやうな心は
ござりませぬすこしもお氣遣ひ遊ばされますと勝
手に入ば吉内最前のみ取出し女房にこれをよんでき
かせとあれば内儀是は夜が明て御らの筈なれば今
すこし御待被成ませいといへばせひよめとあるに詮
方なくひらきて見ればしら紙にて何も書てはない扱

扱にくきやつでござります私をだましました腹のた
つ事かな是おかた吉三郎にのこし置た一通をひら
いて見やわけもない事を仰られます是は此子が十五に
なる時ひらいて見よとくれぐれ申されましたもの何
の十五定めてろくな事は書ては置をるまい早々ひら
けさもないとおのれ共に生てはをかぬと氣色かはれ
ば御臺様を受取ひらき見たまひ是には何か書てある
おれがよむほどによふ聞いていやかしこまりました一
筆申のこし候此たび亡君の御敵を討ん爲一味の輩と
鎌倉に下りしかど又京に一けつしがたき事有により
立歸りしが又罷下りて死をひとつにす其方出家にな
しをく事親の慈悲なり成人ののち出家相續の進退は
その方の思慮にあるべきものなりおつて申のこし候
我ら仕古せし帶一筋、刀一腰、鎧一筋、鎧一領のこし
をく成人の後幸ひもあらばとやめをかるべきものな
り小寺吉三郎殿同名吉ざへもん何と吉内是はがてん
のいかぬ書やうではないか師直が一族共後々子供に
仇をのこすとも出家は助けをくで有ふずれば親の慈
悲なり又出家に此鎧刀などはいるまじきが成人の後
心おこし侍にもならばとやめをけとの事そふな何と

深い心ざしではないか成ほどさやうでござります其心底ともぞんじませいでよしないうらみを申まして悔しうござりますと歎く所へ吉左衛門旅装束にて裏門より出て表にひざまづき今關東へまかり下ります是よりおいとまごひ申あげますといへば御臺御らんじ然らば暇乞にいはふて盃をせうとさしたまへば是は有がたう存ますと頂戴すれば吉内もはや下るかその心ざし共しらいでさま／＼の不足をいふてくやしいさらばじやといひもあへず脇ざしはらに突立れば是吉内殿何が不足で腹をおきり被成るゝ何とふそくが有て腹を切ふぞそちが今の心てい見てもはや此世に思ひのこす事がないにより殿様のおそばへまいるとあれば然らば末期に盃をさしませういかにもいただかふとひとつ受てのむやいなや空しくなれば吉左衛門なみだながら東のかたへとわかれ行あとにとゝまる人々の心の内こそあはれなり△中の中入明わたる春のけしききのふに變るとは見へねど何となく人の心も浮たつこそおかしけれうつの宮公綱かたに預られし人々の内力太郎、藤内、葉右衛門はけふ正月の十五日なれば鏡に向ひて髪ゆはせ翌しらぬ身

にも春の壽きしてのち葉右衛門何と惣右衛門殿はまだ寢てか藤内あの男は骨牌好にてゆふべから其まゝ打あかしてゐられますととり／＼噂してゐる所へ公綱の家來運之進銚子盃持出ておかしき挨拶ひとつふたつの盃半に公綱妹の白玉姫の部屋より腰元どもあまた羽根とはご板を持て我さきにとさはがしく走り出れば跡より白玉姫出たまひ我達はあの方様の御用はきかふとはせいで何をやかましくせり合ぞとしかりたまへば腰元のとこよわたくしがむま屋へ用がありて参りますればあの衆も同じ様にいかふといやりますと互ひにせりあふ中へ力太郎、藤内、葉右衛門立出てお妹御様此中はおめにかゝりませぬと互ひに挨拶過て藤内とこよ殿こなたは姫ごせの大膽なむまやへは何しにござるされば此はねがまひませぬにより馬に蹴さしにまいりますとあれば羽ねの舞ふまじないありとさま／＼おかしき事いふに力太郎はねはこふすればやう舞ますととこよがはねをなをしてやりたまへばとこよはかねてより力太郎に思ひそめ羽の雉子のはねより舞ますと嬉しがるを藤内此のはねは我ら貰ひ升とむりに取ていざお妹御様今日の

お盃申ませうと皆々打つれ座敷に入盃も數かきなり
ととり／＼の噂に白玉姫何と惣右衛門様が見へませぬがどれにござります藤内、葉右衛門、惣右衛門は奥にゐますがそれに附おまへをちと頼み上ましたい事がござります力太郎殿と惣右衛門は日外から中が惡しふなりまして互ひに物をいはれませぬ私共何かと申ますれど直られませいで氣の毒に存ますどふぞ申なをられますよふにお前を頼みあげますとあれば扱は左様でござりますか此中も姉共がさやうに申まは誰有てよも左様の事はあるまいと存ましたがそれは何ゆへお中があしふなりましてござります藤内もとが戀てござります力太郎殿に惣右衛門がきつう惚てゐられますゆへとやかくと申されますれどどふおもふてか力太郎殿がてんいたされませぬからをこりました事でござります力太郎恥かしをふにハテそのまま捨をかれとあるに藤内葉右衛門さやうではござらぬと惣右衛門を呼出せば骨牌に打入てふせう／＼立いでお妹御様おいで被成ましたときよろ／＼とした顔にて挨拶すれば白玉姫けふのお盃いたしませふ是へござりませとあればいや是がようござりますすひら

に是へと力太郎のそばへ呼よせんとしたまへどわざとあらぬ方へ直るをしら玉ひめせひあれへとあるにふせう／＼力太郎の傍に直りおかしげなる顔してゐればしら玉姫おまへは力太郎様と御挨拶が悪ふござんすげな私が取持ませふ程に中なをつて下さんせ誰が左様に申ます藤内、葉右衛門我々が申たハテわけもない成程物も申ます中もよう御ざりますノッ力太郎殿左様ではござらぬかとふせう顔にていへば力太郎もいかにもさふでござると互ひにすまぬ挨拶なれば白玉姫氣の毒がりいろ／＼挨拶したまへば惣右衛門けふはいまだ公つな様へ御禮に参りませぬのちほど又おめにかゝりませふと立を皆々とめたまへば追附参りませうと懷より錢三百文落しもしらすむりに勝手に入ば力太郎も不興げに立ば白玉ひめその外の人々も皆々奥へ入たまふ跡にて權之進落てありし錢を見つけ是は憎ふない物が落てある事かなしかし主のしるもしらすたいその儘に置ふかいや捨ててもをかれずと懷中してこそ入にけるそれとはしらで惣右衛門うろ／＼と彼錢をたづぬる所へとこよ何心なく銚子を持出るに惣右衛門こなたは先にからこゝにかあ

あ爰にをりましたそれなら出して下されと錢の事をいへばもとよりとこよはしらねば何の事でござんすハテ意地の悪い今まんがよければ張最中也ひらに下されといへば猶がてんゆかねばまづ何の事でござんすハテこなたの懷の中にあるものを下されおれがふところの中にある物をこなさんしつてかへしつてゐるかとはつらい早ふ出して下されといへば然らば力太郎様に進せてと懷よりみを出せばこなたのいふは此事かとふしんそふにしてゐればお前はいい嘘言じやわしがせんどから頼んだ事を力太郎様へいふたといはんすがおまへと力太郎様とは中が悪いげなものこなたはそれをしてゐるか先頃こゝにて承りましたもはやこなたの事もおれは取もつ事もならぬおまへは力太郎様が憎うござんすか可愛さが餘つての事でござるあれが事思ひ出せばつかへが上りて物がくはれませぬによりわすりよと思ひて骨牌を打てば錢をまけます此中の間に二貫五百まきましたそれはおいとしいお心入でござんすそんなら此みを力太郎様へ進せて下さんせそれではおまへの戀も叶ひます此みの内に様子が委しう書てござんすと二人談合

する所へ力太郎珠數を持出て所作をくりゐれば二人は手持あしく次の間に立て惣右衛門かのぬを持て力太郎が方をのぞいて見ては跡へ尻ごみするに床世氣の毒がりて突やれば立かへり唐紙障子に立そひて互ひにもみ合しが床世難なくつきやればせびなく力太郎が傍により何とも詞なく何程所作をおくり被成るるぞいつもは八百遍づゝくりますれどけふは母の祥月ゆへ千遍くりますお袋様の戒名は何と申ます香月と申ますと何共埒の明ぬ所へ惣右衛門ぬをわすれ置しゆへ床世ふたりが中へ投やれば力太郎見て是は何でござるそれは床世がぬでござるといへばこなたは私へ意見も被成て下されいでよしない事をお取持被成るゝ私しもあれが心ざしあるとは遠からしつてゐますれどとても永らへぬ身に仇なる情も結句人の爲ならずとふつつりと思ひ切てゐます叶はぬ事にとやかく物思はすもふびんにござればいそいで戻して下されとあれば女の申事にはふびんをくはへられて男の申事は何共思し召ぬそれはお情ないと恨みかこてば成程こなたの事も忘れはいたさねど折を見合せてかさねてお返事申ませう惣右衛門も詮方なく三寶

の山椒をつみ／＼とても御返事なさるゝならば人に物思はせずとはやく被成たがよいせつ／＼参りてやかましく申ではござりませす何のかのといはさつしやるが外聞ではござりますまいどうだ／＼と口た／＼き／＼山椒くふてつい山椒にむせてぎち／＼すれば床世驚きそばによれば力太郎もあはて／＼傍により何と被成たといへば只ひい／＼と術ながれば床世わたくしは醫者殿よんで参らふと表へ出れば力太郎是惣右衛門殿こなたはもはや死なしやるかそんならとふから心に隨がふて兄弟の契約せうもの今さらくやしは未來迄も兄弟分でござるぞや是とあれば惣右衛門かすかなる聲にて誓言で承りたいといふ何が扱侍冥利兄弟分でござるといへばそれを聞ふばかりにわざと山椒にむせましたとけもない顔なれば力太郎よろこび銚子盃取出し互ひにかはるなかはらじとかための盃事をはれば力太郎いまだ公綱殿へ御禮に参らねば連立て参りませふ程に髪のつとがそこねました直して下さんせとあればいかにもと後より撫附る兩手を取てしめよせ是兄様短い浮世じや程にたんとかはゆがつて下さんせと涙ぐめば惣右衛門も嬉し涙互

ひの袖にかゝる所へ權之進立出て御膳がよふござりますといへば何れも出て並居る所へ姉共膳を持出るに公綱も出たまへば何れも一禮して永々の御厄介に罷りなり御禮の申上やうもござりませぬ所には又結構成御料理仰附られまして忝なふござりますれば何れもへ何がな御馳走が申たふござれどけつく御遠慮も如何と存わざと御かまひ申ませぬけふは祝ふて鶴の料理を申附ましたそれはお心ざし忝ふござりますといたいきやう／＼膳もとれる折から佐々木主膳御上使にて御入あれば皆々アツと畏る主膳床几に直りて御書附を取出し鹽谷判官高貞が家來共來る四日に切腹仰附らるゝ物也檢使は小畑六郎左衛門介錯は亘新左衛門と仰渡さるれば皆々アツと御受ある中に惣右衛門すゝみ出て切腹の場所は皆々一所に仰附られましてござりまするか其儀もおたづね申上たれば預り主の屋敷／＼で致す様にとの仰附られたそれさいせんの持てこいよとあればアツとこたへて家來の者三寶に土器のせて持出るに主膳のたまふは是力太郎親宮内より今生の暇乞に盃がかはしたいとの願ひゆへその段はくるしかるまじきといふて是迄持して

きた程にいたゞかれよとのたまへば夫は忝いお志然らば御意にまかせんと是宮内殿お盃を頂戴致しますあの方でおめにかゝりませうと一つ受さがりとのんで下に置ば何れも残らずいたゞきて下にをく所へ床世つかくゝと來り此お盃は私もいたゞきませうと懷中してそのまゝ公綱のさしぞへぬいて自害せんとの有さま公つな飛しさつておのれは氣が違ひしか大事の所へ出て尾籠の振舞しされと怒りたまへばいかにも御ふしん御もつとも是力太郎様誠に私は秋月源次左衛門が娘の辰姫でござりますお前と私とは夫婦の言號がござりましたれど親源次右衛門武士の道をわすれし者と夫婦にはせぬと縁を切ましたれど又志有て私をさしこしましたさいの事は最前惣右衛門様へ進せました多にござります程に御覽下されとあれは惣右衛門懷よりみ取出し主膳へ御免の乞て開き見る狀に一筆啓上せしめ候其御地宮内殿を始め何れも御堅固のむね珍重に存奉り候然れば宮内殿父子共に亡君の御敵は討ずして明暮酒宴遊興に長じ武士の道を御忘れ候により某縁の切て娘を取返し候所に此度いさぎよく仇を御くだき候ゆへ今更先非を悔申事に

候かくとは存せず世になき人ゆへ縁を切候などゝ世上の人口も恥かしく御ざ候ゆへ娘をそのもとへ進じ候間たゞ今までの通り御縁の御結び下され候はゞ忝なく存奉るべく候もしお上より御とがめをもふして死罪にも御なり候はゞたつ姫事黄泉迄も御つれ下され候はゞ本望たるべく候以上大岸宮内殿御連中參る秋月源次右衛門とよみおはりさりととは源次右衛門殿は誠ある侍かなと皆々感ずる所に公綱はたつ姫殿いかにもしひぶんは聞へたれどかく内縁ある人を何れものそばに置くかと主膳殿手前に某一分が立ぬいかにしても言わけの場が悪い一時も爰には置れぬ早々お歸りやれとあればたつ姫名残りを思ふて立かぬればこなたは公綱が一ぶんのすたる事を思はしやれぬかいそいでお歸りあれさり午夜ふけて女の道の程も氣遣ひなれば某が門前に旅籠屋があればそれにて今宵はあかし翌は早々おかへりめされとあればたつひめ名残りのおしげに涙をながし立出んとするを主膳走り出て手を引座敷に直し力太郎に引合せ扱は公綱殿聞へませぬ此主膳が他言でも致そふかと思し召か存せぬ共苦しふござらぬとあればそれは近比忝ふ

存じますとよろこびたまへば力太郎たつ娘の手を取
て二世迄も夫婦でござると互ひに盃を取かはせば惣
右衛門是は力太郎殿よりつかはされし暇の狀今引や
ぶり捨ますとすん／＼に引さけばたつひめ手を合せ
てのよろこび妹背の道こそわりなければくて主膳公
綱その外の人々にも暇乞して歸りたまへば皆々奥に
ぞ入たまふ

下わすれ草の筋書

何思ひ草忍ぶ草皆忘れ草夢なれや此度徒黨の人々は
羊のあゆみ程もなく其日になれば皆白小袖に淺黄袴
死手の門出の死装束花やかにも又哀也時に主膳公綱
詞を揃へて何れも所々の死をなげかるゝゆへ達て御
訴訟申上我々兩人の預りの衆中是一所の切腹仰附ら
るゝとあれば何れも有難ふ存ますと一禮ある所へ侍
一人あはたゞしく走りきたり畠山左衛門様お預の衆
中は只今切腹が相濟ましてござるとあるに何れもお
くれましたと覺期する所へ小寺吉左衛門わらづと一
つ提てかけ來り御檢使の前にひざまづき扱々よき
所へ駈附ました私もあの衆と一所に切腹仰附られ下
されといへば公綱ごらんじ宮内は何と思はるゝぞと

あれば宮内是吉左衛門お手前は一きの場より駈落め
されたではないか定めてお國へ參られたで有ふと
思ふたに此場の切腹思ひもよらぬ事とあるにいか
も駈落いたしお國へ參つたれどつく／＼思ひますれ
ば各と一所に死なねば侍の一ぶんが立ませぬゆへ歸
りましたこなたへおめにかける物があると藁づとよ
り首一つ取出し是は太田大膳めが首でござるこなた
へ土産に持て參つた是にめでゝ一所に切腹さして下
され宮内見て何のそれ程の事がお手前の手柄になら
ふ切腹はかなはぬとあれば吉左衛門詮かたなく是々
何れもたのみます宮内殿へよきやうにいふて切ぶく
さして下されといへばみな／＼詞をそろへて何ほど
御申有ても切腹は叶ひませぬといひ放せば吉左衛門
はらをたてヤアラ聞へませぬ宮内殿そのはづではこ
なたござるまいがよい／＼爰で死ないでも死る場が
何ぼうもあるとたつ處へ立譽和尚聲高く是々尊氏公
よりの御教書があるまつた／＼と思を切て來りたま
へば皆々ハツとしづまるに公綱御教書を開きよみた
まふに何々四十七人の者共罪科のがるべからずとい
へ共忠臣の譽これあるにより國々に遺しをく子供は

長く御赦免あるもの也かつ又高貞の所領は相違なく
弟の鹽谷六郎に下しをかるゝ間子供は六郎につかゆ
べきもの也よつて執立件のごとしとあれば何れもの
悦び何にたとへんかたぞなき吉左衛門立出てさあ
／＼此よろこびに一所に切腹さして下されと有に皆
々いさめて生はかたし死は易しひらにとゞまりた
まへとあれば何と長らへても人が笑ひはいたすまい
かな長らへるも忠孝なれば誰が嘲りませふせひにと
あるに然らばともかくもと納得すれば何れもよろこ
び皆一統に聲かけて切腹ある血汐の烟り空しくきゆ
れど名は末代にのこりて武士の鏡とはなりぬ千種萬
歳武運長久菊屋板

維時嘉永五壬子孟春

西澤綺語堂李叟述

西澤
文庫脚色餘錄三編下の巻大尾

西澤文庫讀佛乘初編上の卷

目次

- 一 武家百人一首
- 一 醒々齋の報條
- 一 武具短歌
- 一 施印七種の聞書
- 一 醒睡笑の拔萃
- 一 淡々文集之雜話
- 一 舊國之俳懺悔
- 附 同俳諧俗之話

西澤讚佛乘初編上の卷

西澤綺語堂李叟著

武家百人一首

雲井なる人をはるかに思ふには 經 基 王

わか心さへそらにこそなれ

君はよし行末遠しとまる身の 源満仲朝臣

まつ程いかゝあらんとすらん

斯なんとあまの漁火ほのめかせ 源頼光朝臣

磯邊の波のおりもよからは

かた／＼のおやの親とち祝ふめり 藤原保昌朝臣

このこの千世を思ひこそやれ

君ひかすなりなましかはあやめ草 平 致 經

いかなるねをかけふはかけまし

夜もすからたく水鶏は天の戸を 源頼家朝臣

あけて後こそおとせさりけれ

都には花の名残をとめ置て 源頼義朝臣

けふそ□□□につとふ白雪

吹風を名こそこの關とおもへとも 源義家朝臣

みちもせにちる山櫻かな

夏の目になるまできへぬ冬氷 左衛門尉源頼實

春たつ風やよきて吹らん

玄つの女か賤はた帶のぬきにうつ 清 原 武 則

うのけの布や程のせまきよ

思ふことならずや春をすくさまし 兵庫頭源伸正

浮世へたつる霞なりとは

ゆく人をまねくは野邊の花薄 平忠盛朝臣

こよひもこゝに旅寢せよとや

人まねぬ大内山の山もりは 從三位頼政

木かくれてのみ月を見るかな

身のうさも花見し程は忘られき 伊豆守仲綱

春の別れを歎くのみかは

今迄もあればあるかの世の中に 中納言教盛

夢のうちにも夢をみるかは

難波かたあしのまろやの旅寢には 前參議經盛

時雨を軒の雪にそゑる

あれにける宿とて月はかはらねと 平忠盛朝臣

むかしのかけは猶そ床しき

住なれしふるき都の戀しさは 正三位重衡

神も昔に思ひゑるらん

なか／＼にたのめさりせは小夜衣 前右近中將資盛

かへすゑるしはみえもゑなまし

なかれてはなたにもとまれ行水の 右馬頭行盛

あはれはかなき身に消ぬとも

散そうき思へは風もつらからす 平經正朝臣

花をわきても吹かはこそあらめ

まところめは夢にも見へぬ現にも 右大將賴朝

わするゝ程のつかのまもなし

伊勢島や鹽くむ袖の月かけを 伊豫守源義經

波にのこしてかてるあま入

秋風に草葉の露をはらはせて 平景季

きみかこゆれば關守もなし

武士の取つたへたる 梓弓 平景高

ひきては人のかへす物かは

夕暮は衣手涼したかまとの 鎌倉右大臣

をのへの宮の秋の初風

世中のあさはあとなりになり 平泰時朝臣

、心のまゝのよもきのみして

たけくまの松のみとりも埋れて 河内守源光行

雪をみきとや人にかたらん

いたつらに行てはかへる年月の 式部丞源親行

つもるうき身に物そかなしき

あたにのみ思ひし人の命もて 蓮生法師

花をいくたひおしみきぬらん

思あれは頼めぬ夜半も寝られぬを 平重時朝臣

まつとや人のよそにみるらん

つらかりし春の別れは忘られて 平政村朝臣

あはれとそきく初雁のこへ

梅か香のたか里わかすにはふ夜は 行念法師

ぬしさたまらぬ春風を吹

定なき時雨の夜のいかにして 眞昭法師

冬のはしめをそらにゑるらん

あられふる雲のかよひし風さへも 源義氏朝臣

乙女のかさし玉を亂るゝ

寂しさのいつも同じことなりに 武藏守平長時

思ひなされぬ秋の夕くれ

さゝの葉のさやく霜夜の山風に 佐渡守藤原基綱

霧さへこほる有明の月

竹葉のみ露をかるへき秋そとは 下野守藤原景綱

わか袖玄らて思ひけるかな

よしさらは我とはさらしあま小船 信生法師

みちひく鹽の波にまかせて

人玄れすいつしか落葉なみた川 千葉介氏胤

あふせにかへて名を流すとも

山の端の見へぬはかりは和田海の素遅法師

波にも月はかたふきにけり

いにしへの野中の清水汲ねとも 常陸介惟宗忠秀

思ひ出てゝそ袖ぬらしける

行末の空はひとつに霞めとも 藤原頼景

山もとしるくたつ煙かな

つれなくて何かたき世に残るらん 出羽守藤原宗朝

おもひもいてぬ有明の月

ふしの根を山より上にかへりみて 信濃守藤原行朝

いまこへかゝるあしからの關

沖つ風吹こす磯の松かへに 藤原宗泰

あまりてかゝる田子の浦ふし

都思ふ旅寢のゆめの關守は 藤原基信

よひく毎のあらしなりけり

ちる花の雪と積らはたつねこし 源頼隆

玄をりをさへやまた辿らまし

わすれ草心なるへき種たにも 平宗宣朝臣

我身になとかまかせさるらむ

大井川氷も秋はいろみへて 平惟貞朝臣

月に流るゝ水のしらなみ

夢ならてまたは誠もなきものを 左近將監平義政

たか名つけしか現成らん

吹はろふ嵐にはれて山の端の 平貞盛朝臣

松より高く出る月かけ

世を捨る數にさへこそもれにけれ 藤原頼氏

うき身の末を猶頼むとて

みねにたつ雪もわかれて吉野川 伯耆守源頼貞

あらしにまさる花の玄ら波

みし友はあるかすくなき同し世に 藤原範秀

老の命のなにのこるらん

古郷にこよひ計の命とも 寂阿法師

玄らてや人のわれを待らん

我袖の涙にやとるかけとたに 源義貞朝臣

ゑらて雲井の月やすむらん

おしとたにいはぬいろとて山吹の 等持院贈左大臣

花ちる里の春を暮れ行く

いつ迎もまたすはあらねと同くは 從三位貞義

山郭公月になかなん

妻こふる涙やおちてさを鹿の 寶^{ぎわ}口院贈左大臣

あさたつ小野の露とおくらん

鶴か岡木高き松を吹風の 從三位基氏

雲井にひくよろつ代のこへ

いにしへに變らぬ神の誓ひならは 右兵衛源直冬

人の國までおさめきためや

春といへは昔たにこそかすみしか 上野介源高國

老のたもとに宿る月かけ

添す共さはるとせめてきかすなよ 伊豆守藤原重純

待もたのみの夕くれの空

音たにも秋にはかはる時雨かな 源清氏朝臣

この葉ふりそふ冬やきぬらん

初袖はまたなかゝらぬ空なれば 播磨守高階師冬

あくるやおしき星合の雲

梓弓もとの姿はひきかへぬ 陸奥守源信氏

いるへき山のかくれかもかな

定めなき世を憂とりのみかくれて 道譽法師

ゑた安からぬ思ひなりけり

徒らにまつは苦しいつはりを 源氏賴

かねてよりしる夕暮もかな

露霜のおかへのまくす恨みわひ 左京太夫源氏經

かれ行秋に鶉なくなる

都にはまたしき程の時鳥 高階重成

ふかき山路を尋ねてそきく

埋もれぬ煙を宿のゑるへにて 元了法師

雪に鹽汲里のあま

數ならね身は中々にうきことを 源直賴

ならひになして歎かすもかな

たのむかなわかみなもとの石清水 鹿^{めが}口院太政大臣

なかれの末を神にまかせて

假ねするゐなのさゝ原うきふしも 養徳院太政大臣

ゑらてや今宵月に明さん

ゑづかなる心のうちや松かけの 源賴之朝臣

水よりも猶すゝしかるらん

あはさりし辛さをかこつとの葉に 陸奥守源氏清

いまたにぬるゝに枕哉

春は猶咲ちる花のなかに落る 源義將朝臣

よしのゝ瀧もなみやそふらん

戀しなん身のためつらき命とも 陸奥守源棟義

さてなとなる地きるにそしる

秋きぬと萩の葉ならす風の音に 源 貞 世

こゝろおかるゝ露のうへかな

日數のみふるの早田の五月雨に 多々良義弘朝臣

はさぬ袖にもとるさなへかな

心なき尾花か袖も露そおく 源重春朝臣

秋はいかなるゆふへなるらん

すむは空にこるはつちと別にし 勝定院贈太政大臣

そのいにしへも神そゑるらん

霜結ふ野原の淺茅うらかれて 權大納言義嗣

むしのねよはる秋風そふく

ほとゝきすまつ宵すきて難面は 源賴元朝臣

あくる雲井に一聲もかな

聞なれし木の葉の音は夫ながら 源高秀朝臣

時雨にかはる神無月哉

かこたしな春やむかしの夜半の月 源 詮 信

我身ひとつに霞むかけかは

夕立の雲の衣はかさねても 普廣院左大臣

そらに涼しき風の音かな

おもひたつ雲のよそ目の偽りは 源滿之朝臣

ある夜嬉しき山櫻哉

秋ふかきぞのゝ淺茅の露ながら 源 持 信

末葉にあまるむしの聲哉

みなのかみよりおつる紅葉々も 正三位義重

つもりて波をまたやそむらん

ひと目みし形ちのをのにかる草の 源範政朝臣

つかのまもなと忘れさるらん

なほさりに眺むへしやは忘れられて 堯明法師

もの思ふころの夕暮の空

さらてたにほさぬ袖しのうら千鳥 多々良持世朝臣

いかにせよとてねさめとふらん

鳥の音のつらき計をうつゝにて 平 貞 國

ゆめにそこゆるあふさかの關

けふはまつ思ふはかりの色みせて 慈照院太政大臣

心の奥をいひはつくさし

友もなき夜半の枕のたち花や 大智院贈太政大臣

むかしをかたるにはひなるらん

霞とも花ともいはしはつせ山 常徳院贈太政大臣

ひはらくもる春の夜の月

日に添て袖のなみたをせきあへす 惠林院贈太政大臣

身をまゐる雨の空の亂に

月見むと契りやおきし佐男鹿の 法住院贈太政大臣

かへるれみのつまこひのこえ

醒々齋の報條

文化九申年初春江戸兩國柳橋大のし富八が報條山東

京傳醒々齋誌

新年の御吉慶目出度申納候先以各々様益御機嫌克御
越年被遊恐悅至極奉存候然者私店の儀年來御最負御
取立の御蔭を以日増に繁昌仕難有仕合奉存候猶又此
度普請あらたに仕かへ少々間廣に仕御料理向別て相
改いたつて下直に差あげます萬事随分働以て安く上
るが商ひ上手どつこい其句も醬油のつけやき思ふ壺
焼皿に盛たる笋羹康頼安賣ならばござんなれ馴々鴨
の焼鳥め胡蘿蔔の葛かけて太煮の根いもとおことば
に我身もかへりみず雑水糸目の膳の春霞にひき物の
鶯餅手鹽に匂ふ梅が香は下戸様方へもつてこい猪口

に若菜の久しものも槎の小口か宿雪味噌葱の口合は
獨活の短冊とりあへず柳鮓に櫻鯛白高麗にこき交て
おなかぞ春の下直あり合細魚の更衣にはちよと花柚
の袖香爐全糸玉子に風薫るゆかりの色の初茄子冷素
麵の五月雨にあらひ鱸の盛合せはまた音の高き時鳥
啼や五百の早松と出かけ早乙女笠の笋は苗代水に青
鷺と共に裳裾を冷し汁別て近所は涼みの場所樓船家
根船風そよぐ奈良の小川の夕鰯に味噌吸ぞ夏の仕出
しもあり秋は猶夕鰯こそたいならぬ葱のうはおき蠣
の下露たつぷりと天の河原の川茸に願ひの糸瓜結び
鱈殘御口とりには菓子小袖今宵を契る星鰯は歳に一
夜の鹽加減まだ初鮭の切机に初あらしの鱗をちらせ
ば初茸の鹽焼に置霜のけしきをみせ冬籠の御座敷に
は芹に眞鴨のいりとり鍋簀松茸の用意して空にしら
れぬ時雨を催し或は小春のてり鰹におろし山葵の風
は木の葉鰯の芝煮と捻り山かけ豆腐の淡路島山椒醬
油の銜やきには幾夜ねざけのすまし吸もの千住の鯉
に佃の白魚四つ手の網の魚までも四季折々の獻立に
巾著湯葉の底を叩てめくる元手も松の魚桃の水鉢雪
の鰻軒の鮓鱈最中の月菊の酢漬や俄のおこのみ何で

もお間に鮎の鯉押合へし合御出を祈る心は丸煮の慈姑かうべに宿る神おろし茶飯にござる法印さん生臭半臺新らしく上る魚も皆江戸前庖丁いたらす高ういたさすやすくあげるがかねての工夫杖とも貝の柱とも存まするは唯御最負御取蓼御莧鳩を海膽鱧子までつらりつと鯉ねがひたてまつり鱈切溜の庖丁白湯煮

山東京山補

武具短歌

山鹿素行先生撰

加藤凉友考

夫武具は鎧腹卷太刀刀冑は筋や星冑。頭形兜整四方張懸冑二重白總發輪に片白や。扱名所は數多し鉦母衣附吹返し。四天品垂八幡座。眞向眉庇内冑。見揚浮張忍緒。前立物に後立。頭立脇立引廻。面頬猿頬。姥頬や。甲州頬に。涎懸。喉輪脇脇當や。胴は桶輪。佛胴。縫延小机最上形。桶無形に革具足南蠻胴や。胸目綴。菱綴緋綴色々の絨毛色は有ぞかし左の方は射向也右は勝手後をば押附總角襟周。左右の袖に胡頰管。綿齒相引肩當や。清慈の板に采附や。金具周に魚養也。旃檀胸板弦走二の板次は三の革四の革發傳動糸。受筒合當離待受や。下散草摺高緒や。繰縮下著下袴針は押小手

地半籠手。松葉輪小手に稻荷小手。筒小手小田籠手篠小手や。伊豫佩楯に踏込や。尾沙門脚當。篠實懸上帶腰當陣刀。陣脇差に采幣や。扇團扇冑立接襪毛沓陣羽織。具足羽織に胴肩衣や。笠印胴服鉢卷鎗印。腰責打達。首袋。床机敷革水筒や。野太刀長刀鎗刀。著込鉢金胴の火に草鞋股引草鞋懸。扱指物は色々や。輪貫幡連に天突や。四方四半に吹流し吹貫小旗三團子。枝蔓母衣張酒林。尾花鳥毛に暖簾や。半月御幣鐘や。志奈伊切割折掛に。釣手拭や。釣鏡赤熊黑熊に瓢箪や。香車簾に蠅取や。角母取紙に羽團や。三提灯に金の笠。白母衣黃母衣幅雜乳衣赤根紫黑母衣や。母衣串母衣籠母衣袋。旗は釣旗附旗機躡手繩に旗竿や。纏小印馬印軍鐘具に押太鼓。外幕内幕幕串や。船幕幔幕暖簾幕。鎗は持鎗長柄鎗。徒鎗鎗鎗袋鎗。月御管鎗船鎗や。長鋒薙刀鋼又鈍薙刀に片鎌や。弓は重藤側赤や。塗込藤に三所藤。白木小弓に半弓や。簾。胡籬革簾矢筈韌に騎馬韌。行膝弓虎手弦卷や。上指鎗雁股や。臺目神動弓立に矢筒弩兵や。樂棟革。的矢矢筒に弦袋。石火矢大筒火箭筒に小筒鑄筒や。種が島玉宮火繩口藥。胴亂早合兩袋。鞍は作鞍布袋鞍金覆輪に鏡鞍。南轡鞍に革包。熟梨鞍に金鏡眞鍮鍔五

る時手をつかねて湯は御座るがつけが御座ないと申たりければどつと笑ひになりにける

○十人計連立て北野へ夜深に參詣しけり二十五日の群集なればおしおされ下向する道すがら夜もほのかに明ぬ友達の中に一人腰の廻りを見れば脇差の鞘ばかりに刀を添てさしたりこは何としたぞといふに肝をつぶし鞘をぬきふいて見つ叩いて見つすれどもなし揚句にいふ事は畢竟おれなればこそ鞘を取られね

○客來るに亭主出て飯はあれども麥飯じや程に否で有ふずといふ我は生得麥飯が好じや麥飯ならば三里も行て喰はふといふさらばとて振舞けりまたある時件の人來るそちは麥飯が好じや程に米の飯はあれども出さぬといふにいや米の飯ならば五里も行かふとて又喰ふた

○急がば廻れといふ事は物事に有べき遠慮なり宗長のよめる

武士のやはせの渡り近くとも

いそかは廻れ瀬田の長橋

○物を無用といふ詞のかはりによしにせよといふはあら鹽も戸さしもよしや駿河なる

清見が關は三保の松原

此うたにて心得べし三保の松原の面白きけしきを詠める給へば關に及ばすえゆくまい程に清見が關はよしにせよとよめり

○なべて上臈方にはさくぢといふを禁中にはまちがねとかやもてあつかひ給ふ事はこぬかといふ言葉のえんにや

○慶長十九年の冬將軍様大阪の城へよせさせ給ふ時日本六十餘州の軍兵一騎ものこらず出陣ある本陣は天王寺の茶臼山にて有しを何ものやらん

大將はみなもとうちの茶臼山

引まはされぬ武士そなき

○仁物らしき男衆の前後に鯛を入荷ひ鯛よくと賣けるをある家のぬし呼入てけしからず寒き日なりまづちと火にもあたりて茶をものみてお通りあれちらと一目みしより是たいならぬいにしへはさもありし御身なりしが思はずも世に落ぶれてかゝるわざなし給ふにやと涙をこぼし候ぬといひければかの男靜に火に當り茶など吞てたち様に大なる鯛を一つ亭主が前に差出したりこは何としたることをし給ふぞと

しんしやくしければいやけふは心ざす先祖の頼朝の日なりと

○ある人連歌の席に句を出しけしからず慢じたる顔を見つけ脇より生天神いきんじんといふて膝をつきければあまりなつかれそ社やしろ擅がゆるぐにと申されし事よ

○洛陽にて淨土宗の寺へ尼公の參られ一人の弟子を呼出し十念を受たきよし披露してたび候へとありしかば心得たるとして方丈に行き下京にて何といふ女人の參りに候と申もあへぬに長老はを出し上臈とか女房とこそ申べけれ女人といふ事やあると大に呵られければ弟子の返答にそなたは我にあみだ經を教て善男子善女人といへといふて置て今は又そふいはぬとは一事兩様なる事哉などさんくにからかひて表へ出ける時尼公赤面して笑止や御機嫌のあしき音する下向せんやと申されたれば弟子のいふいや苦ふも候はずちと女房事の出入で御座るといふた

○ちと假名をもよむ人の言ひけるは此程つれく草をさいく見て遊ぶがおもしろふ候よとありしかばその座に居たる者さし出て構へて口あたりよしと思ふて多くまいるなつれく草のあへものもすぐれば

毒じやと聞たに

○侍たる人右筆を呼て此程は久しく不掛御目満足仕候とかけとそれは如何候はんと筆を持あけるにそれならばよくきこゆるやうに此程はおめにかへらず本望に存候

○昔より矢春の寺は禁酒なり寺中に酒を好む僧の巧て經箱をさゝせ角を取いかにも結構にぬらせ上に五部の大乘經と書附それを通ひにしける酒を取て來るに人はそれはととへば是は五部の大乘經なり京にいたいかん事を願ふ旦那ありそのゆへに折々もちて行通ふと答ふあまりに京通ひのしげければ人普く推してんげり或時うちの者經箱をもちかへる途中にて酒の匂ひをきゝ吞たさやるせなしと口をあけたまはりぬそろく寺へ持かへるにそれはなんぞ常の如く經にて候といふさらばちといたいかんとて手にとりふりて見誠に御經やらん内にごぶくといふ聲がする

○百三十年餘りの跡かるとよ筑前の國宰府の天神の飛梅天火にやけてふたゝび花さかずこはそも淺ましき事なりと人皆涙をながし知るもしらぬも集り思ひ

思ひの短冊をつけ参らする中に權笈坊とて勇猛精進なる老僧のよめる歌こそ殊勝なれ

天をさへかけりし梅の根につかは

土よりもなと花のひらけぬ

短冊を木の枝に結びて足をひかれければすなはち緑の色めきわたり花咲春にかへりし事よ人々感に堪てかの沙門を神とも佛とも手を合せし

山の端にさそはゝいらんわれもたゝ

憂世の空に秋の夜の月

解脱上人の世に隨へば望みあるに似たり俗にそむけば狂人の如しあなうの世の中や一身何れの所にかかくさんとかゝれしを右のうたに引合て衣の袖をしぼにき

○將軍天下を治め給ふ此御代に賢臣義士多き中に京都の所司代として訟をきゝ理非を決斷せらるゝに富貴の人とてもへつらふ色もなく貧賤のものとてもくだせる體なし然る間上下萬民裁許をよろこんで奇なるかなと讃嘆する人ちまたに満り一滴舌上に通じて大海の鹽味をしるとあればその金語の端をいふに餘は知ぬべきや亥かる時越後にて山伏宿をかりぬ其節

國主の迎ひに亭主も罷出るに彼山伏のさしたる刀拵といひつくりといひ世にすぐれたるものなるをかりて行いまだ宿に歸らざる間に一國徳政の札立けりさる程に亭主かへりても刀を返す事なし山伏こらへかねゑきりに乞ふ宿主返事するやうそちの刀かりたる所實正也されども徳政の札立たる上は此刀もながれたるなりさら／＼かへすまじきといふ出入になりければ雙方江戸に参り大相國御前の沙汰になれり其砌京の所司代下向あり御前に侍られしが此裁許いかにと御諛あつて謹て造作もなき儀と存候幸ひ札の上にて亭主がかりたる刀をながし候はゝ又山伏がかりたる家をも皆山伏がに仕べきものなりと申上られしかば大相國御感甚かりし當意即妙の下知なるかな以正理之藥治訴訟之病挑憲法之燈照愁歎之闇といふ金言もよそならず

○平安城にて質に具足ををき請むとする時にみれば鼠がいとをくひたり請主難儀に思ひいろ／＼理をいひてなげきさらば利息なりとも少しはゆるされよと詫けるに質屋さらにかかす剩鼠を一つ殺して是が藏に居て具足を喰たる科人なり然る間成敗して候とも

たせ遣す質置口おしき事に存所司代へ罷出初中後を具に申ければ多賀豊後守下知せられけるやう扱は鼠は盗人なり盗人の居たる家なる間闕所せやとて家財をことごとくとり質置に下されけり

○北野の神前にて祈禱の連歌あり

かくなるものかさすらへの果

此神のかへり北野に跡たれて

此附句執筆書とむると同じく社頭震動し暫く止まざりつるは神も大きに納受し給ふにやと皆感じ申たるよし

○連歌の席にて一句出したるに執筆船が近いノと云けるをとくと思案して

船てなし中くりあけた木に乗りて

○人皆連歌を仕習ふとして一順の月並などゝてはやらかすうらやまし我もちと稽古せんと思立ち宗匠する人に向ひ大體一句の仕立いかなる心もちにて工夫致し候はんやさればよ此道をまなばんとすればいと深くもくづれよらぬ和歌の浦なれば言葉短ふきりたくな心をはなぐふかう物哀れに華奢風流につく様にかの人きくと同じくはや合點参りて候一句申さん

首きはや二季の彼岸に茶香杵

心はと問れされば水を渡るに首際に及ぶはふかければなり物の哀は二季のひがん華奢風流なるは茶と香つくやうには餅つくきね

○細川幽齋公の姉御前に宮河殿とかやいふて建仁寺のうち如是院といふにおはせし事ありき長岡越中守殿より大津にて米を百石まいらす由のゑを見給ひて其返事に

御ふしんのやくにもたゝぬ此尼か

百のいしをはいかてひくへき

とありしをげに理りやと則車にてをくり給ひし

○大名の扶持うくる座頭あり茶をひかせられしが吞て見給へばあらし大に機嫌そこねしに

あらくともわかとかのをとおほすなよ

茶臼に目なしひきてにもなし

○深草に薄墨の櫻とも墨染の櫻ともいふは兒有手習硯の水に白き櫻のちり落ちて墨に染りければ

世の中を花もうしと思ふらん

白きすかたを墨染にして

と此うたよみて兒死にけり明のとしのなき日に當り

師の坊主

去年のけふ花ゆへうせし兒の爲

今うちならす鐘の一聲

と詠じ靈前に備へければ則返歌あり

花ゆへにとはるゝ事の嬉しさよ

苔の下にも春は來にけり

○光源院殿京都四條の道場に陣を取御座ありし時夜九つの太鼓を寢ばれ七つの時打けり公方より御使ありて番の僧をめす定めて折檻に及びなんとふるふゝ參ければ様子御尋ねありつるにさん候深く睡入目覺仰天の仕てのゆへと有の儘申上ければ案の外御機嫌よくて

此寺の時の太鼓は磯の波

をきしたいにぞ打といふなる

○三條三光院殿十六歳の御時禁中にて懷舊といふ題出たりつるに何ともよみにくしとあれば一座皆おもしろき顔に見なし誰も題を取かへよまんと言ふ人なかりしに

程近きわか昔さへ戀しきに

老はいかなる涙なるらん

○山の一院に兒三人あり一人は公家にてをはせし坊主年に二度物思ふといふ題を出せり

春は花秋は紅葉の散を見て

としに二たひ物おもふかな

一人は小兒侍にてありし夜るは二たひ物思ふといふ題なり

宵はまちあかつき人のかへるさは

よるは二たひ物思ふかな

今一人の兒は中方の子なり月に二度物思ふといふ題にて

大師講地藏講にもよはれねは

月に二たひ物思ふかな

○洛陽に一噌とて名を得たる笛吹あり弟子の名を秋風とぞつけらる秋風心に思ふ様秋風は物にあふといふ縁あり我笛を褒美してつけられけるこそ忝けれと自慢限りなき折ふし同學の者一噌にとふ秋風とは何の故につけ給ふぞや別にわれは所存なし秋風はふく程あしきものなりかれが笛もふく程わるい程に

○宗祇有馬の湯に入ておはしけるに人々寄合歌などよみ遊びしが爰に居らるゝ旅僧も若思ひよりたる事

あらばいふても見たまへと傍若無人の作法なりし時
音にきく有馬の出湯は樂にて

腰おれうたの集りそする

○情深き兒のもとへ折々かよふ僧ありし暮に及びそ
ときたれり兒にこやかに夏衣よくこそとあれば其言
葉を聞とひとしくふいと立て行兒の方より人遣はし
まづかへれとよび戻すに僧立歸りぬ何とて物をい
はずいなれしや夏衣と始て仰られしまゝ罷出候きい
かなればととほるされば新古今に素性法師

おしめともとまらぬ春もあるものを

よはぬに來る夏衣哉

と有候此趣存あはせてなりとなく／＼申されければ
兒聞てなか／＼の事なり

夏衣ひとへに我は思へとも

人の心に裏やあるらん

といふ本歌にていひつるものとあるにぞ僧かたじ
けなしとも

○備前の國岡山にそこいふ魚あり餘國に稀な
り大守浮田直家より藝州小早川隆景備中笠岡の城に
おはしける時彼の魚を送らるゝ隆景侍に仰せ夜中に

備前よりそこにべが來た程に家老の衆に今朝ふるま
ふべき由申せとあればかのものまいりて備前より今
夜そこにべ殿お越にて候今朝振舞あり出仕あれとぞ
申ける各々いんぎんに打扮ち參らるゝに客とてはな
し出たる膳部をみればそこにべの汁なり右の様子を
申されて大笑なりし

○聲あり舅の方へ見舞ふとてある時町を通りしが新
き鴈を棚に出しをきたり二百にて買ひ矢を通しもた
せ行舅出合鴈を見て是はとふに我等道にて仕たる
とあれば大に悦喜し一族皆よせて披露し振舞わめき
けり聲かつにのり今一度もたせ參らせんと家の子に
示し合せわれは先きへゆかん跡より調來れといひ捨
て先舅に逢ふと同じくいな仕合にて又鴈を仕て候と
いふ舅いさみほこれり彼の内の者鹽鯛に矢を貫き持
來れりして今の矢はあたらんだかされば鴈にはは
づれて鹽鯛に當りまいらせたと

○雑談に心の奥のみゆるかな

言の葉ことに氣をつかふへし

ともあればなにはにつけ常の心をいふなる事此おも
て八句にて工夫あるべし

しとやみやけらこが嶽の木々の露

濟家

いかなるかこれ秋の夜の月

曹洞

行つくす江南數日鴈啼て

儒者

西よりきたる風の涼しさ

淨土

そこにこそくせもの佛はある物を

當宗

何なまふたととなへさるらん

時宗

金剛界胎藏界の春の花

眞言

諸法實相へたてあらしな

天台

○所の地頭と中のよき坊主あり振舞に呼れ種々食物の嘶ありしに海月といふものは精進めきたる物なりさる程に出家にも參らせたや殿にいふて是をばゆるしにせんなどかたる年たけたる弟子聞て殿へ仰上るゝ序でに生鯛の事をも頼入と申たり

○禁中に御能あり狸の腹鼓を狂言にする狸が出るを狩人汝なものぞ我は狸の王なりといふ何とや王じや王ならばゐころいてくれふすと

○善界坊のおもてに上臍面をかけて出たり橋がゝりへみゆるを同じくあれゝおかしやと笑を太夫聞ても今更かへらん様なし舞臺にていひける事は抑是は善界坊の内方にて候と

○山姥は福分の人にてあると聞たが耕作はせずあきなひの音もなし何としたる事に有徳なるぞと不審する奇特をいはるゝ言葉にはいへど目に見るものなし其上不辨分限を迄いかにとしてしられたるぞかくれもない山姥に作りたるは八木たうゝとしてと

○佛には毛があるかなきものかいやないむげくはうぶつとありいやあるけぶつばさつといへり互ひに論じて堂坊主に判断を請ければあるにあらずなきにあらずそれは何事ぞ熊野の謠に末代一世けうすの如來とつくりた程に

○蚤といふものも一廉のやつやら謠に作つた何にある二人靜にあとをのみみよし野とそれならば虱をこそ猶はめたは何に實盛にゑらみあひたる池の面とあるは

○三輪の謠にある夜のむつごととに御身いかなる故によりとは作意もない作りようかな總じて理のすまぬ文章やたゝある夜の六つ時に御身いかなるうへにのりと直したらばよからうとは作者めいわくの

○高雄神護守の文覺は聲の高い人で有たといふが荒行をせられた奇特さよと聲の高いといふ事を今迄は

きかず書物にあるか勿論誓願寺に虚空にひやくは文
覺の聲と造つた

○何といふいはれに昔は花になく鶯水に住蛙をはじ
め馬などまで歌をば詠たるぞ人倫たる身をうけなが
ら五もじ七文字のわかちさへゑらぬはとなげくやさ
しの心ばへや去ながら馬のよみたる歌は未きかずと
いへば

世の中にさらぬ別のなくもかな

ちよもといひのる人の子の爲

是こそ馬の詠たる唱歌ぞうよ是は業平のにてはなき
か念もないゆやにそも此歌と申は長岡に住給ふ老馬
のよめる歌なりとこそ

○奥州にみてぐらといふ武家あり彼館にて能に鐵輪
を玄かゝり恐しや見てぐらにといふをゆき當り俄に
直して恐しや勝に三十番神おはしますとあさましき
神の居所や

○幸若の舞をきゝ扱々おもしろのふしや中にもせめ
がおもしろきと感ずるとき總じて此舞といふものは
誰が作りし事ぞこざかしき顔の人いふ不案内や仁和
寺にてつくりたるなり終にきかぬ庭訓ににんわじの

まひつくりと書たるは

○青海苔を煎豆につけたる菓子太閤の御前へ出した
れば幽齋公にむかはせ給ひなにとくとありし時

君か代は千代にや千世にさゝれ石の

いはほとなりてこけの結豆むぎまめ

○宗祇修行の時山中にて思ひよりなき三人行むかひ
一人いふ一つあるもの三つに見へけり則祇云

たくひなき小袖の襟のほころひて

又次の者いふ二つあるもの四つに見へけり祇云

月と日と入江の水に影さして

又ひとりがいふ五つあるもの一つ見へけり祇云

月にさす其ゆひはかりあらはれて

右三句ともに聞て後三人いづちとも見へずうせにけ
り

○西行法師修行の時津の國七瀬川にて麥粉をくふと
て玄きりにむせられけるを馬より侍の見つけ

此川はなゝ瀬の川ときく物を

お僧を見ればむせわたるかな

時に西行の返歌

此川は七瀬の川ときくものを

めしたる馬はやせわたるかな

○小松内大臣重盛公は釋迦の弟にてありし事よちともまらなんだとかたる嘘そふな時代も二千餘歲違ひたる物を去ても醫師問答といふに平家に重盛の定業もし醫療にかゝはるべう候はいかに釋尊入滅あらんやといはれた

○茶は是釣^レ睡^レ釣とあり又食を消する共いへり

わか門にめさまし草のあるなへに

戀しき人は夢にたにみす

などいふて人々ほめはやしのむ末座に百姓の候て夫ならば我々は一期茶をたち申さん終日骨折ても夕べとくとねむればぞ辛勞をもわするれ又たまくとほしくてくふ食の消ては何のえきあらんあら否の茶やと頭をふりたりされば憂喜依人といふ題にて

ますらをか小田かへすとて待雨を

大宮人や花にいとはん

とよめるさまこそかはれ心ばへひとしかるべくや侍らん世をおもしろくすむ人は茶を愛し賤の男は茶をいなど狂言せし一旦は理有

何となく人に詞をかけ茶碗

おしぬくひつゝ茶をものませよ

花をのみ待らん人に山里の

雪間の草の春をみせはや

利休は侘の本意にて此歌を常に吟じ心がくる友に向ひては構へて忘失せさせなん

契りありやまらぬ深山のふしくぬ木

友と成ぬる閨屋の埋火

是は夢菴の歌にて有古田織部冬の夜徒然吟せられし右醒睡笑は萬治元丁酉の板本にして此外にも種々話あり醒睡笑は作者安樂庵遊傳と云ふ其序文に「元和九云々」とありて同年頃の活字本あり

淡々文集の雑話

淡々文集は寛保二壬戌の出版にて雑話すこしをひろひ出す

○春日空しからざるは皇都の人の心なりけり二人連にて叡山へ參るもの蹴上の知音の者の方へ立寄けふは大師へ詣候又歸りに立寄べしと言捨去けるが暮過歸りにかの所へ一人立寄一人は跡はおくれたり扱々今日は益もなき事に山坂をかけり候先は用意の割籠もいつしか高觀音にてたべ切湖の風にてなまぐさく胸わるく叡山へ登り著兼々必といひ約束の捨坊主が

所へ行著けるに甚腹淋しく何成ともあたへられよといひければ菜飯に田樂こそし侍りけれと同宿米をあらひ一人の男は豆腐を厚く薄く長く四角におかしきものに切りちや／＼くりて焼ぬも焼たるも山折敷へ打入こわくあら／＼^おき菜の切たる飯をむくつける鉢へ入て突出し生木の枝を折て箸としていざ／＼心まかせにまいれとて何やら名の玄れぬ草々を引て醬油打かけ出してきよろりとして住持は佛と打つぶやき侍る扱々懲はて候寂山殿かな跡より連が立寄候はゝさきへ歸り腹を早く直すとて飛で歸りしとお申たべと言ちらし立去りける跡へ一人の男立寄けふは近年のたのしみ覺たる事あらば歌にてもよみたき事ばかり拙き身をこそ自慙候へ常々大津へ掛取に往來の時は左右の山も心にとゝめす本草も目にわたり候はず今日寂山參りと改て出立より常にむさくさく息どしかりし車牛の響も昔めき崩かゝりし軒端のかづら山の霞伊勢戻りの一ふし耳にとゝまり俄に走井の水かゝみ心はづがしさ頻にまして獨り打笑高觀音にてこうりめし取出し湖の春風空と水と一つに成て吹こす花の匂ひいやはや暫く貴人の心になりぬ大

師の御恵み先覺へ侍りて扱寂山に登り約せし御寺へ立寄りければ何のまちもふけもあらずあら／＼しき菜飯不加減の田樂春草の芽のある限りひたしものにして玄ひもすゝめもするではあらでお住持は香盤の煙り絶さじと御佛につかへ給ふ世を離れたる趣たべものゝ不加減却て世間寺の重味馳走にはまして殊勝さいはんかたなし誠に王城の守護山と承り傳へ候にうたがひなし有難覺へ候又々暇あらば遠からず登山致たしさらば／＼と言捨出けるとぞ兩人風雅の有となきとのたがひは是非の論なき事なり何藝に附ても上手下手の心的意箭各かくの如し予例の老のひがみの心出來て兩度芳野の花へは參りしかども馬上にて坂を登りたしと思ひたちて六田^{かた}よりいかにも瘦たる馬をかりて行李のもの引つけみおろし見上て恙なく藏王堂にいたり

よしの山世界の花と飲くらひ 半時庵

と眞實の風情世人を罵言して下りぬそのゝち老友の方々に一夜咄し侍る折ふし人々見し所の風色をかたり出て吾も芳野の趣を申出れば誹諧の詞宗といふもの其席にありて某も初て去年の春罷ける素より花は

面白けれども茶屋もなく喰物もなく扱々不自由なり
と眞顔にて申出けり此人叡山にも料理茶屋あれかし
とおもはるべし仍て發句は申出さずなりにき

○昔さる貴人常に坊主共に空灶の伽羅をわらせらる
る時四角に見事に割て四面の割屑をたゝかに坊主共
配當しらる事常なり或時新參の小姓に此木割よと仰
られければ一大事の御用始と御次に出四角に割て四
面の割屑微塵も散さず割たる木の側に載て御前へ出
しければ機嫌甚だ損じいかでかくの如きのむさき仕
方にぞ侍るいづくも坊主共が割て差出るにかやうの
塵芥のごとくにぞ取あらじ艶なきおこのものなり坊
主共かしこくも割直せよとある時例の如く割屑を配
當して美しき所計を差上ければ是こそと仰ありて暫
く思惟したまひ伽の人を召てかくの如く違ふ事わと
尋給ひければ伽醫者申けるは坊主衆は屑を包み置て
次々の御用になすべしとの致方ならん御新參は律氣
眞法にて屑迄さし出し候事御次御用の心いまだ到ざ
ると申に笑はせ給ひ新參を召て坊主共は屑を盗むに
ぞあらん古人も竊香と書置侍れ責るに不及我はあほ
うなりと御機嫌どもよろしかりけるとぞ

○から漬といふ物を贈りたる人のもとへ半時庵ふ口
かうのものとといふ事いかなる名ぞと世に稀に論じけ
る事ありかうくならず或は糠に漬たる物ゆへ糠の
ものと言又大根を以て神に供すによつて神のものと
こそ神々と言訓をかりたるなるべし皆たがへり禁中
臺盤所へ女房の局よりおかうをまいらせよと呼時味
噌をてうじ侍る事上古今更なりみそに漬たるをかう
の物と言なり香の字を下す事文字を用ゆるの餘情香
はすべて清淨の心なるべし薰風あながち南より匂ひ
來る事なけれども此類みな以て雅の要とする所なら
ん其かうに漬たるにあらず糠に鹽を加へて大根を漬
て家々民くさの朝夕の事とはなりぬ其中に群を出た
るものあり稱してから漬と云西域ホムズにあらず唐土にあ
らずいかなるからぞ世のさまからやき榮して調度の
俤眞菜野菜も至て風情のこまやかなりけり歌の日歌
月と云人よりかうの物を得たり其味いひがたし若此
蘿蔔は筑紫何某の押領使が朝々好みたる土おほねに
やあらんかしさあらば夜盜の來りけるともおぢおの
ゝく事もあらじや日を添て乾けるはこのうへの歎き
なるべし

○蒼顔に文字を教へたる鷄今飛來らば一字もよむ事
あたはず別れの邪魔をして飛ざるべし手跡も先祖は
惡筆なり追々手練の文字細工を積りて風情日に
ますより和漢相とも筆の自由を感じ墨色を稱して其
道に日を空しくせる者は眉を顰めて能書と呼なり然
れども風雅のおもひ深からぬ人の手跡は額にも掛物
にもつきなき物なり自慢をいひ散して聞ぐるしく淺
猿し因以謝肇淵畫と書べしなどいへり清輔もその趣
兼好も手など拙からずはしり書とこそ書弄たりとい
へど傍人いふ半時庵無筆同様の事にて筆道咄無用の
事と笑ふ予云非なり雲溪先生は能書の名ある人なり
しが予が書たるものを見て今天下の名筆は淡々なり
文字一行の俤誰か及んそのうへ一字を離しみれ
ば少しも文字の道理なしもとより學ざるものかくも
あるべし謝肇淵是を見れば甚悦べしと大笑ありけり長
夜腹淋しく厨飯ありやととふ僕云あり何ぞ菜あるか
と問ふ有と云何ぞと問ふ九年甫三つ有と云此者鷄に
だもおとれると又大笑也

○爰にあはれをとめしは達摩大師にておはします
九年面壁として尊者名僧和漢相とも背たる像を念じけ

る愚案大悟の祖九年の間壁にむかひて尻を腐らし悟
たるは至て不器用なり思ふに九念面壁ならん三念一
念卽情頓話禪一二三と念じて二念にもとるは桑華の
垣情なり教の要主なり一機九念して向ふ所は壁にて
も窓にても岩にても柏樹にても海山も吹風も其時の
心の的なりされば二祖の的を得て數年嗜たる箭を放
されたり又蘆葉の像とて蘆の葉に乗たる達摩目痛き
ものなり柳葉蘆葉孤舟の一名なり川上の觀念誠に見
性成佛異國の虛名ならん澤庵も蘆葉の讀にいたる所
難信とは尊者の心裏をよく識りたるならん古賢禪
師海印光にも達摩をせめけり難有き事なり

○爰に隱元禪師を尊み參じ給ふ貴人ありて黃檗の夏
の中參詣ありて袴をとりて居士衣に袈裟をかけ如意
をもち行道の僧中に交り經をよみたもふ其時又貴人
の交代の節黃檗山見物隱元を見んとて立寄給ひてか
の貴人の厚髻に衣を著袈裟をかけて行道ありけるを
みて驚き肝をつぶし武士のあるまじき事なりと大笑
して歸國ありて後御國の黃檗流の和尚を招待あり各
の宗旨には唐にても武士が三衣をかけ出家の眞似を
する者もありや見兼候事なりと御申ありけるが和尚

の云こなた様にも常に狂言をお好しかも御上手と承り候左様にて候やと云いかにもと仰ありけり然ば狂言の大事は釣狐と承り候畜生足大切のよし日外被成候て諸人感じ候全く暫く畜生の心になり正に狐になられ候なりかの貴人も暫く行道のうち釋迦の教を熟得して佛の心裡に叶ひ給ひしなるべし然ば野狐の魂を似せんよりは行道のかたまさるべし形より先その法其道をあらため心裡をよせ候事なりと答られければ城主則佛道を感じ大寺建立ありけるとぞさかしきかな一禪賢哉佛印終には東坡も

○いつの頃か蘆野殿へ京より女の宮仕に参りて三とせ計勤めて都へかへる時御餞どもいと興ありてその方の名をけふよりづれとかへよと仰ありければ女とりあへずしばしとてこそと存候に御恵にひかれて三とせは立とまりつれと申上げるとぞ心ある育の女なりけり

○昔武陽に勝山と云妓有萬人肝を縮め朱唇を窺ふもとより黄金用盡せども心を撓めず酒屋の一夫に生涯いふ儘にしたがひ侍り或時夫狐にか佛にか誘はれて逐電しけり亂るゝ髪も袖も袂も齒に咬裂みちのくの

方にやあらんと茨に身をさかれてよう／＼

秋風もはや吹たへて冬の夜の

霜は寒けき白川の關

とよみてもとより切拂ひ山林深く入けるに忍の里人有がたく思ひとりて頻りに招じければ

來て歸る道しなれば山里に

墨染衣幾代ふるとも

糸竹の昔を今に引かへて

嵐のみきく深山邊の里

歌の風情はともにかくにも瞋悲の心葉をきやうざく
ホウマ

○予先年妾あり名を崎と云死に及んでいふ事有是迄の御恩報しがたし死てのちかならず一家の者どもが事共御たのみ申ませぬといへり頼まするといふことの口が重みたるかと問へば少も頼ませぬなり不のぬなりといひて則死すいたはり事日々消行さる御方へ夜話笑談の折節申上ければ極めて一家に口説あらんその上理の埋れたるならんととやかく御志を添られけるが口舌とけて一家和してむつまじかりける其後又笑談申侍りければ畢ぬならば取あげもせまじと

ありけり不のぬ眞實ある時はよき切字なり人將に死
んとする時いふことよし東坡が燕々張建封が町々是
には劣るべし

舊國の俳懺悔 同俳諧俗の話

俳懺悔二卷俳諧俗二卷は大江隣大伴舊國が文集にし
て序に葆光齋天府とあつて明和七年庚寅冬回心齋舊
國謹誌とあり此中におかしき雜話を拾ふ

○晋子其角常に申されしは

好氣根稽古の三つにくらふれば

好こそものゝ上手なりけり

將基の師大橋宗桂もつねくこのうたを誦し申され
し

○洛の諸九松島行脚の折の添ぢからにとて案内の爲
に遣しける元治郎といへるあら親父の七十五歳にな
りたるが風景の面白さにめでやありけん

いのちこそ寶の山の松島や

かく不風流のものだにも時に感じて自然とうかびし
ものなり

○又みちのくの二本松に俳諧すけるものども櫻がも
とに酒くみかはし遊び居ける中へ所の百姓のいでゝ

酒吞せ給へと乞ふは句いたし申されなばいかにもと
たはれしに

きのふより翌よりけふの櫻かな

といひ出されて興さめ人々ほ句も出ざりけり

○鬼貫曰未熟の人の俳諧は春雨のと五文字をいひ出
し時春雨先に出候といへば秋雨のと附かへ侍らんと
いふこそうたてけれ春の月は暮初るより朧だちて物
だゝぬけしき夏の月は灯を遠く置て詠め深し秋の月
は窓に軒に海に川に野に山に詠めあり冬の月はひと
むらの雲の雨こぼしゆくひまをてらしていそがし春
の雨は物こもりて淋し夕立は氣晴て涼し秋の雨はあ
はれにて淋し冬の雨は底より淋し鶯はきく郭公はま
ち侘るこそ詮なるべけれ四季折々の草木ひとつく
辨ふべし

○古き歌を折よく誦し出たらむはあらたによめるよ
りも風情ありとや淀のわたりのほとゝぎす宗盛の宇
治の奉納など手柄有てきこゆと承る近頃尾張の人の
妻の七とせ迄腰たゝで有しがつひに身まかりし時其
夫のおもひいでゝ申
麥喰し鴈とおもへと別れかな

野水が句をつぶやきしはいとあはれにして野水が作
せるよりも情あつかりけると嗚海の蝶羅物語なり

○雪中庵にて夜話のせつ門人山幸申けるは其角五元
集の中に

まむろに茶を申こそ時雨かな

といひつる句いかなる事にやと尋ねけるに蓼太の曰
此こと先師吏登物語にきゝしはむかし初代の一蝶は
其角と相よし然るに蝶故ありて公の罪をかふむり伊
豆の島に流さるゝに友人かれこれ別れをおしみ船場
までおくりて信友の情をなす一蝶申けるはかゝる身
のふたゝび相見ん事かたし是迄の御懇情いつの世に
かは忘れ申さむ我かの島の事を聞に大かたの人魚を
取日にほし乾して江戸の便にひさくと承る我も又さ
こそあらめ然ば魚の腮に木の葉のやうの物をすこし
宛入置べし若さやうの物の入たる干魚あらば蝶がな
せるものよと思ひ給へかしといひて別れたり人々其
船影の見ゆる迄見送り其角はいといむねふたがりて
立もさらでありし其後ひとゝせばかり有て其角が僕
日本橋の魚の棚にて乾魚のありしをとゝのへかへり
かてぐさになさむとたはらなる魚を火にあぶりける

にむろといひつる干魚の中に笹の葉のやうの何とも
まれがたきが一枚出たりのこる魚どもにも各おなじ
やうに有しゆへ掛々島のやつらはおかしき事をなす
成と笑ふを其角ふと寝耳に入りやをら起上り蝶がい
ひし事を思ひ出し此乾魚はいづかたの島より参りし
ものかと其ひさげる問屋へ人走らせて尋けるに大か
たは八丈大島より渡申よしを申其角爰におゐて蝶が
いひし詞を思ひ望友の情まきりにうごき蝶が親しか
りし友どちをあつめ茶を申入此干魚を出し是こそ蝶
が申のこせし俤なれいまだながらへてかゝるわざを
なしけるよと皆々そなたの方に向ひはるかに信友の
情今更涙をとゝめかねたりしとぞ角が句も此時の事
なりと師の物語有しとぞ申されし

○吏登翁の云世にはらみ句といへる有趣向うかびて
も句をおしみて其場をまつ今の世の懷劍辨當などゝ
いへるさもしき心とはおなじ日にかたるべからずむ
かし源の願が

楊貴妃歸唐帝思 李婦人去漢皇情

かねてたしなみ侍りしが對雨戀月といふ題を得て
此句を出せし津守の國基が薄墨にかく玉章と見ゆる

かなの歌も同じふし柴の加賀白川の能因なども皆此
たぐひ也ばせを翁もうき世のはてみな小町也といふ
句をひさしく心にかけて品かはりたる戀をしてとい
ふに出せり

○嵐雪曰句を吟するに訛りては口おしとてひたもの
都に登り後々は少しも訛らず執筆へ句を渡されしと
かや

○淡々曰詩は長刀和歌は刀連歌は脇差俳諧は懷劍な
り心切に思ひつむれば其利事はやく始皇の胸先をさ
すにいたる及長くば其所にいたりがたからむか昔戀
といふ題を給はり

夏瘦と問はれて袖のなみたかな
といひけむも即懷劍のきれ味なり

○長嘯子の云はじめて物を誦しよみかぬるは夏中人
の家にてしばしあれば其ものかのものとわかるが
如しと

○常に風流の心なき人もものゝ善惡あしきに感じておもは
ず秀逸の句あり遠江の國にある人の子をうしなひて
其ひととせのめぐり來りし比

去年まで呵つた瓜を手向けり

かく千萬のあはれをふくませ申出しとや

○雪中庵曰其角が附句に毛抜にも名を給ふ君が世と
あるはかの尾張名古屋の毛拔師なまはし南方といへり孔明出
師の表に深く不毛の地に入て今南方定と云々不毛と
いふよりしてむかし近衛殿下の下されし名なりと

○雪中云句振は我生れのまゝにして修行ありたしつ
くろへるはいやみなり土地によらずして句に都ぶり
あり鄙ぶりあり高雄といふ遊女のある田舎人に意見
しけるはそこにはいなかにて歴々の御方也此程は江
戸衆のはやり詞など似せ給ふがいやみ也よき男と金
つかふ人とはやり詞に傾城は倦てゐれば只有のまゝ
なるが可愛なりあちの儘なる人におろかなるはなき
もの也ゆめ／＼似せ給ふなと申せしと一座せし貫支
といへる人の物がたり也かゝる遊びものゝ内にも名
高きは心のおき所格別なりしからば風雅も

○書林何某煩て心地死ぬべく覺へしに菩提所の和尚
を請じ末期の安心をすゝむるあらましにて念頭に後
生の大事を述べられけり何某むつかしき男にて有けれ
ば重き枕をあげ様々の御まめしありがたく存候也ひ
とつ御尋ね申度事の候は皆死候跡にて野送りの節御

引導と申事ござ候定めてよき所へ參る事を御教下され候事に候はんが折角仰聞られてもその時は息たへ耳もなし生たる人のみ承り候あはれ御情には只今仰下されたしと願ふ和尚すつと立て佛前にありける法然上人の一枚起請をとりよみ聞せ是難有き所へ行道中記也と申さる病人大にさとり扱々結構なる道中記にてこそ候へ有難しと息の限り念佛して往生をとげ申ける是書林に對して題のうごかぬところ也

○淡々猫を飼けるに我喰けるめし夜菜などを我が器にてわけ遣し膳の脇にてくはせけり門人の曰先生の餘りなる不行跡の飼せられやう也猫の癖あしく成候はんと淡笑つて曰さればとよ初め二三疋の猫は随分と行儀に飼つけ首玉などもきれいに諸事めし遣ひの女共の取計たりしがいづくへかぬすまれ十日と内の用に立す畢竟美しく飼たるゆへ人もほしがるなり依て此猫は飼し初めよりかくあしく育たるゆへ一二度はぬすまれたれども行儀あしきゆへ追かへされしとみゆいづれもよく御考候へ猫は所詮鼠の書物を荒すを防ぐの役が專一也と見る時は餘事にかまはず唯鼠の役といふ所が眼のつけ所也俳諧も又かくの如し爰

が眼字それが其題の專といふ事を見さだめたし

○或妓家にて星合を大江丸

七夕の今宵大ほし力彌かな

此句餘りけややくいかなりと申さるゝかた多きよし沙汰有につけ思ひ出し事ありひとゝせ東武にて雪中庵の附句に

おれも是から醫者になるはつ

といふ前句に雪中

ひそくと矢間千崎ほり小寺

と附られ候其席に魚波連丈などいさめて云おもしろき句ながら浮世めき候こゝは矢間神崎などゝあらむにと申夢太笑て夫にては近代にて遠慮もあり實にはまりてもいかなり都て和朝のてあそび源氏伊勢物語など上古の人あながちに不可尋其作者只可翫詞花言葉而已と戸部尚書の奥書有是らをいふにあねど俳事に八雲の末なればと下略ちからとあらんには風流なし七夕のあふぼしとつゞけて力彌とされたる宗因の風刺をおもふばかりひとゝせに數千の句をいひ捨るうちの我なぐさみなり我にはゆるせとありしひとつの癖と大様に見なし給はれかしと

○雪中庵蓼太の句に此一項はいかい袋夏の部に見ゆ

さみたれやある夜ひそかに松の月

といへるをからくによりはめてこしける事の珍らしければ爰にゑるす

撒蜜他列耶阿兒要披促革尼麼子那次吉雪中庵蓼太蓼太先生者隱君子也都人士以爲金馬侍從之流亞矣乙未春於崎陽客館得俳諧歌一章言是先生所著僕不能讀其國字故就譯士某得解解則興在景中意在言外大非俗品可知蓋僕亦有所感也因賦一絶寫其意傲之謂所不辭也

長夏草堂寂 連宵聽雨眠

何時懸月色 松影落庭前

乾隆四十年孟夏月望後三日 雲間程颢南

句のうへはとまれかくまれ俳諧の道の唐土にきこへてかく賞し送られけるめでたさにゑるす也

○良能あるとき一卷の變化を説申されし序物語に昔淨瑠璃の作者近松門左衛門國性爺といへる狂言を作り出して大あたりせし跡を猶おもしろき趣向もがなと枕をわりし工夫にわたる其時の芝居ぬし竹田近江申は作者のこゝろにはさこそ存せらるべきがさりな

がら大當りの跡は大體すら／＼としたる事をなしておかるべし國性爺にてよほど徳分あれば一二年不當りしたりともわれらしきがたべる程は澤山也其間は古き物にても出し其内には自然とよき狂言も出候はん夫より上夫より上と趣向に趣向を重ねたらむかくもてゆかば我家業はつき果申さむたゞ天然にまかされよと申たるは一道に秀たる物の詞諸道に通じ俳諧の一卷の變化もこの心專要なるべしとかたられし

○良能云世に來山が「門松やめいと」の道の「一里塚」といふ句をもて禁忌也いかに新しき事をいはんとて風雅の罪人になれりと云ふ人あり是は來山が住ける家の裏屋に住居せし者の大晦日に身まかりけり來山が隣は家ぬしにて不斷は庭を通せしかど元日なれば翌こそと申裏のをのこはやもめにて遠き親類杯の取賄たれば早く取玄まひたき人なるをと來山聞てきのどくがり我は世をのがれける風人なればかまひなしと許して元日の夕かた我家より野送りを出しやりての詠なるよし夫を罪人といふも又道を重んずるの謂にて殊勝には侍れど物は其時の様をよく／＼考ていふべし人の句を聞むも同じ

○手にはとゝのはざれば天地の神にかなはず我人とも
もに受ざる處あるべしかの伊勢の團友讀岐の浦にて
生海鼠ともならて果けり平家蟹

との初案認ながらいまだ心行ぬ事のあればこそ其夜
の夢に數多の蟹にせめらるゝと見しかば再案

なまこともならてさすかに平家也

是景清の謠にも叶ひたり手爾葉自然と備り句ぶりも
格別なりと我心中に復せしかば心神ともに納り其夜
は聊の夢にも見ざりしとか又其角が

此木戸や錠のさゝれて冬の月

平家物語の内に此木戸は錠のさゝれて候ぞこなたへ

酢をさせは閤浮にかへる生海鼠哉 舊國

○防人丸山權太左衛門が角力の高名はいふも更なり
全體心やさしく風流にして雪中二世吏登の門に入て
俳諧のほ句をなす或時連中の望にて我手のひらを墨
にて紙に押形となし其かたわらへ

とつかみいざ參らせん年の豆

かれが身のたけ六尺三寸七分手のひら長さ七寸九分
あればよき祝の句也あらゝしきわざものながら斯
風流なりしものとやさしかりける(以上俳ざんげ)

○乙由云閑人を訪ふならば風雨の日行べし此方の面
白き日は人もおもしろく出て留守なりよしつね大物
の船出を思へと申されし

○古雪中庵曰俳諧も年よりて段々と詞を伊達に遣ふ
やうに心がくべしさなくては物古びて靜なる句も出
ぬように成もて行也されば妓家の長といひし中村富
十郎慶子心がけを心の師として我はするなりと仰ら
れし

○たのしきに居ては淋しきにたのしみがたく又淋し
きに居てはたのしきに樂しみやすしとは古き人の詞
也と仙城の白居物語也

○蓮二云百韻は百變にしてひとあしもとゝむべから
ずば新古自在の俳諧といふべしあたらまき句の二句
もつゝきたらん跡へひだるひにめし喰ふと古き詞を
附たらば又新き詞よりも珍しからむたとへば人のよ
き女房もちながらあしき下女に思ひしみて人目忍ぶ
もよきは古くあしきは新しきゆへならめ

○松江維舟が犬子集十七の卷にゑるせし三條殿山崎
宗鑑を召れ庭の杜若けふ翌と咲り思ふ程折とるべし
と御許ある鑑何の心なう有がたしとて池のほとりに

のぞみ花を折る公

宗鑑かすかたを見よやかきつはた

と仰らるゝ長やがて

呑むとすれと夏の澤水

といまだ詞もひかぬうち

くちなわに追れていつちかへるらん

と鑑つかふまつりければことの外めで笑はせられか

ずのたまものありしとぞ

はいかるぶくろ本文に

一、なるみの山父曰山崎宗鑑がかきつばたの脇の

事古人いろ／＼と沙汰しぬれども皆ひとつとして

慥ならず松江維舟が犬子集十七の巻にゑるせしと

さるかたにて承りしと事おなじ或とき連歌師宗長

三條殿にまいりたれば公の仰に山崎の宗鑑法師は

句は達者にすると聞り汝つれてまいるべし我は句

せんするほどに汝早く脇をつてかの法師せかせ

てあそぶもおもしろからんと仰なり長かしこまり

或日宗鑑をつれてまいりければなにか四方山の御

物がたり有て後庭の杜若けふ翌と咲りおもふほど

折とるべしと云々

○又支考が童子をつれて吉野山に遊び

歌書よりも軍書にかなし吉野山

支考

と申せしも貞徳の紅梅千句に

公家は衰ふ元亨のすゑ

正章

歌書よりも釋書を專にもてあそひ

可頼

この附句をひとつにして句となせり何れも風流のた

わむれ事今の世の人の句を盗むなどの心とは同日の

論にあらじ古書は常によく見て覺悟すべしとぞ

○故雪中曰はいかいはものゝ模様だてなる中に淋し

みを聞せたらんこそよからめたとへば故園十郎が顔

は赤くくまどりながら紙子きて樂屋に居たらむやう

にあるべし

○石髪の云かぶき役者二代目の海老藏が門人にいふ

修行はおのれが勝手あしきかたをならぬ迄も精に入

てはげむべし得たるかたは夫につれて上達するもの

也と申せし我俳諧もその如しほ句かつけ合か勝手あ

しきと思ふかたを修行すべしと

○霍公鳥萬葉時鳥古今 杏乞後撰 郭公後撰

催歸 勸農鳥 蜀魄 納鳥 杜鵑後撰

子規金葉 鵲

燕 鶉 望帝 杜宇 子雋 保度々木須とうけえん鷗鵜

不如歸 周

陽雀 怨鳥 鵲鳩 四手田長

○作に名たゝぬものも世におもひ出ぬ天然のよき句をするもの也妓道に名高かりし初代の山下金作里虹

監よりたらゐにかへる寒さかな

とはよく生死の門を出入せしもの也とある人のかたられし

○良能曰人のよき句なたらむに驚き我も負まじと思ふ心これ即俳魔なりその日は其人に手柄をさせて遊ぶべし未來記にいへる「負いくさ功者に退てかへる也」といひし如くかやうの時我もくゝとあらそふ心いできたらむ己がはいかいの地までうしのふべしと○白牛曰ばせを翁の日はつれなくもの句是は昔尊氏の歌とて

須磨よりも明石のかたにあかゝと

日はつれなくも秋風そふく

このうたをかねてをかしと耳底にとめひとゝせ北國行脚のとき北枝を尋て秋の風秋の山椎口に枝が器をはかり給ひしこれらも俳諧俗に入たる物とかたられしこのうたいづれの書にありしやとゑらす

○兵庫の北風といふ家すじはそのかみ神功皇后の異

國退治の御時より仕へ奉りし船の家也といふ亦新田義貞より北風といふ名を給はりし家の今に血脉たへせでつゝきたるよしいづくにもたぐひなかるべし

北風か二千餘年の梅青し 大江丸

○連丈の曰人情をはくには其人をあく迄もうつし得ざればいかゞ也といひしいづれ俳力の入ものなり

初松魚重衛みやり給ひけり 大江丸

はつがつを宗盛むづとまいりけむ 同

初松魚高時くはで死たりける 同

はじめは三位中將の狩野之助がもてなしをあたにせられざるみやび中の句は八島の大臣のおろかにして人前を恥ざるさま末の一句は鎌倉の入道の田樂法師をもてなさゝる恨をのこせり

○信夫曰何の道にても四十年計前かどは名人上手功者下手とわかり下手は下手なりたのしみ年をつみて功者となり上手といはれ天然と名人の場へもいたりし事なり今はこの下手に成てゐるものなくなりてむりおしに上手といふものになる故名人といふものも出來ぬ様になりしとかたられしも早二十餘年のむかしがたり也此下手になりてゐたる人こそ風りう

最上の人ならむに左様の人なき世こそ恨なれ

○半時庵淡々江戸にて其角が門に入りばせを翁の終焉の時其角二十五歳淡々二十二歳也大江丸が江戸堀にて相見せし頃は元文の始め翁六十四歳なりし

○夏の季寄に住吉の御祓火替と有て此火がへと云事いまだ句にもむすばずや見あたらす是はとし毎の六月晦日住吉の神輿をさかひの津大小路の南なる宿院

へ一名名越の丘

夏こしのなか

うつし奉り夜に入て又御本所へ還御なし奉る泉の氏人堺の町人手ごとに松明とぼしつれて

七堂の濱といふ所を巡り大和橋の北なる御輿の据へ石に休め奉る津の國の氏人すみよしの郷民各々てうちんをかゝげ迎奉り御輿をうけとりかき揚奉れば和泉の方の松明一度に打消してくらがりをおどりかへるなり此御祭を遙拜してきの國いづみ路あはち兵庫

の湊西の宮尼が崎の浦々に漁るもの共のかざりは磯邊に出て挑灯をてらし篝火を焚つゝけ祭まいらすにいづみの方の火の光りのきゆるを期とし各還御を拜しおのれゝが濱邊のひかりどもけちて家に入とかやされば此火の光をせんぐりに目當とし程遠き浦々まゝゝ迄もかくの如く祭とか然れば境遠き道はか

りがたき廣大なる御はらひなり是に住吉火替の神事と申奉る也いづみの人どもの家々にかへる時ははや夜半なれば秋のうつる折から誠に夏越の正しき事是にまさるはあらじとぞ思はれ侍る

火を替るさかひの町や秋の風

ふる國

○西鶴井原氏住吉にて二萬三千句を吐て夫より二萬堂といへり浮世ものゝ俳者にして近松が俳諧は鶴にならべりと云元祿六年酉八月十一日五十三歳宗因の門人也住吉大矢數は貞享元年子六月五日也此時の矢見其角也と申説あれど此とし其角十六歳

○廣南大泥國より象の渡りしは享保十四年にして大阪を通り寛保のはじめ比まで江戸に育られし何れ八十年のふるごと思へば我もいきたりゝ象ものちのちは一丈五六尺に及びしなり

七尺の象見た町よ春の月

大江丸

○活々舊至曰一卷の變化は起承轉の三つ又見聞志の三つをむねにとりて其場の働らきに有べしやむかし太平記にいへる楠判官正成が討手として六波羅より須田高橋數萬騎にて攻め下りしを正成方寸のはかり事にてさんゝに追ちらしその跡へ宮都宮わづか五

百騎にて向ひしかば楠早く天王寺を遶て公綱にかち
をとらせ扱近邊の山々浦々にて篝火を焚うたがはせ
又骨折らずに追かへしたり是程面白き三句のわたり
はあらじとかたり申されたり

公綱もかうむされけむ灯籠

○近年俳諧のうらにて人情をよく盡すものは蓼太蕪
村の兩叟殊にその妙ありすもふの句にても

大内の砂を土産やすもふ取 蓼太

これはかのいにしへ名がみの成衡さつまの氏長がた
ぐひにて田舎のいゑづとに守りのかはりにとりかへ
るさまこけても砂といふおかしみをふくめたり又

負ましきすまふを寢物かたり哉 夜半

妻にあひての情思ひ巡らすべし

白梅や北野の茶屋にすまひとり 夜半

すもふの祖野見の宿禰も菅神の御先祖なれば一入道
の信心もこもれる也是等の力にて風月花鳥の情をい
ひかなへたらむ道に手だれの程を思ふべし鳥虫のう
へばかり凡に察しやりて句作ゑたらむ大方人形の笛
ふくやうならんとさる人の仰さもあるべく承れり

○世に秀逸の句あり貞室の「これはく」又貞柳の

「にくまれて」の狂歌などは物知らぬものまでいひも
てはやすなり誠に世をおほふものなるべしこれに次
ては淡々の口癖の「よし野も花のくれ毎に」はかなら
ずいひ出す也是等こそ道に入たる本意なれかゝる一
句も願はしき事にこそと鳴海の蝶羅かたられし

○さる御方の御説にて承る名月の文字史記月令爾雅
などにも見あたらず又源氏須磨の巻に今宵は八月十
五夜にてと有夕顔のまきに八月十五夜月のあきらか
成とあり詩歌の題にも八月十五夜とありたまゝ明
月とかけるはたゞ月の清光なるを詠ず按に八月十五
夜は名月といへる俳諧の家よりいひ初て本邦の俗稱
となれるならむか良夜とはいつにても月のよき夜と
いふ事也たゞし中秋の十五夜はうごきのとれぬ良夜
なりと仰られき今更是を改めがほなるもいかゞ心に
こめてあるべしと

○五條の中島なる秋里氏のすめるほとりはいにしへ
河原の院の鹽竈のあとなるよしこゝをなつかしとひ
と夜語り明し

名ありげな鳥なくなり明の月

○春堂の云能太夫橋本何某友人とふたり故専助が辻

能を見物せらるその日は道成寺なりしを見ていかに
も感心の體有しかば友の曰辻能はにた事をして聞え
あはすものところ承れいかにかく迄ほめ給ふ哉と云
橋本の答へにさら／＼左様なる事にあらす専助が道
成寺はじめて見申せしが感心いふばかりなし今の世
にて口利く太夫の内には程道成寺をこなすべき人あ
るまじく覺ゆるなり其かたちはともあれ一體が我も
のになり濟してゐるなり外のものをするとかはる事
なし故にくつろぎ有て面白し道成寺の場數専助ほど
つとめしものあらじたれにてもあれスワ道成寺なり
と心のあらたまらぬものあらじ是くつろぎをうしな
ふ處なるべしと申されしとなりしからば俳席にても
はいかいに心あらたまらずくつろぎありたきものな
りとかたられし

○市川五代目の團十郎わざをのがれて牛島に隠れ白
猿と號し小さいほりをむすび老をたのしむこゝに尋
て

いろのしろき猿とのにそと見參まう 大江丸

とつば冷酒けふのもてなし 白猿

月を秋の花となかむる世にすみて 定來

○江戸使者はよく利口をいへり物は附といふ事はや
りしにみえぬものは不二から駿河鴈といひ又川柳點
に「實悟教よめば不二山腹たてる」とかいひしこれら
其事を貫くなりと石瀬子のものがたりせられし

○天王寺のはやし町は梓巫のすめる處にして二季の
彼岸には在所の人のこゝに來りてなき人の口をよす
ると梓の弓に其鬼がみを招き往事を泣く殊にあき
の彼岸はひとしほあはれにおぼゆかしこのはやし町
に住るみこの名の昔めきておかしければかきつく

たち花屋小女郎 ゐんきよふぢ 黒格子のもととい
ゑせんだんの木の姉 やぶのうちのかめ くらご
うしのまん 升屋の女郎 くらがうしのよめ ふ
じやの小女郎

その外にもあまた有中黒格子殊に名高し

○十とせあまり先の秋八月十七日春甫のぬしにいざ
なはれて難波の氏原何某へ月見に罷りしに酉のかね
うつ頃瑞龍禪寺にまいり爰かしこ拜みめぐり半時庵
の殘されし二樹二石のほとりこと更に月なごりな
く澄わたりいと懷舊の心うかびしかば靈あらば淡
々月のあるじせよと手向して其夜はうち原の家に酒

くみかはして宿りせし夢にもあらず又現にもなくう
しろに聲有て疾く置いてまつ露を知らずやと答ふる
にやをらふりかへれど人なし程なく夜も明て伴の事
を思ふ露を知らずやの詞のつねならざるをと此翁に
ゆかりある八千よぬしに物がたりせしにふしぎや此
しらべまたく百川の翁にあらむ其夜の情にひかれ枕
上にあらはれ給へるならん外の夢想などは事かは
りたればと深くも感じこのまゝにやはと其あらまし
を雪中庵へも申遣しけるに誠風流の神に通せしもの
ならめ然らば其神をまつるに如かじとて雪中八千よ
の三唸を催ふし脚力の往來に調ひしするに不二庵の
句をむすびてひとつのかたりぐさとす

靈あらは淡々月のあるしせよ

疾く置てまつ露を知らずや

世はむかし秋の中なる松かしは

やふしかくれに見ゆる北の家

いさみたつ駒のかしらを鞍壺に

夏まだ寒き朔日の絹_{略中}

たのしめや世は實に花の半時庵

よしのくも口癖の春

大江丸

御

完來

陀岳

丸

來

不

執筆

右前篇俳懺悔は四季の發句千餘り墨附百三十葉ばかり
自筆にて寛政二庚戌年出版今年舊國六十九歳亦後
篇俳諧俗は享和元年辛酉出版是亦自筆齡八十歳也

西澤文庫讀佛乘初編上の卷終

西澤文庫讚佛乘初編中の卷

目次

- 一 四方赤良風來山の誤が道行
- 一 遊女五十人一首
- 井女三十六歌仙
- 一 白猿徒然文題上の卷

西澤讀佛乘初編中の卷

西澤綺語堂李叟著

四方赤良風來山人の誤道行

道行虱の妹春筋

夫爪本加久太夫直傳

戀すてふ我名はまだき立出る襟の縫目やはだ著のう
 らなれし故郷をふり捨て何國をあてと定めなく落て
 行身は人のみか虱の身にも戀の淵深き妹春の二疋連
 れ生れつゝいたる數々の足手まとひのはかどらぬ大推
 峠天柱が原風門の谷うち渡りいとかうくたるけん
 べきの峨々たる峯をよそにみて春筋海道とぼくと
 たどり出るぞうざくし見上ればはるかの峯に生茂
 る木々の梢や鳥羽玉の夜晝わかぬ所にも頭虱は住と
 かや世上の人の惡口に花見虱と浮名たつ身の樂しみ
 もいつしかにきのふはけふの瀬とかはるあすやさつ
 てやもえ出るくさのにそよぐ風さへももしや知死期
 のつかひかと世を忍ぶ身の一筋に千手の御手につく

づくと杖とたのみし七九の里四くはくわんもんを打
 越て鳥の空音や帶の關十四十六初戀に思ひ亂れし物
 心血汐の酒のゑひ紛れ縫目のいとたまさかにほこ
 るび初し轉寢のそのむつ言にいひかはし取かはし
 たる誓紙のからすかはひ男とだきしめてたとへ野の
 末山の奥虎ふす野邊の足の毛や爪の地獄へ落るとも
 はなれはせぬといはしやんしたその言の葉がしみ附
 てわたしが脊の入ばくろ苦勞する身のうき旅もみん
 なわしからおこつた事こらへてやいのとよりそへば
 男もともに打しほれ親のゆるさぬ不義徒襟の住居も
 叶はねばかく落ぶれし二人が中心は矢竹にはやれど
 も走らふにも飛ぶにも蚤ならぬ身のかなしさとそい
 ろ涙にくれにけるがハア迷ふたり誤たりげに數なら
 ぬ此身にも先祖の譽に王猛が傍若無人と名を傳へ不
 思議をのこす節穴に恨をむくひしためしもあり又水
 中に浮んでは磁石にかはるの徳あればゆびにひねら
 れ灰吹の底の藻屑としづむとも戸に譽有明の盡ぬ妹
 春の旅づかれいざや急がん夜明なば東じらみと人や
 とがめん兎にかくに身の用心の腰眼やくものかけは
 し白たへの加賀越中の國境ふんどし谷の片ほとり肛

門寺もんじとて名にしおふ大師の古跡ふしおがみ蟻のとわたり打過て金だの宿にぞ著にけり

此一巻は寢惚通人

風來山人の誤なること前に云ふ

の狂文にして天下の

珍藏なりこや二字庵の主雨中の徒然に世の塵中を試

みんと雅席三昧にいれば南風來て玉壁の一葉をふく

是や我業の大悟を開き手の舞足の踏事を忘れぬ

道行の虱のみか這出て

つふしにならぬことぞ嬉しき

遊女五十人一首 井女三十六歌仙

遊女五十人一首序

漢に遊女あり或は漢濱の遊女とは儒書の詞街賣女色或は欲色姦女の法とは經論の文又漢書に一たび顧みれば城を傾とありこれら傾城遊女の權輿なれども何れも異國の事也又或抄に此日の本にて昔小松の天皇八人の姫君を七道につかはし給ひ其名を玉判加陵風芽など、號給ひし事を濫觴と記せり然りといへども此說覺束なしそれより遙往古聖武天皇の御代に遊女ありし事は萬葉集に見へたり是を種として江口、神崎、兵庫、室、鶉野、關、室積其外浦々の君里々の姫其末なりとてもてなざる、頼ひ舞妓あり傀儡有て色を

賣ふ業となれりされば雲の上に召れ星の位に交り和歌を詠じ今様を諷ひ我身を盡し人の心をなぐさめける其言の葉の勅撰に入しを始口號の諸書に記したるを撰び遊女五十人一首と題せる其ことわりを序とす
寶曆二壬申歲穗八月吉日 浪華安田蛙文自序

千代に咲ぬか君かかさしに

萬葉第十九の歌にて天平勝寶三年正月三日越中

之助繩丸の館にて中納言家持と共に雪を詠し也

雪島は越中とあれば唯雪の積りしを云

たるひめの浦を漕つゝけふの日は 遊行婦はに土師じ

たのしく遊へいひつきにせん

萬葉第十八の歌にて田邊の福麿大伴家持など、

歌をよみ合しとかやたるひめの浦は仙覺抄に越

中の國とあり家持が越中の守にて下られける時

の事なるべし古の遊女は公卿に交り姿も髪も宮

女にやつし姫とも君とも呼れし也

我宿の蘆橋はちりにけり 遊行女おとめ婦

花の盛りにあはましものを

萬葉集第八にあり古今集に蛙なく井手の山吹ち

りにけりといふ歌に此歌の下の句をとりてよめり此女も中納言家持大伴村上など、歌よみあひしと也

金門にし人の來たては夜中にも

末の珠名

身はたなしらす出は逢ける

萬葉第九に出たり珠名は上總の國の美女末は所の名也金門は門なりたなしらすとは俗にうか／＼といふが如したなは空也天引天曇りの類なり色好みなる事遊女の類なるべし

左夫流兒かいつきし殿に鈴つけぬ遊行女挾古

はゆまくたれり里もとゝろに

萬葉集十八の歌也家持の註に左夫流は遊女の子とあり傳曰尾張の少昨といふ人妻をさりて此遊女を迎へたり其後先妻おして來りし時よめり驛馬は驛路の鈴を賜はりし官使の下る義也異本に家持の歌とせり

難波潟何にもあらずみをつくし

鳥飼の立野

深き心のしるしはかりそ

後撰集雜のうた也大江の玉淵が女とあり大和物語に亭子院へうかれめども召れし中に大江の玉

淵が女鳥飼をかくし題にて「淺みどりかひある春に逢ぬれば霞ならねど立のぼりけり」とよみし事をのせたり今此歌は友達のかたへ差櫛を心ざすとしてよみしなり

命たにこゝろにかなふものならば江口の白女

何かわかれの悲しからまし

古今集第八別れの歌也詞書に日源の實が筑紫へ湯あみんとてまかりける時に山崎にてわかれをおしみける所にてよめると有此時源の實が歌に「人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていさかへりなん」とあり

年ふれは我黒髪も白川の

檜垣の姫

みつはくむ迄老にける哉

後撰集雜の歌也詞書につくしの白川といふ所に住侍りけるに大貳藤原興範朝臣まかりわたるついでに水たべんとてうちよりてこひ侍りければ水を持て出てよみ侍りけると有袋草紙には肥後の國の遊君と有

みつはくむは老か
まりたる顔かたち也

音にきく目にはまたみす播磨なる伊豫の長柄

ひゝきの灘といふは誠か

忠見集に見へたり忠見伊豫にいきたるによしあるうかれ女のいひたるとて此歌あり忠見が歌よみの名高きを響きの灘によせてよめり忠見の返し

年ふれはくちこそ増れ橋柱

むかし長柄の名たにかはらて

委しくは契冲師の川社に註せり

黒染の衣の袖は雲なれや

赤阪の力壽りきじう

涙の雨のたえすふるらん

拾遺集二十哀傷の部によみ人しらずと有力壽は三河守大江の爲基に深く思はれしに病にしづみ今はの時爲基なげき發心せる姿を見てよめる也盛衰記四十五に爲基を定基と有書寫の誤りにや室つみのみたらひに風は吹ねとも 室 積 の 長

さゝら波たつあらおもしろや

東齋隨筆に書寫の性空上人告により周防のむろ積の長といふ遊女にま見へ給ふ時長酌とりて謡ひし歌也上人目を閉給へば長は普賢菩薩と顯れ其聲實相無漏の大海に五塵六欲の風は吹ずといへども隨緣眞如の波たゝぬ時なしと聞ゆ又目を

開けば遊女にて此歌ときこへし也

津の國の難波のことか法ならぬ 蟹島の宮木

遊ひたはむれ迄とこそきけ

後拾遺釋教の歌也宮木は蟹島第一の名高き遊君なり性空上人結緣經供養し給ひけるに宮木が施物を性空思ふ心や有けんたらざりける時に讀る歌也

かきちらし花とのみふる白雪は 蟹島の如意

雲の都の玉のちりかも

夫木抄第三十の歌也如意は宮木におとらぬ遊君也歌のさま古代めき萬葉集の風體なり

下野やしめちか原のさしも草 江口の小觀音

われか思ひに身をやくらん

六帖の歌をとれり今様抄には小觀音は御堂の關白道長公住吉詣の序寵愛し給ふ也

ともすれば戀しき方の名におへる 神崎の河菰姫

都貝をぞまつひろひぬる

夫木抄二十七雜の歌也河菰姫は神崎遊君の長也姫とは君といふ如く容儀の美なるをいふ此時代公卿物詣のついで遊君を召給へば別の後戀しき

にせめて都人の名におへる都貝をひろひてなり
とも慰めんとの意也

大かたになとりきくへき秋風の 江口中の君

さそひてかゝる日くらしの聲

今様抄拙者長元五年十月宇治の關白賴通公八幡
住吉參詣の時中の君を寵愛し給ふ此うたは御宴
の酌取てうたひし歌也源氏あげまきの我名にお
へる中の君の歌をとれるなり

年を経てふ不二の山よりも 蟹島の立牧

あはぬ思ひは我ぞ増れる

詞花集第七戀の上に有古抄に曰此歌拾遺に人丸
の歌に「千早ふる神も思ひのあれはこそ年経て
ふしの山はもゆらめ」是を本歌とせり

つきもせず憂を見るめの悲しさは 空のみるめ

あまも成ても袖はかわかぬ

撰集抄に有みるめは顯基の中納言におもはれ一
年あまり都に住居せしがすさめられて室へかへ
りても再び遊女のふるまひせず終に尼と成て讀
遣したる歌也

はかなくも今朝の別れのおしき哉 傀儡名曳

いつかは人をなからへてみる

詞花集第六に有く「つとは鏡の宿などに居て旅
人をなぐさめの爲衝立衣桁をしつらひ人形をく
いまりつかふの略語にて云也く「つと號く此歌
は東へ下る人に詠送れる歌也

雨雲のかへしの風の音せぬは 島の千歳

おもはれしとの心なるへし

金葉集第八戀の下之歌也下津の國島上の名高き

妓女也

鳥羽院叡覽有り昔より女舞はあれども白柏子と
いふ號は千歳を始とする事諸書に出たり

足引の山のまに／＼たおれたる 島の若の前

枯木はひとりふせるなりけり

金葉集第八にあり島の千歳と共に鳥羽院の御宇
にめされたる白柏子なりうたをよむとて和歌の
まへともいひしにやしらす

かすならぬ身にも心の有顔に 都の戸々

ひとりも月を詠めつるかな

千載集十三に有藤原の仲實朝臣備中守にてまか
れる時女を具して下りけるに思ひ薄く成てのち

月を見てよみし歌也

玉くしけかけに塵もすへさりし

妓まひのめ

玉たま櫛くし

ふた親なからなき身ともしれ

寶物集上の卷に有あやしき女寶源律師を請じ親の追善供養して手箱を布施にしたりけるを開て見れば此歌有撰集抄は詞少し違ひあり思ひこし西の方こそ嬉しけれ 神崎の戸根黒

彌陀の誓ひを頼む此身は

寶物集下の卷に有此遊女としたけて男を伴ひ身のいとなみにや有けん西國へ下りけるに海賊に逢ひきられんとする時西方に迎ひ辭世のうたなり

もへ出るも枯るもおなし野邊の草 都の妓王

いつれか秋にあはて果へき

平家物語に有平相國清盛公におもはれし白拍子也佛といへる女に見かへられたる時の歌也のち尼と成て嵯峨にこもれり

人の身も佛のたねときくものを 都の妓女

へたつるのみぞ悲しかりける

同妓女は妓王が妹にて共に清盛の寵愛にあひし

白拍子なり姉と同心にて西八條の御殿を立さる時今様のうた也

老の身のなれし都をはなれて 妓王か母刀自

ひなの住居と成そ悲しき

同刀自は妓王妓女が母なり親子三人共尼となりて嵯峨にこもれり妓王寺是也平家物語にくわしおもはすも秋にあひぬること草の 加賀の佛御前

我身の上と思ひしけらん

平家物語にあり今様抄に清盛公妓王を見捨て佛を寵愛し給へども又ふるさるゝとしりて尼となりて妓王妓女とともに嵯峨にこもれり

いかにせん都の春もおしけれと 池田の宿久萬の

なれし吾妻の花や散らん

長秋記の抄に有遠江國池田の宿の遊女なり平の宗盛にもおもはれ都にありしに母の病によりていとま申受るといへども叶はず宗盛同じ車にて花見に出給ふとき花のちるを見てよめり謠には

此くまのをゆやと作れり湯谷と久萬のとは別人なり

やとりあひおなし流を結ふこそ 手越の千壽

みなさきの世の契り成けれ

平家物語に有今様抄に千壽は手越の長が娘也平の重衡東へ因はれ給ふ時鎌倉殿の御情にて重衡を慰の爲此女をゆるしつかはされ御盃の酌とらせ給ふ也一樹の蔭一河の流皆是他生の縁といふ朗詠の心也

東路のはにふのこやのいふせきに 池田の宿の侍従
ふる里いかに戀しかるらん

盛衰記四十五に有平の宗盛因はれ鎌倉へ下り給ふ道遠江池田の宿に泊り給ふ時長が娘侍従御伽にそひふしてよみし歌なり

もろ共におもひ合せてしほるらし 侍従同母湯谷

あつま路にたつ衣はかりは

娘侍従が宗盛公と歌よみ合しに附て同じく母も詠せし也平家物語には大臣を重衡とし又謠には此湯谷を宗盛の思ひものとして作れり

見るとても嬉しくもなします鏡 都の静御前
戀しき人の影をとめねば

義經記第五にあり静は鎌倉殿へめされ鶴が岡の八幡にて法樂の舞をかなでしは世にしろ所也此

歌は芳野にて笹に鏡を給はりし時の歌也
よしの山みねの白雪ふみわけて 磯の禪師

入ぬる人の跡や戀しき

義經記第六に有鎌倉若宮八幡宮にて静が舞の折から母磯の禪師も法樂の爲舞ける時のうた也跡や戀しきとよめるやのかな字眼なり

都のみおもふかたにはいそかれて 江口の桂木

心すまれぬ柴の庵哉

撰集抄に有江口の尼の連歌とあり西行時雨にあひて同行の聖と共に此尼の庵に宿りしにつれなる僧かく下の句を打すさみしかばあるじ上の句をつけたるとなり

世を厭ふ人としきけはかりの宿に 江口の妙

心とむなと思ふはかりぞ

新古今集撰集抄沙石集にも有西行法師江口にて雨にあひ宿をかりけるにかさゝりければかりの宿りをおしむ君かなとよみし時のかへしうたなり

千歳ふる松の枝には鶴すくひ 喜瀬川の龜鶴

巖の上に龜遊ふなり

曾我物語第八に有今様抄にかめ鶴は少將と同じく祐經の假屋にめされ備前大藤内が思ひもの也折から曾我十郎假屋へ來り工藤と酒もりの時いども有けしきを見て取あへすうたひし今様歌なり

捨る身に猶思ひ出と成るものは 化粧阪少將

とふにとはれぬ情なりけり

同第五書に見へたり此女は五郎時宗に相馴しに梶原源太せきてあはせず折から時宗最期の別れをおしみに行しかども逢事ならずして歸れり終に尼と成て虎が庵に住で往生せり一説に手越の少將として別人とせり

露とのみきへにし跡を來て見れば 大磯の虎

尾花か末に秋風そふく

曾我物語第十二の卷に有虎は十郎討死の後尼と成所の翁をあないにてゐでのやかたのほとり祐成の最期場を見ていと歎きにしづみよみし歌也

月影はさこそ明石の浦なれと

棕橋の龜菊

雲井の秋そ猶も戀しき

承久記下の卷に有白拍子龜菊殿とて後鳥羽の院の御寵愛にて攝州長柄棕橋西庄を賜ひ世に傾城の大名といへり然るに地頭かめ菊をあなどるゆへ改易の勅有しかども北條泰時用ひす終に兵亂と成一院隱岐の國へ流され給ふ時龜菊殿附參らせ明石にてよみし歌也

信濃なる木曾路にかける丸木橋 都の綾

ふみたる時はあやうかりけり

沙石集第三に有信濃のある人京より遊君を具し下りて妻とせり此女京にあまたなじみたる男のかたへみをのぼし其返しのみかくし置ぬ夫此事をしれども物ゑがぬゆへ息子の兒によませたり此兒心あり唯よの常のゑのやうによみて難なかりければ女よろこびてよめる歌なり

物思ひこしちの浦の白波も 越路の初君

たちかへるならひ有とこそきけ

玉葉集第八旅の部に詞書に爲兼佐渡國へ罷り侍りし時越後の國寺泊りと申所にて申送り侍りしと有

大船にのることなれとたのしさは 島寺の袖

同し波路を漕渡る哉

太平記第十七に有今様抄に越前金が崎にて義貞御遊の船を催し春宮御盃をかたむけ給ひし時袖御酌に立て翠帳紅閨萬事の禮法異なりといへども船の中波の上一生の歡樂はおなじといふ心の様をうたひしとなり

夏はつる扇と秋の白露と

野上の宿班女

いつれかさきにおきふしの床

謳祕抄に有班女は美濃國野上の宿の遊女なり本名を花子といへり吉田の少將といふ人に契りて別れの時簾に扇をもらひしゆへ唐土の班女にたとへて異名とせりそのうち便りなきゆへものぐるはしく狂人となりて諷ひし今様歌也

死ぬばかり誠になく道ならは

傀儡阿古

命とともにのひよとぞ思ふ

新續古今集第九に有詞書に尾張國に京より下れる男のかたらひつき侍りけるがあす歸りなんとしける時しぬばかり覺ていくべき心地せぬよしひけるによめる歌なり

東路に君か心はとまれとも

傀儡侍従

われも都のかたを詠めん

新續古今集第十に有湛覺法印青墓の宿に泊り主の心あるさまに見えければ曉たつとて「しのゝめや都を旅になしはてゝなは吾妻路にとまる心を」とよみしおかのへんかなり

聞しより見て恐しき地獄かな 高師の地獄

しにくる人もおちさらめやは

泉州志提要抄に有もとは是は連歌也上の句は一体和尚下の句は地獄也

幾夜われおしあけたかの月影に 府中の宮城野

それと定ぬ人に別るゝ

疑源抄に見へたり駿河府中の藤井氏此宮城野を請出し夫婦と成て後永祿年中に夫上京の跡にて武田信玄と今川氏真と兵亂の時軍兵宮城野を犯さんとするゆへ深く隠れ縊れ死したり此歌は遊女の時よめり此歌のやさしきゆへ藤井氏が妻とせしなり

花すゝき君のかたにそなひくめる 尾道の宮産

おもはぬ山の風は吹とも

疑源抄に宮産は備後尾の道の遊女なり永祿の頃

大和の國廣瀬十郎といふ郷士尾道の伯父方に滞留の時ふと宮産に契り互に深くあひなれてよみし歌也

思ひやる今宵はたれと契るらん 吉原吾妻

定めなき世に定めなき身は

宗因紀行に出たり吾妻太夫は風雅の聞へ有もの也延寶年中の全盛と聞へたり

右寶曆三癸酉年八月吉日出版畫工江東蒲生大谷産

月岡丹下

平瀬露香氏藏摘英雜錄卷二にのす同書には末文に左の如くあり

選者 浪華 阿紋 觀安 田蛙 文

畫工 江東蒲生大の谷産月岡丹下

翰士 浪速 桂井 蒼八

書林 大阪島の内南塗師屋町浪華屋忠五郎

右は寶曆三癸酉歲八月吉日の出版也

女三拾六歌仙といへるを因に爰へしるしぬ

思ひつゝぬれはや人の見へつらん 小野小町

ゆめとしりせはさめさらましを

三輪の山いかにまちみん年ふとも 伊勢

たつぬる人もあらしと思へは 秋風の吹につけてもとはぬかな 中務

萩の葉ならは音はしてまし

何か厭ふよも長らへしさのみやは 殷富門院大輔

うきにたへたる命成べき

逢事のまづに月日はこゆるきの 右近

今は恨んいろにいてゝや

絶ぬるかかけたにみえは問へきを 右大將道綱母

かたみの水は水草ゐにけり

あふ事はこれやかきりの旅ならん 馬内侍

草の枕もしもかれにけり

常よりもまたぬれそひし袂かな 赤染衛門

むかしをかけておちし涙に

諸ともに苔の下には朽すして 和泉式部

うつもれぬ名をみるそ悲しき

ぬまことに袖ぞぬれけるあやめ草 藏人左近

心に似たる根をもとむとて

みし人の煙となりし夕より 紫式部

なもむつまじき鹽釜の浦

死ぬはかり歎にこそは歎しか 小式部内侍

いきてとふへき身にしあらねは

馴行は浮世なればやすまの蟹の 齋宮女御

鹽焼衣まとふ成らん

たよりある風もや吹と松島に 清少納言

よせて久しき蟹のはしふね

うたかひし命ばかりは有ながら 大貳三位

契りし中のたえぬへきかな

ひとりぬる人やしらん秋の夜を 馬内侍

なかしと誰か君につけつる

浦風に吹上の濱のはま千鳥 一宮紀伊

なみ立くらし夜半に鳥なり

諸ともにいつかとくへきあふ事の 相模

かたむすひなる夜半の下紐

忘れてはうちなけかるゝ夕哉 式子内親王

我のみしりて過る月日を

みわたせはふもとばかりに咲初て 宮内卿

花も奥あるみよしのゝ山

契りしにあらぬつらさも逢事の 周防内侍

なきにはえこそ恨さりけれ

儂のかすめる月そやとりける 俊成卿女

春やむかしの袖のなみたに

おもひきや忍ふへしとはうき人を 待賢門院堀川

なとかはるらん吾心さへ

なにとなく聞は涙そこほれぬる 宜秋門院丹後

苦の袂にかよふ松風

夏引の手ひきの糸の年経ても 嘉陽門院越前

絶ぬ思ひにむすほれつゝ

一夜とて夜がれし床のさむしろに 二條院讃岐

やかても塵のつもりぬるかな

櫓つむ山路の露にぬれにけり 小侍從

曉おきの墨染のそて

心していたくななきを蟋蟀 後鳥羽院下野

かことかましき老の寢覺に

をく露は草葉のうへとおもひしに 辨内侍

袖さへぬれて秋は來にけり

恨ても泣ても何をかこたまし 少將内侍

見しよの月のつらさならては

別にしその日はかりは廻り來て 伊勢大輔

いきもかへらぬ人を戀しき

春は猶かすむにつけて深き夜の 土御門院小宰相

哀を見るる月のかけかな

曇れかしなむるからに悲しきは 八條院 高倉

月におほゆる人のおもかけ

僞とおもはて人の契けむ 中納言尙侍家

かはる習の世こそつられ

身を去らぬ同じ浮世と思はすは 式乾門院御匣

いはほの中も尋ね見てまし

それをたに心のまゝの命とて 藻壁寺門院少輔

やすくも戀の身をやかへてん

白猿徒然文題上の巻

徒然文題發句獨吟狂歌獨詠反古庵白猿戲述日本の論語と稱する徒然草は反古の裏にかゝれしときくに我等如きの戯れ書をかゝる白紙にかひつくるはおこがましくもたいなくはおぼゆれど人毎に一つ癖は神佛も人間をゆるし給へまた假名遣ひ一向に存ねば推量にて讀給へと白猿がいふ序 つれ／＼なるまゝに

蛸や硯にむかふ窓の先

反古庵
白

猿

年ふれは筆も坊主になるものを

かみおしみ也 反古うらとは

一

いてや此世に生れては願はしかるへきとい
そおほかめれ

いてや此世に住甲斐も鳴子引

いてや此世に生れては願はしき

ことおほかめものゝ寄合

古への聖の御代

此里は神代のまゝのまつりかな

古への聖の御世の政事

忘れぬ里は隙な辻番

三

玉の盃そこなきこゝち

蓮吞やそこぬけ上戸玉の汗

禁酒したそこぬけ上戸玉かかね

のんてふさけるいとそう／＼し

四

のちのよの事心に忘れす

草の戸や露の命のおき所

焼は灰埋めは土と身はなれと

心は西に有明の月

五

顯基中納言の言けん

罪なくて配所の月やはつ松魚

罪なくて配所の月を三圍も

六

子といふもの

水の出るにはほつとあき基

子といふものなくて有たき暑さ哉

子寶の多きに末はいさしらす

まつ當分はかゝる貧乏

七

人計命長きはなし

斯なれば彼も哀よ九月の蚊

春秋をしらぬ蟬さへ有ものを

古稀の賀祝ふ人そめてたき

八

糸の仙人

掛香や裕なんとは借のもの

雲にのる術もけふからさつはりと

置洗濯になんと仙人

九

女のあしたにて作れる笛

鹿笛や汝か妻も待わひん

あしたにて作れる笛の其主は

しかもかの子のふり袖の君

十

鳶ゐさせしと繩をはる

しんでんの繩にかゝるな風

寢殿に繩引く時は蛙子を

十一

あか棚に菊紅葉折ちらして

關伽棚や木の葉煎口菰

あか棚に折ちらしたる菊紅葉

狐たのんて金にしたさよ

十二

同し心と物語

よき友を月夜に得たる口雨

影法師を友達にして遊ふなら

馳走もいらす争もなし

十三

見ぬよの人を友とする

螢消て雪には遠し月の窓

夜もすから見ぬ世の人を友衛

いく夜ねさめぬ老のつれく

十四

臥猪の床

猪に嚏をさせる薄かな

猪のふすいな客はお身の爲

野邊は錦に夜具の敷物

十五

いつくにも旅立たる

馬士唄に明て卯月となりにけり

都をは鼠に留守を預つゝ

十六

明店にして白川の關
かくらこそなまめかしけれ太神樂

獅子を産んで三ヶ日

かくらこそなまめかしまの躍ぶり

面白幣豕狐鹿く

十七

山寺にかきこもりて佛につかうまつる

山寺に厭ふもかりの時雨哉

撞も憂しつかぬもつらし鐘つきは

心盡しの山櫻哉

十八

許由瓢を捨る

格番に瓢を廻す清水哉

世の中のことばどふとも生瓢

はてはてゝ猶心涼しき

十九

一きは心うきたつは春のけしきこそ

鶯に此頃つゞく朝寝かな

世を捨て友達多く成にけり

月雪花に山ほゝときす

二十

空の名殘

貧棒はともあれ空の名殘かな

光陰の彌生さつきも唯過て

二十一

月と露のあらそひ

下戸達は露の哀よけふの月

月はおかし露は哀とあらそへど

とんと錢にもならぬことも也

二十二

古き世のみぞしたはしき

印籠の時代壽繪や花相似たり

何事も古き世のみぞしたはしき

よひくものと人は云共

二十三

衰たる末の世

おとろへた世と誰が云し年の市

衰た末の世なと申せとも

二歩ては賣ぬ初松魚哉

二十四

すへて神の社こそなまめかしく捨がたきものなれ

のなれ

八判に猶なまめかし御遷宮

佛をばなかくお経はそめがみと

いふは神道ひみつこうさい

二十五

飛鳥川の淵瀬

桃李物言ぬが花の垣根かな

聞しこときゝなかしなる通り者

云ぬか花の浮世成ける

二十六

妹が垣ね

昔見し芋が垣根は芋莖かな

昔見し芋堀坊主荒寺の

住持と成ていと殊勝なり

二十七

御國ゆづりの節會

殿守の朝寝かちなる紅葉哉

つこもりの掛も隠居は餘處に見て

拂はぬ庭に紅葉ちりしく

二十八

ぬの^{水で}もかう

天蓋にあらゝしきよ秋の風

葬のこわめしやつとくひ過て

はらも十萬億土成けり

二十九

過にしかたの戀しき

去年の友二人缺たり冬籠

忘れぬ死んだ女郎の文がでゝ

返くも泣せけるかな

三十

去る者は日々にうとし

さるものは日々に獨活汁揚豆腐

有はなくなきは數そふいやなと

衰いく日ものらをかわかん

三十一

雪のことかゝぬ文

雪の事かゝぬ手紙やとしのくれ

雪のことかくはかりなる長文に

つもる思ひの消やらぬかな

三十二

こゝのつき月見歩行

垣間見にいとゞ月夜の美人哉

忍ぶにはやみか吉田の兼好も

月にうかれてふらりしやらりと

三十三

閑院殿のくしかたの穴

夕風や窓に手の込夏座敷

拂玉へ清めんから組たてゝ

六根障子はれば引越す

三十四

やなたりはかな澤うらにあり

へなたりや野島の蟹の濡浴衣

金澤の名題の餅をつく音は

へなたりノゝことぞきく

三十五

手のわるき人

山里や花に來よとのにじり書

口作の書出し見れはいかさまに

釘の折ともいふべかりけり

三十六

久しく音信ぬ女のもと

夕貌や是はかきねのそとの花

圍れのはてはいづくへかし木屋

人しれすこそ積る見料

三十七

へたてなき人の心をくさま

元日や夫婦くらしも折日高

年禮にわせた江戸衆へもてなしに

田舎豆腐のかたひ附合

三十八

身の後の巨金

夜さくらや引四つ過て又おかし

玉は淵巨金は山へ捨る程

せめて一日持て見たさよ

三十九

念佛の安心

目は覺ぬ南無阿彌陀佛時鳥

一寢入りねぶつ唱へて極樂の

たねを枕の夢の世の中

四十

くりをくふ女

栗好む娘はいくつ十三夜

物思ふ君がおかほの杓子栗

ゑめどもむきて見る人もなし

四十一

かもくらべ馬

山猿の祭見てゐる梢かな

加茂川の水ぞうすひをくらべ馬

五月五日は初日じやく

四十二

きのゝぼる病

二の舞の面もかふらす松魚かな

此人にして此病有たけの

錢ではたらぬこほうたんかな

四十三

春の夕くれ文見る男

よみはてぬ胡蝶の巻や夕日影

二朱銀を握つめたる欲心の

報で今夜ちこくへを行

四十四

笛吹て佛事に至る

涼しさや編戸をもるゝ灯の光り

笛竹の竹の編戸を吹送る

風に真如の月は映けり

四十五

榎の僧正

露の間を心つくしや庭せゝり

腹立て切倒したる大椀

しゆらをもやしの薪とそなる

四十六 柳原の強盜法印

□らるゝ身をそれなりに柳かな

春風の柳と同じ人心

解ては結むすびてはとく

四十七 嘆咒の尼

入相の風を引すな兒さくら

くつさめの一つは噂三つは風

二つはそしり六つかしの世や

四十八 對重

鷹匠や草鞋のまゝの割籠飯

やきめしをくひちらしたる重箱を

誰に洗へとつい重置

四十九

心戒世を歎す

あきらめのよひ女房や花の留主

死ぬことを知てゐなから心めが

やくにもたゝぬ苦勞する也

五十

女鬼

都かな鬼見がてらの夕涼

西國の橋の袂の鬼娘

宇治よりまさるそたち成けり

五十一 龜山とのゝ水車

番匠の裸涼しや水車

世の中は廻りもちなる水車

雪つまりたる年のくれかな

五十二 石清水拜の僧

遠近にみてらを拜む落葉哉

はか／＼と行て參るぬ石清水

しらぬか錦標樂寺きり

五十三

鼎をかふりし僧

かなへをば仕舞ておきやれとし忘

酒の上狂が過て大かふり

家内のさわき只事てなし

五十四

辨當祈

今さらに割籠もほしき枯野哉

辨當の印ンを結をぬすまれて

珠數さら／＼と茶漬くひたき

五十五

家作りは夏をむねとすべし

須磨内裏夏を宗徒は兵者哉

家作りは夏を棟上げ柱たて

五十六

わがかたに有ほと、の事いひちちす人
一年のふさたをしやへる御成哉

尻馬に乗ては落るさしてももの

毎度咄の腰をふんぬく

五十七

歌ものかたり

かくし藝皆懺悔せよとし忘

しらぬ事知たふりにて夕間暮

諸行無性に啞をつき鐘

五十八

静ならては道は行しかたし

三味線に隣かへはや冬籠

道中の工夫に骨禪の座禪豆

一膳めしに本來空腹

五十九

命は人をまつものかは

翌日は又あすの命そはちたゝき

われ死なば郷戀ろに問くれよ

地獄へおちて便なければ

六十

芋頭くゝふ僧

八本のぬきあしおかし芋島

百日の説法といふ冥加錢

六十一

御座の薨落し
芋にのこらす入上にけり

風荒ておとす薨やほとゝきす

初聲のきかまほしさに時鳥

薨なり共落してや見ん

六十二

ふたつもしの御歌

ふたつ文字牛島かけて涼み哉

二つもし牛の角文字すくなさに

茶漬にせんと眼は覺ゆる

六十三

後七日の阿闍利武者

水鶏にも心ゆるさぬ宿直かな

盗人に逢ふた跡からなう繩は

いかいたわけと人か薨屑

六十四

五つ緒の車

風薫る五つ緒車主や誰

五つ緒の車にのればむつかしや

七つ起して公事にやつるゝ

六十五

かふりのさまも昔より高くなりしとぞ

冠からすかたかへしそ辻か花

かんむりの高き位に登るより

たゞ杳ろひて寢て咄す友

六十六 年羽のぎし

梅咲て雉子ふるまはん春の雪

梅に鳥附る故實も有明の

月はとしはの名残なりけり

六十七

岩本はなりひらなり

岩本の宮居も古りぬ朧月

中將の扱も戀には豆男

性が悪いと人か岩本

六十八

土大根敵を追ふ

大根よ實も汝は剛の者

大根の出で働く太刀風に

かゝみて逃るふたまたの武士

六十九

豆からを憐む

豆からの焚火に袖のしづれかな

豆からにわか身振つて獨り旅

あらいたわしの草鞋くひやな

七十

琴の柱を繕ふ

星の夜やこち作らぬ爪はつれ

立琴の其糸筋も十三夜

みつれはかけた柱を繕らふ

七十一

名をきくより俤の推はからるゝ

顔見世や下りは浅尾爲十郎

名を聞て斯くと思ひし俤は

とんだ違ひの樂鑑天窓ぞ

七十二

多くてみくるしきは願文に作差りまた書の

せたる

多くてみくるしからぬは文車ふみちりつか

のちり

落葉してちりに交る宮居哉

口程にゆかぬ心を省て

七十三

世にはそら事多し

雨戸はつすなわさわひのかと

参らふと存しなからも時雨哉

かくすよりあらはつかしのわか心

うそを筑摩の鍋の数なり

七十四

東西に急南北にわしる

年の關しるもしらぬも大三十日

掛乞のつれなく見えし別より

曉はかりよき春の空

七十五

つれ／＼わふる人

鶯や江戸から誰を來はせいて

世の中のうきに秋葉の猿の爪

ひつかくれ家に身をかこちつゝ

七十六

世の覺へはなやかなるあたりに交る法師

心から隱居も寒し秋の風

隱居はと費な物は世にもなし

そふ思へとも死ぬことはいや

七十七

人のうへ言ちらす

はせを以後物もいはれす秋の風

物いへは唇寒き秋ながら

言ねはならぬ盆の言譯

七十八

今やうのこと共言弘る

よみうりの笠につれなし秋の風

六百になる御比丘尼の生國は

扱も若狭の國とこそきく

七十九

辨たる道は口おもし

達摩忌や灰汁であらつた古布子

たるまゝの九年見つめし壁に耳

八十

人毎にわか身にうときことを好

顔見世や片手の聲をかけるほし

小男か大脇さしをはつこんて

糸ひん奴は、廣の帶

八十一

屏風なんと繪に主の心はしらるれ

元日やとこの床にも不二の山

世の中は葭天井に大津壁

坊主疊にひとつ竈

八十二

頓阿かうすものゝらてんのしく

露の世の記行書ん反古のうら

五器の外道具のいらぬ我庵も

筆と紙とは好島の道

八十三

竹林院殿は一の上にて止り給ふ

足ることを汁もよこしもわか菜哉

上へみれば限もあらず

下みれば限もあらず限りなの世哉

八十四

三藏渡天

鯛や日歸りなからもの哀

錢金をおもいれかりてかり倒

八十五

悪人のまね

とてんの供に立そ嬉しき

雪の眞似して轉ひけり花の山

人心唯賢きに馴よかし

梅か香匂ふ鶯のした

八十六

惟繼圓伊と同宿

僧正と一日談らん山さくら

かり初の浮世に士すのかゝりうと

一家一文なしの身代

八十七

具覺房馬の口つきに切度ゝ

花盛供にしやうなく下戸か増し

酒きけんよのよいといふまくれ

歸す刀につたゝ坊主

八十八

道風の朗詠集

其愚には及ふへからす大三十日

五十から手習してもいろはには

へたの上手に成も一心

八十九

奥山に猫また出る

如意かりて連歌戻りの枯野哉

尾は二つ姿は三毛の乳は四つ

九十

いつの間にやら人くらふ猫

乙鶴丸やすらとのゝかしらを見すと答ふ

頭巾ぬけは見違へらるゝ隠居哉

隙な時おりゝ通ひやすらとの

夜毎ゝにおとつるゝなり

九十一

赤舌日

柴の戸や暦はなくも梅の花

吉日によいことをして惡日に

惡をせぬのか吉田相傳

九十二

弓を習ふ人

總領に乙矢もたすな弓はしめ

一本て靦はつさぬ大的は

にほんめてたき弓の名人

九十三

うらんと約せし牛の死ぬ

牛一つ安賣にせんとしの暮

たのしみは春の櫻に秋の月

夫婦仲よく三度くふ飯

九十四

ちよく書の下馬

遠乘の紅葉におりて女かな

世の中は下から出るも程がある

九十五 親にもらふた我身ならずや
はこのくりかた

小細工か利てうるさき師走かな
儒僂神慈悲より外に掟なし

九十六 心まよふなはてしなき世に
めなもみはくちはみにさゝれたるにつける
草なり

蓍菴をさかしに出し暑さかな

生繁る野ちの旅人心あらは

朽葉見らて摘やもなもみ

九十七 國に盗人家に鼠

帆虱は花見た後の月見哉

熊坂も物見の松に摺火打

翌は晝寢と明す明月

九十八 後生を思はゝ甚太かめ一つも持まし

胆鉢のたらぬもおかし花の宿

貧しくは貧しき口になからへよ

いつまでこゝに住やはつへき

九十九 廳屋の唐櫃あらたむへからず

御内儀のさし圖をまちやれ土用干

千早ふる神代のまゝのから横は

明すに塵を拂ひ給へや

百 曲り曲りて水を召す

冷水に器好みも奢りかな

はこねから先にはやはか有ふとも

江戸はすいとの水の皆上

百一 宣命を忘るゝ

女中衆てことたる桃の節句哉

龍宮て泣て見せたる智恵の程

猿とは膽の太いやつ哉

百二 衛士の又五郎男

林間の落葉に衛士の睦火哉

林間に酒あたゝめる又五郎

されは公用茂き身の上

百三 謎の詞

神棚や口月の末はから瓶子

ある人の内儀狐に化されて

島の中ておはくろをつけ

百四

人目なきに忍ぶおとこ
碓に寝ぬ夜の甲斐や時鳥

短夜の其きぬくの別れ霜

消るおもひに起まとひけり

百五

きたの家影に叩く男と女

忍路やわるい所に雪こかし

忍ふ戀人のとかめぬ所にて

出合かしらを見ぬふり通

百六

證空惡口

時雨るゝや都に近きかたはたこ

お十夜とかたせ參りとてつくわせ

互ひに惡くいゝ沼の花

百七

ほとときすや聞給へるかと心引見る

雲のうへも挨拶からやほとときす

聲の雲井に高き時鳥

てつへんかけ直なしに聞たや

百八

一錢かるしといへともつもれば人を助る

風を切れにして千金の夕へかな

春宵一刻未餘寒のつよければ

價千金の起りこそすれ

百九

高名の木登

こわいけんせふにもおそし年の暮

木登りの登り詰ては怪我もなし

唯下り際に心用ひよ

百十

雙六の傳

雙六の口傳感する師走哉

雙六をふりみ降すみ村時雨

とふやら雪に四三ウ中ぬき

百十一

碁を好む人

碁かすんで又打向ふ巨燧哉

功ならず名とけす身退きたれば

碁を討事も存不申

百十二

わか生既に蹉跎たり

蝶々や乞食も同じ夢心

夢の世のこのた所か用もなし

二度寝をしても夢や結はん

百十三

四十に餘り色めく人

兼好は死ぬとの比は初轡

そこなはぬ身形りかの山の紅襦袢

やほかりしより思ひ染てき

百十四

ことやうの名つきたる女房達

女中衆を仇名て呼ぶや年忘れ

御器量はしかも十人浪越た

御末女中の御名も松山

百十五 虚無僧敵討

御無用と留ても春の行衛かな

御無用と止て止らぬ命こそ

終に河原の夕暮の露

百十六

葛の名も昔は安らかに附けり

書初やお鶴龜松竹之助

法性寺入道前の關白は

年始の禮に口か酸くなる

百十七

よき友三人有

わか宿によき友三人り江戸の春

金持と醫者と智恵ある人ならば

こんにしやれ損のないもの

百十八

鯉の羹

きぬくの袂露けし洗ひ鯉

くふもうしくはぬもつらし武藏屋の

鯉は朱椀に餘る大鍋

百十九

かまくらの松魚

引提て八十二斤初松魚

極樂の百味のしきもなにかせん

松魚が出るとことは橙酒

百二十

唐のものは藥の外なくとも

紅毛の文字や竹茹の匕加減

日本の金で藥を買込は

唐にもまして富貴神農

百廿一

犬は守るかならず飼へし

管仲か寢覺は安し雪の門

鳳凰は出す共まゝよ慈悲心も

佛法僧も日本の鳥

百廿二

人は聖人の道を學を第一とす

御隣へ先孟子入る御慶かな

忠々と雀かなければ孝々と

鳥か觸て廻る毎朝

百廿三

衣食住

衣食住の子三人在り花の春

麥くはす雨にうたれす風ひかす

可なりに揃ふ衣食住哉

百廿四

唯念佛してやすらかに世を送る

蓮の風十萬億土遠からず

六道の街の外の近道に

花も咲升月も照り増

百廿五

導師の顔を狗に見立る

齒に絹を著せぬもつらし秋の風

酒もりかこふし／＼て鴻門の

會よりもまたこわひ口吞

百廿六

はくちのまけ

子を捨る藪のあなたや酉の町

一のうら六な心をもたぬゆへ

獨り乞食となり果る身を

百廿七

あらためて益なき事

笥や八幡の藪ものそかるゝ

あさつきをむすひそめたる姪音中

主人は通りもの言ぬ比

百廿八

萬虫迄も命を惜む

先送れば共に嬉しく放鳥

蚤と蚊と蟻と虱と集りて

人を喰ふ事計いふなり

百廿九

顔回は人に勞を施さす

名代のかりの枕やほとゝきす

下は皆上の掟を守なり

缺れはかくる水の月影

百三十

己を曲て人に隨ふ

おとなしい人に徳ありぬくめ鳥

人に得とらせてわれも損せしと

心かけるかほんの發明

百卅一

貧き者は財を以て禮とす

村長の机は挟し歳暮錢

足事を計かけめしに香の物

畠仕事て腹は鋤鋤

百卅二

元日の奏賀

屠蘇酒や廻れば鳥羽の作り道

閨雨は鳥羽繪のやうな造り道

七つさかりに仕舞舞

百卅三

夜のおとゝはひんかしみまくらなり

寢歸りの左りの耳やほとゝきす

人は皆帝様でも

寢入ば同じ夢の世の中

百卅四

三昧僧鏡を捨る

秋風や流にうつる旅やつれ

わか影の寫る鏡は曇共

心はなとか磨さらんや

百卅五 馬のきつりやう

資季にいさ奢らせん鰻そ汁

知らぬこと問れて知た顔すれは

心の内かくれんとう哉

百卅六 土へんの誤

本草にもれてうれしや初松魚

しほといふ文字さへ知らぬ講釋師

さりととはつらの皮い敦重

徒然文題上の巻終

西澤文庫讀佛乘初編中の巻終

西澤文庫讀佛乘初編下の卷

目次

- 一 徒然文題下の卷
- 一 花街浪華色八卦の附録
- 一 滑稽外國通唱
- 一 青樓洒落文臺
- 一 堵庵影畫の教訓
- 一 煎茶入加減

西澤讚佛乘初編下の卷

西澤綺語堂李叟著

徒然文題下の卷

反古庵白猿述

發句獨吟狂歌獨錄

一 花はさかりに月はくまなきをのみ見る物か

は

此春も寝て仕舞けり柴の庵

花は散り月はもらねとたることを

新樹の窓に蟬の諸聲

くす玉もきくにかわる

玉味噌の薫りふせくや菊晶

くす玉の取かへらるゝ菊の花

猶香はしき九重の内

三 秋の草

薺やちきりて聲の枕元

四

朝顔は朝な／＼に咲かへて

盛久しとへらす口いふ

身死して財残るは智者の恥る所なり

盗人の譽て歸るや菊晶

身のうちに財の残らぬ御隠居は

聲や娘のきつひ厄介

古郷の人と物語

古里の忘かたさよ雪自慢

京かよい江戸かよいとのあらそひも

もとは古郷を思ふ心切

心なしのよきつ言

猿曳と猿ほとの子も持ながら

世中の親の心はおしなへて

唐も大和もかはら撫子

人の終えんのさた

蜷川が靨貴し花の雲

總領に姉に妹に孫彦に

玄孫まで見て賑に死す

阿字觀

たまされる人は貴し年の暮

偽りも實と思ふ心より

祈れは石も佛とそなる

九 落馬の相

女郎花落馬に怪我はなかりけり

桃尻にして毎度乗り栗毛馬

刎落されて恥を梯の木

十 兵仗の難

田鼠化して鶉も猫にくはれけり

光陰の矢にむないたをゐとふされ

あゝらくるしの節句まへかな

十一 灸治神事に穢

宿下りの一日はつらきやいとかな

灸こへて拜まぬ神や佛なら

不動はきつい得手勝手なり

十二 四十以後三里をすえへし

四十越すうき身に寒しやつこ花

信神の御影て灸もすえぬとは

無病れいほう神道の徳

十三 鹿茸をかけは鼻に虫入る

茸狩や吾妻男に京女郎

眼から鼻へぬけ出る程の發明も

つまる所はたつた一口

十四

物の上手もはしめは不堪のきこへも有へし

蝶になるはたらきもなし蜘蛛

七年に一寸伸る楠木も

月日つもれは梁となる

十五

五十になるまであからぬ藝

不器用な人は目出たし年忘

精出して習へは上る年六十

ましてことしは六つの書初

十六

靜念老衰

丈六の無量壽佛や眉の霜

酒のます肴もくはす戀をせず

生たかひなき僧の貴き

十七

資朝とらはれをうらむ

魂棚や莊子かめにはひな祭り

わか國の梅の盛も過ぬれは

大宮人の御出ちかよる

十八

かたわを見て異草をぬく

ことやうなもやうこのみや一花口

ちんぼうもびつこいさりも夫々に

花見てくらす君か代の春

十九

死は汐のみつるごとく

蛤に足ることを知る汐干哉

世の中は百迄ゐたか今死ぬか

知らぬが佛寝か極樂

二十

大臣の饗應

高安し晴て寝る夜や年忘

我宿の狭さに人の別莊を

かりの浮世に世話なふるまい

二十一

筆をとれはものかゝれ

曇なき神の鏡や梅の花

ことにふれて來る心をすてゝ見よ

罪も報も南無阿彌陀佛

二十二

盃のそこを捨る

あばれ蚊や捨盃にへばり付

おあひじやのおてもとじやのと様々に

しいつけられていたみ諸白

二十三

蜷結

宿下りのとけぬおもひやみな結

御家風もしやんとりゝしきみな結

舞ぬ思ひの君か下紐

二十四

行法のほうの字はほうと濁りて云へし

鶯や朝題目に夕雲雀

濁る共澄ともよしや世の中は

流れ渡りの水の月影

二十五

花盛は立春より七十五日大様違はす

七十五日命なりけり初さくら

ちるにさへ目出度ものを櫻花

増して盛の褒めやうもなし

二十六

承仕法師獄に入

身の業をはたくや雁の諸翅

打ふせて命を鳥の報にて

縄目のはちは承知千萬

二十七

太衡の太のしのてん

書物や玉といふ字の筆走り

御手跡も吉平殿のうら書に

點の打手はあらしと思ふ

二十八

人逢時多く無益の談有

壁越にもの言かはす時雨かな

江戸の衆か田舎へわけて久々に

御意を得ましの麥の御馳走

二十九

我俗にあらず世に交る

乗合てみれば涼しやわたし船

江戸者の談り出したる大さつま

あきればてたる京の錢湯

三十

雪佛

雪達摩何處有南北無東西

鶯が御經をよめは忽に

罪消はてる雪女かな

三十一

あらぬ道の席にのそみて

武士の八幡鐘やほとゝきす

翌日有と思ふ心の山開

夜るは嵐の深川の客

三十二

今は忘たり

顔見世や藝無猿の懷手

聖人も禮を老子に問の芋

ふかしきなれや大玄の道

三十三

世の式

よのしきもかはらぬ御代の御慶かな

何事の式三番叟翁たち

面白いめん面黒いめん

三十四

さしたる事もなきに人のかりゆくよから

す

草履迄二日灸や梅の客

世の中を遁れゝて住めは又

めがれ同士の交はりを憂き

三十五

貝覆

人並に膝行も摘や土筆

貝覆ふ人は燈臺元くらし

遠く願ふは愚成けり

三十六

老て智の勝る事若くて姿のまさるかことし

女房の下戸も頼もし山さくら

龜の子の池の日向に連立は

いく萬年の齡成らん

三十七

小野の小町の事

はなうりのいつまでか世に古布子

花の色は現か夢か幻か

木々の梢は皆毛虫婆々

三十八

道をたのしむ

分登る籠はくらし月の宿

何ことも馴ては性と成ものを

心こそから心くるしむ

三十九

人に酒をしゐる

唐土の人に見せたや夷講

二階から廻らぬしたの氣をかねて

あけももしもならぬ色客

四十

黒戸

とし寄の炊こと見たり冬籠

墓目する宿直はなきかやよいかに

黒戸の鴈以下
缺文

四十一

かわき砂子

都かな花に琴の音鞠の音

春雨に泥滑る鞠場へしく物は

鋸屑もたとありく

四十二

古き内待

人にくき師匠しらすの女房哉

其昔内待ときし姑の

きり口上に嫁の氣かはる

四十三

唐 西明寺は大門北向なり

ふく禪の北向き寒し松並木

大門も大門も字は同じ事

されは唐にも北向の寺

四十四

神泉苑にさきちやうをやく

長閑なる聲の限りや法成就

春も潮神泉苑の汀なる

池にとんと燃るさき長

四十五

ふれく小雪

初雪や淀やか障子思ひ遣る

最明寺源左衛門と見る雪は

出家侍犬の伯母さま

四十六

供御のから鮭

乾鮭の綿も古りぬやれ紙子

からさけのからき浮世に長らへて

骨計なる老の身そうき

四十七

人突牛は角を切て印とす

難交寢の夜守宮命戀しけれ

唐土の是も英布がためしかや

人つく牛の角をきるとは

四十八

松下の尼公の切張

切張に家納つて師走かな

切張に四海を示すしやう糊

法の身なから尼の手すさみ

四十九

馬の強弱

若盛麓に繫く駒の數

花の枝に繫止たる殿の駒

ほとけは頓て入相の鐘

五十

吉田か傳

塞翁か行衛はいづく年の坂

年の關越んと鞭を二つ三つ

當れはいさむ春の若駒

五十一

愚かして慎めるは徳のもとなり

顔見世や親の光りの鏡立

精出してあからぬ藝も朝夕に

心かけなはいつかまさらん

五十二

ますほの薄

村雨や簑に薄の風の音

油斷なく世なれて物を聞ならは

人に増穂の薄成らん

五十三

まつ人は障り有

定らぬ世とも言れし花盛

折にふれて雪駄直しも悲しけれ

柴の庵に獨り住む身は

五十四

いつも獨住なる心にくし

砧うつ音はやもめのなく音哉

はら鼓打聲聞は月清み

またねぬ狸空にしろ哉

五十五

夜は物のはへなしといふはひかことなり

夜櫻や引四つ過て又おかし

夜に物はへなしと云うつけ者

吉原も見す顔見世も見す

五十六

神佛に詣る

露けしや觀音草に藥師草

愛宕へは毎月芝に參らふか

伊勢に熊のへとふとあやまる

五十七

己か境界にあらぬものに爭ふへからず

十月や戸塚の臺の宗旨論

神主と儒者と和尚と争ひの

勝負なしの渡船著

五十八

直なる人はそらことにはからるゝ

正直も時によるなりとしのくれ
きをもめするれは地獄も極樂も

嬉しくもなしかなくもなし

五十九

木作の地蔵を洗ふ

冥加いのるあのくたら野へ石佛

色欲を清き流に押積て

洗へは無垢の世界也けり

六十

東大寺神輿

御祭やとれも似合ぬ緋縮緬

とんくんと鼻か茶店の賑ひは

まつか崩れの利生也けり

六十一

定額ホウマツの女孀は公人の通號也

番傘の皆出拂ひて時鳥

僧の身にかきらぬ物は釣網引

うそをつくこと俗も慎め

六十二

楊名之助

人からのよい客淋しけふの月

楊名のさかんとあらはこてまねき

ひとりぬるよの友とすさまん

六十三

和國は呂音なし

松拍子四座の外には十太夫

高砂や此浦船に帆を上て

月諸共に開く沖人

六十四

吳竹河竹

筈とみたはきのふそ秋の風

卯の花の雪の中よりそくくと

孟宗竹は生出る哉

六十五

卽凡下乗の卒都婆

穢多が花そとは何かは摺火打

理りや火のもとに寺を附よかし

さりとは又鍋の下とは

六十六

神なし月

大社神在く餅は是

御仲間皆出雲へと立給ふ

御留守見舞に御忘を夷に

六十七

勅勘の勤

夕立や青葉の中にゆきの宮

夕立の神鳴さはく筑波根に

向ふて不二の入日涼しき

六十八

狂人のしもと

春の水直なる道の處々

盜人も軍もしらぬ君か代に

かしは恥^{本マ}よ筑波雪

六十九 大師くわんしやう

兒のぬる戸のしり寒し比叡おろし

火に不燒水に溺ぬ楠木は

金剛山の峯にこそ生へ

七十 あさねか牛はなるゝ

牛のねた疊めてたし夷講

世の中の角附合を運來て

のろくくらす牛島の庵

七十一 龜山殿のくちなわ

口繩にあやなきけふや山さくら

のらくらと浮世に邪魔なへび親

いつく出^{本マ}しすれば人がいやがる

七十二 經文の紐

雪はとけ柳は結び春の風

經文の紐を日毎にゆふねぶつ

むすばれ安き人心哉

七十三 非道の田刈

初松魚毒をくらはゝ皿つきり

田の畔の其泥水をおし出して

言くるめても上はせいすい

七十四 呼子鳥なく時招魂の法を行ふ

猫の戀頼政きつと見上れは

香爐からぬつと出たる立姿

女のさいに李夫人千萬

七十五 萬の事はたのむへからず

儒者ひとり睡辨當や花のもと

世の中はさつと淺黄の古布子

心とめぬかしのものしり

七十六 秋の月は限なくめたき物なれ

花鳥はとまれかくまれ月の風

三日月の糸鬢あたまふりかへて

今宵そかつら男なりけり

七十七 御前の火爐

けふたさよ落葉に衛士か竹火箸

春をまつ巨燧に足をのへの草

めはかり出して厭ふ冬の日

七十八 想夫戀

蓮吞や妻は袖引くさうふれ

わか宿に三とせ馴染し猫の妻

皮になつても膝へ來てのる

七十九

時頼どの味噌のさかもり

味噌て吞む酒もおかしや時鳥

世を納め國を鎮めた其跡は

みそてのんても甘い酒盛

八十

同鶴が岡足利みやけ

手土産の足利染や衣配り

いつか又君に蛇と存せしに

時節を海老の待しかゆ餅

八十一

大福長者の吝嗇

名月や大福長者大廚

錢金を遣ひはたすも儲るも

心一つの地獄極樂

八十二

狐は人にくひつくもの

初午や化されて行繪行燈

葛の葉の恨かちなるふるされも

もとはしやうねのしつは成けり

八十三

笙はたふくはかり也

笙の音に八千人の落葉哉

責寄る敵は短兵急里山

簫事も口負軍哉

八十四

六時堂の鐘の銘

花酒の酔ませとや鐘の聲

有難き聖の教たへぬ世に

黄鐘調の聲響くなり

八十五

放兎の附物

不似合月に薄や堺町

いつとても絶ぬまつりの喧嘩沙汰

大や／＼同町のふと寄合

八十六

亡者の追福

わか嘘は佛のうその繼穗かな

君よきけ佛と説し言の葉は

佛生袋配らんか爲

八十七

たつのおほいとの

あの形りて雅名おかし松魚賣

頼朝の放給ひし鶴の足の

札は四五枚はしくそ有ける

八十八

ありつね田を開く

野はにしき立て恥さる案山子哉

矢墜の多い長者の臺所

みな番頭の胸にありつね

八十九

白拍子の根元

川竹の流涼しやみなれさは

舞の手の外には何も白拍子

しらぬか佛祇王龜ざく

九十

五徳の冠者

思ふ事二つ忘れて花見哉

七徳を二つわすれた某は

斯のことくの不調法もの

九十一

六時禮讃

念佛て事たる庵や山さくら

彌陀佛と唱へる内は生佛

唱へぬと又生凡夫なり

九十二

千本の釋迦念佛

小袖著た卸も花の都かな

千本の釋迦念佛のくりきより

たつねにほんの神の御利生

九十三

よきさいくはにふき刀を用ゆる

村雲に竹田召るゝ月見かな

きれ文のつかひにたのむ下手細工

手を切ことかきつい名人

九十四

五條の内裏には化物いつる

名月や百物語すめはとて

五條なる内裏に出る化物は

凡河内の狐成けり

九十五

百日の鯉

かさひたらうたゝき起さんけふの月

我庵はお江戸の辰巳しかそ住

世をうし鳥と人はいふなり

九十六

尊者のまへにて史記の文を引く

寶引や是はとなりをかえすとも

三千の戒多き其中に

遠く遊んでしかもゐつゝけ

九十七

若人も少しの事もよくもあしくもみゆる也

はるくゝとめのよる所玉の春

よしあしの中を漕行筏士の

ふかき心はみさほにそしる

九十八

萬のとかは人をないかしろにするに有

炭部屋に雪の雫や白重ね

詠めんと思ふ心も仇にちる

花には咎の嵐とそおもふ

九十九

人に物教ゆる

道間へは腮で教る寒さ哉

何事も習ふうちこそ笑わるれ

得れば其身の寶成けり

百

主ある家

かとのない主人貴しけさの春

主あれば狐狸は寄ねとも

唯鼠にはこまる柴の戸

百一

高麗狗を置直す

こま狗の所定めぬしくれ哉

こま犬にかゝる泪の村時雨

ふりかへられて大笑する

百二

柳箱

朧夜や枕につらきやないはこ

たてにのせよこにもすへる家々の

風に任する柳箱哉

百三

自讃の七箇條の内

萬言萬句一忍に不如大三十日

紫の曙ちかき春の夜に

いとゝ色濃き闇の衣々

百四

婁宿

名月やおらか座敷は竹の影

足事を印の柳とくちりて

ことの缺さる月をみ圍

百五

朧月にぞむ

素一步に梅香はしく朧月

女房とくらふの山のかこひもの

人め忍ふのうらは四つ切

百六

望月のまとなる

十六夜や兀いたしたる額際

鳴戸より生死の海はあらくも

法りをくるゝなうかむ瀬もある

百七

樂欲する所一には名也

和歌によむは汝にあらず蜚

色欲と名利のとかの毒斷は

つねに大醫の戒そかし

百八

父に佛を問

算へ日や根問する子の枕元

とらけとは何を岩松苦むすこ









只通人にしく物はなし









徒然文題下の巻終

花街浪華色八卦の附録

來るか來ぬか、内に居るか居ぬか、うそか、まことか、
末とげる縁か、とけぬ縁か、叶ふか叶はぬか
此五つの事を占ふにかんざし楊枝又は扇にても一本
もち心をおさめていたゞき何れにもせよ信ずる所の

神佛を念じて扇を投まさまにても逆さまにても豎に
成たるを陽として頭を左りにし横に成たるは陰とし
てかしらを右へなし三度投て一卦を起す也始に投た
るを下の爻として段々後ほど上になる也なげたる扇
のゆがみたる時は豎へちかきを豎とし横へちかきを
横と定むかくのごとく三度投爻を得て一卦此卦を奥
にあらはすところへ引合せて其占の吉凶を知るべ
し

		來たらず うちに居る まこと すへとげる 叶へどもあふ事おそし
		すみやかに來る 内に居す いつわり すへとげる 叶はす
		來れども遅し 内に居る まことあれども邪覺有 すへとげる 叶ふ
		來る 内に居る まことなれどもうたがふ心あり 末とげる 叶ふ事おそし

		來らずして文來る 内に居す まことなれども取へなし 末とげす 叶ふ
		來る事はやし 内に居る まことふかくして忘るゝ間なし 末とげる 叶ふ事はやし
		來れども遅し 内に居る まことあれども邪覺有 すへとげる 叶ふ
		來らず 内にある いつわり 末とげす かなはず 來らず 内にいる 誠あれど人に深隱す心あり 末とげる 叶へどもすこしおそし

此書餘程古き洒落本にして島の内坂本北新地中町こほり町尼寺高津新地勝まん六萬たい安治川れいふ八軒茶屋編笠茶屋北野梅ばたけ眞田山上鹽町野堂町馬場先難波新地新屋敷堀江新町を八つの卦になぞらへうかちを書たる書也

滑稽外國通唱

外國通唱を前篇として青樓洒落文臺は後篇二冊とも□□小本にして皇都川東のしやれを書たる物の寫□□都の東南に當つて一洲有名をユスルメロといふ國風豐饒にして華美を好み好色を専らとす何を以て所業とする事をしらず常に絃歌を奏し酒肴を翫び晝を夜となして臥夜を晝となして勤人の形異風にして多くは女を司どる國也頭に鼈甲の角を光らして手足に金銀の爪を磨たて、夜陰深更に徘徊し折々餘國の男子をみては紅の唇を開きて唯一吞にせんとする事さも恐し尤人語文章日本に通せずされば比日其國の通辭によりて文字言語を正し猶本朝の俳諧てふ歌によそへて人情を委しくしらしむる事しかりユスルメロ國語、神樂講、これは日本にていふ仲間の事也此仲間此國にてはことの外かたきびしきと也、さげ札

是は全く此仲間の掟をそむきたる物のれば家々に札をさげて商賣をとめると也おかわり是は馴染の女郎ならぬ時に代りの女郎をすゝめてよばす事也大嫌是は兩説あり實にきらひの事もいひ又心中には好て居ながらいやな顔する時も云一かう粹是は粹かへつて野暮な事を云餘は奥にあらはす所の發句を見て考合せらるべし文字の體一ふでしめしめし一筆示し參らせ候也甲子の陽春通士ミルトウル序粹川士編

神樂講 やわらかき物のかたまる氷かな
水上 無理やりに先咲せけり室の梅
鐵臂附 染しはや一夜時雨にぬれてより
かたの客 大せつに思ふも三日福壽草
枕がけ 高いほと猶このもしき花の枝
店仕舞 夜半から直の高ふなる衛なか
雜喉寢 夜もすからあふなきものやぬくめ鳥
身請 萍や思案の外の誘ふ水
再勤 引鶴や又舞もとりく
中宿行 町中を通れはめたつ螢かな
袖詰 糸櫻よりはまことのさくら哉
約束 鴈の文候へともものなくもかな

身揚涼風や我ものにする我からた
 退代あちらむく時に見へけり雉子の爪
 戲場行身賣場を扇にしのお涙かな
 他所行御供かたとへは客也花見駕
 仕替若蘆や所かはれは名も替り
 入込二三軒見合せ来る乙鳥哉
 千振舞紫陽花や澤山に咲花の數
 揃衣おなしやうに見ゆれと菖蒲杜若
 遼物男とも見ゆるや夏の女郎花
 間夫梅の花兄様などいふて置
 居續けふもまた去ずに居るか夏の雁
 泊仇浪にゆらるゝ鴛の浮寝哉
 朝迎きぬくの妻戸を叩く水鶏哉
 生買待て居るうちは冷たき蒲團哉
 一げん春の雨芝居咄をよるへかな
 馴染身仕舞はなうてもゆるす柳かな
 禿頭はやませてひんしやんとする小鰯哉
 見習かへる子や矢張かへるになるつもり
 自前折々は内へはまねく薄かな
 文彌噓らしい程なく木曾の時鳥

重情箱月はひとつかけも田毎の幾つても
 下げ札水仙に似といふても惣かな
 差紙夕顔の名て買附る瓢哉
 指込夏草や名さへしらねはもしあな
 四六何處やらかうつきりとせず藪椿
 起番しつとして居れはいねふる胡蝶哉
 貸借螢火や宵闇のうちをしはしとて
 花車木の本や花の主も花のはて
 藝子萩ふくや起てはうたひ寝ては濡
 琴藝子一休み爪それなりに火はち哉
 優曲藝子段切の汗にそこなふ粧ひかな
 亭主折に出てみても興なし夏の蝶
 牽頭かれた聲で辭儀する夏の蛙かな
 粉頭あゝしんといふてすわりし火鉢哉
 若衆伯父さんといふ顔凄し夏の霜
 新娼うつゝいて居るも風情や百合の花
 客富貴なときけは床しき牡丹哉
 辨慶鶯にならんと居ても目白かな
 娘分芥子の花さわらは落ん下こゝろ

袂ふるしき 客きやく

踏 客

僧 客

小樓ちやう主

忘おそ八や隱居

廻まはし漢な

送おく僕

線香場

料理人

年 明

祝儀狀

八寸に敷る、春の名殘かな

青樓洒落文臺

客けふ春亭からかういふ本をもたしておこしたがかの先達て出した仕方俳諧外國通唱の如く人物を題にしてされ發句を作した物じやげな是迄のは皆茶屋の事や芝居の事を作した故今度は町の人物を題にしてあらはしたと云こと例のおもしろからぬ物で有ふが何と明てみよふかいないコリヤモウシきつい珍書どふぞ聽聞ナモシどなたも座中早ふ明てよんで聞かしいなアないモウシ旦那よろがはやうあけてくれと申

されます客めつたにあげてくれな溫氣の時分宇津の宮の神主ときては叶はぬ中七さん大嫌ひ惡口いはんと早うよんで聞しいなア客ア、そんなら開きもせい

儒 者 年暮孔子も時の間に合す

醫 者 疫病のはやるを祝ふ冬至哉

茶 人 口切や掛ものは顔てよんて置

陰陽師 身の上はしらし野分の軒のあれ

社 人 茄子齒公家かと思ふ月見哉

畫 人 花にうた當時の戀の間に合す

俳 人 五月雨に乾かぬもよし隻ひの絹

能太夫 風のみはせをに似たる旅寢哉

狂言師 譽るとて油斷はならし入間川

百 姓 年貢上る羽織も妻か手織かな

職 人 剃立て月額青き御影供かな

商 人 千金といふてまけなし花の月

内 儀 餘所の花はよう見ゆる也家櫻

息 子 鶯が鷹うめは古巢をあらしけり

娘 鶯も前うしろ見る時分かな

嫁 一よさの間にはを染て初紅葉

後 家 なかゝの素顔もゆかし慕參
 腰 元 二の替り能のお供の恨みかな
 下 女 敷入や劇場一日戀二夜
 隱 居 藥喰むしろやふりの浮名哉
 女 隱 居 今はやる髪いやしかる花見哉
 出 家 老僧に似た弟子もある十夜哉
 梵 妻 菩提樹の花は凡夫のしらぬうち
 番 頭 其癖に色には深き毛虫かな
 手 代 風呂敷を羽織にかへて夷講
 丁 稚 口とめの白狀させる粽かな
 座 頭 撫て見て色いひ當るそろへかな
 舞 子 母親に日傘もきせず夏の足袋
 神 子 白粉の斑に兀て夏神樂
 客 ナント町のことばかりはかたづまつておもしろう
 ないじやないか替サモシどうでも此邊の事でなければ
 ば愛がムリ升ぬ客サアそこで發句はいひふりたによ
 つてけふ此東盡にして附合をして見よふかい替コリ
 ヤおもしろふムリ升ふが私どもは大の素人でムリ升
 客なんぞいふてかいな素人とはすこしする者のいふ
 事じや丸でしらんことじやあらふがな替コリヤ旦那

丸つぶしてムリ升るなそのやうにもムリ升せぬ替さ
 あゝそんなら始めいゝ替まづお客發句に亭主脇
 と申せば客いかさまきつい黑人じやゑらい事しつて
 居るわいどれゝまづ發句を案じやうかしはしう替つむき
 てかういふてはどうあろふ紋附をゆかたにかへて夕
 すいみ替コリヤモウシ旦那油なしの本妙でムリ升客
 脇はさしづめ花車の役おきとどふじやゝ花車わたくし
 やいやいなアわきとやらはきとやらそんな事はぞん
 じ升ぬわいな替ヤアしらぬとしてしらぬでおかふかさ
 あ尋常に白狀ひろげ立上りて例客さりとてはさわがし
 いちとしづかにしてくれいさあおきとどふじやゝ
 花夫でもわたしやそんじ升ぬもの替モウシおきさん
 どんなことなりといふて旦那に直しておもらひなさ
 れ升せ花そんならモウシ此様に盃をすゝいで居る所
 が句になり升かへ客までゝ句になるぞゝ初手か
 らそゝ夏の盃客こりやけしからぬ銘脇になつたお
 出かしゝ花ヲ嬉しわたしは役はまあすんだ祝ひ
 に一つのもかいなア客第三は藝子の内からたれなと
 して出せゝげいこんな時お柳さんかお袖さんがゐ
 てじやとよいわいな鈍吉さんおまへしておくれえな

ア幫夫はあなたから仰られいでもしてあげたふて
くなり升せぬけれどひとつとしてあげたらナモシ旦
那右の口から尻がかうかとおもふてこい大嫌らひあ
ほういはんとおまへしいなア客までよ今の右の口と
いふので趣向が附たかうはどふ有ふ「三味線をつぎ
く右の噂して幫夫はかんしん右の口は是から戌亥
に當つてすこし鼻のたくましいモシ旦那大ていよい
殿御じやムり升ぬこい又いひか大嫌ひ幫夫先は藝子さ
んの役もすんだが四句目はだれでムり升客四句目は
仲居のよろが場じや居わたしや四句目よりは七つ目
がよいわいなアこの間こちへ来る元庵さんが隣のき
つねつきさんを四句目とやらいふ事をして落してじ
や有た幫何をいひじやいなそりや臺目じやあろがな
客ハ、ハ、こいつはよいわいでかしをつたそれで出
來たくかたこといふて笑われにけり仲居ヲ、外聞わ
る皆よつてしろものにしなされませ幫なんの勿體な
い先生をしる物にするものでまづよろさんの臺目も
よふ出來升たしかし旦那の文字が折合やうにムり
升客てのおり合も片言のうちじやゆるしてやれ幫成
程これも妙じやが此てやひでしたら三味せんがたん

と出升ふせ客夫も此一卷に五丁はゆるしじや幫月花
よりよけいなら大丈夫く客さあ四句目が出來たり
や文臺を立て本式で始めよ文臺は三升屋にさそかへ
藝わたしやおゆるしついに文臺とやら書た事はない
もの幫いやでもお手がよいでは非がない藝どふかく
とよいへ幫此間たゝみや町へ御上なさつた狀のやう
に御書被成升せ客ハ、こいつはゑらい穴じや藝鈍
吉さん大ざらひ鈍吉が替中をひ替その叩なさつた美く
しい手で文臺がうけたうムり升客さあく是から本
式じや笑ふ事はならぬぞ藝それでも鈍吉さんがわら
はしじやもの笑はしなへと鈍吉がかたを一寸おさへしがり
のまへへ幫さあく先そこへよみあげておくれ被成ま
へ直る

せへ

紋附をゆかたにかへて夕すゝみ

初手からそゝく夏の盃

三味線を繼々右の噂して

片言いふて笑われにけり

挨拶にちよつと顔出す二日月

秋の扇にのらぬ物眞似

逢ふてから反古に成たる鴈の文

客 花車
藝子
仲居
亭主
幫間
妓

節季前からいろの深切

客

鼻紙を丸めて當りや當てかへし

是より亂吟

邪魔な所へすわるさし込

目利して悪い男へ思ひさし

三味線箱にこまる落書

又しても鏡取出す鼻たゝき

約束たのむ花車か助太刀

商賣を兼て芝居へ行たかり

ムユといふ手のけんの早蕨

紙花はいつも三分で扱はれ

こりやまた古い榮簪に月

手拍子も糸にはのらぬ不器用さ

鉢打たゝく山姥のきれ

辨慶へさゝやきにくる店仕舞

姉が義理にて買ひし妹

舞まふた跡燭臺が二つふへ

返事の藝子一時に來る

間の惡き時は手水に立て行

寒いといふかよるへなりけり

うとんうり聲より更る冬の月

戀も情も親と相談

仲居に質の札まで見せて置

枕の下にいなすましない

鼻うたを諷ふて這入床の内

ちとおやすみと人中ていひ

酔過て無常の起る駕の中

二番太鼓の胸にきつくり

我宿へ戻つて寝たる本の花

遊び盡せぬ色里の春

堵庵影畫の教訓

心學家豐島堵庵影畫之施印寫(挿繪略之)

かげぼうしは心のすがた

古語にかたち直ふてかげまがらすとかやよろづのこ

と我心にかなはぬは人のあしきにはあらずみなわが

あしきゆへなりとおもひたちかへり見てつゝしむべ

し

縁にひかれて心はうつる

わるいことにはまじるまい

盜人のまねをすれば直にぬすびとゝなり佛のまねをすればほとけなり高慢の心あらば直に天狗なり女を

このむこゝろふかければ女となる忠義の人孝行の人のまねをすればはやそれほどの忠孝にてつゐに忠臣孝子となるべし我願ふ行狀の通りが能うつるなり諸願ひとつとしてかなわすといふ事なしそれゆへ主人のかたちのとをりに家内がなりつゝしむべし

何事もよしあしともに我にありかたち直ふてかけはまがらずゑにうつるかげあいするもにくむのもとは立よる其身にぞあるよしあしのかゝみにうつるかげぼうしよく見ればわが姿なり善惡をうつして見せる淨頗梨のかゝみはをのがこゝろなりけり

宋丞相文天祥語

忠

上事_ニ於君_一 下交_ニ於友_一
内外一誠 終能長久

孝

敬_レ父如_レ天 敬_レ母如_レ地
汝之子孫 亦復_レ如此

煎茶入加減

夫茶を煮て飫んと惟はゞ水の吟味を専らにすべし之熙が曰茶は水の神也水は茶の體也いかほどの名品な

りとも水に應ぜざる物は其能薄し茶と水と相和すれば香氣盛にして味尤美也宇治産の茶は長湯水（かひるみづ）をよしとす他邦の産は一概に論じがたし井水涌泉瀧水各清白にして目方の輕きを好めどもあながち輕き重きにもよらず笹濁せし水に茶に應ふもあり試て知るべし瓶は來船の器は論外也まづ土器を最上とす汲立の水をうつして焰火にかけよく煮て湯玉の登時を待火を去て瓶の口を切り手早く茶を入蓋を閉器の口よりもれ入ざる様にさつと水を灌外のかわくを見て飲べし飲盡して後熱湯をさす極品は三度に及ぶ迄茶の味出るもの也分量は水一升到茶六匁を定法とす薄を好人は減すべし濃を好まば増すべし高料の茶は惜しむがゆへに香も味も薄し心得べき也葉茶を藏は錫にしくはなし其次はよき壺をもとめ幾度も紙にて張り澁をひきて桐の木にて口をよくして其上より澁紙にてとくと掩人氣の通する所に置べし土藏杯に入置ば太陽の暖りなきゆへ早く損する也委しくは好事の人に尋明らむべし予去る文政七とせの夏東山眞葛原に茶店を開き漢書陸羽が茶經和朝榎亭が清風瑣言猷可堂の煎茶仕用集にもとづき貯好事の賓客に學

び問ふていさゝか婦童の（爲にか）著ことしかり

洛東雙林寺門前

眞葛原賣茶園誌

西澤文庫讀佛乘初編下の卷終

西澤文庫讚佛乘二編上の卷

目次

- 一 三勝半七情死口書
- 一 薰物六種序
- 一 三春行樂記
- 一 かくれ里の記
- 一 復讎新聞
- 一 下町稻荷社三十三番御詠歌
- 一 王橋復讎記

西澤讚佛乘二編上の卷

西澤綺語堂李叟著

三勝半七情死口書

大和國宇知郡五條赤根屋半七於大阪心中の砌檢使の趣正徳三年辻彌五左衛門様控帳有之候を寫取置候御同人大阪へ御出の節攝州西成郡下難波村御代官所右の節檢使御役人御同人様御手代

關戸條左衛門

渡邊爲右衛門

攝州西成郡下難波村墓所南側石垣の根畑にて年頃三十四五歳之男年頃二十四五歳之女咽を切二人共相果居候

一男の疵疔二寸計腹臍の上一寸計突疵に相見申候

一女咽四寸計突疵くり候様に相見申候

一男の衣類

郡内綿雨面綿入一

細帶

一筋

羽二重下帶

一

革足袋

一足

珠數

一連

但し手に懸罷在候

脇差

一腰

拵附燒附金具糸柄長さ二尺一寸

小刀

一本

但脇差の鞘に御座候

一女の衣類

日野絹煤竹小紋綿入一、但日野絹茶うら

郡内じま綿入

一

糸ろく帶

一

日野絹ゆぐ

一

木綿足袋

一足

縮緬服紗

一

但裏紅

一封狀一通但木綿茶ぶくさに包

三勝は、樣
みの屋平左衛門様

右之通吟味仕候處相違無御座候以上

下難波村庄屋

甚左衛門印

同村年寄

元祿八亥年十二月七日

源左衛門印

七兵衛印

九兵衛印

辻彌吾左衛門様御内

關戸條左衛門殿

渡邊爲右衛門殿

口書

攝州西成郡下難波村墓所石垣之根畑にて年頃三十四五之男年頃二十四五之女咽を切り相果居候處墓所所わり并乞食垣外のもの下難波村庄屋方へ申來候に附早速右之通御注進申候處關戸條左衛門殿渡邊爲右衛門殿御出死骸衣類等御改其上當村中并近所の者何の覺も怪しき事も無之哉と御吟味被成候へども右之儀に附しき儀少々も怪敷義無御座候

一右二人の死骸へ番人附置候處上本町八丁目京屋安右衛門長町三丁目大和屋八郎右衛門見申候て右女は長町四丁目美濃屋平左衛門娘に御座候由申候右之外別條も無御座候に附いよゝゝ死骸番人附置申候御檢使相濟候迄は右死骸大切に仕置候て御下知次第可仕旨爲其口書差上申候

下難波村庄屋

甚左衛門印

同 村年寄

七兵衛印

元祿八亥年十二月七日

又左衛門印

九兵衛印

孫左衛門印

辻彌吾左衛門様御内

關戸條左衛門殿

渡邊爲右衛門殿

差上申口上書

一下難波村領墓所石垣の根畑の内に拙者女房之妹并男自害仕候之由風聞承候に附早速能越見申候處拙者女房の妹さんと申女に紛無御座候尤男は存知不申候女の親は長町四丁目美濃屋平左衛門と申平左衛門儀は御番所へ罷出申候右女相果候様子曾て存知不申候

右之通御尋に附申上候趣聊相違無御座候已上

上本町八丁目札の辻町

元祿八亥年十二月七日

安左衛門印

辻彌吾左衛門様御内

關戸條左衛門殿

渡邊爲右衛門殿

差上申口書

一下難波村領墓所石垣の内拙者娘并男相果罷在候由承候に附御番所へ御訴申候則死骸見届候處拙者娘さんに紛無御座候男女相對にて右の仕合に

御座候得共何と申分も御座無候間右女の死骸申受
度奉存候以上

元祿八亥年十二月七日

長町四丁目荒物屋市兵衛貸屋

美濃屋平左衛門印

辻彌吾左衛門様御内

關戸條左衛門殿

渡邊爲右衛門殿

口上

一私方常々宿仕置候大和國五條赤根屋半七と申者當
月五日に參り罷在候處昨晚町へ罷出候由にて私方
罷出候然る處今朝下難波村領に相果居候由承候處
死骸見届候へば女と相對にて相果候體に相見申候
右相果候儀私申分も無御座候宿の書置一通御座候
故大阪御番所へ御斷申上候處則右書置は大和へ遣
候様に被仰附候故差越申候相果候様子は曾て存知
不申候拙者宿仕候儀に御座候間半七死骸受取申度
奉存候以上

元祿八亥年十二月七日

大阪長町一丁目
近江屋庄右衛門貸屋

辻彌吾左衛門様御内

關戸條左衛門殿

渡邊爲右衛門殿

右之通書狀五通并半七書狀一通御番所へ渡邊爲右衛
門殿關戸條左衛門殿持參にて玄蕃頭殿へ申達候處鶴
見惣兵衛殿を以仰被渡候は被入御念見分御申附口書
御見せ候此方よりも見分役人遣候處相違の儀も無之
右の譯にて候へば下難波村の者共にも仔細無之候女
は長町之者男は大和のものに候へば男女共町人方へ
受取候て下難波村の者に相渡候様申候様に玄蕃頭殿
被仰渡候に附庄屋甚左衛門年寄共に右之通申渡右口
書五通御返し半七書置はさん親の方へ直に御渡し
由尤男女の死骸相渡候は、先方より受取手形取之注
進申來候様に被申渡候

亥十二月七日

尙々御袋様にはいつぞやくれぐ御申置候御事も
皆僞りになり今更に恥かしく存じ候へどもしかし
過去のごうなりと思召し御あきらめのみと存候
今度三勝私かた相果候事扱々にくしと思召候はん

中村屋安右衛門印

れども互に捨がたき一命にかけかく成行候事くどく
具に書ず候へども戀のせつなる事推量可被下候各様
にも身の上の大事なる娘我身も獨りの母と申殊には
身上の事も不辨人口にかゝる死を遂候も銘々うわき
なると思召被下まじくともかくにも筆にはいはせ
がたく候まゝ跡不便と思し召下され間じくまづ
次第に跡にてしれ申候間筆をとめ申候以上

十一月

半 七

三勝どの御袋さま

美濃屋平左衛門様

右書置封の儘御番所へ差上候處直に三勝親共へ被遣
候由

覺

一和州赤根屋半七死骸

一長町四丁目美濃屋平左衛門娘さん死骸

一半七衣類道具

一さん衣類道具

右之外封狀一通

右之通御番所にて我々共へ受取申候様被仰渡候に附
則慥に受取申候爲其如此御座候已上

平左衛門印

元祿八亥年十二月七日

市兵衛印

御番所様

市左衛門印
安右衛門印

半七宿安右衛門家主

庄右衛門印

五人組

藤兵衛印

靈名

和州五條新町

一蓮

嵐雪月照信士
月雪妙霜信女

詫生

赤根屋半七
美濃屋三勝

薰物六種序

たきものゝ方さまゝなれどつねにあはするは六種
なり梅花、荷葉、菊花、落葉、侍従、黒方、梅花は春のう
めのなつかしき香にかよへり荷葉ははちすの涼しき
香にかよへり菊花は秋のきくの身にしむ香にかよへ
り落葉は冬の木葉のちる頃はうゝと匂ひ來るにか
よへり時にしたがひて昔の人はおはせけれど今の人
にはさしも見へずなり行や物のおとらふるなりけり
そのをりゝにあはせずともおなじもよふといふぞ
世のするゑの人の心なめり侍従は乙侍従といふ女房の

あはせそめぬればその名をよぶといへり山田の尼をはじめは侍従といへば此尼のあはせそめしともいへりいづれにてもその袖の香もおぼゆばかりの匂ひなり黒方はたきものゝにほひにては玄の玄といふ心にて名づけたるを黒方と假名がきに書けるを後人あやまりて黒方と書といへりあやまりをあらためずその字を書もはかりある心に例あればかみのその字をかざし侍従黒方この二種は霜雲の頃さむきにあはせよと傳へたる是は人のつたへもうけずふるきふみにかきおきしをも見ず年々あはせこゝろみてかくなしおきしを人の見せよといふにあらためて序おもふ

梅花

沈香

五兩

丁子

一兩

貝香

一兩

甘松

一兩

麝香

二分

荷葉

沈香

七兩二分

丁子

一兩二分

白檀

一分三種

貝香

二兩二分

甘松

一分

藿香

二分

安息香

一分

鬱金

三分

菊花

沈香

二兩

丁子

一兩

貝香

二分

甘松

三朱

薰陸

三朱

麝香

一分

菊花のいかにもかうばしきを取てうすやうの下に菊をしきてその上にて香具をかさね撒して烏鷲をあはせ蜜を合する也

三春行樂記

倣載介著

式觀_ニ四時_ニ莫_レ如_ニ三春_ニ細推_ニ物理_ニ莫_レ如_ニ行樂_ニ余幸生遇_ニ太平_ニ少充_ニ小吏_ニ父母共存_ニ兄弟亡故天下英才互爲_ニ師友_ニ眼中仙侶無_レ分_ニ主賓_ニ歡_レ無_ニ虛日_ニ約多_ニ遨頭_ニ昔人所_レ謂_ニ一月之内_ニ開_レ口而笑者不_レ過_ニ一日二日_ニ者吾不信也_ニ壬寅初夏_ニ病瘍息偃_ニ數日_ニ偶憶_ニ昨是_ニ邈如河山序_ニ所_レ記以自慰焉_ニ名曰_ニ三春行樂記_ニ

正月元日晴_ニ晚將_ニ宿直_ニ終日在_レ舍_ニ辛盤酒室_ニ家相慶樂飲_ニ浮_レ杯少長皆醉_ニ二尊在_レ堂怡々如也_ニ姊弟侍_レ側愉々如也_ニ孟光舉案操作_ニ而前長女弄_レ毬雅子含_レ錫_ニ偃_ニ曝南軒流_ニ觀稗史_ニ會_ニ山士訓_ニ蘇百順至酒_レ之_ニ客歲猶原克敏惠_ニ二盃_ニ余以_ニ一浮_ニ士訓以_ニ一

浮、百順偶念歲暮赤城之遊、因名此杯百桃花、一曰流水、二子有詩、

三日子日也、將同土山沾之遊、東山宋松栽、雨不果酌之、土山氏男女交錯、相酌無算、策五十名、各有賞余探得一策、書云、弟三十五名、賞以方金、五日、晴、陪土山登之及流霞夫人遊勾欄、觀傀儡戲、世所謂中戲場也、演本鏡山舊錦畫一場畢、登中戶樓、唱曲者竹本住太夫、至歡飲夜闌、是日也、菅江內海嘉十伴七亦與焉、

八日夜、同蘇百順遊赤城、登山下樓、命二妓、百順呼於巖、余呼須磨、

十二日、朝雷雨、停午新晴、同菅江嘉十田阿陪土山沾之及流霞夫人、遊洲崎、宴望汰欄、沾之及夫人乘轎先行、余與菅江嘉十田阿過牛門、舟星野文竿既在、乃與乘舟下楊柳塘、過兩國橋下、文竿下舟而去、頃之携二歌妓至、一曰阿兼、一曰阿留、香火姊妹也、獻酬交錯、朱顏既酡、至望汰欄、會源東江先生、右史近藤氏、三井長年伴七、竹本住太夫亦至、庭有荷葉盆、有銘東江手榻爲墨本、三井氏捧硯視、使余爲跋、余筆不停綴、文不加點、余既醉止、

不覺在硯之左右也、主人絕倒嘆曰、白雲酬緜囊、不必旅裝、赤良寫字硯不必置有滿坐胡序、望汰欄者酒樓也、松江老侯數然斯枝也、以其瀕海故、名曰望汰欄、乃扁樓上、金壁緊目、樓東南向不假彫琢、樸素最妙、庭上松樹松間見海、布帆出沒、晃耀浮、凡工構之妙、庖厨之美、蓋東都第一也、十四日、陰晴不定、過木阿彌子土碗坊、是日諸子賦夷歌、會者凡三十餘人、

十六日、晴、同布施氏及夫人萬年氏金子氏文竿、重遊望汰欄、歡竟日、

十八日、晚晴、同關叔成一集都子雅、賦詩、歸路遇百順、乃携遊天台山、登三河樓、命三妓、叔成呼茂與、百順呼保乃、余呼須磨、

十九日、晴、草堂開講、會者四十有餘人、賦詩、飲酒、醉臥者數人、五陵醉臥、翌日蘇百順又至、截劉阮遊天台、國爲贈、

二十日夜、過土山沾之、觀東江作書、

廿二日、夙興至文竿子、遇羽倉右山翁、翁携余至戲場、入戲房、見優人市川三升、是當時第一孟優也、歸路過源東江、

廿三日夜、過_二山士訓、過_二關叔成、遂同_二叔成_一遊_二天

台、登_二三河樓、呼_二一女_一是舊相識之女也

廿四日、晴、朝衛_三三緣山_一歸路、過_二土碗坊、又遇_二數奇

橋、賦_二夷歌、會者三十餘人、

廿五日、雪、過_二無端齋、賦_二狂歌、夜遇_二柳原氏、又賦_二

狂歌、

廿九日、岡田忠卿詩會也、同_二服右父磯田于光山田宗

俊忠順、賦_二詩、

二月朔日、雨、宴_二五陵樓上、書_二一聯云、紅白花開烟

雨中、樓前實景也、

二日、同_二文竿子、陪_二萬年氏青木氏口氏伊賀侯臣大

橋氏、遊_二望汰欄、命_二二歌妓、曰_二阿仙、曰_二阿兼、阿

仙誦_二唐詩、請_二余解_二唐詩、余後作_二唐詩捷經、贈之、

六日、同_二行元淳公叡山、某源子光橋生遊_二高田寶泉

寺、賦_二詩、遇_二雨夜半歸_二家、是夕也歌妓阿仙過_二土

山沾之宅、呼_二余、余不_レ在、余聞_二之悽惋度_レ日、

十二日、同_二文竿子、陪_二萬年氏金子氏、遊_二中戲場、觀_二

傀儡戲、呼_二三歌妓、曰_二阿仙、曰_二阿皆、曰_二阿兼、夜

宴_二雅松樓、

十五日、同_二土山沾之及流霞夫人、遵_二於海、而遊_二於品

川、宴_二三間亭、嘉十管江田阿亦與焉、

十八日、都子雅巢林館集、同_二士訓琴仲、賦_二詩、

十九日夜、宴_二榎季成、遇_二下潭清國_一者、名吉二郎、

二十日、同_二土山沾之及流霞夫人、宴_二源東江、觀_二妓、

廿三日、同_二伴忠順岡田忠卿、過_二服右父干築地、賦_二

詩、

廿九日、度嶺阪安藤言卿詩會、同_二關叔成伴忠順立子

岡田忠卿安子潤、賦_二詩、

三月三日、過_二土山沾之、作_二曲水宴、同_二菅江嘉十三井

氏、飲_二酒、歌妓阿加與亦至、夜逃_二席至_二萬年氏、至

則布施氏青木氏長瀧氏文竿子及歌妓阿仙阿兼在

坐、合_二樽促_二坐、杯盤狼籍、余大醉臥_二文竿宅、天明

歸_二舍、

四日、宿醉未醒遊_二望汰欄、里長數人觀_二宴終日、遂

同_二五陵子、宿_二望汰欄、

五日、夙起、至_二洲崎天女宮、還_二望汰欄、會_二文竿子、至

乃與_二主人、相携觀_二鶴岡神寶、至_二深川八幡宮、

八日、宴_二野美卿、賀_二華燭_一也、

九日、晚晴、同_二菅江嘉十、陪_二土山沾之、遊_二北里、過_二

茶亭尾張樓、觀_二花、是月也北里大道種_二花樹、弦服觀

粧繁如_二紅霞_一、夜過_二京街_一、登_二大文字之樓_一、妓誰袖取
袖上總角以贈_二余_一爲_二家珍_一、是_二土山氏押妓也_一、菅
江呼_二妓袖芝_一、余呼_二妓一炷_一、夙起又同_二菅江_一、宴_二書
肆耕書堂_一、午後書肆命_二肩轡_一歸_二舍_一、

十八日、同_二土山沽_一之流霞夫人菅江嘉十、文竿、遊_二望汰
欄_一、命_二二歌妓_一、曰_二阿直_一、曰_二阿兼_一、潮退升國共拾_二紫
貝_一、會_二東江子_一、瀧口氏杉浦氏亦至、

十九日、都子雅巢林館詩合、

廿三日、陪_二土山氏_一、同_二菅江嘉十_一、宴_二瀧口氏_一、歌妓阿
皆阿銀亦至、

廿四日、同_二伴忠順岡田忠卿諸氏_一、遊_二練馬村_一採_二樂_一、
廿七日夜、過_二土山氏_一、始_二嘗_一松魚、

廿九日晝、飲_二土山氏_一、夜過_二万年氏_一、文竿子金子氏在
坐、見_二神門諸君_一、歌妓四人佐_二酒_一、曰_二阿仙_一、曰_二阿
兼_一、曰_二阿安_一、曰_二阿文_一、

四月朔、同_二土山沽_一之流霞夫人菅江嘉十、舟行遊_二午
諸宴_一中田亭_一、俗鶺鴒
西太郎、脂鯉角觥谷風駒谷亦至、共宿_二
北里翳菜樓_一、妓名忘_二之_一、菅江妓唐聲、

かくれ里の記

いづれの晝いづれの所にやありけん七の福ある神ま

し、けり中にも大黒屋ときこえしは八雲たつ出雲
の國より見せを出してからのやまとのものはさらな
り西域のしろものをよろづ心のまゝにたくはへたり
西宮の夷三郎とは遊びがたきのやうにて春の花のも
とにかへる事を忘れ秋の月の前にうかれありき給へ
り又福祿ときこえし人の弟に壽星といへる老人あり
てつねにひさごつぷりをうちふりつゝこのふたつの
家に入出してなれむつび給ひしかばいづくの遊びに
もつきしたがばざる事なくこれなん世にいはゆる神
といふことのもとなるべし頃は福德三年の春の頃や
よひの空のうらゝかなるにかけ鯛の糸による柳のは
しのもと鶴屋といへる船やどへより片葉のあしの船
よそひしてむかし鶴岡何がしが繪かける兩岸一覽と
いへるけしきを見つゝ名におふかくれ里のほとりに
あそばんとて出たつなりあまざるひなは箱にはあ
らて玉くしげふた國の名たゝるはしをもあとに見な
しつゝゆく駒どめ橋の駒もとゝめすみくら町のたち
つゝきたる大倉のよねはむ鼠のうはさは黒米のさし
あひあれば水門のあたりの蜆の味よろしなどいひま
ぎらはして常山の蛇のかしらをうてば雇いたるとい

ひけん松のすがたもおもしろや岸のむかひに椎の木
のひろがりたるはたのむかげある松によれるなるべ
しけふしも遊山ぶねのあまたある中にうるまの琴か
きさしつゝわざをぎのこはねをまねぶものあり壽星
はこれにうかれて

しら波のこすや親方首尾の松

シイの木やしき聲か高塚

何がしのわざをぎの聲をうつしてうたひ出たるに人
人どよみてわらふあはれ辨財天をもぐしたるましか
ばよつの緒のしらべはうき世の人のみつのをにもた
ちまさりなんをといふゆきくゝてみむまやがしのわ
たりにいたるこゝはわたし船もて西よりひがしにひ
がしより西にとゆきかふ所なには人にしられんもな
かなかつゝましとて大黒は頭巾まぶかに夷はゑぼし
引入てゆくを壽星はたゞうつぶけに顔かくし給ふも
長枕の心地せられておかしいにしへ駒かけ堂ときこ
へしは今の駒形堂にして鳥がなくあづき橋とよべる
は大川橋をいふなるべし花川戸のわたりにて花川
開ニ繡戸一雙燕自相求といひけん南郭の翁のからうた
の句も思ひいでられて壽星は南極の翁と戯れて

何處春霞起 花川戸半開

風梳助六柳 波洗意休苦

とうちずし給へり惠美壽

釣上し赤めとゝもに酒くまん

いはくす船のあしたゝぬまで

大黒屋のぬしは小槌を腮にさゝえて

むらさきの頭巾もかすむ筑波かな

此はぢまきは過し頃ともいはまほしきゆかり法師の
布袋和尚はのびあからねば見えぬてふ三圍の鳥居の
かたはらなる牛頭山のみ寺におはせどけふはついで
あしければたちもよらずかの眞土しづんで木末のり
こむ今戸ばしとうたひし土手ぶしも今戸の今みるが
如くさんやぼりのほり替ものはむかしも今もかわら
ざりけりなともに船より上りて堤づたひにかちより
ゆく袖すり稻荷の袖ふりし手ぶりに引かへて今は枕
橋もふたつならばす孔雀長屋の名のみことくゝしう
見かへり柳のなみたてるに二もと柳のむかしをし
び人目づゝみもつきなんとすこゝにきびしき掟の札
たてり境にいるには禁をとふならひなればたちとゝ
まりてよみて見るにくすしの外は馬車にのる事をゆ

るさす又ものゝふの手にならすほこのたぐひは門の
 内にないれそとかけをみるにもよくこそ鞍馬の多
 門殿をはいざなはざりしとかたみに目くばせして笑
 ふ大黒屋の相しれりけるやどりに入て松ともさせて
 かなたこなたかひまみつゝありくこゝに櫻を植る事
 は家々の鉢の木を門邊に出してよなく雨露をゆた
 かにたもつといへる年の頃より市のつかさに聞えあ
 げて今はかくうつし植る事となんきこへしげによし
 野の山もうごきいでゝすまの若木の花のなみこゝも
 とうちよするはとうたかふゆきかふあそびどものさ
 まをみるに綾羅のたもとをひるがへし錦繡のもすそ
 を曳て花か人かともたとまほし人々興じて見ての
 みや人にかたらんとてとある高どのののぼりてあそ
 びをめす盃あまたゝびめぐり壽星はあまりに酔しれ
 てかたへにありあふうすものゝ帯を鉢巻して踊り出
 給ひしも鼎かぶりの心地せられてかの助六のゆかり
 の色には似もつかず日もくれ竹の町の子のひとつは
 つゝみのほとりの亥の時ときくにもかへるさのほど
 も思はれてゆめばかりなる手まくらに朧月夜の歌口
 ありつきの雲とやなり雨とやなり給ひけんよくもし

らずかしかるよしなしごとをそこはかとなくかき
 ちらさんもつゝましかれど千代に一たびすみだ川の
 ながれたえせずつくば山のこのもかのものをひしげ
 りゆくかくれ里の鼠のはつかにも物いひさがなくい
 ひいづべき事かは大あなむちのあなかしこと筆をも
 といめなまし

天明とあらたまりぬるはじめのとし彌生の頃小車
 のうしごみの里に筆をとるものはたぞ

四方 赤良

復讐新聞忍池子筆記

午十一月十二日新大橋糶藏後敵打の次第

南塗師町

機三郎店手習師匠

頬あご手疵三箇所

仙 龍 廿三四歳

右同人養母

頭手二箇所

み き 四十歳位

右同人妻

手面部少々二箇所

は る 十六七歳

神保左京家来

うで頭内襟疵三箇所

崎山平内 三十四歳

右は午十一月十二日四時深川六軒堀中の橋邊にて平内へ切掛け夫より猿子橋通り元町餅屋の裏へ逃こみ候處三人の者追詰め切詰倒し申候右は糶藏に詰居候者の話翌十三日に承る

十二日朝深川六間堀さるこ橋の邊にて復讐の事あり

と風聞す前原孫市下女^{もと神保の藩中に居し者也}いふ様それば神

保の家中にて有べしといふ何故さいふやととへば先

年同家中山崎彦作といふものを闇討せし事あり數人

徒黨とはいへども崎山平内頭取ゆへ討れし人の妻子

つけねらひ候由聞はべると答ふはたして平内也平内

を親の敵ときりつけしものは年十七の娘也助太刀せ

しものは此娘の繼母の掣となり掣は南塗師町權三郎

店に住居せし仙龍といふ書家也平内をつけねらひ候

ため今年春六間堀森下町幡非山長慶寺門前へ出張を

せしとぞ其日朝平内通る所を娘出向親の敵也と云平

内いや我一人にはあらず敵は大勢なりとあらそふ此

問答手間取内娘先刀を抜平内も抜合二太刀三太刀う

ちあふ時母後へより一太刀切平内おどろきてかけ出

す娘のがさじと追ふ平内逃行るびすやと云ふ餅屋

のうらに入かねて入魂の釣針師の家にかけ込^{火後町の様子}

かわり入魂のものはあらであ娘おひつきてきりかくる平内
いらちて拂ふ娘刀を打落されて表へ出仙龍が脇差を
取て又敵にむかふ時其邊藏普請ありて土こねし所ゆ
へ泥にすべりてたをるゝ時平内刀ふりあげすでにか
うよと見ゆる所を仙龍をばにありあふさいとりを以
て拂ふさいとり腮にあたり泥目に入ひるむ所を娘一
太刀きるきられて逃る母出あひて又きる敵縦横に奔
走して糶藏の普請場へかけ込んとする時竹を荷ひた
る者出るにさゝへられて入事を得ず娘又きるきられ
て倒るゝ時母とゞめをさし立のく敵又おきあがりて
にげ出んとする時人々出合て雙方ともにおさへける
也^{とゞめをさしける時あやふ}平内手疵七箇所突疵一箇所
深し娘六箇所母二箇所^{ふかし}仙龍二箇所^手平内に
殺されし彦作もとは賣トにて親方吉村市正と公事を
して江戸構になりしものなるが神保へすみ込し也こ
れより先當主幼年の砌平内親兵左衛門家老にて三千
兩程私欲押領して言語道斷なり長子をば町與力とな
す中村八郎左衛門とて今吟味がた勤役なりと云或は
町屋敷を買或は田地をかひさまゝの奢などせしか
ば主人知行ひしと行づまり彦作はたらきにて漸取つ

いきけるそれより追々私欲露顯して平内親兵左衛門遠慮いひ附らるこの一味のものと漸々に身分にもかゝるべき勢故徒黨して彦作を闇打にす平内頭取しと云彦作妻子をば下屋敷へ移し男子なきゆへ扶助米をあたくれ平内又遠慮せらる親の私欲より事起りて人を殺せし次第ゆへ切腹すべきやなど取沙汰せしをさもあらで過さりし也彦作妻は扶助をうけ候ては復讐の事遂がたしといとまこひて流浪し娘を養育し夫のいひつけゆへ去年仙龍に嫁せし也仙龍は東江門人書家を業とし京橋邊に住居し又南塗師町權三郎店に住居せしといふ

追加

寛政六年二月山崎彦作江戸拂の者を不吟味にて召抱候に附神保左京差和被仰附候し也

山崎彦作賣下せし時の名は渡邊左京といひし此度彦作が遺物の刀にて娘敵を打けるとぞ刀の銘は相州藤原正國

先年崎山平内とともに彦作を闇討せしもの平内の外七人の名

岸上主水

鹿島藤兵衛

檜原將監

川口嘉作

山岸平角

高橋七藏

宮崎治兵衛

崎山平内平日出る日は供など多くつれ出る故打事あたはず其日は笛の稽古に出る日にて供少き故に其日をうかひ今朝も屋敷の門番に今日は平内がいよ／＼出る日なるやと聞しものありしとぞ

平内不敵のものにて劔術などよくしかつて殿の遠馬の供などして歩行にておくるゝ事なかりしが翌日もまた遠方へ使者を勤しとなん

平内は下駄をはき居る娘は草鞋をはき居候肩を切候節も平内背高く娘の手とゝきかね候由也娘は刀三尺餘

を風呂敷につゝみ手に持居候を見る者有之由承候

同十一月二十一日平井仙龍傷を病て同二十八九日頃

死す崎山兵左衛門

名保晃字景陽號東橋

葛波山人高俊の門人也

かつて葛波の書を墨本にせし事あり序を子に求めし故書つかはせし事もありき

本所一つ目辨財天の額は崎山平左衛門筆なり

辨財天

東橋山保晃謹書

保晃之印

東橋

火方盜賊改加役組の者町内の者に承候由書附

申橋塗師町權三郎店

手疵二箇所

平井專良 二十六

元神保左京家來

手疵一箇所

山崎彦作後家 四十六

手疵七箇所

同人娘 十七

右之者共塗師町借宅いたし専良儀深川猿子橋家に手跡指南の由稽古所出し置家内は猿子橋店差置候

神保左京家來

手疵三箇所

崎山平内 三十歳

右平内今四つ時糶藏前にて行逢専良妻父被打候節迄所持致し候短刀を常々所持致し候處行違後より専良妻切附候平内儀も抜合候間も無之候得共是も手者にて迹ながらぬき女へ手負はせ右の短刀を打落し女は二つにも可相成處夫専良側に有之候左官持候さいとり棒にて平内面體打候に附目眩み兩手に拔身を持ふり廻し候節下より拂はれ手疵負母は右ふり廻し候節手に一箇所淺手負申候其内町内より雙方取押へ申候寛政十年十一月十二日

深川元町往還疵人口書之寫

深川元町月行事平次郎申口

今晝四つ時過同町六間堀町中の橋邊より仔細不知年頃二拾五六歳に相見候總髪の男同三十歳計に相見へ候侍體の者並に四十歳位に相成候女十六七歳位に相見へ候女都合四人拔身にて互に打合往來さわがしく御座候間町内一統罷出制し取押右の者共名住所承合候得ば右侍體の者に御寄合神保左京殿家來崎山平内と申仁の由總髪は男は森下町に罷在候浪人平井仙龍と申者の由女兩人儀は南塗師町權三郎店者の由申立候間早速疵人共へは醫師懸置五人組名主並申聞一同御訴申上候へば御檢使被下置候

南塗師町權三郎店

みき
同人娘はる

深川森下町吉田衛

手跡指南致罷仕候

浪人平井仙龍

右三人申口

一私共儀神保左京殿家來山崎平内へ手疵爲負私共儀も手疵受候に附御檢使之上仔細御尋に御座候みき申上候私夫渡邊左京と申神職にて八丁堀岡崎町忠

兵衛店罷在候處六年已前丑年八月中御寄合神保左京殿家來崎山兵左衛門並に同人忤同平内世話にて右屋敷へ勝手小役人に相住山崎彦作と相改妻娘とも屋敷へ引移り相勤罷在候處同九月中家老役被申附尤其節同役は右崎山兵左衛門並同人忤平内儀は見習にて夫彦作三人にて家老役相勤罷在候處同役兵左衛門並同人忤平内兩人儀年來不正の筋有之町屋敷等も三箇所持致し其上金三千兩程之不正の筋有之趣にて相調の儀主人より同十月中被申附候に附段々取調候處町屋敷の儀は一箇所有之並に三千兩程之不正の筋の儀は千五百兩程之由取調主人へ申立候由之儀を遺恨に存候哉同月二十三日夜九つ時頃主人用向之由にて小使中間呼に參り候間罷出候處傍輩其之内前書平内并に同人弟川口嘉作其外岸上主水鹿島藤兵衛檜原將監山岸平角高橋七藏宮崎次兵衛右之七人にて夫彦作を及殺害に候間私儀直に罷出右之通見受候間其段主人へ相頼可申と奉存候處其砌より私共儀は之番附き委細の儀は追て被申附も可有之候何れにも神妙致し罷在候様に川口嘉作達て申聞候間見合罷在候處十日程過いづ

れにも私共儀は御屋敷にて扶助被成下候間安堵いたし罷在候様被申附候に附乍殘念屋敷内に罷在候處翌二月二十七日永之暇被申渡候に附知人深川六間堀町喜右衛門と申者方へ參り親子共世話に相成罷在候處同三月十一日より南塗師町權三郎店神職香取相模と申者方へ參り世話に相成罷在候處右相模儀萬端世話いたし候陰陽師平川仙龍と申者名前にて右店借受罷在候尤娘はる儀右仙龍妻にも可遣旨約束にて未盃等は不爲致候得共當月九日娘召連右仙龍方へ逗留に參り居候處今晝四つ時頃崎山平内往來を通り候を見受候間兼て遺恨を晴し可申と心懸罷在候間娘儀は仙龍刀を持私儀は所持之脇差を持罷在右平内へ夫の敵之由申候へば人違ひ之由申述出し候間追かけ參り兩人にて切懸候へば平内儀も抜合互に切合罷在候處跡より右仙龍儀も罷越俱に助太刀致し吳存念相晴し可申と存候處町内より大勢罷出制候間仕留不申殘念奉存候此上右平内并外七人之者被召出御吟味奉願上候尤私共儀町内騷し候段奉恐入候何分御慈悲奉願上候一はる申上候前書之母みき申立候通相違無御座候父

彦作儀先年右平内其外之者共に殺害にあひ候段兼で承殘念に存じ罷在候處今朝表を平内通り候を見受頻りに殘念に相成仙龍所持之刀を帶し罷出母俱に親之敵之由乍申切懸候へば平内儀も刀をぬき私共へ手疵爲負申候儀に御座候尤跡より仙龍儀も參り助太刀致し吳候得共其内町内より大勢罷出制候間討留不申殘念奉存候何分此上母俱に御慈悲奉願上候

一仙龍申上候私儀は右みきはる世話に相成居候陰陽師香取相模と申者は山崎彦作儀元渡邊左京と申神職いたし候節弟子に在之彦作相果候後は弟子之儀に附みきはる兩人共參り世話に相成居候處右相模儀去春中より病氣にて職分も不相成候由にて私へ萬端相賴候間引受世話致し罷在候處同九月中右相模儀致病死候間私儀則香取相模と相改陰陽師職分いたし罷在候得共勝手に附遠藤正健と申ものへ香取相模と申名前を職分共相譲り相模儀は本郷邊へ參り陰陽師職分いたし罷在候私儀は右吉兵衛店に當七月中引移り平井仙龍と相改手跡指南致し罷在候儀に御座候尤みき儀は其筋より私名前にて右權

三郎店借受差置候勿論迫てはみき娘はる儀は私妻に貰ひ受候趣約束はいたし置候得共未盃は不致候然る處當月九日にみき儀娘はるを召連私方へ逗留に參り居候處今晝四つ時頃は儀私所持之刀を持みき儀も所持之脇差を持表へ駈出し候間何事候哉と私儀入湯に可參哉と脇差を帶し出懸け候間直に跡より追駈參り見候へば侍體の者をみき儀は夫之敵之由はる儀親のかたきのよしにて切懸候處右侍體之者も刀をぬき互に切合罷在みきはる危き様子に附不得止事帶し參り候脇差を拔儘に切合候節手疵受候儀に御座候尤いさゝの儀は不奉存候得共右始末および候段奉恐入候何分御慈悲奉願上候

寄合神保左京家來

家老役

崎山平内口上

一私儀手疵被爲負候に附御檢使之上仔細御尋に御座候今日四時頃用事有之屋敷を罷出六間堀下之橋を渡り河岸通り罷通り候處同所中の橋際にて何者共不知私後より肩先へ理不盡に切附候間驚き振返り見候處先年相果候傍輩山崎彦作妻娘并に惣髮之男

一人都合三人にて切懸候間私儀も刀をぬき互に打合候得共手に餘り殊に場廣にて小楯に取可申處も無之難防御座候間段々相しらへ引退同所元町裏屋を小楯にとり待居候間跡より惣髮體之男追駈參り候間手疵爲負候へば脇差を投附逃去り候處みきはる儀引續き參り候間右之者共へも手疵爲負刀もざとり申候へば右三人之者共も追々逃去申候私儀も數箇所にて疵痛候間其場所へ倒れ町内之者に介抱に逢ひ申候儀に御座候尤山崎彦作妻娘理不盡に及候儀は全く六年已前丑年十月中仔細有之私並傍輩川口嘉作岸上主水鹿島藤兵衛檜原將監山岸平角高橋七藏宮崎治兵衛右之者寄合彦作を殺害いたし候儀有之其砌私共儀は主人より押込被申附いづれも日數相立被差免候彦作妻娘儀は翌寅年三月中永之暇被申附其後は一尙見受不申候處此儀を遺恨に存じ私へ手疵爲負候儀と奉存候不慮成儀に逢ひ數ヶ所手疵受迷惑仕候勿論三人者之共へも不得止事私事手疵爲負候儀に御座候何分此上御聞濟被成下候様奉願候

午十一月十二日

崎山平内

崎山平内疵所

年三十一

一左腕肘下横に三寸程切疵

一箇所

一同方下二寸程切疵

一箇所

一同方手の平より腕へかけ六寸程切疵

一箇所

一右脈所懸横に二寸程切疵

一箇所

一百會左りへ寄堅に三寸程切疵

一箇所

一同方横に二寸程切疵

一箇所

一襟横に三寸程切疵

一箇所

一左小指先少々疵

一箇所

々八箇所

平井仙龍疵所 年二十六

一右脇の下より吭へかけ堅五寸程切疵

一箇所

一右の人指ゆび堅に二寸程切疵

一箇所

一左り大指除け手のひら二寸程切疵

一箇所

々三箇所

みき疵所 年四十一

一左り肩堅に三寸程切疵

一箇所

一右脈所堅に一寸五分程切疵

一箇所

々二箇所

はる疵所

年十七

一 左り大ゆびへかけ堅に一寸五分程切疵

一 箇所

一 同方小ゆび一寸程切疵

一 箇所

一 右脈所横に一寸程切疵

一 箇所

一 同方横に一寸程切疵

一 箇所

一 額ざわ髪の内堅に二寸程切疵

一 箇所

一 同方堅に五分程切疵

一 箇所

ベ 六箇所

一 みき 拵附脇差

一 腰

銘出羽大掾藤原國路長さ一尺三寸程但血

附有之

一 仙龍 拵附刀

銘近江守藤原繼廣長さ三尺一寸但血附有

之

一 みき 短刀

銘助宗作長さ七寸五分程但血なし

一 はる 短刀

銘平安城能長裏に永祿三長さ九寸程但血

附有之鞘なし

右は仙龍みきはる所持之品に有之候事

一 平内儀疵痛所候に附召連不申尤疵養生之内主人方へ預け場所に於て引渡し遣候三人之者共は於御番所店請人に預け遣す尤店請人共より銘々口書差出す

寄合神保左京元家來

山崎彦作後家にて

南塗師町權三郎店に罷在候

みき 同人娘

はる

其方儀先年崎山平内外七人之者其彦作を致殺害候處右仔細も不相分其節重立取計らひ候平内を敵と存込何卒討果し申度存候得共其節娘はるも幼年にて殊に平内も油斷無之様子に附差扣罷在候内はるも致成長候間彦作殺害に逢候趣申聞せ俱に平内を可討果と六ヶ年已來心掛け罷在候内當十一月十二日平井仙龍方へ兩人共逗留いたし時節を短居候内仙龍宅前を平内一人罷通り候をはる見受刀を持追駈出候に附みきも短刀携へ罷出候處仙龍儀も助太刀致吳候間俱に平内と打合互に疵受既平内は無程相果候始末に相成候段父夫之敵平内を年來心掛け右及始末候儀共女之身分

別て健氣なるいたし方に有之其上はる儀はいまだ若
年にて右體之働いたし父の敵平内へ數箇所爲疵負父
母之憤を散らし候段別て孝心奇特なる儀に附兩人共
無構みき其方儀夫由崎彦作不埒有之先年江戸拂に相
成候處其後武家方へ奉公住致し候を其分にいたし連
添候段夫之儀と申殊に舊惡の儀に附咎に不及沙汰候

神保左京家來

宮川嘉内

一みきはる儀は戸田采女正殿御指圖に依て右之通申
渡一件令落著候間其旨主人へ可申聞

午十二月二十八日

いもとせのかたらひをなしほど

なふ身まかりたる夫をこひて 是る女

かすののたのめしこともをはらぬに

はかなく成し人そ戀しき

名殘をし野邊の草木となりし身は

こそ此世にや心のこさん

下町稻荷社三十三番御詠歌

願主 安土弦音

大根太木

四方赤良
同行三人

西國秩父はた坂東など數の歩を運ぶ輩多かるそれは
大悲の身を分ち給へる誓の數によれるなるべし今年
きさらぎ初午の日倉稻魂の御社にまうづる事三とし
あまり三つになんなる豆腐のしろがね町に初めて赤
の飯田町に札打おさめぬこや稻荷の山の紅葉々など
て青かりし辰のよる所へ玉のよるてふ諺の如くあな
がち信じ奉るにもあらずさして願ふべき望もなし飄
々として心の行所にしたがつものはたぞ同行三人
安永三年甲午二月上旬

一番 白銀町 白旗稻荷

源九郎狐と見へてみやしろの

ほとりにたてししらはたいなり

二番 本町二丁目 三吉稻荷

伴頭となら口にとある神垣の

名さへ丁稚の三吉いなり

作り物相撲木戸の體松本幸四郎市川門之助角力
行司市川海老藏作り物なり
同奥庭に二間茶屋の體 釋迦が嶽酒宴の體

三番

さまゝの浮世笑止な願をも

浮世小路
福徳稻荷

八番

さゝけつる御みきはつきぬ和泉町

和泉町
出世いなり

作り物忠臣藏開帳

一番

大星由良之助

二番

同力彌

三番

加古川本藏

九番

賽銭を石かはらとやなけぬらん

富澤町
石川いなり

四番

おかんざし

五番

文箱一つ

六番

尺八一本

七番

天川屋義平
大福帳一冊

五番

鐵砲一挺

六番

寺岡平右衛門
袴一具

四番

梅咲て松のみとりも一しほに

安針町
常盤いなり

五番

寄進する新材木は神垣に

新材木町
杉森いなり

六番

一つならず又ふたもとの杉の森

同所

いなりみるは初瀬川かな

七番

願ひ立叶はぬ月日ほしと思ふ

長谷川町
三光いなり

十番

名にしおふ火ふせの神といふ事も

住吉町裏河岸
いなり

十一番

初午のそのきさらきの空焚に

元大阪町
伽羅いなり

十二番

足をとめ木の伽羅いなり哉

樂屋新道勘三郎がくや
銀杏いなり

十三番

行燈なぞづくし

同所
岩代稻荷

十四番

順禮の道も中々とはいなり

とうか堀
いなり

こゝはいつことまつとうか堀

十五番

かやは町やくし
いなり

かやは町やくらの前のうへ木屋は

稻を荷へる老翁かさて

新場

十六番

祐いなり

新らしい新場の肴さゝくるも

けふこのしろの幸いなり

木材三丁目うら

十七番

不二いなり

そこごとくふし用いなりさして行

木材木やかたなるらん

下横町

十八番

壽いなり

中橋白魚屋敷

十九番

豊蔵いなり

とよぐらの内のいなるのさゝけ物

このしろよりもしら魚屋敷

作り物路次口に藤棚雙六の賽を下け置ふり出

しと書夫より行燈五十三次

京橋疊町

二十番

五木いなり

京はしの橋の橋つめ都つめ

五木いなるの宮に入王

二十一番

京はし
一心いなり

順禮の札はうつともよみかるた

うつな萬能一心いなり

作り物行燈にのくりかるたの札箱を附夫より

かるたにて

地口有行燈(挿繪略之)

京橋南から町

二十二番

出世いなり

立身や出世いなりにいのるらん

南から町からきとうして

二十三番

東風かせにひて太鼓は天満の

神の梅よりとんだ賑わひ

同所

二十四番

中富いなり

上まき町

二十五番

日出いなり

同町

二十六番

清玉いなり

同町

二十七番

於まいなり

初午にあたる京橋中橋や

おまんかへにの朱の玉垣

二十八番

雨がへ町 威とくいなり

金銀をうがのみたまのいとおくにて

雨がへ町にたてる家藏

二十九番

かまくら町 戸崎いなり

三十番

同町 神尾いなり

三十一番

永富町 佐竹いなり

三十二番

横大工町 子持いなり

三十三番

飯田坂 世繼いなり

世々繼て參らん人の先駈に

田安く札を打納めけり

同行三人

いなり

三十三社詣

朱印

當日

もちにて

ほりし也

安永三年甲午二月初午

四方亦良しるす

みそしあまり三つの社のみしめ縄

かけてそいのる三つの火影に

大根太木

復仇紀聞 查華園藏

寛政十二年庚申十月九日七半時歎討口書

下谷御徒町御徒佐々木忠三郎地借

一ツ橋殿御徒劔術指南

楠淵彌兵衛内弟子

徳力 貫藏

淺草御藏前町札差

二十八歳

伊勢屋義次郎召仕中働

喜兵衛

四十二歳

右貫藏儀松平陸奥守領分奥州名取郡仙臺領北方横岸村長町五右衛門借家善助忤にて父は十五歳之節病死十箇年已前寛政三亥年迄母と兩人にて小商賣致居候へども手廻り不申候間母相談之上同國宮城郡小泉村杉之下百姓七三郎忤長松同年十一月中看抱人に頼相稼候處大酒にて身持不宜身上も難打續八年已前二月下旬長松へ母申渡し候は不如意に相成候間外へ縁附候様申聞差置候所四五日過同月二十四五日之夜臥し罷罷候へば八半時過と覺母うなり聲致し候間覺目覺

見候所母を右之方耳より頬へかけ切附長松儀は逃去り候駈附候へども闇夜にて見失ひ母は相果候間右之段領主へ相届檢使相濟其後家内取調候へば賣溜金十兩紛失全取逃仕候依之其節より敵討可申存念に候へども在方の儀故相分不申候處御當地へ参り罷候由承當三月下旬私儀も御當地へ罷出藥研堀埋地罷在候劔術指南大越主税儀は知人に附便り参右櫛淵彌兵衛方へ申込内弟子に相成劔術指南受長松行衛所々相尋罷在今日彌兵衛忤彌司馬へ相斷淺草觀音へ参詣仕罷歸候途今夕七半時頃同所御藏前片町往還にて敵長松見當捕御役所へ召連可申と存候内振放逃去候様子に附拔打に仕止めは刺不申候へども長松儀は相果申候一長松事喜兵衛疵改

左鬢に五分程突疵一箇所

同方鬢より頬へかけ七寸程切疵一箇所

同方月代より鬢にかけ五寸程同一箇所

右疵所

一刀銘備中國柴郡住河野利兵衛尉爲家

長二尺六寸八分

右書面之外同所支配名主咄聞候は右貫藏儀喜兵衛を

及殺害候上町役人を尋候に附行事罷越候處前書之始末粗申聞候間町詰に候間先帶刀可預由申聞候へば成程承知に候併刀は師匠より借物にて拙者刀には無之旨申候に附即刻前書彌兵衛を呼に遣候處忤彌司馬罷越成程此者は召使には無之候得共内弟子に相違無之夫故刀をも貸置候旨申聞候其後檢使被相越候由物語也

但喜兵衛儀夜五つ時頃迄存命候得共口書之間に合不申相果候よし

王橋復讐記

寛政十二年十月九日淺草天王橋の北西側鈴木といへる休所の前にて敵討ありその人は仙臺侯の封内名取郡根岸村長町といへる所の商人善助が子貫藏といふ者年は二十八歳なり敵は札差伊勢屋幾次郎手代喜兵衛とて年は四十二歳なり貫藏十五歳の夏父にわかれ少年の事なれば宮城郡小泉村の百姓長三郎が子長松といふものをその年の冬よりたのみて看抱人といふよしなり渡世しけるが長松酒をこのみ行跡よろしからざるにより八年まへの二月母がいふ様はや看抱に及ばざれば勝手次第にいづかたへもかた附候へといひて四五日を

經る程に或夜丑の刻ばかりに母のうなり聲きこへければ貫藏側によりて見しに右の耳より頬へかけて一刀さゝれたり其まぎれに長松にげ出しかばその時追かけしかど折あしく暗夜なりければ行衛しらすなりし跡にて見れば金十兩うせぬ是全く長松が盗み取しものならん母をばとかく介抱せしかど其かひもなく事されたりなく愁訴しければ侯より檢使を下されしとぞ是よりして長松がゆくゑをたづねもとめけるに江戸に在と聞てことし三月當地に來り馬喰町に旅宿して兩國ばしの邊に住居せる大越主税といへる劍術の師の口入にて和泉橋通の御徒町に住る櫛淵彌兵衛が弟子となり劍術をはげみ江戸一見にことよせていたらぬくまなくさがしもとめけるにけふしも淺草寺に詣てかへるさ此所にて敵長松に出逢し故頼に捕て奉行所にいたり公裁をあふがんとて八とせ前に母をころせしおぼえ有やと問ければなにとばかりいらへて振放しにげけるゆへせんかたなく討留し也先ぬきうちに打かくれば左の耳の上より頬まですぢかひに七寸ほど切きられてふりむくたゝみかけて小鬢より月代へかけて五寸ばかり切込深手にて倒るこれ

を見て貫藏は自身番所に入る長松今は喜兵衛と名を改めてことし八月十三日より來年三月まで給金二兩のさだめにて幾次郎がもとにかゝへられしもの也櫛淵彌兵衛は一橋殿の徒にて神道一心流の達者也貫藏これが内弟子になりて徳力と稱す刀は備中國爲家の作二尺七寸ばかりあり喜兵衛きられしは夕七時過の事にてかや町一丁目にすめる長江玄意といへる本道をかねたる外科をむかへて療治をくはへしかど疵深くして治しがたしといふ暮過る頃息たへたりこれその夜檢使の問につきてかれらが申所なり十六日に予廩米賜はるとて伊勢屋嘉右衛門がもとにてきく所也幾次郎は嘉右衛門が比隣にて家二三軒をへだてゝ南のかたなりその前を過ればみせ戸ざしてあり鈴木の前にあたれば昨日の雨に土ぬれて血痕あざやかに見ゆますらおが手にとる太刀のつかの間に 弘 賢

はかなくなりし跡を見しはや

西澤文庫讚佛乘二編中の卷

目次

- 一 小金が原御狩の記
- 一 櫻請狀の事
- 一 江戸三芝居替地申渡の寫
- 一 市川海老藏へ申渡の寫
- 一 玉滴隱見卷の一
- 一 富再び情死の本説
- 一 紀州奥山大樹の寫
- 一 京大丸の主馬斬の正説

西澤讀佛乘二編中の卷

西澤綺語堂李叟著

小金が原御狩の記

寛政七年乙卯春三月五日將軍家齊公下總國小金原に御狩し給ふそも、此御狩と申は曾祖吉宗公享保十一年丙午春三月二十七日小金原に猪鹿狩し給ふその御跡を慕はせ給ひ七十年絶しを起し給はんとてかなたこなたにおほせて古き繪圖などと持傳へなば誰によらず奉るべきよしを觸ゑらしめらる松平伊豆守立花出雲守に其事を司とらしめ安藤大和守、石川將監、成瀬幸右衛門などと取々に沙汰し侍り就中關東の郡代久世丹後守^等すべて事取まかなへり又諸役人へは夫々に命下りて日記ども求出て爰の御爲かしこの勢子など様々の所作共前の寅の秋の頃には誰かれつとむべきなど、人數凡に定め有て各意を成にけり冬の寒きにもいとはで駒が原鼠山などいふ野原へ行て

組々の者引連習ふ事度々也始の程は鷹もてまねくも隨がはず口を開てさけべども耳つぶれたる如く思ひしに走り廻り足弱は踏たをされよく走る者は馬より先に出てしたり顔なるさまして立たるもいと見ぐるしかりし度々習はしぬればおほよそには習えしにや左へさせば左へまはり右へ鷹ば右へ行事には覺ぬ臘月の八日には總ならしとて駒が原の霜ふみわけてさまぐの所作共し侍りぬその年は雪もふりくれ行年のこと繁きにより又年始は御矩式などにてしばしはその事もならざりしに初春二十二日には立花の何某見分せられにけり如月の十六日には習ひえし所作共残りなく上覽ましまさん爲とて駒が原へならせ給ふ此日雪ふり雨いとふ降て明方にはおやみにけり北風烈しく空晴て大に寒き事限りなし宮益町といふ所の百姓の家にいたり爰にて各赤飯をぞ下し賜りける夫より御供人も連ず馬に乗り思ひに組々の羽織を著し頭役は鷹をさし綱押立駒が原に至りぬ風はいよゝ強し人も馬も吹よする様にて有し程なく御駕の御注進なりとて大筒ふたはなち耳のもとにて聞へぬれば皆々驚き持場へぞ出にける布衣已上の者

はこふ松のもとにて御目見へ仕り馬に乗べきのよし御側の衆傳有て皆馬に乗りて各屯へ集りやがて御ならし始り夫々の所作共のこるかたもなく首尾調ひ皆安堵の思ひをなしにけり御合圖に隨ひ奉り進退御心に叶ひ侍りしとの仰と立花の何某番頭の者共へ傳へ給ひぬ遠からぬ道なれど色々の用意共して人々事しげく侍りけるゆへにや程もなく彌生四日になりぬきのふ迄は雨ふりつゝきて道すがらの事など思ひつけ侍りしにけふは空も時やかになりて道も大かたよかりし人々の歡びおほかたならず兼て定めをれば夜深きにやどりを出て兩國の橋に至りぬればはや御船よそほひ仰々しく又御船に旅立人々の粧ひなど見んとて老苦群集し侍りぬ卯の時過る頃牧野内膳正下屋敷本所割下水と云所に行しに辰の時の始にや人々も揃ひぬはや打立べし物な失ひそ群集にまぎるべからずなどいひて列を正し沙石川を右に見なし行々て逆井の川を渡てさかくら道といふ平かに直なる道を出し田面の道を過る折しも厭のともなひ顔にとび行空長閑さに橋いくつも渡りて市川はととへば一里もありなんと答ふまた一里計行て尋ぬれば同じやうにぞ

言めぬいそがむとおもへど人おほく伴ひ行事なれば重荷もちたるものかたかゆるなどにておのづから人も我も行止りくして猶おなじ心にもどかしめなりし巳の時過る頃にや瀬川の邊りに至り早く船よせよなどどよみあひて我先にといそげど船きらふ馬などありて心にまかせす馬人と共にこぞり合てあやうくもむかふの岸に至り市川の驛にあらがゐて暫らくやすらひ腰兵糧など思ひくゝに腹つくり帶しめ直し又小金が原にては水のよからぬよしもあれば各用意するも有て立出にけり此川をこへぬれば土地の様子もことかはりて松の葉のみどりも一際につやくと勝れて美しき事也國府臺の古き跡赤かけの物凄きを左になし幽なる道をのぼりてきよげなる松原にそふてゆきぬこなたより下る坂のけはしく道も狭くて馬の通ひなどたやすからぬをあらたに山をきり開きたぐひなく清らかに造られてけり左の方を谷水の流れ青めきさゝ波よせて池水の如く汀には姫こしうなどいふ花白々と咲けるけしきのどやか也右の方は少し遠く松山の幾重もかさなりたるが木立しげからずうすく立並て緑りの色こに勝れたるさまなど言

葉もなし又山をのぼりて平なる野原を右にな屢々行侍ればはや百姓の勢子なりとて小き幟りを持何村何人など書てさし上げ竹螺とやらん云笛を吹聲高くたてゝ鹿を追ふて詰寄る遠き方には鹿の走り行も鳥の飛ぶやうにかすかに見へし午の刻の終りの頃にもや有けん五本木の小屋場といふ所に至りぬ總圍ひは竹の矢來にて門四つあり西の方の門よりぞ入ぬ百四十四間四方程にて二萬二千坪總人數一萬三千五百二十一人馬數三百八十疋とぞ聞へし一棟くゝにわかり苦もて昔たり大なる桶に飯を入れて配りあたへ大釜竈をまふけて湯をわかし足の洗足などすべての事皆御陣中のならはし也とぞ聞へしやがて松戸の驛よりお馬にて渡御まします立場くゝのやうを御巡覽有べしとて御先をも誰彼乗續く時の爲とて笠を著行膝をつけ弓矢たづさへ思ひくゝの伊達胴著にて列す歩行にて射する役も二行にあゆみ御先に白熊の對の御鎗しろじろと風になびき御犬はいさみにいさみてほゑ狂ふと有扨御乗らせ給ふ限りにたみたる御笠紅精好の御陣羽折金の御もやう御麾を指せ給ひ御馬もたくまじげなるをゆゝしく歩せ給ふ御勢ひ旭に映じてかゝやく

計り拜し奉りぬ御跡に御兩卿供人少々召連給ひて供奉せられしが松平豆州を初御供の歷々皆馬上にて隨ひ奉りぬ馬上にて備しものともにて皆そのまゝにて首を馬の立髪に附て伏し歩行立のものは膝をつきたる計りにて平伏いたすまじきよし兼て畏りし馬上の者ばかりは紋附の笠著よとの仰あり御巡りすみて御立場へ入せ給ひぬれば程なく總始りの御相圖の大鐵炮二放次に五放つるべ打井上何某某組のもの御前にてつかふまづれば御向備へ四百二十五放一度に釣にて打せぬ原通りの勢子共夫々の合圖有にや鐵炮打立し程も其響四方にわたりばちくゝといふ音して物をはじきなどする様に覺へぬ御向備百人組御傍組御先手組へは白の吹貫にてお合圖成し組の者は皆勢子杖ばかり成りしあれ來る猪もあらなどあやうしとて十手その外ものゝいかめしげなるを羽織にひきかくして出るも有騎馬の兩番頭へは御合圖白布也番組頭をつれて左右より乗出し乗合の印に附夫より御合圖に隨ひ鹿つきとめ又引すゝみて出るも見事也歩行立三番頭へは御合圖貝也後には白尺鹿にかはると所に太鼓をうたせ入替らし詰よせ鹿つきぬく御左備に

て拍子木うちて詰よせ四本松のうちには初の程騎射
有久世丹州赤き挑灯を大竹に附て印とし赤き羽織に
駒形附たるを著乗廻りそこをとすな爰をとめよか
しなどふせげど限りなき原の事なれば思ふ様にはあ
らざりし也すこやかなる獸はたいもらしぬると聞え
し追駈騎馬百騎計にて乗つゝまんとすれどもれて逃
るも多かりし御網の方へ追つめんとすれどももれて
逃るも有行はまれ也突れてたふれたるを耳尾などを
とりて引合などいとおかしげ也君にも御馬上にて御
鎗のつきたる數ありし也鹿すくなき折にや大鐵炮二
放打せたる是をかけ給へり百姓勢子一段／＼に詰寄
鐵炮打聲たて篠竹又は色々のもの持笛吹おめきさけ
びて詰寄るさまいとさはがしくかまびすしき事の限
りなるべし馬も驚き又は勞れてや走り出し乗たほし
て落る者も多し組合るなども有て百姓に背負れくる
しげに退たるなどもみへて烈しく走り廻り落ては直
に乗も有又は落て馬にはなれ馬は行馬の内へ走り入
備亂れし杯も有しとぞ牧士といふものはかの原を日
比乗廻りて野馬とる業など熟したる者也赤き羽織に
駒形附たるを一樣に著なし猪鹿追ふ事誠に駿き業也

走る鹿を追越て先へ廻り追戻し追廻る手練見事也と
人皆感じぬ追駈騎馬などは多くの中よりえらばれ
馬もつよきを乗たらんなれど人も馬も野に馴ぬ故に
や鹿を追にいつも跡より計乗行ついに追失なふと齒
がみする計ならんかと見へし獸數御網の内すくなし
とて立花の雲州一騎乗廻し爰かしこ沙汰せられし段
々に詰御場所の邊りまで總勢に押詰たりその聲郊原
に響き遠山も崩るゝかとはかり覺へたりとかくして
獸出かねたるなどいふ程こそあれ北の方に野火
をかけたなり烟天におほひ火飛風にまかせてやけ行た
りその夜まできへず家居なども思はず焼しもありと
ぞ江戸にて此烟を見て兩國橋の邊まで火消の役など
詰しとなん近きあたりは皆百姓の勢子なりかの笛を
吹立簀いくつも焚鐵炮しげく其間に流星の花火をま
じへ大竹のふしをこめて切たる火に焚音高し猪鹿追
込む勢ひいかめし此人數七萬計とぞ鐵炮は武藏、上
總、常陸國四季打又は月限など云鐵炮殘なく持出よ
と松平豆州、安藤和州に命じ計らしめらると也小屋
には色々の紋の幕うち廻し纏鎗など立て其さまお
ごそか也膝近く役するものめぐり來て非常をいまし

め火のもと用心などいふて草臥たる者共いらへ速ならざるをばとくしくとがめのしり行も有けり南の方は丘に鐘櫓をもふけて時鐘をも告しらしめらる丑の時の終には一番の貝とて南の木戸にて螺を吹ば皆一同に飯たうべて馬に鞍置すべての事調へて待ぬ其内九番の貝迄定ありて騎馬は歩行道其列をわかちゆしくぞ押出しぬ歩行者は鹿鎗とて柄を竹にて拵へたるを持馬上の者は口附の百姓に小菅笠もともに持せて武者溜り迄揃ぬ漸々夜明がたに成ければ高堤灯ども消しつまだ小ぐらきに木戸を乗出し御狩場さしてぞ急ぎぬ限りしられぬ廣き野原の内には小山もあり又ひきゝ所には沼も有て道もよからぬを多勢押行事なればいとさふしく茨の木しげく生ひしを刈とりし跡などにては足をつらぬき歩みかねてぞ覺ゆ道おそしはや御狩始ならんなど急ぎて漸々辰の時の初頃にもやあらん物の屯といふ所にぞ至りぬ爰は鹿蛇といふ虫多く馬の足を刺とまきり也何れの馬もいとくるしげ也人里とたがひたる故にや霜いとふ降て霜柱など白々としたる所もありき追駈騎馬はこなたの備の前に馬立置いていかめし御目附御使

番は皆伊達なる胴著に裾細脚絆つけ袖なしの羽織を著しぬ色々のもやう絲綱など附たるも有てけふときさまして目立よかしとぞ出立けり御立場の高さ三丈計とや四方より登る坂道をつけて裾のかたには鹿坂をまふけへりには青竹にて腰矢來を結び若松を植させ給ひ誠にゆしく御粧ひとは拜し奉りぬ御後の方には白に御紋の大吹貫雲をしのぎ春風になびきていづくよりも見まがふべくもなき御印とぞ此吹貫の差渡し二丈四尺有とぞ長さは其程に應じて幾丈もや有けん中の段には御弟君右衛門務殿民部卿殿此狩御拜見の爲とぞ御座をもふけてぞおはしける末の刻過る頃にもや有けん狩盡させ給ひしとてかの御合圖の鐵炮七放初の如くうたせらる御向備を始人込置侍りし鹿共思ひ／＼に拍子木響かし打拂て御狩濟たり元來此原は野馬のある野をけふの御場の御もふけてとて馬共はこと原へ追やりける殘たる野馬をつれて三つ四つ勢子に恐れて出ぬ猪のかけめぐるかたちは蚤といふ虫に似たり鹿の走るさまは品もなく只足の早き事見留がたし枯野の色にまがひて爰と指物すれど初の程は見附ざりししばし見馴ぬれば草々鹿と見わくる

事になりしなと皆興せらる。夫より皆々列を亂さずも
と來し道を小屋場に歸りぬ。放火の烟にむせび目いた
へ腹淋しき故にやけさよりも道遠く覺へし漸々おの
か小屋／＼に入湯のみ物たうべて力をそへたりし上
には御成道通り松戸の驛を還御なさしめ給ふ常は此
川船渡しにてあるをけふの御もふけにとて船橋を渡
され大船數多横たへ大綱にてつなぎ橋のもとには新
たに築などして木立枝ぶりすぐれたる松を植られ又
松戸臺の御小休と申は驛をこへて細道をのぼる左の
方の小山也。老松枝をつらねおのづから風景作れるが
ごとく川のあたりを見おろしたるは類ひなく覺ゆ。此
品にて御往還ともに御小休をばなさしめ給ひぬや、
有て御目附の小屋へ參れといひこし候程に皆々行ぬ
御菓子下し賜るよしの傳あり忝き由申侍りぬ。夫より
誰かれの小屋などへ行て目出たしなど壽き廻り怪我
せし考もなく天氣もよく濟たりなど人々の歡にや小
屋／＼どよみあひて物の音聞へぬ程に有ける申刻過
る頃にや打立べきとの案内有し待まふけし儘にいそ
ぎ出立ぬれど多勢のことなれば道もはかゆかずたと
り／＼する内にはや日暮にけり市川の宿よりは六七

丁もあなたぞとありしいよ／＼道おそく風ははだへ
を通して寒くやすらふも野の中に馬をとめて居る
事なればいとひさしくぞ覺へし市川の驛に至り爰に
て暫くやすらひ腰兵糧など少しつくろひやがて立出
ぬ船橋騒々しく人多込合松明の灯のみにては見わけ
がたくして渡し守も渡し兼ていひあらがひななど有
けり踏はづして川へ落て人に助られぬれにぬれて來
るも有眠り／＼あゆみ兼しもある程なれば川へ落た
るもむべなりけりからふじてこなたに上り市川の關
を越て一里計り行し頃空かき曇りにけり西の方は雲
なし雨にはあるまじなどいふにはや降出しぬ道をい
そぎ逆井の渡に至りぬ。爰にても物たがひにとひて去
ばし時を移しこなたに上り草臥つまづやすめなどし
て百姓の家かりて此所よりは列を正すにも及ばず己
々が心にまかすべきとの掟に隨ひ皆人別れぬやがて
鐘の聲聞へし程に所の者にとへば丑の時也と答ふ。爰
は本所の二つ目也大雨にもやならんかといよ／＼道
をいそぎ寅の刻過る頃宿所にかへり明日六日辰の時
頃立花の何某のもとへ行て組々の者迄さへはる事も
なく侍りし由を皆々申てけり夫より心落つき三夜寝

ざりし程を取かへすべしなど、て休みの七日には御
獲賜のよし申傳へあれば八日には御殿に出て忝き
よしを申奉りぬけものをばおのゝへわかちいた
き組々の者迄も御いさほしのゆゑしきをあふぎ奉れ
るといひて鼻をおはひながら持運てぞことぶきける
久しく絶にし小金の御狩の御時にあひ奉る事有難き
御事の至りなりとうやまひ恐れみ奉ることを書と
めぬ于時寛政七乙卯孟夏三日從五位下因幡守源季寛

櫻請狀の事

千本三月十二日、谷三月二十四日三月十八日

一其御奥

芳野屋

野屋

醍醐

郎殿家々平

野屋東

寺郎母

雙林

と申仁

櫻狩被致候此

仁生國城州愛宕

鹿谷

に御座候

先日より能天

氣にて慥成日和に御座候間我等受合に相立申

候宗旨は大に上戸宗にて御禁酒の切玄らん吞人に

ても又醉轉たる者にても無御座候則智恩院末下寺

町新善光寺の暖和に紛無之候

一照降の賭勝負遊女の宿は勿論櫻に行暮たりとも花

を主じの木の下蔭に一夜の宿をも爲致まじく候其

外鞍馬岩倉二尊院御室太泰

月十八日三月十五日三月十四日三月十三日三月十八日
法輪寺祇園清水嵐山大谷の

花盛り如何様の捻上戸出来仕候共我等罷出其坪仕

舞毛氈樽提重々諸道具迄直様夕景引取可申

候將又狼籍の折辻花の座の駈落等仕候は早速尋

出し御奥樹主へ少しも御迷惑相懸申まじく

候爲家産の一枝折酔て如件

三月十五日

狩主 平野屋雙林



千本なる櫻霞の雨あがり空請合の

三月十六日

香花残念 けふ屋咲兵衛



三月御いたつ

春の日も程なく暮て西へ入影を引と

る

三月十五日

花屋四郎次郎



三月十三日
花の寺町六角さかるけふ

年毎佐久良兵衛殿

京中浮む参る

江戸三芝居替地申渡の寫

堺町葺屋町木挽町三芝居狂言座並に操座同人抱役者座頭出方總代料理茶屋總代へ御申渡

此度市中風俗改候様にと御趣意有之候所近來役者共芝居近邊住居致候町家の者同様に立交り誠に三芝居共狂言仕組甚猥りに相成右に附市中へも風俗推移り近來別て野鄙に相成り又其時々流行の事多くは芝居より起り候哉に附依之往古は兎も角も當時御城下市中に差置候ては御趣意にも相戻り候事に候一體役者共儀は身分の差別も有之候處いつとなく其隔も無之様に相成候へば不取締の事に附此節堺町葺屋町兩狂言座并操芝居其外右に携候町家の上は不殘引拂被仰出候乍然二百年來土著地相離候に附ては品々難澁の筋も可有之哉に附相應の御手當可被下候替地の儀は取調追て可及沙汰候木挽町狂言座の儀も追て類燒致候か普請大破に及候節は是又引拂申附候間兼て其旨可存權之助狂言座の儀は來春興行相始候共狂言仕組

并に役者共猥に素人へ不立交候様に取締方の儀をも厚く可相心得申候右之通被仰渡奉畏候仍而如件

前書 當人

天保十二丑年十二月十八日 町役人

北御奉行所

市川海老藏へ申渡の寫

水野越前守殿御差圖寅六月二十二日申渡

深川島町町熊藏地借十兵衛方同居同人父

歌舞妓役者 海老藏

其方儀家作の儀は長押塗がまち等不相成雖并に道具の儀も結構の致まじくと前々より町觸有之所其方家業體の儀は時の風俗に隨ひ専表間を飭り不申候ては量負も薄く道具類も右に准じ金高の品々無之候ては融通も不立候とて右町觸を背居宅長押造床がまちに致し赤銅七々子釘隠し打附庭向へは御影石燈籠其外大石數多差置又は同所土藏内不動の像を飭莊嚴向總金箔彫物有之須彌檀朱塗の彫物總金泥合天井に致或は小簞笥へ赤銅七々子に金丸桐の紋附小柄等鐵物に致其外手送り候鐵物相用唐櫃并額奈良細工木彫彩色の雛等追々買取右雛道具も烏桐にて金砂子を置胡粉

同町 甚右衛門

にて瓢箪を菊桐三五の桐紋形に置名前不存町人より
貰受候沖右檀に猩々緋を敷座敷内へ相傍其上狂言用
候品も一通にては見物の人氣に入申間敷と革製具足
一領鐵にて甲無之具足一領何れも武用の品を所持致
狂言に相用且又先代より持傳り候其珊瑚珠の根附緒
付附候高蒔繪の印籠等狂言の節相用又は銀無垢のち
ろり等所持致候所金子に差支右之内ちろりは所持致
其餘の品は質入又は可賣拂と預置金子借受候後去丑
之十月質素儉約の儀被仰出候に附不相濟後悔致居宅
造作等取崩候場所も有之候得共右體身分をも不顧奢
移僭上の至殊に先年より買置候共高さ一丈七尺の石
燈籠一對深川永代寺境内に於て開帳有之候不動へ可
致奉納と右境内へ差置候段旁不届に附觸に背候品并
居宅取崩候木品ども取上江戸十里四方追放申附候

右 十兵衛

其方儀父海老藏儀町觸相背居宅向長押造塗がまちに
致し道具類其外華美高價の品所持致し奢侈の及所業
候を如何の儀と乍存心附父の儀に候とて差留も不致
其儘に致置候段不届に附屹度呵置

右家主 熊 藏

其方共の内熊藏地借十兵衛父海老藏儀町觸等背居宅
向長押造塗がまち等に致道具類其外華美高價の品所
持致候をも不存罷有の段畢竟平日申附心附方等閑故
の儀兩人共不埒に附過料三貫文中附候

同町宇右衛門店 六三郎

質屋

其方儀海老藏より質に取候雖道具類は手を込候奢侈
の品に有之處前々より町觸をも相背無判にて質に取
候段旁不埒に附右品取上げ過料十貫文中附候

岩代町家主 作 七

其方儀武器の類は容易に質に取申まじくと先年觸置
之處相背殊に身分不相應の品と乍存心附海老藏より具
足二領無判にて質に取月數相立菊次郎へ賣拂候段旁
不埒に附過料十貫文中附候

但菊次郎より受取代金錢可償候

神田平永町源右衛門店

古道具屋菊次郎
赤坂裏傳馬町二丁目忠兵衛店

同 平兵衛

其方共儀武器の儀に附ては先年町觸れ有之處薦と出

所不相糺菊次郎は作七より具足二領無判にて買取所持致居候段兩人共不埒に附右品取上げ菊次郎は過料十貫文平兵衛は同五貫文申附候

但菊次郎は平兵衛へ相渡候代金錢同人へ可償作七へ相渡候代金錢同人へ償申附候間可受取

右之通被申渡海老藏は於數寄屋橋御門外追放被仰附候

玉滴隱見卷の一

目録

一 齋藤山城守成立ノ事

一 信長公ヲ明智光秀奉害ノ事

一 明智光秀爲羽柴秀吉卿被誅ノ事

一 江州志津嶽合戰ノ事

一 堀邊兵太ガ事

一 布施左京進家康公へ忠功ノ事

一 吉河瀬兵衛武功ノ事

一 井伊へ木俣土佐忠言ノ事

玉滴隱見卷第一

齋藤山城守成立ノ事

一 土岐美濃守頼藝ハ是美濃ノ屋形也右頼藝ノ居城ハ

北美濃ノ大桑ト云所ナリ其家臣ニ長井藤左衛門某ト云者有ケリ亦長井ガ臣ニ西村所右衛門ト云僕臣アリ然ルニ京都ニ住居ケル貧賤ノ油賣カレガナリ立ヲ委細ニ尋ルニ則西ノ岡ノ松波トイフ古商賣人也此者美濃ニ通ヒ土岐殿ノ家中ノ人々ト馴ムツビ親シク罷成ケリモトヨリ此油賣京ニ生立者ナレバ自然ト風流ナリ因茲諸侍トノ附合モヨク常ノ人柄トバツグンナリ其下心ハ其身ニ過タル望ミノ有ケル故ニ先長井藤左衛門ガ臣ノ西村所右衛門ニヨクコビヘツラヒ彼者ノ名字ヲ貰西村新助ト改之徘徊セシガ兼テ大望ノ通り長井藤左衛門ヲ討テ其領地ヲ奪取テ剩後ニハ土岐殿ノ直參ニ罷成其後亦長井新九郎ト名乗テ虎ノ威ヲカリ揚句ノ終ニハ屋形ヲモマダレク思ヒ頼藝ヲモ尾州へ追出シケレバ土岐殿モ無量非於尾州織田備後守信秀ヲタノミ被ケレバ頼モシクモ被頼ヲ熱田ノ社院ヲ明テ馳走有ケリ此時長井新九郎ハ亦々假名ヲモ改テ齋藤山城守政利ト名乗テ時得ガホニホコリケリ其故西村所右衛門ガ一類共コレヲ憎ムト雖一戰ト叶ハザリケレバ織田備後守信秀ト相戦ヒケレモタガイニ勝利コレ

ナクシテ和談トナツテ剽山城守ガ娘女ヲ以テ備後守ノ息男ノ織田上總介信長ヲ婿ニ取ケレバ美濃尾張ハ不及申近國迄悉靜謐ニ屬シケルト云々是天文十一年十二年ノコトナリ

一齋藤山城守政利ノ入道ニ三ガ行跡ヲ見ルニ其身ノ奢リ太政大臣清盛ニ超過シテ物ノ情モシラス胴欲ブドウノ仁ナリ縱令雖爲少罪族或ハ牛裂ニシ或ハ釜煎ニシテ其釜ノ火ヲバ其罪人ノ妻子兄弟ナドニタカセ亦柱ヲ科人ニイダカセテハ鎗責ヲシヲノレガ眼ヲヨロコバセ前代未聞ノ大々惡人ナリ

一齋藤亦兵衛婿龍興コレ道三ガ長男

一天正三乙亥ノ十二月三日ニ官位昇進ノ衆中ハ塙九郎右衛門ヲバ原田備中守築田右衛門太郎ヲバ戸次右近大夫木下藤吉郎ヲバ羽柴筑前守ト申ケリ右何モ從五位下ナリ

一右ノ木下藤吉郎ヲ羽柴ト改メ給フコトハ丹羽若狹守長秀ト柴田修理亮勝家ト此兩人ノ武藝ノ達人ニ似ト被兩將名字ノ上字下字ヲ取合テ羽柴トハ信長公ノ名乗セ給フトナリ

一天正十壬午ノ五月二十九日ニ信長ハ江州ノ安土ヲ

出御有テ京都ノ本能寺へ著御ナリ御息信忠公ハ妙覺寺へ著セ給フ然ル所ニ明智日向守光秀中國ニ羽柴筑前守秀吉毛利家ト挑戰フテ罪アルニ附テ其加勢トシテ光秀ヲ被仰候ニ附居城ナリケル丹波ノ龜山ヨリ人數ヲクリ出シ六月朔日ノ夜京都ニ至テ信長公ノ御本陣ナル本能寺ヲ取カコミケルホドニ是非ナク信長公ハ翌日二日ニ御生害畢春秋四十九中將信忠公モ御自害二十八トナリ

一明智事早速武威ヲ洛中ニフルフテ京都ニ所司代ヲ置亦洛中ノ地子錢ヲ免許シ五山及大德寺妙心寺此兩寺へ祠堂銀ヲ寄進シケル所ヲ勅使立テ光秀ヲ勞セラル、ト云々

一其節羽柴秀吉ハ備中ノ國高松ノ城ヲ取マヒテ水攻ニシ給フ所ニ毛利家ノ後詰何トシテカ延引ニ附城代ノ清水長左衛門宗治事秀吉へ申入候ハ我衆命ニ代テ切腹スベシ御同心ニ於テハ此程籠城ノ鬱氣ヲ散ズベシ美酒ヲ相饋ラルベシト有ケレバ被任望酒肴並上林ガ茶ヲ被差添被遣候へバ則清水事小船ニ浮テ海上ニ出テ速ニ切腹シテケルト云々

一明智光秀事信長公ヲ弑シタル由六月三日ニ備中ノ

國高松ノ陣所ヘ注進ニ附秀吉同六日ニ高松ヲ發足有テ同八日ニ播州姫路ノ居城ニ著給ヒソコニテ人馬ヲ暫ク休メ給ヒ十日ニ攝州尼ガ崎ヘハセ著テ秀吉髮ヲ斷テ後ニ織田三七郎信孝、丹羽若狹守長秀、池田紀伊守信輝及ビ息ノ勝九郎之助等ヘ使者ヲ以テ被申遣ケルヤフハ信長公ノ御吊ニ光秀ヲ卒ニ攻ツブサシ其爲ニ秀吉尼ガ崎マデ罷リノホリ候ナリ因茲其儀申達ノ由述給ヘバ三將トモニ不移時刻尼ガサキヘハセ來リ給ヒテ軍評定ノ時信輝入道勝入進ミニス、ンデ今度ノ先陣ハ勝入也ト申シ給ヘバ其席ニ高山右近大夫長房ガ居タリシカ申ケルハ此度山崎表ニテノ一陣ハ此長房タマフヘシ扱二陣ハ中川瀨兵衛清秀三陣ハ則池田信輝尤タルベシト申ケレバ秀吉聞給ヒテイカニモノト有テ軍列今日定リニケリ扱各山ザキ表ヘト云給ヒ敵味方立合テ挑戰ヒシガ十三日ニハ光秀敗軍シ給ヒケレバ筑前守秀吉勝利ヲ得給ヒテ勝トキヒビキケレバ山崎ノ山彦モ時ノ聲ヲ合セケリ扱其後ニ秀吉ハ大德寺ニ於テ信長公ノ御法事執行トシテ一七日僧侶集テ御經讀誦ノ爲トテ白精千石ニ青銅一萬貫添テ被遣之

ケリ勅ニ依テ贈官アリ則大德寺ニ御廟所有之ニ附寺領五千石被寄附次ニ白銀千百枚進覽之是御經御執行ノ料ト聞ヘタリ

天正十壬午六月二日

總見院贈大相國一品奉嚴大居士

右信長公ノ御法名也

一天正十一癸未四月ニ越前ノ國主ノ柴田修理亮勝家秀吉ノ武威ニ誇ラル、コトヲ憎ンデ一戰ノ勝負ヲ爭ヒ給ヒテ勝家ガ甥ナリケル佐久間玄蕃頭盛政ヲ大將トシテ軍兵一萬六千餘騎ヲ差副ラレテ江州志津ガ嶽ノ北嶺ニ指登セテ敵軍ノ待請給フ時ニ玄蕃頭盛政ヨリ柴田三左衛門尉勝政ヘ使節ヲ以テ援兵ヲ請給ヘバ則勝政三千餘騎ヲ引卒シテ盛政ノ勢ト合シテ秀吉ノ大兵ニ被向タリ秀吉則相戰テ勝利ヲ心ノ儘ニエ給ヒテ修理亮勝家ヲ始メ門葉ヲ悉ク討給テ天下ノ政務ヲ是時ヨリシテ司ドリ給フト云々一右ノ節秀吉公近習ノ面々ノ内殊ニ戰功有之人々ヘ官祿等宛行ヒ給フ何モ少ナキニ五千石宛行之諸大夫ニ任ゼラレケリ

一番 福島市松正則 任左衛門大夫

二番 加藤虎之助清正 任主計頭

三番 加藤孫太郎嘉明 任左馬助

四番 平野權平長泰 任遠江守

五番 脇坂甚内安治 任中務少輔

六番 糟谷助右衛門武則 任内膳正

七番 片桐助作直盛 任市正

右ノ通也此時福島正則ハ其日ノ合戰ノ一番首ノ高名ニテ其武勇他ニ勝レタリ然ル所ニ筑前守秀吉公ノ方ニテ石川兵助亦柴田勝家ノ方ニテ拜郷郎良左衛門此兩人相討也依之兵助存命無之ニ附テ福島正則ハ其日ノ一番首ト云シカモ二ツ迄取給ヘバ是最上ノ高名也サレドモ石川兵助右ノ仕合ニ附七本鎗ノ人數一人不足セリ就夫後世ノ儀ヲ秀吉公思召七本鎗ノ其名ヲ殘サレ度御内存ニ附福島正則ヘ御使ヲ以テ被仰遣候様ハ七本鎗ト云コトハ末代マデノ大高名ノ義也兵助コト討死故一人カケタリ尤其方ガ一番鎗ノコトハ七本鎗ニハ拔群勝レタリトハイヘドモ其義ヲ曲テ不足ニ不存候ハ其方ヲ加ヘテ其數ノ都合ニセンハイカニト有ケレバ正則ノ請ニ曰トモ角モ上意次第ト有ケレバ其時被加正則七本

鎗ノ數ヲタシ給フト云々此衆中ノコトヲ江州志津嶽ノ七本鎗トモ亦ハ柳ノ瀨ノ七本鎗トモ或余嗣ノ海ノ七本鎗トモ或ハ柴田合戰ノ七本鎗トモ云也右七人ノ衆ヘ七月朔日ニ御感狀ニ被差遣テ領知ノ御書出シ被下之ケリ但知行ノ御書出シモ御感狀ト一紙トミヘタリ可尋之右感狀ニ曰

今度信孝被對レ某被レ及ニ鉾楯ニ雖レ有テ可レ亡ニ秀吉一全ニ依レ爲ニ前將軍信長公之御連枝一今又不レ去ニ兩業ニ可レ用ニ斧柯ニ事有ニ手裏ニ殊柴田修理亮瀧川左近將監與被レ仰レ合之由決然也依レ之至ニ濃州大垣城ニ令ニ在滯ニ可レ攻ニ伏岐阜城ニ之處柴田先勢柳ケ瀨表ヘ致ニ出張ニ之旨告來之條不レ移ニ時尅ニ走飯テ柳瀨決ニ勝負ニ之尅竭ニ粉骨ニ合ニ於ニ一番鎗ニ突退群雄北國勢及敗北事偏有ニ爾之武功ニ矣則加ニ増領五千石ニ令宛行者也仍感狀如件

天正十一年

七月朔日

秀吉 在判

右之通感狀七通七人衆ヘ一通ヅ、被下之ト云々一此柳ノ瀨 合戰ニ秀吉公被得勝利御歸陣ノ後ニ秀吉公ハ攝州大阪ニ新城ヲ被築テ御居城ト建給叙從

四位下被任參議ケルトナン

堀邊兵太トイフ浪人明智日向守光秀ノ家ヲ望ミ荷
俵ヲ負相越テ曰御家ヲ望ミニ存參タリ知行千石下
サレ候ヘト申ス光秀聞給ヒ料理ナド給リ候其内ニ
被荷俵ヲ閉サセテ見セラレケレバ長身ノ鎗ヲイサ
ギヨクトギタテ、入置候ト申ケレバ心緒面白キ侍
也望ニ任セ千石取セ召抱ヘヨトテ則御禮申上ル
明智殿ニ罷有候内ニ數度走廻リノ高名アリ其後丹
波國捫合光秀敗軍シテ已モ危カリシカバ侍共五六
輩返シ合セ討死ノ時彼堀邊一番ニ取テ返シ勝負ヲ
爭ヒ討死仕候也兵太ガ首ヲバ畑老休是ヲ捕ト云々
布施左京ノ進某ハ和州ノ葛下部ヲ領シケリ尤信長
公ヘ仕ヘシカ共公ハ明智ガ爲ニ弑セラレ給ヘバ布
施モ世上ノ鳴音ヲ窺ヒ居タリシ所ヘ源家康公ハ其
時和泉ノ堺ノ津ヘ御遊興トシテ御座被成候テ於彼
地信長公ノ御生害ノ由ヲ被聞召ニ附御吊ノ爲ニ光
秀ヲ討亡シナント有シトキ公ノ寵臣其儀御無用ノ
旨達テ諫言申上候ニ附テ御延引ト云々扱亦堺ノ津
ニ暫モ御止坐ニモ及バザレバ大和路ニカ、ラセラ
レ東國ヘ御歸坐アラントノ儀ノ所ニ畿内以ノ外ニ

騷動スレバ強御トンデヤクモナク御通ノ所ニ彼布
施氏ガ領内ニ至テ即チ御使者ヲ被遣左京進ニ此度
見届候ヘト有ケレバ布施氏畏奉ルノ由安々ト御請
ヲ仕早速家臣ナリケル吉河主馬助並息次大夫ト云
々人數ヲ差添河内ノ山田村マデ御迎ヲ出シ夫ヨリ
大和ノ竹内峠ヨリ吉河父子御先手仕其身ノ采地ノ
内ナル長尾村ノ明神拜殿ニシテ御酒等ヲ進メ奉リ
良有テ御立ノ所ニ和州ノ石原源太ト云者數百人出
向途中ヲ妨奉ント相待居タル所ヲ吉河父子急ニハ
セ向ヒコト故ナク蹴チラシテ家康公ノ御供仕勢州
高見峠マデ參候所ニ武田穴山ハ十町餘御跡ヨリ來
リ被申候也扱吉河父子ニハ高見峠ヨリ御暇被下御
直ニ有難キ被加御意御長刀拜領ス罷歸其趣共ヲ主
人ノ布施ニ申聞候ヘバ別テ感悅シテケリ左有テ布
施ガ申ケルヤウハ思ヘバ石原ガ今度家康公ヘ路頭
ニ於テノ狼籍ノコトハ心外ニ存ル也トテ重テ吉河
父子ニ軍勢ヲ差添テ大儀ニハ思ヘドモ源太ガ館ヘ
押寄テカレヲ討亡セトテ布施重代傳リケル雉子ノ
胞毛ヲ以テ作リケル軍團扇ヲトラレケレバ吉河弓
矢トツテノ面目是也トテ謹テ頂ダイシ則源太ガ館

へ押寄テ互ニ入亂戰ヒシガ石原源太ガ首ヲバ磯野善兵衛討トツテ軍ノカチドキ上テコソハ立歸リケル

一太閤秀吉公御治世ノ時如何ナルシサイ有テカ布施氏累代ノ家滅却ス依之吉河等モ流浪セリ然ル所ニ布施ニ子嗣ナクシテ一女計也其娘ヲ隣國ノ東池玄蕃頭ニ嫁セシメテ後一子出生セリ其子ノ名ヲバ後ニ東池隨庵ト云シ也此隨庵御當家嚴有院様御代ノ時彼布施ガ末流ノ者共ト一同ニ御老中迄コトノ仔細共ヲ訴訟申上候ヘバ御當家へ對シ奉リ忠勤申上候儀共ヲ水野監物忠善淵底御聞及候ニ附テ公儀へ御取成被下候ノ所ニ彼隨庵不幸ニシテ於江府病死仕候ニ附テ右ノ訴訟無益仕候事

一彼之吉河主馬助並其子ノ治大夫コト令縁流吉卿ナレバ和州ノ側ニ塾居シテ居タリシガ慶長十九年ノ比家康公ト秀頼公トノ御弓矢ニ成タル由ヲ承之彼吉河父子根來二百人餘引連テ攝州大阪ノ城中へ籠リ則大野主馬頭治房ガ子ニ附時主馬助ト改テ吉河瀬兵衛ト名乗シ此陣ノ時大野ガ持口ハ天王寺表也此所へノ寄手ハ亦藤堂和泉守高虎ニテ著ケル其側

ニ亦淺野但馬守長晟陣取給ヒケリ此兩將ハ關東方ニテノ大將分ナリケリ因茲城中ニテモ取々ニ評定シテ曰何トカハシテ彼西將ヲバ殺シテシヤト計畧工夫ノ所ニ大野治房ガ曰愚案ヲ廻ラスニ渠等ヲ亡ス謀ニハ秀頼公ヨリノ謀書ニ認テ高虎ガ陣へ遣シナバ必定家康ノ高覽有ベシ然ラバ兩將ヲ追討疑有マジト申セバ各尤ト同ジケリ毋左アラバ其使ニハ誰ヲ遣シテシヤト試ル所ニ彼吉河瀬兵衛ヲ撰出シ則某謀書ヲ持セテ出シ家康公ノ御本陣ノ邊ヲ忍ビ〳〵ニ窺ヒシニアシノ如ク番所ノ者共尤レ之彼吉河ヲ禦テ尋問ケレバ是藤堂和泉守高虎ノ陣屋へ使ニ參タルモノ也ト申タレバサレバコソ始ヨリ不審モノゾト思ヒシ也イヨ〳〵其要事ノ仔細ヲ尋トヘト云シカバ其使ニ向テ委細是ヲ尋シ所ニ吉河ガ云フ今度御陣所ノ大將分ニテ被居タル高虎事ハ太閤秀吉公ノ御思ヲ重々蒙ケルモノナレバ外ニハ城ヲ攻ル振ヲミセ内證ニテハ淺野長晟ト肌ヲ合セ不怠城中へ美肴珍酒等ヲ饋之内道之忠義ヲ盡シ申サレ候也ト申ケリ此事上聞ニ達其晩和泉守ヲメシテ曰其方事家康ニ忠ヲ盡スコトヲバ諸士ニテモ皆是ヲ

知レリトテ彼秀頼ヨリ高虎ニ給ハリシ一通ヲ御ナ
ゲ出シ被成和泉守ニ被下ノ臺命ニ云ク則使ニ來タ
ル吉河ヲバ高虎ニ被下候ノ間十ノ指ヲ斬テ額ニハ
燒金ヲ以テ秀頼ト云印ノ押附テ大野主馬頭ガ持口
ヘ追ハナツベシトノ上意ニ依テ其儀ニ隨ヒケルト
云々扱翌年ニ元和元年ト改元ノトキ大阪落城以後
吉河瀬兵衛コト熊野ノ山中ニカクレ居テ世鎮ケレ
バ福島左衛門大夫正則方ヘ食祿七百石ニテ被呼出
ト云々カク有テ彼家臣ノ内ニテ正則ヘ諫言シテ云
ク渠等ニ右ノ通ノ御合力ヲ被下候コトハ童子ニハ
劣ルコトナリ指モナキ者ナレバイカントシテ太刀
ノ柄ヲバニギランヤト支ヘケレバ吉河是ヲカヘリ
聞テ時ヲ窺ヒ彼家臣ヲ日中ニ討スマシテ立ノカン
ト仕リシヲ大夫正則ヨリ追手ヲ遣シ給テ討給フト
云々

一慶長三年八月十八日太閤秀吉公薨御其後秀頼公ノ
御守ハ加賀大納言利家卿也亦天下ノ御政務ハ江戸
内府家康公トシテ聞ヘケル
一秀吉公薨御以後色々騷動シテ京伏見右往左往ト物
騒シク有之附家康公ヲ討奉ルベキト諸大名衆野心

ヲ挾クマヒ慶長四年正月十六日ニ諸大名衆ヨリ安
國寺ト徳山五兵衛ヲ使ニシテ家康公ヘ手切ノ儀ヲ
申達ラレシ也其砌公ハ河氣ノ御屋敷ニ御座ナサレ
折節御番代リノ砌ニテ本多中務少輔ハ關東ニ休息
ス榊原式部少輔ハ未登ラズシテ井伊兵部少輔計在
伏見仕御無勢ノ砌故京極宰相高次ヨリ大津ノ城ヘ
御移リ候ヘト申來リ候ヘ共御許容ナクシテ東寺ヘ
御籠リ可被成カ亦ハ金札ノ宮ヘ御上リ有テ野合戰
ニ可被成カト御相談區々ノ所ニ大谷刑部少輔并新
庄駿河守御味方申候ニヨリ眞田安房守昌幸、其嫡
子伊豆守、二男左衛門佐、石河紀伊守、同備前守、同
掃部助、脇坂中書父子、丸毛三郎兵衛、平塚因幡守、
伊藤武藏守、服部土佐守、野村肥後守等右ノ面々御
味方ニ罷成候ニ附敵方ニテ評定ドモ極ラザル内ニ
日數延引ス然者井伊兵部少輔老臣ノ木俣土佐申様
ハ今ノ世中ノ何トカ思召シ候ヤト申候ヘバ兵部申
サレ候様ハ小勢ニテ防戦ハ成マジ討死スルヨリ外
ハナシトアレバ其時土佐申様ハ下々モ其段ヲバ存
ジ寄所ニテ候ヘドモ死スル中ニ活ヲ求ルニ大將ノ
大事ノ御座也就夫私ノ存知奉リ候ハ向島ヘ御移リ

可然奉存候是ハ太閤様御遊山所ニテ御用心能御屋形ニテ候間アレヘ御移リ遊サレ尤ニ候殊更彼所ニハ諸大名ノ用木數多御座候ヘバ其材木共ヲ柵ニフリ一方口ニテ持固メ其向島ハ四方大河ニテヨキ御要害ナレバ是ヘ内府様若君様并御簾中様トモニ御移候バ、ナカ／＼諸大名ヨセ來申候事ハ存知モ寄ズト申上候ヘバ兵部聞届ラレ夫ハサモ有ベケレドモ兵糧ノ儀ハ如何セント有ケレバ土佐アザ笑テ其分別ナクシテ弓矢ノ御意見可被申上ヤ十日以前ヨリ宇治ノ竹庵ニ中階河内ヨリ登リ候米ヲ調サセ晝夜共ニソレヲ舂セ白米ニ致サセ過半船ニテ運送可申候次ニ味噌鹽野菜薪等ノ儀ハ淀ノ與惣右衛門ニ申附置候是モ此方ヨリ一左右次第ニ向島ヘ差越申筈ニ云合置候ト申候ヘバ兵部横手ヲ打テ則其由ヲ御前ニ於テ兵部被申上ケレバ内府様一々被聞召御機嫌非大方扱夫ハ其方ガ思寄ニテハ有マジ左様ノ儀ヲバ何者カ工夫シタルゾト御尋候ヘバ私召仕ノ木保土佐ガ申候ト被申上ケレバ上意ニ曰左様ニテ有ベシ其木俣ガコトハ隠ナキ覺ノ者也今ニ始ザルコト、仰出サレ早速其夜ニ向島ヘ御移リ被成柵ヲ

フリ一方口ニシテ兵部御門ヲ固メケレバ諸軍勢丈夫ニ圍ツ、御籠リ被成候故治部少輔コト手延ニ仕候トヲ後悔致シ申候コト

一治部少輔コト色々様々ニ風説ヲ申候諸大名ノ心ヲ動シ候附福島左衛門大夫、池田三左衛門、大津宰相加藤主計頭、生駒雅樂助、藤堂佐渡守、堀尾帶刀、中村式部大輔以下右ノ諸大名悉ク家康公ヘ馳加ルニ附石田三成モ降參仕故上方筋無事ニ成候事

一右治部少輔申成ニ附科ナキ内府公ヘ名不足ヲ申カケ面目ナク候ノ間是非其返報ニ三成ヲ打殺シ申ベキト相談ノ儀ヲ治部少ヘ佐竹義宣ヨリ知セ申サレ候故彼男小月毛ト云名馬ニ打乗テ大雨篠ヲ亂スガゴトク降ケルニ唯一騎大阪ヲ出テ伏見ヘ駈入家康公ヲ賴奉ルノ由申上候ニ附御不便ヲ被加御刀コヒ被成跡ヨリ諸將追駈給ヒ内府公ノ御屋敷ヲ取卷治部少ヲ御出シ被下候ヘト被申候ヘ其吾ヲ賴テ參候者ヲ善々諸共ニ切腹ニ及候トテモ相成マジキ由御誓言故是非ナク各退散ト云々扱伏見ノ御城西ノ丸ノ續キニ治部少輔曲輪トテ有之其三成ガ居所ヘ御送り届ケ被成候ト云々其后猶諸大名憤リ給ヒ兎

角治部少輔ヲ討ベキトテ佐和山迄結城宰相秀康卿ヲ被差添御送被成候ノ所ニ三成勢田迄御同道申カシコヨリ秀康卿へ御斷申上返シ奉リシ也然共相公ヨリ御念ヲ入ラレ芝田左近ヲ佐和山迄見届ノ爲ニ被遣候へバ三成歸城シテ今度ノ御厚恩一生ハ扱置未來永々忌奉ルマジキトノ起請文ヲ書テ内府公へ進上申扱左近へハ貞宗ノ脇差ヲ引出物ニ出シ御禮儀宜様ニ頼入ト申候テ返シタルト云々

一其後加賀大納言利家卿御病氣重ク候ニ附秀頼公ノ御事頼ミ置ベキ爲ニ大阪ヨリ伏見へ參上内府公へ御對面諸事被仰談事畢テ後公ニハ伏見ノ城へ御移可然トノ由被申上利家卿ハ大阪へ歸候附内府公モ伏見ノ御本丸へ御移リ被成候事

一右ノ御返禮旁々内府公モ大納言殿へ御見廻可被成ト被仰出候ニ附井伊兵部少輔申上候ハ祇今御用心半ノ節如何ニ奉存候旨達テ申上候へドモ御承引ナクシテ大阪へ御下向ニ附利家卿叮嚀ニ御馳走有テ扱明朝御茶ヲ上ゲ可申旨ノ所ニ御内意被申上候方有テ御延引也扱早々大阪ヲ御立ナサレ森口迄ハ御馬ニ召レンコヨリ亦御船ニテ前後御氣遣有テ御登

ノ所ニ佐田天神ノ下海邊ノ松原ノ中ニ足輕ナドノ様ニ相見へ申ニ附御不審被遊御船ヲ被留候所ニ伏見ヨリ井伊兵部少輔ガ千餘人計ニテ御迎ニ參ルニゾ有ケル其先手ニハ横地修理、木俣土佐也物頭ニハ脇上右衛門、菅沼雪仙齋鐵砲三百挺ニ火繩ノ挾ミ參候ガ御船ヲ見附候テ其儘兵部馬ヨリトビ下リ御船ノ近邊へ近ヨツテ猩々緋ノ羽織ヲ刷ヒ拜伏シケレバ御機嫌不斜御船ヨリアガラセラレテ彌八鹿毛ト云シ名譽ノ早馬ニ召テ伏見へ一馬場ニ御歸城也扱兵部少輔ハ弓鐵砲ハ大阪ノ方へ立雙テ晚景ニ及迄ヤウスヲ見アハセ候へドモ大阪方物靜ニ候ニ附御跡ヨリシツムト歸被申候也今度兵部少輔ノ仕形共ヲ上方大名衆被聞及内府公ニハヨキ御家老ヲ御持ナサレタルトテ天下ノ取沙汰ニ成テ皆人感之ケルトナリ

一石田治部少輔三成コト一タビ天下ヲ望ミ有之附京都ニ於テ無雙ノ細工人ナリケル庄助ト云者ヲ佐和山へ呼下シ殿守ノ下ニカクシヲキ不斷黃金ノ似セ并小判一分等ヲイカホドモ致サセ置候テ關ガ原前ニ諸浪人并地侍共へ當座ノ心附トシテ右ノ似金共

ヲソレトニ取クレ申候ト也是人ヲナツケンタメ
亦ハ其身小身ニテ度々方々ノ御陣普請繁クシテ勝
手不自由ニ附件ノ如シトナリ
玉滴隠見巻の一終

富再び情死の本説

（此前に岩井風呂の實説の一章あり傳
寄作書殘編と同文ものなれば略す）

扱又富は岩井風呂の富なりその翌る月ありし九月になりて京
都へ仕替られ登りける則内野新地五番町龜長と云茶
屋へ來り勤しに何が評判ある女郎ゆへ押立もよけれ
ば日々の常客絶る間なし二箇月程は全盛なりしが此
界の習らひ翠帳紅間に枕を並べしものとせもいつの
間にかは隔つらんに例の常客も掃仕舞なじみの客も
それ／＼に出來たれ共縁の切めは錢のきれめにて繁
々通ふ跡は詰らぬだらけにてなじみの客の足が上る
と又出來ると又預けらるゝなどとやかくして女郎は
借錢こしらへ客に無心いふて渡るが大體常也夫が中
に蛭子屋何某店の手代彼富にふかく通ひしがある時
富いふは其元さま繁くお通ひ被下かく馴染に相成嬉
しく存候へば私命はそなたさまへ差上居候何卒一所
に死んで下されずやといふにかの手代商賣柄とてか

くは云ぞとそこ／＼にあしらひ其夜は還り又一兩日
過て呼迎へば初の如く一所に死たい死でくれぬか兎
角死たい／＼と實心にいふ顔何となく物すごく色々
欺して宿へ還りしが餘りおそろしさに其後は頓と通
はず成けるか様に死神の附しもかれ故に非業に死せ
し四人の恨ならんか扱も初冬も過霜月頃に成しかば
初入込の時に引かへひつしと淋しく成ぬ爰に一條千
本西に帶屋喜七と云ふ有て頃は霜月上旬の事なりし
が町内に振舞事有て他に參會す終日飲酒にもてなさ
れ夜に入て酒きげんの若輩同士五番町へ立より銘々
女郎を呼迎てける是因果の始り也かの富を呼むかへ
し喜七は三十歳にみたざる美男なれば富殊の外悦び
眞實を盡してもてなしける既に友達は打連歸らんと
いふにせひなく別れ歸りしかども富が實心わすれが
たく翌日又かしこに行て富を呼迎へければきのふよ
り猶又面白く可愛がり近所の事なれば日々夜々に通
ひ詰たり尤喜七に老母妻子あれども打捨て膠漆の中
となれば朝毎に富風呂屋へ行も時刻を合置一所に入
などその餘はおして知るべし然れ共錢財限りあり其
上喜七内證もとより豊なるにもあらざれば今は諺の

錢の切目となりしかば富は様々工面してなじみの客はいふに及ばず一見客に迄無心をいひ我あたまの差物迄質物に入なるたけ借錢こしらへ明る年二月迄介抱して續けれども男も女郎も義理の借錢だらけに成今は死より外あらじと互ひに心を定めて郡が淵へ身を投相對死をぞしたりける爰に奇なるは其夜喜七富かの淵に走り附富の帶を半引明綿をぬき兩はしへ石を拾ひ入是にて二人の身をぐる／＼巻にして其上喜七が渾にてしかと結びとめたり是二人一所に沈み浮上らぬ爲とぞ如此不工面なる形りゆへ淵へはまるも思ふ儘にはなり難く岸の杭に額當り一寸餘打破り死し居たり是に依て御檢使も御隙入られしとぞ扱その砌一條町内年寄五人組其外過半かの所へ至り町内にるすとして残り居たりしは若き輩兩三人のみ也其中に布屋何某と云有是は喜七が朋友にして年も同輩にて至つて親しきなりしが此日夜に入れど町衆一人も歸り來らず既に夜半過る頃にもなりしかば布屋某火燧に凭掛り睡りたる所夢ともなく現ともなくふと面をぬけて見れば顯然としてかの喜七立居たりその形相色青ざめ眼つり上り額に一寸餘りの疵より鮮

血を流し無言にて立居たり何某驚きその方は非業に死せしと聞しが無事に歸りしやといひければ半句の答へもなくひよろ／＼とおもてをさして出ると思へば目はさめぬ何某ふしぎに思ひとかくする内組頭屋根七と云人歸れり何某落著を問ふに大體相濟候故先しらせの爲我計り歸れりやがて皆々歸るべしと云何某又問ふ喜七が額に是々の症無やと云に屋根七大に驚き我より先へ歸る人無に如何して知れりやその通りの疵ありといふに彼喜七が亡靈まざ／＼來し様子かたり初めて身の毛いよ立しと也二人の死骸は六波羅野南無地藏といふへ打込れしかど親族より石碑を拵へ今北野下の森下の西側に有としるせり

紀州奥山大樹の寫

寛政六年寅春の頃紀州熊野深山より三十里奥山へ御用木見立に行て椶の木の大木見出しけり是迄折に來る者もあれどたゞ山とのみ思ひ氣も附ざりしが此度大木なる事を見出しぬ則人夫の杓人等その大きさを積り大守へ上覽に入奉りぬ

一椶木一株太さ百二十抱へ六十丈也高さ三百二十四間五丁餘也枝三本に分れ南の方の枝凡八十二廻り

丈にして四十一丈也

宿り木

一杉長さ七間半

二本有

一椎長五間二尺

七本有

一檜長五間半

十二本有

一黃楊長四間半

九本有

一松長四間半

七本有

一柳長四間半

六本有

一竹

十八本有

一南天長二間半

七本有

右は紀州表より書狀にて申來り珍らしければ寫置ぬ

京大丸の主馬斬の正説

安永三甲午七月三日夜京都烏丸通丸太町上る町大文字屋彦右衛門疳症にて人多く怪我させし趣御公儀へ書上の寫

一新河原町材木町大文字屋金次郎座敷へ出養生致居候主人烏丸通丸太町上る町大文字屋彦右衛門と申二十五歳に相成候者の座敷にて手代丈助を切殺し夫より新河原町を四條へ出四條通を西へ烏丸通北

へ丸太町上る町迄の内にて往來の人を切殺し又は手疵負せ右道筋につなぎ置候馬迄三疋に疵附候

一卽死

數箇所疵

彦右衛門手代

丈

助廿九歳

一手疵

頭 西石垣四條下る町にて攝州上鶴島前町祇園町鎗屋龜之助方に登り居候

一手疵

面體少々 新河原町材木町にて

河内屋久兵衛

一切疵

膝の上 清水四丁目

大和屋伊助四十歳

一手疵

右專助竹與昇渡世仕三條寺町西へ入町へ參り歸りがけ四條御旅町にて切附られ持居候馬挑灯彦右衛門引取逃候に附追かけ參り寺町三條下る町にて挑灯の火消へ見失ひ三條寺町東へ入町鼠屋四郎兵衛へ參り養生致候

松原西洞院西へ入町鍛冶屋忠兵衛彦

一手疵

右の腕先脈所より骨にかゝる 三條柳馬場東へ入町に泊り居候龍の谷面體の右のかた 市助抱へ番人名 不知

善次

郎卅一歳

一手疵

三條鉄屋町東へ入町にて三條油小路西へ入

一手疵

右の胸元 三寸計り 丸井屋ゑん悖市 郎兵衛廿一歳

一手疵

右の乳の上 三條堺町辻にて六角室町東へ入 伊勢屋利兵衛四十歳

一手疵

三條烏丸東へ入町にて 三條屋彦右衛門四十八

一 卽死

鳥丸三條上る町にて雪踏屋町室町東へ入
胸一箇所 綿屋庄兵衛妻さ せ廿七歳

一手疵

右同町にて二條鳥丸藥屋利右衛門小者
右の腕三箇所五寸計 利 太 郎 十四歳
り四寸計り三寸計り

同所にて馬借井筒屋惣五郎軒下に繫置候城州淀大
下津村

一 馬三疋

首胴一疋足首一疋馬持助治郎、久兵衛、三右衛門
脇腹一疋切倒れ候

一手疵

鳥丸通三條下る町にて町内鍵屋權右衛門
右の腕先少々 手代 利 八

一手疵

同斷同家
右の腕先少々 手代 清 八

一手疵

右同町にて二條川原小屋十二郎抱番人
左太股二三寸計 藤 助 八

一手疵

鳥丸二條上る町一丁目大坂屋太郎兵衛
面體額左の方 下人 治 郎 吉十二歳
并に手足少々

一手疵

同町にて西堀川三條下る榮屋傳兵衛
左の手面少々 下人 久 兵 衛

一手疵

同通夷川辻にて同夷川東へ入吉田順安
左りの腕 かし屋 升 屋 小 兵 衛
八寸計

一手疵

同通町竹ヤ町辻にて猪の熊下立賣上る所
先二箇所 津の國屋吉右衛門忤 兵 衛

一手疵

右の肩先 同通竹屋町上る町にて町内
四寸計 槌屋甚右衛門手代 幸 助

一手疵

右の膝頭下の方二木屋彌兵衛忤義 兵 衛
寸程右の手首少々

一 卽死

同通丸太町上る町にて天使突ぬけ五條上る町
數箇所 水口屋忠次郎

一手疵

右同町にて二條川原小屋十次郎抱番人
右の手先 一寸計 六 助

一手疵

面體 同町にて兩がへ町左野周松
同町にて榎木町鳥丸西へ入町の番人二條河原小屋
左の手 下人 與 八

一手疵

首少々 仁助抱名 不 知

一手疵

大文字屋彦右衛門下人 九 助

大文字屋彦右衛門は居宅へ歸り氣絶仕相果候その
節腰物

一 脇差 銘粟田口近江守忠納長二尺三寸計白絞鞘黒

龜甲陳金彫金の水玉十四五縁頭四部一波の毛彫目

貫金もつかう鍔鐵無地下緒柄糸巻

私に曰右書附表向には彦右衛門居宅へ歸り自滅致

せしとあれ共實は彦右衛門手代の計らひにて劔術

の師匠にして殺させしと風説すと云々元より彦

右衛門亂心にて尤其砌りは紺がすりの帷子を著せ

し故さだかに見へ難くして多く怪我人ありしも理

り也

西澤文庫讚佛乘二編下の卷

目次

- 一 唐一行禪師出行日の吉凶祕事
- 一 三味線本手端手唱歌集
- 一 同裏組之唱歌集
 - 大石良雄作里けしきの唱歌
 - 山田檢校吾妻箏之目錄
- 一 同布袋の唱歌
- 一 小督曲之唱歌
- 一 江島流罪一件物語

西澤文庫讚佛乘二編下の卷

西澤綺語堂李叟著

唐一行禪師出行日之吉凶祕事

正四七月 <small>萬事叶心</small> 朔日七十三日十九日廿五日 大吉	三六九月 <small>有惡難</small> 朔日九日十七日廿五日 大凶	二日八日十四日廿日廿六日 勿出門四方 萬事 大凶	二日十日十八日廿六日 安穩無驚 得寶 大吉	三日九日十五日廿一日廿七日 被仰高貴 萬事叶心 大吉	五日十一日十七日廿三日廿九日 萬事 大凶	四日十日十六日廿二日廿八日 千里叶心 逢悅 大吉	五日十三日十九日廿五日 逢盜賊 失寶 大凶	五日十一日十七日廿三日廿九日 逢弓箭火災 不歸家 大凶
--	---	-----------------------------------	--------------------------------	-------------------------------------	----------------------------	-----------------------------------	--------------------------------	--------------------------------------

六日十二日十八日廿四日卅日 十方叶心 在悅 大吉	六日七日十四日十五日廿二日廿三日卅日 逢酒悅 大吉	三五八十一月 <small>有死縫</small> 朔日九日十七日廿五日 大凶	八日十六日廿四日 逢女人口舌道 行不歸家 大吉	二日十日十八日廿六日 有心中 幸萬事 大吉	三日十一日十九日廿七日 失寶多愁 萬事 大凶	四日十二日廿日廿八日 被仰人一切 叶心 大吉	五日十三日廿一日廿九日 有家業 之德 大吉	六日七日十四日十五日廿二日廿三日卅日 十里外不可 行逢災 大凶	八日十六日廿四日 有家業 利業 大吉	右日取は旅行のみに限らず近所出行飛脚または國々文通にても同じ事也但し遠行程は吉凶ともに重し出船なども同じ事也金銀財寶商賣筋等には寶を得ると云日用のべし貴人高家へ行時は高貴に仰がるゝと云日を用ゆ出帆等にも安穩不驚と云日を用ゆべし何れも其品によりて考へ合て用ゆるなり 右行出日をためしみるに誠に百發百中恐るべき事也
-----------------------------------	---------------------------------	---	----------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	--	-----------------------------	--

三味線本手端手唱歌集

琉球組、鳥組、腰組、不祥組、飛彈組、忍組、浮世組、右七曲を本曲と云本手といふ

待にござれ、葛の葉、ひらや小松、長崎、下總ほとり、

京鹿子右六曲を新曲と雲端手といふ裏組六曲外に一

賤、錦木、青柳、人はた、見す、なよし、千代の恵、

中許八曲、早船、搖上、亂後夜、晴嵐、七つ子、ほそり、

かたばち、らうさい、大許、淺黄、茶碗、松虫、堺、申島、

右五曲也 本手組 琉球之唱歌

「比翼れんりよのてんにてる月は十五夜がさかりあ

の君さまはいつもさかりよの

「思ひを志賀の松の風ゆへにしなでこがるゝゝ

「深山おろしのを笹のあられのさらりさらゝゝとし

たる心こそよければしき山のつゝら折のかなたへ

まはりこなたへまわりくるりゝゝとしたる心ぞおも

しろや

「とろりゝゝとしむるめのかさのうちよりしむりや

腰がほそくなりそよ

「とてもたつ名がやまばこそこちへおよりやれのう

柴垣ごしにものいはふ

「おはらぎかはひゝゝ黒木めさいのてうりやうふり
やらひゆヤリヤにひやるゝあらよひふりやうなりひ
ようふり

本手鳥組之唱歌

「とりもかよはぬ山なれどすめば都よ我さとよ

「我戀は千ぼん小松のかるゝほどたいがみづひてほ

こりたる程

「みよめばかりの戀をしてちかの鹽がま身をこが

す

「いへばよにふるいはねば心がもだゝゝと

「おめとめるめをみあわせてはなれがたなのその俣

をゆめにも見せずうつゝになりともあわせたもれ

あはねば心がもだゝゝと思ひの種やあこがるゝ身を

なとせうぞの

「京では一條柳屋が娘よつわり帶をたすきにかけい

かにも腰がしなやかなゝゝ

「いざまいろ六地藏へほとけにへだてはなけれども

さりとはではのしほやがたてた六ちぞうえいそれ

しほやがたてた六ちぞう

「しのびのとの様にふだんとさげさしよ縁のあるゆ

へよねんがないよの

本手腰組之唱歌

「腰に提たる小著はこれもうき人の縫じやほどに

「道で見たりともわすれまいしだれ柳のふりじやほどに

「雨はふるとも雪ふるなさしのぶほそみちのさゝのたはむに

「なるとならずと文をばつくせ心づややつれなやとにかくにわれは數ならぬ身じやほどに君こふかゝゆこかこすばもどろに

「一夜ふた夜となれそめてあすはふねつるなどせうぞのうらめしや

「いやといふたものかきくどひてのうなんぞやをなたのひとはな心思へや君さまかなえや我戀あらうつつなのうかれ心やもまいのくさいらもまいのわれともわかい時はとのにもんもまれた

本手ふしやう組之唱歌

「若いがふしやうでをひまいらせうかのせゝしば垣のやぶれたを

「思ふまいこのかねをちんからころりとうてばばち

やらなをおもはるゝ

「はしにわが身を投かけてわたらせうよのころゝ

くゝとやれわたらせう

「月の蔭にうつ砵の音のえいはうゝほろゝはうほろとまたしてもおどろくよもゝあるに獨ねよとは何事ぞをもはざなきそますはなぐるひしやうづものわざくれ

「わざとこんどはおしやれども眞實思へば恥も人めもおもわくも思ひ出されぬ物じやものかしながら君はたゝます花のある故

「十七八はうんゑいころりなけしのほこりみなとのたちのめにいりたゝめにいりたらばやくしへこもれやくしのまへでのくすしよゝゝ

本手ひんだ組之唱歌

「ゆみや八まんねはせねどねたとおしやらばなとせうぞの

「ひとつこしめせたぶゝとをにおしやくはしのびづまゝれんばれゝつのれいしよしやうにそはれつのれ

「これのちよしよがかみわけはしちくこたけによつ

のふしかゝや越前美濃尾張越後京ねごろ粉河さかも
とで所望召れた

「あすはしよづもの船のしよづものおもたげもなど
およる殿御やあゝかほるとのごやひんだのおどりを
ひとおどりく

「船の中にはなにとおよるぞ筈を敷寝に揖を枕にひ
んだのおどりを一踊りく

本手忍組之唱歌

「いよ忍びくくて心嬉しや梅にさへづる鶯のよるは
梢に宿る共

「思ふまいよのやれそれほどにかほに紅葉のたつた
山

「いとまごひにはきたれどもごばんおもてゝめがし
げければまづおまちあれ柴の編戸もおせばなにあは
れあられかはらほるとふれかなそのまにあゝ笑止や
たつなや笑止とたつ名や忍びおどりはおもしろやお
もしろや

「戀をせばく二十三日の月をまで月のいつはりな
きものをてててかうこしやんきしやかんこはらり
ついやひよついやくつやにちやうらゝにやうつほ

ゝしのびおどりはおもしろやく

「我戀はもじの袋ぞ色小袖なるとつゝめど色にいで
候やれ出さふろ逢見てのちは何とせうぞのもどろや
れしやならくと

本手浮世組唱歌

「誰も浮世は假のやどさのみ人めをつゝむまじよや
君しやらり

「文もやるまいびんぎもせまい返事さへせぬうさつ
らさ君をば人に思はせてかほどにつらきものぞとお
んもひおもひしらせでとは思へども身のうへになれ
ばさらにおもひきられぬ

「とてもたづなに寝でござれねずともあすはねたと
さんだんしよはなのおどりをのみはなの踊りをひと
おどり

「われは小づゝみとのはしらべよかはをへだてゝの
うかはをへだてゝねにござる花の踊りをう花のお
どりをひとおどり

「いとしわかしゆと小つゝみはしめつゆるめつしら
べつゝ寝いらぬさきになるかならぬかく

「みやまやるまいみやま瀧の水はうちやみていづく

ちやうどうてばうちやうていつくつくくしんたん
たらつくちやうどうつ若衆おどりをのうわかしゆお
どりをひとおどり

端手新曲之唱歌 待にござれ

「まつにござつたいとしの 君やのうこんや ござらざ
こがれしのう

「とても縁なき中ならばなどや始のつらからんいと
どはげしきふきあげはまにとりをかぎりにかのさま
まてばさむき嵐も身にしまぬ

「われがとのごはとら五郎どのしゆじやが栗田口よ
りいしまたひきやるえいヤヤころさにやつといふて
ひきやるおこゑきくさへよふしかなゆるましてそふ
たらしのすよの

「きみとわれとはのやわくのいとのきれてはなれて
又むすぶ

「しのんだりやなしのはれたりやなうらのほそみち
こやぶから

「おもふまゝなるのやこよひかなな月は朧につまはき
てもみぢばを見よこひはちる

端手組くすのは

「さてもやさゝのいよくづのはや何をたよりにはひ
かゝるいよえいはひかゝる

「君を松島おじまの海士の袂ひがたき我なみだいよ
えい我泪

「み山清水はそこからすむが君の心もそこからか
「山で小柴をしむるがごとくこよひそさまとしめあ
かす

「浅き契りにあひなれそめてふかき思ひはあゝさて
なみだ川君にあふせをまつばかりあゝさてまつばか
り

「今度ござらばもてきてたもれぎふのお山のひの木
の枝のうきよがゝりの思ひ葉を

端手組ひらや小松

「ひらや小松の朝通ひつまがぬれ候いそうつ波に

「鹽津貝津にある時はのぼりたいよのさかもとへ

「かどにたつたは八もじさまか夜風身のどくうちぢ
ざれ

「いつのなんどきそなたをみそめわれが身はたゞ磯
邊の衛なかぬまもなや君ゆへに

「爰は三でうかやれかまざかゝいちや泊りてしげり

まいらしよわれが殿御はなごやにござる扱もおるす
はものういものじやゑいゝゝさらゝのう石をひく
ゑいゝやつといふてひくにはゆめだんべいのえい
といふてひけばおなびきやるかのうよいやつといふ
てゑいとゑゑいさらゑい

端手長崎の唱歌

「みやいちがよれたゝしよじよがなさけ
「長崎の鳥は時しらぬとりでまよなかにうたふてう
たふて君を戻す

「くれないの三尺手拭かたみに見よとておいてゆ
く

「紅糸はうすくなるともそもじとわれとはいちごち
ぎるべいぞよもさくらがにこゑだのさくとちきるべ
いぞよもさ

「むかしより今に渡りくるくろ船えんがつくれればふ
かのゑとなるさんだまりや

「おもはぬ君にお情はむやくうき身やついてなげく
われらにおちさせられぬ

「名所さまゝおほけれどゝふきあげの濱は和歌
の浦さあてんじん玉津島布引の松山いくちよゝと

わか山のおまいりあれの君井寺

端手しときほそりの唱歌

「此程は戀つ戀られつこよひは忍びのはつでござり
申すよつさあいよえいよえうらとけてゆらゝとお
よれのうさまだよはよながよしげれとんと君さまさ
ああいよえゝ

「かひの國なる信玄さまのな一度もござらぬ二度も
ござらぬおちかぼしのぶにむつのくが候まづ一ばん
に雨よ霰によ露に紫垣のう扱いぬのあだぼへそれ月
はなを月はのう月扱はえせもの

「しのぶ細道にまつとくるみはうへまいまつよにそ
のみがくるみでもなしなよ扱まことにくるみでもな
し

「こぞのたけとよことしのたけとよしどろでもどろ
でのうさてふしがそろはぬなよさてまことにふしが
そろはぬ

「たれでござり申すかへこしのまたねずなきこよひ
は殿御のあとに寝てきくねてもきけとよ起てもきけ
とよこよひのよか扱あすのよになるともあはずばも
どるまいよのなよさて誠にもどるまいよの

「扱もつれなのきんまんさまやきんきこざらさぬめりでくらすそれをたれぞと尋ねてきけば六でうしもの町のわかやまさまのうちの山のかみが聞たらばたけくたけりやろものを

端手京鹿子唱歌

「是は京鹿子いろもよやめゆひ手際もよきよやあら都戀しやのうみやこのしてたち戀しやのう
「是は京小袖いろもよやもんがら手際もよきよやあら都戀しやのうみやこのそめどのこひしやのう
「しんのやみにもきよはぬわれをあゝさてそさまのまよわする

「ふけよ松風あがれやすだれ今のこうたのぬしみたや

「花とならばなよたんだおんみは紅葉のいろよのう扱ひかずにそひていろまさる

「梅にはひをさくら花にやとらせて青葉のまゝにながめばや

「尺八のひとよきりこそねもよけれ君を一夜は寝もたらぬあら心なの君さまや

「そちとこちとは松に藤のさがり枝のごとくたそが

れどきにかゝるなさけがみにまともわるゝ

裏組賤之唱歌

「しづの身なれば色には出さぬあたら心のうちにこがるゝ

「たちよりむすぶ山の井あかれずあかぬなかはな松の二葉よ千とせふるまで

「筆で書とも畫にうつすともさらにつきせじ松島の浪にうつろふ月のかげしまのかずしんしらぬ

「たんだ人にはなれまい物よなれての後はなんるゝみがだいじなる物はなるゝがういほどに

「かついた水がゆり／＼だぶつきこぼるゝげなとのをうつゝなやとののみやこに

同にしき木之唱歌

「神のおまへのみしめ繩をよふく風にもなびけばなびくつらき心をうちすてゝものゝぐになめされこそふりわるやうちとけよ／＼すみてもせんや
「山がらがかごのうちでのうらみで／＼かごがかごでもんどりうたれぬ

「七里おばまのなすなの數ほど思へ共ゑんが薄ひやらそひもせぬ

「おつとは錦木とりもちてさいさたるかどをたゝけどもうちにくたふるむしのねのおもひきろやれ戀の道きりはたりちやうく」

「忍べども思ふ君にはあはずしてむらさんめいはらくほろとふるほどに思ひきろやれ戀の道きりはたりちやうく」

「とてもおすちやかものゆへにさがたひとてだかりやうか浮世の中のさんだんにさいひつることよのといはりよよりもなまなかいちやはまいるまいいやくいやなら始にいやとはおしやうで今更何となろふぞのうおもはざなきそますはなぐるひせうずものわざくれ

同青柳之唱歌

「扱もそなたの立姿春の青柳絲櫻心がたよくと
「文もやりたしびんぎもしたや俤にたつその俤をわすられもせでみにそひそゝろにうかれきてうきやうつゝや正體なしやうきや戀のとまらぬたいとにかくにうらめしや

「枕にかゝるみだれ髪いと心の亂れくゝてやるせなやよしや其身が何となろうぞの

「縁なき思ひに身ははれて薺の花の露よりもろき身をもちてさのみ心なつくさせそ

「十七八はすなやまのつゝじねいろとすればゆりをこさるゝ

「くもる鏡かわれが身はおもひまわせばとぎほしや

「翌は殿御のきぬたうちおかたひめごもていうたいきぬた踊りはおもしろやきぬた踊をひとおどり

裏組八幡之唱歌

「月はやはたのまた空にもいのいのとはおもへども跡に心がとまりてうしろ髪がひかるゝなんぼこひには身がほそろ二重の帯が三重廻る

「たつるお茶にはあわたゝでわれが浮名はむらくにたつむらくにたゝばたてのう誠の心とけすはしよくわんじや

「あの山影をすぐにくるだにおそひになよしんじつ恨み事さしおいてまづだいておよれのうなよしんじつ

「思ふかどには竹をうへて雪のふりたる曙をつれなき人にみせばやなびくさゝの葉

「人の嫁御と竹にさく花よやおもへば曲もないさまじやせんないしやもしやもちくなにしよそうでなにしよそれしよしやなにしよわかしゆをどりをのう若衆踊りを一踊り

裏組みすぐみ唱歌

「みすの俣物ごしに見をめきゝそめうかゝと戀をしてやするは人のしらすして夏瘦をするやれすいめさるゝ

「露に亂るゝ糸芒をよゝとふきぐる風にもなびきそろうつゝなやしやうだいなしやとおもへどもそもじとわれとは萬代までも千代までも

「風にまかするうき雲も吹くかたへゆくめでしめばひくとおもはれつれなの君の心根や

「かづいた水がゆりこぼるゝも浮世の習ひ扱もつれなやしやうだいなしやうきやうきならぬはわれた尺八かさう

「竹がな十七八本ほしやな浮名やもらさじのなかごにくもわれた尺八てなりけそともなるまい物ゆへにわれた尺八てがござるしいじとしむればなるものをとりてふきてみたればふしがちやうとしだれつろ

れつろつりよれつのがつれつろ

同なよし唱歌

「なよしゝはなよしなしのあだ花なよしなりはしもせでなるとなのたつ名よし

「さいらこだけにあらねどもさらにさよゝゝさらにしらぬ物ともすればなんぞよそなたのものがねりなにとなりとおこのみやかねをうとかのう

「しんきはりよやれはまゝで、沖の島々を見てなりとあれに見ゆるはしがのうらこか□さきひとつまついなくだりのみちすがらゝゝ

「田舎下りの旅のとの名所の月がながめしやんとのうしやんと詠めたりよさをゝろいというてやるせなや

同千代の恵唱歌

「千代の恵よの柳はみどり花は紅るよ人はたゞ情それ梅は匂ひよの

「あら野になりを君にそひなばみやなるものゝ

「笹の葉にふるあられの音のさらりさらゝゝさらさらとしたる心こそよければしき山のつゝら折のかなたへまわりこなたへ廻りくるりくるゝゝくるとしたる心はおもしろや

「山の白きを雪かとおもふて見れば卯の花しむりや腰が細く成候よ

「武藏野におぎとすゝきが戀をして萩はそよめくのみすゝきははにでゝみだるゝ

「おはら木くかはひく黒木めさいのでうりやうふりやうひゆやりやにひやるゐあらよひふりやうるひひようふりやう

此一曲うら組相濟候後許之中許大許目錄のみにて唱歌見へず端歌本調子長歌二上り三下りは後世に出来しと見ゆ三味線琉球より渡りてのち寛永正保の頃は右本手端手裏組中許大許とて唱歌もいと古代なる物にて今は諷ふ者もなく手をしりてひく人は猶稀なるべし明暦萬治の頃より今専らひく長うた端歌の類いで來て唱歌も慥とわかる事とはなりぬ既に本調子端歌の内里げしきと云は赤穂の名士大石良雄の作にして井筒治郎三調也是元祿年間なれば此頃は長うた端うたの新曲出來て本手端手は古風なりとて早廢れりと見ゆ今謠曲の狂言に小歌と云は此文句に似たりたまゝ殘れるは今諷ふおちやめのとの文句に見へたり古雅なる事愛すべし里げしきの文句昔めさて

よければ爰に記

「ふけてくるわの粧ひ見れば宵のともし火そむき寢のゆめのはなさへちらす嵐のさそひきて合間を呼出すつれ男よそのさらばもなを哀にて埒もなか戸のあくる東雲送る姿のひとへ帶とけてほどけて寢亂れ髪につげの合つげのおぐしもさすがなみだやばらく袖にこぼれて袖に露のよすがのうきつとめこぼれて袖に露のよすがのうきつとめ

此頃のはうた長うた數百番あれど今は是も古風なりとてすたり外題のみ呼てひく人も諷ふ人もなくなり行ぞせひもなし

箏曲はむかしより歌も手もかはる事なし夫さへ生田八つ橋の二流あり近頃東都にて箏曲に名高きは山田檢校斗養都也組をしらぶるに正しくして自うたを作り人をもつくらせ曲節を盡せるもの三十八種あり吾孺箏譜と題して板本となし門弟山登檢校松和へが藏板とす其目錄

弓八幡 布袋 夏やせ めぐりあふせ 安氣がらす 今様朝妻船 葉がくれ 竹筏 春宮曲 四季の艶 山ざくら かきのうち 相生 曲水 花づ

ま 夏ほとゝぎす 手箱玉章 あづまの花 花の
かゝみ 花ごよみ 蓬萊 芙蓉峯 はりま八景
奈須野 住吉 千里の梅 櫻がり 江の島曲 四
季の段 小督曲 長恨歌曲 葵上 ゆや 八重垣
追加こゝろの奥 春日詣 初若菜
以上三十八種 此うち

布袋の唱歌

「戀といふ憂はかうしたうき物とがてんはしてもし
ら絹のもたれ袋のながきひもうちわかたてに思ひ
寝のうつら／＼とこがれてくらすそのぬしさんの三
重の帯つひくる／＼と一重にはむすびもはてぬ春の
ゆめ仇な此世に墨染のこちや木のはしやじやない物
を 同

小督曲之唱歌

をじかなく此山ざとゝゑいじけん嵯峨のあたりの秋
の頃ちぐさの花もさま／＼にむしのうらみもふかき
夜の月にまつ虫まねくは尾花萩には露の玉むしや
そよ／＼萩むしくつわむしなくねにつれて仲國が寮
のおん馬たまわりて宿直すがたのふち袴たづぬる人
の俤にたつうす霧のをみなへしそれかあらぬかまば

ろしの蓬がしまねたづねわび駒ひきとむるさゝのく
まやすらふ蔭の松風にかよふつまおとつまごひの
ねによる鹿にあらねども昔おぼゆるふえたけやあは
すしらべのまがひなき聲をしるべにしたひよるさが
野のおくのかたをりと想夫戀の唱歌はひよくの翅の
雲ぬをこひ盤渉調のしらべは松のれん理のえだにか
よふ小督の局世をしのぶすみかもあすは大原にかへ
んすがたのなごりとてよはにてならすつまごとのい
はこすおもひせきかねてなみだに袖をかしはばや人
めもいかゝあやめがた糸のいろねをしるべにてさし
入月の雲より御つかひにまわりしとかしこき君が
みことのり野べのをちかたわけきつゝ露の玉づささ
しよするつまどののはしのえんのつな又ひきむす御
かへりごとそえてたまはるいつゝぬきぬ／＼おく
るほどもなくむかひのくるまたてまつりむかしにか
へるも／＼しきや／＼千代をちぎりの松のとはは

江島流罪一件物語

正徳四年午正月十四日芝増上寺御靈家へ從三位月光
院様より御代參として十二日江島と云御年寄を被遣
尤十四日に大名衆御旗本方と參詣有之故十二日御代

參被遣けるに極る故江島方より増上寺設者中へ前日申遣候趣は明日御代參被仰附候間早朝に參り候何も御馳走は御無用に御座候乍去堺町成共木挽町成共芝居を御振舞被成被下候へと人を遣ける所右返答に御代參に御出被成候由承知仕候夫に附芝居之儀御申越

外吳服物品に有之を少々にて賄ひ殘りの金銀並吳服物等芝居へ爲持代參に事よせ外に多くの女中を誘ひ出し増上寺をば早々立木挽町へぞ行けりかくて其節御年寄に肩を並ぶる面々此日同道せし衆中は

新御中老役

五百石

宮路

二十八歳

同役

七百石

木曾路

三十七歳

表御使番

五百石

梅山

三十二歳

御内所御使番

四百五十石

吉川

二十七歳

同役

四百七十石

沖津

三十四歳

御用人

四百八十石

およの

二十五歳

御小性衆

十人扶持

おげん

十七歳

同役

各同斷

おせん

十四歳

御殿御用相勤罷在候處江島様御召と申端女出て清助を呼れ江島殿御逢被成清助に御申附候は明日去る仔細有之罷出候故其節山村長太夫芝居見物申度候二階棧敷五十間計借置辨當百人前餘申附吳候様にと云ける故清助御受申早速木挽町松屋と云茶屋へ約束致明十二日棧敷五十間辨當百人前餘云附菓子扱調へ先手附にと金二十兩相渡候間是を受取翌早朝より治郎兵衛清助兩人は長太夫方に袴羽織にて待受致居たりけり然る所江島は御代參として増上寺へ參り候處方丈始設者衆迄被下物御包金銀七十兩と二貫五百目其

右の女中を始めとして末々の女中供奉の諸士迄不殘棧敷に入て都合男女百卅人程と見へてけり扱江島事は當年卅一歳にて高六百石にて殊の外月光院様御意に入なれば簡様に心の進まぬ人も江島が威勢に恐れ上下共に隨ひなびきけるとかや此日の有様言語にたへたる事共也先棧敷には簾を下げ座元長太夫生島新五郎中村清五郎袴羽織にて酒の相手に棧敷へ呼れ酒宴のみにては狂言の物音も聞えぬ體にぞ見へにける然

るに松平薩摩守家來谷口新平といへる者夫婦連にて下棧敷にて見物しける所に上棧敷にて江島酒に酔我しらず酒をこぼし下へもりかの新平が頭にかゝりし故新平方より上の棧敷へ使を立ければ御徒目附岡本五郎右衛門新平に手をさげ段々と詫しけれ共新平更に得心せず既に事に可及と見へけれ共達て詫したる故新平も場所惡しき故に堪忍して晝時夫婦連にて歸りける夫故五郎右衛門も達て江島に勧めて歸り候てあましたる體にみへける夫より八つ時二階棧敷より廊下傳ひに道を附長太夫が居宅の座敷へ行右の女中皆々行けるは言語に絶たる事共也扱狂言作者中村清五郎は夫婦連にて座敷へ出取持致ける此清五郎妻事は幼少の頃踊り三味線を習ひ見めよき生れにて名をお梅と呼大法印と云祈禱者の娘なるが先公方様御代御城へ被召出御意に入御奉公相勤ける者故上の御殿様にても御意に入にて江島杯にも毎度世話に成恩もある者なれば一入江島に馳走ぶり大方の役者野郎子供と馴染深く出来けり偕又江島と新五郎と別して馴染の深き譯は新五郎が娘を水戸殿家中奥山喜内と

云者の娘にして喜内兄奥山交竹院手引にて江島が部屋子に致置江島と新五郎とわりなき事七箇年の馴染にて詞にも盡されぬ事共也此日早七つ時にも成ければ長太夫が座敷を立裏通りの山屋と云茶屋へ行二階座敷にて酒宴をぞ催ふしけり是も夥しき事共也扱も時刻のうつりしかば附來りける所の御徒目附御小人目附皆々相談致し餘りの大酒殊に日暮にも及ければ是非御立候へと度々云ひけれ共江島は大きに立腹して役者野郎茶屋其外へもすさまじく花をくれしは羽二重二疋三疋或は紅八丈縞其外反物吳服所より取寄遣しける扱又増上寺より持參の反物金銀迄不殘花に出しけるとかや漸々木挽町を立出平川御門より夜五つ時入にける右女中何れも月光院様御前へ出只恐れ入て居られけり江島事は大のてれん者にて少も恐れず御前に出口にまかせてよき程に申上ければ上々様の御儀殊に御意に入なれば首尾よく納りける偕翌日より其節供奉之衆中御徒目附御小人目附黒鍬同心中迄云合せ寄合附候て評議に及けるは茶屋遊び芝居見物の様子彼是と心得がたき事共殊に其節歸り候へと申せしを腹立惡口致彼是此分にては置がたく以後

いか様なる越度にも成べしやあの我儘なる江島なれば若も上にていかやうの事申出し銘々の迷惑に成り申さんも不知とて銘々しめし合せ御支配の事なれば若年寄中方迄一書を以て訴けり其趣き後藤の手代治郎兵衛清助兩人が事芝居一件の事増上寺御代參の様子新五郎等が事一々申上げれば夫より御詮議始り奥御留守は松平主計頭松前伊豆守大島肥後守大久保淡路守一位様御用人堀丹後守品川佐渡守本間豊後守三位様御用人安藤志摩守坂部飛驒守右の面々詮議す老中若年寄衆相談の上二月二日詮議相濟何れも御暇被下皆々上著御取上げ白無垢計著しはだしにして御城を追出され此時女中殊の外難儀に及び達て願ふよふ宿々へ町駕籠の願相叶宿へ御預と成にけり江島一人は白無垢計著せはだしにて髪取亂し兩の手を取り平川御門より飯田町江島が兄なる白井平右衛門方へ御預にぞ成ける其節は氣違の様に成しと也大分の群集したりしとかや夫より平右衛門方にて座敷牢をしつらひ入置たり扱女中衆は何れも六七百石の面々なれば召仕の女房達下女端女末々に至迄上下三百人の餘其日の内に皆々御城を追出され跡は不殘關所に相

成當分下されずして二月の末に被下にけり下女の道具は當座に下され江島一人は關所に成切りなりと也偕二月三日評定所にて皆々御詮議有之同四日木挽町役者共召呼れ村山平右衛門中村源太郎生島新五郎中村清五郎座元長太夫森田勘彌町奉行所にて御吟味の上右の内三人手錠被仰附又翌日右の者共と外に子供二人葉山源太郎三條勘太郎兩人相添町奉行坪内能登守が御番所にて御聞書相濟て後此兩人は子供事故正直に申上しとて御咎なく歸りける其跡右の者共其外の者迄も江島に貰ひ候物不殘書上候様被仰渡其通り皆書附にて差上る雙方御詮議の上にて新五郎牢舍被仰附ける其時の狂言に右衛門櫻と云外題にて丸橋忠彌が事を作り二月朔日より替りを出す其狂言に留縫の體にて敵と切合あり其時新五郎が著たる小袖上に紺地の金入立波の模様の小手袖にて紅裏つけたるを著て出けり是は江島が所望にて遣候夫故江島方より御紋附の縮緬の小袖貰受候に附入牢被仰附候偕清五郎女房呼出され牢舍被仰附平右衛門源太郎兩人は手錠御免にて御預に相成候長太夫勘彌も町預と成り七日は長太夫座團十郎勘彌座藤田花之丕其外子供召

呼れ様々御詮議有之上にて團十郎御預となる殘は御構なし次の日に團十郎申譯立御免也九日清五郎夫婦共に嚴しく拷問せられ白狀す依之十一日堺町の野郎共其上葺屋町市村竹之丞座にて瀧井半四郎被召呼御詮議の上手錠被仰附殘は御構なし同十三日御詮議にて女中方と御奥醫師交竹院喜内清五郎等對決あり後藤が手代治郎兵衛清助下男七兵衛と三人入牢被仰附江島は其日より上り屋へ入りける清五郎女房お梅色々と白狀致候故終に責殺されにける江島儀も段々責強故木挽町葺屋町の様子明白に相知れたり扱其頃一位様御大切の御道具二三品紛失す若し江島方より役者共に吳候や又懇意成者にも吳候歟御詮議あり總役者共へ被仰渡候て江島は勿論外之女中方より貰候物あらば包まず申候様に仰渡依之有體に申上候者は御構なし少しも偽り候者牢舍手錠に成り其後段々御詮議相募り或は御免或は彌増の御詮議に逢ふ者も有ける葺屋町瀧井半四郎は初手は手錠にて有けるが後々は入牢被仰附ける同二十五日に奥山喜内と清五郎と評定所にて對決有喜内事新五郎娘を自分の娘と偽り江島が部屋に遣し其上芝居見物船遊山又は吉原杯

へ同導致候事迄顯れ水戸へ坪内能登守より御引渡被成候故喜内事は水戸の屋敷にて追放せられけるとぞ扱新五郎は獄中にて大病相煩ける故妻子共毎日御預の願に出る所に御慈悲にて町内へ御預の上宿元にて養生致し毎日様體書を以病の様子を届ける其後全快致又候入牢致ける此時新五郎が妻子の別れ哀れ成ける事共也扱其後長太夫居宅の座敷へ通路を附て數多の女中を引込候儀重々不届に附闕所にて其身は入牢被仰附勿論新五郎清五郎半四郎不殘闕所と成にけり尤妻子共は店請人の引取に成けるかくて三月四日御評定所へ被召寄候者共は江島が兄白井平右衛門同弟豐島平八原田伊右衛門奥山交竹院金九四郎兵衛西村右衛門御用達町人梅屋善六右衛門懸り入牢す此日對決の上にて顯れたる事は右の者共江島度々吉原賤井に四座の芝居見物に參り又は船遊山等へ同道致貴をいとはず筋惡しき者共と參會致候由相仰れ吉原の茶屋召出され御詮議被成候所右茶屋の方に御紋附の御長持有之ける故此御長持之儀御吟味有ける所には是は雜司が谷鬼子母神別當方より貰候山中上候故早々別當被召出候由風聞にきくとひとしく直様駈落致候

依之又々御尋被成候へば目黒邊に居候由早々召捕御詮議有之候へば雜司が各別當申上候は江島殿無心被申候故金三百兩用立申候故御返濟被下候様催促致候所芝居又は吉原にて差引可致候由申され候故無是非參會致候金子貸候へば催促候等なるに惡しき場所へ參會致候事紛しき儀故其分に成難く江戸御追放被仰附候扱長持の儀は江島が計事を以鬼子母神別當より中之町茶屋へ遣置候由長持の内御詮議有之候所皆芝居役者の衣裳也是は江島が吉原へ參候節外の人々同道にて役者共呼寄狂言致させ見物致候道具也此催は常に有けるよし申上げる扱此節増上寺中の徳水院と申す出家駈落致ける此趣荒増尋ぬるに此徳水院儀江島と殊之外懇ろに致候故立退候と相見へける也去年十月十七日芝宇田川町橋の角満願寺屋と云酒屋有しが此女房を盗み出し町宅を致し江島が世話にて増上寺地内懇ろ成所化を頼み彼女房をかくまひ置よし是は満願寺屋孫兵衛も彼坊主と女房不義の様子後に考れば是も譯ある事にて江島が方便なりけり夫故女房の親元へもよき様に挨拶致し置ける夫故其分にて有しが是は深き意味有ける事也扱も御評定所にては江

島が一類雙方被召出罪過口趣仰附ける銘々其趣きは

右江島事段々御取立にて重き御奉公も相勤數多の女

中の上にも立候身にて内々其行ひ正しからず御使出候折節或は宿下り致候に事寄度々貴賤を不撰不宜者共に相近附指て由縁もなき家々に寢泊り致中にも狂言座の者共に馴染を重ね其身の行ひ始此のみならず朋輩の女中を追出し候て御殿をみだりに勤候段其罪過重き事に候得共御慈悲を以命を御助被遊永々遠島に行ふもの也

死罪

江島兄小普請白井平右衛門

右平右衛門儀御役相勤候節於大阪不調法有之に附大阪の町人御當地迄罷越度々訴訟に出候得共御宥免の御沙汰を以御窮命無之御役被召上候計也然る處妹江島事重き御奉公相勤候所に内々に於て其行ひ正しからざるを存罷在別て惡しき者共に馴染會合致候段重々罪過あげてかぞへがたし依て其罪を糺し死罪に行ふもの也

利島流罪但し三崎より海上二十七里

平田伊右衛門

右伊右衛門儀於櫻田御殿に御役勤來り總じて奥方御

作法不及申江島事重き御奉公仕多くの女中の上に立候者箇様に不行跡成儀乍存其分に差置候咎に依て如此に行ふ者也

御藏島流罪但し三島より海上四十七里 御奥醫師 奥山交竹院

右交竹院事江島と様々の事申合候段不届至極に附如此行ふ者也

八丈島流罪三島より海上百廿里 小普請奉行 今井六右衛門

右六右衛門儀江島と度々悪しき所へ同道致し重々不
宜事共不届之至候依之如此行ふ者也

同島流罪 越後御代官 金九四郎兵衛

右之者を同斷に行ふもの也

改易 御勘定 西忠左衛門

右忠左衛門儀去々年之夏豊島平八郎誘引に依て船遊
びの節江嶋に對面いたし總て御奉公之面々其憚ある
べき事に候所無其儀重々不届に附改易に行ふ者也

追放 御徒 杉山平四郎

右平四郎儀去々年夏豊島平八郎誘引故江島と船遊山
之節參會致傾城町にて相親しみ候由尤親類のよしみ
有之といへども不似合行跡に候然れ共其罪をなだめ
追拂に行ふ者也

死罪

水戸家人 奥山喜内

右喜内儀年來江島と相親しみ其亂行を誘ひ所々の遊
びに伴ひ或は遊女と參會致し或は芝居之役者と參會
せしめ其外種々重犯の罪科に依て死罪を以て水戸に
て可有其沙汰者也

閉門

吳服所 後藤縫殿之助

右縫殿之助儀御代々御用承り御奥方の御用をも承候
儀大切の儀に候御廣敷へ差出候手代事元より人を撰
み其制禁を立女中方御用向を承らせべき筈の所不埒
成者を指出し候段不吟味也扱吳服物の外密事承まじ
き事に候是常に嚴重に可申聞せ事也且僅に廿歳にも
不成若輩者を差出し數年御廣敷相勤させ候故彼手代
江島に親しみ船遊山芝居見物其外遊宴を催候事及數
度只今に至て縫殿之助其趣不存由申譯致候へ共難相
立吃度可被仰附候へ共御代々御用承り候者故御宥免
の御沙汰を以閉門せしむるもの也

新島流罪但し三崎より海上廿八里 新御番江島兄 豊島平八郎

右平八郎儀江島兄弟のよしみといへ共其禮儀もあら
ず江島と同道致芝居船遊山或は遊女町へ數度參會致
不行跡の致方依之遠流に行ふ者也

同島流罪

後藤縫殿之助手代

清

助

右清助儀數年江島に隨ひ船遊山芝居見物役者等へ文通の取次致候段不届の至候乍然上より仰附之儀故難去候段申譯致候と雖主人縫殿之助へ隠し置候由申上其身も不宜事と相聞へ尤若輩者とは乍申主人申附に依て御奥方御用をも承り候爲御廣敷へ差出候ものに候所公儀を不憚次第其罪不可逃事といへども罪科をなだめ永く遠流に行ふものなり

追放

後藤縫殿之助手代

治

郎兵衛

衛

右治郎兵衛事當正月十一日朋輩清助に任せ狂言芝居等の事取計ひ同十二日に江島が見物の棧敷へ罷越茶屋に於て料理申附候條不輕致方尤輕き者とは乍申主人申附奥方の御用をも承わらせ候者の儀公儀を不憚致方事輕々しく相心得若手の朋輩に諸事まかせる罪科免しがたく依て追放に行ふ者也

御免

後藤縫殿之助手代

七

兵衛

衛

右七兵衛儀正月十二日手代共申附候に依て狂言之芝居茶屋等申附候事不届に候得共上立候者申附候に依てなれば其身に取て尤に聞へ候依て牢舍御赦免其上御構無之者也

大島流罪

三崎より海上十八里

御書院番平田伊右衛門手代

平

田彦四郎

右彦四郎儀父伊右衛門御留守番相勤候者にて江島と中合此者狂言芝居度々相催父子共に茶屋芝居へ罷越江島と同座にて狂言の役者子共を相集め夜更迄及酒宴候段數度の由此罪遁れがたし父伊右衛門事死罪成べし所を其罪を宥し遠島に行れ候間同罪に行ふ者也

追放

今井六右衛門子

今

井六之助

右六之助儀父六右衛門共に江島と同道致所々惡しき遊所へ參會致候罪に依て遠流に行はれ候右子いわんや同座參會致候事罪遁れがたし依て今追放者也

同

金丸四郎兵衛普總領

金

丸又三郎

右兩人の子供父四郎兵衛重罪の者たるにより遠流に行候者の子たるに依て追放せしむる者也

親類預

白井平右衛門普總領

白

井伊織

同二男

平

七郎

右兩人は子供父平右衛門死罪に行候者の子故遁れざる所然りといへども兩人共に幼少なる者故十五歳迄親類へ御預け也

遠慮

豐島平八郎實子

足

田吉十郎

右之者實父平八郎儀其姉江島事に附罪科に行れ候と雖吉十郎儀は他家へ養子に參り罷在其上實父并に江島杯へも諫言申たる儀も有之由しん妙の至に候依て實父并に平右衛門江島等近頃犯罪の者子供甥なりといへども其類をげんせられ兎角御沙汰に不及例式の遠慮仕罷在べき者也

大島流罪三崎より海上十八里

狂言座長太夫

右長太夫儀狂言芝居の座本をも仕候上は役者の事に於て常に其差引をも可致候事にて總て見物之若人棧敷茶屋等へ狂言の役者子供等呼寄候共女中若きに至ては一切差出申まじく候事に候所然るに正月十二日江島を初其外女中の見物に相集り棧敷へ其身も罷出外の役者子供みだりに差出し其上自分の居室へ伴ひ江島と參會の座へ酒の相手に罷越罪科重かるべし依て流罪に行ふ者也

三宅島流罪三崎より海上四十二里

長太夫抱役者

五郎

右新五郎儀先年御城女中の事に付世上に沙汰し候事も有之候得共たしなむづき所に九平已來度々江島と參會致其身の娘を御城内へ遣し置候段是江島が悪事と申上をも不恐致方罪科遁がたし仍て遠流に行ふ

者也

神津島流罪三崎より海上三十六里

竹之丞座狂言作者

清五郎

右清五郎義牢内にて相煩候故快氣次第可申附者也

追放

竹之丞座抱役者

半四郎

右半四郎儀江島と狂言見物之度々茶屋において酒の相手に成り夜更迄參會致候段難通科に依て令追放者也

右之通三月十三日評定所にて大目附仙石丹波守被申渡町奉行坪内能登守平目附丸茂五郎兵衛稻生治郎右衛門右之衆中如此なる御書附を以て被仰渡候へば江島申候は是程の事に罷成候は仕様も御座候者をと不足そうに申て立けり扱此日は白井平右衛門計死罪に行れ残りは島船出來迄牢舎致罷在候右の趣月光院様被聞召習日に秋元但馬守を被召江島事は久々相勤候者の事故何卒何方へ成共預候様にと御意被遊候へば一圓御請不仕上意には候得共此度之御仕置私一人申附候儀にては無御座候何れも同役共へ相談仕申附候尤上様御幼少に被爲入候間何事も宥免を加へ重きを輕き御仕置に仕候と奉存候只今に至り何と思召れ候共一度評定所において諸役人の面々決論仕候上は

相改御仕置を直し候儀は家康公御法度を相背と申筋に罷成候へば難仕由御返答申上御次へ下り候へば安藤志摩守罷出但馬頭へ申候は三位様御頼み候間御相談被成候様又々申候故但馬守申候は評定所捌相濟候儀殊更御政道の御さわり相成難と被存候へ共三位様左程に被爲思召候は先々同役と相談仕り可申と申て則同役共に相談致候へば阿部豊後守申候は三位様夫程に思召御頼被成候は苦しかるまじきとの相談にて則豊後守御受申上て御差圖を以内藤駿河守へ御預被成候て三月六日に被遣同十七日に駿河守在所へ遣しける此時被仰渡候は向後本綿著物斗絹類一切無用に候朝夕一菜にて差置可申候下女一人附置家より外へ一切出し申まじき旨被仰度候

抑此江島と申者元來三河之國の荊谷といふ所の出生にて輕き民の子にて幼少の時關東へ賣られ女街の手より吉原へ遊女に賣られ候者にて親類連は無之者なりしか然るに白井平右衛門ふと吉原傾城町へ行候節此江島に馴染ふかく相成り馴染重りて平右衛門此女を受出しかくまひ置しが或時江島申けるは是迄度々御の恩程有がたく奉存候然しかやうに御屋形に居

候ては奥様の思召も如何に御座候間何方へ成と奉公に御出し被下候へと申ければ平右衛門も尤に思ひ夫より聞合せ紀伊中納言殿御簾中鶴姫君御逝去故江島も浪人いたし其後櫻田甲府様へ御奉公に差出候所其後甲府様御本丸へ有入御依之三の丸様の供仕候故月光院様附と成る右之通の拵もの故平右衛門死罪と被仰附候無筋者を公儀を偽り差出し候事有まじき事也一水戸殿家中奥山喜内は新五郎女房と一腹一生の兄弟也元喜内が妹にて有者が新五郎女房と成しは喜内妹さる御屋敷方に奥方に奉公致候所此新五郎に心をかけて度々文杯遣候事顯れ其屋敷より暇出けるを兄交竹院喜内共勘當致ける故夫より行方不知に有しが彼女新五郎方へ駆込候へば其節新五郎本妻相果無妻にて有し故幸にして夫婦に成り娘一人出生しけり扱中村清五郎は三味線を引踊淨瑠璃語候故所々の屋敷方へ集り候故喜内方へも參候或時新五郎方へ行女房と咄合し故扱はよき手懸りと清五郎を頼み右喜内に芝居を振舞何となく茶屋へ寄酒などもてなし候上にて新五郎罷出清五郎取持にて喜内に近附になり盃事杯致し扱旦那様へ何卒御

めにかへ度女中御座候由を申ける故興に出し候事
と思ひ何者か見申さんと云ければ首尾よしと襖を
開き候へば色悪き女の病人取亂したる體にて兩方

より手をととり座敷へ出しける喜内あきれ是は何事
ぞと云ければ新五郎清五郎兩の手をつき此仁はお
見知り被遊候方と云れ喜内扱はと思ひがけなき事
能々見れば妹也年經て逢ふのみならず取亂したる
有さま殊に存よらぬ所故見違たる是はいかにもと
云ければお竹泪を流し漸々に云様はお恥しうは候
得共私去年の夏より久々相煩ひ勞咳と申候へば迎
も命は御座候まじ何卒命の内に御勘當御免の願を
申上是を未來の土産に致度候故是なる清五郎を吳
々頼み今日御振舞に事寄かやうに致し先御對面申
上生々世々難有しと泪に暮て願けり兩人諸共達て
願ければ喜内もさすがに兄弟の事なればあはれと
思ひ成程尤に候是は誰が妻と成居たるぞや但し奉
公人かと尋ければしんしやく乍お竹泣々御勘當後
新五郎妻と成居候と云ければ喜内もあきれはて胸
せまり酒一つうけ吞ながら即時勘當をゆるされ盃
してけりお竹大きに悦びどうぞ交竹院様へも御頼

下されといひければ喜内交竹院へもかくと云けれ
ば兄弟のよしみなればなつかしき故勘當をゆるし
對面してそれよりわりなく成にけり

一 松平薩摩守家來谷口新平事に附但馬守より薩摩守
留守居をよび其元家來に谷口新平と云者ありやと
尋候所留守居申候よふは家來の内委細覺不申候故
罷歸り相尋候て御返答可申上候とて立歸り尋候へ
ば馬目附に有けるよし申上たり御上よりは何の御
沙汰もなかりしが薩摩守方にては芝居見物など法
度にて忍び參りしとがめも有けるよし又公邊より
御尋の有様なる事仕出たりとて切腹を云附けると
も云

一 梅屋善六島へ參り候て早々被召歸候様子江戸中に
五六軒も有かなきかといふ程の分限にて有しも關
所の節僅に小袖二つ三つ金二兩ならでは上らず出
店は米商賣にて有けるが米一俵もなし依之御吟味
有けれ共一切知れ不申候故善六召歸され此詮議被
成候爲と相聞へけり是は其節關所に參り候與力同
心へ大分のまいないを取濟し置候よし
一 長太夫養父淨閑事町奉行丹波遠江守へ出入にて御

懇意に被成下候得共遠江守御役上り候故訴訟も不叶追拂に成けり發心して京橋五丁目中田屋と云湯見世も仕廻ひ自分は麻布へ引込けり

一當午の四月朔日より堺町葺屋町木挽町森田座芝居狂言御赦免被遊候て初けり其節被仰候趣は向後三階の棧敷御法度籠を下げ候事堅無用尤役者其衣裳は本綿絹紬迄可致著用候旨被仰渡候

一四月四日島船出るとて方々へもつこふに乗せ連歩行扱々大きな群集にて有けり汐留より乗るも靈巖島より乗るもあれば永代橋大橋迄兩國橋より乗るもありその一類來て暇乞する有様此頃迄の全盛と引替りめも當られず哀也今年三月二十日江戸中宮芝居御潰し被成候此度新五郎彼島より書狀市川團十郎方へ參候處此節大分鏝とれ候へどもからしなき處故何卒からしを送り下されかしと申越奥に

釣鯉からしもなくて泪かな

新五郎

釣鯉さくも泪の辛子かな

團十郎

西澤文庫綺語文章上の卷

目次

- 一 有馬温泉の記
- 一 暮秋北山巡り

西澤綺語文庫上の巻

西澤綺語堂李叟著

有馬温泉の記

攝津國有馬郡有馬山の温泉は天下に勝れたる名湯にして貝原益軒が著せし温泉名所記一卷河合章堯が記せし湯山道記拾遺一卷秋里離島が名所圖會等を見て予兼て痼癢に苦しみ腰痛の疾有れば温泉に入湯の望有て此秋試んため彼地に遊び湯本町二の湯に向ふ兵衛の客舎に宿り温泉の間の徒然に例の戲筆を採て當時の有様を著す事しかり抑々此温泉の起原は釋日本紀に島大臣始めて此鹽湯を見ると有て舒明帝人皇三十七代も爰に行幸し給ふ其行度御幸まじし孝德帝人皇三十七代も爰に行幸し給ふ其行宮の古跡は今杉谷に有聖武帝人皇四十五代の御時僧正行基毘陽の池より病者を脊に負て此温泉に入らしむ病者は温泉山の藥師佛也行基感歎止ずして如法經を書寫

し一字を建る今の藥師堂是也人皇七十三代堀河院の御宇洪水山を崩し温泉絶たりし九十五年の後大和國高原寺の仁世上人熊野權現の告に就て舊跡を闢き湯源を浚ひて寺院及び十二坊を營みて守湯の人を置きける後鳥羽院人皇八十五年建久二年の事也此後享祿元年又天正四年再び饑攸の災に堂舎民屋皆烏有となりしを同十三年羽柴秀吉公の北政所寺院を鼎建し封田を納るる今巍然たる者はなりと林道春温泉記を略出せり則京師より十四里大阪より九里兵庫へ七里夫木集に俊成卿の詠

有馬山雲間も見へぬ五月雨に

出湯の末も水まさりけり

湯山の町十七町是有馬山天神山落葉山の三山に圍みて谷底に有依て摺鉢の底の如く東方京大阪よりの往還山口より坂道を下りて湯本に至る四方に山有がゆへに多く岨道に家居を建かけ三階造りの坊舎多く表より見る時は二階造りにて坂を下りて裏手に廻れば三階作りにして商家は土藏造り多し湯入の客を泊る家二十坊と云は湯女の附たる宿の名也當山藥師佛の十二神將を表して始は十二坊也仁世上人吉野より伴

ひ給ふ舊坊の家也後世温泉繁昌して八坊を加へて二十坊となれりされば坊の名なきは若狭屋、大黒屋、河野屋など也又二十坊にあらねど坊の名あるも有二の湯二十坊に各二婢有一人を大湯女と云總名に蔭々と呼び小湯女は十三四歳より十八九歳迄の女鐵漿をつけ前帶にして朝より八つ時迄を小湯女其後は蔭々湯女浴湯の時刻を客にしらせ浴衣を持て案内し衣類下駄を預り番をして侍女の如くす小湯女の名古今不變にして人は替れども名は替らず是を湯女の通り名とす

一の湯坊名并に小湯女の名

奥の坊なつ	伊勢屋	御所の坊まき
尼崎坊ゆり	福宜屋	角の坊つた
二階の坊くり	大門	若狭屋いち
中の坊つれ		
二の湯坊名并に小湯女の名		
池の坊まつ	川崎	休所たけ
河野屋みつ	兵衛	大黒屋たけ
水船つじ	下大坊	素麴屋ふじ
茅の坊さき		

此餘に八十餘軒の小宿有て旅客を止る所謂商人宿にて旅用乏しき病人などを泊る家也二十坊はもとより小宿にも數箇年の取引得意あれば其名前の絶る時には客先の仕にせを賣買すると見へて二十坊の内にも二三軒は廢したる有て既に奥の坊、伊勢屋、宇尾屋と三名を兼ね兵衛、休所、杓子屋と三名を兼たり此餘小宿にも大かた一軒に家名二つ宛を兼たり予が泊る兵衛の二階より二の湯の表のかゝりを見て凡を寫して爰に出し町の總圖は奥に委しくしるすもの也

(圖一葉略之………編者)

一二の湯の眞圖

間口三間奥行一間半の湯殿雙方に有檜皮屋根宮作り
に構へ觀音開きの戸より内湯槽幅の廣さ一丈二尺五寸奥行二丈一尺此眞中に隔あり一の湯、二の湯尻合せに有り觀音開きの戸は寒氣の頃は此戸をたてる外の燈籠は篋り也入口の内の金燈籠には温泉寺より夜々灯す湯槽の隅に棚有りて是にも薄暮より灯す正面の上に神棚有一六に一の湯は御所の坊二の湯は兵衛より燈明を獻す一廻りめ〴〵に温泉寺より油料を滞留客に集む湯殿より湯槽の口に定書の條目を書き額

にうてり湯の内にて高聲の音曲を諷ふを禁じ幕湯銀一枚、合幕三匁五分、入込二匁宛但し廻りに附ての直也朝々の湯殿揚り場の掃除は坊々番に順有てつとむ幕湯は其坊より好みの染暖簾を湯の入口に釣て他の人を止む合幕は二組三組しり合とし入りて雜客を止むる也是にも合幕と藍に白上にしたる暖簾をかくる此餘狹嫌ひ、追込等の名あり一夜客は坊々より旅籠にて泊れど湯治客は二階三階の座敷にて茶の物は手づから煮て飯は坊の女米をはかり二階三階に竈走りもと有りて焚もて來る仕送り物には通ひをもつて買ひ誠に自由にて事足れり一間かり切の湯治客には一廻り毎に間錢とて四十二文の錢をとれり入湯の法は攝津名所に籬島子が狂歌あり

足はさきかしらは跡にかゝるへし

たゝるは長湯空腹のとき

亦有馬の禁忌をしらせる籬島子の狂歌名所圖會に出たり

重藤の弓も葦毛としら羽の矢

女の神の嫌ふ武の具

一條院人皇十六代の御時長徳三年彌生の頃和泉式部播磨

書寫山に詣て其歸るさ此湯本來り樂師の尊前に参りて祈念しけるに俄に月の障りありければ是を悲しみて

もとよりも塵にまはる我なれば

月のさはりとなるを悲しき

かく詠し給へは御帳の内より麗しき御聲ありて

もとよりも塵のうき身の娑婆なれば

月の障りも何かくるしき

と本尊御返歌有りて不淨をゆるさせ給ふとなん湯槽の底は一面の鋪石にして其間々に竹の筒を挟みしと思はる石の間より沸泉す味鹹して潮水の如く色は辰砂の氣を帶たると見へ黃色にして水放れせし暖湯の如し浴客多き時は温泉よく清み浴客少なき時は濁ると云雨の前後は湯暖にして快晴つゞけば冷也とも云入湯養生のあらまはしは二十坊の門口にしるし有りて委しくは貝原翁が有馬温泉記に見へたれば爰に略す手拭湯具を湯に染てよく染る事紅木綿の下染の好し扱一の湯の用水は鼓が瀧より竈を以て南の方市中の水溜に取り二の湯の用水は天神山より竈を以て北の方市中へ取り家々より出て是を汲用水とす所謂江

戸神田上水玉川の水を市中にひくが如し妬湯うはなりゆ又明目めいもく湯は浴室にあらず湯本の東の町に有りて石の井筒の中に少しの滴り出るを云妬湯うはなりゆとは女子盛粧して此側に立てば忽怒沸おこりすといへ共名のみにて怒沸おこりする體今は見へず明目湯は俗に目洗湯と云ひて今に存せり

温泉の神社を祭るは有馬山と云て武庫山の裏手に當りて酉戌の方にむかへり一名を湯の山又名鹽原山、弓場山、巧地山、湯船谷、卯木谷、大場山、蜂尾山、登尾山とも云數名有天神山、落葉山は是に對して鼎足の如く峙てり温泉の神社祭神三社、中央熊野權現、左三輪明神、右鹿舌明神にして祭禮は六月三日九月三日兩度也愛宕の祠は山上に有りて天満宮は天神山に有京師北野より三十三年後に建しと云然らば圓融院人皇十六代の御宇にていと古き勸請也寺は温泉寺眞言新義報恩寺眞言新義念佛寺淨土宗清涼院禪宗黃檗溫極樂寺淨土宗蘭若院眞言新義阿彌陀坊禪宗曹洞善福寺曹洞林溪寺淨土眞言宗東本願寺派御堂とも云施藥院曹洞宗一寺三院一寺三院とは蘭若院、施藥院、菩提院とて此三院より入浴の貧民を扶助せし也菩提院は絶て今はなく跡を菩提町と云菩提院を今は清涼院に預かる一の

湯内外うちとの燈明は施藥院より掲げ二の湯内外うちとの燈明は報恩寺より掲る也名所は鼓が瀧湯山の奥八丁許に南に有昔は山間に衍して鼓を打の音有りしも中比洪水に山崩れて名のみ遺せり赤松則祐の狂歌に音にきく鼓か瀧を來て見れは

上には千々とたんはゝの花

有明櫻は瀧の前にあり地神嶽、蜘蛛瀧、白石が瀧何れも鼓が瀧の奥に有鳥の地獄は僅二尺四方計りの井筒のみ有りて中に水なし地獄谷の名のみ遺せり松風庵の古跡とて昔風流人の隠棲ならん名義解らず新清水とて料理屋有落葉山は善福寺の後の山也一名投木山、童子山又城山とも云有馬の町を一瞬じゆんの内に見下し茸狩などに遊ぶ場所也有馬川袂石、圓仁阿闍梨の塔、杉谷の行宮北政所、旅館の古跡、安藤亭林溪寺中有馬の富塚の清水清盛の塔、豐太閣願温泉の跡等也有馬の富士は愛宕山より北を遙に見れば尼寺村の角山駿州の富士峰の如く見ゆ良うしろの方に京師愛宕山鮮に見へて風景斜ならず入湯のひまには爰等見廻り歸りては酒肴菜の物を料理するに諸魚は兵庫西の宮より運び野菜は近郷より荷ひ持ちて賣歩行事喧し或は賃本をよみ

碁、將碁、淨瑠璃、三味線、琴、鳴物の類ひは料を定め
て貸す楊弓屋有馬屋有徒然を慰め有馬名物を一間

左京少進大中臣朝臣典貞、跋渾成精舍松岡雄淵等
也

／＼に運びて商ふ者を相手とし酒席には蔭々湯女、

鼓瀧の松風 近衛攝政太政大臣内前公

小湯女を集めて有馬節を聞く惜らくは古雅なるを

山まつのあらしになをもひ／＼かな

失して當世のはやり歌のみにて雅ならず名産は竹細

鼓か瀧の水のしらへに

工の箱類籠細工筆は小兒の弄びにして管の中より

有明櫻春望 九條内大臣道前公

人形出入の機關有鹿の卷筆とて糸卷の筆いと麗はし

千枝二月曙雲開 無限東風覆郁來

湯の花とは湯の香にて花山椒の煮つめたる有越天樂

爲是溫泉洵美地 春花偏壓異鄉催

とは武庫山に生たる路を煮たる也萬葉に人丸の詠有

巧地山秋月 飛鳥井大納言雅重卿

りて菅笠を名産とせしも今は廢りて見へず當所の繪

鹿の音もふけ行夜半の山の端に

圖、有馬楊枝は溫泉にひたして用ふれば齒を固ると

すみのほる月の影のさやけさ

ぞ餘は筆職鍛冶工のみ多く栖て此山に出来る幸茸を

落葉山夕照 四辻大納言公亭卿

採りて干す者多し干加減によつて價に高下有とぞ予

落葉之山名故奇 斜陽風景更堪思

が此地に遊ぶは九月中旬なれば松茸の盛りにて安き

懸知勝地常多賞 最在丹楓滿陰時

重疊の價三百目一斤四十文位也一貫目にて百三四十

溫泉寺晚鐘 閑院太宰帥典仁親王

文也柿栗最多く價も浪華より半直段也中にも松茸は

いく星の暮おとろかす聲ならん

唐土より來るを上品とし是を賞翫す溫泉寺の什寶に

此山寺のいりあひの鐘

有馬六景の詩歌の色紙有

有馬富士雪 九條左大臣尙實公

出題飛鳥井大納言雅重卿、畫圓滿院御門跡祐常大僧

東海芙蓉元等名 三峰千歲雪華清

正、外題隨意院准三后公道法親王、筆序從六位下

何疑常洛溫泉者 好於南山北壽榮

以上六景の詩歌は皆自ら御染筆し給ひけると聞へし
又兵衛の軸物に此六景を題として洛東澄月の和歌六
首有

鼓瀧の松風

岩ねうつをとはつゝみか瀧つなみ

松の嵐もしらへ合せて

有明櫻春望

月ならてあり明の名に櫻花

にはひこほるゝ春の朝露

巧地山秋月

詠めては水なき空の月にくむ

千さとの秋のみねにさやけき

落葉山夕照

幾千しほ見しも今はと落葉山

もみちにおしき秋の日の影

温泉寺晚鐘

生藥いくぐりもるたま水の音くれて

山寺ふかく鐘ひゝくなり

有馬富士雪

時しらぬ雪とはなしに高くつむ

山は爰にも有馬ふしのね

是を追ふて予も秋季六題に俳諧の發句をつらぬ

鼓瀧之秋夕 秋のよそつゝみか瀑布はどう暮るゝ

有明櫻紅葉 紅葉した樹も有明のさくらかな

巧地山秋月 曇らすは障りはあらし後の月

落葉山茸狩 茸狩や湯女も誘はゝ落葉やま

温泉寺晚鐘 鐘つきの又泣せるか秋の暮

有馬富士粧 粧へは殊更句なし有馬富士

林溪寺中に安膝亭と云有坊中休所の別莊にて當時は

子が宿兵衛の持也黄藥高泉和尚、安膝亭に題す十二

景あり温泉寺鐘藥師三神靈廟三輪鹿舌愛宕松濤愛宕蜂尾

歸樵山の三笠時雨山の林溪楓葉熊野燈現落葉暮雪社前名、蘭朶

尾山の名、杉谷古宮孝德帝洗塵納涼亭前車谷行客旅客萬

年巖花臺前の岩右六景に同じく發句もくだゝしけれ

は略す天神山天満宮に並びて建る蘭君院、阿彌陀坊

の假山泉水は千野利休築しと云其製巧ならずといへ

共物ふりて今めかしからず利休石とて二つ外に沓石

とて沓の形したる石有世に阿彌陀堂釜と云は此寺の

什物にして今は善福寺の末寺となり先年浪華下寺町

遊行寺へ有馬善福寺の出開帳有りて本尊阿彌陀佛は

(圖一葉略之……(編者))

長一尺五寸東天竺毘舍離國月蓋長者閻浮檀金を以て鑄奉る靈像として信州善光寺の如來と同一體也と云其時阿彌陀堂の釜を拜みたり豐太閤當蘭若院に遊び給ふ時住職澄西和尚の形容異體にして頭大きく猪頭也

利休に命じ蘆屋の鑄物師を召て澄西和尚が首の形に釜を鑄さしめ給ふ利休銘じて猪首釜と稱し又阿彌陀堂とも銘す今世にあみだ堂と銘する釜は當院の釜を模範とするところぞ

猪首釜みくびがまによく似た形なりや魁芋かしらいも

院本の虎溪の三笑ならねど此兵衛の妻の名をお梅とも呼ねど或日毬栗の笑める如く小陽女下女を相手とし笑ひ聲しつゝ擣衣の音聞へければ芭蕉が吉野の句を思ひ合せて

礎打てきかせ有馬の坊の妻

兵衛が別名を杓子屋ときけば季鷹の狂歌に倣ひて

杓子屋を作者とつめて兵衛をば

九左衛門とも祝ひ延べや

一日愛宕山に登りて逍遙の上例の狂句を吐く

時は湯女姊かしらす幕湯かな

是は愛宕で秋季詠だか

有馬湯本東西の入口に日本第一神靈泉と大清江苔客の大字彫たる標石を建裏に梅子丸雛丸の狂歌を彫りたり

三國にまひとつとなき湯の本に

不二のけしきも見る有馬山

山の名に馬はあれとも湯の驗

いさりも立て歩行てそ去ぬ

予は十三夜の月を此山にて見ん物と樂しみて甲斐なく夜終雨ふりて望を失ひ後拾遺集大貳三位が詠にこちつく

有馬山後の月見に雨ふりて

茹さや豆を忘れやはする

袂石は有馬川の東岸にありて近比の水に荒れて道甚あし、繪圖名所圖會等には礪石と有て名義詳ならず此地の神輿を爰にもち行くといへば御旅所なるべし細き石階を登つて遙上に只ひとつの石有此邊の流れに竹を漬て細工に遣ふと見へたり

鹿垣やつらりと結ふてたもと石

摺鉢の底の如く窪き土地にて柿は所の名産なれば

窪柿や有馬に御所と愛宕やま

鳥地獄 名のみにて鶉も居るぞ地獄谷

落葉山 毬栗と紅葉に埋めよ落葉やま

春風や湯女の笹原わけて寝んと許六の句に先をこさ
れて兵衛が小湯女の名に思ひ合せて

荷にならぬおみやにめされ花山椒

茸狩におみやすれよ湯草臥

巻筆も夜邊の職や鹿の聲

茸狩や是等を秋の山笑ふ

六日の菖蒲十日の菊は事をくれたることに云俳諧に
は後の菊とて十日を云也予は十一日に出て生瀬有馬
屋に泊り十二日に温泉を浴るは今煩らへる病人には
あらず

後に菊爲とて浴る温泉かな

生瀬より有馬へは只二里の道とはいへど四十八が瀬
の内は小石多く飛越へる川原の水に増減有りてはか
どりがたし

心してゆきやれ有馬は栗の道

猿石を過て飛こす河原道

三田から又四里あろかいな

したなりにつる捨られし女こそ

湯にも妬むなるべし

酒腹やいなにはあらぬ温泉松茸

紅葉見や用意かしこき傘二本とは夜半翁の句にして
唯細きを専とし嵩張らぬ好みを紅葉傘とは云也花見
小袖とて櫻紅葉見の時暮にかへて櫻樹に懸たるも昔
の風流にして紅葉傘も山手には時雨すればそれをふ
せがん用意の風流にして今は男の指傘は濫蛇の目女
の指用紺と白にて張交たるを紅葉傘と唱へる事也予
は又今時指用の傘を案じて蕪村翁が句兄弟ともいは
んか

紅葉見や日和に傘の持重り

湯船から出たり入たり有馬筆

其徒然に書る道の記

入湯の禁好養生を記して湯文と云て報恩寺より出す
湯治するには先温泉の姓を撰み機能を考へ入湯の法
をよく守るべし入湯の内の行跡は平生の如くなるべ
し但不養生の人の例を云にあらす尋常の如くすべし
湯治の間晝寝すべからず湯上りに寝れば汗走りてあ
しきゆへ也湯治の間酒を呑むべからず暖めて少しの

むは苦しからず湯に入りさま湯より上りて直にのむべからず濡れたる浴衣はやがて脱ぎかゆべし又湯より上りあつきとて風に當り身をさますことあし、湯治の間肉食すべからず養生の人は苦しからず常のごとく用ゆべし多く食すべからず飽食すべからず又食物にても藥にても熱性のもの用ゆべからず寒涼の物あし、強き堅き物も宜しからず湯治の内灸治すべからず上りて後もすべからずしばらく休みて後灸治するはいよくよろし湯上りの日雨風烈しきときは然るべからずいかにも快晴の日を待て出立すべしと有別に攝津國有馬山勝景圖とて折本一小冊有攝陽江東書者後素軒橋守國書き書肆大阪北久太郎町心齋橋丹波屋治兵衛板是に書きたる事大約同じければ略す寶曆十庚辰正月と記しあれば今年迄九十一箇年になれば昔なつかしく扣へ置く河合章堯の著せる有馬廻りの拾遺は正徳六歲孟春茨城多左衛門板と記しあれば是又今年迄百三十五年の昔なれば殊に愛すべし此書は具原の温泉記にもれし事を出す其中によき説を爰に拾ふは國々所々に温泉有りて病により効有といへども熱くしてそゝろに堪へがたく又冷湯にして嚴寒

には浴し難きも有唯有馬の湯のみ冷熱人の好に應ずるが如し尤寒暑晝夜にすこしの違ひめ有りといへども扨にてそゝろにあつく覺ゆるをつとめて入る時は湯和にして水を加ふるに及ばすおのづから中を得るが如し又すこしぬるき時も湯中に湛れば温泉底より昇て腹中にあたゝまり浴後に汗を催す第一に氣を廻らし食をすゝめて奇妙の温泉也有馬に予が相しれる老醫有りて語りしは凡此湯は諸病共によろし唯死病の一症のみよろしからず若しるて浴する時は氣血の不順温泉の巡環に戻るが故に死朝近くなると云故に脾胃虛、勞咳、膈噎、老衰等の病に害ある事宜也往古仁世上人吉野より伴ひ給ふ十二坊と云も西の坊、北の坊のごときは絶たるゆへ今は十二坊の名慥にしる人なし二十坊の小湯女の名は古來より替らず唯下坊のなべ計り近年鍋の字を憚り奉りてしげと改めし也總じて有馬の事は温泉小鑑と云書に委故是に略すと有百三十五年前にさへ十二坊の興廢有りて湯女の名を改むなどしるは實に書籍の德なるべし奥の坊にて賣る有馬山の繪圖を次に出して歸路の道行と宿坊兵衛より土産に送れる有馬温泉功能略記を其儘に綴

て跋にかへたり

(有馬山繪圖一葉略之……編者)

往還りとも同じ道なれば略して歸路のみをしるす湯本より宿の主送りて東の山口迄來る此道の右手に標石有りて右へ行けば六甲越とて青木村に出る御影の東、西の宮の西也大阪迄歸るには一里の餘も近しと云へど登り坂下り坂有りて難所なるよし山口の河原

にて宿の主に別れ少し登り坂に江芸客の碑有少し東に瑞寶寺禪宗黃檗派有瘤坂とは瘤眼中に罹て愁ふる人温泉に浴し歸路に爰にて瘤落ちて癒たるゆへに呼とぞ

船坂有馬一里仁世上人湯舟を爰にて造らせるより村名によぶよし是より生瀬なまに至る迄船より四十八が瀬の難路也屏風が岩翫山、座頭谷を詠めて猿首岩は岩形

猿の頭に似て眼耳鼻口を備へたり生瀬川の橋を渡り米谷村より左手の山に清澄寺一名清の荒神古義遙に見ゆ京師吉田口の荒神も爰より遷せしゆへ清し荒神

と云とぞ此山の東に中山寺奥の院迄鮮に見ゆやがて小濱の驛に至る生瀬より二里明應の頃奥村越後正信、毫攝津寺善秀房等此地を伐平げて此驛に子孫今に有と云

毘陽野池を詠めて毘陽寺に出づる此邊こや野、こや

の浦、毘陽の入江、こやの池、毘陽の丘、古詠尤多し猪名の小笹はこや寺の東田圃に有りて毘陽寺の開山行基の像開扉正月の用具とす御願塚は行基の古跡高師直の塚を遙に詠久々知妙見は廣濟寺に有是に詣て遊女宮城の墓又の名傾城塚女郎塚、と云て田圃の中にあるを詠め神崎にて中飯して渡しを渡り加島權の頭と云稻荷は外より拜み程なく十三の渡しをわたり三番北野を過ぎて浪華橋を越へ八つ半頃我家には歸りぬ行がけは出立の時刻遅くよふやく七里の生瀬に宿りしが歸路は朝七つより眼さまし引明比に宿を立しゆへ勝手覺へし道といひ歸路ほど道のはかどるはなし年久しく此温泉に遊ばんと思ひ立たる望足りて温泉も相應せしか氣分甚よく滯留徒然の道の記を淨書してとくくの清水町綺語堂に筆を納む

維時嘉永三戌年九月の末西澤一鳳軒李叟誌

此の次に「有馬温泉功能略記」及び「有馬ぶし」と題する有馬名所小唄の刷物を附しあれどもこれを略す……校訂者

暮秋北山巡り

行秋のけしきを見ん物と長月末の七日の夙に起出

豫^{かん}て時雨に濡るゝ用意をしてまづ北野濱村を過つゝ
本庄の渡しを越す比はや初時雨催すは餘り早き時候
などと打笑ひ三國^{みくに}の渡しを越えて服部の天神に詣て
箕面道岡山にかゝる

服部にて

七尺の草鞋作れやむら尾花

李 叟

熊野田^{くまのた} 笋のくまじ大根
名産 棕橋^{くまのた} 名産 櫻井谷を東手に詠め島熊山を經て

千里川を越ゆる

棕橋の莊より大根をもらひて

龜菊が妹又よし大根引

舊 國

六車川とも箕輪川とも云水源は萱野谷より出て末は
猪名川に入る千里山又の名寢山^{いさやま}とも云島下豊島の二
郡に續き西に待兼山、玉坂山、島熊山等山脉三里に及
び其廣大なるを以て千里山と云よし待兼山と玉坂山
の間に待兼川と云有昔玉坂の里に美しき女有近き里
の男戀慕ひ夜毎に山を越えて通ひわりなき中となり
人目も恥ず通ひければ世の人の嘲りとなり二人とも
うらめしく思ひ麓の川へ身を投げ空しくなり川の名
に昔を遺す夫木集に俊頼朝臣の詠
夜もすからたまりて積る涙かな

こや待兼の山川の水

待兼山^{たかき}適逢山^{たかき}とも池田街道石橋の東の山也新古今

に周防内侍の詠又新後拾遺に藤原の顯綱の歌

夜をかさむまち兼山の子規

雲井のよそに一聲そきく

明るまで待兼山のはとゝきす

けふもきかてや暮んとすらん

有 夫木集に俊頼の詠玉坂山に顯昭の詠は六百番歌合に

夜もすからまちなね山に啼く鹿は

おほろけにやは聲を立つらん

かたらひし我戀つまや郭公

たまさか山に聲のほのめく

行秋をまち兼山のしくれかな

東畑村に安倍の晴明の墓萱野谷芝村に三平重次の墓

有是までの道を猪名の笠原とて古詠名所也元永歌合

に法性寺入道前關白太政大臣の詠に

あやしくも時雨にかへす袂かな

猪名の笠原さして行とも

けふの雨に山中の樹々の紅葉して詠め得もいへずさ

して行くゝ法性寺の笠原の詠に詞なくやがて箕面山
瀧安寺に詣る天台修驗道聖護院に屬して山内所々に
御獻上の松茸山へ猥に入るべからずの制札を建たり
登り口聖天宮を拜み門前の宿屋に休みて中食をし酒
の機嫌に觀音堂辨財天をふし拜み瀧道を行く十八丁
の内紅葉のけしき得もいはれず色に光明朱、生臘脂
丹色有黃色有青き葉に厚薄有けふの雨に其色しみつ
く如く實に紅葉はまだきに詠るをよしとす時をくる
ゝ時には嵐に散り失せ道のみ埋て錦を踏かとあやぶ
まんより初紅葉の梢色どるはいかなる名畫も及ぶべ
からず瀧は又雨に水増して巖頭より珠を散すが如し
夫木に津守國助の詠

わすれては雨かと思ふ瀧の音に

みのおの山の名をやからまし

不動の籠堂に腰打かけ摺火打に烟草くゆらせ

瀧津瀬に箕面景いよだつ紅葉かな

是より瀧越に登つて唐人の辰巖など踏わけ天上が嶽
は絶頂を云奥の飛泉、座禪石、錫杖石、白龍石は奥の
瀧の傍に有行々て勝尾寺への別れ道は右手に有り左
り道を行きていと長き山道雨中にて木樵にも逢ふ高

山村は高山右近長房の領地なりしとかや牛房の名物
にてよふやく人家はあれども食物賣る家とはなく
兼て用意の握飯を食ひ暫し息を繼げり爰より西は止
々呂美とて多田の裔孫馬場信高の古城の跡有鷹岡山
一名龍王寺山とも云毎年七月二十四日愛宕火とて此
山上にて火を灯すよし土人に聞けり木代切畑の開發
人貝川三位長乘卿の塔は木代村に有爰も牛蒡の名物
にて木代牛蒡名高し

木代にて淋しさを

行秋を引ぬかれたる牛蒡かな 李 叟

切畑村に走落の神社影引の松など有木代切畑の雨村
より毎年十月亥の日毎に玄猪の餅とて赤小豆と餅を
搗合せ禁裏へ調貢し奉る御嚴重の餅とも能勢餅とも
云へり源氏葵の卷にねのこの餅は三つがひとつにて
もあらんかしとありて揚名の介三つがひとつとのゐも
のゝ袋は源氏に三箇の祕訣也ねのこと云しはいのこ
といふ二字を祝言の始に嫌ひていへるなるべし今年
は十月五月初亥の日なれば三箇度有五日には木代五
戸より貢し十七日切畑四戸より二十九日切畑四戸よ
り貢すとなんことしは米穀の高ければ例の狂句に

御玄猪の餅も米の高ければ

貢も三つかひとつなるへし

餘野村に餘野山城守の城跡有餘野の神祠隱里の井一名幣（てまり）の木（き）の井（い）とも云有雨（あめ）ますく降りて風さへ烈しく遊仙寺とやらの入相を聞き乍ら辛ふじて挑灯の明りを消さじ山道に迂るまじと氣づかひながら能勢山妙見宮に詣て山の宿に泊る故能勢の藏人妙見城の守護神にて摩利支天也と云近年應驗あらた也とて遠近の詣人法華の題目を唱へ夜更る迄いと賑はしく風雨の音甚しく目もあはず一夜を明し翌朝又夙に立てもとの餘野の方へ下る以前の吐すてし句に

皿駕籠に能勢の山路や柿紅葉

など思ひ出ながら忍頂寺の西に隣る國見山に出るもと此度（このたび）の能勢参りは直に龜山より京師に上り嵯峨嵐山より高雄へゆかん心がまへも雨風に恐れて一まづ歸り晴を待て上京せんと吹田へさして足をむくる國見山誠に長き山坂にて谷を隔て西に大門寺見ゆ舊名を青龍寺（せいりゆうじ）眞文祿四年七月三日當寺に於て木村常陸助（きむらつたけすけ）關白秀次の忠臣也父自殺せし事は先年奥州仙臺の俳人言外餘情堂曰人俗姓中臣（あひだ）伊豆之助が先祖なれば尋ねたしと有し

ゆへ名所記或は繪圖等にて見出せしが其儘にて行ず過ぎたりしも計らずこたび行合せ古き望足れり安威村には大職冠鎌足公の荒墳あり釋定惠入唐の内父鎌足薨じ白鳳七年に歸朝して此安威山より遺骸を携へて和州談（わしゅうだん）の多武（たぶ）の峯に改葬せし跡也幣（しで）の杜（と）とて名所此傍にあり天正年間明智光秀陣所とす八雲御抄に讀人しらす

月夜にも手くらの杜もくらからず

ましてしらゝの濱いかならん

海北塚は福井村に有名義不詳下福井村にて酒を飲み暫らく休む能勢より爰迄五十丁道にて四里が間山坂計りにていと長し泉原（いづみはら）とて松茸の名物は此山にて茸の香紛々として紅葉嵐にちりて蝶の群がる如く山中の詠得もいはれず粟生村は勝尾寺の麓にて粟生米とて池田伊丹の酒造にもちゆる米の出る所也

徒然文題

御無用と留ても春の行衛かな 白猿

徒然に出たる宿河原にていろをし坊としら梵字とぼろんじの仇討有しも此所にて塚は郡山村の藪中に有暮露くと時雨て止まず塚の前

山田にてよふく中飯をして佐井寺一名山田寺古義眞言は街道より拜み岸部の大池を過ぎ吹田に至る泪の池は悪七兵衛景清誤つて伯父の大日坊を害し此池水にて血刃を洗ひ手向とせしより泪が池と云ひ景清を悪七兵衛と云ふとは妄談にして三國の曹操が事を云へり古人に和歌ありて壽永前より泪の池の名有夫木に西行よしさらは泪の池に身をなして

心のまゝに月やとるらん

二魂坊の火は雨夜に出る事名高く吹田の渡しをこゆとて

早咲ているぞ吹田の水仙花

新庄、新家、晒堤、柴島より長柄の越へて暮半比歸宅せり

西澤
文庫綺語文草下の卷

目次

一 花洛紅葉見紀行

西澤綺語文章下の巻

西澤綺語堂李叟著

花洛紅葉見紀行

時雨月六日甲子の夜船にて京師へ登る初夜過ぎ船出して七日夜明前伏水に著き本街道へ出るに朝霧深ふしていと暖也撞木町迄に竹の矢來所々に有りて薩州の大守此驛に泊り今朝琉球人浪花薩摩の屋敷に來る日也とて伏見の驛もいと賑はし朝霧をわけつゝやがて東福寺に詣で名にあふ通天橋の紅葉を見んと茶店に憩ひ烟草吞つゝ霧霰に濡たるを詠むるに五六日早きと見へ末其境に至らず櫻は麓より咲きて後深山に咲き紅葉は奥山より先だちて麓に至ると故人の辭に露違はず高雄は愛宕の高嶺に隣ればけふ此比の詠いとよからんと心嬉しく先づ通天臺の上に登る通天橋今は舞臺となりて橋の名を額は普明國師の筆橋下の溪を洗失せしは前篇に有は略

玉澗と云床几數多を置き居えて騷人墨客を待ち當月十六日は開山忌聖一國師諱は辨圓俗に此日を當納めとて京師より群參す當寺は兆殿司諱は明兆字は吉山の繪に涅槃像名高く一生畫る繪具は此奥山繪具谷より出て今に其名遺れり

まだ散らぬ紅葉は薄く繪の具谷

良日の昇る迄詠て北の門三聖寺の内萬壽寺を伏拜む昔は六條に有て門を出て大佛前に至る此邊に撞木師一心何某と名乗る家兩三軒有今念佛ざし願日耳塚は大佛の門前に有文祿元年朝鮮征伐の時小西攝津守加藤肥後守を大將として數萬の兵を討取り首級を日本へ渡さん事益なければ耳斬り鼻削りして送り此所に埋む耳塚とは日本に是のみと思ひしに築前國濱男の里に神功皇后三韓を討ち給ひし時其國人の骸を埋め耳塚と云其後源義家朝臣奥州の戰に打勝ち河内國に骸塚を築き耳納寺を建らる是二度目にて豐臣公此大佛に耳塚を築かれしは第三度目也と閑田次筆に出たり

木兔も墳から通へ崩れ門

毎年正月二日に火伏の札を出す天狗の宴と稱すは等覺山念佛寺を一名愛宕寺と云六波羅の西なれば爰に

もふず 眞言宗開基弘法大師 晴明の社 晴明の路子つし 癩病の乞食
中興ハ千観内供なり 爰に往て京
町中に米錢を乞ふ 藥師の路子 十禪寺の社 生苦千人 舊地 五山の
也其者物よしと云

晴明の社晴明の
路子十禪寺の社

路子 癩病の乞食
牛若干人 爰に往て京
斬の舊地 などと

詠めて建仁寺向蛭子社に詣て東山建仁禪寺三位は
門前より伏拜す此寺の中門を矢立門と云て門脇教盛
卿の館の門也と云正傳院に織田有樂翁うらくの數寄家有
て兼て拜見を誘はれど縁なくて未_レ見榮西長首の
懸聲は七條鴨川の深淵より融の大臣河原院の鐘を移
せし時より始る陀羅尼とて毎夜子の時より撞出し川
東に遊ぶ醉客の心を迷はせしも今遊所禁止なりて配
膳さへも嚴禁なれば晨鐘きんぐの念もなく寺中の庭は木の
葉にて埋りたり

建仁寺向蛭子社
より伏拜む此寺の

中門を矢立門と

と云て門脇教盛

鐘樓堂に百八枚の落葉かな

怪談を好の誦もあらんが此建仁寺の藪中に狸の栖る
と云事古く世人の云所也予が友奈河一泉始篤助後一洗
真暮が原實茶園の話に時雨ふる比或者此建仁寺町を南へ行くに夜

が此建仁寺の蘇
也予が友奈河一
者此建仁寺町を

數中に狸の栖る
泉始篤助後一洗
眞葛が原賣茶
南へ行くに夜

五つ過ぎ歳比十一二の丁稚と覺しき者廣き竹の子笠を著手に酒徳利を提げ栗下駄をはき畫ける狸の酒買の容にて足元の邪魔をし又遙に向ふへ行くかと見れば往來の妨げなるが故此者始は此丁稚め古風な狸の出立にてはあらぞと笑ひ居しが行先の邪魔なるゆへ

狸めに違はじと傘にてはたと打てばワツと叫びて倒る徳利は破れて流れ何故打ちしぞ丁簡ならずと聲を
上て咎むる體よくく見れば狸ならずこは思はぬ鹿
相をしたり餘り狸めきたる姿して足元の妨なるゆへ
打つたれど丁簡せよと引起して詫る丁稚泣止ずして
云我は此松原の得意先へ持行く跡の酒屋の丁稚也徳
利われて酒を流し此儘にては歸れず汝來つて主人に
詫よと袂をひかへて止めければ是非なく半丁ばかり
跡へかへつて其家に行き丁稚を先へはいらせ賣場の
者に仔細を告る酒屋の手代笑ひながら夫こそやはり
狸の業也此方の子供にあらずと云内はや姿を消して
見へず跡へ歸つて詫たいけが又化されたる也と云
是ら古きを以て新らしく妖せし也狸にも流行有りと
笑談せし事有り此餘に建仁寺の狸に數話あれども爰
に略して此一話のみをのする

傘にてはたと打
 流れ何故打ちし
 くく見れば狸
 狸めきたる姿し
 せよと引起して
 得意先へ持行く
 此儘にては歸
 へて止めければ
 家に行き下種を
 酒屋の手代笑ひ
 子供にあらずと
 て詫たいけがア
 新らしく妖せし
 此餘に建仁寺の
 雲のみをのする

てはワツと叫びぞ丁簡ならずと
ならずこは思は
て足元の妨なる
詫る丁稚泣止す
跡の酒屋の丁稚
れず汝來つて主
是非なく半丁ば
先へはいらせ賣
ながら夫こそや
云内はや姿を消
文化はくわされたる也
也狸にも流行有
狸に數話あれど

て倒
聲を
ぬ鹿
ゆへ
して
也徳
人に
かり
場の
はり
して
と云
りと
も爰

時雨るゝやあれも人の子狸たぬひらひ
亦柏蕤の匂有

やあれも人の子

狸たぬひらひ

初時雨狸も合羽おしげなり
仲源寺は一名目疾めやくの地藏實は雨止あめどろ地藏也謠曲の熊野
に云桂寺の橋柱にて作れる觀音は當時に有り桂橋寺

は下河原に昔有りて今舊地詳ならずと云四條北側の芝居は中村玉七子供芝居始り有り先斗町春水亭に江戸著著き髪月代湯などすみて晝後先づ祇園牛頭天王の社感神院に詣る四とせ前弘化四正月の末東武へ下りし時詣でへ今年四とせふりにて此地に遊ぶに今更心改まり珍しき心地せらる抑此社は貞觀年間愛宕郡八坂郷感神院と云寺に勸請せしが神殿もなかりければ昭宣公の御殿をまいらせて神殿とす依て尋常の殿舎造り也是を祇園精舎とはいふ也神樂所の傍に紅梅一樹有りかへし満の梅と云

かへしまば毎木ごときもにほへ梅の花

と宗祇の句有り歸り花四五輪見へけるに

かへしまば梅の句ひや歸り花

此社の神事多かる中に毎歲除夜子の刻の比より參詣人雜言を恣にして他人を誹謗す其放言に勝ちたる者迎年の吉兆なりとし是を削掛と云東西の欄の内に削掛の木を左右に六把宛建て即十二月の數に表す丑の刻に是を燎たきとし其煙の靡く方を見て其年五穀の豐凶を占ふ參詣の諸人其火を携へて家に歸り元朝の羹を煮る東都にては正月六日削掛とて楊柳の木を三寸計

り削掛けて市中を賣る家毎に求めて一間毎に釣る是其歲の粟の豐凶を見る也と俗はいへり此祇園の削掛を謬る物か二軒茶屋鳥井先きに出て下河原を過ぎて牛王地の社に詣つ祇園牛頭天王播州廣峯より初めて鎮座し給ふ地なりとぞ祇園百度參りは此社迄詣づ故に下河原を百度大路と舊名有り菊水の井は此の東側に有り菊澗の下流にして茶に可也と云徒然に出たる小坂殿の棟に繩をひかれ鳥のむれるて池の蛙を取るを悲しませ給ひし跡を蛙が池と呼びて此西安井の門前民家の奥に有白猿が徒然文題に

寐殿の繩にからむしかのひりな風

の句有り今は又民家の裏にあれば

掛榮せし繩をくゝるな小夜千鳥

菊水の辻に一奇談有り

享保十七年九月竹本座の淨瑠璃文耕堂長谷川千四作壇浦兜軍

記二の口下河原菊水の辻講釋場に關原甚内と假名し

て五條阪の遊君あこやの兄井場十藏カサト一幸母を養は

んが爲講師を業とし其日を送る面體格好惡七兵衛景

清によく似たるが故榛澤六郎組子をもつて召捕り書

姿に改めたるに景清にあらずよつて榛澤詫び繩をと

き母を孝養の爲に講釋をすと聞て感じ商賣の妨せしを氣の毒に思ひ金子を恵む十藏是をいなみて景清に似たるは此身の不幸なり、可金子を受んやとて返す榛澤は母に志也とて出で十藏志を無足にするもいかいとけふ清水の觀音の緣日なれば母の無病息災を祈りの爲に奉納せんとて傍なる賽錢箱へ打込む脚色有り是此菊水の事にて大雅堂霞樵の話によく似たり霞樵の傳は近世畸人傳にあれどももれたる一話を爰に出す大雅堂は嘉右衛門とて貨殖家なるが其業を惡み避て書工となり池野秋平雪樵と云其質雅にして聊も利にわしらず書もまめやかに殊に象を得たり一日書林の許にて年比望みし一書を見欣然としてその價を問ふに價最貴し大雅云我にたくはへなし故に望を空しうす希は是が爲に今より勉めて金を積まん積みて後此價に足りなば我にたびけんさりながら賣物の事なれば其間に他に望む人もあるべし若さあらば我に知らせよと云書林云此書は高價なる物ゆへ容易に望む人も有るまじ若あらば其由告申べしと約してそれより大雅は日比に替り俄に物事を約にして年を経て望の通り金を溜め已に價調ぬれば彼書林方へ走り行き年比

の望足りぬとて價を出し其書を我にたまへと云書林大に當惑して實にも先年足下へ約せし事只今存出せり其書は其後望人有つて賣遣はしぬ其時足下に約せし事を忘却して告げず罪多々今更如何ともする事あたはずと悲愧す大雅案に相違して愀然として申けるは我かく迄貧しき中にて金を拵へしは此書の爲也既に價調ふて望を果さざるは天也苟も此金を他用につかはん様なし不如祇園しきえんの地に住むからは恩謝の爲に御社へ奉納せんにはと右の金を残らず束ねて祇園へ奉納す是を世に傳へて大雅の廉潔を稱し倍此人の書書を世に翫ぶこととはなりぬ此一話を兜軍記に潤色して大雅は祇園の社地へ出店して書書を認め井場十藏菊水の辻に辻講釋を業とすと脚色あり

再考、霞樵は安永五年に五十四歳にて歿せしとあれば生年は享保八癸卯年也五月四日の誕生と大典禪師が碑銘に有り然れば兜軍記は享保十七年になりて大雅が十歳の時也是ら自然と相似たる話か考べし

霞樵が常の風俗中華の唐人に似たり齡耳順に滿す歿す其妻玉蘭女も夫の雅にならつて風流也寡婦の後も

扇畫を書きて鬻ぎ世を渡れり爰に享保の比下河原に
茶店をかまへし梶といへる美艷の女有り和歌を嗜み
て梶の葉と云集有り

雪ならば梢にとめてあすや見ん

夜の霞の音計りして

又或時醉客二人梶が容顔を見て年を當んと賭物して
十八ならん十九ならんと争ひて梶に問ふ梶狂歌にて
是に答ふ

年越の夜の九つの産うむなれば

十八とやいはん十九とやいはん

と此一句にて争ひも止みたりけると也秀才思ひやる
べし此梶の跡に百合と云ふ女有和歌を嗜みて早百合
葉と云ふ集有此娘玉瀾也始の名ま書は抑里恭に學び夫
婦とも冷泉爲村卿に學びて和歌を詠す娘のもとへ眞
葛の花を送りて百合女

眞葛葉の色しあせずやしなひし

親の守りの花のひとつさ

玉瀾遊可の詠

さくら花色うつろはでいにしへの

春のまゝなる香に匂ふらし

天明四甲辰年九月二十八日歿す母も大雅無名は安永
五丙申年四月十三日行年五十四祇園の南葛草居に終
りをとり船岡の南淨光寺に葬り墓碑は大典禪師の書
にて今に存す門人誰渠雙林寺門前に一室をもふけ古
へ靈山にて長嘯子が營み給ひし歌仙堂の古き柱礎等
をもらひ歌仙堂の舊跡を止む軒の瓦には大雅堂とい
ふ篆印を押す長嘯子の愛せられし石の手水鉢霞樵玉
瀾の書きたる物も此堂内に納む松を時雨の染かねて
と慈鎮和尚の詠も此眞葛が原にての事也かし

葛枯るゝ原にめだつや大雅堂

此南向ふに先年予が友奈河一泉委しき傳は予が老後爰

に住みて眞葛原賣茶園と土瓶茶碗に染附煎茶を賣る

葉子は眞葛の葉の押物を口取とし一服一泉と呼ぶ此

名は東海道品川宿の上大森の茶店に一服一錢の名有

り一泉といふ名によりて然呼ぶよし原大阪高麗橋に

て唐人の装束したる商人竹のきせるにて一ぶく一錢

づゝにて煙草を人にのませたるよし八水隨筆享保元文

番を勤に出たるを近比東都にて見たり一服一泉は煙

草より出て今煎茶の名とはなれり此一泉も十とせ計

り前没して今は店の跡もなくなりたり存生梓にのせ

んとて一紙をみせたり其寫

煎茶入加減

夫茶を煮て翫んと惟はゞ水の吟味を専らにすべし之熙が曰茶は水の神也水は茶の體也いかほどの名品なりとも水應ざるものは其能薄し茶と水とよく和すれば香氣盛にして味最美也宇治産の茶は長流水をよしとす他邦の産は一概に論じがたし井水涌水瀧水各清白にして目方の輕きを好めどもあながち輕き重きにもよらず笹濁せし水に茶に應ふものあり試みて知るべし

一瓶は來泊の器は論外也まづ土器を最上とす汲立の水をうつして焔火にかけよく煮て湯玉のたつ時を待ち火をよけて瓶の口を切り手早く茶を入れ蓋を閉器の口よりもれ入らざるよふにさつと水を濯外の乾くを見てつるで飲べし飲盡して後又熱湯をさす極品は三度に及ぶ迄茶味出るもの也一分量は水一升到茶目六匁を定法とす薄きを好く人は減すべし濃きを好まば増すべし高料の茶は惜むがゆへに香も味も薄きと心得べし一葉茶を藏ふは錫にしくはなし其次はよき壺を求

め幾度も紙にて張り澁をひきて桐の木にて口をよくくして其上より澁紙にてとくと掩ひ人氣の通する所に置くべし土藏などに入れ置きなば太陽の暖りなきゆへ早く損する也委しくは好數の人に尋ね明らむべし予去ぬる文政七年の夏洛東眞葛原に茶店を開き漢書陸羽が茶經、和朝棣亭が清風瑣言、可堂の煎茶仕様集などにもとづき將好數の賓客に學び問ふて聊婦童の爲に著事しかり

洛東雙林寺門前 眞葛原賣茶園誌

自筆の草稿有るを思ひ出て爰に出す此賣茶園の西隣の家狼唄屈土卯子の住居にて有りしことども思ひ出られ昔なつかし

爐びらきや碎けて坂田小夜あらし

花園の地名は今の雙林寺にて雲居寺とて自然居士の住み給ひし舊地は今の高臺寺下壇の地也と云應仁に亡び慶長に太閤の北の政所高臺寺を御建立有りて鷺尾中納言隆良卿の山莊の跡也とて山號を鷺峯山と呼ぶよし八坂は此邊の總名にして祇園坂、長樂寺坂、下河原坂、法觀寺坂、靈山坂、山の井坂、清水坂、三年坂、以上八坂を呼ぶ也法觀寺は樓門伽藍嚴重た

りしも破壊して五重の塔のみ遺れり藥師の小堂は昔淨藏貴所爰に栖みて地震に傾きし塔を持念して元の如きにせしと云庚申堂は塔の西北に有り大黒山金剛寺延命院と云とぞ日本三庚申の一也撫州四天王寺江戶淺草寺内延享の比此處の遊女七夕比より此塔の廻りに踊りを催し木戸の外より遊客あれ是と見立て一夜妻とす今云見世つき女郎に盆踊りをさせ見立つる事也是なん八坂踊りとして古名に遺れり此邊遺りなく詠めて五條坂に至り尿瓶しびんを求めん望有り今ははや二十とせばかり前五條坂にて錦手の尿瓶を需めて花器に用ひ或は水瓶に遺ひ戯れしが以前破りて捨たり予東都淺草にて三とせの滯留中深夜に便所へ通ふも疾はやによつて歩行なりがたくふと尿瓶を求めて用を辨せり其後歸坂しても其辨止まず今は晝夜とも尿瓶を用ひ朝夕餘人の手にかけて四辻の桶に捨る小便取の替物に著せず路大切戸の開閉ひらきを論せず隱棲獨居の閑を樂しむ身には第一の心得なり長明が方丈記桃青が幻住庵の記にも書もらしたれ共芳野の西行古曾部の能因はもとより雙が岡の兼好山崎の宗鑑も何れ尿瓶を用ひられたるべしと發明して願はくは旅中にも是を携へ勝手覺へぬ

旅籠屋の開閉ひらきにきしる襖戸障子に合客の睡をさます氣兼ねなき此器をこそ持行たしよつて尿瓶しびんの辭を作り祥水の古染附の器あらば箱に其銘を書かんと望あれども未其器をもとめず

尿瓶を愛する辭

茂叔は蓮を愛し淵明は菊を愛す昔の隱者のうへはいはず近くは小西來山は女木偶にんぎようを愛して記を遺せり晝は机上にすへて眼に歡び夜は枕上に休ませて寢覺の伽がとす物いはず笑はず腹立てず悵氣もせねば居住居すまひも崩さず酒をのまぬは心うけれどさもしげに物をくはず四時同じ衣裳なれども寒暑をしらず夏は迎ふに涼しく撫るによく冬は爐邊に置きて暖也女の右になりしためしを思へば名が女に化けすまじき物にあらず物に當らねば千歳をふとも變ずまじき容風老かふうらうがなからん跡の君後家さりととも氣遣ひなし舅は何國の土工つちくぞや出所を不知あら現なの妹眷物語やなと十萬堂に書遺せど予は亦此器を愛する事妻の如く醫者のごとく年古く召遣ふ婢の如し假令親子兄弟の中たりとも兩便の代りはたのむによしなく尿を長く堪らへる時は腹張りて怠だ

はしく腫疾を煩ふ病源を覺ゆ春は梅匂ふ朧夜夏は水鶏の音信るゝ短夜秋は遠砧に寢覺を佗び冬は枕に響く鐘の音さへ氷りて聞ゆ長の夜も此器を引よせて用を達せば身を起すに及ばず睡るに易し然らば是妻の如く醫の如く心をしりたる奴婢にも及ばじ主の留主として外心の氣遣ひなく愛すべきは此器なるべしいつの世に始りしか其起原は知らざれど東寺の空海は衆道に縁あれば後を用ひ前に對する西寺の僧守敏より號する物か夏日暑に苦しみて抱寢する籠を女は竹奴と呼び男子は竹婦人と稱す竹木を彫りて脊の癖さを搔くの具を俗に孫の手と云ひ又木童子と號ふ予は此尿瓶に陶器妾と名を冠らしめいつ迄寵を忘る事あらじ栗田、清水の陶器屋にも此器を賣るに法有まづ穴の大いなるを前に出して誂を聞は彼四つ目にて御殿女中に商ふ具に第一番の太く逞き絶倫の物をみする是今すこし細き方との誂は聞安言易きゆへ也陶器妾も是とおなじく穴の太きを心に望めども誂へがたきが故なるべし婦人は此具を用る事難く尿桶と號けし丸を用ひ淀川登船に炮烙をつかふ男子は竹の筒の底を抜きて

寛とす夏日尿瓶の匂ひ甚しきには熱湯に濯いで臭氣を取る嗚呼愛すべきは此陶器妾我死なば棺中に入て共におなじ土となさんは偕老同穴の契りなるべし

石路の花尿瓶相應の地ざりかな

音羽山清水寺に詣るに今さら貴き事云べからず舞臺は今普請中にて奥の院より音羽の瀧を見をろし茶店に憩ふ老婆の云當年は松茸の旬遅く例年九月二十七日二十八日には大谷の法事有此日を茸狩の納とすれど此兩日雨ふりて今に清水山に茸残りされど米穀高價なるゆへか人出ずと語る阿彌陀堂は奥の院に隣り瀧山寺と呼ぶよし地主權現の社に登つて櫻紅葉を詠め朝倉堂感前の國司朝倉彈正貞景建立田村堂田村將軍始行徽延鎮像有梟の

梟は冬季に出て卵を産むにあらず親鳥土を塊めて其形をこしらへ木のうろに籠つて抱けば羽毛生じて梟となり親鳥をくらふ大惡鳥といへり古歌に梟のあため土に毛がはへて

昔の情今の仇也

實にそれなりやしらす景清兩眼をくり抜盲人となり惡の一字あるゆへ附會せし物か後人の考を待

松門獨閉とは梟の謠かも

李叟

清水、○景清が瓜形の觀音、子安觀音に詣で、靈鷲山正法寺俗に靈山又國阿山と云の南口より登る舉白堂の舊跡は前年訪ふてしれば寄らず天哉翁長嘯子は豐臣若狹守勝俊世を通れ此靈山に隱棲して和歌を善し後西山大原野に移り細川玄旨幽齋と共に大原千句とて連歌を催さる和歌には舉白集を撰す故に此名有又山の井とて古跡あれども此邊ほとりといふのみにて詳ならず俊賴の家集に

山の井のふた木のさくらさきにけり

みきとかたらんこぬ人のため

と赤染衛門の詠けるとも聞けり此山の絶頂に登れば洛中、洛外、加茂、桂の二流愛宕、嵐の峰々淀、山崎の通船迄一眼に遮り絶景いはん方なし坊舎に洛下の集會遊筵の輩有りていと賑はし國阿上人は常に足駄を履きて伊勢に參宮し女の骸を見れば葬り給へり故に參宮の人首途の前に登山すれば忌穢れを遁るとて都下の參詣絶すとなん

下駄提げて山まで追はんみそさいわ

高臺寺中の枯萩を詠めて雙林寺に詣づる金玉山とて

時宗にて平判官康頼入道は遠流えんりゅうより歸洛の後此山莊に籠居して寶物集三卷を著し頼阿法師も四條道場金蓮寺より爰に閑居し草庵集を撰す西行も爰に住んであみだ坊を慕ひ世にこのもしき住居と詠むばせをは又此歌の山家集に出たるをしたひ「柴の戸の月やその儘あみだ坊と云句有予は又例の戯れに

無陀のけて冬籠せん南阿彌佛

芭蕉堂は西行庵の西隣に有りて閑更の跡蒼虬ながく住み居て門人仙厓に譲りしが此二人とも歿して今は空庵となりけり東大谷に入りて親鸞聖人の廟塔虎石を拜し泰山府君の東漸寺、本住寺、痔神などは門前より拜み山根を傳ひて東山長樂寺、圓山安養寺の紅葉を見廻るに半ば照り半ば青黃色を交へたる風景言語に及ばず坊々には遊客の聲聞へ門前には小童櫓の實團栗どんぐりを拾ふ正秀の句に

花の香の虚空にひろし東山

嵐雪が蒲團著て寝たる姿と見立しも物かは

濃く薄く紅葉染めこむ蒲團かな

眞葛が原祇園林を通りて華頂山大谷寺知恩教院に詣づる洛東第一の大厦は申に及ばず元祖圓光大師の宗

風八宗九宗の群をはなれ貴き事言語に絶えたり中にも本堂の屋根裏に残る傘は何人の所爲ともいはねど世俗左甚五郎が突きさし置きしと云甚五郎は原と紀の國根來の産にて後伏見に移住して彫物の名譽也此堂建營の時の棟梁は其比名譽の内匠にて左とは別人なれど只古き堂塔彫物の類を見る時は世人左甚五郎の作也といふは皆其身の人徳なるべし

いつの代の時雨に置きし傘ぞ

鐘樓に登つて櫓の實を打あてなどし戯れて山門の方に下り藤本甲斐の筆の下乗石、三條小鍛冶が鐵盤石^{かなど}杯打詠め落葉に埋る櫻の馬場を西に末吉町喬清子の方へより夕方春水亭に歸つて宵より草臥^{くたび}伏す

翌八日未明に出て御旅町小間久によりて暫く話し今道場の東大手饅頭屋のもと江島屋其蹟^{俗名市郎兵衛}

者大佛餅屋を業として八文字屋自笑の代作をせし家也委しくは予が著述傳奇作^{書にあり依て爰に略す}龍池山大雲院に詣づる爰は彼

安士論の貞安上人の開基にて天正の末豊臣家の命によつて織田信忠卿追福の爲の草創也信忠卿の法名^{雲大}院殿三品羽林仙巖居士大雲院の號爰に出たり信長公より七種の奇物を賜る其中に法然上人の一枚起請文は一休の筆也

と云寺中悉く見ありきて錦綾山金蓮寺^{四條}に詣づる南の入口に染殿地藏堂有是は十住心院とて道場の末寺也杜鵑松は方丈の東手に有りて小間久の裏手の西に當れり此比寺中に堀井專助の辻能有りて五日目也木戸口に木賊刈の建札有習ひ事にて興行中には一度勤る事とぞ錦の天神より北隣興正寺に詣づる^{一名和泉式部とも}云誠心院に入て和泉式部尼となりしゆへ然よぶ軒端の梅の北手に風の言水^{と云}紫藤軒の句碑其餘風人の碑二三基有鮫樂師は^{永福寺と云}澤樂師の誤にて七日を緣日とし因幡樂師は八日を緣日とす誓願寺は近比焼失して今に假堂也毎年此十夜の内には近隣の兒童鉦太鼓を敲きて夜々米錢を集めしも御趣意此かたは是なきよし六角堂項法寺に詣で南にあゆんで汁谷山佛光寺に詣ずると汁谷に有りて興正寺と云ひたるよし緣起に見へたり因幡堂平等寺はけふ八日の緣日也とて寺中所せきまで市店を出しいと賑はし橘行平卿の影像是西の間に安置すを拜み魚の店大五子を尋ね久々の物語に半日を費し七つ時菅大臣の社に詣づ爰は菅原是善卿の館にて菅公降誕の地とて誕生水鳥石の書し碑石を見て是迄に五條天神俗に天使の社と云是は昔は

廣き森にて彼義經記に牛若丸、笠原の湛海を討し場所と云節分には白朮（びやくちく）の餅と寶船を禁裏に上げる例有りとかや爰より見廻りて夕方先斗町春水亭に歸る喬春子中環（なかつたまき）銅板師（どうばんし）を同道して嵯峨高雄に行きて遊ばんと約束して歸る當九月二日江州、丹州、大にあられて城州貴船の山奥よりも洪水出て鴨川筋も大に崩れ三條の橋はすこし傾きながら流れねど四條川原高小屋一時に流れ五條は橋半ば落ちて今に懸らず尤東西の石垣は水につかつて難澁いはん方なし弘化三年七月六日にも此度の如く三條五條の橋落ちて洪水あり毎度かく洪水に苦しむは鴨川宮川筋川下程土砂高く積りて水流れざるよし前後十日計りは水の騒ぎにて難澁せしよし生吉（なまき）の物語にて聞たり淀川筋は日々川浚あれど伏見より京師迄は浚ゆる事なし既に此邊は二日の夜より三日の朝迄の洪水浪華の地には即刻に來らず三日の暮半比に及んで浪華に來れり東堀久寶寺橋にて三十石の破船せしも此水一度に落ちたるゆへ也伏見より淀に來て桂の急流に支へられ水は二三段も高くなり小橋より上へ流るゝ水勢恐しかりしと伏見にても聞けり實も春水亭の二階より見れば

川の瀬は變り東にて一筋となり生吉（いけき）の洲は水なくして丘とはなりけり其上米穀高價なると配膳の女も禁止なればいと淋しく夜は川音の時雨るゝと千鳥の音信るのみにて閑を好む予などにはいと妙也「飛鮎の底に雲ゆく流れかなとは鬼貫の句もあれど

走れ／＼圍爐裏の炭も先斗町

翌九日は金毘羅に參詣せんと四つ時より安井觀勝寺へ行く光明院の門跡と云「濱千鳥跡は都に通へどもと讃岐院（崇徳院の御事也）松山の配所に於て詠じ崩御の後いろ／＼の怪異ありければ爰に尊靈を鎮め奉ると云新更科とて中秋に月を賞せしも今は名のみ呼びて風景を喪へり祇園林より知恩院の山門前をへて古門前の楓葉を詠め地内の櫻は膳所本田侯よりの寄附と云本堂廻りの櫻は淀の永井侯より植えしと云古門前を出て次の石橋を渡り半ばより北を見れば叡山のかたち富士峰に似たり都の富士とは爰よりの詠めをいふよし此川上は志賀の山越より流れて東三條にて白川橋の名有繩手大和橋より鴨川に落る閑田子の一語に粟田祭は例年九月十五日なるが天明六年は國恤（俗に云御停止也）の時にて霜月に延引せり此祭式の内此白川の流に掛て

獨木橋^{ひとつばし}を重き劔鉾^{けんぼう}さして渡る事あり其夕ベ霜深く置きて常さへ細き橋の見るめ危きをいかと人々思へるに其河涯^{かはぎし}に住める明田利右衛門といへる猿樂の笛師心を得て木屑を敷かせしかば障なく渡りたり假初のことなれど時に當ての働きを人々感じたり徒然草に鎌倉にて中書王の御鞠ありし時地の濕りたれば木屑を敷きたりしを人の褒めければ乾き砂やなかりけんと嘲りしこと見へたるに思ひ合せて此橋上は木屑ならでは用をなさず彼に増る事遠しと評せりと有則此橋にての事也と獨心にはなして明智首塚を通りぬけ粟田口を左りへ入りて親鸞上人植髮の尊像の御寺に詣し門前にて曆賣にあひ曆を求むる曆賣は俳諧の題に霜月の部に入れども例年九月中旬に出たる物也天保曆に改まりしより年々遅く當年は十月八日の賣出し也とぞ俗に六十一年目に至て元の曆に還ると云説は非なるべし嘉永四辛亥年二月朔日は初午にて京師にては是を己なし午なりとて火早きと恐るこは天明八戊申年正月晦日京都の大火にて平安城開けて未曾聞の大變也と云其年即二月朔日初午なりしゆへ今に京師ばかりにあらず二月朔^{げつ}に初午有^ひば^{五日より}前と云^火

ばやきとは浪華にても云ふ也此時の火は正月晦日曉より翌二月朔日卯の下刻までに晝夜十三時に東西凡十八九丁南北凡一里二三丁焼丁數凡千五六百丁長延にして四十里餘なりとぞ今嘉永三年迄六十三年になる翌れば即六十四年也六十一年目古曆に還るとはいふべからず

來年の事白川のこよみ賣

奥の丹後屋にて酒飯のうへ南禪寺中の案内は小間久と約束あればけふは行かず岡崎の水車を詠めて聖衆奉迎山禪林寺永觀堂に詣づる先年霜月に

見かへれど供人遅き枯野かな

と詠たる時よりは一月早く今紅葉の只中にて庭中に庭を敷き床几を置き洛下の騷客を待つ聖衆來迎の松悲田梅鶯の池など打詠め若王寺^{正東}山^{光雲寺}は門前よりふしおがみやがて黒谷の東中山の三昧に至る爰は昔源三位賴政が山莊の跡なりとき爰より山道を曲つて黒谷熊谷堂の前に出る紫雲山金戒光明寺黒谷は叡山西塔の黒谷を移して新黒谷とは云ふなり鳥酔の句有

石塔の林に秋の入日かな

石塔の林を詠めながら登りて文珠塔紫雲石に詣で鎧掛松鎧の池は熊谷直實著せし鎧を池にて洗ひ松に懸置上人の教に歸入せし也と聞發心の時を思ひ出て

俦やよろひの池のちり紅葉

正面の南門は古く假門にて有りしが此頃山門建立と見へて美々しく圍ひ足場等を組たり淨光が茶所も過ぎて鈴聲山眞正極樂寺眞如堂に詣づる此十五夜には十夜の篝を三處に焚くとして見事なる篝柱三本を建てたり寺中の楓葉詠め得もいはれず都べて昔より花の都といへども花といはば櫻に限るべし秋の紅葉には數樹有りて皇都の寺院に紅葉なき所はなく古今に素性法師が柳櫻を詠みたるは僻言とも思はる都の秋ぞ錦なるべし

眞如堂の月に十夜の篝かな

門前の稻荷を拜み神樂が岡へあゆむに道の北手に迎稱一條は樂師寺大興極樂寺とて門並に有て其西の端に東北院道場之樂師寺は御堂關白道長公を法成寺殿と號す御女上東門院法成寺の内東北の隅に棲たまふゆへ東北院と云和泉式部の塔、雲水の井、軒端梅等有東北の謠曲によつて作りし物か吉田山神樂が岡に登る爰は天照

大神天の岩戸に入給ひし時八百萬の神達神樂を奏せし跡也と云傳ふ地主神の社は奥山に有り一面の岡山嶮しからず木の葉は錦して樅の實こぼ盈るゝを兒童に拾はせ貴賤割籠竹筒をひらき居るさまを詠めつゝ西の方に下りる二本松の方を通りて長徳山知恩寺一名百に詣づ淨土四箇の一本寺にしてもと加茂の神宮寺なりしを慈覺大師草創し法然上人鴨皇太神宮の懇望によりて一枚起請を書かれ念佛の道場となる八世善阿上人疫癘流行りて村民の死するを憐み禁庭に參内して一七日の間念佛すること一百萬遍也疫病忽退いて安堵す歡感ありて號を百萬遍と賜はる堂前の石碑は小松内大臣重盛宋朝へ黃金を渡さる其志を感じて石刻の阿彌陀經を送る所の摸し也

珠數を見る百萬遍の蕪かな

かの沸々と字する門前の畠を見て今出川口に出干菜山光福寺に詣づる豊臣公へ干菜を獻せしゆへ號を賜り六才念佛の本寺也

藪陰や冬の日影の干菜寺

とは岡崎の蝶夢が句也柳が辻より加茂皇太神宮を遙拜して長徳院常林寺正榮寺法性寺と並びしは門前よ

り拜む午年の洪水には此四箇寺の内の門流れて三條

の橋を落せしと云東川端を傳ひ砂川より三條迄の道
大に荒れ道ぶしん最中也聞法山頂妙寺法華一に詣じ

又檀王法輪寺淨土宗開基發願主夜神は詣人多しいつも上京の

度に此邊は唯打通りにしぬればこたびは悉く一見し

て三條の橋を渡り春水亭に歸へる欄干の紫銅の擬寶

珠十八本、切石の柱六十三本、天正十八年庚寅正月

日豊臣初之御代奉増田右衛門尉長盛造之今嘉永三

迄二百六十一年になる又五條の橋紫銅擬寶珠は十六

本北の方西より四本目に銘有正保二年乙酉十一月日奉行蘆原觀音

寺舜興小川藤左衛門正長としるす然らば三條の橋よ

り五十五箇年後也此擬寶珠の内一つ弘化三年年の洪

水に橋落ちて紛失せり其女帝の御葬式に附新きを足

して有りしが予東武に有りし時擬寶珠阿州德島侯よ

り京師へ持上りしと云漁網にかゝりて再び手に入る

と聞きしゆへ爰に記す欄干の木とともに流れたれば

淀川より難波津を経て大洋に流れ出阿州の海に漂ひ

しと見ゆ既に河原の院の名鐘七條の深淵に埋れしを

榮西長老とり上て建仁寺の陀羅尼鐘となし跡に鐘が

淵の異名を竈が淵と誤るなど僞りならず實水勢の力

程恐しき物はあらじ

十日中玉樹とともに宿を出蛸藥師に玉樹の知る人あ

れば訪ひ小川通二條の上喬春子の舍弟宅に立寄り會

式によばれ玉樹子、喬清子を伴ひ二條の城を過ぎて

成敗場の傍朝顔の水不詳壺井の清水と云よし少し西

に壺井の地藏堂有り安井村より太秦に至る北に常盤

の里を見南に木島の杜を見つゝ行き元太秦廣隆寺東

の門より入てそこ爰見廻り楓葉を詠める蜂が岡と古

名を云蜂岡寺と有りしも秦川勝の名乗によりて廣隆

寺と改むよし太秦形の石燈籠は摸形とす名物なりと

ぞ九月十二日の牛祭は五人の僧侶五大尊の形に表し

異形の面をかけ一人は牛に乗り弘法大師作り給ふ祭

文を讀むよし予兼て一見の望あれどもはたさず西に

行きて帷子が辻に趣く爰は檀林皇后の骸骨をさが野

に捨てし時帷子の落ち散りしゆへ呼ぶとぞ材木町の

入口に有栖川とて小川あり齋宮は野の宮に對したる

名なるべし車くろまき折あやし社一名冥宮昔車に乘りて此前を行くに

牛倒れて車を折きしとぞ今は洛の商人掛神也とて詣

すと云ふ鹿王院宗禪より靈龜山臨川寺宗禪に詣で渡月橋

の詰に至る此程の洪水にて橋落ち二丁計り川上三軒

茶屋の上にて船渡し有り續文粹に天下の勝地は大堰川に過ぎたるはなし城中の名區は嵯峨野にしくはあらすともあるも宜也水上は北丹波より流れ水尾川みづのを、清瀨川に落ち合ひ猿飛、龍門の瀧、大瀨等の名有りて嵐山を帶びし渡月橋を経て末は梅津、桂の里の東を流れて淀川に落つる水の色藍よりも青く嵐山の樹々紅葉して色を交へ下す筏有り釣垂る有り絶景言語に盡きせず先づ小督の塚は橋詰の藪中に有るを尋ね彼の高倉院の勅を受け彈正仲國明月に鞭を打つて琴の音を慕ひ御文を渡せし平語を思ひ出三軒茶屋の上花の茶屋の弟佗右衛門方に宿り時は七つにもまだ早からんと思ふ比携へし酒肴取出酔に乗じて川上にあゆみ千鳥が淵の巖に上り横笛瀧口に離れて身を投し所身投石と云嵐山に落る戸難瀨の瀧を見る大堰川的一名を戸難瀨川とも云ふ玉葉に俊成の詠

となせより流す錦は大井川

筏につめる木の葉なりけり

拾遺に忠岑寺

いろ／＼の木の葉流るゝ大井川

下は桂の紅葉とや見ん

何れも古詠眼前に有り此川上へ四五丁も折り見るに絶景いはん方なし後の山は彼の龜山とよぶ天龍寺の裏山なり茸の香紛々と香ひ木の葉降り敷飽かぬ詠めながら川下へかへりて渡しを越え夢想國師の座禪石細川右京太夫政元が築きし城跡に藏王權現の小堂有り龜山の院吉野の櫻を移し給ひし時此藏王も安置せると云大悲閣には惠心の作の千手觀音を安置し傍に角倉了以の像七十有餘の相法體衣を著し手に石割斧すゐのくろを持片膝を立て圓座の上に坐す碑石は林道春の撰にて左り側に有り寛永六年冬と誌す二百二十餘年の昔也了以の隅の藏と云ひしを板倉侯より角倉と賜ふと有

冬椿の荅は堅し角のくら

智福山法輪寺

眞言宗 虚空藏に詣づる

葛井寺と云しを貞觀年

間法輪寺と改むよし落星の井、轟の橋、籠堂淺りな

く見る櫻紅葉夕陽に照りて法輪寺の入相告るに驚き西行櫻、西行田とて宗祇の住みし跡など詠め渡しを越えて花の茶屋に歸へる人訪はぬ比なれば看のもふけはあらねども干物を焼き松茸を焚き饗應いと風流也中にも黒皮と云へる茸如し 治のよく灰汁を抜きて薩

摩芋と味噌あへにしたる猪口を出せり其佳美にてよし此三軒茶屋は天龍寺の用達にて泊客をせず櫻の比

は此前に仕出し料理屋有りて是を取寄せ席を貸すのみ玉樹はいさゝか知音有りて爰に泊る風呂も別に沸せて相客とてはなく夜に入りては寂寞として大堰の川音千鳥啼くのみ貝原篤信翁が岐蘇路の記に古への人一日の勝に遊べば一日の神仙となるといへれば我が思なる心の穢れも浮世の塵も日比へて佳境を過行く程は忘れぬ生きて堯舜の仁にあひて嶺南の遊びをなす事を得たりと東坡がいへるごとく太平の世に生れ此樂みを得る事いと有難しかゝる遊びは其一時の詠のみかは身を終る迄折々に其所々の有さまを思ひやれば又まのあたり見る心地して長き思ひ出とぞなれるとしるせるは爰也と思へば寢るに惜く雨戸ひらきて夜更る迄大堰川に照りそふ月を詠めて樂しむ東坡が赤壁の月に遊びしは元豐五年壬戌先生四十七歳にて七月既望^{十五}前赤壁の賦を作り十月望^{十五}後赤壁の賦を作れり此二賦は人口に膾炙すれども同年十二月十九日東坡が生日にて又赤壁に遊ぶと施宿^{せしゆく}年譜^{ねんぷ}記^き年録等に有れば一年の中に三回赤壁に遊べり然れど

も賦は前後のみにて生日には賦なきゆへ人は是を不知其詩に曰

山頭孤鶴向^レ南飛 載^レ我南遊到^三九疑

下界何人也吹^レ笛 可^レ憐時復犯^三龜茲

太田南畝^{杏花圖} 莠言に是を出して享和二壬戌年十二

月十九日に墨田川に舟を浮べて後々赤壁賦を作れり予は享和元年の生なれば此時未二歳也志學後俳諧に遊びて住江の社頭櫻宮、高臺、味原、難波等を始として石山廣澤は再度行きたり東都の墨水は以上三度舟行して遊べり近くは須磨に遊びて月を賞す信州娘捨の月は未縁なくして見ざれ共今年予知命に及んで徒らに過さんやはとて仲秋既望は網島より櫻の宮を逍遙し彼岸の入に當れば虫籠を持行き魚鳥の放生は人すれども鈴蟲松蟲を野に放す事をせねば先づ蟲の放生會をして樂みたり後の月は有馬に行きて見たり九月四日は予が生日なれば友を誘ひ荒陵山の東猪飼野にて月を見んと樂しみしも二日三日の洪水に荒れて玉造より百濟野邊は水につかりて行く事かたく空しく望を失ひしが今十月十日の夜城州葛野郡嵯峨の里三軒茶屋に泊りて名にあふ大堰嵐山の月を見る是

や後々赤壁の月とも見んや歌に拙く詩に暗ければ俳諧に戯る

蘇子いかに冬の月見はあらし山

をじかなく此山里と詠じけんさが野の秋も過ぎたれば鹿の音もおとづるまじと主の老婆に問へば老婆云鹿の音は松茸のさかりと出る頃にして晝も喧しく啼けど茸の句過ぎぬれば音や入れけん啼かずと云へりかの徒然草に云へる龜山の院池に大井川の水をまかせられんとて大井の土民に仰せて水車を作らせられたり多くのあしを給ふて數日に營み出してかけたりけるに大かた廻らざりければ兎角直しけれども終に廻らで徒らにたてりけり扱宇治の里人を召して拵へさせられければやすらかにいひて參らせたりけるが思ふ様に廻りて水を汲入れることめでたかりとあるも此處にてのこと也など話しつゝ衡を聞きて寢入りぬ

川千鳥車にまふて群にけり

徒然文題白猿の狂歌に

世の中は廻りもちなる水車

雪つまりたる年のくれかな

翌十一日夙に起きて大堰の川水にて手水をつかひ朝飯したゝむるうち山手の習ひなれば時雨しだして木の葉を染むるされど徒らに居んよりはと傘をかりて草鞋に履きかへ靈龜山天龍寶聖禪寺に詣づる五山の第一夢窓國師の開基足利尊氏公の建立にて門前の芹川にかゝりしを歌詠橋とて西行奇童と和歌の贈答に詣りしゆへ呼ぶ薄の馬場は此東の野を云野の宮は黒木の鳥居小芝垣いにしへ伊勢太神宮へ齋宮に立せ給ふ内親王の住給ひし遣風とて古雅なる事いはん方なし以前予が祕藏せし涼帝給綾足片歌の祖諡名案葉齋の自書賛を思ひ出いとなつかし

建部凉帝の書賛に

朧月是も黒木の鳥居かな

雨はますく烈しきに常寂寺法華宗也

定家卿の社有りて

高倉院より小督の局に賜りし車琴と云ふ名琴此寺

に有り爰を出て小倉山二尊院に詣づる天台眞言律淨土四宗兼

學にて釋迦阿彌陀を本尊とすゆへに二尊院と云高き

坂を登つて法然上人の廟有時雨の亭は左の山上に有

り鷹司殿二條殿の魂舍を始め長州侯の魂舍は本堂と

御影堂の傍に有り山上には紳縉家の墓碑數多有りて

嵯峨天皇土御門院後奈良院三帝の塔は石門の内にあり原と二尊教院華臺寺と云醜醐帝の皇子兼明親王此邊りに山莊を營み雄藏殿と稱す其後星霜重りて中興法然閑居し給ひ二世正信房湛空は徳大寺左大臣實能公の孫也當院に入て土御門後嵯峨院二代の國師となる空公行狀の碑有り磨滅して讀む事かたし世人法然上人の塔也といへれど湛空にて源空にはあらず何等の者か文字を缺損せしめ強て法然上人の塔とせるや師弟の碑を紛らすは憎むべしと蒿蹊は次筆に書けり足引の御影は月輪禪定殿下、畫工法眼宅磨に仰せて法然上人の像を寫させ開眼供養を乞ひ給ふ一方の足先出たるに驚き持念せられしかば忽然として足をひかれて坐せる像となる是ゆへ足びきの御影とて今に當山の什寶となれり時雨ます／＼降りければかの徒然に云淨金剛院の鐘又黃涉調也と書ける金剛院は當寺の塔頭にて昔は檀林寺とも嵯峨の御堂とも稱せし跡なれば尋ねて暫し雨を除けり

あしびきの山足引の時雨かな

長の明神は檀林皇后の髣也と云嵯峨天皇の愛妃にて薨じ給ふ後戀慕愛執の思ひを離散せん爲遺命により

嵯峨野の原に捨つる其時緋の袴のちりし所に日裳宮ひものみやを建て上衣の散りし所に裏柳の社を建つると共に大門前に有り車僧の塚は藪中に有り常に破車に乗りて四衢を往來す世人車僧と云ふ七百歳の往事を語る故に七百歳とも仇名す此像太秦の南海生寺と云ふ小菴に有りと云ふ妓王寺、三寶寺ともに往生院と云ふ先年の地震にて破壊して三寶寺は纔に遺り瀧口入道の古跡横笛が梓弓とするせし歌石も道埋れて行くべき様なし妓王寺も淨土宗にしてよふやく藁屋根の小堂のみ本尊は阿彌陀佛にして脇士は觀音勢至也清盛入道淨海の像圓光大師の像を後にすへて祇王刀自を上段に居え妓女佛の木像は下段に置きたり妓王が父刀自が夫は惠名九郎時長とて江州野洲郡永原村は妓王妓女が出生所也永原村、北村、中北村の三箇村水不由なるがゆへ妓王平相國へ願ひて堰を築きし功有れば中北村に妓王堂を建て中興三譽利貞比丘尼此四つの木像を作らせしと見ゆ利貞は寶永元年二月九日四十五歳にて還化すと過去帳に見へたり假令寶永年前の十年前の像としるべし草鞋を脱ぎて本堂に上り此木像と過去帳を見る主の老尼再建を願ふ事せつ也

雁啼て佛御前の家出かな

舊國

草は秋にいつしかあはで初時雨 李 叟

(四比丘尼像繪一枚略之……編者)

爰を出て仇し野念佛寺より愛宕月輪へ行かんと思へど雨倍降りて止まねば元の道に歸へり小倉山下山本町落柿舎を訪ふ姓は向井名は元淵蕉翁の十哲にして

柿ぬしや木ずるは近き嵐山

五月雨や色紙まくれし壁の跡

ばせを共に石に鑄せしは粟津の井上重厚也

近比梅室雪雄の句に

きれ風や柿の木そして嵐山

と云あり亦去來百回忌

今もその梢は柿のあらし山

大江丸

中院町厩離庵の門内に入つて庵室の後に廻ればさゝ

やかなる石を積みて楓葉一樹を植え是ぞ京極黃門定

家卿の小倉の山莊の跡也此嵯峨野に山莊の跡時雨の

亭と呼ぶは數多あれ共かの僞りのなき世なりせばの

詠歌より後人なぞらへて作りし物多し新古今に

小倉山しくれの比の朝な

きのふはうすき四方の紅葉は

とは此山莊にて遊ばされし由明月記小倉山百人一首も黃門の作にて世に名高し此表の庭に紅葉の畫彫りたる碑にあや子としるせしを建たり文字細くして讀兼ねたれど是清泉柳の水の跡なるや重ねて問ふべし爲家卿の墓畠の中に有り夫木集に

住そめし跡なかりせば小倉山

いづくに老の身を隠さまし

中院入道殿融覺建治元年四月二十九日薨す下冷泉宗家卿建と有五臺山清涼寺の釋迦堂に詣で

降らるゝを覺悟て嵯峨の時雨かな

三國傳來の尊像は毎度拜みたれば今更いはず棺掛ざくら、四足門、牛の華蔓けまんなど悉くふし拜み三月十九日

の御身拭を思ひ出

撫ぐゝる赤梅檀の火桶かな

嵯峨野とは小嵯峨、上さが、下嵯峨の總名にして清涼寺の邊を中央とすいにしへより閑靜の地にして故人

の秀詠數ふに遑なからん

遍照も凝りてかち行く枯野哉

大覺寺の宮眞言宗は嵯峨天皇の故宮を精舎とせしよし

いと貴し菖蒲谷とは此北手に當り大池有り中將惟盛

卿の北の方六代御前此所に忍びておはせしと云堀抜川とは菖蒲谷の池水を北嵯峨に通じさせ數十丁の田畑を扶く是角倉了以の工夫也五所明神神明八幡、加茂、春日住吉也に詣して大澤の池を廻り菊が嶋庭湖石は池中に有り

名古曾の瀧は北手に有り拾遺に瀧の音は絶て久しくと公任卿の詠は是也廣澤の池遍照寺山は巽の方に見へ難刀坂の山路にわけ登り所々にて息を繼ぎつゝ此名義を考ふるにさびて長き道なればかく云やらんだと打興じよふゝ高雄道平岡の八幡宮の前に出づる是よりは道もよければ梅が畑善妙寺などを詠めて先づ高雄山の前なる紅葉屋に著き酒飯調へ身の濕りを炙り清瀧川を見おろすに高雄の一山は楓葉五色に交へ雨に染みたるは實に錦をさらすとやいはん此屋に滞留の客散紅葉を絹に摺り土産にするとして打盤の上にて才槌もて打居るも優にをかし清瀧の水を汲携へし佳茗を入れ煎て杜牧が車を停めて坐に看る楓林の晩と賦したるも是なるべしと打興じやゝ時を移したれども時雨に轉ぶ所迄紅葉をよそに見すぐさんも本意ならじと又草鞋引しめ爰を出神護國祚眞言寺に登る門前の清瀧川の詠めは立田通天も及ぶべからずか

の空海に詔して金剛定寺の額を書かしめ給ふ折五月雨して清瀧に水増り川を隔てゝ書かれたる額書石を詠め護法の社は和氣の清麿を祭る三絶の樓鐘銘は菅原の詞は橘廣相筆は本朝にならぶ方なき名器也奥の院と云ふ地藏院より下なる溪を見下せば總一面の楓葉にて清瀧の流水は藍の如く巖に碎けて珊瑚の珠を散らすかと疑ふ爰の茶店に土器を賣る求めて投げるに嵐に誘はれて散行く風情實に仙境に遊ぶが如し楓葉の詠めは一に高雄二に箕面三に梶尾にて龍田通天は遙に劣れり

此秋の暮文覺我を殺せかしとは晋子の句也

睦殿は嘸泣かるべし散紅葉

下山清瀧の川上にあゆんで楨の尾山平等院へ眞言律詣づる是又紅葉の詠めよく西明寺と云ふ川に渡せし橋をもどりて梶尾山高山寺華嚴明恵上人の開基にて麓の橋邊に掛茶屋をしつらひ河邊に下りて床几にかゝれば龍田通天もひとつ所によせたらん紅葉の詠の渡らば錦中やたつらんとは此梶尾の事なるべし一の瀬の土民茶店を出し今採りし松茸に鰯をあしらひ酒をす

ゝむ實に年々開けたるを知るべし山門の前の建石には酒肉五辛を禁じ高き石段を登つて本堂有り遙隔てゝ右の方に春日、住吉の二神を祭れり爰はかの宅摩法眼（畫）明惠上人を信敬す明惠解脫の兩上人は春日、住吉の二神常に此山に通ふて擁護を加へ給ふ或曰宅摩明惠の室に至るに障子の内に人なふして上人と話答の聲有り宅摩怪しみて是を問ふに時々春日、住吉影向有りけふも又然りとぞ宅摩感じて障子の間より窺ふに兩人列座す光相及び衣服等尋常に異也頓て筆を執つて譚（モノガタリ）に神相を寫す此畫像今當山の什寶とす宅摩歸京の時鳴瀧の徑に於て落馬して死す是則凡人神相を寫す冥罰なりとぞ今鳴瀧に宅摩塚遺れるは此故也明惠上人は北條泰時に天下を治むる事を問はれて唯無欲にならせられと計りと答ふ泰時云ふ我一人無欲になりても一門是に隨がはずんばいかに明惠云ふ人は兎もあれ我一人無欲にあれと泰時悟つて無欲になり北條の天下九代の榮を遺す是皆明惠の教によれりとぞ實に清淨の地にしていかさま神も今に影向あらんと坐に涙浮めり仁王門の柱に切手はなきに紅葉の枝提げ行くべからずとかけ札有りいと風流なる書

きかたなりと感じてもとの道に下山す

紅葉して見ても及ばぬ葱かな

茶はもと高辨上人入宋して將來し梅尾に栽え給ひしより弘まれりと類聚國史に見へたれど世俗明惠上人梅尾に栽え給ひしよし云へり然らば朝夕茶を吞む者其恩を思ふべし今日本にて茶禮を教ふる人を茶人と稱す西土にては茶を採制する人を茶人と云ふ近來煎茶を流行して物ごとしるしらぬ者迄佳茗を吞む實に奢れるかな中興上田秋成（餘齋無腸）村瀬栲亭浪華の霞霞堂等と意を合せ賣茶翁（高遊外）を煎茶の記原として弄びしより好人陸羽が茶經をひき出し涼爐急須の物數を盡し抹茶式に倣ひ當時は専ら紫泥の瓶を用ひて出し茶を吞む事とはなりぬ先年予秋成が清瀧の水を汲み茶を煮たる折の長歌を書きたる軸物を祕藏せしが友人にくれて今其文も忘れたり高遊外は茶禮に悉しく晒落れて荷ひ賣をして煎茶の祖とはいふべからず祖と稱するは無腸子也蟬（かた）の形容せし涼爐を除齋好と云ひしが今は稀にも見す花月庵を宗匠とか唱へるはをかしき事也東都に塚原宗策（醫打）はしる人にて近比煎茶を發明して一派を立てると聞きて望みて飲しが其式甚む

つかしく見るに堪兼ね中座して歸へりぬ文華日々に
ひらけ書見に任せて新奇を巧み其もとを失ふに至る
といふべし明恵上人は自遣心集と云ふ書を著はし和
歌は新勅撰に數首出て寛喜四年正月十五日に寂す抹
茶煎茶に遊ぶ人は勿論免道信樂、川上、阿倍川、筑前、
日向に茶を造る者茶の祖明恵の忌日には其恩を思ふ
べし其昔團茶と稱して茶粉を圓めし物有是を茶碗に
入れ熱湯をかけ柄杓の末に丸き有りて是を摺り飲む
事有りてや柄杓を見しが今是も廢りてや稀にも見ず
流弊の世是非なしとやいはんやがて善妙寺に出て鳴
瀧に歸へる宅摩塚を詠め三寶寺日蓮宗般若寺眞言宗妙光寺
宗眞言宗など詣でたけれど時雨にて夕暮早く殊に玉樹子病
に苦しめば喬春子を京へ歸へし御室にて泊らんもの
と足をはやめ近比山を開ひて八十八箇所の靈場を移
せし大師堂の門口近江やといへる宿に泊る奥の放れ
座敷は數間有り閑靜なる事夥しく昨晚の三軒茶屋よ
りは遙に寂ひたり食物家具は數十歩を隔てし母屋よ
り運び侘しき事限りなし爰にこそ鹿も啼くめれど雨
の降りつよく人語を隔てあたかも甲信の幽谷に宿り
し心地ぞせらる鳴瀧は爰より西につゝきて砥石松茸

の名産也とど此北に泉谷の法藏寺宗泉殿とは妙光寺
と般若寺の間に舊蹟有りとぞ鳴瀧御坊とて一向宗の
道場には例年霜月九日大根焚といふ有るよし飯は持
行き五十穴にて土地の名物鳴瀧大根をよく煮たるを
賞味する事とぞ風流は田舎に有り重ねて行くべしな
ど話ながら雨と寛の水音を聴ながら寢入りぬ

投やりに眉も作らぬ頭巾かな

翌十二日は雨晴れたり爰を立ちて御室の御所に詣す
大内山仁和寺眞言密乘宇多天皇延喜帝に御位を譲り給ひ
御出家ましまし寛平法皇と尊稱し當山に七堂伽藍及
び御室造立ましゝ入室ある御門跡號爰に始まる宮
門跡方の上首にして總法務の宮と稱す諸堂ことごとく
く拜みて寺中の櫻紅葉を詠めて山門に出で黒門口よ
り本辻に出て雙が岡はこなたより見やる一二三と岡
相並ぶがゆへ呼ぶとぞ長泉寺は兼好の古蹟をとめ
法金剛院はもと清原真人、其子瀧雄公の山莊にて雙
丘寺同宗兼學の跡也西光庵淨土は雙が池の上に有り玉樹病
足に歩行苦しきよし妙心寺裏門の西にて別れ獨大雲
山龍安寺に詣で、細川勝元左大臣實能公の山莊を乞
ひ請け方丈は勝元の館書院を以て營み庭前の築山池

邊の風色は勝元の物數奇也と聞けり池の面にはや水鳥數多下りて詠いとよし

宵邊下りた鴨もあらふに鴛鴦の聲

衣笠山は北に連なり藤原家良公の別莊の地也ゆへに衣笠の内大臣と云ふ等持院は此麓にて開基は夢窓尊氏公の建立なり今普請中にて雛形を書き堂前に有り東に行きて北野聖廟天滿天神宮に詣づ此程屋根替にて東側經所に移せり二月二十五日は榮種の御供の神神也といへども誠は梅の御供也とぞ其ゆへは平なる桶に飯を高盛にして神前階上の八脚机の下へ供じ其机の上に香立と稱して小土器に白き紙をめぐらし三杵の米を満ちてそれに梅の小枝を挿して奉る或は花ちりてなき年には葉を生じ實を結びても同じく折りて挿す數は左四十二右三十三是男女の厄年の數に准ふ西の京の神人より奉るとの事也影向の松のはとりは豐臣太閤北野大茶の陽の舊地ときくもと高雄より歸路は菩提の澗より千束、岩門、鷹が峰の光悅寺源光庵の方へ廻らん心なりしに此程の荒れにて道難澁也と高雄紅葉屋にての噂に隨ひかつは玉樹子の病苦を察して行かず歸へりき重ねて行くべしと思ひ捨てけ

ふは芭蕉忌なれば雙林寺に詣でん物と干たる傘をかたげ此邊法華寺に參る會式の賑ひに紛れて春水亭に歸へり晝飯をしたゝめ暫時草臥を休む晝後小間久來つて南禪寺に行かんとさそふ兼て約束なれば連立ち栗田口に行き左側商家の裏に有る三條小鍛冶宗近が勸請の稻荷に詣し美山子書師の方に行き南禪寺中の案内を頼み三人連にてやがて瑞龍山太平興國南禪寺に至る第一舊龜山五山法皇の皇居なりしを普門無關和尚大明國師に賜ひ佛殿を創建し給ふとぞ寺中の知音より子供の案内と共に五鳳樓と號す山門に登る寛永年間藤堂高虎再建せしとて薩摩杉を用ひ造れり結構いはん方なし正面釋迦の像を安置し右には十六羅漢の像極彩色を用ひ此前に高虎公の像は厨子に籠れり左に大明國師の像を置き藤堂家九十餘人慶長の戰に討死の位牌を並べり天井の雲龍來光柱の彩色狩野常信の書く所煤びる事なけねば善盡し美盡して此比なるかと疑かはる山門を下りて龍淵室に至る間毎々々の襖は桃山御殿より爰に寄附せしと云ふ常信の畫也山水花鳥人物を書きし金襖にて箔色滅金象眼の引手目を驚かせり北の間は禁庭より寄附とて上檀の畫は古法眼元信

竹に虎の間の畫は探幽にして虎數正の形容悉く同じからず中にも水呑の虎は名高く感ずるに辭なし是を出て北の塔頭名を忘るに入て庭山の楓葉を見る此間の襖は天明年間圓山應舉爰に居て認しと云ふ悉く墨畫なれども山水草木に筆勢を盡せり床は張床にして山水樓臺にて書詰めたり此向ふの襖は人物のみにて舉が眞草行看るに足れり爰を出て本多佐渡守の碑は堂内に有り陶器の龜を臺とせし也唐木の白檀二株は佛殿の左右に有り山門の外の大燈籠一基高二丈餘白川石也蓋石の寶形に二引龍の紋有地輪の上に南禪寺山門石燈籠寛永五年九月十五日佐久間大膳亮平勝之寄進之爲現當悉地成滿也と有り南禪院金地院にも拜すもの有りといへども時遅ければ重ねてと約して粟田口に歸へる爰に栗田口より日の岡に登る坂路を松坂といふよし

かへりこん程をちぎらん忘るなよ

我松坂の松ならばまつ

と長明の詠有り大佛殿の石を曳く時東の方より來る者追分のこなた松坂の邊甚艱難なりしかば加藤清正音頭をとりて松坂こえたやつさと諷ひ囃して曳かされしといへり今踊の音頭に通して諷ふを伊勢の松坂

と覺へたるは同名にて彼れ名高きゆへに誤る也とぞ是ぞ榮西長首と同日の論なるべし一道に勝れたる人の言ひたる事は後に知るべしなど話しつゝ美山子の方へかへり會式の善哉に饗されて夕方春水亭に歸へりけふ南禪寺の名畫を思ひ出

畫の虎の水飲む音か霜時雨

翌十三日伏見の驛館より琉球人薩州侯の屋敷へ行くよし御座船の結構など見んと京師の人の行くと聞きて小間久にも妻子子者を連れて行くに誘ふ辻能など見て徒らに日を暮さんよりはと直に連立ちて橋下より竹田街道大石橋に出て錢取橋に趣く先比の荒れに道崩れて瀬はおほかた大約にかはれり伏水に入て薩州の屋敷の邊に行くにはや今の先琉球人は屋敷へ上れり驛館へ歸へるうちは往來止也とて通さず小間久の舊識に逢ふて幸ひと誘なはれ通行筋の棧敷に伴ひゆかれ赤飯煮染にじめのもてなしに預り晝半比と覺しき比琉球人の驛館へ歸へるを見る都合九十三人と也前後は薩州の役人嚴重に附そひ次に頭巾裝束おかしく粧ひたる下官朱塗の名薄の大きなるに中山王府とか金泥にふとく書きたるを高く捧げ二行に行跡にラツバ、チャ

ルメラの如きの笛を四人吹きて次に四人太鼓を銘々左に持て是を敲く中山王は乗物に乗り附添ふ下官は

總髪にして髪先をわがねあたかも矢脊の下良に似たり

眞鍮の笄をさし服は木綿の布子を著す親方と稱する上役人は皆乗物に乗りたり頭に黄なる帽冠を戴き

乗物一挺に下官一人宛附添ひ凡二十挺計跡に小童と

覺しくて緋縮緬の首巻をして乗物六挺行き跡に薩州

の藩中用人道中奉行とも覺しき人馬乗物に乗り附添

ひ行く旅館は京橋に隣る蓬萊橋の詰なれば通行は一

筋道也先に行く衣傘を見れば七八丁計り人数續けり

是をまのあたり見て京橋を渡り御座船を見る薩州の

船小笠原、毛利、龜井の紋附たる幕を張りて四艘並び

次に薩州の紋附たる船二艘以上六艘也船の役人にし

る人有りて船に入て悉く見終り今富橋をこへて中書

島へ渡りて蓬萊橋をこへ旅館の門には役人の宿割通

行の次第をしるせり明十四日は休日にて十四日未明

に薩州侯は御出立にて四つ時には琉球人出立といへ

り草津守山より大垣に至り名古屋より東海道を行く

となん泊の宿は二驛三驛を隔て多人数の混雜なき爲

とは聞けり

琉球國は南の果にて暖國也ときく我國の寒氣にをか
さるゝを思ひやりて

琉球人ひゝ霜やけの旅路かな

兼て伏水の驛には尋ね見たき所もあれど短日なれば

御香の宮へ行くに京町には大文字屋丸の別荘有りか

の南京踊りの唱歌は東都吉原京町大文字屋家の主姿

いとおかしき故紀文是に誦らせたる唱歌なりと京傳

子の書きたるを見しに何れが是なりしやしらず御香

の宮は神功皇后を祭る文祿年中伏水の城を營み給ふ

時此社を大龜谷の東に移しけるに神崇まし〱けれ

ば又此舊地に遷座有りし也とぞ賽石は敷石の間に有

り拜殿南の門は桃山の城中より移せしと云ふ彫物は

實に左甚五郎伏見に住居する事
前の條に出たりが作とも見へて美々し

ゝ北の門より出て大龜谷の入口藤の森黒門の東に出

る左右竹藪にしてよき道也爰を東の小路にわけ入れ

ば小栗栖にて明智光秀山崎の戦ひやぶれ坂本へ落行

く閑道也明智胴塚とて一塊の丘あるよし以前見たる

と小間久の話なり大龜谷即成就院に詣づる本尊は惠

心僧都の作の阿彌陀佛也壽永の頃奈須與市宗高平家

追討に出陣の時佛前の幡を借りて笠印となし西海に

下り壇の浦にて扇の的を射て名譽を顯はし道舎を修造し願望成就の意を直に即成就院と呼べり與市宗高の石塔堂前に有り高さ一丈計り無銘笠石は脇に居えたり一説に宗高日の丸の扇を射たるは譽なれど是平家より咒咀調伏の爲に射させたるにて後宗高癩疾を病死したり今洛下の者長病に臥し死生存亡を早く願はんには爰に歩行あひみを運ぶを是とすと云ふよつて參詣絶へずとなん予思ふに長門本には宗高扇の的を咒咀と知りて八幡大菩薩を念じて扇の要を射て落し日輪に表じたる日の丸を射たるにあらずと有り癩病を煩ひたるは虚實相わからねど死生を一時に決すとは誤りなるべし此程有馬に浴湯の砌にも似たる説有り死病に決したる者は入湯すべからずとゆへいかんとならば若しゐて浴する時は氣血の不順温湯の巡環に戻るが故に死期近くなると云ふ此寺に詣する人もたとへ長病に倦むとも死は易く生はかたし眞に存亡を決する者は少かるべし予兼て那須の與市の事蹟を案じ並木宗助が西海硯により新に扇の的と外題して著述をもふく未草稿にして出板ならず此頃與市と云へるに數人有り眞田與市、淺利與市、關原與一各源平盛衰

記東鑑等に出たり此與市と呼ぶ名に一説有り昔は總領を太郎と呼び二男を二郎と段々に呼び十郎の後十一人目に當る男子には餘一郎と名附るとぞ既に平惟茂は十五人目の男子ゆへ餘吾將軍と呼ぶとぞ然りやいなしらす因みに云ふ晋子の句に

二本目は與市も困る扇かな

とはよく人口に膾炙する處也五元集に或人薨の畫を一面に書きたる扇に贊を乞ふ晋子筆を採て

薨に扇の骨を垣根かな

即興奇絶せしとて今一本とて無地の扇を出されし時二本目はの句を書たりと有り世人二本目の句をしりて始薨の句をしらぬ人多ければ爰に書つく予幼き比此事を書きてしりへに

扇もつほまれは(上手は)あらじ與市かな

と云ふ句を吐きたる事ありなど思ひ出ていとをかし此前の茶店にて割籠竹筒をひらき深草野にわけ入る桓武天皇の陵を拜み山本谷口より瓦村に行く此深草の郷は高貴の別莊名賢の古廟靈佛の寺院數々ありしも千載の昔となり深草天皇の建給ひし嘉祥寺も今は嘉祥寺畑とて字となり仁明帝の陵後深草院の陵冬嗣

公時繼卿の別莊昭宣公の營み給ひし極樂寺も今は里の名となりて遺りぬ鶉の床は深草野の名所にして千載集に俊成卿の詠

夕されは野邊の秋風身にしてみて

鶉なく也深草の里

此餘古詠甚多し眞守院

淨土宗深草流義の本山なり

安樂行院

般舟院屬

をふ

しおがみ霞が谷瑞光寺に詣す爰は明暦元年に元政上人草創して法華道場とし元政の墓は佛殿の西に有り塚の上に三本の竹を植えたり常に携へし竹杖を立てしが枝葉茂りしと也傍に路次下駄と竹箒を置きたり信心の者は箒もて木葉を搔清むる事也其蝸庵瓢水親の墓に詣で

さればとて石に蒲團も著せられず

と孝行の限りを述べたり元政が母を伴ひ身延紀行の始に此霞谷の父の墓に詩でし時瓢水の句とおなじ思ひなるべしとて密に感涙を催ふす

孝行に堀るさへあるに霜の竹

門前に出て寶塔寺

法華

を遙に拜み白丈山石峯寺

黄檗派

に

茶碗子清泉五百羅漢の石像も拜したけれど日も西山に傾きたれば重ねて詣づべしと遙拜して昭宣公の墳

にぬかづきて街道に出三の峰の稻荷東福寺は街道より拜して月影にあゆみつゝ初更前春水亭に歸へりぬ翌十四日珍らしく門を氷魚よゝと賣聲を聞けり抑氷魚は江州に限れり内膳式に云ふ毎年九月より十二月迄是を貢とす氷魚を捕るものを網代と云ふ田上にて取逃したるを宇治にて取ると花鳥餘情も見へたり拾遺に

數ならぬ身をうち川の網代木に

おほくのひをも過しつるかな

とあるを思ひ出是をもとめて酒肴とし暫しまどろみしが

氷魚いつと問ふて都の名残かな

誰待つとしもあらねどにはかに歸路のいとまを告げそ爰の知る人々に暇乞ひして魚の棚の大五子に立寄り風話して七つ時東西の本願寺に詣で油の小路を下へ不動堂

青物市朝々立

不動をふどんと唱ふは古言にして

熊野の謠曲にも六波羅の地藏堂と諷ひ高砂に遺の雪

の浅香瀉と諷ふ皆古き讀み癖なるべし道祖神天満宮稻荷の御旅所に詣で八幡山教王護國寺祕密傳法院

は俗に左寺とも東寺とも云ふ遙拜して錢とり橋の末

は道はなはだ崩れ今よふやく道を造れり城南の離宮
の舊地北向不動院を拜みて安樂壽院は鳥羽上皇離宮
にまし／＼北殿をひらき營み給ふ所と聞きて詣で

藪越しや寺にはなにや榎の花

竹田街道に出てきのふ京より來たる道のみありき伏
水阿波橋船宿につき按摩賣を合手に雑話を聞くに明
朝琉球人摩州侯と共に當地發足也と云ふ當所油懸町
油懸山西岸寺の油懸地藏尊と川口船大工町寶藏院の
住吉の社と二箇所淀川上下通船安全の爲御免の勸化
と唱へて僧俗奉加の錢を船宿の客に乞ふ九月三日の
東堀の破船せしより此かたどこやらに心細く銘々奉
加の錢を上るはいはず語らず夜船安全を祈るにやあ
らんと獨をかしく

吳竹のふしみに薄き蒲團かな

大江丸の句有

春の夜や伏見あたりの片はたご

四つ前と覺しき比よふやく船を出す船夫と乗手のい
さかふも喧しく淀の小橋もいつしか八幡八崎は苦を
上げて遙拜す

風の中く／＼行く夜船かな

八軒屋にて七日の鐘を聞き夜明前道頓堀より船上り
して我屋には歸りぬ

嘉永三庚戌年神無月中旬

西澤文庫綺語文草下の卷終

今古參考 南水漫遊初編一の卷

一の卷

- 一道頓堀濫觴
- 二三津八幡
- 附難波伏見
- 難波御祓
- 三津寺
- 在原寺井筒
- 一戎橋
- 附操橋
- 西宮神像
- 一秋田屋水
- 附秋田屋饅頭
- 象牙六奇話
- 一太左衛門橋
- 附岸岐地藏
- 一奴塚同繪圖

附開地年月
黑船新地

一長町古名

附大乘坊

住吉街道

一穢多が崎

附堀江

幸町

一楊柳堤

一瑞龍禪寺

一水藍干瓢

一難波ぼうた

今古
參考
南水漫遊初編一の卷

颯々亭南水主人著

道頓堀濫觴

浪華の江南道頓堀此川往古はいさゝかなる小川にて
水上は高津仁德天皇の社地の邊りより流れ今の梅の
橋その川筋にて梅川といふ頃も此邊の地形低し元
和元年大阪落城に及び翌二年より松平下總守殿御知
行と成る然るに島の内は荒野にて三津八幡も纔なる
小宮三津寺も小庵也東横堀より長堀、西横堀今の道
頓堀まで四百五十間餘四方家建の儀下總守殿より今
の總年寄安井氏の先祖道頓へ仰附られ則町割を致さ
せ道頓堀東横堀より木津川口の荒地を安井氏拜領有
て川を堀り南堀と名附け兩側へ建家なす其後寛永年
中於國かぶきを興行せしより芝居町といふ此芝居を
南堀へ引移され安井道頓の法號を用ひて道頓堀と改

めぬお國かぶき女藝を禁じ給ひしより若衆子供の踊
り興行有りしかど承應元年七月に是又御停止仰附ら
れしかど翌二年巳の三月かぶき物真似狂言盡といふ
名目御免ありてより今文政三年に及び百六十八年
々に繁昌す延寶六年午初冬出板大阪道おしえといふ
小冊に

道頓堀橋の分但北南へかゝる東より
内より堀より西へ落

大和はし中橋これや日本橋

南のかわそしはるなりけり

太左衛門西はるひすになんは橋

さて其すゑはるつた村也

長堀より南町名寄北より

うなき谷大はうしせつたすわう殿

もめん三津寺はては道頓

右の歌を見れば大和橋と日本橋の間に中橋といふ橋
ありて今の相生ばなし此考は六軒町重井筒の條に
著す扱亦幸町の邊に穢多村あり其外今の清水町筋を
雪踏屋町と呼び八幡筋の木綿屋町といふ
今も八幡すぢ
西横堀懸りた
る橋を本綿
屋橋といふ是等の考は末卷著す

三津八幡

古圖に三津、長堀、江川とあるは今の長堀の川筋をいふ同圖に布之美とあるは今の伏見町の邊也又三津八幡の邊をもいふこれ難波の伏見の里也それ伏見の和訓は伏拜みの略訓にして古しへは旅行の人遙に帝都の方を拜して通る所也といへり奈良の都の伏見は菅原をいひ難波の伏見は高津の宮難波の都の伏見也山城國今の伏水も帝都を伏拜む所なれども誰あつて平安城の方を伏拜む人もなく只下り船の遲速をのみ諍へり伏見は神社の遙拜所と同意にて八幡の伏拜みなども古書に見えて皆山下を通る人の遙拜なす所也といへり三津八幡宮は神託によりて行基菩薩の勸請也毎年八月十五日の祭禮は夜陰に及んで神輿三津寺の前なる旅所へ臨幸あり社説に云當社は清和天皇の御宇筑紫宇佐の神男山に遷座の時孝謙帝の御宇とも西海より初めて致り給ふ洲中也その舊跡に祝ひ祭るといふ又一説應神天皇の行幸の地ともいへり天和貞享の比迄は八月十五夜遊客此所の月を賞し各深更に及んで家に歸るこれを月見と稱し又難波の御祓共いひて賑はしかりしが今は此祭禮を知る人も稀にして月見の夜といへど深更の渡御なれば拜する人も多からず古圖に三

津の里三昧寺とあるは今の三津寺なるにや此地は今も折節に土中より舊き石塔など堀出す事有といへり因に云八幡の隱宅に井筒あり上代和州在原寺にありし井筒なるよし中古の事にや當國伊丹稻寺屋某とて富人人家宅は勿論庭前の樹木に至るまで風流を好みて頻りに珍石奇樹を聚め其頃和州在原寺の僧に約してかの寺内なる井筒を白銀四百枚に換て稻寺屋の庭に移す此井筒は伊勢物語に筒井筒あづゝにかけしまろがたけと詠じたる時の井筒なるを無位無官の平人の身として所望せしは倉忽とやいはん心ある人は眉をしはめて誹謗せしが程なくかの稻寺屋身上不如意に相成り家屋敷も賣拂ひて井筒は茂りたる草むらに残りしが其後三十餘年誰問ふ人もなく空しく打捨ありしに豊竹越前これを望みて金子貳拾兩にて求め島の内八幡筋の隱宅に移す程なく彼宅も亡びて又もや井筒のみ残れり惜むべし〱稻寺屋なくんば井筒も在原寺にとゞまりて人も是を賞すべきに白銀黄金の媒に空しく名を失ひ塵芥に埋れしは實に雙袖を浸すに堪たり

戎橋

道頓堀戎橋の異名を操り橋と呼ぶは往古あやつり昌んの頃は今の大西筑後座戎橋の西にもあやつり芝居ありて諸見物かならず此橋を渡りしゆへかく異名とす此橋の南詰にて毎年正月九日十日西宮えびすの御影を弘める事往古より嘉例とす夫ゆへ戎橋と呼ぶか亦是今宮の恵比須の社真南に當るゆへにや此橋の西なる難波橋を大黒橋といふは戎に對しての名なるべし貞柳の家集に

西の宮戎の札を道頓堀戎橋邊へ持來りて披露
なすを見て

わたりかぬる人をたすけん爲にとて

西の宮より來たえひすばし

窓のすさびに云

今時恵比須の像とて繪にも書き木にも刻みぬるは廣田の神主の像也神功皇后筑紫より歸洛の時西宮廣田大明神の祠廢して神主釣をいとなみとしてやうく神に仕へけるが鯛を釣て捧しかばほうび有て由緒を尋ね聞給ひのぞみ有と尋られしに外に所望は候はず神社再興を願ひ奉ると申せしかば頓て造立ありしかや此神主の名を夷三郎といひけ

る此神主が功にて中興せしかば末社に崇め祭りけるにぞ後世に至て堺の商家此官を信じ月詣せしが有福に成しかば神の恵みとて殊に渴仰しけり老後にははや月詣も成がたく何とぞ居所に神影を勸請し朝暮拜し申度と望みければ神體はうつすべき形もなければかの夷三郎が皇后へ上るとて鯛を釣て持行所を繪にうつし與へけるが世上に弘ごりたるとぞ

秋田屋水

古書に千日寺の堀井の水道頓堀側の秋田屋の水は大阪四所の清水と呼びて酒を醸するによしと云傳ふ愛宕の水聚樂町天神の水は天滿天神境内にありいづれも名井にして茶道にはかならず此四所の水を用ひしが堀井の水も秋田屋の水も今は知る人なし古老のいふ秋田屋は竹田の芝居の隣家にて饅頭を商ひたる家なりしが寶曆の末に絶て名井も度々の類火に今は所も定かならず桂井蒼八戲作古文鐵砲に云

道頓堀秋田屋まんちうを賞する詩

新店更斯_ニ於菟家、頓河名物勝_ニ於花、
相逢方孔爲_レ君放、霜雪裏_レ甘酒當_レ茶。

其頃粹名高かりし堺筋象牙屋六兵衛といへる人夏日島の内の青樓に遊び暑の堪がたきに砂糖水を飲んとて歌妓仲居を引つれ秋田屋へ來り一箱の砂糖を井のうちへ打こみ竿竹もてかき廻させ頓て飲んと汲あげしかばさしもの名水も泥に變じこは珍説也と手を打て興じぬ

太左衛門橋

太左衛門橋は立慶町角の芝居名代大阪太左衛門座の前に懸りたるゆへかく名附く此橋の面手の濱地は北濱淀屋古庵世盛りの時此地面を買取て千日の墓所へ寄附有しゆへ今に聖六坊の持地也往古は千日への葬送は大かた船にて來りて此濱地へ著たり夫ゆへ五六十年以前迄は此處の岸岐に石の地藏の迎ひ佛ありしが度々の焼火に失ぬ此邊より法善寺の門前都てだら／＼おりにて凸凹の道惡かりしが寶曆の頃並木正三の工夫にて角の芝居の二の替り三十石燈始といふ狂言の大切り廻り道具を仕初し時舞臺の下を堀たる其土を以て往來の通路よき爲に此邊の道を直せしより今のごとく平地と成たり其昔は芝居裏人家まばらなるゆへ元文の頃北の新天地にて五人切したる早田八右

衛門鼻に懸けられしを芝居の樂屋より見えたるよし古老のものがたり也

奴塚

延寶三年卯の春飢饉にて京都に餓死する者夥しく有ける其時智恩院の長老塚を築き引導なし度よし町奉行能勢日向守殿へ訴訟ありし所同役松村吉左衛門殿立會にて日向守殿何國に塚を可申附やと吉左衛門殿に御談合被成候ゆへ松村殿被仰候には大佛の耳塚も年月を經れ共其名今に残り大阪城中に先年喧嘩の事ありて奴ども五六十人も殺害なし大阪道頓堀の墓に塚一つ穴へ築込今に奴塚といふ諸人申傳えて何の詮なき事也餓死の人は海川へ流れ次第に打やり捨たるが可然哉その塚後代に残して其時の天下の耻辱也と被仰しと也日向守殿も尤也と其事止ぬ松村殿の申されし奴塚も今はなく爭論もいつの頃やらん詳かに知れ難しと土橋氏はなし覺といふ寫本に見えたり千日の奴塚寛文の頃まで有しと見えて寛文元年辛丑六月改正の大阪圖に奴塚あり

圖中七不思議の梅檀樹今は所もさだかならず按するに廷享元甲子年高津新地開發の砌此大樹絶しが高津

七ふざの
せんぶん

せんふち

ひや

みどろ
まどろ

出羽
まどろ

久たろ
まどろ

七太夫
まどろ

大和

中ぎ

日本むし

太たの橋

まびるむ

新地の増地は明和二年也前文にいふ中橋も圖中に見えて慥なり其餘芝居四軒見ゆ千日とあるは法善寺いふ難波新地は享保八卯年京橋一丁目の人家を道頓ぼりの南へ引き本京橋町の名あり元祿十六年末三月玉造伏見坂町四丁を千日前へ引たり明和六年丑の春自安寺の邊新地と成て人家建つ世俗黒船新地といふ其心は向ふに獄門が見ゆる故也とぞ

長町古名

長町は古名名古屋町也應神天皇の御宇吳人吳織、漢織、此濱に著岸此邊すべ吳人往來せし道なるゆへ名古屋の濱名古屋の江名古屋の海又は名古屋の坂名古屋の原など日本紀に見へたり

なこの海の沙干のかたは遠けれど 公 朝

目に近よりし淡路島やま

かゝる古き名を長町と呼びあやまりしさへ意恨なるに近世寛政七年公に訴へ長町五丁目迄を日本橋通と改め漸六丁目より九丁目迄に舊名を残せり

東都四方眞顔浪華に遊ぶ頃浪華の昔物語を聞てみをつくし首だけはまる那古の海今はをなごの海と成けり

長町六丁目大乗坊は中古備中國倉敷地藏院といへる寺の隠居正慶といふ僧大阪難波村へ引越し在しが毘沙門天の修法をなして病氣を平癒なさしめ其外願望成就なさすといふ事なし依之諸人參詣群集なすゆへ寶曆八年寅の秋難波村より長町六丁目今の地に引移りて大乗坊を建立す夫よりいよく參詣多く相成地内に面屋といふ奇麗なる茶店を設て香煎を出せしが其頃は珍らしき事なりとて賞翫す其外近邊に料理屋出來て夜に入れば近邊の遊里より女郎藝子夥しく參詣して大きに繁昌せり近世毘沙門の祭禮あり毎年六月十五日初更の頃長町六丁目より勝曼坂の上毘沙門堂へ渡御翌十六日還御は無言祭りにて道樂あり當所九丁目迄人家軒を並べ大半旅籠屋數百軒と成たりしが延寶七年上木難波鶴といふ小冊に

八軒屋はたごや十一軒長町はたごや十軒

とあり百四十餘年の昔を思へば今の繁昌を知るべし此邊より住吉へ參詣の街道は豊臣家の御時泉州堺より大阪へ通ふ便りよき爲其頃造りし新道也依之大阪にては長町より北をさして堺筋といへり古道は今の安部野道往古の街道にして太平記に楠正成京勢を支

し時其身は天王寺の半途に在て味方の兩陣へ軍使を遣はし櫛のはを引が如し一日に馬を十二疋乗かへしなど記せしも今の安部野街道なるべし安居天神の祠は菅公筑紫へ下向の時こゝにしばらく休息ありて船帆の風を待給ひし地也といひ傳ふもさも有ぬべし新古今和歌集詞書に天王寺の西門より船にのりて西の國へ下るとあれば大江の岸につゝきて船著なること明らか也一本證とすべものにはあらねど松の落葉六の巻

石川五右衛門

松本治太夫

うき世のせわに申なるひんのぬすみに戀のうた今石川が身の上にて思ひしられてはづかしやせひにをよばず五右衛門も女房にはふかくかくし内よりはかごのかせぎにうちみせて彌之助かたらひたい二人ほうひげ作りさまをかへ大小をぼつかふで長刀さげてあけくれとあべのゝつゝみでおいはぎして往來の者どもをきり取はぎとりあはるゝゆへそれより下道につけかはりさかひすみよしてんが茶屋大阪迄の道の用心よろしく成次第にあべのはさみしくなる下略

穢多ヶ崎

往古の穢多ヶ崎といふは今の川口船番所安治川橋の邊なりとも又は島の内三津寺觀音の邊ともいふ慶長十九年寅十一月十九日未明蜂須賀阿波守穢多ヶ崎大阪の砦を破るよし冬夏攝戰記に見えたり寛文延寶の頃までは下難波領今の幸町の邊に穢多村あり太左衛門西は戎になんば橋さて其すゑはえつた村也大阪市中家並追々に建續きしゆへ穢多村を今の地に轉ず然れども今に難波領の内に穢多屋敷と呼なす所こゝかしこにありて明地とす元祿十一年堀江古川富島に人家建つ同時に道頓堀湊町世俗にふかりとの西に幸町一丁目より五丁目迄人家と成扱又堀江に玉造橋の名あり北堀江南堀江の地東は西横堀南は道頓堀西は下博勢の東側北は長堀川を限りて往古は四方の川岸に片原町有て堀江川もなく内は難波領の野畑也此内新玉造橋より西は玉造より引地にて總名を新玉造といふ下博勢の地也元祿十一年右の野畑を不殘新地に被仰附中央に川筋を堀て堀江川と名附け南北に分つて南堀江北堀江といふ古來上難波下難波といふは此地の事也是より元祿以前の古地と新地と入交りたり

安永八年亥の七月二十九日より幸町一丁目にて大角力ありし也勸進元御所櫻長兵衛東方關脇谷風梶之助小野川も方屋にて中の四大阪小野川喜三郎とあり相撲の一件委しくは末卷難波新地の條に記す

楊柳堤

難波領御藏の船入を新川と呼び此川邊を楊柳堤ヤナヅといへる名を知れる人稀也楊柳堤とは難波村東の口に柳の清水といふ名水あるゆへかく呼なすもの歟寛延三年午六月朔日初日豐竹座のあやつり夏楓連理枕といふ院本に道行楊柳堤と題して百間堀より難波瑞龍寺門前迄の文段に

炭屋町濱を南へ見渡せば破軍の星が劔先船もかゝる二人が難波ばし堤傳ひに行のべに四ひらの花や夏菊に露か螢かちら／＼我なきたまの數そへて無常の煙立迷ひ心ぼそげな犬のこゑ身にも清水か柳さへ爰で死とや松の露木影にしばしたどり行

瑞龍禪寺

教訓しのぶ草に云

難波村慈雲山瑞龍禪寺の其むかしは鐵眼といへる僧一人草庵を結び座禪怠らずおはしけるに一夜い

とうつくしき女年の頃二十歳計りなるが門を叩きて涙と共に申けるは大阪に何某といへる人の妻にて侍るが本妻の嫉妬によりて追出され親なるものの堺に侍るそのもとへ今宵泣々歸るにて侍れどさらぬだに女の夜道犬狼盜人などのおそろしく候へばわりなき事ながら一夜を明させ給はれかしとしみ／＼と哀にも頼みける鐵眼和尚つく／＼と見給ひて一夜を宿しまいらせんはいと安き事也さりながら夜明なば歸り給へとて夜るのものなど出して風ばし引給ふなと懇ろに宣て和尚は學問所へ入給へば女は斜ならず悦びながらも心細く寢もやらす明しけるに夜更てしきりに艾の匂ひしければ不審しく襖の間より和尚の寢間を窺ひみれば和尚みづから男根に灸をすへ居られける扱夜もほの／＼と明けるに和尚表を開き女を戻されけるかくありて年月を経て飛鳥川の淵瀬つねならぬ世の中かの本妻身歿りて後くだんの妾後妻にかしづきかの女も過にし和尚の事ども物語などして夫婦共に歸依しけるがはたしてかの旦那寺を建立し今に絶せぬ禪林と成れり夜道を恐るゝ女を憐みて一夜をやとし

煩惱のおこる心をいましめたるありさまいと殊勝なり

水藍干鱗

染色に用ゆる藍は阿波國より出るを最上とすといへども當國難波村又は山城國より出る水藍に一妙あり阿波の産は濃き色に用ひて可也難波村の水藍は水淺黄中淺黄空色の類ひの薄色に用ひてよしとぞ昔三津寺前より多く干瓢を出せしが後世町家建て續きしゆへ今は木津の一村里人これを作りて此地の名産とす實のりたる時に取て輪切にし皮を去て細くむきあげ箕に懸て日に干す

難波のぼうた

難波木津の兩村に婚禮の取結びをなすに表向にて結納の祝儀を調へる時は萬事の費多く身體不如意の者は跡々の差支にも相成ゆへ右體の輩に女子を持ち似合しき聲ありて此娘を所望する仲人相談に及ぶ時さあらばぼうたにせんと約する事あり吉日を撰んで其日にも成れば嫁は化粧し衣服の曠着を取出し我家に待居れば兩親は知らず顔して他へ出行其跡へ聲の方には日頃親しき朋友など五六人かたらひ駕籠を持た

せ出來り何の挨拶もなく彼嫁を駕籠へ打乗せ聲々にぼうた／＼と呼はりて聲のもとへ連歸る其餘の祝儀は他に異なる事なし按るにぼうた／＼と罵るは奪ふたといふ略語成べし

今古
參考 南水漫遊初編

二一の卷

一六軒小夜格子

附 於房徳兵衛戯文

中橋考

樽屋町

心中名寄

一 小三金五郎説

附 籠屋町額風呂

島の内娼家名よせ

金五郎唱歌之辨

釣行燈唱歌

一 於妻格子

附 坂町妓女若野一夜附狂言

一 小野屋膏藥

附 萬石通戯文

雙蝶々趣意

一 仙人煙艸

附 仙人裏

玉屋町石の次左衛門

一 芥ぐゝり

一 袖香爐

一 春木屋梶女

附 首のぶこすのと唱歌

一 奴小萬傳

附 病床迎春文

今古参考南水漫遊初編二の卷

颯々亭南水主人著

六軒町小夜格子

島の内六軒町といふは塗師屋町也重井筒の戯文中の卷に「月ははやわたりぞめして中橋や六軒町の小夜格子」とて娼家の二階窓の竹格子をいふ寶曆の頃までは兩三軒残り有しが今はなし此邊を六軒町といふは元文寛保の頃まで女郎屋六軒あり堺屋、桔梗風呂、重井筒屋藤十郎、美濃屋、春木屋伊右衛門、河内屋勘兵衛等と呼屋には榊屋三右衛門、駿河屋喜兵衛、橘屋嘉兵衛、京屋七兵衛、豊島屋三右衛門、大和屋次兵衛、大和屋伊兵衛、津村屋幸助、松原屋源助など釣行燈の火影に家々の繁昌を爭ふ六軒町の異名今に世俗の口碑に残れるはおふさ徳兵衛重井筒の戯文あるゆへ也重井筒屋藤十郎方の抱女郎おふさ上町紺屋徳兵衛と高津大佛勸進所にて相對死せしは寶永元年申十二月十五日夜の事にてお初徳兵衛が梅田におゐて心

中せし翌年なるゆへ道行血汐の朧染の文中にお初天神記の道行知死期の霜の文句を取れりお初天神記は近松氏の同作也天始にて大當りせり

いとゞ思ひにくれたけのふしをならひし上るりもよその事よとなぐさみしが今身のうへにふる霜の一足づゝにきへうせて死に行身のあぢきなや下略初卷に著す道頓堀大和橋と日本橋の間に中ばしありしはいつの頃にか絶て今の相合橋は寶永の初に懸りて中橋と名附しにや重井筒中の卷の枕に月ははやわたりぞめして中橋や

六軒町の小夜格子

とあり其頃樽屋橋といふは酒邊町也同書に屋根傳ひにうらへぬけ樽屋町の門へおり宗門なればにつしん様の御門で死せて下さんせ中略今ぞ冥途の門出とこれをかぎりの立酒やたる屋町にぞまよひゆく

其頃は世上に相對死多かりしにや道行の文中につゝむたもとのひだのせうふたつかひの手妻にもかゝるなりふりうつす共此思ひをばよもしらじこぞのおしまの心中のその井筒屋にわれが今かさ

ねるづゝとしのづかにいはれ岩井の半四郎うれい
せりふのあやめ草

猶又心中多き證は元祿十六年出板の草紙心中戀の塊
り并名寄鹿子といふ五冊ものあり

久太郎町三丁目丸屋むすめお梅^年 男は内の手代

五兵衛^年 内藏にて新町通筋一丁目播磨屋局す

みのえ^年 男は内本町上三町大和屋九兵衛^年 二十八

松本芝居のうしろにて新地新茶屋まら天満屋お山

おはつ^年 男は内本町橋詰平野屋手代徳兵衛

兵衛^年 曾根崎にて堀江茶屋山衆きよ^年 男は侍奎

兵衛^年 天王寺元尼寺にて油町茶碗屋かると

は木屋天神出羽手かけ者也^年 同弟喜兵衛も相

果男は南久寶寺町枳屋權兵衛^年 堀江御池通天

満屋おきよ^年 男はいかり屋又兵衛^年 天王寺庚

申堂にて堀江南濱側明石屋おつね^年 男は長堀

平野屋手代治郎兵衛^年 生玉馬場先にて堀江御

池筋けまやきてう^年 元は新町女郎男ははぐ

ろ町らくがん屋七郎衛門^年 坪の内にて願教寺

堀にてさつまや下女中居おたま^年 男は同久三

名は七兵衛^年 敵は同手代嘉兵衛^年 堀江にて

茶屋扇屋抱女おきよ^年 男はむすこ清太郎前髪

十七安堂寺町堺筋平野屋うば^年 同立町いしや

の下男七兵衛^年 二階男部屋にて新町通筋一丁目

廣島屋松坂首しめ心中男は瓦町せつた屋七兵衛身

なけ心中清水ぶたい下にて中の島わん屋内およし

十九男は大工町けんかく内六尺半^年 北野神明

の前にて和州八木村にて百姓の子午之助^年 女は

其邊のつとめ者しのぶ^年 女の方より仕かけ心

中

右の本文を載るもくだしければ心中の目録計り

出す此冊子の奥書に

此外珍しき心中出来次第跡より書加え追々出し申

候方々所々に名のなき心中數多有之候へ共爰に略

す

元祿十六癸年七月吉日 萬屋彦太郎

往古はかゝる冊子を出板なし戯場の院本にも其實説

を書り又一本心中大全といふものあれ共略す

小三金五郎説

元祿の頃浮名立し額の小さな金屋金五郎の實説を探

り見るに島の内に額ぶろといふ娼家なし難波雀とて

延寶年中出板の小冊に其頃市中に垢すり女有し風呂屋十四間湯屋二十二軒と記す同時出板難波鍵にも同斷其中に蠟燭風呂道頓堀六間町、太左衛門柳ぶろ、六間町善兵衛とありて額風呂は籠屋町治郎右衛門也延寶六年午冬出板の小冊道しるべには

風呂屋十四株内天満八丁目大黒風呂三人同五丁目扇ぶろ三人内平野町樂師ぶろ三人内あんどじ町はせぶろ二人太左衛門橋柳ぶろ三人其餘はゆな無之

かく記せ其元祿の頃には額風呂にも湯女ありて小三と呼ぶ其證とするものは元祿年間の冊子風流文車といふものに額ぶろの湯女小さんが垢する處かきたる圖ありて小さんは其頃名高き湯女と見へたり扱亦金屋金五郎といふは歌舞妓役者にて歿年は太左衛門芝居角の芝居也加茂川のじほ座の抱役者なるよし額の小さなは籠屋町にて時めきし湯女なりしが後に島の内綿屋といへる娼家の妓婦と成れり是等の證とする事其左に著す

松の落葉に大阪茶屋名よせ
つらいつとめが身にしみぐとはやり小唄のその

一ふしも聞てなり共月日をまつやぐの小さんは綿屋のつとめ戀がござればつとめのさはり略下宇治加賀掾院本難波役者評判と題せし金屋金五郎を仕組し戯文に

がくの小さんは心からふる屋のつとめ引かへて同じうき身も品かはるちや屋の山しゆのなかま入綿屋といへるおやかたのきがねもよしやかの人の爲とおもへばうらみなし

同書綿屋金五郎道行に

身はかげろふのありやなし情ひとつをわすれかねしはしあはぬもつられどすぎつるしゆびを思ひやりわれとひかへし心の駒いまははなれて行足のなに長町の一やどりたびやのうちも夢むすぶころしも霜月二日の夜月かげよりもしら雪のふりつむ道をたかあしだつえからかさをつたのめ我よにありし身なりせばかへるうき目はよもあらじまことに小さんと我中はおのほりづめのふたつゐどどちらを見ても深けれど客のさはりと親方がせいてふつ／＼逢せねば初のはどはまちかたの客とつれだちかよひつゝおりにふれては逢しかどのちは親

かた其手もくはず今はせんかた涙の雨や風の吹よ
も雪ふる夜半もかぶとづきんでかほかくし逢ふ夜
あはぬ夜さだめなきこよひのしゆびをいのらんと
高津の宮をふし拜み千日すぢのはしのうへ角のし
ばるは我すみし戯場の通言に其座へ抱へなぐれもきよ
らるゝ事を住込といふ
きかも川ののじをに身をばまかせつゝやがて顔見
せあるはづとかたらばさぞやよろこばんと思ふ心
のそこふかきいけだやまでは北嶋屋たとへいかな
るみはらやにならばそれからそれまでとおもふ思
ひをするがやと千々に心もくらはしや我もし浮世
をさるならば跡にのこりしかの人の姿をかへてす
みぞめの尼が崎屋で身はねれ衣いろがくろけりや
大黒屋じやと人が名たつりやすこしはわくやわく
かわかぬか井筒屋の座敷によねをつみて湊屋いざ
こぎよせん戀の相場のとりやりにまけかちのない
色所かりましょかろといふこゑは耳をこすりてか
しましく京屋伏見屋さつま屋のかどを過こし見や
りつゝ小さんが住し綿屋なるむかふの軒にたちど
まりしばらく様子をうかいひける

當時世に流布する金屋金五郎の唱歌は此院本と國太

夫ぶしの忘れ草といふものゝ文句をこゝかしこ綴り
合せて作りしものか道行の奥下の巻の文段に

かくとは知らず金五郎綿屋の門に立よりて内をの
ぞきかうしに立せんかたなさに思ひ附坂田藤十杉
山勘左扱は玉川半太夫其外の口まねし我をしらす
る心のうちあはれなりける戀ぢ也小さんはそれと
聞よりも心にこたへうれしく氣もたましひもうか
／＼と客のきげんを窺ひ表のかうしに走り出見
ればかなしや降雪の其中にしよんぼりと立に目も
くれ心きえ小ごえに成て是かねさんではないかい
の

「先々待てくだんせと涙を流しとめける時小さん
奥へかりませふ二かいへちよつとかりませふと杉
がよぶこゑ耳をつきぬけ是非も涙を袂につゝみ後
にま一どちよつとござんせ語らで叶はぬ事が有
」哀れなるかな金五郎せつなき戀に身をやつしゆ
き霜あられ雨の夜も風もいとはず行通ふ思ひかさ
なるやまふのとこ今は枕もあがらねば次第／＼に
朝がほの日かげまつ間のうき命終にむなしく成け
れば知るも知らぬもをしなべて扱々おしや藝ざか

りあつたらごとの南無あみだといはぬものこそなかりけれ

「袖も袂も涙のつゆ霜月二十日の朝あらし消し金屋がうき命でんくはうてうろ石の火のあだにはかなきうきよかな

絃曲の唱歌には師走二十日の曉にとあれど此院本には霜月二十日の朝嵐に消ると書り道行は霜月二日の文段にて十八日過て死たりと覺ゆ

宮古路梅園に云浮名のはやり唄がくの小金五郎忘れ草

嵐三右衛門 座

太夫 松本澤太夫

ワキ 松本吟太夫

三味せん 竹澤六十郎

くるふとも思はで狂ふ姿こそ戀にやつれし金五郎は人目を忍ぶかさや町ちたびもゝたびいては又もどりつゆきつ立どまりそれとしらすこはいろをきくに小さんは心にこたへのべのかたおり立しほのさしくるあいのもつれをば餘處に見なして格子へいでゝ見ればかなしやふる雪の中にうづもる立すがた申々と小ごゑになりて一つふたつとさゝやく内に奥よりかけし人ばしごはなす詞のへんじに

まぎれのちにま一度ちよとあいませうと跡に心を残しをくなさけないぞや金五郎は軒にしよんぼりたひひとり

と書り是等の文段合考すべし又云前文にも記すごとく額風呂は籠屋町にて小三が妓婦と成りて出たる娼家は綿屋なる事明らか也然るに釣行燈といふ唱歌の中に附合にのむさゝ風呂もついに綿屋にはりもつて又はそばかりはやす額風呂のなどゝ書たり此唱歌は遙のちに中村十藏といへる俳優の事を作りしものにて其ころは額風呂笹風などいふ娼家ありしと見へたり

難波雀に笹風呂太右衛門淡路町とありし其頃は藥師風呂も内平野町にありてゆな三人あり

金五郎の道行に茶屋の名よせあり釣行燈の唱歌は中村十藏の事を作り同じ俳優家といひ趣きも彷彿たり

釣行燈 前一中調
鶴山勾當改

くわきやうが身のくづをれや口舌は宵の夢心さめてもぬけの闇の内こけつまろびつ橋柱わたる向ふにまばゆくも誰が身をえばにつり行燈かげにたゝすむなりふりをそれぞとやがて走りつきコレきざ

んさんどうぞいなきざんは十歳が初の俳名とぞ思ひすごしの一言

が夫ほどお氣に入らぬかへ粹ほど愚痴に戀の山思はぬ客に思はるゝせめてお前に百分一可愛がられりや本望と人目もわかぬ恨み泣きざんも心しみるゝと縁はおかしやサイノ過し迄誰とも知らで見し人の馴ての今は二世三世親のゆるさぬ中なれど命にかけて大阪屋わしはお前のやゝ抱てよに肌ふれず伏見屋と外の勤も苦に成せめし三原屋が附合にのむさゝ風呂もついに綿屋にはりもつて餘處の噂に大津屋も花橘屋かにめでしゆかりをねたむ姫路屋の弓も引かた甲屋にあじろのはへや打むれて京屋扇屋よすがをば門に松屋とそやされて物憂ことと大村屋そばからはやす額風呂のてうしにのつて大黒屋槌や俵屋打出してこなんと夫婦といはれたらどふしたひんくをするとてもわたしが心は福島屋土佐屋さぬきの果迄情は義理の有ものを風にまかせよ柳ぶろいせや八幡の神様を紋目ノと澤山さふにいふた報ひか儘ならぬわたしが心が竹屋なら割て見せたい男めはわけも涙にないじやくりさざんもいとゝ思ひ川せなゝでさすりしばしとて

爰もしるべの假枕つれてかちやうに入にけり

或人大和國五條茜屋半七といふものと相對死せし三勝も大阪かごや町額風呂のかゝえにて小さんと時を同じくせしお三といへる湯女也といへるは忘説にして三勝半七の事は三の卷に記す金五郎の歿年元祿年間とは見ゆれ共いづれの年ともさだかならず三勝半七の心中は元祿八年乙亥十二月七日にて額の小三も同時とあれば金五郎の歿年も元祿八年歿金屋金五郎浮名額といふ戲文は元祿十五年豊竹座のあやつりにて勤む前文に著す宇治加賀座の難波の役者評判といづれが前後なるにや未考坂田藤十郎、杉山勘左衛門、玉川半太夫等と當時に役者にて風呂入會我は玉川半太夫の作とも金屋金五郎作とも歌系圖に記せ共此説は信じがたし

於妻格子

六軒橋の小夜がうし玉屋町のお妻格子といふ名は今に人口に膾炙す小夜格子は前文に著す於妻格子といへるは中橋筋八幡筋より北東側にて當時榎並屋某といふ醬油屋の邊也世人の口碑に残れる古手屋八郎兵衛が爲に害せられしお妻といひし女郎が住し處ゆへ其舊宅の格子

をかく呼なし三十年計り以前迄は存せしぞ八郎兵衛の唱歌は俳優家元祖の嵐三右衛門作なるよしさあればお妻八郎兵衛は元祿の初の事にや元祖嵐三右衛門歿年元祿三年十月十八日一説享保二年の事ともいふこれを信せば八郎兵衛の唱歌嵐氏の作虚ならんいづれか其信偽を未考明和元年八月中の芝居にて文月恨切子といふ狂言を勤しは七月下旬坂町の妓婦わか野と呼なすもの法善寺の細間にて殺害せられしを一夜附に仕組八月一日より切狂言に出し享保二年の古外題を用ひし也

通り筋のぞめき歌ふしと唱歌は

我身をせめる心の鬼は丹波屋おつま

昔の古手

今の新物

文月恨切子

千日寺の鐘のこゑ四つと二つは

我身をさくうなぎ谷の八郎兵衛

小野屋膏藥

正徳享保の頃浪華の市中にてもてはやせし小野屋かうやくといふ賣藥家は道頓堀中橋北詰三軒目にて名は作兵衛といふ享保十年巳正月二日初日豊竹座のあ

やつり昔米万石通西澤一風作上の巻に

小野屋かうやくと呼ばれて頃も六十餘りねばりづよなる堅親仁箱ふりかたげ立よれば中小野屋かうやくめんやうなかうやく此膏藥の奇妙には何んでもかでも一とつけでそつべりなをると思はんせとりわけねぶとやはれ物や打疵や切り疵ようてうやけんべきひやあかざれ松の木のはだへのやうにくつも切れても小野屋かうやくをこよりのやうにはそめてちよぎやちよんとこそぐればちごや女郎や十六七の娘ごのはだえのやうにすべりつくめんよふなかうやく

藥の機能をいひつゝ賣歩行さまを戯文に仕組又其比名高かりし放駒長吉の實父とし今世に翫ぶ雙蝶々曲輪日記の原本とす中の巻に

大寶寺町に住居して營む業は搗米屋丸屋仁左衛門と人にもしられ年は六十三年米妻は子種の不作ゆへ二人のこ米やしなふて末の飯米拵も兄の長吉外を家妹のお長十三の年より知惠のひね米屋下部ひとりを相手にて世上の花見月雪も耳のとなりの糖ばたらきふむ米よりも世わたりにかしらの髪をし

らげける

雙蝶とは此戲文にもとづき長吉の妹お長を姉のお關とし濡髪長五郎と爭論山崎與次兵衛を與五郎と轉じて藤屋吾妻の事迹など一部の戲文に取組大當せしは寛延二年七月竹木座作者は並木千柳竹田出雲にて西澤一風が萬米通より二十五年後也右雙蝶々を歌舞妓にて勤しは五年過て寶曆三四年五月五日より角の芝居三枅大五郎座にて八幡坊迄勤めしが始めにて夫より三都におゐてあやつりよりは歌舞妓座に花がたの役者兩人ある時は二枚ものとして必ず此狂言を出して大當りなせり

仙人煙艸

寶曆明和の頃まで島の内塗師屋町に神農の像に紛ふ仙人の木像を招牌に出したる煙草屋ありたばこの看板に仙人の像とは異風なりとて世俗仙人たばこと呼びこれに隣りし路次をも仙人裏と綽號し今に中橋筋八幡筋南西側の路次を仙人うらといふ仙人煙艸は八幡筋より南へ二軒目に住し家號は若松屋文七といへり一説平野屋茂兵衛とも扱又玉屋町は元文の頃まで當町に玉屋次左衛門と云人あり依之玉屋町と呼ぶにや玉屋は儉約

家にて居宅に専ら石を用ひしゆへ石の次左衛門と綽號すさ計り石に根繼の儉約家も絶て玉屋町の名のみを残し不老不死の仙人たばこも竈の烟り空に消て行末しらす成にき

芥ぐゝり

六軒町の娼家河内屋勘兵衛といふは明和安永の頃風流の人也其家今樂店と成る絃曲けしぐゝりの唱歌は河勘追善の爲に出す其頃は婦女の袖口にけしぐゝりといふもの専ら流行せり

子の日せし松によりにしやどり木のとみしかつらも露にぬれ時雨の雲にあふと見し嵐の木の葉ちりづかにちりもとまらぬみつせ川なれしいとには似ざりけりなみの紋日のをとものすごさやまひこさらに空しき契りさへかはかん袖のけしぐゝりむすぶあさちに置霜の春にあはめやのりにあはめや歌系圖に鶴山勾當調紙屋源右衛門作とあり此作者は朝三といひて明石の人也木端の門人にて狂歌をよむ一日木端遊處に行て歌妓の三絃を聞うち朝三作のけしぐゝりの事を思ひ出し此歌を所望するとて口號みに

袖口のあかしの人のつくりたる

けしぐゝりをばひいてたもとよ

此唱歌にかはかぬ袖と有べき手爾葉をかはん袖と
諷ふは追福の主河勘の名を書こめし也木端の門葉に
て達人の聞へある朝三なれば手爾葉のけぢめはよく
知れどもわざとかはかんと書たるは是等をや曲言と
やいはん

袖香爐

豊賀檢校は南疊屋町に住す墓は下寺町遊行寺に有得
明院前檢校丁圓大居士天明五年巳十一月七日卒す行
年四十三袖香爐の唱歌は此法師の追善の爲納屋町飭
屋次郎兵衛作峰崎勾當の調也

春の夜のやみはあやなしそれかとよかやはかくる
、梅の花ちれどかほりは猶のこる袂に伽羅の烟り
草きつくおしめど其かひもなきたまみつもほんに
まあ柳はみどりくれないの花を見捨て歸る鴈

春木屋梶女

六軒町春木屋伊右衛門といふ娼家に寶曆六年の頃に
や梶と呼ぶ妓婦あり生質大膽不敵にして容儀は美な
らねど三絃は法師の名家をも欺き且茶の道生花香道

も熟練なし又手跡は長谷川流の能筆にて萬事人の下
に出すおのづから全盛と呼たり髪の飭り櫛笄など大
金を出して求るといへども仲居花車の輩是を譽れば
すぐさま其ものにあたへ客に無心をいふにも百金よ
り以下はいひ出すこれによつて遊客も容易には馴染
に成事かたし田中卯左衛門といふ人に請出されて妾
と成たれども驕りの甚しきゆへ暇を出す又京都の富
家に至れども始に同じ其後東武に行て妓婦と成しに
梶といへる名は彼地までも聞へある事なれば一たび
は流行なしたれどもいつしか花を失ひ終身を知らね
ども古今希有の女也近き寛政の頃には首のぶといへ
る歌妓寶曆の梶女に趣き相似たり事迹は世俗よく知
れる所なればこゝに略す世にもてはやすこすのとの
唱歌は此のぶが自作のよし峰崎勾當の調也

萍は思案の外の誘ふ水戀が浮世か浮世が戀かちよ
と聞たい松の風問へど答へず山ほとゝぎす月やは
物のやるせなき癪にうれしき男のちからじいと手
に手をなんにもいはすふたりして釣る蚊屋の紐

奴小萬傳

島の内鰻谷に木津屋五兵衛といふ藥種屋ありしが雪

といふ一人の女兒智慧聰きうへ生質俠氣男子に勝れり二八の年齢下女男を召連天王寺へ詣んとて下寺町より口繩坂を登りしにむかふより巾著切貳人出來りて雪女が髪の飴りを奪はんとする其手を拂ひ大の男兩人を右と左りへ投飛しすこしも騒ぐけしきもなく天王寺へ詣でける是よりして此雪女を奴々と呼びて其風聞大阪中に高かりしかばかゝる噂事を趣向の種とする事劇場のならひにして其頃の淨瑠璃作者並木丈助、淺田一鳥等速くも戯文に綴り延享五年辰正月二日初日豊竹座のあやつり容競出入湊に奴の小萬に打扮木偶はかの木津屋の娘雪女が事迹を摸したるにて夫より雪女の噂いよゝゝ高きいつしか奴の小萬と呼なすやうに成たり歌舞妓にても同年七月中の芝居市川龍藏座女尺八出入湊黒船忠右衛門當世妾といふ狂言に仕組しより初まる雪女はそれをよき事也と思ひとり益々俠氣出て其身を慢じ人を見る事塵芥のごとく我終身を任せん男は由井正雪の再生なしたらんより外になし我身は由井が妻女なりと罵り常に著する所黒羽二重に菊水を附たり然れ共岩木ならぬ身にしあればいつの程にか柳里恭に契りて妾と成柳里恭は

和州郡山の家士柳澤權左衛門とて世人よく知る風流人也一説密に嵐里環の胤を孕しともいふ此婦女平日にいふ我家系は足利家の寵臣三好修理大夫長慶が末孫なりとて通世の後には三好正慶と號け亦或時は我元祖は關白豊臣秀次公也近日二百年忌の追福には管絃の大法事を修行せんなどゝ物狂はしく罵り歩行たり老後難波村に住て元祖より持傳へる家財調度は同村月江院へ送り身を安く暮せるうちにも生質の俠氣ありしにや一日瑞龍禪寺に大法會ありし時俄雨にて參詣人難儀に及ぶ其中には雨具の用意も傘を借る知音もなく寺の門前民家の軒にたゝすみて老たるをいたはり稚きを抱き雨を凌ぐ有様正慶尼見るにしのびず頓に使ひを長町に走らせ傘百本餘り買取て一目も知らぬ人々に貸あたへぬ其外生涯の行狀悉く書記さんもくだゞし此婦女若かりし頃より和歌の道俳諧の發句をたしめ書も又拙なからず老年に及び病床に春を迎へし詠あり

此年亥極月思よし有て難波荊谷何がしの許住る所より方能往新年迎へんとす然るに廿七八日より病る伏廿九日は大に腦亭主繁女かいほうをこそかならねどくるしさにたへがたし暮に及て夜更て丑滿の

頃にや繁女ぞうにを祝給へとさまゝ祝儀すゝめ
給ど難喰時いかにと問寅の後と有され共腦事甚成
ば頓て身まかりもやすらん此家の思わく氣の毒な
がら無是非觀念せる内鳥の音鐘ひやくなど聞るに
早としもたち行さまと成ともかく有身なれば

鳥鐘の聲をしまぬ年の丈

明近きに冷寒共に募るくるしさを凌そのまゝに寢
入もやせし歟いかゞ夢成るべし廣野に至て晴々と
見渡す今迄の苦さもなくあれば扱は死けるとぞ嬉
しく従是何方往べしと思ふ内幼少なるわらんべど
もこえさまゝと聞ゆるに是以何と頭上見るに東
の窓より太陽赫々と指入給ふにぞいまだ死ぬと心
附本意なさいはんかたなし

未來歟と思や難波の初日影

既に齡は七十の六も重ねし老が身の又存命もゝの
うきたゝ命終をのみ奉念につたなき運命宿業あし
く罪淺からぬぞかなし娑婆の因縁難盡最悲しかる
や

うしや世に又存命て何かせん

已が身ながら我に耻かし

子正月

三好氏老婆正慶愼白

これ生涯の絶筆にして幾日もあらず歿す文化元年子
の春也菟屋は難波村北の口にて樂湯を業とす

行年七十六

今古
參考 南水漫遊初編

三の卷

一 崎陽古風

附 難波新地

新屋敷

一 男色

附 峰の小晒話

若衆指紙

闇屋

一 色駕籠

附 戎駕

初天神竹輿

一 格子いはひ

一 囃子遊物

附 寶曆遊物番組

見送り神馬

俳優御輿太鼓
一 俄の辨

今古參考南水漫遊初編三の卷

颯々亭南水主人著

崎陽古風

浪華江南の娼家遊戲の風俗を著述せし月花餘情、煙華漫筆、崎陽英華、陽臺遺編、南遊記等の雜書を見るに今古のけちめ多し浪華色八卦に云

枯梗卦

枯梗は島の内并坂町の卦也○活氣の人多く来る○萬花麗を好む○色事時々かはりて久しからず○此處八卦の中にて盛んなる事の第一にして女郎も其うぶなるは十五六より出し浪人の娘、貧醫の妹、姉のそけしまひ、梵妻の還俗、舞子の果、京の仕替、西の落、北のなぐれ、吉となり凶と成り萬物と容るゝの卦なれば舊きを去つて新しきを要とし月に日にものかはりうつりて事を轉ずるを妙とし花やかに面白きは此所にまされるはなし女郎も其勢ひに乘て意氣強くいやみをぬけ色道の綽氣や野

郎を買ふ仲居あれば役者に賣る藝子ありて粹がる事を專とし衣裳手廻りの物ずきも人のせぬ所をあんじ閻魔大王も紋にして附たがり髪も折にはぐるゝ卷にて黒縹子のうしのくそ若きは餘の音のやうなるもありて憎てらしい仕立色事を隠さずして張こんだ所をすれば却て評判吉にしてはやる事多くせりふもまだるい事なくさあといふと客にもはりこむ事きびしく又うつけ客のいやみあるは喰ひちらして賣りゝゝひどいめに合せ年寄客の癖にあたなめたと思ふがさいご閨中でもどうよくに繼子あしらひ贅も相應にいひはやり言葉絶すして其れが止めば是がやり早う覺へるを手柄とし知らぬを文盲がり古るけれど折にはせんぼうもあがき客も三日往かぬとはやりものにおくれ遊びがとぼつく也中にもめてなる女郎は猶まけ惜み強く一度も逢はぬ客でも名の高きものには夕べも逢ふた噂何なりと仕出して歌に諷れたがり仔細らしひ事いふて見たがりわたしや此中西照庵で歌を仕たら砂原の五さいじやうさんが譽てゝ有た下著はソレ高らい橋でもない所のしつとうさんからの唐畫かい

て貰ふ筈じやと取てもつかぬ片言さらせの多葉粉入つぶれぬやうにしんを入れながら持て居るは情なしそれをよい事と心得てにやこい客が其通にして持るゝはなを論に及ばず菅笠は初天神から著か何の願も祈もなきに物詣を第一としそれもあいにかた同前に心得てもうこんびら様でもないと此比は長町裏のびしや門様へはり込み色事も飛つくやうにするかと思へば捨る事はやくきのふの艶男はけふの坊主役者にかはり其醫者が面白からうあの糸鬢に出かきよかと少も著する所なくして氣味のよき所也客もさまゝの風俗ある中に二十そこらの若い男くすんだ著物に色は鼠當世茶の細帶どんな小紋の短羽織鬢には油けをもたさず女郎にはどくくしい事いふて俗のはなれ自慢いつかどの粹じやと思ふて居る客とまきびんをさへ出して光らせ裏折帶して長歌のしやくり諷ひする客とかたちはかはれど根性の^しやみは少もたがはず此罪業の秤でかけて見たら色男の方が五六匆輕い事や何となひかたちはせられぬ物と見へたり女郎の手管も有ふれたるはいふに及ばず男ぶりのわるいくせに

九も十も喰ぬ客には惚たといふては合點せねばお前のやうな惡人はないとたつた一言の惡といふ字に無量の意味合を持たせて嬉しがらす事也色事の中宿も盆と唱へて戀無常をこちやぐくに人くさひあたりの家居爰にても手ばりの奢強く折節は味ひ物會も興行仕三つ骨の味ひも覺へ口舌も一際新しくせりふを附て花やか也客が茶屋の門口這入ると仲居のつかみ附様にいふてうしは又外になき勢ひや法師いづれもよろし外里の翳間はむしやうに拍子つき檀尻藝を見るごとく鳥さしも仕かねぬ勢ひこれは翳間の下品也此處は翳間の水上にして仕うちばたつかずせりふも穴なく夫々の客の氣にあてがひ森田幸助を始め平助、喜八、宗助、與八、松沾、音太夫、伊勢太夫其外數も知らず利八隱居して日養坊と成りたるも興也繁花第一の地なれば勢ひ強く二人り三人請出してもそれには曾て驚かずぢむさき身受などは却て客の名をくだし生涯の恥となる也能々慎むべし暫らくもけだいなく通ひて黄^し白をまき遊びの仕うちよきを以て名を上る所也茶屋も銘々伊達を専とし中にも品のよきは貝半大七

堺なつてうしのはづみたるは川作大才、又近江屋、井筒屋おとなしきは太治豊三、足代伊長吉、橘嘉天吉ていねい落つきたるは足代太、若吉、富市、綿庄は茶屋柄を作り島九竹傳賑やか也其外岩長、岩善、長喜、河庄舉るにいとまなし又坂町の路次の内によしやといふ呼屋ありて此地の暗がり所にて様々の獸あつまる也御板の内は取わけ芝居側住九より角ど丸迄の間俄の本舞臺にして數萬のてうちんをつらねて夜の明るを知らず此灯の影に出張してのらの面を照らすべし此卦六月は大切の月なれば晝夜わかたず心身を盡して遊ぶべし

同書に

檜扇卦

檜扇は難波新地の卦也女郎は坂町の落堀江の仕替尼出姥出新造の出る事指紙口觸れ日々數を知らず又此所に我内あつてかり店から出る粹からしまた顔して勤る娘ありよふ行といふ女郎は存の外りきみはやると流行ざるとはきつぱりと衣裳に願はれ入れ込の新造どやつき此間逢たまかない出を呼にやればけふはもふ去んだといふ出るも入るもい

そがしく近頃別て繁昌の地也新造といふも大方くはせものにて誠の素人は却て素人めかず出合の女郎にも負す粹らしひ事いひたがり味やろふとする所是本白の正銘也こゝも藝子は女郎より勢ひ勝て内證の色事もしたへばどふ成と是になづんで入來る客多し是まで島の内で鳴らす藝子此所より出たる事數多也靉猿、かたし具、かへら女、三つ四つ覺へるとはや十一二から座敷へやれば可愛がられて大ぼやしにまけずはやり扱もよい顔立じやまあ二三年したら屹度した物じやと思ふて居るうちちやんと向ひ側へ出た噂此所の福新といふ置屋必よき藝子を仕立てる店也中にも年のたけたる藝子は強仕立にして著物も壁下地のあらじま裙みじかに著なし帯はかるた結び髪はひつこき地聲は少うらがれて何やらわめき／＼座敷へ通り客を見てコリヤ珍らしい顔じやナアとなめかけなんばの鉢のみ今に忘れぬわいななどふじや河堀へお出たかといなる事をいふを専にして三味せんつぎ國太夫の道行よい文句ナ所を中程から諷ひ出して古けれどよいかげんに山にぞ著にけりさあこれで祝儀は納つた

その馬びしやくの酒助けふかと胸を叩いてえら呑み拳もよつぽど自慢でゆびをそらしハマリウさんかよいやなアと角力の身に成りこれを悦ぶ客は六月の土用の中でも萬歳を彈せて聞たがり肴ばしで傍に有茶碗たゝいて拍子取りしつぽりと頼みますぞとしんそこら面白がり此様子あはれ藝子を奴といふ異名附て稱美すれば乗が來て腕まくり上げ濱芝居の物真似客の羽織取て著て送りがてらのぞめき幫間らしい者に行合ふて辻で新八よ阿房よと大聲上てのゝしり皆興の覺たるおかしさ也又たいこ持の中にも漸々跡の月から八百屋を止め誰やらが弟子に成て苗字を貰ひ行燈へ名を出したつた一つの帷子に五寸計りの紋とり餅ひつばつたやうな黒縮緬の羽織を三種の神器ほど大切にして呼に遣れば少遅う來て只今向側へ往ておりましたと問はず語り島の内で勤たを官位に進んだやうに覺へしいぢらしさは是には却てあはれみありて能客の附物也呼屋は座敷へ嚙が出れば爺は板本に扣へ替るゝ勤て小女童をあしらひ家並に棒かし一本づゝはきよろりと庭に植て土細工の燈籠ぶらゝりきた

ない柱のふたにした聯も一二枚かけたり此地は島の内の料理人仲居の店出しといふ物有てそれをつたいて思ひも寄らぬ客も來り酔覺しに歩行廻つて此所へ落るもあり近比よき客の入込事おびたゝし夫かと思へば島の内の茶屋置屋の親父會て色事の出合にはあらずして内のあしらひのうさ晴らしに此所へ來て客と成て大判官の遊び繪に持そふな藝子をくどくやら又向ひ側で名の通つた何澤何山などいへる法師折々客に成て意地の惡ひ無理いふて遊び我勤の骨を休める也種々のおかしみ有て勢ひ強き卦也

新屋敷

是も右の卦に屬して女郎は一段をとりたれど段々花やか也近き頃までは呼屋置屋もそこゝに有しに次第に賑やかなるによりて其隣の豆腐屋又となりの灸屋も仲間入りして軒に懸行燈をつらね千とせ屋松本屋などめかしかけて終に一とかたまりの色里と成りそれ相應に藝子幫間も涌て出て遊所の道具皆備りたり女郎は堀江の落鹽町の仕替など往來し近き南方の在郷を引受け木津難波のぶし達入

り込つゝこんで遊びかけ間夫の立引退狀のせりふ
まだ日も暮切らぬ内から筑後の紋の附た手拭頬か
ぶりにして久兵衛や七兵衛やと呼つどひ草履下駄
かまびすし中にも素人藪入などいふて一段佗しき
呼屋もあり婆様どふじやといふて這入と誰でも近
附の挨拶して置屋へ呼びに走る傳手^{ツイデ}に肴もいふて
來る女郎綿服仕出しに紫紬の帶焼桐の引すりぐわ
らつかせ若きはびいどろに綿糸の入つたかんざし
やうの物天窓に飴り座に著て八文粉くゆらせ手荒
ふない客と見ればお前方はこんな所へほんの氣で
來やなさらぬとおかしひ所でのぼしかける手管は
相應に覺へたり素人といふもの折にはあり近頃け
しからず色里めきて繁昌の所也

男色

男色は女の道よりも勝れていさぎよく面白さも格別
に見へて唐書にも若衆遊びせし人多く史記に佞幸の
傳あれば太平通載に權幸の編あり晋書に西晋の武帝
咸寧太康の年より男寵の事大ひに起りて女色よりも
甚し我朝の上代をいはんも古めかし御治世の後三都
ともに男色昌んなる頃は若衆の色情も深く當代京の

宮川町浪華江南の野良若衆がた制外子<sup>制外子の事末卷か
ぶきの條に委し</sup>を寵愛するとは大ひに異也西鶴が大鑑に云

正保慶安の頃世上鷄合はやりし時峰の小ざらしと
て其頃時めきし若衆小判に飽せてよき鷄を三十七
羽求め庭籠に入て樂しみけるに憎からぬ人の尋給
ひ添臥しける其頃は我内へ客も來りし事にて最早
八つならば歸らんとあるに小ざらし別れを惜み八
つにはまだ間ありといふうち三十七羽の鷄はたふ
きを揃へ聲々にひやく渡れば客は取急ぎ歸りぬ小
ざらし其明けの日戀の妨なりとて金に飽せし鷄を
みな放ち捨させしとなん此一條にても其頃の男色
思ひやるべし京大阪にて太夫子といふもの七徳備
はらねば其器にあらす七徳とは器量、行儀、嗜み、
酒合、諸藝、手迹、無欲也貞享四年京都に太夫子三十
一人と大鑑に見へ太夫子なりとて總役者中を振舞
弘めをなし諸役者得心の上ならでは此號を附る事
相成らざるよし男色衰へし當代とても若衆子供帽
子懸といへる事はむづかし或書の中に往古の若衆
歌舞妓子の指紙あり草紙の題號忘却す蒙大門屋敷にや再考
すべしといつれ元祿年間のものと思たり

一花山藤之助

年十四

色白にして目附よく嘉太夫ぶしかたり申候

一岩瀧猪三郎 年十六

踊り上手投ぶしうたひ申候風儀其まゝ女の中にや
わらかに生れ附申候

一夢川太六 年十五

酒ぶり幾人様のお相人にも成申候文作さみせんよ
くひき申候旅子の内では衣裳あつばれきせ申候

一松風琴之丞 年十七

影人形よく遣ひ申候此外口から水を吹出し壁に文
字を寫し申候品玉鹽の長次郎増りに候

一深草甚九郎 年十七

ものいひ此已前の鈴木平八生うつしに候何も藝な
く候床達者に候

一雪山松之助 年十九

野良也座に附たる所本子と取違候程に候

同書に

萬年町藤の棚のあたり路次の中に間屋^{くらや}ありて女郎
も上中下の品有乙六分八分一匁と定り六分女郎は
木綿物を著し八分は餘程器量自慢而も服たいを著
し一匁女郎はのつしりとしてよし

一匁	熊野ごけ	本名	せき	一匁	かたきごけ	本名	ゆり
八分	紀州ごけ	八分	たつ	六分	やくしごけ	六分	とら
八分	和歌の浦ごけ	八分	げん	八分	京ごけ	八分	らん
八分	はしもとごけ	八分	はな	一匁	名じほごけ	一匁	らい
そで	の覺	凡此通りは名代もの古狐のこつちやう也詰袖ふり		一匁	一期のらん	一匁	さいのまと
八分	かうしのきは	一匁	ら	八分	九太のさよ	八分	ろく
一	としまのしげ ^{ふりそでにて二十四五とぞ}	一	はな	六分	うたゝねの	六分	さよ
六分	なき手のまつ	六分	はな	一匁	はげ山の	一匁	さよ
八分	湊のまつ	八分	はな	一匁	かはらけのしゆん	一匁	しゆん
六分	髪切のよし	六分	はな	一匁	しかけのぎん	一匁	ぎん
六分	のり合のしな	六分	はな	八分	山ごしの長	八分	長
八分	たかのくら	八分	はな	八分	松虫のかん	八分	かん
八分	白酒のほる	八分	はな	八分	唐ぬけのゆき	八分	ゆき
八分	寝入花のよし	八分	はな	一匁	こんにやくのせき	一匁	せき
八分	ちよこの小ゆき	八分	はな	一匁	一せんのかん	一匁	かん

六分
一うつかりの なる

難波鑑卷の一春の部に

道頓堀初芝居

初芝居といふよりも其名めづらしく心もうき立ものは道頓堀江の川波うちはやす太鼓のをと唐土はしらず日本橋のはしのうへ老若男女きせると火繩に辨當提重箱のうへに毛氈繪むしろをからみつさせとしや遅しとはせ来る粧ひは雲のごとく霞に似たり抑役者の名は知らぬども年の内の顔みせの比よりそんじやうそれとかたりつたふるを聞よりもなつかしく鼠戸のあたりに徘徊して爰に來る人々のなりふり品かたちの異様なる有さまを見るにわがしれる人多くこなたよりはそれと思へど子が姿を見附られじとしのぶの山の山守も人目のあみの繁きにもれ更にとがむる人もなしたゞ芝居の見るもの見むよりはまされる物をも思へど物の音に心うつりはやくも内に入らんことを思ふされば樂器をとれば音をたてんことをといへるも餘所ならず内に入侍りてこゝらの人に案内してゐけるにいま

だ狂言も初まらず其中に人々とありかゝりと四方やまの間はずがたりをなしけるが側なる人のいひけるをきけば此所を道頓堀といふは人みな此地に來りて歌舞妓若衆の遊興に入事の頓きがゆへにかく名づけ侍ると也其むかし若衆かぶきのありし時は僧俗によらず貴となく賤となく價をもつて情をかけしゆへ錢あれば此市に立んこと易しと御寺法師は布施のつゝみかねをば花代とさゞげ町の一番子は親の譲りの巾着のかねごとに添寢の床の袖枕口よりかねを吸とられ或は家財をうしなひ或は所を立去りて身を亡す人多し是みな此道の長じぬる媒なれば天に口なし人をもつていはせよと誰か披露はなけれども去し承應元年初秋の比かぶき若衆の額髪をとらせことゝく野郎となし旅芝居をかける子どもまでさがし出させ給へば普天の下いづくにかゝまり住べきにあらねばおのが生縁に立かへりえもいはれぬことわざのみにて落穂ひろふありさま見るめもいと堪がたしかしより此道すこしことさめてけりしかれども芝居の事はとゞめさせ給はねば其後能狂言と品をかへ右近左近が海道

くだりを舞しより人また二人靜の舞ぶりもかくや
ともてはやして群集しぬと語るがうちにはじめよ
はじめよとのゝしれば追つけはじめぬ扱はしがゝ
りの方を見やれば年のよはひは二八計りの粧ひに
てなよゝと楊柳の春風にしたがつ風情にて出る
といなや是々おでやつたあつた物ではない妙音菩
薩の御來迎かと譽ればこなたにむかひ袖打かゝげ
て目くばせして一たび笑める顔ばせはさながら李
花の一枝春雨にほころぶかと思はる又二九ばか
りにもあまりたると見へしがつゝひて出ければ洞
庭の秋の月これゝとほむるもおかしふるもよ
しといふことにや其外色をあらそひ品を分ちいづ
れもおとらぬ中に霜葉は二月の花よりもくれなゐ
なりといはまほしきもあれど其名をいはず凡人間
百にみたす常に千年のうれひをいだく世の中に何
ぞ男色にめでゝ遊興を催し侍らんやされども狂言
の其品々を見るにざれめきたる事どもにておさな
き事ども多しにしへは佛神の本縁をもとりまじ
へうたひ舞ければ人もおもしろがりあはれがりし
にいつしか今やうは昔にをとりきのふ大阪の内に

ありしことをけふははや取組戀慕密通せしことを
狂言にして其人の名をさしてそれといひければ人
また是をもしろがりぬされば大阪のうちはいふ
に及ばず國々遠き縣までも聞傳へ其親に恥をあた
へける事いか計りの歎ならずやかくつたなき事を
よしと思ひて人の親の娘など引つれ來りて物見
し侍ること心得られずけふは人のうへあすのわれ
らが身を知らでうかゝと役者にはかられける淺
猿さよとふと思ひ出るよりいざゝ立んとしける
を傍なる人のまたしめよと膝を押へて尤と感じつ
ゝ仰のごとくさにて候總じて娘など持たる人の
心づかひあるべきは此見物也其人にはよるべけれ
ども戀慕の手だてを見るよりも心なきも心をつけ
我もまたしやせまじ忍びても見まほし情もかけて
もやと色のなきものをのづから色をつくるは此見物
ならんと答して立別れぬいとおかしかりけり

色駕籠

女郎の乗れるを色駕籠といへばいと艶に聞ゆ重井筒
道行の文中に

おくりむかひの色駕籠もしばしとだへば何國にも

馴染くの寐入ばな

此里のならひとて送迎必乗駕籠と月花餘情にも書きひなぶりの唱歌に戀の重荷の十島の内送り迎ひに昇駕籠の云々煙華漫筆に

擔子

此所の名物きはめて下手也此地の遊君隣家といへども歩行をゆるさず矩規なるや窮屈なるやよつて是がもうけ也又客を送るに至りてはいくの聲更て生酔の伽と成りちやうちんのぶらつき加減いさましく見所あり晝夜をわかず暑を厭はず寒天またさら也機山先生哀憐の餘りぬぎて綿入羽織をゆるす其謂にて今も冬は羽織を著てかく者多しおほけなくも寒夜の御衣ともいふべき機山が仁心也されば冬ばかり是を著す定法也又駕籠のくさは家々の口傳あり三百度乗れば此祕訣をゆるすとなん安き程の事ならんかし

茶屋駕籠のいさましきは正月十日の戎参りと初天神也

えびす駕十かへりもする松のうち
浪華名物富貴地座位に云

あてなる物は初天神の竹輿昇人のせわしさは橋の上にて顯はるれど蒲團の裏に朱を奪ひしやうの立ならびに遊女の曠心に天満宮の庭さへせはしと云公界の中の又公界ながらも

色道大鑑に色駕籠を勘當箱と書るもおかし根なし草後篇に

これ廓通ひの風流なる宿の出入に人目を忍び家業のいとまに我身を竊む或は兜籠或は船黃帝車を製すれ共四つ手の輕き案じは出す梶原逆櫓を爭へ共猪牙の早きに心付ず末世の手まはし浮世の才覺腰のすはり櫓の手練などいづれ花街色里の景物と成たり

格子いはひ

娼家の女郎に格子祝ひといふ事をなすは馴染の客も知るしらぬ客の呼出しもなくて淋しき夜は近邊などをちよと歩行ば必その夜に客來るとて往古の女郎はかゝる事をなしたりと見へて重井筒中の巻にお房がいふ

あんまり餘處が賑やかさに格子祝ひに出ました

囃子遊物

浪華の諸社水無月の神事に氏地の色里より遼もの或は囃子を出して祭禮の賑はひとするに廓中を最上とし崎陽これにつぎ堀江阪町北の新地は廓中崎陽の上にたゝん事難し就中江南の地は歌舞妓役者の住所ゆへ妓婦歌妓の化粧もおのづから妙手に至り殊更遼もの囃子などを催す時は劇場の輩ちからを添て日頃の艶色に百倍の美を顯はし衣裳の物數寄は年々歳々打扮の趣向新なりといへども往古は龜なるもの也こゝに

未の年

嶋の内ねりもの番組

足曳の兼題

鎌倉山	たかい山	戸隠山	かゝみ山	音づれ山	ふたご山
よし田やなる	岸本やいと	岸本やみち	岸本やまつ	ふし武たみ	宇治ふろ百

茶うす山	あたご山	かうり山	こいの山	伯母捨山	さなだ山	龍田山	三輪山	石山	熊の山	甲山	まつ山	三かさ山	春日山	待かね山	おとこ山	大内山	八わた山	箱根山	ひえの山
京井筒や小まん	さくらや小いと	千とせぶろ小蝶	桔梗ぶろ小たき	天満や梅	天満やもん	ぬしや小春	大黒ぶろ岩	京扇やとよ	京扇やいと	大平とさ	もりたやとわ	わた治ひな	北わたや長	北わたやまんよ	大長龜	やわたやたつ	柏ぶろにし	大九ひな	大伊だい

すゝか山

さつまややひな

はやし

よしの山

太鼓

さか喜龜
もり新ちか

かね

もり新なか
春田や万

三絃

京市こと
さつ喜市

笛

さくらやいわ
もり田やかめ
藥師ぶろひな
京扇や金
三人

見送りやまざくら

千秋万歳樂

圖するは寶曆元未の年の鳥の内遼もの、番組にして半切一ひらの鹿紙也この遼物の内第十一に出る伯母捨山に打扮天満屋梅といへる妓婦此時の驥にせんとて價五兩にて鼈甲の櫛を求め髪の飴りとして出ければ外の遼子の粧ひは花のかたはらの深山木とけをされ諸人の目を驚かしけるにや其頃の流行歌に

梅は北野の天神さまの御神木見事に咲たとさ

と諷ひしは此天満屋梅が端手なる櫛をさしたるを彼が名によせて梅の花の咲たといひなせし也寶曆未の年はわづかに七十年を過すといへ共其頃の髪の飴り此歌にても思ひやるべし衣裳の物數寄とても大抵これに准ずと老婆の物語也近頃此唱歌に替うた數種を作りて又も流行せし事あり

一年遼もの、見送りを神馬に製し十神三津八幡宮へ奉納せし事有しが例と成て近世鳥の内遼もの、見送りは八幡の神馬と定まれり前に圖する寶曆の頃までは其趣向にもとづきけるにや足曳の兼題ゆへ山櫻の見送りとす寶曆九年卯六月三津八幡宮の神事に道頓堀役者中より御輿太鼓を出せし事あり

中山文七 中山奈助 三樹大五部
市野川彦四郎 松山三十郎 染川此兵衛

藤川半三郎 坂東岩五郎 三樹貫藏

小川吉太郎 市川樹藏 嵐吉三郎

其外中通り表方若き者等數多出る夜分は灯燈に火を
點じて近邊所々を昇廻る依之茶屋方には見物影し老
分の役者は世話方にて附添其荒増

中山新九郎 櫻山四郎三郎 竹中兵吉

坂東國五郎 山下又太郎

神輿太鼓の跡より若女形の囃子あり

中材富十郎 嵐雛助 山下金作

嵐松之丞 山下宇源太

各紫紹に白揚げにし八橋杜若總模様の彩帶は緋天鷲

絨にて有しとぞ

俄の辨

俄といふもの三都に限らず都て渡御のあとさき神輿
の通り筋山鉾或は盪もの荷ひもの地車等の通る事古
代よりもありて今も尾州津島祭、紀州和歌祭などに
も其古例おびたしく美麗を盡せり其間々に笑ひと
名附て老たる身に前髪かづらを著て子供遊びの體を
なして通り又は女かづらなど著てさがなき妬みの體
など或は手習ひ子の姿にて師に折檻にあひて逆行風

情是等の類ひを都鄙共に今も昔もかはらず俄といひ
今見る時は古雅なりとて賞翫なし明和安永の頃まで
はいまだ一度／＼思ひ出した俄じや思ひ出した／＼
といひ／＼歩行し也享保の頃住吉祭の參詣群をなせ
るうち其歸るさ飲盡したる酒樽をみやげの竹馬にく
り附て灯籠のごとくなし銘々持添て高く指上げて
うさや／＼千歳樂萬歳らくなどいひて通りたる酔
すがたのおかしくも又めづらしくも思ひしにや同じ
道なる人々は是に付て俱に踊りし事となん其人歸りし
より存の外人のおかしがりたるを自身も悦び翌年は
はや鬼おふくの面などを袂にして行て歸るさを樂し
み／＼たるがいつとなく趣向をなすやうに成りて今
のすがたと成ぬ京都は元文年中より始り其頃より譬
などを専らとして或はかたちも作らずやはり住吉參
りの歸るさの姿にて俄じや思ひ出したとて通るを所
望せんとて袖に縋れば扱去年も此歸るさは別しても
ない事ながら思ひ附てお目に懸ましたが當年はとん
と智恵が出ませぬゆへ無念ながらもとらへられた所
で一度／＼かやうにお斷りを申上ます其かはりには
よく／＼顔を見知り置れ被下ませい來年は屹度思ひ

附て笑はせまずぞとこんな事いふて行過ると其跡より鬼の面を被て大手をひろげてハ、ハ、と大笑ひし而行しては等は餘程の奇妙なる趣向也とてどよみたる事也又其比より狂言の聲色を失はずして太郎冠者あるかやいといふ出端にて色々のはねを付て笑ひを取し處に竹田の芝居おどけ狂言に猿が島の敵討をして大に當りし時其助太刀の銘々罷出たる某は缺みでござる罷出たる者は曰でござるなどいひしをかたどりと罷出たる某は俄始れり其後罷出たる某はと計りも淋しくや思ひけんいつとなく耳のあたりよりむく／＼と雲の峯の昇るやうなる身ぶりとは成れり又それより遙のちにこりやなんじやと問ふてはねをとるの一ト風あり是はかの太郎冠者の俄の氣短に成たるより出たそ也たとへば四五人同じ色なるものを著て立並び居る一人かるさんはいたる勇小手持て彼立ならびし脊中の所を壁ぬる體にて其味ひしばらくありて並び居るもの一時に尻をまくるとこりや何じや腰張じやと是等は延享の比よりの例となるまた寛延の比外科膏藥箱の心にて五色に染たる頭巾をすつぱりと著て五人並び居る病人來りて療治を乞ふ

にかの頭巾の垂を上げへらにて鼻を撫で膏藥延すにかの膏藥鼻を撫られクツサメといひければ醫者南無三風引たといひし俄は歌舞妓狂言作者の名人並木正三の思ひ附にて非情のものにものをいはせし始めとぞ又前々より一人歩行俄あり或は奴の形にて上下著たる人形をつかひつゝ供なしたる風情にて折節ネイ／＼と答へる體にて通る計りあり是は凡京都に多くして寛保の比此類流行せし是等は八十年餘り以前の古風の俄也其比は六月十三日十四日十五日難波祭りの宵宮より八幡祭へかけて芝居側住九より角丸芝居までの間を俄の本舞臺として流し俄を初め口合俄あぶら俄なえこ俄出たらめ俄物眞似俄拍子違ひの俄など其風儀さま／＼又配りものとて俄の趣向を配りあるくたとへば狐釣りの罨を持て狐を釣ふと思ふなどゝて罨を置て行と何ぞ出るで有ふと思はせ實は見物を釣ふといふが趣向にて一軒／＼かくのことし又花火線香などを發句書たる紙に包みて配り通る計りを趣向とするもあり夫より今古俄の變風委しくは古今俄選を見るべく猶近世の俄は目前に見て知るべし

今古
參考
南水漫遊初編

四の卷

一三勝半七墓

附訴書五通

書置四通

サイタラ畑

三勝唱歌

古墳圖

享保年間大阪圖

女舞三勝事迹

茜屋招牌摸寫

今古參考南水漫遊初編四の卷

颯々亭南水主人著

三勝半七墓

大和國宇智郡五條赤根屋半七大阪におゐて心中の節
檢使の趣正徳三巳年辻彌五左衛門様控帳に有之候を
寫取置候也原本長文なりといへども實
説なるゆへ本の云々に著す彌五左衛門様大阪
へ御出被成候節攝州西成郡下難波村御代官所也
右の節檢使役人御同人様御手代

關戸條左衛門

渡邊爲右衛門

覺

一攝州西成郡下難波村領墓所南側石垣の根畑にて
年頃三十四五の男年頃二十四五計の女咽を切二
人共相果居申候

一男の疵咽二寸計腹はその上一寸計突疵に相見え
申候

一女咽四寸計突疵くり候に相見え申候

一男の衣類

一郡内島兩面綿入 一つ 一つむぎ茶帶 一筋

一羽二重下帶 一筋 一かはたひ 一足

一じゆす 一連但し手にかけて罷在候

一脇 差拵焼付金具長二尺一寸糸づか 一腰

一小刀 但し脇差のさやに御座候銅づか 一本

一女の衣類

一日野すゝ竹小紋わた入 一つ

但し日野茶裏

一郡内縮綿入 一つ

但し同嶋紫色裏

一京洛冬帶 一筋

一日野ゆく 一つ

一もめん足袋 一足

一ちりめんふくさ 一つ

但しもみうら

右の通男女女著し居申候

一封し狀上書三勝はい簾
みのや平左衛門様 半七一通

一本綿茶色布子 但し是は二人の者下に敷居申候

右の通吟味仕候所相違無御座候以上

元祿八年亥十二月七日

下難波村庄屋

甚左衛門印

同村年寄

源左衛門印

同 七兵衛印

同 九郎兵衛印

辻彌五左衛門 御内

關戸條左衛門殿

渡邊爲右衛門殿

口上

一攝州西成郡下難波村領墓所石垣の根畑にて年比三十四五計の男年比二十四五計の女咽を切相果居申候處墓所ひじり并乞食垣外の者難波村庄屋方へ申來候に付早速右の通御注進申上候處關戸條左衛門殿渡邊爲右衛門御出死骸衣類等御改の上當村中并に近所の者何の覺もあやしき事も無之哉と御吟味被成候へ共右の義に附少しもあやしき儀無御座候

一右二人の者死骸番人附置候處上本町八丁目京屋

安右衛門三丁目大和屋八郎右衛門見申候て右の女は長町四丁目みのや平左衛門娘にて御座候由申候

右の外別條も無御座候に附彌死骸番人附置申候御檢使相濟候上者右死骸大切に仕置候て御下次第可仕候爲其口上書指上申候以上年月宛名庄屋年寄の名前同斷

指上申口上書

一下難波村領墓所石垣の根畑の内に拙者女房の妹并男自害仕候の由風聞承り候に附早速罷越見申候處拙者女房の妹さんと申女に紛れ無御座候尤男は存不申候女の親は長町四丁目美濃屋平左衛門と申候平左衛門儀は御番所へ罷出候右女相果候様子は曾て不奉存候右の通御尋被成候に附申上候趣相違無御座候以上

元祿八亥年十二月七日

上本町八丁目札之辻町

安右衛門印

差上申口上書

一下難波村領墓所石垣の根畑の内に拙者娘并に男
相果罷在候由承り候に附御番所へ御斷申上則死
骸見届け申候處拙者娘さんに紛れ無御座候男女
相對にて右の仕合に御座候へば何の申分無御座
候間右女の死骸申請度奉存候以上

元祿八亥年十二月七日

長町四丁目荒物屋市兵衛かしや

美濃屋平左衛門印

口上

一私方常々宿仕候に附參候處大和國五條赤根屋半
七と申もの當月五日に參罷在候處昨晚町へ罷出
候由にて私方罷出申候然處今朝下難波村領に
相果罷在候由の趣死骸見届け申候處女と相對に
て相果候體に相見え申候右相果候儀私申分少
も無御座候宿に書置一通御座候故大阪御番所
へ御斷申上候處則右書置大和へ遣し候様被仰附
候故差越申候相果候様子は曾て不奉存候拙者宿
仕候儀に御座候間半七死骸受取申度奉存候以
上

元祿八亥年十二月七日

大阪長町一丁目近江屋庄右衛門
かしや

中村屋安右衛門印

右の書狀五通并半七書狀一通御番所へ渡邊爲右衛
門關戸條左衛門持參にて玄番頭殿へ申達候處則鶴
見與五兵衛を以て被仰渡候は被入御念見分御申附
候書御見せ候此方よりも見分役人遣候處相違の儀
も無之右の譯にて候へば下難波村の者共にも仔細
無之候女は長町の者男は大和の者に候へ共長町宿
仕候者の儀に候へば男女共町人方へ爲受取候て下
難波村の百姓に相渡し候様御申候様にと玄番頭殿
被仰渡候に附庄屋甚左衛門年寄共に右の通申渡右
口書五通御返し半七書置はさん親方へ直に御渡し
候由尤男女死骸相渡候は先より受取手形取の注
進申來候様にと申渡也

亥十二月七日

尙々御袋様にはいつぞやくれへ申置候事
も皆いつはりと成り今更に耻しく候へども
しかし過去のごうなりと思召し御あきらめ

たのみぞんし候事以上

今度三勝私かく相果候事嘸々にくしと思召候事はんなれども互に捨がたき一命にかけかく成行候事くどく具にかゝず候へども戀のせつなる事御推量可被下候各様に身上の大事成娘我身もしとりのはゝと申ことはしんしよの事もわきまへず人口にかゝる死をとげ申候めいゝうは氣なりとはおぼしめし被下まじく候とも角にも筆にはいはせがたく候まゝなからん跡ふびんと思召よろしくたのみぞんじ候次第に跡にてしれ申候間筆をとめ申候以上
十二月 勝 邊 半 七

三勝どの

御袋さま

平左衛門様

右書置封のまゝ御番所へ差上候處御番所より三かつ親方へ直に被遣候由親方に有之を寫し候寫し

覺

一和州赤根屋半七死骸

一半七衣類道具

一長町四丁目美濃屋平左衛門娘さん死骸

一さん衣類同斷

右の外に封狀一通上書

三かつはいさま
みのや平左衛門様 半七

右の通御番所にて我々共へ請取申様にと被仰附候に附右書附の通我々共方へ慥に請取申候爲其如此候以上

元祿八年亥十二月七日

長町四丁目みのや

さん親 平 左 衛 門 印

平左衛門家主

市 兵 衛 門 印

家主市兵衛五人組

かきや 市 左 衛 門 印

長町一丁目近江屋庄右衛門

かしや

中村屋安右衛門印

半七宿安右衛門家主

近江屋庄右衛門印

庄右衛門五人組

かめ屋藤兵衛印

御番所様

三勝養父平左衛門へ書置の寫し

かやうに成行候事にはならじと思召候悔みの程もかなしく又御身の御行衛いまだおさなきおつうの事一かたならぬ思ひ有身としてかやうのふるまひ親兄弟世間の取沙汰其方様御うらみの程も御坐有べく候得どもいかなる過去のいんぐわ惡縁かは半七どの一入私たいせつに何とぞ御身様手前事宜しくはからひ一生添たきよし内々被申候へ共とやかく相談いたし何とぞ當年の内にもかたづき申候にと存じ候へども半七母様成ほど合點に候へどもあの方の一門衆よりかうした事と知らず是非く急に半七殿に女房もたせい持すは勘當せんと一門みなく申さるよしとへ親のめいに背きても大阪へ参り其方様と相談いたし可申と此八月より談合にて候へ共左様に成り暮せばと

て又いかやうの事有て御氣に背き候事一方ならず左様の時ぞ世間からもあれみよ夫にほだされ又實の親兄弟有ゆへ平左衛門様に不孝なるはと我身をよき事とは中まじ殊に未おさなきおつま事生れ出るより他人の手にかけ親とも子ともしらせず又もや他人の手に渡し不便の有様見るならば生かひあらじと存じ兎角死ぬる儀ならばあいさつ切て下されと急て申候得共半七事はとかく縁を切ならば我等男立まじ出家に成候左なくばひとり自害せんと御申被成候故いかに私思ひの有身と云ながら左様にせつなる心ていをむげになさば後の世迄も義理しらずといはれん事もはづかしく殊に我ゆへ一門中の命に背き男を立させずしては我身世に住かひあらじなまじひ此身有ゆへと存じ簡様に思ひ立候事は八月よりの談合にていつぞや半七和歌山より池田へ御遣ひ候事簡様の事に附ての折からは其方様へも少々金の金も用意して池田迄よびに参り候へ共また高田へも参りそれも不叶只今迄相のびざりとは簡様

になり果候事も其方様母様へたいしても不孝なる事又おさなきおつま事行末こしかたいかならんと思へばよみちのさはりと成候へども孝を立れば義理立ず義理を立れば道にはづれとやせん角と存じ參らせ候へどもよく／＼思へばたとへ世にながらへ有とてもおつともつ事もなるまじく候我身ながらへある故に人の恨みも有と思ひ所詮しがいなり共と思ひ候得どもとてもはつべき命なら半七殿諸共に行べきと存候へば未來の程も思はれ候へどもこれみな過去の因果とあきらめ我身なき跡にてまさかの時とても頼すくなく御身の上嘸やたよりなくおぼしめし候はんと是のみ又二つには西も東もわきまへぬおつま事もよしなきものゝたい内、生れきていかなるうきめにあひ申さんとくさかげまで不便に存候これみな前の生のかたきどしにて有やらんと御あきらめ可被下候扱御身様事もまさの助をたよりとなされ何とぞ／＼御身立やうに只今の御心をひるがへし被成何とぞ人にあざけられぬやう

に御身たて頼上候又おつま事とても他人の手にかけるより母様と御をうだん被成姉様かたへ御あづけ候様に態々願上／＼かやうに成行候事は露ほどもいとひなく候へ共跡の事ばかりあんじ候へば只よみちのさはりと成／＼扱まさの助へ申候何事も過去のえんと思ひと、様へ能々孝行にし給へわれなく成ては其方より誰有て親様といたはるものもあらざれば随分／＼おや様御事頼置／＼何事も／＼御ゆるし可被下候おつま事よく／＼頼上／＼扱あさましやせめてかやうに成とても御身様見ぐるしからぬやうにしておつま事もおとなしう成候をも見てしなば箇程までは有まじき物をと存候へ共よしなき色に取むすび一かたならぬうきめにあひ候事も今更くやむるかひなく何事もじせつと思ひ／＼私事は何とぞ命惜くぞんじいろ／＼留て見候へ共半七どのせひにと申され候へば義理にせまりて命を捨／＼無間ならくへしづむ法もあれ御身の行末みらい迄も御いとをしく是のみよ

みちのさはりと成り八郎右衛門様とも御相談成され御身の行衛さりとはいふに頼上り一かたならず思ひ有身が色にまよひかやうのふるまひ淺ましやと思召の程も御はづかし候へども義理といひ情といひしなねばならぬ義理とせまりかやうに成行り何事も過去との因果と御あきらめ被成御うらみをはらし頼上候書たき事つきなく候へ共胸ふさがり筆も手もなへ候て殊にしのかて書候へば定てわけも見え申まじく候あら書置のしるしばかりかへす御身の事おさなきものを御見ぞだて頼上りあら名残おしや思へばをしき筆をとめり南無あみだ佛

元祿八年極月

日

いつかまたきて見る事もかたからめ

今をかざりと思ひといめん

大阪宿所中村屋安右衛門方より五條半七母へ送り來り候半七書置の寫し

誠や過去のうのがれがたき此身とて簡様に人目はづかしき死をとげりいまははや申上候事も不孝のうへの不孝ながらしかし親子のちざりを受かなしさのま書送りまへかた書しんじ候通りおやなり子じやと思ひなされては御身の置所もなくかなしき口をしく思召なされ候はん問たしゆらのけんぞく子と成り來りかやうのうき事見するとおぼしめし切てとかく五郎八其外妹衣とをちからとなされ候て世渡りのいとなみ頼上候一旦私も身體はてまして所へかほだし候も氣のどく千萬にぞんじ候てかくなりはてり何分萬助様へ申上候間御き可被下候くどくはわざと不申上候間にくしと思召被下まじく候

極月

半七

母さま

もとへ

尙々すいぶん小長どのおさがどのおよねどの

五郎八殿母様事よく／＼頼申候我等くわこの
ごう何のいんぐわとかくなりはて申候まゝよ
く／＼母様御いたはり頼上ぞんじ候

亦もや申上候事も大きな馬鹿うは氣ものと思召入候程もはづかしく候へども戀も無常も知人ぞしる貴公様より外に又と申さんかたもなく／＼頼みり／＼誠やきらん十七とう樂師とて天下に名をはつしはくがくの人さへ色のもだしがたきはせんなく候私事もかくならんとは露計りぞんじよらざる人口にかゝる死をとげ申候事は先書に頼まし送り候通身體きのどくの身となり候故かねて御噂申候女房さんこれさいはひと縁をも切候てしんみ心やすく仕候て江戸などへも參候はんと存大阪へ越候てくれ／＼我身の噂語り候て最早とまでといとまごひのよし語りきかせ候へばさりと／＼思ひよらざる事に申引にひかれぬ戀路に命拾候いければもとより大切なりし妹春のけいやくも御座候により是非なくかゝる死を

とげり／＼貴公様などにも夫程の事なりせばと思召被下候はんされどもと此女房つれましては親一門中にもきらはれ候はん事又しんしよもおとろへ候へばおもふかひもなく成ましおさん事も此たびわたくしゝんだいおとろへ候事皆々わが身ゆへと金もとにもおぼしめし候はん然ばとかくなくしてむじつの恨みをうけながら年來の思ひ立も叶はぬ事はいなく／＼人口にかゝるうき身と罷成候くどく書しるし申には及ばず互にせつなる一命はたし候事思ひわけられ不便と思召可被下候わがみかく成果候事慈母兄弟共なげき候はん間ふつとあきらめ申様に被成候てしんしよの儀は前かた申上候通に御座候とにつけかくにつけても是迄のよしみとおぼしめし被下候て成はて候跡の事偏によき様に頼上り／＼私もしんしよしはたし候て我所にて貌さし出し候事近頃はづかしく何事も／＼戀とひんとの二つからかく淺ましく死をとげり／＼併かばねは野外にさらし名は五畿内のうはきものと呼るゝ共

心はあしの都に至らんとやいばにかゝりながらもまさかのりんじう正念成佛あびらうんけんくゝと涙ながら書のこしらゝ

慈母方はくどくはつたへず候間くれゝ是迄の御よしみとは、様兄弟共事偏に頼上候いかにとふ人様には心ざしのせつなる事かたらせ給へ候て一遍の御念佛もと御申可被下候一門中傍輩中へはわざと控へ申候申上度事つきあえず候へ共胸せかれ候からあらゝ

極月六日

如此御座候以上

勝邊半七

甲屋隠居さま

尚々御内室様へもあはれはかなく成まし候と頼上くれゝは、様兄弟共事頼上書たき事千日にもつきなく候へども思へばくむかしゝのばれ涙に目も見えず候からあらゝ申くれゝかはらやふくの人々へも乍慮外よくゝたのみ上りゝ

三勝半七がうへに附言の説多し小子が涉獵せし書の

眞偽を考へ其實説を附録すといへども前文にて事足りぬべし
松の落葉に云

三勝心中 葛山四郎兵衛作

いざや最期を急がふといふて火屋の東のさいたら
烟露かしぐれか身をしる雨か^中過しいのとし霜月
七日霜と消行夜明の烏かはいゝと啼こゑによい
の口舌もみなあだしのゝ露も此身も同じゆめ

千日の火屋の東をサイタラ烟といへる異名古く
いひ傳ゆる事と見えたり

浪華青樓志に云

三勝の唱歌は元祿の頃ひやうだん町住吉屋某踊りの音頭に作りしがよき歌なりとて其頃某檢校手を附て艶歌とは成しぬ^{唱歌に糸のしらべよしの山さくらへ諸其外絃曲の書に出て世人よく知るゆへに}厥后前の廣橋勾當妙音によつて上品に成り世に廣橋の三勝と賞翫なし近代の玉岡その抄を傳えていよゝ彈はやらす

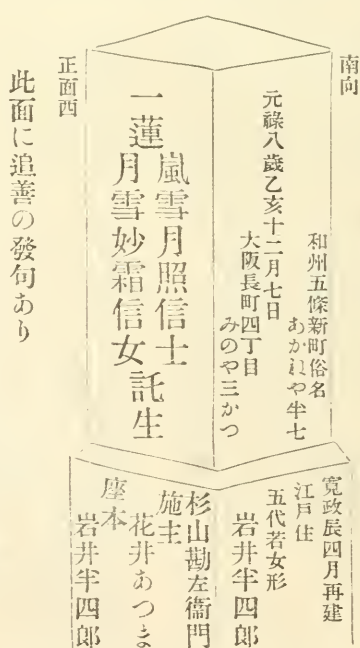
近世東武曲亭馬琴の紀行簑笠雨談に云

みの屋三勝が墓は大坂難波新地法善寺金毘羅堂のこなた茶店のむかひにあり世俗この寺を千日寺と

呼べり七月二十七日この地の友とゝもにこゝに遊びて三勝が古墳を見る石塔には南無阿彌陀佛の名號を彫附て外に法號なし予がかねて思ひしにたがへばこの外にも彼ものゝ墓ありやと問ふになしといふ墓のかたはらに新しき塔婆を建て寛政十三辛酉二月日みのや三勝 萬屋半七爲百回忌追善也と記せり今もそのゆかりの人あるにこそといへれば道しるべせし人のいへるはさにはあらずかゝる徒は俳優家より追福いとなむといふ寛政辛酉年百回忌にあたれば歿年は元祿十五年二月也石塔婆は角缺てありしれるものゝ云癆瘵を患るものこの石を末にして飲めば治すといふ又この寺の門前にある乞丐女六が墓もしかすれば酒量すゝむとて俗子往々かゝる殺風景をなすとなんこゝに疑はしきは嵐雪句集に一名玄峰集ともいふ玄峯は嵐雪が別號なり寛延三庚午年百萬旨原校計す

あかねやみのやと聞えたるなき名のながれといまるところは千日寺の露と消かへりぬ盆の頃は夜毎に群集し逆縁とぶらふ人あまた侍りけり戒名嵐雪照と石の塔婆に彫入たりあるまじきことならねどおもひがけず思ひはべりければ

夢によく似たるゆめかな墓まゐり 嵐雪
かゝれば予が見しは後に作りかへたるもの歟又別に嵐雪月照と戒名彫入たる墓あるか序あらばふたゝびたづぬべし
と書り是なんつれゝ草といふ八幡山に詣んとて麓の高良明神の社を拜みて歸りし類ひならん歟三勝半七の墓は千日奥の火屋の前東側西向に十基計りの石塔婆南より第一にあり



此面に追善の發句あり
二ばさつのうてなにならぶ袖の雪
死顔の猶うつくしき朝の霜
元祿の頃は岩井半四郎、嵐三右衛門南芝居を大阪名

代の座元とし其外大和屋甚兵衛、片岡仁左衛門座繁昌委しくは未登願見世の條に記す此岩井座にて右の心中を狂言に仕組て大當りなし三勝に打扮たる花井あづま茜屋半七を勤たる杉山勘左衛門など施主と成り追福の爲に營みし石碑と見えたり此石碑の角を缺しともはり前文に同じ臺石は寛政八辰年四月江戸住五代目若女形岩井半四郎再建すこれは元祿年中先代の半四郎座元を勤し時に建たる石碑なれば成べし

寛政八辰年岩井半四郎江戸より上り正月十日より中の芝居中山一徳座春かほみせ岩井入舛春戲場二のかはり正月二十七日より増補うす雪物語を勤む此年大阪出勤中に右石碑の臺石再建せし也

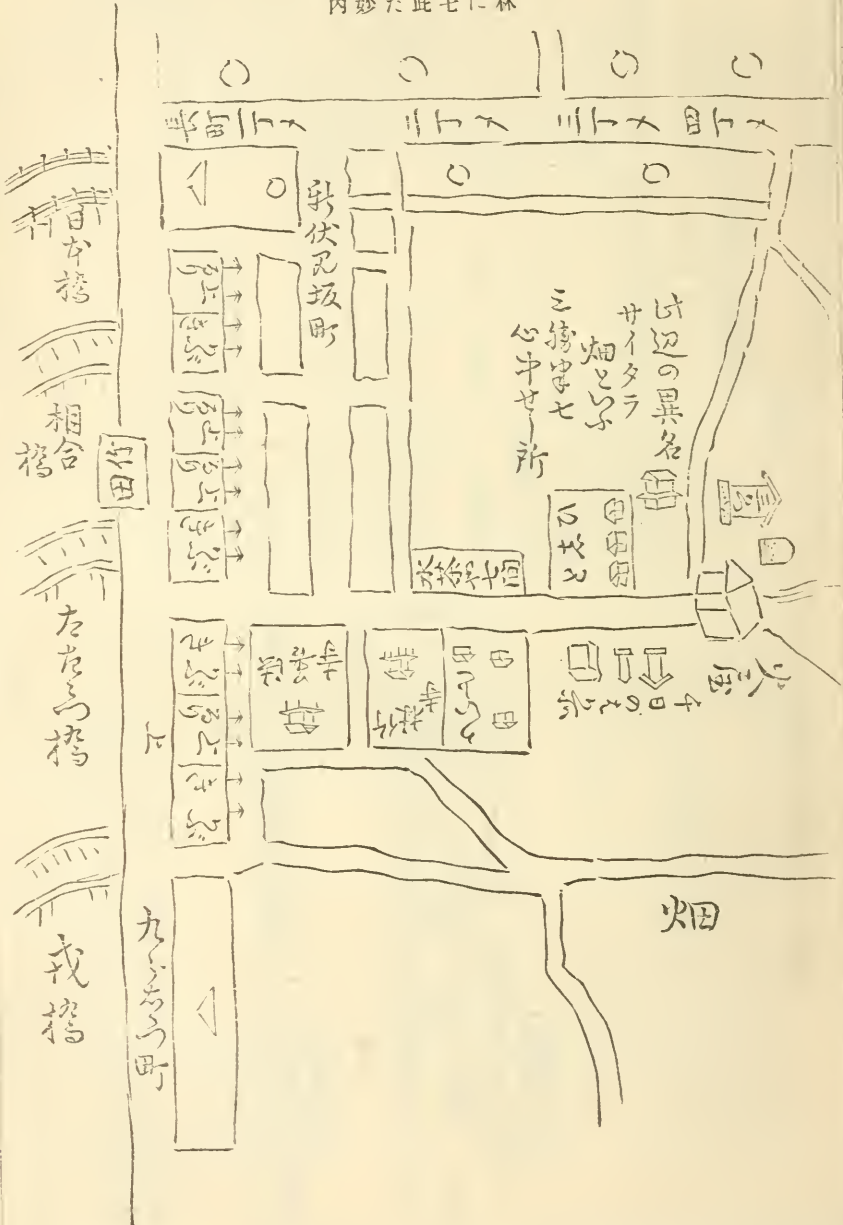
享保年間大阪の圖に千日の墓所火屋の邊に三かつ墓あり

曲亭主人は東都の旅客浪華遊覽の日嚮導せし人の不知案内ゆへ此墓を教へざるこそ意恨なれ豊竹座にて笠屋三勝二十五年忌といへる淨瑠璃を享保元年に勤む三勝半七歿後二十二年に成其後中の芝居にて寛延元年十月二十日より浪華茜染五十年忌女舞劔紅葉歿後五十四年に成簀笠老百回忌の塔婆を見て元祿十五年二月に相對死せしと思ふ

は年月を記す古墳を見ざる故也かし前文にも記す松の落葉の文中に「過しいのとし霜月七日霜と消行夜明の鳥」と書たる此書に寄らば考も有べきものを戲場の追善はおくれ先だちあながち正當とも治定あらねば是を證とせば年月も齟齬すべし百回忌の正當は寛政六寅年にて寛政十三年は歿後百七年に成れり

馬琴云、大阪長町といふ處は傘張多く住り三勝が家なりしといふ傘屋長町東側中程にありみのやは藝子の店の名也故に一名を笠屋といふよしへりこれ全く附言の説なるべし雜劇にて笠屋三勝と作りかえたるは慶長の頃女舞大頭の座元なりし笠屋三勝を擬したる也事迹合考といふものに女舞は白拍子の事也慶長の頃桐屋大藏、笠屋三勝女舞大頭の座元也云々これは平家物語盛衰記等の趣をうたひものに作り太鼓にあはせてこれを舞ふ舞の打扮は天冠を戴き狩衣をつけ大口をはくこれを女舞大頭と名づくこの舞に岩戸開天地拍子羅生門などいふ傳受の舞ありしとぞ永祿の頃室町家より祿給はりたる舞女に夏といふものあり夏が事室町殿物語に見えたりこれ笠屋と名づく

圖中竹林
 寺の前に
 水茶屋七
 軒あり此
 頃いまだ
 自安寺妙
 見の境内
 見えず



るのははじめ歟その子孫に笠屋新勝同じく萬勝春勝などいふ女ありみな寛文頃までの女舞也三勝もこの門より出たる女にて由緒あるもの也かぶき狂言作者並木五瓶といふもの三勝がいたいきし天冠をおさむるよし聞り天明四年十一月桐長桐芝居興行免許の時馬揃とやらん狂言をしたり天冠狩衣大口のいでたちにて太鼓一挺にてうたひ舞へりこれいにしへ女舞の遺風なるべし三勝が寛永の頃既に老女にて京に住せしといふこの一條醒世子の説なり亦茜屋半七といふものと不義の死をなせしといふ三勝は大坂籠屋町額風呂次郎左衛門がかゝえなりし小さんと時を同くせしお三といへる湯女也といふ此説は前卷小三金五郎の條に委し然るを歌舞妓狂言にはむかしの笠屋三勝が高名をかりて笠屋にみのや對もよく其名も俱に三勝といへば狂言作者のはたらきにてかくは作りなしたるを後人笠屋三勝が家は長町の傘屋なりしなどいふ附言の説をなすにこそあらめ

正徳三年巳十二月京大阪名代御改の節

一女舞

大頭 柏木

寛文七末年十一月四日佐渡守様御屋敷へ罷出女舞

仕度旨御願申上候處願の通御赦免被成候其後元祿十一寅年八月十三日駿河守様御番所にて娘れんに柏木と申名代譲り申度旨御願申上候處御赦免被成候唯今れんを柏木と申候柏木をはつと名を改申候

一同

笠屋三勝

寛文六丑年佐渡守様御番所にて名代御赦免被成候

笠屋新勝

同斷

一同

或人大和遊覽の序同國五條なる赤根屋半七が事迹を探らんと彼所に至る赤根屋の子孫今に相續して豆腐を商ふ其家に往古より傳へる招牌あり左に摸寫す

(招牌寫略之)

今古參考南水漫遊初編四の卷終

今古參考
南水漫遊初編

五の卷

一 高名石碑

おりく重兵衛石塔

並に一夜附狂言

朝比奈惣兵衛墓

義童勘太郎碑

お園六三墓

京扇小傳墓

近江屋治郎右衛門墓

一 五人男

附 五雁金藏文

一 五人斬

一 泥龜屋裏

一 幫間

附 幫間の異名

物真似聲色

一 女髮結

一 茄子田樂

一 和國辨當

一 水舟

附 坂田藤十郎話

一 江南通稱

附 から風呂

垢搔

茶立女

一 錢屋饅頭

附 菩薩が筆

樋之上昆布

道頓堀焼

大正うなぎ

一 異國產物啓發

附 器品目次

逆建屋敷

二階庭

吉田屋庭

古今參考 南水漫遊初編五の卷

颯々亭南水主人著

高名石碑

前卷に三勝半七が古墳を著す都て此墓の邊りには名
高き力士ズマイトリ或は俳優家妓婦歌妓の類ひの墓多しそが中
にわきて名高かりし人の墳に其事迹をもいさゝか著
す竹林寺の墓所に寛延四年寶曆と改元辛未七月二十八日
相對死せし重兵衛おりくの墳あり碑の表に釋了清俗
名重兵衛釋妙清俗名おりくと彫附け年月をも記し辭
世二首あり此心中七月二十八日夜の事なりしを八月
一日より角の芝居中村歌右衛門座に一夜附の狂言に
仕組三人組染貫摸様の切に出す作者爲永千蝶

おりく
十兵衛 **雨防紅亮菰**
あまやどりくれないのはなごぎ

同所に俠夫朝比奈宗兵衛の墓有延享三年寅八月八日
死法號釋玄俊此墓は歿後寶曆十年辰十一月うつぼよ

り建之此宗兵衛俠氣ありし事迹を戯文に取組寶曆十
年竹本座のあやつりにて極彩色娘扇に朝比奈藤兵衛
と變名なし世人よく知れり宗兵衛歿後十五年目に院
本の出しを見れば其比迄も宗兵衛が行狀は毎々いひ
出て口碑に残りしと見へたり法善寺境内には南無三
寶正三の墳を初め並木正三の傳は末卷かぶきの部に著す吉田文三郎男德齋
其餘數基ありかぶき役者やつし役の名人小川吉太郎
の墓もあり

安永十丑二月十九日

春月院了相日仙信士

京都一ヶ年座本
大阪十ヶ年座本

行年四十五才

よはひ身も今は石なり此つよさはんにまあゝ是
英子塚

同所に義重勘太郎の碑あり延寶の頃船場安土町に永
來彦兵衛といふ者あり其子彦太郎八歳にて死す勘太
郎は幼き心にも主従の別れを悲しみ延寶五年丁巳四
月二十二日十一歳にして歿死す明和六年丑四月四日
に石碑を建しかど又候や昨年文政二卯閏四月四日新
に小墳を營み碑の銘土州刈谷季恭識して其義死をあ
はれむそれには引かへ寛延二年の春の頃浮名を殘せ

しおその六三の石碑は自安寺境内西の墓あり彼が事迹は世人の翫ぶ院本八重霞浪花濱荻に仕組たり寛政九年の秋上町追手すし江戸櫻といふ鬢附屋の主人と淀川に浮名を流せし島の内歌妓京扇屋の小傳の墓も當寺にあり寛政九年八月五日不退院妙地信女俗名小でんと記す其外影繪の名人藤江大次郎の墓明和の頃幫間にて名高かりし京都近江屋治郎右衛門墓もあり明和九年壬辰九月二十日秋松院一峯信士

誰が氣にもよくもあふみやあふみやと

もてるたいこのよに鳴し人

宇賀のみたまの浪郎右衛門と呼びしにや忠臣講釋の五つ目の茶屋場に近江屋治郎右衛門の事を取組たり俳優家にては中村のじほ嵐小六の墓もあり

五人男

永祿の末千日におゐて梟木に懸りし浪華の五人男といふものもと無頼のあぶれ者也元祿十四年巳六月六日の夜大坂南久寶寺町四丁目河内屋五兵衛が雇人喜兵衛といふ者同町三木屋勘兵衛下人五郎といふ者と西横堀の濱側に納涼し家に歸らんとて北久太郎町の濱側を過ける時上難波町に住す木挽庚申の勘兵衛同

町の板屋三右衛門が下人市兵衛といふもの喜兵衛五郎に喧嘩を仕かけ互につかみ合ふ所へ博勞町のあぶれもの庵の平兵衛來かゝりて懷劍を以て喜兵衛が腹を突破り立去ける是より事起りて翌年午八月二十六日さしも虎狼のごとく人もおそれたる五人男等終に法場に屍をさらせり雁金の文七を七組の頭とす又此外にかいたての吉右衛門喧嘩や五郎右衛門とんび勘右衛門からくり六兵衛などいふあぶれもの川船水手の飛乗して半俠半賊の惡徒なりしがこれも同時に路傍の霜と消ぬ又讃岐屋町道具屋與兵衛といふもの異名を親仁の三郎といふ元あぶれ者にあらね其彼等に脇差を貸て是をさゝせ其恩をもて群集の場所のうしろ櫓とせしゆへ追放仰附らるゝ

奈良屋町雁金屋七兵衛後家同家作

巳六月十九日入牢二度入
元祿十五年午八月二十六日

死罪獄門

雁

金 文 七
生所大阪年二十八

立賣堀中之町今津屋七兵衛借家極
印屋正三郎作

巳六月二十二日入牢
元祿十五年八月廿六日

死罪獄門

極印ノ千右衛門
生所大阪年二十三

博勞町河内屋古右衛門借家

同 斷

庵

平

兵衛
年三十歳

同 斷

坂本町加島屋太兵衛借屋

雷ノ庄

九郎
年三十一歳

午六月二十二日入牢二度入
宿なし
死罪獄門

はてノ市右衛門
年二十九歳

西笹町龜屋吉右衛門借屋
中仕吉左衛門同家の弟

巳十二月二十二日牢死

かいたて吉右衛門

巳十二月三日牢死

喧嘩屋五郎右衛門
年三十七歳

社町増田屋衛門借家
次兵衛後家忤

午八月二十日牢死

とんびノ勘右衛門
年二十四歳

午四月二十九日牢死

宿なし

からくり六兵衛

讃岐屋町播磨屋市兵衛借屋
六兵衛養子

元禄十六年末七月八日
攝河兩國御追放

親仁ノ與兵衛
年二十七歳

前文の通り元禄十五年午八月二十六日五人男御仕置に相成同九月九日初日にて岡本文彌座のあやつりにて雁金文七といふ外題にて出し宇治嘉太夫には難波五人男と題し竹本座にも雁金文七の淨瑠璃を出す其後寛保二年戌七月二日初日竹田出雲作にて男作五雁

金といふ戯文五人男歿後四十一年目のあやつりより其名今に人口に残れり天王寺の塔中に雁金文七が奉納せし八島合戦の繪馬ありしが享和年中伽藍回祿の時うせて今はなし浪華青樓志に云佐渡島町備前屋某抱の女郎清川は五人男達の魁主雁金文七より名を發す實は清瀧といふ卑品の妓也名を作り當て芝居きやうげんに用ひ元禄年中の妓なりとぞ

五人斬

元文二年巳七月八日の夜會根崎新地におゐて五人切といふ事ありし事世人よく知れり

曾根崎新地三丁目糸屋忠兵衛借屋

大和屋重兵衛
當巳四十八歳

被切殺人

同女房とめ
五十一歳

同下女くら
十七歳

同きよ
十二歳

同町櫻風呂呂有馬屋喜兵衛抱

菊
當巳二十二歳

右切殺人段々御吟味有し處薩州松平大隅守様家來早田八右衛門成よし露顯に及び早速入牢被仰附翌年午

二月十六日千日に於て獄門に相成候捨札の寫

武家方家來

早田 八右衛門

此もの儀去年七月八日の夜曾根崎新地三丁目大和屋重兵衛方にて同所櫻風呂有馬屋喜兵衛抱の髪洗女菊野切殺し剩自分の科を爲可隠十兵衛夫婦并同入下女二人迄切殺し候段重々不届至極に附獄門にかくるもの也

二月

泥龜屋裏

伏見阪町に泥龜屋裏とて名高き有り寛延の頃川魚を商ふ者此裏に住て日毎に川魚を賣歩行一日道頓堀にて泥龜を賣ける内に數一つ不足せり彼商人疑心を生じて定めて此中の人盜み隠したる成べしと思ひ夫ぞといはぬ計りに罵りければ元來聞ぬ氣がさの土地なるゆへ皆々大きに立腹なし其邊を尋れ共更に知れず紛失の泥龜もしも逃たるならば今爰へ出よたとへいか程高直成とも我々買取て放ち助くべし疑はれし一言中々金錢に換がたと口々にいふ時に不思議や以前の泥龜何方よりかは這出て逃る氣色もなく多勢の

中に蹲り首を出して人々の顔を詠め居る風情虫魚の類すら命を惜むは生あるものゝならひにして無理ならず直段いか程なるぞと問ふに商人心裏に思ふやう此泥龜何程に高直にいふとも買取べき仕宜なるゆへ利分は爰ぞと價一貫文也といひて一錢も負ざれども何れも是非なく其直段に買取てすぐさま道頓堀へ放さん太儀ながらと彼商人に放させけるに川端へ持行亦々惡心萌し放す體になしつゝ傍に有合ふ石を川中へ投込み泥龜は己が懷に隠し歸り其餘又餘人へ五百文に賣渡し料理に懸りけるに泥龜首を出して持たる出乃庖丁に喰附をこち放し首打落して何の苦もなく料理なしけふは思ひも寄らぬ利分を得たりとて寢酒など心よく飲みて臥けるが夜半の頃頻りに苦しむ聲聞へけるゆへ隣家のもの大きに驚き戸を押破りかけ入見れば咽のあたり血に染て死し居たり早速家主へ知らせ其由訴へしかば檢使其疵口を御吟味あるに泥龜の切首商人の咽ぶえを喰傷りたる體にして不思議に思はれけれども外に仔細も無之ゆへ死骸取片付けを仰附られ相濟ぬ誠に非道の欲に耽り忽ち泥龜の爲に一命を失ひ後世に至る迄泥龜屋裏と綽號を残せ

り

幫間

蚕舟軒箕山が色道大鑑に云

太鼓持といふは傾城買の客に附したがふものをいふ此名目の起りは紀州の雜賀踊に始る鐘を持たるものは首にかけて踊る其中に鐘を持たぬ者に太鼓を持する也是によつて此名目とす

といへり又同書にたいこ持の異名を昔は行證人あかばおひやなど云又跡附沓持惟光ふんせき末社などいひたるよししるせり惟光は光源氏の君の心しりの若ものにて源氏の君の忍びありきの供をして常に附したがひ奉りし事源氏物語に見へたり其心にて名附たる物成べしされど昔も太鼓持を惟光といふことは筑紫がたにいひ馴て上がた筋にはこれを用ひざりしといへりふんせきは慶安のころ大阪邊にていひならはせし名目にて本客とは席をわかつといふ心にて分席といふよしかの書に見えたり

浪華青樓志に云牽頭といふものは昔は座料といふ事もなく客より録給はりしに近世は拍ぬによつてならぬやつに成り是非なく座切の花代を記得する

やうに成て古格を失へり廊中往昔の牽頭に名高かりしは

一九 郎花木屋喜入と云

二九 郎法名了喜

此兩人説經がたり也

あふむの吉兵衛

だまれの茂右衛門

すいの左四郎

宇治屋喜八

雪踏屋春ハルヒ

筆屋藤兵衛

正ト

元方

脇師忠左衛門

柳吉兵衛

竹本頼母

筑後ふし

千二

左馬太夫

板屋喜右衛門

同彦右衛門

あやめ八郎兵衛

筒井山城

是等物眞似に名高かりしとぞ

浪華色八卦廊中の條々陽氣一へんの判官辨慶揚屋入りの高調子ヤツアコリヤ／＼／＼ナントカナアと門口から鳴こめば花車仲居きよろりとした顔でいねいな挨拶此拍子には合ぬ所也それにもこりす座に著いて物眞似、身術、輕軀と出懸れば南でするやうな事なはると仲居が興を醒す太鼓持は大かた菊太夫、須

磨太夫と正風体な名を附て座敷淨瑠璃宿替する程本
を持て來て只今小栗の三の詰を語りますとていねい
な挨拶して眞顔で語れば愁ひの所に成て一座の女郎
仲居はろりした顔腹をかゝへる事也同所島の内の條
々外里の詰間はむしやうに拍子つき檀屏藝を見るご
とく鳥さしも仕かねぬ勢ひこれは詰間の下品也此所
は詰間の上水にして仕うちばたつかずせりふに穴な
く夫々の客の氣にあてがひ森田幸助を初め平助、喜
六、宗助、與八、松治、音太夫、伊勢太夫其外數も
知らず利八隠居して日養坊となりたるも興なり煙華
漫筆に云詰間無分別の仲人也と又詰間の名目の事舊
記に見えたればしるさず畢竟茶亭かゝは肝煎にて口
ぬ所をかき高に取もつ役にて無評のものなりされど
名物のひとつにて棄捨にする物にはあらず既に筒井
山城數年の功莫大なりとて從五位下に叙す其外名高
きも多し尤當所の規模といふべし大やうかたち大盡
に似て強欲のものよく酒をのみあり呑ぬあり龜腹な
る有文才ある有おほくは一文不通にて辯舌いづれも
立派なれどたい口とく囁りて踊りさはぎ聲色または
役者のしかたをす折にふれての興筆に盡し難しわけ

もなきものといふ人あり機山はかならずしばらくも
なくては叶はず堪忍のならぬ事も大盡がいへばよく
こらへ勇氣あるに似たりといへり此徒に聲色物眞似
をなす事實曆の末明和の頃より盛んに成行京都河東
には大津屋友吉此道の妙を得て明和壬辰の春初めて
物眞似狂言盡鸚鵡石といふ小冊を著し近世も折々あ
ふむ石として役者物まね當り狂言のせりふ附を出す事
あり其初めは明和七寅どし浪華江南霞雄といへるも
の聲色指南歌しらべといふ小冊を著す序文に

抑役者の聲色をうつし物眞似と賞することはその
かみ神代より傳りて遠くは磯邊の鸚鵡石ちかくは
犬の幸助石場宗助などその名を得し輩あり妓色の
さはぎあるは月待日待の翫ぐさとなりて淨るり景
ごとの長々しきより文七八藏の身ぶりものまねた
いひとくちに社中の耳をおどろかし一献をすゝむ
る一助と成ぬ此道もはら世におこなはるゝといへ
共部屋住の小子息全盛の若ものその師を求るにた
よりなくむなしく口を閉の輩少からずあはれ此道
に入たらん近道もがなそのかたはしかいつけよと
ある人のもといひなみがたくかけ合のせりふをい

さゝかしのしいでそれがはしにその役者のいきごとをあらましあらはし侍るといへども九つのうしのたゞ一筋のけうのこと共也見る人そのいたらざる所はゆるし給へかししかはあれどとくしよ千べん意をのづから明らかなりとかやそのせりふの文句をひたすら口ならし口中鼻のあんばい舌の置處くちびるの出入に心をつけ數遍に及ばしをのづからその佳境に至らざらんや鶯の附子は親鳥の囀りを聞知よく啼音をうつす事感するにたへたり今歌しらべと賞する鳥ありそれこれをかよはして此ふみの名にかり用ひ侍るものならし

時明和七年のと

葭雄

みづから題

文七 左りの肩をあげる心にておとがいを延し少シツカ 鼻へかけしりくちを早ういふ心持にて これは又あ

はうめが、船の出た跡で、待て居るで有ふ キハル わしが

いて取てくるがちか道、キハル どりやいかうか

歌右衛門 随分いきばりてたゞ口先で物をカミデキハル 早ふいひしりくちを延す心持にて これやい

文七 これと呼んだは何處からじや

歌右衛門 ウキ アイヤこゝからじや

文七 カルウ 見りやそちは異形の出立、此あたりに年ふるうすむ。ワライ ぬしといふやうなものか

歌右衛門 キハル アイヤそうでない、北川惣左衛門マア

待ちやれ ウキ

文七 ウキ 北川惣左衛門と我名を知つたは

歌右衛門 キハル キノニノヤノハノモノ

文七 ウキ して右一色は、サなんとく

歌右衛門 ウキ こうれ爰にある

文七 ウキ 味方的人数はいかに

歌右衛門 カルハナ およそ八千四人、此桑名の渡し守を味

方につけ、いやといはゝ叡山に立籠り疫病をもつてみな殺し。則合圖の。ちやうちんこれ見られよ

此外中山一蝶、淺尾奥山の懸合、鯉長、獅々吼、関

子、里虹、慶子、八甫なんどの癖を記しせりふの長

短開口の傳受を委しく著す一本鸚鵡石も歌しらべに

同じ

嵐吉三郎 唇をそらし喉に物のつまるあんばいに

てせゝらし聲はり上ケとんくの拍子にて聲を出すべし

淺尾爲十郎 口をいがめ胴聲を出しうなりを付又せりふの間々に聲を張り又聲を鎮めていふ也

中村次良三 喉よりせゝりをませてせりふの間に顔を跡へよせるやうにする又せりふの間にサイナさふじやわいなといふ事を胴こゑとせゝりと一ツにして早口にいふ也

芳澤あやめ 随分中なる甲聲を出し口の先にてせりふをいふウントいふせりふやサイナトいふせりふの間を息を下へ引やうにしてせりふを随分早口にいふべし

嵐雛助 喉と鼻との間から聲を出し鼻へ息の出ぬやうにして聲を出し随分甲と胴とをませて眼をつるやうにして調子あげていふべし

芳澤いろは 喉と甲と乙と一ツにませ餘り高からぬ調子にて鼻より息の出ぬやうにしてせりふをいふべし

尾上新七 舌を卷しなに甲聲を出し口を大がいに明きせりふの間を向ふへ付込みせりふにして一ツ／＼せりふを切ていふべし

澤村國太郎 随分可愛らしきと思ふ聲を出しせり

ふの間に嚙ちぎるやうにして又息を引やうにして又嚙ちぎるやうにして随分口にてはつし／＼いふべし

小川吉太郎 おとがい突出し口の先にて是はしたりといふせりふを喉と舌の先と一處にして輕う聲を出し甲と乙と一所にして聲を出すべし

藤川八藏 喉と胴と口の先きとから聲を出しせりふの間にへゝといふ笑ひをくはへ又せりふの間をかぶせていふべし

三杵大五郎 胴聲とせゝりと甲を少しませ首を少しぎくつかす鹽梅にてせりふの間すこし吃るやうにしていふべし

中山新九郎 喉より胴こゑを口こゑと一處にして餘程うなりを付首振やうにしてせりふをいふせりふの間に喉に痰の出るやうにしてせりふをいふべし

坂東岩五郎 胴より聲を出しせゝりをませ舌を卷き突込みせりふにて左りへ口をいがめてせりふをいふべし

尾上菊五郎 喉と舌との間より聲を出し甲をませ

せりふの間に少しうなりを付ケ首をふりませゝり
をませてせりふをいふべし

嵐三五郎 鼻へ息を出さぬやうにして甲と乙とを
ませせりふの間喉へ聲のこもるやうにして口の先
にていふべし

中村十藏 ひたいで人を見るやうにして甲こゑを
出し眉毛を上ケ下ケして下唇を少し出すやうにし
て齒を喰しばりめにしてせりふをいふべし

山下金作 口をすぼめ随分可愛らしき甲聲を出し
口の先にてせりふをいひ又せりふの間々に少し胴
へ懸るやうにしてせりふをいひ又間には喰しばる
やうにしてせりふをいふべし

中村富十郎 左りの鼻を押へ甲と乙との聲をはな
のつまるやうにして口の先にて息を引き舌を巻鹽
梅にしてせりふをいふべし

女髮結

女の髮結といふもの近世盛んに成れり其初めは明和
のはじめ江南俳優家の金剛と呼なすものゝ妻が妓婦
の髪を結ひしより始めり享保十二年末正月竹本座の
あやつり敵打未刻の太鼓下の巻に

なんば大阪じやといふて姫ごせの髪ゆひと男の取
揚婆はござんせぬ

と書たりしに四十年も過ぎるうち男の取揚婆は知ら
ず女の髮結ひは出来ぬ明和七年寅九月豊竹座のあや
つり源平鵜越四の口に

女中の髪を由井の濱お花といふて當世にもてはや
されて聞しき襷袢タスキ蔽膝マエダレかけまくもちよこゝ走り
の向ふより亂れし髪の後れをもつい撫附にヲ、お
花様お前の内へ行ところ

此頃は、や盛んに成しと見へ安永六年の戯作浪華名
物富貴地座位に富てせわしきものは虎屋の饅頭切
手、竹田のからくり、女の髮結

未刻太鼓といへる狂言の比までは極てなかりし物
なるに今は遊所はもとより町々にも群て住町の女
は遊所めきて心ときめかし或は長町どまりの旅人
の珍しがりて茜裏ながらつぶり計りの土地に馴た
るも鶴をや思ひ出ていとおそろしげ也

茄子田樂

何事も便利を考へ其速なる事を要とす夏日茄子田樂
を焼に中古までは串一本さして焼たるゆへともすれ

ば返りて焼やうあしかりしに安永の頃より今のごとく串二本さして其利多しと古老の夜話を思ひ合せば安永三年午八月豊竹座のあやつり花櫛會稽掲布染道行の文に

茄子田樂にあらねども鬢にとろりと油ぬり二本さしたる身なりしが

と書り然れば此頃の事にや夫までは鬢刷毛にて油を塗る事もなく割鋏みにつぎきれをはさみて油を塗など甚不便なる事ども也

和國辨當

往古は茶屋より芝居へ運ぶ辨當は提重亦是重箱にて有しが寶曆の頃道頓堀側に和國屋といふ方にて今のごとぎ割籠を初めしが通ひの下女も見物の男女も勝手宜しきとてこれを和國辨當と名附け安永の頃に至りては一統に此割籠を用ゆるやうに成たり

水舟

往古やつし形の開山坂田藤十郎は飯米を一粒選りにさせ大阪へ出勤の内も日々に京都加茂川の水を取り寄せて飲たり世人坂田藤十郎は高給を取るといへども身の程を知らざる榮曜者なりといひあへり藤十郎

其由を聞いていふやう我全く榮曜にて飯米をえらせ加茂川の水を取寄るにあらず高給を取て出勤の身なるゆへもしも飯米の中に石ありて齒を損ずるか大阪にて飲馴ざる水にて腹痛せば芝居へ出勤相成らずある時は銀主方へ相濟ざるゆへなりとかや實一理ある事にして往古の俳優家はかくのごとく其身を大切に養生を專一とせり近世嵐小六は平日淀川の水を汲せて飲みたり其始めは渠に乳房をあたへし乳母なる者の弟ありしが小六方に食客同前にして居る内毎日の役目として天王寺逢坂の清水を一荷づゝ汲に行たり一日小六偶々思ふやう一荷の水に逢坂までの勞をなすほど小船に竿さして淀川の水を汲なば飲水も澤なるべしとて頓て小船に水桶を乗せかの食客に日々淀川の水を汲せたりしかば近邊よりも茶の水計りは道頓堀の悪水を飲んより淀川の水を所望せんとかの水を遣ひ覺えしより島の大茶屋二軒三軒いひ合せて同じく小船にて淀川の水を汲せける此はじめは漸天明の頃の事なりしが今は道頓堀はいふに及ばず諸方の濱々にも水船出來て淀川の水を汲取り剩其仲間を極め株ものゝ一つと成れり

江南通稱

島の中の異名を陽臺、南陽、江南、崎陽、南岳、南江など、呼び坂町道頓堀邊より指て島の内を向ひ側といひたゞ南と計り呼ぶは島の内に限ったり元伏見坂町を坂亭、バンテウ、トライチ、難波新地をナンチ在所ともいひしが今は此里大ひに繁昌なし猶近邊に髭刺ありおとがい新地といひ新祇園町など、いふ一世界も出來ぬ島の中の娼家も往古はから風呂を焚て其功能宿酒を醒し體をゆるくす又何風呂といふ在名ばかりにて風呂を業とせぬあり日を定めていり人を招き垢搔女、茶立女といふを抱置しが今は總名伯人とのみいへり崎陽英華に云

白刃の名誠に白刃のごとしよく守ればよくうつかりとすれば其身を害するのみならず人にまで難儀を懸る事當もなき借錢をして人を倒す理り眼前なりよつてしらはの名あり鐵漿をつけざる計りを白はと心得たるは非也その名を顯にして勤るゆへ是をうつかりとする人に咎ありて白刃に咎なしたとへば人をきる刀に科はなくて人を殺せば其人の罪科のがれたき道理也隨分限相應に道具好はして

鰐どめの心得肝要也又垢搔茶立皆風呂屋の下仕也いつの頃よりか混じてひとつになる今は白刃はなくてみな風呂女と見へたり歎くべし風俗少づ、據どころはあれど大やう婆共見へず娘とも見へず妾共見へず格外のものにして何國を何國とも云がたし

と書たるを見れば垢搔茶立女の外に伯人と稱するもの有し歟

錢屋饅頭

道頓堀の名物錢屋饅頭を片意地形といひしは饅頭の最上高麗橋の虎屋めかさす錢屋は已が一家をなせしゆへ片意地形と呼しは安永頃の事也其頃此邊の名物には堺筋菩薩が筆樋の上昆布道頓堀焼といふ樂焼大正のうなぎ和らかみは忘れがたき風情ありて此匂ひにこたへかねる鼻いつとなく木の葉天狗の芽出しにも成なんとて夏の暮猶一と間をせきたり富てせわしきものと富貴地座位にも書り

異圖產物啓發

昇平の時にあひて江南の遊所に洒々落々の風流多く並木正三の逆さま座敷或は二階を庭に作りなし築山

泉水樹木を植させ井戸の釣瓶より山海の珍香を汲あげし趣向もおかしく難波新地吉田屋の庭には春秋をたくみ左邊の溜池堤を商つらひ麥飯を商ふ是等も物數寄のひとつ成べし右の趣向はかぶき狂言作者奈河龜介の趣向也一年此處におゐて唐の開帳といふ事をなす

異國產物啓發趣意

抑唐の開帳と名附け御覽に入たてまつるは當吉善亭の主吉田屋卯兵衛奈河龜助の兩人厚き懇意なるが近來拂底不仕合の由來を尋るに先年中の芝居興行の續き此處に店を開き春の花盛り夏は螢の光りつよく秋も燈籠赫々として日夜ごとに繁昌なりしが冬枯の時なる哉重き病に臥長々心神惱亂して渡世難出來奈河共に内談の狂言底を擲いて相談の折しも去々年の火災に奈河が家屋敷焼失によつて互ひに印形押かはせし中々に段々の難澁かさなれり兩人此處にひとつそくの同行と成て今更損失いはん方なくしんぶてんぶに祈誓をかけしに御最負の老翁借金横寝の枕上に立せ給ひ庭木の櫻の厚皮を削り利銀口錢を空しくする事なかれ時に繁昌なき

にしもあらずと墨ぐろに書附給ふと見て夢覺ぬ不思議なるかな其日に當て諸方の名高き雅先生より當時難澁をあはれみ給ひ異國外國の產物數品あづけてのたまはく汝等やせ顔はる事なかれ身上からの開帳を顯し御見物の他力を受なば家業繁昌御ひいきの種ならんと憐愍の御告によつて諸方の御所持御秘藏の品々或は借り受或は貰ひ預りものは半分の主と御大切の物ながら暫らく家が物にして富貴ひつてんに任せ扱こそ唐の開帳と名附て披露の趣あらゝ如斯に御座候恐々

追段

奈河の住所永長堂建立吉田聚螢庵大破に及び新宅座敷も金の敵に質どうたらん身上破損修覆の爲め開帳でふり升す兩方御執立と思召此上ながら四方の雅君御所持御秘藏の雅物珍物しばらく御かし被下ませふならば追々番附に書記し御ひいき御惠みにて唐物段々ふゑまするやう偏に奉希候

天明五年己三月廿六日

吉田聚螢庵
奈河永長堂

雅會目錄

鄭成功尺牘摸本 コクセンヤノシユヤキ	永勝伯鄭彩書閣摺 チノヒツセキ	來朝僧南源之墨跡 シラコキ	明朝時代之春書 ハシラコキ	清朝略曆 カフキ	同 涼帽 ウハギ	同 單掛 ヒトヘ	同 短衫 ハタキ	同 管衫 ハジキ	同 腰帶 ビシ	同 鞋子 ウチ	同 卓圍 シキ	天后祭之圖南京畫 ホサマツリノカラ	北京戲場畫圖 カラノゼンイニギヤウ	南京機杼偶人 タマ	同 香囊丸 ニホ	同 春畫臥屏 ワライビヤウブ	同 半面鼓 ハンタイ	同 短檠 ド	浙江普陀山之鑑子 ドラ
同 寄附之皮袍 カハコロモ	來朝僧木庵之墨跡 シラコキ	同 悅山之墨跡 シラコキ	清朝時憲書 コノカゲ	同 福壽牌 フタイレソウ	同 繪續綵縵 ナガイ	同 長衫 ハタキ	同 汗衫 アセ	同 褲子 フツ	同 襪子 モテ	同 方檯花布 コトモノ	同 偃子帽 フット	天后佛前燈籠 ホサマツリノタマテウチ	同 板行畫 バンゲウキ	同 花雲片糕 イニギヤウ	同 木樨珠數 ホヒ	同 佳文席坐圖 カワリ	同 火爐 ヒ	同 手鈴 テ	同 柁鈴 ド
沈南蘋書畫之扇面 ホウシヨウニウクヤウ	清朝出身保券 コトイ	同 穀舖行簿故紙 コトイ	福建省官升 フケン	同 秤子 ハタケ	同 箸筥 テウカサ	同 筥帶 ホウキ	同 柳子匙 ヤウ	同 如燈明燭 カ	同 安南國倍牌 アンナム	同 朝鮮國撲慶俊書 チヨウセン	同 琉球國炮皮三絃 リュウキョウ	同 太泥國担多羅葉笠 タニ	同 占城國象骨 シヤンケウ	同 織蓋 オリ	同 吊桶 ツル	同 烟包 セ	同 皮鞋 ヒ	同 ストロイス之卵大トリノタマゴ ホリコル	同 遠視之畫圖 ホリコル
同 所持之夾帛 カミイレ	同 典常鋪帳故紙 シヤウ	同 江南正祝納券 カンナン	同 算盤 サン	同 竹擔 アサ	同 採衫 サウ	同 採帶 ク	同 廣東祭禮鼓 カン	同 彩織篋席 ナ	同 潤節竹 ラノマル	同 黃質黑章全皮 ヤカ	同 同夜久貝之內肉皿 ヤカ	同 奧臥兩國花布 オウ	同 阿蘭陀國諸候會帖 アラント	同 規尺 シヤウ	同 肉鐲 ナ	同 芬吹 セ	同 青鸞之羽 アヲ	同 銅人之畫圖 ホリコル	

一紅毛書地球摺屏 <small>チヤキウノビヤウフ</small>	一韃靼鞴 <small>ウハツハリ</small>
一廣東勞 <small>カフ</small>	一清東瑤圃 <small>ウハツハリ</small>
一同木區 <small>ハチデウシキエムシロ</small>	一同東瑤圃 <small>ウハツハリ</small>
一暹羅國大綺席	一同紅毛 <small>ハチデウシキエムシロ</small>
一紅毛書渡海之圖 <small>キンチャク</small>	一同紅毛 <small>ハチデウシキエムシロ</small>
一琉球 <small>コトモカ</small>	一同南天竺 <small>ウハツハリ</small>
一清朝童羅衫 <small>シノモカ</small>	一同南天竺 <small>ウハツハリ</small>
一同石紋腰帶 <small>シノモカ</small>	一同南天竺 <small>ウハツハリ</small>
一同設色春畫 <small>サイシキウダ</small>	一同南天竺 <small>ウハツハリ</small>
一同鏡架 <small>キンウダ</small>	一同南天竺 <small>ウハツハリ</small>
一同銀篋 <small>ギンノカンザシ</small>	一同南天竺 <small>ウハツハリ</small>
一萬國畫屏風二枚	一同南天竺 <small>ウハツハリ</small>
一太刀一腰	一同南天竺 <small>ウハツハリ</small>
一エレキテル	一同南天竺 <small>ウハツハリ</small>
通計一百八種	一同南天竺 <small>ウハツハリ</small>

今古南水漫遊初編五の巻終

今古參考
南水漫遊拾遺

一の卷

一 淨瑠璃濫觴

並 十二段

傀儡師

同唱歌

西宮百太夫の説

一 小野阿通古跡

一 大阪操芝居起原

並 淨瑠璃稽古場

一 竹本筑後傳

並 あふむが柚の序

陸奥茂太夫傳書

一 豐竹越前傳

並 一世一代

古文鐵炮之辭

一 院本大意

並 稽古本の權輿

素人淨瑠璃

一 受領口宣免狀

並 名代改帳

說經祭文

今古
參考 南水漫遊拾遺一の卷

颯々亭南水主人著

淨瑠璃濫觴

夫淨瑠璃とは音曲の總名にしてすべて文に節あるは
何にても淨瑠璃といへり三箇津淨瑠璃の名目といへ
るは

土佐ぶし(江戸土佐少掾)、外記ぶし(薩摩外記)永閑
ぶし(虎屋永閑)半太夫ぶし(半太夫)喜元ぶし(虎屋
喜元)、文彌ぶし(岡本出羽掾)、義太夫ぶし(竹本筑後
掾)角太夫ぶし(山本土佐掾)嘉太夫ぶし(宇治加賀
掾)治太夫ぶし(松本治太夫)市郎太夫ぶし(大森市郎
太夫)一中ぶし(都太夫一中)宮古路ぶし(宮古路國
太夫)道具ぶし(道具屋吉左衛門)表具ぶし(表具又
四郎

此餘數流ありといへども浪華の人淨瑠璃と覺居るは

義太夫ぶしなり京都にては今に於て此唱を分てり
雍州府志に云、芝居四條河原にあり大凡傀儡場歌舞
妓田樂猿樂並に狂言舞々の類衆人こぞつて見る所の
場倭俗すべて芝居といふもと原野を芝といふ故に人
々芝に座して之を見るの義なり一説に芝居の號はも
と南都南大門薪の能より起る者なりと人形芝居或は
操りといふ其式は中央正面に舞臺をまふけ横の長さ
五間矮欄を構へ其上下幕を設けて偶人をあやつるも
の幕の内に居りて人形を上下幕の間より出す上段の
幕を顔かくしと稱す人形を操る者此幕を以て顔面を
隠すの謂也幕の内をすべて幕屋といひしかど近世舞
樂の樂屋に准ひて樂屋と稱す^略中扱其淨瑠璃を説く人
を太夫と稱す倭俗に諸藝毎に其の一部を一座といひ
其一座の長を太夫と稱す其次を脇太夫と云太夫を脇
に比し其次を脇に比するの謂也凡淨瑠璃の詞は始め
源義經の愛妾淨瑠璃御前の事よりいづ其詞は織田信
長公の夫人の侍女小野のお通是を作るしかして太夫
樂屋幕うちに座し高聲に曲節作文して之を談り説く
是を淨瑠璃を談るといふ茲より後他事を説といへど
もことごとく淨瑠璃と稱すとぞ三美線その曲節を助

く木偶人は男女老少その事に應じて是を出し舞臺の上下幕の間にて是を操る故に操といふまた人形を舞はすといひ或は人形を使ふともいふ淨瑠璃の間に又狂言をなす是また木偶人俳優の事をなす淨瑠璃太夫は文祿年中より慶長に及て監物某并次郎兵衛某なる者攝州西の宮の傀儡師をまねきて相共に之を經營す監物并次郎兵衛淨瑠璃を談り西の宮の人は人形をまはす其始は纔に幕を兩楹の間に張人形を其上に舞はす河内の介といふ人は淨瑠璃太夫受領の始なり次郎兵衛後に上總介と稱すこれより左内宮内相續て盛に行はる常芝居もと五條の橋の南に在り豊臣秀吉公伏見の城より京師に入せらるゝの路なりしかば其喧雜なるを嫌て今の四條河原に移さる傀儡の外雲舞并に幻術連飛輪脱絡小桶水操および珍禽奇獸或は矮人長女など雜品の藝術をなす者各々場を開く是近世の流風なり_{下略}

淡路座秘書に云、西宮に道薰といふ人御神の御心をなぐさめけると是より海上波風靜にして獵舟多くの魚を得る事久し時に道薰しばらくいたみて身まかりければまた風起り波高ふして猶更獵もなかりしかば

百太夫といふ人形を作りて神の御前なる箱のかたはらに身をひそめ人形を以て我は道薰なり尊の御機嫌を窺はん爲參りたりとて御心をなぐさめける是よりまた波風靜りて獵もありけるとなり其後時の帝此事を聞し召れ禁庭の政に出勤すべきよし勅詔有けるゆへ百太夫都に登りて此儀をつとむ是によつて

大日本者神國故以下慰神慮者爲諸伎藝首

かくのごとき號を下され諸國諸社の神いさめの事勅免ありしより胸に箱をかけ人形を以て神をいさめしなり是傀儡師の始也百太夫は諸國を巡りて淡州三原郡三條村といふ所にて身まかりけるに何某の四人百太夫に傀儡師の業を習ひて此後傀儡のわざをなせり是淡路座操の權輿なり右淡路座の操凡四十餘座あり當時諸國へ聞へて名高きは上村日向掾を最上とす往來帶刀御免にして芝居の表口に『大日本諸藝首』といふ額を懸る

傀儡師唱歌

「伊吹山おろしサア不破の關守ハンヤ戸ざゝぬ御代こそ目出度けれ

戀しきヤレおもひサアふるさと近づき山城の井出

の里ハアゴザレ／＼たうからゴザレ朝の嵐に誘は
れどざれサンヤぼんちはく／＼りやうてく／＼るかた
く門やはたそがれ時よハア春戸は八重垣大戸はく
／＼り明てたもれば聞洩る月よハア五郎左衛門が心
がこ／＼うかれてくる／＼やヒヨツクリヒヨツク
リ／＼ヒヨイトサンテ目出度イナ

近世寛延寶曆の頃迄西の宮より傀儡師來りしが今は
絶て見へず當時の首かけ芝居といふもの其類ひなる
べし百太夫の社は武庫郡西の宮惠美須の北に小祠あ
り内におさめる像は三歳計なる小兒の座したる人形
なり是神にあらず毎年正月に白粉を以て厚さ三四歩
計に顔に塗おく也此邊にその年生れたる小兒宮參り
をなす時此人形の顔を撫て其白粉を小兒の顔にぬる
なり是痘瘡惡病を除くといふ又曰是日本人形の初め
にして此木偶ある故に西の宮に笠井氏といふ人形芝
居の株有この木偶百太夫と稱する其由縁にて淨瑠璃
を談るものを太夫と呼び來れりとぞ歌道に遊女を傀
儡といふ事往古の遊女は客人の席にいたりて歌を諷
ひ舞を能し人形を遣ひなどせしとあり故に傀儡の名
を呼なるべしまた唐土にて傀儡棚といふは我國の糸

あやつりなり依て是を南京操ともいへり

小野阿通古蹟

文祿の頃より世に行はれて今専流布なす淨瑠璃の權
輿は織田信長公の侍女阿通といへる女源牛若丸と矢
矧の長者の女淨瑠璃姫の事を作文して長生殿十二段
と號す是樂師の十二神に表し十二因縁の道理をさと
すゆへ十二段とはなしぬ此艸紙に瀧野澤角節譜して
語り初しより淨瑠璃の一藝なれり阿通自筆の十二段
の卷は大阪内本町島田某といへる人持傳へしかど元
祿の初めに焼失すおしむべき事なり此阿通は織田家
の亂をさけてより津の國長柄の里に纔かなる艸庵を
結びて住けるが元來和歌を好みて數首の秀歌あり中
にも世人よくしれる歌は

つれ／＼とふりにし跡をおもふにも

袖こそぬるれ五月雨の空

阿通の下女みひろげの女の事近世畸人傳に委し阿通
の手鑑といふ板本世上に流布すれども信じ難し河内
國觀心寺の内中院の什物に自筆の文あり行年五十八
歳にして元和二年三月五日此庵室におゐて卒す其舊
記は長柄の町より西に當る畑の中にゑるしの松あり

て里俗おつうの松と呼びしかど正徳年中にくちたりしとぞ

大阪操芝居起原

大阪あやつりの最初は京都より左内宮内といふ淨瑠璃太夫折々大阪へ下り定日五日づゝ興行なし勝手よき時は日延をして勤しが其後淨瑠璃太夫段々多く相成操芝居繁昌に及びしゆへあやつり名代を定められしは歌舞妓狂言今より十箇年ほど後の事なり夫より東西の芝居盛なりし頃の操座は夜七つ頃より見物詰懸明六つ時に大序を開き五段の淨瑠璃晝の八つ頃には打出せしが不繁昌になり行に付ては次第くゝに初り遅き故をのづから打出しも夜に入様になれり寶曆年中堀江の阿彌陀池門前の新芝居にて初めて操を十文にてみせたり十七太夫淀太夫信濃太夫など出しが是より淨瑠璃の風儀おとろへ初め道頓堀東の芝居も明和二年八月晦日限にて相續難相成同四年豊竹座再興の爲四月八日より古淨瑠璃一段づゝ札錢十文宛の追出し芝居となり同六年には筑後芝居にて竹本豊竹打込みの座組を初め東西をあらそひし浪華氣質の風儀を失ふ翌七年またく豊竹一座再興におよぶと

いへどもいつしか兩座混雜に及び筑後の芝居も大西と呼びなし若太夫も芝居の名のみにて當代は専ら歌舞妓にて興行す扱亦稽古淨瑠璃といふものは寶永四亥年二月大阪生玉の社内におゐて竹本豊竹の稽古場を發起せしより其後座摩稻荷または北野お初天神社内等に稽古場をしつらひ太夫にならんとおもふ者は先づ稽古場へ出て修行なす其中に評判よきは兩座の内より呼出し又一座太夫の内より推舉するとも一座の太夫人形つかひ迄打寄先目見へを聞ければ抱惡敷はかゝへず抱るに於ては鼻紙代として金子拾兩と定め役場は序中を勤むかくのごとく其頃は卒爾に出勤する事なり難かりしが今は甚心安く先見習ひと名付て至て初心なるは役場なし勿論無給金にて出勤する太夫多しかゝる時節ゆへ稽古場も名のみにして修行の爲ならぬ慰み場になり或は席錢を出して語たり聞たりなどいへる事を初れば殺風景の族金太郎が呼びなすもの桶語り仁王語り蒲團かたり田葉粉かたりなどいふ曲語をなしてたわけを盡し出語には唇も動かざりしと或故人の風義を忘却なす誠に後世おそるべきは此道の行末ぞかし

竹本筑後傳

淨瑠璃といふもの數種あるが中に義太夫節は浪華を根本として此地の名物とす竹本義太夫は攝州天王寺村の農夫にて五郎兵衛と云し人なり生得音聲世人に勝れ大丈夫にしてさわやかなり貞享二年丑二月より道頓堀にて芝居興行ありて最初は宇治加賀掾の古物世繼曾我藍染川いろは物語井上播磨掾の古もの賢女手習鑑頼朝七騎落以上五替り同三年寅の春より近松門左衛門京都より新物を作り越され其第一は出世景清は近松氏義太夫座の淨瑠璃作の初とす元祿十四年已五月

勅許受領して竹本筑後掾藤原博教と號す貞享の初めより古物五十番餘新作百番餘を操りにかけて相勤正徳四年午九月十日行年六十四歳にて歿す法號釋道喜興行の初めより三十三箇年相續なし元祿年中に竹田出雲竹本氏の座元となり人形道具に至る迄華美を盡しければ繁昌なす事以前に百倍せり

鸚鵡が柚序に云、いろはにはへとは尊圓親王の御筆も七才の太郎松がかけるも點畫替る事なくいの字はいの字に讀ろの字はろの字に極まれ共よしあしの階

級は千重萬段こゝろこと葉の及ぶ所にあらずからにしき晋元の王羲之趙子昂敷島の大和には道風佐理行成などあまたの名筆の工に書なせる文字の形品々なれど筆法は十二點にはじまりて十二點の外を出す韻會字彙玉篇に二十餘萬の鳥の跡絶せぬ寶なりけりと物書人の語り給へるにかたえなる萬に心得たる人の申されしは六藝の道何れか替る事の有べき文武の樂は美盡し善盡しつくさずのたがひ目こそあらめ樂に於て五音十二律にもるべからず申樂を見侍るに上手のさし扇下手のさし扇さす所に違ひなく引取更に變らず太鼓また然り上手の笛にて笙簫箏の聲もふかずひいやひやりを能々吹覺る計りなり立出て峰の雲は誰か舞ても遊谷四海波靜にては誰が諷ふても高砂平家のふしに諷ふたる名人もなければどもよしあしの雲泥なるはいかにぞや萬の藝かくのごとし定まりたる事を能すべし但その中の曲節は時に從ひ折にふれて臨機應變まゝ有べきにや然あれど利休紹鷗宗和などの變りし物數寄目を驚すといへども湯の上へ茶を入て香煎ふるやうなる無理なる物數寄もなし名にあふ歌人のさまゝの狂歌の雜體はあれども五七五七

七の外は詠給はず諸々の藝能師傳を受て定りたる事を能々切瑳琢磨して時に應じて略變(の)用捨こそ達人の業とも名人の藝ともいふべけれど語給ひしを僕末座に有てつらく承るに我淨瑠璃の道におもひ合ていさゝかも違はず淨瑠璃始りて百十餘年瀧澤野角兩檢校平家に委敷琵琶の妙手たりしより淨瑠璃物語といふ雙紙を綴り直して樂師の十二神をかたどり十二段といふふしを語り出せり其時は三味線にあはするといふ事もなく扇を開き左に持右の手の爪先にて骨と地紙とを搔ならして色々の拍子を取たる事なり其十二段の目錄さへ今は知りたる淨瑠璃語もなし此外に都巡りといふもの一段はこれは檢校の門弟京東洞院目貫屋長三郎と云し人の作なりかけまくも賢き慶長の帝是を興ぎせ給ひて人形にかけさせ寂覽度々有しより淨瑠璃太夫受領に拜し世に行はれて安口の判官弓繼。鎧がえ。戸井田。五輪碎是を五部の本ふしと傳へ侍る岷江の濫觴絶ずはびこりて音曲の海波靜かなる時つ風民安き御代のたのしみ淨瑠璃といふ一ふしの定りぬこそ淺からね何の道も古をあふぎて今を戀ざらめやは此音曲も格に入て格を離れ格をはな

れて格に入といふ事第一の習ひなるべし古播磨太夫は淨瑠璃の中へ謠をいるゝさへまんざらの謠に聞ゆるはあしと申されし謠にても歌にても淨瑠璃に打そひて淨瑠璃の格にはれぬやうに謠と申されし肝要の詞なりけり僕が門弟には淨瑠璃の文句の中ならば謠も歌も謠ふとはおもふべからず語といふべしとこそ教へ侍れいはむや時々の流行歌木やり音頭の類ひ面かげはさも有なん淨瑠璃の正體は眼をはづすべからす世の流行歌とて半年流行は稀成事にて上方の流行こと遠國にしらず田舎の流行もの都路にしらず上京の事下京に聞へず天滿の噂難波にしらぬ事のみ多し異國には大きな御教ひとつの内にさへ一日の間氣候ひとしからずといへり流行事さのみ好ずともあらまほし世間のはやり事聞出し淨瑠璃に入んよりは手前の淨るり世間に流行やうに稽古有たきもの也世繼曾我の道行に馬方いやよと歌入り事相應せず一番の謹いま聞に汗を流すと三十年前を後悔ある作者の心藝道の執心さも有べき事なり實にも文言章段の品に依ていかなる名人も語り得難きことあるべし堅からんとすれば太平記のごとく艶ならんとすれ

は源氏物語のごとく派手ならむとすれば當世好色艸紙の輕口に似て各淨瑠璃にあらず詩人の平仄を分ち韻字を抑も律呂に懸てうたはん爲とかや此國の謠ひもの我駒貫川伊勢の海などのゆふなるさわらび吉々利々老鼠などのおかしげなるも呂律に違ぬこそ有難けれそのごとく文句にもはこひはかせおよぎ等程拍子ある事なればそれに心を付て文字移り音聲開合甲乙の位を練磨すべき事なり申もはかりあれども逍遙院入道内府公は御日侍の夜尺八鼓三味線などの遊びの中にいで我も一藝せんとて箒木の品定の卷を素讀遊ばせしにあやしの下部迄聞人感に堪て外の歌三味線もけをされしとかや源氏の讀曲堂上の御傳受には清濁文字移りは勿論御聲になまりをかけさせ給ふところ節をつけさせ給ふ所も有とかや傳へ承る是等をこそ音曲の龜鑑とも申べかめれ夫迄は恐有とも一藝の本意をしらんとはげむべしまして拙き辻藝門音曲を大事有げに語りませて淨瑠璃本ふしの立所を失ふ下劣の甚敷本心を外にうばゝるいかなる狂人ぞやと宇治加賀掾の批判尤成べし若聞人外のませ事を譽る時は扱は我淨瑠璃は是にをとりたると返り見てい

よゝたしなむべき事なり名醫の調合ある益氣湯も數醫者の合する敗毒散も藥味はかはらねども大に人を傷ひ又大きに人を助く淨瑠璃に變りたる節古今なき事也唯趣向年代せりふ風景時宜にそむかず無理ならぬ様に地色ふし詞迄心を加えて精を深く語りなす事彼病根病因に依て配劑加減有がごとし外の事まぢゆるは一味二味の加藥のごとく本方の爲の加藥にて加藥の爲の本方にあらずと知るべしかくあればとて本式に脇目もふらず作りつけたるごとくなるは佛藝とて嫌ふ事なり其内の意味は聲とふしとの和に有て言語道斷天然の所なるべし萬葉の書を誦じても面授口傳なくしては萬の道成難しとかや峯の藥師の淨瑠璃の本方相傳の上に年を重ねて口傳の上に工夫をつみて加減の修行あらまほしく四十餘年來寢語にも是をわすれずといへども今に淵底をつくさず是ぞ語り得たりとおもふ事のなきは我身ながらいかなる事ぞやと申侍りし詞の中より正本屋山本治重その座に有てあふむが柚の板行なりて末序とするものなし幸に只今の教訓しるしてよと硯をならして口移しの頓て紙上に移りけるはむべもあふむが囀りなりけら

し今此もてあそび隆盛にして雲の上には大宮人の櫻かざし給ふ頃諸侯は御在國の御つれづれ淨瑠璃をうつさしめ給ひて僕が墨譜の仰をかうぶるも多かり板行の書なりては富家の深閑もてあそばれ遠國波濤の樵歌にもまじりて道の廣く布きわたれる事のあらたのしいかな只されども重板類板まち／＼にて或は七行に書替予にことはりもなく奥書名乗を似せて直本正本といつはり世を欺きしかも文字をあらけ紙數を重ねて價を昇し藝の道を輕蔑にし直傳を打消んとする意路の惡るき類ひ傳々寫々として節頌墨譜にいたり毫末の誤大なる相違なる事我猶是をやめりたとへば唐人參の見ば能よりも朝鮮の髭人參の功能はるかに増るが如しそれがゆへにはやくよりせしがごとく予が名の下に青赤の二印を加へて直傳とあらはすは山本九右衛門一家に限りて外になしといふ事を爰にしるして是を序とする者しかなり

正徳元辛卯年

筑後掾藤原博教

初秋吉日

此文淨瑠璃の故實または藝道の便りとなるべきものゆへ著し置ぬまた陸奥茂太夫の傳書といふもののあ

り凡音曲の道上平去入四機開合假名清濁を本とする事いふに及ばず就中淨瑠璃とて樂師如來の寶號を申事淨瑠璃御前の事より起りたる而已にもあらず平判官康賴入道平家物語を作り生佛に教て節附は臺家の稱名より出たるゆへ稱名に二重三重あり平家にまた二重三重あり龍野澤角の語り始し十二段の古き節も扱こそ淨瑠璃と號する事讚佛稱名の心も籠るよし傳々承り候然ればおろそかに語るは樂師如來の冥感も恐れ有にあらずや予が若年の昔竹本先生の門下に遊び口授を請秘傳を得餘力ある時は他門の音曲をも潜に窺ひ年來心を碎て右の流義を語る事いさゝか予が私にあらず程用の位長短の裳譜其外程拍子地はこび寄せ字戻り響移持合當るさばる等の違を知らず皆々口傳あらずしては難至者なり其外の吟味もなくして我こそ習ひ得たり顔に語る人はたとへば蛤の殻を夫ともひて中の實を捨るといふ山家の者のたとへに似たり予が門に遊ぶ人々此心を得て稽古修行あらば秘事のこらず傳授すべきものなり口傳は華鳥風月にあり常々神祇釋教戀無常人倫生類畜類山類水邊降物植物

登物述懷哀傷祝言等に心を寄せ怠りなく稽古可有者なり穴賢

陸奥茂太夫

享保十九寅正月日

藤原淨慈 在判

陸奥一呼殿

古代に虎屋喜太夫次に陸奥茂太夫二ツ井彦太夫永島重太夫竹本源太夫辰松八郎兵衛等大阪表にて芝居興行ありしかども何れも井上竹本の淨瑠璃を語られしゆへ別に新作の院本を不見聞

豊竹越前傳

豊竹越前は大阪南船場の産なり元祿十二年の頃井上宇治竹本等の先師達の淨瑠璃を學びて此道の達人と成十八歳の時竹本采女といひ後に竹本若太夫と改めしばらく竹本同座なれども程なく道頓堀にて芝居興行なし傾城懷内子是新作の初めなり京都堺紀州南都にても芝居を興行せられ其後元祿十五壬午年より定芝居と成享保九年辰三月二十一日大阪大火類焼の後今の芝居地面を買求同年十月十六日より新造の芝居にて興行其後享保十六年亥九月勅許受領

豊竹越前少椽藤原繁泰祝儀出語蓬萊山を勤む延享二年丑十一月三日より一世一代を勤む六十五歳

北條時頼記

雪のどん

翌三年寅五月京都にて一世一代衆仙人吉野櫻を務め延享五年辰十月堺にて一世一代東艦御狩卷惡源太明治合戦を勤め明和元年申九月十三日行年八十四歳にて卒す天王寺西門納骨堂の後に墓あり一音院眞覺隆信日重居士

安永五年申七月十三回忌追善として音曲八の巻といふふし事を勤む此太夫、麓太夫、房太夫、八重太夫、時太夫、頼太夫、湊太夫

此翁生涯に戯文の作多し作名は梁塵軒といふ寶曆年中桂井蒼八の戲作古文鐵砲に云

諫^ニ筑^ニ豐^ニ居^ニ士^ニ成^ニ作者^ニ一^ニ序^ニ

淨瑠璃風流而評判通衆人最者何謂也廢^ニ其^ニ古^ニ鉤^ニ其^ニ新^ニ張^ニ其^ニ工^ニ矣^ニ財^ニ主^ニ不^ニ言^ニ胸^ニ中^ニ喜^ニ座^ニ中^ニ服^ニ者^ニ何^ニ謂^ニ也^ニ鍛^ニ其^ニ文^ニ配^ニ其^ニ操^ニ鳴^ニ其^ニ才^ニ矣^ニ是^ニ知^ニ財^ニ主^ニ逸^ニ於^ニ上^ニ作者^ニ勞^ニ於^ニ下^ニ法^ニ手^ニ理^ニ也^ニ古^ニ巧^ニ淨瑠璃^ニ者^ニ自^ニ近^ニ松^ニ出^ニ雲^ニ至^ニ阿^ニ紋^ニ觀^ニ並^ニ木^ニ可^ニ數^ニ也^ニ是^ニ不^ニ獨^ニ鳴^ニ其^ニ才^ニ亦^ニ皆^ニ務^ニ于^ニ勤^ニ耳^ニ況^ニ夜^ニ寢^ニ夙^ニ起^ニ登^ニ櫓^ニ擊^ニ鼓^ニ者^ニ猶^ニ然^ニ況^ニ作者^ニ乎^ニ一^ニ朝^ニ有^ニ怪^ニ異^ニ揮^ニ筆^ニ喜^ニ耳^ニ掛^ニ操^ニ樂^ニ目^ニ是^ニ皆^ニ主^ニ頓^ニ作^ニ勤^ニ行^ニ也^ニ至^ニ若^ニ夫^ニ大^ニ城^ニ戸^ニ向^ニ曙^ニ東^ニ方^ニ未^ニ明^ニ好^ニ操^ニ道^ニ路^ニ連^ニ跟^ニ傾^ニ評^ニ判^ニ最

負^レ而來^ニ乎櫓鼓未^レ響^ニ、傀儡摩^レ險太夫座^ニ牀謹^ニ是皆不^レ厭^ニ其勞^ニ、悞^ニ其的^ニ也^ニ矣^ニ、其或文拙趣向不^レ巧、最者爲閉^レ口盛^レ額走奔太夫將^レ語心不^レ悅三絃失^レ律撥摩^レ皮表勇欠仲商宮律肘疲也、嗚呼一作之可否財主之得失也、財主之得失者座中之得失歟、知輔^ニ相於君^ニ撫^ニ養於萬民^ニ一國之政、萬人之命懸^ニ于宰相^ニ、警君爲^ニ財主^ニ宰相爲^ニ作者^ニ、民總座中也、見物者餘國也、往昔仲尼攝^ニ行相事^ニ出^ニ無用之作者^ニ少片卯^ニ與^レ聞^ニ國政^ニ三月魯國大評判善於茲四方見^ニ物之^ニ其政也、所謂淨瑠璃也、然淨瑠璃佳作置^ニ財主於泰山之安^ニ封^ニ座中於榮旋之富^ニ澤^ニ蒙表勇^ニ引^ニ辛乎見物^ニ是所^ニ以作者爲^ニ作者^ニ能其逸才遇^ニ知於主君^ニ壯^ニ威氣於柴居^ニ者也、雖^ニ事不^レ同理相似余友筑豐今屬^レ之因以諫^レ之以^レ辭

院本大意

淨瑠璃は小野の阿通の作文淨瑠璃物語十二段を始とし此物語聞ふるしたる後瀧野澤角の兩檢校大職冠、八島、高館等の舞の章雅に節を附け是を淨瑠璃節といひならはせしより惣名とは成れり其後薩摩治郎右衛門新作を綴り曲節を語出るしかし其文句何れも短かくして今の世の景事道行などの類ひなり其上三絃

に合するといふ事もなく右の手の爪先にて扇のはねを抓鳴らして拍子をとり語たるよし其後角澤檢校三絃に合し始め此角澤の門人京都東洞院二條の住人目貫屋長三郎といふ者都巡り見物左衛門といふ外題の五段續を作り夫より相續^ニ好者の遊人^ニ或は俳諧師など次第^ニに新作を編出せり西鶴宇治嘉太夫錦文流近松門左衛門紀海音村上嘉助西澤一風松田和吉長谷川千四竹田出雲爲永千蝶並木宗輔同丈助等より當時の作者連綿せり扱又京都の山本土佐椽宇治加賀椽大阪に井上播摩椽竹本筑後椽豊竹越前椽等の芝居にて語り來りし淨瑠璃段々に繁昌なし井上氏の華山院を宇治加賀椽方にては弘徽殿嫉妬打と外題を替また井上氏の日向景清を松本治太夫方にては鎌倉袖日記と替山本氏方の都志王丸を岡本文彌にて山柘太夫と變じ加賀椽方の團扇曾我を筑後方にて百日曾我と變せし斯様の例多し前々は不流行なる淨瑠璃は板行には成らざるよし勿論井上氏山本氏の時代には納入細字の讀み本計りにて稽古本といふは曾てなし貞享二丑年七つ伊呂波の淨瑠璃五段を大字八行に板行させ宇治加賀椽章を指し直の正本と號して出す是稽古本

の最初とす其後寶永七庚寅年竹本筑後掾の語られし吉野都女楠の時より大字七行となし初む是より前々の當り淨瑠璃をも改め七行に再板せられしとなり然るに寶永年中京都二度の大火次に享保辰年大阪大火の節古來の正本板木焼失して傳はらざるも多しとぞ宇治嘉太夫は紀州和歌山宇治といふ所の人にて元來謠曲に妙を得たりまた伊勢島の弟子と成淨瑠璃の道に入て名人の聞へ高く貞享の頃芝居を興行して勅許受領宇治加賀掾藤原好澄と號す大字の正本に謠本のごとく節附を加へ初めて是を出す夫より九行八行六くだり今大字五行を用ひて外に床本といふ書本もあり中頃住太夫此太夫など淨瑠璃節附の小本を出せし事もあり往古出板の稽古本といふものなき頃は此一曲を學ばんとおもふ輩戯文を自分に寫し師に便りて節附を乞ひしとなり其頃の寫本萬歳壽頼政といふを閱せしが當世聞馴ざるふし附數種ありけり

ヲダギフシ

トヨノフシ

キリヤマ

サナイ

馬方ブシ

リヨ

歌ナヤシ

アフミコムスビ

アイカン

ハヤナゲ

ヤツシ

下セメ

シヨリ
サバナミ
シグレ
此外三十種餘見へたり當代詞と計ある所も

實詞 惡人詞 かん詞 色詞

など、記せり此道日毎に流行に及びしより正本といへる板行出來て太夫の節頗墨譜奥書に青赤の二印を加て直傳とし人の心をなぐさむる業となりて七本骨の拍子扇貴人の御手にもふれ給ひ末々迄も月待日待小風呂の内にて此一ふしの止事なく若き者はいふもさらなり齒拔親仁も老樂に何をがなとおもへども鞠に足弱く揚弓に眼定まらず時に一口の淨瑠璃を語りて興を催しけるそが中に藤戸の先陣待宵時雨の道行の枕こと葉

おもひ川はさぬ袂にゆくみづのうき名ながさんは
づかしや人ははたちの花ざかり戀にくちなばおし
からぬちりのあくたの身をすれば

此口眞似をせざるはなし此時より道行の節事大いに流行なし道行の抜本とて市中を賣歩行やうになりたり延寶の頃町淨瑠璃に名高かりしは
播磨風

とんどは

三郎兵衛

すけた町

長兵衛

すいや町

まとり惣兵衛

近江町

粉屋佐兵衛

内本町

魚屋小左衛門

内大工町

勘兵衛

文彌風

ときよ町

烟草屋三右衛門

南谷町

かせ屋吉兵衛

彌兵衛町

八百屋三右衛門

彌兵衛町

八郎兵衛

岡田市兵衛

北谷町

小間物屋九郎三郎

北谷町

權四郎

二郎兵衛風

すけいた町

めいや六兵衛

同町

塚本又左衛門

本出羽風

谷町

ときや四郎兵衛

だうけ

北くわや二町目

理兵衛

ひよろま

五郎ま

小兵衛

北新町三丁目

はゝの庄兵衛

兵内

かくのごとく難波雀にみへたり其後寶曆の末明和安

永の頃迄は大阪に素人淨瑠璃として語る者は

ウツガ

南金

堂島

提久

順慶町

平助

今はし

塚五

今橋

ひら八

纔に四五輩にて至極珍らしく人の用ひも強かりしが今は素人淨るり盛に成たり

○受領口宣免狀

淨瑠璃太夫勅許受領の口宣并淨瑠璃歌舞妓その外からくり説經語等の芝居名代御改ありし正徳年間の帳面を左に著す

名代改帳表書

正徳三年巳十二月

上

四條河原

歌舞妓

物真似盡

舞

からくり

淨瑠璃

説經

名代改帳

淨瑠璃 河内

慶長十八年正月十五日口宣頂戴右

河内掾と申名代

口 宣 案

上卿中御門大納言

慶長十八年正月十五日

宣旨

藤原吉次

宣任 河内目

奉

藏人頭左大辨藤原孝房

甥山本彌三五郎と申者に譲り申度旨元祿十五年午十一月二十六日名代主妙印と申者奉願駿河守様御番所にて願之通御赦免被成候其後正徳元卯年六月三日駿河守様御番所にて右彌三五郎弟勘左衛門に譲申度旨奉願候所御赦免被成候

高砂颯々鈔に云、說經といふは昔釋氏の屬に說經師といふもの有て佛菩薩の緣起などを詞に綴りて稱名念佛に加へて俗人に佛道を勸めけるより始り其後異國本朝古人の事跡あはれに悲しきをいひ又名僧などの傳をとりて世の無常なる事をしめし人に菩提をすゝめしなり本は鉦鼓を鳴らし拍子とせしを今は三絃に和する事になりぬ正徳三年名代改帳に

說經

一

日暮小太夫

右小太夫と申名代古來より蒙御免所持仕來候處三十九年以前親より譲受相續仕來候

說經

一

日暮八太夫

右八太夫と申名代古來より蒙御免所持仕來候處三十九年以前親より譲り受相續仕來候

關清水大明神蟬丸宮

別當近松寺

山城國愛宕郡京日暮八太夫

本久

右以本久依願繼目所補太夫號
依而如件

正滿講師

淨密講師

淨榮講師

正徳二壬辰年

九月二十八日

說經者日暮八太夫本久

高砂颯々鈔に云、祭文といへるも本は其人一生の善事慰をあげてその人を吊ふ文なり、悲哀を主として人を泣しむる事なれども哀聲を過るはその勢ひ自然と謠聲となる今俗間の祭文といふものは色欲に溺れ淫亂放蕩にして家を亡し身を失ひし賤敷者の事を作るゆへに其鄙俗悖亂言べからず云々

祭文は說經節の和らかきもの、様に聞ゆ

今古參考南水漫遊拾遺一の卷終

今古
參考
南水漫遊拾遺

一一の卷

一 平安堂近松氏の傳

並 辭世狂贊

道行ぶりの妙文

國姓爺釋文

一 紀海音略傳

並 座鋪八景貞柳狂歌

淨瑠璃作者略傳

並 浮瑠璃五段大意

今古參考南水漫遊拾遺二の巻

颯々南水主人著

平安堂近松氏の傳

淨瑠璃の作文歌舞妓狂言作者名人と世に聞へたる近松門左衛門姓は杉森名は信盛平安堂巢林子と號す越前の人一説に三州人といふ壯年にて肥前唐津近松禪寺に遊學し義門と改僧侶を數多門人となせしが所詮一寺の主と成ては衆生化度の利益薄しと大悟を開き雲水に出しが肉縁の舍弟に岡本一抱子といふ大儒の醫師京都にありけり是に寄宿して還俗なし堂上方へ勤仕の間有職を記憶し其頃京師都万太夫の歌舞妓芝居または淨瑠璃芝居宇治加賀掾井上播磨掾岡本文彌山本角太夫などの淨瑠璃狂言を著作せしが貞享三年大阪竹本義太夫座より頼まれ出世景清といふ新作を出されしが竹本の戲文の書初にて夫より生涯數百番の出作ありて英名海内に發し看板または板本に作者の名を記す元祖とす近松氏は元來衆生を化度せん爲の信念より

出作する戲文ゆへ平常の草紙ものとは變り俗談平話を鍛練して愚痴闇味の俗中の人情を貫き神儒佛の奥義も残る所なく著する俗文は古今名人道一流の文者ともいひつべし俚俗いふ近松の淨瑠璃本を百冊讀ば學ばずして三教の道を悟り上一人より下万民に至るまで人情に通じ乾坤の間に森羅萬象あらゆる事辨へざるといふ事なし實に人中の龍なるべし年耳順を過て享保九辰年十一月廿二日歿す墳墓は八丁目寺町法妙寺にありまた久々知廣濟寺の過去帳にも法名有

阿禪院穆矣日一具足居士

此の戒名は近松氏在世より設置たるとぞ辭世二首詠草中にみゆ

それ辭世去ほど扱にカもそののちに

残れカるとはおもふもおろか埋火の
のこるさくらのか花ハし匂ハは

けぬま仇なる朽木書して

浪華金屋橋熊野屋某の家に近松の墨跡二幅あり一は美人の畫贊一は辭世の詠草也

樂天が意中の美人は夢のむつごと僧正遍昭の詠中の戀は繪にかける女とりかたにはたれかこれか作

麼去

物いはすわらはぬ代にりん氣なく

衣裳表具にものごのみせず

平安堂近松七十一歳狂讀

浪華の狂言作者近松半二故人門左衛門が遣ふ所の硯を傳ふその硯の蓋に漆して

事取^ニ凡近^ニ而義發^ニ勸懲^ニ

九字を記す是は笠翁傳奇玉搔頭の序に

昔人之作^ニ傳奇^ニ也事取^ニ凡近^ニ而云々

といふ語を取れり近松氏小説に心をよせし事是にてしる此人は實に本邦の李笠翁也翁草にいふ八文字屋自笑が浮世雙紙の編者江島其磧は能世の情をのぶ筆勢おさ／＼近松に並ぶ所謂曲三味線色三味せん傾城禁短氣はた諸々の容儀るいなどは今の世の人も是を翫ぶされども淨瑠璃を書事はならず近松はまた雙紙を作る事を得ずその差別をいかにといふに其磧が作文にては人形の働き薄く近松雙紙を綴れば文勢過て人情くわしからずおのれ／＼が得たる處古今もつて同じ後の南嶺は其磧を欺く計りに作意巧なれども其情淺くして其磧が上にたゝむ事難し夫より下つか

た舉ていふべき作者なし

或人いふあやつりを見るには當世にしくはなし本を讀て樂しむには近松が作宜しとはむべなるかな近松が作文道行のつゞけがらは伊勢源氏の俤を移ししかも俗間の流言をおかしくつらね佳言妙句多し近松文段に精神を入られし事を聞に淨瑠璃は木偶にかゝるを第一とすれば外の草紙とは遣ひて文句みな働きを肝要とす正根なき木偶にさま／＼の情を持せて見物の感をとらむとする事なれば大方にては妙作とはいひ難し某若き時大内の草紙を見るに節會の折ふし雪いたう降つもりけるに衛士におほせて橘の雪はらせられければ傍なる松の枝もたは／＼なるが恨めしげに刎返りてと書り是心なき草木を開眼したる筆勢なり其ゆへは橘の雪をはらはせらるゝを松が羨ておのれと枝をはね返してたは／＼なる雪を刎落してうらみたる氣色さながら活て働く心地ならずや是を作例として戯文を綴れりとぞ近松氏の作文多き中にも元録十六年末三月四日初日竹本座の操りにて最明寺殿百人上臈といへる院本後年豐竹座の操りにて大當せし北條時頼記雪の段の原本はなりおほけなくも靈元法皇敬覽まし／＼其頃歌人の聞へある公

卿を召せ給ひいづれも秀才なりといへども近松とやらんには劣れりとて彼院本をとり出し給ひ最明寺が道行ぶりに蝶の羽のおしろひを草にこぼして梢には鶴の霜毛をぬぎかくる雪は花より花おほきと書けり是なん圓機活法雪の部に鶴毛蝶粉といふ四字を出して書る處石曼卿が雪を詠せし詩に

蝶遺_ニ粉翼_ニ輕難_ニ拾鶴墜_ニ霜毛_ニ散未_ニ轉

といふ此句を和語に移せしならずやかゝる才智を以て和歌を詠じなば秀逸數多有ぬべしと御感ならせ給ひけるとなん

靈元法皇は萬乘の君の御身として下賤の事をもよくしろし召れ

清十郎聞け夏が來て啼郭公

早稻中手晚稻かるたの一二三

かゝる玉句も遊ばされしとぞ

近松氏の戯文大あたり多き中にも元祿十年丑七月十三日より竹本座に於て團扇曾我は百日の間勤めけり夫ゆへ百日曾我と變題なす其頃は百日勤る事は稀なるゆへかく名付たり然るに國姓爺合戦の戯文は世人今に賞美なす近松氏生涯第一の秀作なり正徳五末年

十一月朔日より三年越十七箇月大當りなし二度目は享保五年子正月二日より勤め三度目は同十六年亥五月に勤め四度目は寛延三年午七月に勤め其後數度興行に及ぶといへどもいつとても大當りならざるはなし是全く近松の文段古今の人情に通ずるゆへにこそ門左衛門國姓爺の戯文を作り大當りの後猶も珍らしき世界もがなと肝膽を碎かれしに其頃の芝居主竹田近江といふ作者の穿ち尤にはあれどかゝる妙鏡の出たる跡はたゞさら／＼としたるものよし此上は其上をと趣向に趣向を重ねたらば果は我業も盡ぬべしと申されしは一道の格言なり此戯文海内に流布するのみならで崎陽の譯司周文二右衛門なる人國姓爺第三回樓門の段を譯して彼地へ送れり其文次に著す

國姓爺第三回

說話老一官既已再來唐山要攻_丙打滿洲王興復明_甲神招_乙募義旗之士一夜陪_ニ從老娘_一同_ニ和藤内_一到_ニ五常軍甘輝佳領的獅子城下_一看見城門緊閉只擺_ニ着強弩硬弓砲石_一敲_レ鑼巡哨好生防備和藤内高聲叫道只要_ニ拜_ニ謁五常軍甘輝公_一說話須要開_レ門聽得城內當值的_{トウベン}人員回報道主公甘輝公只蒙_ニ大王

釣旨。昨日起身出城却不_レ知幾時回來更兼趨夜到來要_レ見主公。甚是得罪若有_レ說話。就在城外。說等。他主公回來。替_レ爾稟報。一官低聲便道不_レ好。與爾轉報。如若甘輝公不_レ在對。奶々。說自_レ從日本來的人只要_レ當面說話。他必有_レ會意。聽得軍卒倒也驚慌大有_レ喧鬧。愈加提防甘輝的夫人錦祥女却早聽_レ這風聲。直跑上門樓對_レ軍卒道。爾等不_レ要_レ噪鬧。且等_レ我指揮。又轉向城外道。奴家就是五常軍甘輝的賤室名喚_レ錦祥女。如今天下人民都歸_レ降滿洲大王。我丈夫也屬_レ他麾下。守_レ防城子。更且丈夫不_レ在。只要_レ求_レ見_レ奴家。不_レ解_レ其意。有_レ話須要說。知_レ一官道。爾是大明鄭芝龍的女兒娘。是早喪爺是當初蒙_レ明朝不遇_レ躲_レ在日本。那時爾年及_レ二歲。和爾分_レ別之後。諒必聽_レ過就_レ哩。我是爾爺鄭芝龍也。前在_レ日本平戶地方。名作_レ老一官。娶_レ了後室。生_レ一箇兒子。名喚_レ和藤內。現_レ在這里。只爲_レ要緊求_レ忙的話。須要_レ開_レ門。錦祥女聽得已知_レ阿爺意_レ欲跑_レ出城外。相見_レ只恐_レ軍卒不_レ伏_レ抹_レ了淚眼。便道如有親爺的表證說_レ把_レ我聽_レ一官道。今所_レ說的就是證兒並無_レ別故。軍卒聽見叫道沒有_レ憑據。難道聽_レ信開_レ門可_レ知_レ尷尬。

的人要_レ賺_レ開城門之計。說了將要_レ放_レ砲排_レ頭而殺了軍卒。尙兀是不_レ住。口定要證兒證兒。一官舉_レ手高叫道。爾說的證兒應該在_レ爾手裏。我前在_レ唐山逃去之時。留_レ我的畫像。在_レ後寄_レ在乳母等_レ爾長大之後。方做_レ遺送_レ把_レ那畫樣。比_レ看面貌。休_レ爲_レ疑惑。錦祥女聽_レ見這話。就將_レ畫樣攤開。把_レ鏡子照_レ月亮之下。比_レ看父親之面。已經年老。雖然變_レ些容貌。及_レ至_レ細看。額上些微有_レ一箇黑子。父女正像越看越像。並不_レ差錯。便道果知_レ阿爺親身到來。娘是起初已到_レ泉下。去了只開_レ阿爺在_レ甚麼日本地方。寤寐心焦。要見之念。奈無_レ有_レ使人。那有_レ信息。每晨只向_レ東邊推_レ起太陽來。拜爲_レ父親。從此隔_レ了三千里有餘的路。休_レ說_レ陽世相見。若在_レ陰世撞見也未_レ可_レ知。今經_レ二十來年。不_レ期就在_レ這里撞見天與_レ其便。慚愧不_レ過。一官聽_レ見這話。深感_レ孝順之心。不_レ覺帶_レ淚氣。嗽和藤內同_レ軍卒共爲_レ悽慘。垂_レ淚。一官道。我等特來_レ此間。要_レ見_レ女婿。求_レ忙要緊大事。預先與_レ爾說知。望_レ乞開_レ門。叫我入_レ城。錦祥女道理應_レ開_レ門迎接。奈播亂之際。更蒙_レ滿洲王的釣旨。縱令雖_レ親眷。自_レ他鄉來客。不_レ許_レ入城。之論。雖然如

此非_レ比_二其他_一。爾等會生理會軍卒執意不_レ從並不_レ肯開門。娘走近前去說道已蒙_二大王鈞旨_一。不_レ肯開門也。快不得。但是看_二這老母_一。舍地要_レ做隄防。只叫_二我一人_一進去。要_下對_二錦祥女_一說話。望_二乞方便_一。軍卒道恁地是我等主張。叫_二爾綁縛進來_一。繫_二在城內_一。然則滿洲大王得_レ知也。主公好_二去說開_一我等也並無_二干礙之理_一。須要_レ受_レ縛。若不_レ肯時早回去罷。和藤内睜_二眼_一。他軍卒罵道我的尊大人鄭芝龍的妻是我的母親。錦祥女也雖_レ不_二是同胞之母_一。也是乾娘。那々由_レ爾。犬猫一般被_レ縛。牽去娘道今所_レ忙。的此爲_二大事_一。應_下有_二千般苦楚_一。也不_レ妨休_レ說受_レ縛。須_二要枷杻_一。也只得_レ依_レ他。日本雖_二然小國_一。不_レ論_二男女_一。總不_レ背義。只要_レ依_レ爾受_レ縛。聽得軍卒就把_二索來綁縛牽去_一。各々面々相覷。分別而去。錦祥女包_二著悲哀之容_一。安慰父子。說道此輩_二一時之國紀_一。設作_二權度_一。雖_レ然如_レ是。令堂是已經寄_二在我身上_一。不_レ要費心掛念。今所_レ忙的話。悄悄地聞_二過令堂_一。纔得通_二知文夫_一。能勾_二得大事完備_一。却好此城濠塹的溜頭是奴家梳粧艷飾的房。下泉水通流。以_レ此說_二與他文夫_一聽。應做_レ做得_二是解_一了。揸粉_二下水_一。水爲_レ號。若有_二水面帶_一白。此乃泰兆就請歡喜進_二城_一。

倘或做不_レ成。是解_二了脂臘_一。流_二下來看_一。那水面帶_レ紅。此乃否兆。就到_二門外_一來要_二取母親_一。萬望留心看_二說畢口稱_一失陪。將要_二別去_一。就把_二扇門_一關了。老娘進_二到城內_一。實爲_二生死之關_一。錦祥女聽_二見把_一樓關門之聲。哽咽啼哭。端得是唐山軟弱女流之氣象。和藤内同_二一官_一看_二這景況_一。強爲_レ不_レ啼。此乃學_二成日本武辨之風_一。原來滿洲規式及_レ至城門開關。未_レ免放_二了一砲_一。當時聽_二一聲砲_一。遞相分別而去。必竟等_二他甘輝歸來_一。說_下懇_二求協助_一的話。不_レ知甘輝會生答應。且聽_二下文分說_一。

右崎陽譯司

同文二右衛門

因に云當時日本にては國姓を賜はる事多し諸侯各松平と稱せざるは少し國の風にや中華にては國姓を賜はるは太抵の事にてはなし大明亡びて後鄭芝龍日本へ渡り肥前に住し其子鄭杉字成功中國へ渡り崇禎の子孫を尋て位につけ年號を立て永曆といひて順治帝と合戦し餘程きりとり韃兵をなやまし明の遺民を賑はせし其功莫大なるにより永曆帝是に國姓朱氏をたまふ至てとふとき事ゆゑ時の人朱成功といはずして

國性爺といふ俗語に爺といふは至てあがむることばなり此國にて様と云位なり國姓様といふ意なり老爺とは旦那様といふがごとし時の天子を萬曆爺嘉靖爺など云國姓爺一旦勢猛なりしが終には貝勒王などが謀略順治開國の大徳には及びがたくや打負て夏門といふ所へ逃かくれたり暫く餘程の人數にて中國をさがせしと見へたり其頃俚俗のはやり詞に或は人のふるまひなどの席にて飯の遅き時は客同士空腹にはなきやと尋ぬる時は肚裏餓丁といへば亭主へ聞ゆるゆる隱語にていふなり此國の跡に寄たなどいふ所を國姓爺脫落夏門といふなり是國姓爺が中國をさがせし間は中國に人數が多かりしが夏門へ落てよりは人が減りてひつそりと成りしといふこと腹中のすきたるたとへにいふなり然ればよほどの人數にてありしと見へたり

紀海音略傳

紀海音は近松同時の人にて淨瑠璃の作文多く其名高し姓は榎並貞義と呼俗稱は善右衛門後善八と改む初め黃蘗山悅山和尚に屬して僧と成高節とよび夫より醫道を業とし契冲翁の門に遊びて契因鳥路觀と號し

淨瑠璃の作名紀海音といへり元文元年辰の夏には法橋に叙し寛保二年戊戌十月四日行年八十歳にて歿す委しくは油煙齋貞柳の傳にみへたり墓は八丁目寺町寶樹寺紅葉の寺といふにあり

清潮院海音日法

臺石にたいや忠七と彫付たり忠七は貞峨の息にて貞風といへり道頓堀太左衛門橋筋八幡筋にて鯛の看板をかけ菓子を製して業とす

柳翁の文集に

鳥路觀貞峨より年頭の禮に團扇をこしければ物すきにていがよければ夏の物を

春にもつかふうちはゆるなり

鳥路觀七十賀に

十ばかり千世の餘りの吾におほき

つらなる枝は花も身もあり

かく兄弟ともに風流の道に遊びてその名世に高し享保七年寅十一月一日より豐竹座の操りにて東山殿室町合戦といふ戯文すなはち紀海音の作にて第四だん目座鋪八景といふふし事の文中に油煙齋貞柳翁の狂歌を綴り入たり

東山殿室町合戦

作者

紀海音

第四

王元之が竹樓も是れんけつのよらくとかやされば
細川勝元は繁榮日々にいやまして何おもふ事夏も
くれ秋をもてなす下屋鋪西の京に地を轉じ遊亭
閑所とりく奇石をたむ築山は諸木こもつて
枝をたれ月をむかへる池水はおしかも所得がほに
て風をふくめるぶどうの棚さゝ波よする如くなり
頃しも盛りの百日紅花にゑいする書院先き障子開
かせ勝元は近臣諸共汲酒にさかなはちくら檢校が
調妙なる物の音は萩の葉わたる風よりも身にしみ
増る計り也勝元はとんど興に入あつぱれ手くだの
音曲に此間のうつ病もやゝ忘られて面白ししかし
朗詠平家など耳ふれて氣が替らず當世めきたる一
ふしを所望なりとすむればハア何をがな申たら
御心に入候はんエ、幸ひかな幸ひかな樂人達の戲
れに座鋪まはりの道具をば八景に淮らへて一々狂
歌によまれしを某ふしづけ仕る憚ながら御聞とひ
やうしをとりて語りける

ざしき八景

實に海山の風情をもこゝにうつせばおのづから座
鋪に浮ぶ八景の中にかやく名所はまづ鏡臺の秋
の月蒔繪に見ゆる松の枝にくもらぬかげはまん丸
ござるまん丸ござる十五夜の月の輪の如くいつも
最中の詠めなり

鏡臺の蒔繪にみゆる松のうへに

くもらぬ月のかげはまん丸

次に扇の晴嵐をたとへもよしや暑き日の光りも頓
てうす物の扇に畫く山かせは音たかさごや相生の
あつき日のひかりも頓てうすものゝ

扇やえがくまつかせの聲

妹背も遠く待宵にきけばせはしき時計こそこひし
らぬ身や造り初けんいづれ逢瀬は秋ざれも短き夏
の夜の霜おもりの糸のむすばれず時計の晚鐘響な
り

むつ言もまだつきなくに打時計

戀しらぬ身やつくり初けむ

扱また臺子の夜の雨ふりみふらずみ定のなき身に
し昔をおもひ出す大黒庵もよるの雨臺子のならひ
音にきく

釜のにえきけばさながら夜の雨

大黒庵のむかしをぞおもふ

されば高きも卑しきも交りむすぶ中立は雪の口切
春雨の花より色も香もこひちや品あつてまたやは
らかに人つき合も綿ぞとはいざしら雪のかきくれ
てはらへど袖にぬり桶の暮雪と是を申べき

綿ぞとはいざしら雪のゆふべかな

はらへど袖につもるけしきは

明暮きやしやな手にふれて聞や琴柱の落雁は詠し
歌もゆふひなり

ふきといふも草ばの露の玉ごとを

手ならず袖に冥加あらせ給へ

「ふきといふも草葉の露の玉琴を手ならず袖にめ
うがあらせ給へ」吟じ返せばかうばしき梅か枝組
や須磨明石君が引手にさそはれて時しもわかぬ酒
のかんあい／＼の長返事遊び過して花の枝に
入日をのこす行燈のかげ夕照とおしまるゝ
花の枝にかけて詠めんくれおしき

夕日をのこすあんどんのかげ

緑樹かげ沈んでは魚木にのぼるけしきありしやく

に梢を汲上てさつとたばしる手水鉢風のかけたる
手拭は丸にやの子の帆がみゆるひたすしほりの文
字が關入江もこゝにほの／＼と手拭かけの歸帆ぞ
と

手水鉢風のかけたる手ぬぐひは

丸にやの字の帆のみゆるかな

三十一文字を淨瑠璃へ送り三重引よせてつゝり寄
たる八景とさもあり／＼と述ければ勝元を初めと
し皆々興に入給ふ

淨瑠璃作者略傳

一千前軒

竹田出雲掾といふ操り師趣向の名人なり竹田近江大
掾藤原清一の親也竹田筑後兩芝居主並金主なり立慶
町吉左衛門町雨町の年寄役をも勤む

一文耕堂

初め松田和吉といふ千前軒門人筋立頓作の高弟なり
一千柳

並木宗輔といへり是並木氏の元祖にして今に作者の
苗氏に並木の枝葉多し紀海音を合して以上四人を淨
瑠璃作者の四天王と呼ぶ

一 錦文流

西鶴同時の人

一 櫻塚西吟

攝州池田俳人

一 西澤一風

正本屋九左衛門といふ書林

右三人は趣向筋立はさしたる事もなければども古今文者の三傑とす

一 竹田小出雲

千前軒忤

一 三好松洛

北の新地の茶屋

一 吉田冠子

人形づかひ吉田文三郎といふ此忤二代目文三郎おやま遺ひ名人の聞へ高し

一 並木丈助

醫を業とす

一 竹本三郎兵衛

竹本筑後掾忤

一 近松半二

穂積伊助と云醫師の忤

一 爲永太郎兵衛

始は竹田庄藏後に千蝶

一 春艸堂

高田瑞庵と云醫師俳名

一 菅專助

笛十醫師の忤豊竹光太夫

一 長谷川千四

和州長谷寺の僧侶能化まで勤めしか還俗して作者と成

一 安田蛙文

有馬玄蕃侯御抱の色子

一 近松東南

東南伊助と云

老後法體して綾子播磨と改景事道行端唄を作しました三絃の調に妙手たり

一 淺田一鳥

京地町の住森野長三郎と云謠師

一 中村阿契

始中村閑助

一 八民平七

坂町大阪屋太郎兵衛忤

一 若松笛耽

若竹藤九郎といふ人形遣ひ後作者となり

一 紀ノ上太郎

本名三井治郎右衛門仙果亭嘉栗と云始八五郎といひし人なり

一 福内鬼外

江戸平賀源内と云風來山人と云

博學にして火浣布エレキテルを本朝にて造る

一 黒藏主

一 並木和助

一二壽軒

一 淺田可啓

一 但見仙鶴

一 近松景鯉

一 小川半平

一 寺田兵藏

一 寺田外記

一 竹田伊豆

一 北脇素人

一 岩瀬左門

一 安田安桂

一 松田才二

一 豊竹珍平

一 北窓俊市

一 戸田不鱗

一 戸田吾文

一 松岡千助

一 東勇助

一 但見彌四郎

一 豊春助

一 若松勇助

一 豊竹應律

一 松田はく

一 笛躬

一 男徳齋

一 榮善平

一 七才子

一 川四郎

若太夫芝居主甚六と云

俳諧師岡本蘭古後麥隣

二代目鹽屋治兵衛後松隣

竹本咲太夫といふ本名堺三

道頓堀いろは茶屋

岡本原一と云御城入醫者

長町分銅河内屋と云宿屋四郎兵衛

一 中村魚眼

一 近松やなぎ

一 司馬芝叟

一 梅下風

一 佐藤太

難波新地中村屋と云茶屋

始並木柳後太郎作

獨笑庵悴

一千葉軒

一 湖水軒

夫戯文の作者の作意はその名の猛く聞ゆるをば其故人善人^{かたきやく}にても丑^{ひがし}淨としその名の優に聞ゆるはたとへ事跡はよからぬ人も正生^{せいせい}とす何れ虚を實と見するも勸善懲惡の一助とし音曲の秘傳戯作の大意とても殊更初段口傳にして大かた戀慕に寄する大序の内ヲロシまでは一番の内の式三番なり或は謠より出地より出節より出る事もあり調子は太やう一越可也いかに

も鮮かに亂れたる糸をさばくやうに語るは見物の氣をしむるならひなり段切は五段ともに大事なれども初段の段切殊に大事也初日の初段は別て仔細あり二段家傳大かた修羅三段秘傳大かた愁歎作文はもちろん淨瑠璃のこなしあやつり迄も三段目を眼として能ならば曲舞なり口説物語過去日前感涙等の差別あり四段相傳大かたは道行五段明傳大かた問答壹番のくゝりなればむつかしきものなり初段は絹二段目はうら絹三段目は模様染色上繪縫箔四段目は糸綿五段目は仕立なり一日の世界の納りなれば至て大せつなる物なるに近年の戯文に五段目なし適々五段目あるは紙半丁計りに何の譯もなき事を書き夫も本出し迄はなく正本を出板するに付て據なく書りまた當世は芝居も見物も氣短くはや合點して五段目は惡人退治見いでもよしせいでもなしなれども正本は作者の寸尺あらわれ不智不文の惡名のがれがたし

今古參考 南水漫遊拾遺二の卷終

今古參考 南水漫遊拾遺

三の卷

- 一出語出遣木偶
- 並往古操の圖
- 人形品目
- 一操曲評書
- 一文正翁曲帶塚
- 並八曲ふし事

今古
參考
南水漫遊拾遺二の卷

颯々亭南水主人著

出語出遣木偶

淨瑠璃の太夫出語りといへるものは名ある太夫始めて出勤するかまたは遠國へ出て久々に歸國なし目見得として出語なす或は師父の追善祝儀事都て諸客へ厚く禮儀をなすためなれば行儀正しくすべき事なり昔有隣大和椀久ゆかりの十徳または河内通振分髪邯鄲などを出語りせられしに口も動かざりしは行儀正しく誠にかく有べき事と諸見物感稱せり又西口政太夫用明天皇鐘入の段を出語りの時首少し右へ傾きければ見物の評判大和におとりしといひあへり纔に頭少し傾きてさへ斯の如し然るに當世は二段目三段目四段目の差別もなく出語にて勤の操芝居は太夫座といふもの床に御簾を懸る事故實ありて芝居の規模とす近來の如く出語りをよき事とすれば後々には床も無用のものとなり京都の宮地首ふり芝居同然にな

るべし往古の床は正面に在しを上手の横へ直せしは竹本座にては享保十三年甲五月加賀國篠原合戰の時なり又豊竹座は六年の後享保十九寅年正月二度目に勤し北條時頼記の時なり然れども大切雪の段は太夫豊竹越前掾出語ワキ河内太夫三絃竹澤藤四郎人形藤井小三郎同小八郎中村勘四郎出遣にて勤めたり

(繪一枚略)

往古のあやつりは前に圖する如く人形は首計にて著物を打著せしも足も遣ひ人の手にて仕たる事にて近世まで子供の翫びにデウのボウといへるものはなり當代の如き木偶を用ゆるその權輿は大阪の細工人石井飛彈といへるものおとなの手を人形の袖へさし込み遣ふ事甚見苦敷とて工夫なし人形に手を拵へ附たり夫より是にならひて足を附或は一の指を働かし眼を遣ひ眉を働かすなど近世さまゝ自由に作る是石井氏の工夫なればあやつり芝居にて尊み申さねばならぬ人なり外題年鑑に云、松本治太夫座にて源氏烏帽子折といふあやつりに藤九郎盛長澁谷金王丸二つの人形に初めて足を附たり其後宇治加賀掾のあやつりにて世繼曾我のとき朝比奈の人形に足を付る夫よ

り諸流共に立者の人形計りに足を附る事とは成りぬ
扱又享保十五年戌八月豊竹座にて楠正成軍法實錄に
和田七の人形に眼の働く事を仕初め又元文五年甲九
月同座にて武烈天皇^{（天照）}の時佐手彦の人形眉毛働く事
を仕初め享保十九年寅十月竹本座にて蘆屋道滿大内

鑑に與勘平の人形腹ぐあるふくるゝやうに仕初む延
享二年丑七月同座にて夏祭浪華鑑の時人形帷子衣裳
を著せ初め同四年卯七月豊竹座にて惡源太平治合戰
四段目にてあやつり仕組の大踊を初めぬ扱又出遣ひ
といふ事は寶永二年酉三月竹本芝居竹田出雲掾の座
元となりし時用明天皇職人鑑三段目鐘入のだん太夫
竹本筑後掾出語りおやま^{（おやま）}人形辰松八郎兵衛出つかひ
にて勤めしを權輿とす其頃の出遣ひは手摺を離れ長
上下をちやくし人形をつかひ又手妻などをせし也
近世伊藤彌八がなしたる手妻人形水からくりの類な
りあやつりにて女形を遣ふをおやまとへいる事往古
小山次郎三郎といふもの女の人形を能遣ひ誠に生
るが如し近世吉田文三郎妙あり人形つかひの苗字吉
田氏と號する事元來あやつり芝居は西の宮道薰坊よ
り發りて神道を主る故に洛東吉田の流れをたひて

吉田を氏とすと淡州あやつり家の秘書道薰坊由來に
見へたり前文にも著す如く石井氏より當代に及んで
人形の好みむつかしく成行當時用る所の數品名目あ
り其荒増を爰に記す

人形品目

檢非違使	素盞鳴	文	七	由良之助
樋口	天神	實	盛	鬼一寸
蛇羅助	與勘平	團七	マル目 ト云フ	一
六部	釣船	白太夫		正宗
源太	役行者	日蓮上人		
女方の頭				
むすめ	女房	傾城	かさね	
御臺	老女	おふく		
胴の部				
丸胴	裂胴	片手擡	懸羽擡	
手の部				
杜若	袴手	抓み手	草鍬 ^{（屏風手）}	
差込手 ^{（カセ手）}	招き手	ゆび	弓手	
扇の手	鞆の手	琴手	三味線手	
太鼓手	杖手			

操曲評書

淨瑠璃の評書は今昔操年代記に著せしを權輿とし延享の初め操曲浪華の蘆といふ評書これに次ぐ近世音曲圖の礫といふ評判もあれとも浪華の蘆出板の延享前後は東西のあやつり昌んにして其頃の太夫の俗姓などを知る便りあれば評書のまゝをこゝに載す
操曲浪華蘆序

いつ見ても煙のふとき牽頭庵とよみしは難波の太寺天王寺を出て西北にあゆむこと五丁餘りにして庵あり名を西照庵といふ此所に休らひ酒ひとつたべんと二三人づれにてあがり飲かけしが襖一重あなたに若い者四五人集り芝居の噂とりく評判ひとりは竹本の門流と見へ筑後芝居最負今一人は豊竹門弟と見へ上野の肩を持出るまゝの打答へつ今日なぐさみ是ならんと耳の垢を取て聞ともちらず竹本方今世にもてはやす此太夫どの去る元文の頃美濃太夫といふて筑後芝居へ初めて出られしが太政入道の四段目のうた淺黄に駒かた紅粉鹿子の大あたりく夫より段々町中に最負まし其後行平の四段目のふし事此兵衛の場の大當りく其名を直

に此太夫と御改夫より替りの度々あたらずといふ事なし別して此度菅原傳授念佛の段の語り内去とふはく御上手今天在が下に此君ならで有まじといへば○上野方つくと出いやく夫々大きなすこたへじやこちの上野どのならで太夫といふはなし左程自慢の菅原傳授の四郎九郎の場正本にもない事迄口から出るまゝの嘘語何のあれが名人芝居にて語るを鑑とする音曲を本にもなき嘘言を語るもの中々太夫の内へは入がたし正本を鑑としてすなほに語り給ふ上野どのこそ名人なり既に糸の仙人の四段目のふし事同五段目の祭文の所古今の大出来夫より替りの度々當らずといふ事なし別て酒吞童子の四段目の諷ひのふし附過行れし播磨どのも及ばずとの取沙汰それに何ぞや菅原の念佛を鼻にかけてやかましいおけくと疊を叩き腕まくり額に血筋を張て既に喧嘩と見へし所へ七十餘りの老人立出これく若い衆聊爾めさるな此出入拙者貰ひます雙方一理屈有之おもしろき評判上野此太夫身に取ての満足去ながらそれは皆々最負の沙汰にて評判に成がたし此太が語らるゝ白太夫の場の語

り内大きにさみし給へども此場の文句櫻丸の出る迄大きにめいり見物も氣の盡ざらん所を却て笑を催し大さによろこび夫より櫻丸が切腹刀を渡され介錯に泣く／＼念佛のおもひ入の語り内よし何れを何れといひがたし去ながら某も七十年來此道を好み心懸しが幸ひ是に段々を書たるを持合せしは見給へ左の如くに見立たり

大上上吉

豊竹上野少掾藤原重勝

上野少掾初めは三和太夫とて豊竹芝居に住れしが元來若き頃よりの心懸ゆへ段々淨るり上達致され内匠太夫と名を改め夫より竹本座へ出られしがます／＼淨瑠璃實のり功者と成西の座で巻頭いたされしが越前どのも老年に及び誰か跡目に成べき太夫もあらんとおもはれしに此人ならではと思ひ入られ跡目相續を賴れ則上野少掾を付られしは目頃音曲に心がけ不淺ゆへと諸人賞美する事御手柄／＼此人の藝をたとへば瀬川菊之丞に同じなせといへば小兵なれども取廻りり敷濡事やつし詰め所作事の名人かゆひ所へ手の行が如し別して段切を大事に懸らるゝは上手藝のなす所去に依て瀬川どのとの見立尤音聲の非力は

是非なし身の持やう銀持氣質第一諸藝器用にして筆道の達人心すなほにして淨瑠璃に位あり豊竹の跡目と成しはあやかり物お手柄／＼

大上上吉

竹本此太夫

此人の聲を玉子酒といふ心は下手ほど味みがある

此太夫初めは美濃太夫といひ内の名は合羽屋伊兵衛とて若年より此道を好みついに商賣もせんくわとなりもみぬいたは合羽より淨瑠璃第一聲は下の強ひを受合かつば三重の聲の繼目ものり地強ふつやなきに油を引きなりうつくしうかち合羽修羅段切の手しぶきに木澁をませて繼目やう語給へば流石にも愁ひの段は見物も袖合羽を絞りつゝ終に繼目もはなるゝ程見物もじゆくするは適功者名人なり去に依て此人を市山助五郎と見立しなせといへば先藝の一體が功者にして何を語られても間に合ぬといふ事なし先地事ふし事所作やつし修羅段切詰などの味ひ餘り功者にて仕過る事多し去によつてふし附細かにして新ふしおほし夫ゆへ町方にても此人の通りは語り難し其人は面白く名人なれども眞似の出來ぬは難澁／＼

上上吉

陸竹佐和太夫

此人の淨瑠璃を珊瑚珠といふ心は大きければ
大銀になる

佐和太夫は佐兵衛とて元は旅芝居の三絃ひき成しが
發明にして終に淨瑠璃を語習ひて諸國修行せられし
が別て尾州などでは殊の外當り夫より段々上達いた
されて當地朝日の宮にも少しの内稽古淨瑠璃に出ら
れしが程なく陸竹芝居に住給ひつき出しより評判よ
く見物の御意に入るはづ先音聲能とりまはり發明に
してふし附面白ふ語り今の淨瑠璃を聞にをとし一流
替りおもひ入にあてんと第一に語らるゝゆへ見物の
請よし此人をたとへていはゝ嵐新平仕出しに同じ何
處やらびら付て又しやんとして美しう地事ふし事藝
に應じ愁ひ有あはれにまたおかしき筋もあり是其身
其音曲の備はりし名人なりしかし聲の非力は是非も
なし此うへに聲丈夫ならば箱入の小判道具と見物ど
つと譽たり

上上吉

竹本政太夫

此人を兵庫渡海といふ心は播磨迄はゆかぬ
政太夫はざこば重兵衛とて元來魚屋の鮎より出て猶

愛深し播磨どのへ弟子入りして此道を鰯の見入れし
如く毎日稽古に飛魚と心に誓ひ立魚の長う短かうふ
し附の細かき事は江鮎子の如し段々出世の名を上ら
れ次第に味ももつき白を腹にたがへて飛ぬけの出世
は今で小ざらしや播磨どのの鰯なれや同じ姿でも大
小の違ひしかし芝居へ出られし頃より餘程聲も大き
に成淨瑠璃の一體風も替り功者なれども少しくせあ
り第一淨瑠璃を練る事あたかも鯨の百ひろほど長し
夫ゆへ人形三味線の間も折にははづれ安し此人をた
とへば岩井半四郎におなじなせといへば當世藝にて
何事も面白ふ致され別してやつし世話事の達人なれ
ば半四郎どのに釣合せしは先師匠播磨どののみこみ
給ひし故ぞかし此上は少しづゝの癖を御たしなみ有
て氣を付給はゝ次第に名人の部に入給ふべしといへ
り

上上吉

竹本志摩太夫

此人の淨瑠璃を鞍馬の奮嵐といふ心は上より
下へとる

志摩太夫は八百屋平右衛門とて青物商賣なりしがま
だ前髪の三つ葉四つ葉の頃より筑後ぶしになづみう

き身をやつし商内片手に一口淨瑠璃を語りし頃はまだ青のりやねぶか淨瑠璃の節なしなるが夫より座摩稻荷の稽古場へ入込み稽古本に節附を芥子の如く附て飲込もよし柏次第にむまみもつるし柿皺婆も嫁菜も打まじりて聞きにあつまる折しも竹本へ抱られ自然と音聲備り語り出しの大きさは倉橋の大根強ふ働れしが節附も生姜も長崎迄も量負よく替りの度々當りめおほし殊に修羅詰荒事は大丈夫なりたとへば中山新九郎に同じ藝者にて一體を崩さず語り開く事すさまじく御聲の分は誰にか劣り給はん此上はふし附味のたんれん氣を附たまへ夫さへ調へばおそらく恐るべき事も有まじ肝要／＼

上上吉

豊竹陸太夫

此人の聲を郡内編といふ心は地がようて美しい

陸奥太夫はよしあしの難波の江州邊に色めきたる商人其名を平太といひしがついに商賣も置屋となりたゞ藝子のみに心をよせ君とねじめの絲竹の調子もやさし胡弓音一節切かや豊竹の立物となりたまひしは誠に音曲の徳ぞかし此人を芳澤あやめといふなせな

らば音曲おとなしうして下劣す開合さつぱりとしてせりふよし其外萬事取まはりり、敷發明先づ當時のあたり役者御仕合／＼

上上吉

竹本錦太夫

此人を太夫年寄といふ心は淨瑠璃の事知り錦太夫内の名は綿屋武兵衛といふ初めて筑後に出られし名は和佐太夫其頃より上手なりしが暫く休足有てまた／＼竹本座に住時改めて古郷へは錦を飭れといふ義をとりて錦太夫と號く淨瑠璃はおそらく誰にか劣り給はねど何分聲柄わるくして残念なりかし淨瑠璃は川中での事知りたとへば姉川新四郎に同じといへば脇よりソリヤどふして見立ぞと問ふ中々此人はすい方へ取る淨瑠璃去に依て新四郎殿と見立しは張強きとの事なるかや

上上吉

豊竹上總太夫

ヤツチャ／＼しばらく此御方を及ばずながら紋盡しにて響申そう始て京より御下りなされ竹本芝居に住給ひし御名は紋太夫といへり其頃はまた葵じやと世上で人の惡口は逆おもだか、聞てのきつい輪違ひじや聲花やかに花菱やひらく扇の手拍子も幕を打ぬく

朝嵐朝顔よりも語り出しひるまぬ嵐の丈夫さは巴の丸のくるくると巡り出したる水車淀の川瀬の川嵐三重郎に見立しは違ひ有まじ武道一まきせりふ聲色さつぱりとしてよししかし是迄は上達が出来安けれども是からが上りにくし氣をつけ給へ吉の字がまそつと白し

上上吉

此人の淨瑠璃勝間木綿といふ心は器用なれど地がよわい

元太夫は京の産なるが生立より越前風に心をよせ明け暮稽古に雪の段夜中にあらず晝中に小家の軒もつかくたどりまばらに語られしが終に此道に入り豊竹座に下りしが頼まれし役は時頼記四段目殊の外あたり評判よく此人をたとへば嵐小六と同じ事音曲綺麗にして面白し京よりちよとお下り有て早々よりあたり目あるはお仕合く是からが大事なるべしといふなり

上上吉

此人の音曲雪降といふ心はしつぱりとして面白

竹本文字太夫

此人音曲になづみ雨の夜も風の夜も通ひ小町なんなく淨瑠璃の間にむむむ小町片時も早く芝居へ出んと明け暮心關寺小町ついに床に直つて語らるゝ尤淨瑠璃に兵なれども氣を附給ふ徳にはふし事地ごとよし修羅詰の類ひちとかひなき音聲此人を山下又太郎と同じ藝といふ仕うち手弱けれども取まはし功者にて見物のうけもよし

上上吉

豊竹駒太夫

此人を昔の紅絹といふ心は初めは裏がよふて今はさめた

當地炭屋町の人なり駒太夫といひしを越前芝居につなぎとめまだ其頃は土佐駒でちいさかりしがうつくしく夫より段々功も行次第に最負も奥州駒鞭はうたねどいさぎよふはんなりとせし一節はさながらさへたる月毛の駒元來此人器用にて我が一流を語出し第一聲の裏を遣ふが名人にて町中にも此風を學ぶ人多し玄かれ共御病氣ゆへ御聲の裏もあれば、曾我殿原の疲駒となられしは残念く此人山下金作に同じ初めはよかりしに今は少しめいりしゆへ此所に直しおくべし

上上音

豊竹宋女太夫

此人をかん竹の杖といふ心は第一ふしがこま
かい

彦太夫といふ名も早くさる澤の宋女太夫と美しき御
名に秀し音曲なれどすこし地もかよはきなり尤景事
道行の類は美しけれど修羅せりふ段切の飲み込はう
すし玄かし近頃は床なれ給ふかげんかのつしりとせ
りたとへば芳澤崎之助仕出の音曲なり段々に上達い
たさるべし今が藝の堺なるべしや

上上士

竹本百合太夫

此人の聲を星月夜といふ心は上が賑はしい
此人生国丹州なり爺打栗の頃より専ら語出されしが
淨りもよほど上達致されたり玄かし律義なる音曲
にて餘りとんだ節を語らず夫故さほど當り目も少な
しなれども一體淨瑠璃に無理はなきなりたとへば三
保木七太郎藝に同じ功者なれどもあたらぬは何の故
ぞや

上上土

陸竹伊豆太夫

此人の淨瑠璃上手の將棊といふ心は詰がよい
此客人の淨瑠璃町中のおもわくよりも功者分の淨瑠

璃夫ゆへするいの悦ぶ音曲なり元來ふし附よく語り
口おとなしく地事節事修羅段切も分相應にこなし給
へど何分小兵也しかし上手ゆへあたりめ多し中村富
十郎に對せり

上上土

陸竹富太夫

此人の淨瑠璃を間夫といふ心は震／＼もむま
い

此人いなり六兵衛とて前方は稻荷の稽古場にては殊
の外當てたる淨瑠璃也御年ゆへにか近年は少し音聲
下落いたされしが併しつるしのやうで皺／＼有ても味
したとへば民屋四郎五郎に同じ藝音曲おとなしくて
爪はづれに氣の附は年來の心がけゆへ面白し今少し
若ければ末の程たのもしかるふのに

上上士

豊竹伊勢太夫

此人の聲を富の札といふ心は二より一がよい
此人酢屋清左衛門といふ音曲に身を入られ朝夕學ぶ
徳にや終に豊竹氏の門に入り芝居へ出られてまだ間
もなきが夫にしては淨瑠璃床馴し功者なり次第に上
達有べし此人三枡大五郎と同じ藝中々氣のつく仕打
急に名も出し尤端々足らざる所もあり氣を付給へ今

がかんじん

上上土

陸竹桐太夫

此人の聲水晶の玉といふ心はちいさふても美しい

此人はもと等商賣なりしが好る道とて終にまんまと淨るり語りに成しが商賣がらとさつぱりと掃た坐敷で聞けば綺麗なれどもまさか床にては左程にもなく此上は見物の最負をとり等と願ひ給へ此人をたとへば坂東豊三に似たる音曲なりすなほにしてよし此上修羅段切詰等をよく考へらるべし末々は名も出べし

上上土

豊本鐘太夫

此人を年の明た女郎といふ心はハテ町へ引此人釣鐘町より出られしゆへ鐘太夫といふ商賣は硯屋なるが豊竹座へ出しがまご青石とおもひしが中々聲のかたきは虎石を摺如しゑかし床なれぬゆへか人中では顔も赤間が關音曲よく出来る事もあり惡敷事もありとかく淨瑠璃にむらさき石ありとおぼしめして能氣を附給へ今が淨瑠璃の學文硯と心得らるべし此人たとへば村山平九郎と同じ事出てから間もなきに町中の最負が強い

上上土

竹本友太夫

此人をいかのぼりといふ心は空でやうなる友太夫は音曲に心を盡しもみ込たるゆへ今竹本座へ出やうに成たるは誠に音曲の精に入し徳ぞかしゑかし何といふても出られてより間もなき事なれば滯る事あり随分氣を附て語り給ふべし此人をたとへば吉田万四郎藝ぶりにひとしそはくとしてさながら藝のやうなりといふ

上上土

竹本春太夫

此人の節をうどんの粉といふ心はちと震へどこまかい

此人うどんの粉の商賣いたされしが商賣に似て淨瑠璃語り口も細かにして美う尤遠音はさゝねどそば切で面白し折には聲の切れる事もあれど三絃で引ぬき蕎麥にすればさながらけんどんにもなしたとへば中村次郎三仕出しの藝に似たる音曲なりなせならば少し上調子なる事はよけれどゑつぱりとしたる事今少しかひないといふ

上上

陸竹常太夫

此人を宮の前の細漬といふ心は細ふてもはぎ

れがする

常太夫は音曲功者なれどもとざしき淨瑠璃にして床にては幕通しがたく去ながら節事景事の類ひ面白し修羅段切に修行被成かしたとへば嵐勘三に同じ事ちよつこりとして利巧なれども兎角上へは行にくし

上上

陸竹美和太夫

此人を天王寺から移す相庭といふ心は平野へとる

美和太夫は道六とて平野より出し人なり道具の商賣なりしが元より淨瑠璃を好みて次第ににじり上に成り芝居へ出ぬ先きは今とくらひも違ひ棚なるがまかしいろりと仕た長ひ淨るりと水さしの言てがあらば釜はずに置すと茶碗と直すべし此人たとへば杉山藤五郎と同前出た所はがらも能けれど何所やらよみかこまぬ

上上

陸竹初太夫

此人を小米淨瑠璃といふ心はかみまめると甘みがある

陸竹の芝居に今が初太夫音曲小兵一體淨瑠璃器用はだに聞へて随分氣をつけもみ給へ聲も次第に床なる

べし此仁はたとへば坂田文重郎に對せり今では名も出ねど修行の後は御名も出るべし精出したまへ精の一字が肝要く

上上

陸竹島太夫

此人を奈良縞といふ心は同じ縞でも薄ふてやはひ

島太夫と紛らわしくはおもへども是は奈良縞こまかふて聲まで細き千筋島いともかしこき音曲なれども何分修行が足りませぬ尤地はうつくし京縞より修羅の強ひは辨慶縞今がよしあしのさい目縞と心得らるべしたとへば泉平三郎と同じ花車方にまてせりふ口跡よかるべし

上上

陸竹左馬太夫

上上

陸竹栴太夫

右兩人はいまだ評判まかゝまれす

三味線の部

無類

極上上吉 鶴澤友治郎

大上上吉

立

野澤喜八

上上 鶴澤平五郎

上上

立

竹澤彌七

上上

野澤善四郎

上上

スゲ

鶴澤伊右衛門

上士	野澤文五郎	上士	鶴澤萬三郎
上士	竹澤正五郎	上	竹澤乙五郎
上	鶴澤太四郎	上	野澤喜助
上	竹澤平七		

人形造ひの部

極上上吉	吉田文三郎	上上吉	桐竹助三郎
上上吉	吉田才治	上上吉	桐竹門三郎
上上	桐竹源十郎	上上	山本伊平次
上上	桐田甚六	上上	辰松源助
上上	土佐市十郎	上上	吉田清次郎
上上	淺田太四郎	上上	桐田千藏
上上	北松文十郎	上上	吉田八太郎
上上	右竹本座		
上上	淺田元三郎	上上	土佐幸助
大上上吉	若竹東九郎	上上吉	若竹東五郎
上上吉	若竹伊三郎	上上	瀬川平助
上上	藤井小三郎	上上	藤井小八郎
上上	三浦新三郎	上上	植松半四郎

上上	笠井源十郎	上上	若竹淺五郎
上上	豐松祐次郎	上上	山本彦五郎
上上	中村源三郎	上上	喜代竹喜四郎
上上	豐松平五郎	上上	豐松半七

陸竹座

大上上吉	中村勘四郎	上上吉	淺田祐十郎
上上	松本治郎七	上上	出來嶋安兵衛
上上	大野又四郎	上上	芳川龜十郎
上上	中村吉三郎	上上	笠井音十郎
上上	笠井源三郎	上上	芳川藤吉
上上	芳川勘之丞	上上	田中平治郎
上上	玉川又三郎	上上	淺田祐九郎
上上	笠井藤四郎	上上	芳川龜次郎

文正翁曲帶塚

享保十九年寅二月竹本政太夫事二代目義太夫と改名
同二十年卯十一月勅許受領上總少掾藤原喜教祝儀出
語

天神記冥加松

元文二年巳正月播磨少掾と變名なし其後延享元年子
七月廿五日歿す行年五十四同年霜月追善

八曲篋掛繪

編者 竹田小出雲

此懸物揃の節事は井上播磨掾に始り竹本筑後掾に盛にして竹本播磨少掾に傳りぬ先師二十五回忌の折柄懸物揃の出語いと殊勝なりしが今はや其人の事となりぬ此人初床の時傾城懸物揃の淨瑠璃成ければ夫に始め是かれ語り置し節に懸物に畫き八幅一對の新なる節事八曲篋の懸繪と號くは功德池の縁に寄八人出語仕候

島太夫

政太夫

此太夫

百合太夫

紋太夫

錦太夫

杣太夫

其太夫

三絃 鶴澤友治郎

鶴澤平五郎

此翁が生涯肌に纏ひし曲帶を政太夫讓受故師の紀念と大切に所持なせしが亡師十七回忌追福の節大乘妙典一部と保に荒陵の西門納骨堂の後に納め曲帶塚といふ石碑を建たり左に記す

北向正面奉納大乘妙典

東面

宿坊

法幢院恩順

南西

故師

竹本播磨少掾

西面

銘あり

文正翁典帶塚

僕成童ノ頃ヨリ翁ノ淨瑠璃音曲ノ奇ナルヲ慕ヒ門ニ入テ嗜メリ寛保癸亥ノ秋藝閣ニ入テ此曲ヲ續シコトヲ示ス予微曲ナリト言テ師命辱ク其意ニ隨ヒ且政太夫ノ曲名ヲ戴ク翌甲子ノ秋老師病間藝床ノ儘終焉ニ至ル迄纏ヒシ肌帶ハ翁ノ澤物凶後ニ請テ紀念ト拜ス今ニ於テ師跡ニ止ルコト全此名帶ノ餘誠ナリ今年翁ノ十七回忌ニ予寸惘ヲ發シテ此靈場ニ大乘妙典ヲ奉脩シテ其追善ヲ仰グ又彼綿帶ヲ附藏シ陰ニ翁ノ曲帶塚ト唱フ是師恩ノ厚キコトヲ後世ニ止メント欲スル而已

寶曆十庚辰七月廿五日

拜主

薩摩屋十兵衛有保謹誌

天王寺の塔中にも石碑ありて

不聞院乾外孤雲居士

と彫付たり

今古參孝南水漫遊拾遺三の卷終

四の卷

一 忠臣藏權輿

並 日親堂繪馬

操り役割

歌舞妓役割

尾上梅幸の傳

一 歌舞妓狂言本

並 本讀の始

一 都風流大踊權輿

並 唱歌番組

一 樂家通言

今古參考南水漫遊拾遺四の卷

颯々亭南水主人著

忠臣藏權輿

忠臣藏の趣向は其始めいろは評林に云

元祿十五年東武なる俳諧師寶晉齋其角の許より浪華の何某へ來りし文中に

此ほどの一件も二月四日に片附候て甚噂とり々々華やかなる説も多く候て世上忠臣との取沙汰此節其事計りに候堺町勘三座にて十六日より曾我的夜討にいたし候て十郎に少長少長は元祖中村七三郎傳吉は二代目宮崎也五郎に傳吉いたし候得ども當時の事遠慮もあるべきよしとて三日して相止候前後

是ぞ此趣向の始めとして大阪にては寶永七寅年篠塚庄松座におゐて吾妻三八作にて則篠塚次郎右衛門大岸宮内の役力彌は中興までつとめし佐野川萬菊若衆形の時はを勤めしめ歌舞妓狂言にての始として此狂言大當りなるよしとて中寺町正法寺日親堂へ繪馬に

此圖をあらはし次郎右衛門悦びの餘りに是を奉納なし今にのこれりとぞ其後京大阪にて數度勤むるうち延享四卯年京都中村糸太郎座本の時大矢數四十七本と外題して澤村宗十郎大岸の役にて六月朔日より初日を出して大入を取しなり其矢聲大阪に響き同じ外題にて市山助五郎宮内の役にて狂言勤たり今の假名手本七つ目は此時の澤村宗十郎が形となりて凡其俤を手本と成來れり其後歌舞妓狂言にも寶曆十一年己十二月廿二日より角の芝居中山文七座にて泰平いろは行列明和八京四條北側西の芝居尾上糸助座にて小袖藏いろは配安永六酉年十二月八日より大阪角の芝居小川吉太郎座にて日本花赤穂鹽竈是等も追々出て各當りを取といへども兎角忠臣藏出て後は此狂言を第一として仕打も是にこそ工夫物好を入大きに委數なりたり

一操り淨瑠璃狂言にては其頃近松門左衛門作にて寶永三戌五月五日より竹本座にて兼好法師物見車といへる切りに碁盤太平記と外題し此趣意を出したり尤此淨るりには高師直鹽谷判官また大星由良之助と出し初たりまた豊竹座にては享保十八丑年十

月朔日より忠臣金短冊と外題を出したり此時は小栗横山の時代にて大岸由良之助の名で出たり其後寛延元辰八月十四日初日として竹本座にて初めて假名手本忠臣藏と外題を出して大當りの評判強く有しが其頃太夫の方も合出来て此太夫島太夫など半端にして豊竹座へ入替りて大和掾上總太夫入來りて暫く勤といへ共自分の節附なせし程にもあらぬばおのづから勢ひ薄くなりて思ひの外に其年十一月中頃迄にして蘆屋道滿に替りたり最初の役割は

大序

二ツ目

竹本文字太夫
竹本島太夫

三ツ目

竹本信濃太夫
竹本百合太夫

四ツ目

竹本政太夫

五ツ目

竹本百合太夫

六ツ目

竹本島太夫

七ツ目

かけ合
此太夫 百合太夫 友太夫
政太夫 文字太夫 信濃太夫

八ツ目 道行

竹本文字太夫
竹本友太夫

九ツ目

竹本此太夫

十段目

竹本友太夫
竹本政太夫
竹本島太夫

十一段目

竹本信濃太夫

大星由良之助
與一兵衛女房

文三郎

力彌

文吾

桃井若狭助
寺岡勘平

才治

おそ

伊平次

おかる

門三郎

本太夫藏

彦三郎

定九郎

千藏

藥師寺

伊、吾

了竹

太四郎

喜太八

市十郎

大切敵討惣座中不殘相勤む

されども始にいふごとく此狂言の譽れつよくして始の大岸宮内の名は是にて消て是よりして大星由良之

助にぞあらたまりたり故吉田文三郎此大星の人形を造ふも彼調子が風儀をあらはし並木宗輔の作意に丸で七つ目を其儘にて用ひ入たりとぞ假名手本操りにて賑ひし其翌年寛延二己の春江戸森田座に此狂言を出せしは二月六日なり大ひに繁昌有て大入を取しは山本京四郎由良之助を勤たり時に市村座五月五日より初日出せば中村座續ひて六月十六日に初日出す三座共評よく賑ひしなり京都は中村松兵衛座元にて同年三月十五月初日出す大阪はその暮間のものにて十二月朔日より嵐三五郎座にて初日を出せり此五軒いまだ人形の移しのみにて銘々の思ひ入少しづゝ替りし計りにて左のみ思ひ入性根などいふ氣持事はなかりしに近來次第に仕内細かく成て見物も少しにても脇目などすれば見はづすゆへ氣苦勞に成行ぬ先最初大阪の役割を左に記す

二代目

由良之助 嵐三十郎、本藏 片岡仁左衛門
 天川屋 姉川新四郎 寺岡 山本小平次
 鹽谷 市の川彦四郎 勘平 嵐三十郎
 若衆之助 山本小平次 石堂 姉川新四郎

郷右衛門 山本小平次 彌五郎 市の川彦四郎
 興一兵衛 市村三甫右衛門 伊吾 嵐勘三郎
 師直 右同 人 九太夫 片岡仁左衛門
 定九郎 民屋十三郎 藥師寺 民屋十三郎
 伴内 右同 人 了竹 片岡仁左衛門
 與一兵衛 女房 片岡仁左衛門 となせ 富澤喜代崎
 おいし 芳澤崎之助 おその 芳澤あやめ
 おかる 吉田萬四郎 かほよ 小の川かめ菊
 小なみ 山下六三郎 力彌 嵐三五郎
 其後三都はいふに及ばず諸國の歌舞妓芝居にて忠臣藏を出す事年々歳々その數算へがたしといへども古今無類の大當りなし由良之助の最上と稱するは尾上梅幸にとゝめたり大阪に於て大當せし安永天明年間に兩度の役割を左に記す安永三年午十二月三日より中の芝居嵐松次郎座にて

ゆらの助

尾上菊五郎 本藏 中村歌右衛門
 義平 藤川八藏 寺岡 嵐吉三郎
 鹽谷 嵐吉三郎 勘平 嵐ひな助
 桃の井 藤川柳藏 石堂 藤川八藏
 郷右衛門 市山助五郎 彌五郎 坂東市松

與一兵衛	市川宗三郎	伊吾	右同	人
師直	坂東岩五郎	九太夫	坂東岩五郎	
定九郎	藤川柳藏	藥師寺	市川宗三郎	
伴内	中村友十郎	了竹	坂東岩五郎	
與一兵衛	嵐七三郎	となせ	尾上菊五郎	
妻	姉川大吉	おその	嵐雛助	
おいし	尾上衆助	かほよ	三樹徳次郎	
おかる	市川吉太郎	力彌	生島柏木	
小なみ				

其後天明三年卯正月十五日より中の芝居嵐他人座にて

ゆらの助	尾上菊五郎	勘平	嵐文五郎	
義平	右同	人	石堂	三保本義左衛門
本藏	三保本義左衛門	千崎	山下又太郎	
寺岡	右同	人	伊吾	嵐文五郎
鹽谷	嵐三五郎	九太夫	坂東岩五郎	
桃の井	中村京十郎	小なみ	嵐三右衛門	
郷右衛門	嵐文五郎	藥師寺	嵐七五郎	
與一兵衛	嵐七五郎	了竹	坂東岩五郎	
師直	右同	となせ	三樹徳次郎	
定九郎	加賀屋歌七	おその	山下八百藏	

伴内 嵐三八 かほよ 嵐三右衛門
 妻與一兵衛 嵐三五郎 力彌 嵐村次郎
 おいし 姉川大吉 おかる 山下八百藏

梅幸集明和二酉の年江戸市村座の條に云

此秋久しぶりにて京都へ登る相談あるとて江戸一統に残念がりしが程なく談合極り暇乞狂言は假名手本忠臣藏にて大星由良之助と本藏女房となせとの二役何か彼のこり多がるのと狂言の仕打と近年めき／＼と沙汰よくなりする程の事をよい／＼といはるゝ事を合體しての大入のすさまじさはたとへるに物なし元來此由良之助狂言は

△去る寛延二巳年江戸森田座へ山本京四郎諱名下可中り來りて此狂言大にあたりしが始め也其以前故澤村宗十郎大岸右内にて此仕打ありて京にても此人此狂言を出せしなり其仕打をよく覺へ大阪あやつり芝居竹本座にて人形に名を取し吉田文三郎此忠臣藏をつゝらせ彼助高屋の姿をよく寫し遣ひしとは芝居好見功者のよく覺へ褒美せし事なり其頃江戸中村座に彼訥子住込居たり大阪より可中森田座へ下りて此假名手本にての大當りを取りし事なり

根元の訥子に此狂言をさせなば當りを取るは極めし事なれば張合て同じ狂言を出すべしと最負連中の勧めにより一座一決して出せしなり其時に至り市村座に故薪水珍らしからんとて此座も相談極りて江戸一統此假名手本にて三座とも勤めしもとより薪水由良之助役は少し堅きとはいへども堅き所にはもやうを工夫して此由良之助狂言は阪東彦三郎に團を上げたり此時梅幸はおされども訥子の和らかみに理屈あり薪水の堅き中に風情を込可中の酔中の仕打に差別もありて此三つを合體して梅幸彌工夫をこらし今十七八年の後にあしきとよきを身に合せ勿論人品に據を得狂言の榮合もよくもとより以前の持前の女方に屋敷風俗のりしき取合もよく今此時に至りては此梅幸が狂言ともなりし程の事にて九月節句より十月廿日前迄は十日も前中の場の吟味もせずしては見物のならぬとて見ぬを耻とすといひ云はれして首尾能大入續きにて連中の見立もますゝ賑ひしはきつい大手柄略明和五三の替りに忠臣藏を出して彼暇乞の時の二役の儘にて大に當りを取訥子よりは姿見よきとて京に

ても同じ取沙汰安永二巳の春三月名所曾我に祐經勿論祐成の和事大に沙汰よく重忠の三役に切にかさねにての所作事を評よくありしが此前年辰の暮大阪中村歌右衛門座へ登らるゝとて看板も出たれどもいかゞ間違ひしや市村座の居なりと聞て大阪も力を落せし計されども顔見世の外題に尾上菊五郎不登漸といふ間違たるゆへ趣向となる程の聞への勢ひなりしが漸此巳の暮大阪登りの相談かたまりしとて先例に任して暇乞狂言に又も忠臣藏にかはらぬ二役に早野勘平との三役やつぱり沙汰よくて前年にかはらず大に入を取名殘も愈々惜まれつゝも旅立て略待兼山の人群て大木戸のエイトウ顔見世狂言は京へ來たりし時に變らぬ田原武者之助始の小幕の間拍子には大に手ごたへし次に公家姿にての世話事の混雜も和らかにてはつきり事のあざやかに分りし仕打と人柄のよいに大きにうけよく穩上上吉となり次の狂言表方も町方も待兼しすゝめの忠臣藏を間の物として由良之助となせの二役江戸京を鳴らして洗ひすすぎも足りし此藝幾度でも飽のない狂言に人品仕打にいひ分なけ

れば末の敵討迄もぬけ目なくて何度もノ見に行
が又大阪質氣にて^{略中}其秋京都へのおもひ立ありて
九月九日より改めて中村座におゐて暇乞として是
も吉例の假名手本に由良之助と戸奈瀬の二役皆
人名残を惜み先年にましてかはらぬ繁昌の大入
にて十月十七日まで首尾好勤め安永十丑年京都山
下八百藏座へすみ^{略中}天明三卯年大阪嵐他人座にす
み寅の霜月顔見世は伊藤祐清にて雪の傘さして若
黨奴連出しは去々年京都にての楠正成と同じく猶
雷子嵐三右衛門など同道にての同じ役當地にても
かはらず此上下姿を皆悦ぶ事にて春二の替り又
雷子相手に細川勝元にて左官に日雇の狂言當地に
ては少し俤堅過るともいひいかや此狂言不繁昌
にて不入ゆへ間もなく替りて假名手本由良之助は
いつとても申迄もなき事此度は珍らしく天河屋義
平役甚手強くせられての其中の和らかみに場棧敷
とも一統聲をあげて悦ぶ事日々^{略中}惜ひかな師走の
廿日過時季に障られて病臥十日とも立たで醫療盡
ていかんともする事を得ず終に此小晦日なる日黄
泉の旅立も餘りといへば思ひよらずもして息子丑

之助の爲にせめては今三四年もあらばとも行も残
るも心のはどぞ思ひやり且は當時ならび人もなき
三箇津にての大立者に名残を惜む計行年六十七歳
にして法名則解脱院清譽淨薫信士とぞ往事江戸を
勤めし事年數中村座に三年森田座に二年市村座に
以上二十五年の勤合て三十年始め古薪水聲となり
後十町^{始め大谷廣治事}娘に縁を組依之此二人の縁を以て
東武にある間は日蓮宗旨にて淺草大專寺に妻と俱
に逆修の石碑を建置たり此戒名還癡院永持日實と
ぞ聞へし右にいへる京地を古郷として親音羽屋半
平の宗旨なれば京大阪に在る間は淨土宗なり是に
て生れ附のすなをなる事も猶思ひやりつゝ誠に三
佛乗の因縁ともいはんもの歟此人京都にありし間
樂屋入の行儀といひ棧敷の客を見舞ふ事はいふに
不及惣稽古足揃などにも下袴を着し人の場の仕打
を見るにも謹で寒暑に恣を崩さずなすゆへ其出入
にも心を附る人こそ多し平生諸事を學び鞠は無地
の肌濃ながら誰を友といふ事もなく夫婦連にて垣
ある方を尋ね求めて休みなる日は蹴て遊び俳諧も
少しづゝ學び將棋は手直りを定め茶は石川流と見

へて折々は釜もかゝりし亂舞は勿論折しも聞へる事多く誠に物に嗜みてしほらしき生れ附なり手跡は拙くもありしと思ひしや息子丑之助へ幼稚の時から教へ込しとぞいひなせり立物といふものは斯こそありがたきものともいふ人ありてや其響にていひはやすにはあらねども自然と上方役者の行儀もよくなりし事なり梅幸四季發句

梅咲てたより嬉しき吾妻湯

冠を着せても見たし白牡丹

月更て猶々わかき十三夜

此枝にけふも御意あり御口切

梅幸を悼に數句を申出すもくゞしけれど渠が名譽一句に盡すべからず就中秀たることの三つを擧て是を手向とす

西宮

魚

寥氣に凝たる雲のたえまかな

大石か忠も名のみの寒かな

かたみには葵下坂とし暮ぬ

天明五年巳九月京都四條北側東の芝居にて師匠尾上

梅幸三回忌追善として尾上新七忠臣藏を出しける時由良之助役は近年追々工夫思ひ入を付ての仕打あるゆへ此度は何もせず正本の通りを勤めんとありしを眠獅それも然るべき歟しかし忠臣藏狂言毎々大入を取大當なるは其役々色々と物好あるゆへなり此度はどふするぞといふて諸見物群集する事なればやはり新意をくわへたる方も然るべしと相談有しよし聞傳へたり是は芙蓉の心持も面白く又眠獅は新らしき思ひ入は宜しからざる事を知りながら芝居繁昌を祈る志ありていやみをしつてする所は英雄人を欺く場有て此了簡も可なるべし

歌舞妓狂言本

歌舞妓狂言本の事は前編にもいへるごとく往古は定りたる作者といふものなし俳優家の立者寄合筋立てせりふは出合にいふて見るをならしと云其内に定るゆへ根本といふ物なし一日の狂言とても短き物にて今のごとくむづかしき仕組は役者の心にある事なり夫より後には役者も記憶薄く昔の立物の勤めしを見覺心覺に書て置しが古代と當代とに少々宛は風儀の違ふ所を書添て本とせしが根本の權輿なり其後實

曆十二年午の春東武の作者堀越榮陽淺草塔中にて本
讀會といふ事を初めまた明和四年亥の秋深川汐濱に
て興行す大阪にては天明の初め永長堂奈河龜助歌舞
妓講釋と號て根本の本よみを初め天明四年辰の秋角
の芝居藤川菊松座にて思花街容性といふ狂言並木五
瓶作にて大あたりせしより舞臺造物の圖を畫きせり
ふ附の讀本を出し其後役者似顔流行に及び年毎に畫
入の根本出版なす事となりその以前寶曆七年丑の四
月大西芝居にて四天王寺伽藍鑑並木正三作にて六月
迄の大入其節讀本淨瑠璃とて右の院本出版其後安永
四年未四月中の芝居嵐松次郎座にて競伊勢物語奈河
龜助作にて大當なし同じく淨瑠璃本二冊出版なせり
猶又寫本のせりふ帳といふもの當代大ひに流行に及
びござりますと書べき所を一夜附狂言など仕組の節
畧字にてふり升と書しも素人目にも讀得て女子の文
通にもけふしも長閑なる天氣にてふり升と書る様に
成たりしもおかし

都風流大踊權輿

明曆の初め洛東祇園の邊に風流の法師あり初秋の頃
吾友をかたらひ踊をはじむ夫より元祿の末に至り京

祇園町にて昌んに此遊をなし劇場にも毎年秋毎には
風流の仕組踊を催し都名物のひとつとなり大阪にて
も盆替りの大切に踊を勤むいつとも都風流大おど
りと記す今絃曲にて翫ぶ三勝心中の唱歌も元來は踊
りの音頭にて鳶山四郎兵衛の作なりくわしくは前篇
の三勝半七の條に著す永祿の頃京都にて踊うたの作
者音頭の名人と聞へしは

八百喜太郎 木地九郎左衛門 種間源三郎
道念仁兵衛 小豆庄兵衛 古今新左衛門
鳶山四郎兵衛 扇屋九左衛門 都源兵衛
都一中

元祿年中京祇園町踊の唱歌番組

翁千歲 奈須與市 さゝらおどり

唐笠おどり だんじり 競馬おどり

唐獅子踊 鹽釜踊 蘆荊踊

大福帳 鍵の權三 手綱おどり

六法出端 さつまぶし 手鞠おどり

御幣おどり 文七おどり 殺生石

しがらみ 鍵之團助 甲斐尊

三つ車 樽おどり 難波の梅

須磨名所

神垣

福太郎おとく

浮世法師

太郎助咄

道念咄

おさん茂兵衛

三勝心中

山庄太夫

さねもり

徳西咄

虫づくし

此唱歌の内鑑の權三といふ男おどり御幣といふ女樽桶などは大阪出羽の芝居にて大あたりせし踊なるよし

古來中興當流踊歌百番目錄

山崎與次兵衛踊

天滿出づる坊

おしも

こんぎやう

ごごうつ

與作丹波

都よね助

馬かた

さんがらが
づんがらもんが

阿部川紙子

ぢゆつちやら

ら

君ちり

さらしうり

難波長吉

一ばん鳥

伽羅板橋

棟あげ

源五兵衛

長刀

小野村彦三

山谷土手道

ふくの田

大小けん

おさき鈍助

丸ふく頭巾

福助買初

外六藤六

順禮

次郎冠者

有卦初

鶉の羽かさね

八重垣

さい鳥さし
ぶん介孫左

髮結小五郎

からかさ

いせき

しんしよのや

楊弓

先陣宇治川

なんほゝ

竹馬

しらかし

ふなさし

七つ道具

はんじよの市

山の手奴

早咲梅

管笠

權の介

金山間夫

岡山通ひ

馬場さき

すま山

しとゝん

四季花笠

櫓拍子

つり舟

三番叟

地ふく

君はしんそ

玄てゝん奴

世つぎ

糸屋娘

珍内花笠

春ごま

荒木の弓

ぞんぞりこ

午窓

三國玉屋

彌之助

てしやこ

とふらゝ

唐人

ゑしま

曆

但馬小女郎

もんつくつ

都の町青物屋

拙僧

堺の濱

梅の木

手合すまい

藤内太郎冠者

驒川

しゆんせう坊

伊勢宮巡

せうぶがり

いもの子

小川

ていこや

はいく

のんやは

二本

まんまな こんどや ふゝとん
さゝら

樂家通言

操り芝居歌舞妓の樂屋にて用る隱語其詞際限あらず
殊更あやつりの樂家占傍折々唱へ替れる事あり歌舞
妓にて當代用ゆる通言思ひ出るまゝをこゝに記す
操方の占傍

しんでんとは 男の事
わこす 女の事
ゑこ 子ども
がり 娘
よりと 年寄
ちやうけい 後家
そくかけ 妾
たしわこと 下女
りやうたつ 惣髮
やん おやま
づるかぢり 藝子
どん たいこ持
おかのしろ 顔

しろぎ	こつぱり	ちく	ゑんかう	すそく	せけん	やつかひ	しのき又いも	金太郎	ぐるり	かんど	西の宮	たつぽ	西國	ちんだい	しのぎ	赤馬又せいざ	きら	おしくすり	しんたら
鼻	目	口	手	足	不見	大きひ	坊主	あほう	帶	脇差	鯛	酒のさかな	飯	汁	鮓	酒	香の物	唐がらし	錢

むき

著物

うかす

物貰ふ

たけ

物買ふ

ぼろひ口

ものもらふ人
有事

こだれる

泣事

からけつ

銭のない事

まかる

借事

どろ／＼くわす

駈落

助右衛門

よき事

どんちきぐわん

人に損かける事

助四郎

あしき事

ほはる

銭遣ふ事

善悪は一切の事に用ゆるたとへば見目よき女の事を

助右衛門十八と云又見ぐるしき男ならばしんでん助

四郎といふ斯のごとく詞を取合せて遣ふなり

歌舞妓樂屋通言

玄んしやう

給金の事

わたり

拂

ねか

金の事

さがりが出来た

借金

わや

金の事

さがり

拂ひの金を待事

わやひん

似せ金

ほり込

少し拂わたす

かくすけ

南鐐一片

さげ

日々に渡す賃錢

のふかう

賃の事

拂もの

ちん錢

埋んで置

かくす

日立

毎日拂の給金

卷物開く

太平らくいふ

おんりやう

借錢乞

とめてをく

かくす

ヒン

かすり取

因縁とく

利害とく事

手まへてぞく

段取

紐かつく

ほとき付る

足がつく

こみ引

だめさす又ためが残る

捻りこむ

落合附る

調伏

どけはく

誰の煙かれの煙

やり付け

どろ場

ソレまく

向づらへ直る

はみはずす

ぶいく

首落ち

ひにく

ちやつと用意する

成行を咄す

尋物の手がへり

いひわけ

尋物の手がへり

せりふする

念押す

悪告する

落着

わる口

物をはき出す

他人の眞似

玄だらくな事

わるいくせ取

不通にする事

相手に成事

あほうつくす事

小ごといふ

いとまの出る事

機嫌取にくいいな人

ぬつとして居る

居直る

しら似せ

がうしやくもる

ボンつく

いきごむ

堅と成る

エイ／＼ハア、でゆく

立ち眉毛

さそ

銀の目

ひらひ子

邪人

車輪玉

しろ悪

事くはし

金太郎

むきなし

のろんけつ

たをしもの

うかめている

後に利強ふなる事

そんな事はわしやしらぬ

といふかは

悪告する

太平いふ

はら立る

はら立る

大せいつれて行事

いかる

けんくわ

南無三にてじゆつなき事

けんくわの紛れにくらは

すかせい

底心悪い人

りきむこと

底心悪い人

物を玄くじる

あほうぬつとしていふ

心なし

氣のない人

不吉もの

うんてれがん

たらすほゝ

なまたれ

油とる

づらす

ゑらたい

かす喰ふ

てれまく

ずぼる

ぼはする

こせ

お先き松明

しやり引く

糸引く

ぐらす

手を引て行

附けもの

ビタ

アゴ

氣のない人

あほうじやなといふけつ

かう人

たわいのない事

付目取事

物を打捨おく事

すゝどい事

呵られる事

てらされる

錢遣ふ事

あほう遣ひする

物をこせつく事

先に遣はるゝ人

のぞく事

手すじを引事

種を明す

いつでも一所の芝居へ住

立ものに引附て居る下廻

旅
はたご

雑用

あて

ほやきもの

顔やく

玄んかまり

よりと

おか

めんつなぐ

つぶして居る

せぶる

ばれ

二軒目

貫目がある

入れ込む

ワウハづめ

端とる

ジャ

音べが出た

聞かけ
叩き込である

宿屋の事又三度の朝夕の

飯のさい

喰もの

頭立つ人

新参

老人

顔

顔見覺る

色事して居る

寝る

果

宿なし

上手功者の修業のみへる

物を拾ふ事又ぬすむ

能事多き事

大勢の中のかしら

見物感心のころ

上手がみへる事

都ての刻限の來た事
修業の達た人

とらる

ずんばた

もみ消し

いがみ

大筋

長さとする

筋右衛門

さくら

筋うる

親かた

納る

うは置

ごんすけ

極樂とんぼ

太夫

クリ上ケ

がだ

しんか留つた

色繪

紋合

遅なわる

惣嫁

何所やらでなくする

盗人

大ていの事いふ

大勢のかしら

そこら似た事いふ

客にうらぬ太郎棧敷

成行を咄す

一座の頭

得心

旅芝居の立もの

やつこ

親がゝりの小息子

若女形

サアくくく

若女形

狂言の先が留る

狂言のいろ事

物の似た事

大くるわ

つらはり

吹かえ

狂言かく

つるみ

若いもの

中働き

いろくのかせある狂言

最初の出

死かいなとかはり

嘘を作るいつわりいふ

みなくといふ大勢

役者金剛又表方の木戸を

役者の下男

今古参考 南水漫遊拾遺四の巻終

今古參考南水漫遊拾遺

五の卷

一 觀弄場雜事

並 春卜半百の發句

葉筭賣考

一 頓阿雜事（自延寶年間至文化年中）

今古南水漫遊拾遺五の卷

颯々亭南水主人著

觀弄場雜事

俳諧道頓堀花道に云初芝居其外爰にも錢は戻りといふ句あり延寶の頃は正月二日より初芝居とて賑はしきにつれて此川竹に珍禽奇藝の類ひ錢は戻りくゝとて小家がけの見世物も有しと覺ゆれども古老の日記に見へたるは漸六十年以前寶曆九年卯四月四國地より達摩男といふもの來りて大評判のよしまた明和八年卯の春吉田玄水といふ盲人八人藝といふものを初めて大入せしかど寛政の頃には川島柳枝江戸表より來りて十五人藝に妙あり安永三年年には曲庇福平同七年戌の春初音耳四郎出たり安永八亥年東武の武人平賀源内といへる人戯作の表徳は福内鬼外また風來山人など呼べるその名高し此人の工夫にて我國にエレキテルを製してみせたり明和五年子の春轉多獨樂大ひに流行なし其後天明七年末の秋江戸より轉田榮

藏といふもの來り轉多獨樂に妙手を盡し其曲名數種ありしより又もや市中に獨樂まほし流行して素人にも名人多く出來たり

曲陀螺番組

扇	車	玄の渡り	窓の月	鼠ごま
四つ重ね	刎釣瓶	風	車	鳶かづら
皿返し	皿もんどり	瀧落し	舟	放し鳥
紐どめ	蟻通	釣	藤	見返り
煙管そせい	玉すゝき	下り	藤	蟬まる
木曾の棧	谷渡り	木の葉をち		要どめ
雲の棧	この手拍	谷の月		こてかへし
手車	峰の月	裳返し		そせい
かげの月	綾車	三本杉		合せ鏡
四季朝顔	三光松	てうちんごま		重ね菊
衣紋ながし	白玉	二重玉子		八重がされ
やげんどり	春の緋櫻	筆の先		やうりうの
豆腐の上	友千鳥	ふじぜんしやう		輪
此浦船	扇子	月		要ごま
股のこま	かんせき落	驚づかみ		眞田ごま
七軒渡り	袖の露	面かぶり		三番叟
	地摺ごま	女なみ男波		とまりごま

浪まくら 菊流し せい月 残る月

桂川 田毎の月 糸渡し 虎の手わたし

通小町 相生獅子 つまどり 宮参

一本竹 たすきこま 鼓が瀧 御祓こま

武藏野 源氏こま 笠おどり 藤霞

野かけこま をだまき 松風 道成寺

時がね 雲がくれ 三國一 金閣寺

足く留め 子持こま

寛政三亥年の春は館の曲ふき同四年子の夏火喰坊主などいへる珍らしきもの出たり扱また珍獸の類は明和二年西五月に甲州よりかぼちや馬來り明和三年戌の春紀州熊野浦にてとりたる大鯨を見せる其後寛政元年同七年の鯨も見せたりしが此年は此鯨をみれば風邪におかさるゝとて不評なり最初取たる鯨の大きき長さ七間半高さ一間半口の濶さ四尺三寸鰭の長さ六尺目方三百貫目餘とぞ中にも大あたりにて今に人口に膾炙するは安永頃の豪島山嵐天明頃の駝鳥寛政三年の水豹近來の熊子丈を卷首とす

安永元辰年阿蘭陀より薩摩國へ傳來なし翌二年巳の春より夏に至り大阪道頓堀へ出せし和名山あらしと

いふもの疫病疫難魔除痘瘡の愁ひを除くといひ傳へて見物大ひに群集す

(繪一枚畧)

前に圖する駝鳥は寛政元年西七月阿蘭陀船に乗せ長崎に來る同二年戌五月より道頓堀にて見世物に出す

餌飼一日握飯一升五合惣身重サ拾八貫目ウシロ姿土佐駒ノ如シロ勿論小通ル也

本草綱目曰駝蹄鷄食火鷄骨托禽載諸書云其說有不同實皆一物也雁身駝蹄蒼色舉頭高七八尺張翅文餘食大麥或食鐵石火炭足二指利爪能傷人腹死日行七百里其飛不高印大如甕此鳥出波期國三佛齊安息等西南天竺

屎氣味無毒主治人誤吞鐵石入腹食之立消

此鳥阿蘭陀國にて加豆和留といひ和名駝鳥或は火喰鳥と呼ぶ和漢無比の奇鳥なり波斯三佛齊安息等の西南天竺より出るものなり常に米麥を喰ひ悴なる時は鐵石瓦火炭などを喰ひその儘糞に出す鳥にして鳥にあらす便穴二穴にして鳴聲地に響き雷のごとく惣毛逆立おそろ敷事いふ計なし一々其謂のべがたし

或好古家の所藏に法眼春下の畫卷あり半百人一句と題し延寶の頃より寛延に至り浪華に名高き藥商人または放下師の類びを集て四季に分ち五十句の發句を添たり名人物の畫圖あれどもこゝに略すかの畫まきの序に云

古今のかうかつ成ものをあつめて發句を加へ半百人一句と名付傳る七十歳の異人前後せるは始に業あるものを出し次に浪人の類ひ次に出家坊主勸化の類ひ次に町々の門にたつ或は人寄の場處に床筵をかまへ辻打の類ひ迄を書のせ侍るこんざつは辨へ見るべきなり

法眼春下
寛延二己巳とし八月廿五日 一翁書

春の部

梔 久 松山を引そこなひも子日かな
源 六 わらんずは堺が安し春の風
幣 賣 霞くみ賣物ではく見せの端
順氣丸 京遊ぶ小兒のはらのうらゝかに
作兵衛 齒磨に物まね添て梅の花

兼 康

伊勢神樂
兵太夫

ぬく太刀に人を集て乙鳥の巢
あちらから守りありくや若菜摘

くわいてつ
青柳に小西つのがみ一味いれ
からき世や鹽賣爲にのむ白馬

鹽屋長次郎
見物を呵るが華のすみれかな

江戶なけを名に附男何櫻

身は風にうごくほと出し古柳

夏の部

太 平 記 楠は米になりよしあふち陰

道昌 かうこう 大津かみは回向のちがふ衣がへ

代 待 庚申の寝ぬ夜を蟬のいびきかな

手筋の勘倉 夏山のきやう場もしらすそみかくた

すたゝ坊 納涼やどこへ裸の代參り

はる山 出 たゝかねとひるの水鶏やほらの貝

地獄の 極熱や陰へ地ごくの所がへ

鐘 鑄奉加 繪のかねの鳴らぬ間を瓜のつる

淡島代參 紙ひなや飴るでもなし土用干

西の川原 六道の辻主や汗の入處

日暮林清 よき聲の自慢を餘花の墨衣

万 六 口笛や是もさいどのけし坊主
開 山 方便の太夫すがたや櫻の實

秋の部

どうその坊 人音と萩の葉おとはどうその坊

傀 儡 師 山猫やそつと野分の門の口

竹田

甚右衛門 こらうじませ雲のあしもと月の貌

女 祭 文 生玉やおそめをそしる女郎花

一ツ綱

久米之助 夕顔の花の壽みかや繩の上

はしごさし 星にうす姿やはしご雲の下

万歳勘七 すり出せば河鹿も笑ふさゝら哉

間 の 山 ふし付て夕あしたのかせぎかな

江 邊 守 守名つくいつも無射くしや天窓哉

萬熊

五郎兵衛 品玉や下手のみなかり下り築

今 梶 久 編笠の錢をしやん／＼くつわ虫

八人座頭 いろ／＼の音を鳴虫や艸ぶたい

鐵 輪 ひづみあり輪には手めあり後の月

オデ、コ 味噌こしのよれする場所や芋の月

冬之部

鼻の下

九 市 郎 まいにくゑ寒さはじめやうまひもの

舞 太 郎 坊主でも太郎と名乗る歸り花

鹽 汲 老人 ふり袖のなりをしはすの月夜哉

荷作

七右衛門 荷作が昔がたりを佛の名

阿波坐鳥 追出されやはりおどるや氷鮒

してこい

か、雲わたを賞翫せるやかゝが聲

毛 唐 人 からに似て唐にもあらぬ納豆汁

銀の竿指 庭先に下女のまねくやつばの花

三本足

おみつ 三つ足の火鉢をおもふ夜寒かな

米澤彦八 顔みせは年のはなしの冬ごもり

一文に

三 つ 奴 寒籠まけぬ寒さや大相撲

うや／＼敷も小倉黄門百人一首になぞらへ五十

韻の發句を並べ半百人一句と名附るはお月さま

にすつぽんをくらぶるたぐひ恐れ多かれどいや

しきも高位にまじはるは和歌の徳なればゆるし

とやあらん俳諧はくの野語を面にして歌にいひ

残せることの葉をひろふたぐひともなしたらん

や是に圖をはさみて童蒙の目をよろこばしめふ

る事のかたり草とも成ねかしと鹿筆に書ながし

つれば

寛延己巳年秋九月上旬になりぬ

葉箒賣考諺略雜記一名それ／＼草三冊ばせを翁門人乙州撰享保四己亥年上木大和繪師川島叙清圖あり略す

難波の葉箒賣は常に酒を好みて瓢を腰につけつゝ、長日箒を賣ありきけるが懷より土の人形ふたつとり出し太郎兵衛新兵衛と名を呼び酒の相手にしてたのしむ或人面白き曲者と覺て酒のませんとて呼び入ければ箒賣あざ笑て我汝等を相手にしてたのしむ心曾てなしこなたの新兵太郎兵衛我心に隨ひ來り我心に隨ひのみ我心に隨ひ歸るなりと唯一口にひひ捨行しとなり這老翁が心ばせは彼今宮の來山が道にておやま人形を求めて生涯愛せられ折ことも高根の花や見たばかりと口すさみありしと同日の論ならんかし

かゝる一奇人なるゆへ其行狀を操りに摸したるは世人よく知れる戲文義經腰越狀三だん目の目貫師五斗兵衛に打扮木偶これなり其文段諺略雜記と合考すべし

酒といふ世のくせものにうかされて軍師も今はちりほこりほうきのさきに二升樽くゝりつけヤアエイ／＼ヤアエイ／＼目拔師がなんでもせ箒々と賣たる親仁店の端にもしばしがほどは休め土の人形や肴をよせて二つ三つ四つ五つも六つもたべつ押へつあいしよとおしやる脇より人がみるならばかゝるまた／＼をかしからまたけなりから

街相撲若之助傳古文鐵砲に云

天關若之助といふ者あり天地を以て相撲場とし東西南北を以て四柱とす煙雲を水引とし山岳を土俵とす我國の城郭は皆棧敷たり郡縣の來往は皆見物たり關脇小結前頭は我一人にそなへしと大手を振て力足年老て若之助みどりの前髪灘紙の周身腹空うして口嘩し或人の云夫角力は力士東西に並ぶを以て是が名とす今汝自ら角力といふは如何答ていはく我に對すべきものは酒なり以て一方の關とす我常に是に勝然といへども酒力はなはだしき時は是がために弓を取らる今酒力至て薄し故に投錢を乞ふといふ爰に於て見物四方へ散亂す餘が曰是角

力の果ぐちか嗚呼是相撲のはてぐちか
名代之走坊傳同書に云

老僧不_レ知_二何人_一亦不_二其詳_一所_レ出寺院_一蓋陰陽之
蹻脉厚而終日聯_二翩於浪速之名區_一足逸_二驚駭_一因以
稱_二走坊_一々聞_レ之曰甚善名_一我固當又以自白號_二名
代走坊_一性躁而多_レ言屢貧_二米錢_一曾廢_二饑餘_一不好_二
瀝酒_一不_レ嬌_二女慾_一假令雖_二好可_一誰敢共_二閨房_一哉
慙_二志於佛門_一能釋_二街說法_一衆人開_レ口頗談笑於_レ是
乘_二其賞_一而曰止_二寂々之論辨_一而轉至_レ操_二狂言_一乎
路光無間鐘慶子石橋仙魚雲絶間各委_二其所_一好_二亦
請_二孔_一方見者羅_レ踰而投錢如下_二因_一孫子之孝心_二天感
雨_一於金錢_上受_レ笠包_レ袂後坐_{不_レ言}衆人瞋_レ膽奮然扼
腕坊曰詛_レ人賣僧之常褰_レ衣奮_レ杖飛行如_レ風

頓阿雜事

前に著す十卷とこの拾遺の前文に載せざる雜事を古
老の日記より拔萃なしその外世上に流行せし洒々落
々の風流なる事どもの年月を記して一笑に備ふ

一延寶五巳年高津新地九丁南瓦屋町人家建

一元祿三年午十月十八日元祖嵐三右衛門死

一同十四年巳十一月二代目嵐三右衛門死

一同十五年午八月高津茶屋堀江新地へ引く
一同十六年末三月玉造伏見坂町四丁千日前へ引く
一同年四月七日天満屋お初平野屋徳兵衛梅田堤にて
心中委敷は攝陽落穂集にあらはす
一享保七年寅十月十四日紙屋治兵衛紀伊國屋小春網
島大長寺にて心中

一同年お千代半兵衛生玉にて心中

一同八卯年京橋一丁目道頓堀へ引難波新地と云

一同十一年午四月豊竹座北條時頼記大當其後道頓堀
に北條藏といふ土藏建

一同十四年酉七月十五日芳澤あやめ死

末代にも有まじき不可思議の上手既にねはんの砌
は芝居主名代金元座元立役實惡敵役道外花車親仁
方はいふに不及女形は教主女形の入滅をかなしみ
枕元に立寄足元にひれふし口上言はお經とふれ紙
を取違へ二十五の菩薩の迎はせ給ふか如く木戸番
は極樂の通り切手をさし出し芝居茶屋賣物商人は
みづから花鬘にむすび場敷中茶屋にいたる迄二
わり調錢の群類千軒棧敷の幡天蓋の編笠をならべ
新部子みなく歎き騒ぎけるに天より不思議の樂

下りけれども二の替りの櫻の枝にとまり定業ちから及す

一同十八年丑六月晦日道頓堀火

一寛保元年酉の春大西芝居にて瀬川菊之丞傾城今様道成寺を勤む

笛 嵐 七五郎 小鼓 山本京四郎

太鼓 笠屋又九郎 たいこ 中村富十郎

一同三年亥十月竹本座大内裏大友眞鳥三度目の興行の時竹本政太夫初床

一延享元子年高津新地開地

一同三年寅九月角の芝居にて岩井半四郎江戸下り暇乞として傾城淺間嶽をつとむ

一寛延元辰年淨るり祕曲鏡といふ小冊出版

一同二年巳三月十八日十九日兩日の事にや北野新家
しるしの一件並神寄の船渡し場にて船越十右衛門馬士の喧嘩おその六三心中をも一部の戯文に取組とりあへず八重霞浪花濱萩といふ外題を廿日に出し同月廿六日初日五六日の間に出来作者並木丈助及び豊竹一座の出精にて古今の大當り翌三年午三月十八日より物草の切々し追善惣太夫出語に

て勤む

一同年夏鶴澤友次郎死

一寶曆三年酉の春に京町大文字屋のかぼちやとして其名は市兵衛と申ますといふうた流行

一同四年七月十日三代目嵐三右衛門死

一同年冬より中の芝居嵐座にて道中千貫樋亥二月晦日迄大あたり作者並木正三

一同年十月竹本座にて小野道風青柳硯染太夫此時初めて出座

一同八年寅七月竹田石井龜吉三座の子供役者追々成人におよび候に付十五歳以下計りのものにて相勤む身切狂言に成三切狂言とも見切狂言とも此年より竹田吉三郎嵐と改め同九年卯八月より中の芝居の座元を勤む

一同九年卯五月四日道頓堀火

一同十年辰の春より手鞠うた十二月世上に流行す元來は絃曲家の祕曲作物のうち也

一同年狐が三疋尾が七つのうた流行

一同十一年巳二月四日夜道頓堀火

一同年高い山から谷底見ればお万可愛や布さらすといふうた流行

一同年七月四日藤川平九郎死中の芝居姊川新四郎座にて夏祭浪華鑑團七九郎兵衛平九郎の代り役藤川八藏一寸德兵衛八藏の又代り坂東國五郎勤む

一同十三年未正月九日道頓堀火

一明和二酉年高津新地増地難波新地三町人家建出す

一同年三月九日角の芝居中山文七座こぼち同年冬より若太夫操り芝居にて歌舞妓興行翌戌年顔見世座

元姊川菊八酉十一月十一日より花櫓開書太平記

一明和三戌年北堀江市の側豊竹此太夫芝居建

一同四年亥の春道頓堀樋の上藥屋の飼熊主人を噛む

一同年三月天王寺町生龍山天鷲寺に於て東都梅柳

山木母寺開帳有之同四日中の芝居中村歌右衛門座

三の替りに興行乍憚略縁記

抑此新狂言は人皇六十二代村上天皇の朝に初冠せ

し吉田の少將雅房といへる和漢の才人家に一子な

きを愁ひて夫婦日吉の神へ參籠し丹城をなし一子

を生ず故ありて父におくれ大津の浦にさまよふを

信夫の藤太といへる人商人買とり東に來り彼藤太

が杖に死す一首の和歌に

尋來てとはいこたへよ都鳥

隅田川原の露と消ぬと

詠じ殘せし諺を岡本竹本の淨瑠璃に綴り是迄度々御覽に入候得ども此度天鷲寺におゐて開帳あるのゑときにならひ三卷の歌舞妓に添削し忠圓禪師の開闢せし梅柳山木母寺の古事迄を取組三の替りの外題に成すと云々

座 本

中村歌右衛門

三鳥三卷

粧柳塚

一同年夏道頓堀岩井風呂人殺し團七の茂兵衛とて今に毎々切狂言につとむ

一同年北堀江市の側此太夫座染摸様妹春門松大あたり

一同六丑年千日前黒船新地なる

一安永三年角の芝居小川吉太郎座にて心中野邊の

書殘淺尾爲十郎傳海の役にてちよんがれを初て勤む

一同年冬役者評書梨園頼話といふ小冊出版委敷は前

篇に著す

一同四年冬中の芝居三樹松之丞座翌甲とし顔見世よ

り京都嵐雛助立役と成八枚の表付書出しに直る

一同年より濱芝居宮芝居にて五段續の狂言を初む並
宮芝居にて顔見世初む

一同年冬角の芝居にて中山文七留筆 藤川八藏 書出し
兩人花がたにて雙蝶々大當

一天明元年丑三月十三日夜道頓堀火

一同年冬より角の芝居藤川山吾座中の芝居山下金作
座兩座とも天下茶屋の敵討大あたり

角の芝居
殿下茶屋娶 並木五兵衛 助

連歌茶屋譽文臺 作者 奈河龜助
増山金八

一同三年卯三月二日尼寺月江寺にて土器投會催主二

斗庵下物奉納笠着之風土器といへる文あり此會の
終りに富士川百八といふ牽頭子ほうろく投をして

興を執たり

一同四年辰の夏楊弓大ろうじの歌堀江より流行出す

一同五年巳四月廿三日夜道頓堀火

一同年春より北の新地芝居大歌舞妓座にて切落しの

見物を入るゝ事を初む

一同年七月九日大雨大雷道頓堀にて三女雷に打れ死

す千日法善寺に墓あり

妙玄十六歳妙圓二十歳妙西二十八歳

施主河きの

一同六年午の春入齒師の名人日下泰山役者似顔の面
を吐出す

一同年七月廿七日前の嵐小六死去嵐ひな助叶と改め
悴秀之助初舞臺何れも同年なり其後大西芝居にて
櫓脇東西へ歌舞妓の外題を兵附のごとくになし相
撲場の表同様にゑつらひ

前狂言 國性爺合戰 三段目まで

切狂言 毎日替り乍憚口上

一私親嵐潮六御最負御取立に預り一世一代を仕夫よ
り世を遁れ暮し候も誠に各々様方の御蔭と難有奉
存朝暮罷在候當七月廿七日に故人と相成候夫ゆへ
京都の約束も御座候得共何卒御當地に於て亡父追
善旁々御目見へ仕度打寄相談の上先年竹本大和掾
趣向淨瑠璃外題相撲の儀は則當芝居にて仕候得共
其古例を以て往古より仕來り候歌舞妓外題を東西
へ分時代世話歌舞妓狂言を二段三段づゝ日々に相
改奉御覽に入候間御取立の親共追善のため賑々敷

御來駕の程偏に奉希上候

月日

叶 雛 助

一 天明七年末三月法善寺に於て曾我兩社荒人大明神開帳

一 同八年甲の夏珍らしくも堀江市の側此太夫芝居にて座元淺尾爲吉を初め十歳前後のおさな子計りを集め淨瑠璃に合せ人形の身振をうつさせ一口もせりふをいはさず不殘太夫より語り道具建もあやつり仕立にして町中一統に沙汰よく夫より道頓堀若太夫芝居へ引越七月一日より興行猶々評判よく日増の大入にて役者うない子と云評書出る委しくは略す

至 上上吉

花 桐 德 三 郎 花桐富松子十一歳

大 上上吉

加 賀 屋 福 之 助

切 上上吉

藤 川 音 松 藤川音松子十一歳

上 上上吉

淺 尾 友 藏 淺尾爲子十一歳

上 上上吉

坂 田 龜 藏 坂田助五郎子十一歳

上 上上吉

中 村 久 吉 中村久吉子中來

上 上上吉

中 村 德 次 郎 中村次郎三子八歳

上 上上吉

藤 川 岩 松 藤川岩松子八歳

上 上

柏 井 藤 四 郎 柏井藤四郎子十一歳

上 上

中 村 八 藏 中村八藏子十一歳

上 上

嵐 卯 之 松 嵐卯之松子十一歳

上 上

嵐 伊 之 助 嵐伊之助子八歳

上 上

三 桝 民 之 助 三桝民之助子六歳

上 上吉

淺 尾 菊 次 郎 淺尾菊次郎子六歳

真 上上吉

中 山 一 德 中山一德子他子

上 上吉

三 桝 德 之 助 三桝德之助子九歳

上 上吉

澤 村 龜 松 澤村龜松子九歳

上 上上吉

小 川 市 松 小川市松子七歳

上 上上吉

豐 松 熊 二 郎 豐松熊二郎子七歳

上 上上吉

中 村 金 藏 中村金藏子九歳

上 上上吉

物 卷 軸 淺 尾 爲 吉 座 元

一 寛政元年酉九月角の芝居にて叶ひな助一世一代相勤め同年十一月中の芝居にても一世一代を勤る

一 同二年戌の夏難波新地にて阿蘭陀陰繪はやる

一 同三年亥四月中旬高入道出るといひふらし町々に

はまじないの歌として張る

誰そやたそ我名もしらて呼聲は

いつくのたそやこは神宿

一 同年高津新地御藏所替

一 同年三月十二日夜道頓堀火

一 同四年子の春勢州關の地藏三津寺にて開帳

一 同五年二月十九日坂町にて心中あり男女の死骸を
千日墓所に於てさらせし處女の陰門の毛多き評判
にて見物おびたしく其後心中のさらしもの止
む

一 同年四月法善寺にて三百疊餘恕の大字

一 同年五月座摩社内にて長さ二尺の鼠を見せる

一 今年蘆手繪口合流行

一 寛政七年難波村の農家にいたら貝に南無阿彌陀佛
の六字あらはるゝ同時に上町には南無妙法蓮華經
の文字あらはるゝ

一 同年妙々といふ事をいひはやらす

一 同年長町五丁目迄を日本橋通と改む

一 同八年辰三月三日より生玉にて紀州なもで踊りみ
せる

一 同年秋座摩社内にて唐の芝居あり夫よりチン／＼
ホウ／＼といふ事専ら流行

一 同年四月大阪中に頓死する人多くまじなひの歌

水神の教に命たすかりて

六部の内へ入る嬉しき

一 同年四月廿四日廿五日兩日坂町天神社内にて金屋
永次郎といふ四歳の男子千字を書す

一 同年夏下寺町に涼みあり新清水に音羽の瀧を作り
是に打るゝ人一人廿四文づゝ

一 同年十一月東在より新川出來るとて方々へ杭を打
玉造より道頓堀へ水を落し新大和川と名附るとの
事なりしが不出來

一 同九年巳二月角の芝居藤川八藏座に於て二の替り
新狂言百千鳥鳴門白浪傾城買指南所の景事を舞臺
納として嵐三五郎西國順禮に成立す

一 同十年午三月三日より七日の間天滿天神きしん芝
居願主嵐來芝

一 同十一年未五月住吉松原におゐて寄進芝居同年度
摩社内寄進芝居

一 享和元西五月高津新地に於て大佛畫像かけ地拜見
一 同二年戌の春京都祇園町より十二三歳計りの女義
太夫下り大流行

一 同年九月ばくろう町稻荷社内にて寄進芝居

一同年十月角の芝居にて尾上鯉三郎一世一代勤む

一同三年亥の春江戸女義太夫芝のおでん座摩社内にて大當り

一同年五月二日嵐來芝死去行年七十二歳

一同年十月中の芝居姉川熊次郎座にて淺尾爲十郎一世一代病氣にて狂言つとまらず口上ばかり

一文化元年子三月尾上鯉三郎一世一代の後亦々中の芝居へ出勤

一同年四月四日淺尾爲十郎死行年七十歳同年夏難波橋の詰にて太夫あま酒流行

一同年冬北堀江東側芝居町家となる

一同二年丑の春角の芝居にて森田勘彌上り江戸狂言まばらくといふものを勤む浪華の土地に應ぜず

一同年四月角の芝居にて澤村國太郎一世一代として壽關寺小町相勤む

一同年九月廿九日夜道頓堀火

一同三年寅の春世上に福助折といふおり形はやる

一同年七月廿九日夜道頓堀火

一同四年卯七月六日より三日が間故人竹田近江百回忌に付角の芝居にて追善ちう役者一日操り一日又

中役者一日替りに歌舞妓大芝居役者は名前計にて出勤なし

一同五年辰の春二の替り新狂言角中兩座とも江戸山東京傳戲作名古屋山三不破伴左衛門稻妻表紙といふ稗史を種として

角の芝居

傾城輝草紙

中の芝居

傾城品評林

作者
近 松 德 三

作者
奈 河 篤 助

一同六年巳の春竹田大からくり四天王寺大伽藍細見打出し庚申堂万焼見事く

一同年サ、よしく節のうた流行

一同年いろはうたよみ賣流行

一同年六月高津新地御藏跡夕涼み

一同七年午の春竹田大からくり高野山獨案内

一同年唐のナアぶし流行

一同年紙の頭巾はやる

一同八年午の夏菊麻呂といふ者鞠の曲流行

一同年春龍おどけ開帳縁記

一同年十一月道頓堀火

一同九年甲の夏角の芝居にて天王寺鼓櫻再建のため

寄進芝居興行

一同年八月難波新地新川に切店といふ長家建此邊に
茶屋多く出來新祇園町といふ

一同十年酉の夏難波新地夕涼み宇治橋はやる同年七
月廿三日先々中山文七釋淨光京都岡崎にて歿す年
八十二

一同年九月二月夜道頓堀火

一同十四年丑の夏投扇流行

一同年八月天滿天神社寄進芝居

延寶の初めより百四十餘年の雜事九牛が一毛なり

委敷は南江年代記に譲りてこゝに略す

今古參考南水漫遊拾遺五の卷終

今古參考
南水漫遊續編

一の卷

一 歌舞妓芝居起原

並 道頓堀名代

役者禁制

一 物真似狂言盡名目

並 表木戸故實

一 大入札櫓幕

並 濱芝居宮地小芝居

一 城戸

並 いろは茶屋

通り札

一 招牌名目

並 一枚看板人物畫面故實

外題脇書風流

今古参考 南水漫遊續編一の卷

颯々亭南水主人著

歌舞妓芝居起原

道頓堀歌舞妓芝居は寛永年中京都より段介といふ者大阪へ下り下難波領の傾城に踊りをさせたり大阪にては是をお國かぶきといへり段介座大阪へ下り藏人といふ女太夫を仕立これを太夫藏人といふ其後女藝を禁じ給ひ鹽屋九郎右衛門同九左衛門大和屋甚兵衛河内屋與八郎松本名左衛門大阪太左衛門京都にて申合大阪表へ下り芝居興行仕度願ひによつて御赦免あり右の者ども多くは濱側にて小芝居を初めたり夫より次第に人數をくわへ苦衆子供五十人計り入替て踊らせたり其頃は太夫元芝居名代も極りなく勝手になせし事也然るに慶安五年に至りて左の通り名代改りたり

一大阪名代道頓堀吉左衛門町中の芝居

一同 立慶町角の芝居

大阪太左衛門

(但し寛保二年の頃は福永ともいへり)

一同 吉左衛門大西芝居

松本名左衛門

(此芝居は戎橋角に仕しゆへ大西といへり今は無之ゆへ豊竹筑後座のあやつり芝居を大西と呼ぶ)

いづれも室町家の御扶持人也同年承應と改元六月一日鹽

屋九郎右衛門芝居にて口論有しより其後芝居中へ無錢にて見物入申問敷御制法の御書附出たり今芝居の内にある箇條書是也同年七月に總かぶき芝居御停止に成承應二巳年右歌舞妓太夫元狂言盡の御願申上候て御赦免有しは鹽屋九郎右衛門同九左衛門大和屋甚兵衛右三人也夫より少し程ありて松本名左衛門御免あり大阪太左衛門は其ころ江戸にあり年あつて登り御願ひ申上御赦免を蒙りしと也正徳三年十二月京大阪名日宮地芝居抱子供年代御改寛保二年二月十一日十五以下に改む女藝御停止の後小姓を以て女形と

なさしむるに是又女子に紛ふゆへ振袖を禁じ給ひしが小舞所作を勤る時見へ惡敷に困り其趣御願申上しより寛文中中其役者の手のひら程に額髪を剃り振袖に換給ひ右御制禁御改として毎年一度づゝ芝居の舞臺におゐて御吟味ありしが其後十二月二十日南組總會所へ總芝居役者共御呼出し有て先年仰渡されたる箇條を彌愼み相守可申旨屹度仰渡さるゝ是を役者總判とも二十日判とも唱へ來りしが近來は御公邊繁多に付十二月六日に役者ども住處の家主五人但年寄の印形を取給ふ其掟は役者たるもの磯はしき異族と交はる事叶はず都て行儀正しきを本とし第一色欲を愼み第二樂家にて酒宴を禁ず第三喧嘩口論勝負事第四舞臺の姿にて棧敷へ廻り行附合事第五舞臺へ任する身なれば遠歩行を禁じ脇差さす事は其長に至る者か太夫元ならでは常に差事無用もし此掟を違背する時は役者仲間を省き可申となり右總判の砌女形の額をわづかに剃たるは答らるゝ事也又幼年にていまだ帽子かけといふ事をせざる内は制禁に洩るゝゆへ制外子といへるをいつの程よりかせイガイコセイガイトイともと誤れり

或書に、權現様江戸御入國の後遊女町を御覽遊ばされ葭原の場所を拜領被仰附候ゆへ四方に堀をあて地形を築立家作を調へ遊々どもを數多集め置候を以て畫の内は諸人參候へ共其道筋左右共に葭原の中にて物騒に有之候に付日ぐれにも及び候へば人通り無之故渡世も難仕旨にて葭原町より願ひ上候間女かぶきを御免被遊被下度との儀に付願の通被仰附候に付町中に舞臺を立て棧敷を構へ踊芝居を初候處珍敷見物事として貴賤共に入込に殊の外繁昌に及び細道左右に有之候葭をも切拂ひ江戸中より出店を仕茶屋なども多く立續き候ゆへ已後葭原町より願上候て今程は泊人も多有之渡世も仕安く相成候間女かぶきの儀相止め其芝居跡をも町家に仕度と申候に付願の通被仰附候也其の後猿若彦作と申狂言御師願申上京都大阪にても古來より有之儀に御座候へば芝居を御免被下候に於ては葭原を切開き町家に取立若衆かぶきを初め申度との儀に付是又願の通被仰附唯今の堺町を取立踊り子を集め狂言芝居を初め其弟子猿若勘三郎の子孫今に相續して中村座といふ扱又右の踊子どもいづれも前髪だちにて有之候所に石谷將監殿町奉行の節

何方へやらん振舞に被越候所其の兄におゐて浪人小姓のよしにて罷出酒の相手と成り殊の外利發なる立廻りに相見へ候に付將監殿相客へ被申候はあの浪人小姓は何者の忤に候哉我等心易方に兒小姓を被尋候間肝煎可遣との儀に付相客衆密に被申候にはあの者は堺町に罷在候歌舞妓子にて候へば其許などの口入あられ候やうなる者にては無之候との儀を將監殿被聞歸宅被致候と其儘與力同心を堺町へ被差越名主方へ被申付今夜中に踊子共不殘前髪を剃落させ可申候但し元來若衆かぶきと有之御免の事に候へ共踊子共の中にて太夫分の者一人は前髪を立置候様との御申渡しにて其夜中に悉く只今の通に野良頭とはなし被申候よし同役神尾備前守殿へも翌日御城におゐて將監殿右の段御申達被成候となり

物真似狂言盡名目

承應元年六月かぶき御停止仰附られ役者共皆々難澁におよび候に付段々御願ひ申上候處翌二年三月役者物真似狂言盡といふ名目にて京大阪とも免許ありしより芝居木戸口の上に將基の駒の如く成る札に物まねと書記したり是櫓免許の札にして外の芝居に上る

事叶はず物まねとは聲色こゑいろを似するにあらず老若男女貴賤僧俗きんぐを眞に似する事也

眞似とはまねぶといふ事を略したる語にて學の字也源氏物がたり品定の所にまねき出といふ詞もまねをして聞すといふこと也俗に眞似と書は後世おしあてたる字也

歌舞妓の元祖於國始て京都北野にて芝居興行の時は白幣を櫓の四隅に立たり天正年中より慶安の頃まで幣にて有しが承應二年歌舞妓の名目物真似狂言盡と改りしより兩部和光同塵の心にて明曆年中に至り京大阪共今の如く廳に轉じて是を梵天といへり總じてかぶき物真似の本義とするは勸善懲惡の道にして惡魔障化を除く心にて梵天王を祭る旨趣也永祿年中京北野の軍用の人樹を於國に給はり五奉行の指圖を以て四方を圍ひ天下太平の爲神慮をすゝしめんと廳を以て老若男女を招き賑はふ今芝居の櫓に揚し鍵五本の形なすものは右五奉行の鍵の餘風也偕又櫓にて太鼓を打に見物を入る時早めて打は陣太鼓の古例也人寄せの内樂屋にて鐘太鼓を交へ拍子をとるこれをシヤギ舍來留やどりきたりといふ心なりといひしが今はシヤギりと唱

へ幕明けに近づけば甲太鼓^{カン}を交て勇ましくなせり往古は人寄にしころといふ物を木戸口にて打しが今は二の替りの打出し計りに打つ

當時此しころを打もの川竹の兒童十五以下の者集りて勤る例と成りこれをシコロ連中と唱へ小兒の中にも頭たちたる者ありて嚴重なり

同時に見物を出さん爲果太鼓を打これを打出しといふ昔は總はてに反鐘を鳴らせし事あり

當代京都四條の芝居にては打出し夜に入時は禁庭を恐れて櫓太鼓を不打顔見世の初り太鼓は寅の刻に打夜中ながら明に近ければ赦されたり

大入札櫓幕

櫓の向ふへ大入札とて圖の如き(編者曰圖略之)札を揚る事往古はなし按るに是は夜顔見世と成たる時櫓太鼓の一番二番三番を知らせん爲角なる行燈に火を點じ一番より二番三番と取替て群來る見物の目じるしとす三番の行燈を揚れば夫より式三番更を勤む平日は未明に三番更を勤る

樂屋の定例にいまだ三番更を勤ざる以前に樂屋にて狂言に用ゆる刀脇差の類ひを拔は其日喧嘩口論

のあやまち出來るといひ傳へて堅くこれを禁す又三番更濟む土場に飛かふ蠶人に付すとこれも芝居の一奇事とす

次に脇狂言二番目狂言を勤む^{ワキ狂言二番目}の故實奥に記す 右二番目の狂言の終りに舞臺の大幕を引き樂屋にて舍來留を打つ

ぶたいの上にて淨瑠璃床の下をはやし方の樂屋とす此處を聞かげ場とも唱へ都て狂言中古はやしの鳴物此所にて勤め舍來留も爰にて打

是れを合圖として櫓のむかふへ大入札を揚る也たとへ櫓ありても濱芝居には大入札を揚る事不叶これ大歌舞妓の權を見するもの歟

中古まで竹田座龜谷座は濱側に在しゆへ中の芝居お濱芝居といふ宮地芝居は岡島元右衛門竹本濱太夫享保年中京北野におゐて初たり

往古の櫓幕(編者曰櫓幕圖略之)は白布に座元の定紋を付し、がいつの頃よりか雑喉場魚問屋仲間より例年顔見世毎に送れり茜染に白にて座元の定紋を附け天地は白の岸岐取也四隅に座元と名代の名を疊にて記す往古は鹽屋九郎右衛門松本名左衛門など座元

名代を兼帶せし事も有しが近世は名代計りと相成嵐

<div>さ</div> <div>こ</div> <div>ば</div> <div>座元の 定紋</div>	<div>座元</div> <div>名代</div> <div>同斷</div>	<div>座元</div> <div>名代</div> <div>同斷</div>
--	---	---

法令と守りし禮儀今は絶たり

木戸

三右衛門岩井半四郎片岡仁左衛門大和屋甚兵衛座元を勤し後も安永の末天明の頃迄は中山文七中村歌右衛門三樹大五郎小川吉太郎など歴々の大立物勤しが近年にては子役又は若衆形を座元となし自然と一座の尊敬も薄く成たり此格式の嚴重なるは江戸三座のみ京都には名代兩人ありて座元なし太夫元と稱するは銀主ないふ大阪にても座元を太夫元とはいへども昔の如く其人の下知は主君の仰と心得作者の指揮は軍師の

往古の芝居は假家建にて万事手輕く表も櫓の下に鼠木戸二所ありて見物は鼠の穴へ入が如く肩脊を屈曲て越るゆへに鼠木戸といふ當代は一箇所に成れり北野の人樹の時陣中の出入に相言葉を以て通路なすゆへ相言葉口といふ此處より見物を入し其餘風なるよし又大木戸を往古は乗物木戸といふ當代小屋芝居の御用口に同じ其證とするは風流色芝居正徳年間上木江戸山村座の一件を戯作せし冊子也物さはがしき中に取交へて櫓太鼓のひびきさまざまじく木戸の外にはあらおのこ共諸はだぬぎになりてわれ一と何やらんのゝゑりよばふその中をおしわけかの山伏小太郎を伴ひのり物木戸あけさせ誰恐るゝけしきなく小太郎さじきへのぼりつゝと書り扱又往古は道頓堀側芝居の近邊とても今の如く寸尺の地を爭ふ事もなく建家まばらなるゆへ炎天或は俄雨の節見物の諸人難澁に及び候に付元祿十二年卯十一月立慶町役高二十八役吉左衛門町役高二十役都合四十八役右兩町一役に水茶屋一軒づゝ御免にて濱側におゐて板圍ひの内に床几をかまえ茶店を出す事とは成たれども其頃は萬事手輕き事にて右茶店四十八軒出來しゆへ世俗呼んでいろは茶屋といふ寛

保の始め東都市川海老藏大阪出勤の時高津より眺望して

高臺にのぼりて見ればいろはに帆

と口號^{すざ}みしよし栢庭句集に見へたり此の茶店にても木戸札を賣り是へ立寄る見物客を芝居へ誘ふに茶店の女^{今チチャ}コといふ丸盆に茶飲茶碗湯桶に茶を入て通ふ圖人倫訓蒙圖彙にあり今も通り札○招牌を出すは往古の餘風歟明和の末までは三重の手提に握飯煮しめあん餅を詰て商ひしが當時は美着さまゝに成行ぬ又一種連中の通り札とて圖のごとき紙牘あり中古までは芝居の連中とても嚴重に通る札を證として木戸口を入しと見へたり

連中通札

三人座三桝大五郎

此通り札は寶曆明和年間中の芝居の連中札也

鴈金文七といふ戯文の中に配り札といふ事ありもしや此連中札の事にや鴈金の戯文は元祿十五年壬午八月十六日御仕置に成たる五人男の事を綴り松平治太夫座に同年九月九日初日出すその文中に

五人仲間が手を揃へ付ておりてとぼして進せふそのだいに配り札を澤山に下されよ云々

招牌名目

端看板は元祖名古屋山左衛門が興行せし時より辻々に張札を出せし事なり然れども今の端看板とは異にして屹度したる格式也

從五月八日於北野名古屋山左衛門在所京遊女之所作成之一覽念望之人須來見

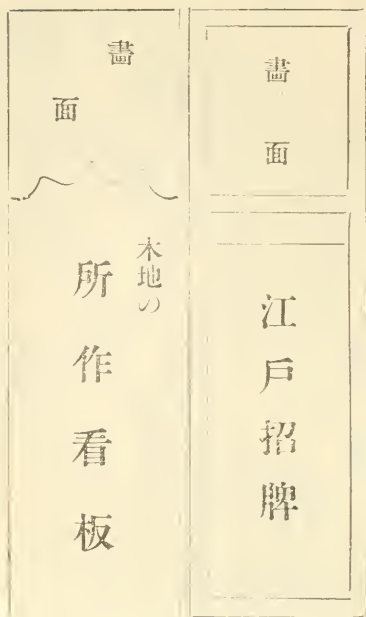
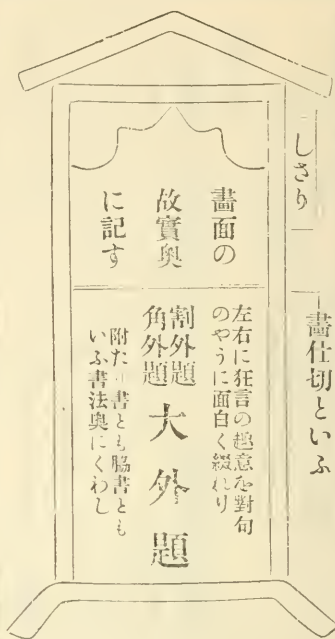
と斯の如く記せり又承應の頃の表招牌は杉板に圖の如く外題を書たり

ゆどのさんかいちゆう

女人成佛

後年縁を拵へ大形にせしかど書をかく事もなかりしが表淋しきとて一枚紙に繪をかきて上に張る事を初めしは元祖神山小四郎の工夫也夫より庵看板といふもの始り當代にては江戸看板所作かんばん或は總書

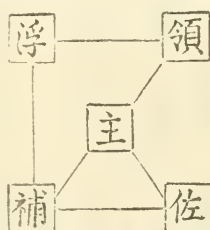
添看板など、數品に及び畫面の圖取外題の書法に故
實あり
庵招牌の圖



一枚招牌として華美に成ても庵の形を造れるは往古の
遺製なるか今もいほり看板といふ又一種江戸看板と
いふは江戸三座に出す看板の形にて通言お江戸と
呼び近世専ら此招牌を用ゆ一枚看板の畫面は大體三
つに限る定法は二つを立役の一筆留筆一つは女がた
の留筆が一筆か見合なりこれ外題看板の恰好なり置



やうは天地人の見合肝要也四か六の
偶數に成時は牛馬鳥虫其外何にても
生數を添て奇數に合す添看板ならば
九か十一にても苦しからず



立役者多く五つ出る時は主座頭
補佐 二つに縁の切をるやうに
領 浮二つより主 これつなぎて
見へなやうに五つの取合恰好大
事也人形七つも出す時は二つは
離れてするむか遠見に遣ふべし

斯の如く一枚看板には大立物ならでは載る事を赦さ
ず別種添看板といふものには八枚の役者を不淺畫面
に著せり一枚看板に畫面一つ出す事あり譬ば菅原に
て丞相天拜山のあれの段或は忠臣藏の由良之助城渡

しの類ひ其權輿寶曆十三年豊竹座のあやつりにて番場忠太紅梅館に官女の姿にて簀の籠を戴き魚賣さまを書きしを諸人珍らしき畫面なりといひあへり其外三十石船始に島原の大門口にて神道源八關口平太の試合を御船か仲居姿にて見る舁或は秋葉權現廻船嘶に日本駄右衛門玉島幸兵衛が川こし姿是等の畫面其頃大ひに評よくいづれの狂言とても一枚看板は繪そらごとゝて狂言外の無理を目あたらしく書けり又惣書として一日の狂言を一段／＼書きて出すなど近來の事也所作かんばんといへるは京上り江戸下りの暇乞或は師父の追善などに所作事を勤る時に出す大かた樺の本地を用ひ所作事の外題に發句を添しは寶曆九年卯の十二月二十二日より角の芝居にて中村富十郎九州釣鐘岬の大切江戸みやげとして娘道成寺の所作を勤る時

咲からに龍頭へといけ山ざくら

といふ自句を書しより始む以來暇乞の所作かんばんの風流とす大外題の文字は奇數を用ゆ奇數は半にて陽物の起り始る形也偶數は長にて陰納り終る形也外題に用ゆる文字扁なきは陽扁あるは陰と定め止り

の文字扁ある文字にて留め終り納る縁儀を取又文字の留りの恰好居りよろしく成物也大外題の文字五字七字九字の奇數を用ゆ昔より偶數を用ゆる事もあれども果して不當りか又は不時の災ひ有ゆへ偶數に成文字の外題は作字寄せ字にて奇數にする法とは成ぬたとへば三十石船始の夜船の文字を作り日記を諷記文章を障などゝ寄せ字にて數を合せ妹杵山婦女庭訓ををんなに婦女と文字を延す奇好は起り陽氣を動き聚るの道理なれば也又角外題割外題といふは

源八渡 濡髮長五郎

いづれも對の人物を

平太濤 放駒長吉

つゝの外題といふ

去し噂の 聚樂の館に

青江下坂 賤女の愛妾

此如く書を

十八切子の 大佛前に

割外題といふ

大座敷 官女の妾宅

其外三十一文字の和歌或は流行うたの唱歌などを書事ありこれを笠といふ脇書は附たり書ともいひ一日の狂言の趣意を左右へ對句のやうに書き其の中に曲言を交へて文の長短は定りなし又五言七言の詩句と歌を見合せる趣向もあり中古以來かぶきの脇書は長

文にてあやつりは短いづれ長短に寄らず作意の面白きをよしとす外題の風流割書の脇書とも附り面白く書納しは江戸の堀越菜陽浪華にては並木正三也

今古参考
南水漫遊續編一の巻終

今古參考南水漫遊續編

二の卷

一 傾城外題

並 往古けいせい買狂言

一 今古狂言趣意

並 往古離狂言

三 番續狂言外題

ソキ狂言

二 番目

一 評書

並 八文舎自笑江島其磧話

梨園顛話

今古
參考 南水漫遊續編二の巻

颯々亭南水主人著

傾城外題

夫經論書籍の外題を附るに七種の立題といふ事あるよし台家四教集註に委し芝居の外題も狂言になき事を外題に作るも本據に寄所あるをよしとす往古島原かぶきの頃は髮切島原、坂田島原、八島島原、安宅島原などいふ外題なりしがいつの頃よりか傾城といふ文字を冠むらしむるも京島原傾城買の狂言をなせしより初り二の替りにはかならず傾城事を勤る事江戸三座にて曾我狂言を出す例の如く成りしは京都都万太夫座より初め兎角理屈ばらぬやふに和らかになくては春めきし二の替りの詮なし往古の離れ狂言の時傾城買の狂言といふは先づ其場に口上出で只今けいせい買の始りと觸れて仕舞へば村山八郎兵衛といふ立役買人にて此の打扮白加賀の衣裳に銀箔にて鹿の角を蜂のさしたる所を總身の模様として一尺七寸の

脇差を向ふへ落る計りにぬきさし左を張り右の手に扇の要をつまみ楷懸りよりゆらりと出て正面に立ながらせりふ八幡これが買人でやすと扇にて脇差の柄を叩けば見物一同にソリヤ買人の名人が出たはくくと聲々に響る事えばらく鳴りも鎮まらず時に奥屏口より揚屋の亭主古き淺黄袴の腰をねぢらせ手拭を腰に差し貝杓子を持出てエ、旦那お出かといふ聲の内諸見物ソリヤ亭主が出たはアノ顔を見よかしやと笑ふ聲次のせりふもいひ出されぬ程也漸笑ひ鎮れば八郎兵衛なんとまだ太夫は見へぬかイヤもふあれへもふ追附是れへ御出と橋懸りを打詠めアレ／＼今是へ見へますといへばヤレ傾城が出て来るはと見物みな腰を立直し物をもいはず揚幕を詠め居る時にけいせいの姿おかしき衣裳金入なり其頃は女形のかづら懸るは稀にして多くは花紙を兵庫番につゝみ只一人出て大盡様お出かへといふを偕もと悦び大盡と互に手に手を取れば又笑ひ座敷の挨拶一つ／＼こなしをどよみを作りて譽たり偕亭主盃を廻らし酒の肴に太夫様一曲の舞所望／＼とせりふの内頓て囃子方出てならべて女形舞の所作ありこれが狂言一番の仕

組也後世は太夫の出はそれ／＼に位を分ちぬめり十三段ありといへ共はやし方の秘曲とす

今古狂言趣意

往古寛永の頃の歌舞妓能の狂言をやつし又は新たに作りて狂言盡と號し一幕づゝの離れ狂言は前文の傾城買の趣なりむかし當りを取し狂言と聞及ぶ浪人盃といふもの富永平兵衛といふ作者が著たる藝鑑に

何事も時に隨ふ習ひなるにわきて狂言の風は時代の品變れりむかし狂言盡の時當りしと承り傳へ侍る浪人盃といへる狂言を左に記するもの也

萩山の家中高坂采女といふ武士馬上にて使者に赴て道の景色を稱し旦那より小性家來までせりふ渡り采女が曰むかふの館は髯君のお國なれば國境より行儀正しく何れも鹿相なきやうにと申さるれば皆領掌の答ありて謠ひに成る也馬を廻らし玄と／＼行向ふへ深編笠著たる浪人者あゆみ來て玄と／＼と平伏すれば家來咎めて何者なれば慮外もの笠を取て片附ろといへども更に答へなしイヤ推參なと侍共立寄らんとする所を主人ヤレ待て／＼彼者我に向ひて平伏の體と見ゆれば是全く慮外にあらず去ながら笠を取らぬは心得ずコレそな男某に向ひ用ありげに見へたる

はいかなる人にて何の用事仔細聞んと有ければ彼男謹んで采女殿には御堅固の體先以て大慶至極以前御懇意の拙者なれども年經たれば聲も聞わすれ給ふべし今日此道筋を御通りと承はり餘りなつかしく最前より待受け御馬の先きに平伏致しながら御勘氣を蒙りし身なれば顔を貴殿に見せ申も恐れあり又面目なく存じ慮外の編笠眞平御免と詞の内采女つく／＼思入有てム、扱は貴殿こそ以前の傍輩轟辦右衛門殿ナ此方もなつかしく存る某は御用の道すじ馬上は御免編笠を慮外と申にあらず御顔が見たいお斷の段何か苦しかるべきさあ／＼笠を取給へ辨右殿に違ひはあらじと詞かけられ扱々能こそ御推量いかにも辨右衛門がなれの果てお耻かしやと笠取れば先は御無事でお久しやと互にふりにし物語いさゝかの事にて勘氣を得られ貴殿申出さぬ日とてもなし何と暮し給ふやと問はれて辨右衛門ア、忝ひお詞浪人の身なれば朝夕の煙もかつ／＼習ひ置し謠の袖乞無念とは存じながらもと諫言過て御勘當かならず時節を待れよと其元の御詞を頼みて今日迄命ながらへ候也御上使とあれば殿の御名代御目見へ致す心地仕るこれを浮

頃より津打治兵衛といふ者出て手柄をなせし二河白道の狂言を初にて江戸狂言の筋時代事に世話事を取組珍らしき趣向を初め是より當時の四番續と成たり京大阪の往古は先づ式三番更を勤め次に脇狂言夫より第二番目三番目四番目五番目と離れ狂言なりしが其後上中下三番續の狂言に成し時ツキと二番目は離れ狂言にてワキ狂言は大體踊りをなす脇おどり共いへり其角の句に

花誘ふ桃やかぶきの脇おどり

右の踊りは若き女がた子供紅絹の着附に花笠を着て踊り次に小詰打揃ふて鍵踊を勤たり脇踊の唱歌には春霞踊

さし本調子

長閑なる世にいざ打つれて春の野山を分つゝゆ

けば立そろゝのふ春霞のどかにめぐる日の本の千代のかげそふゑいにゑひ若みどり子の目の

松も君が世は久しかれとぞいわふためしや

ナドリ

松のよはひと我君がよとゝ共に千とせの末かけて千とせの共にともに八千代の末かけて

同

幾世かはらぬ我君が世はゝともに千とせの末かけて千年のともにともにちとせの末かけて

同
若い衆は落よゝと袖を引ゝ袖ハヤアおつと

もヤア此みやおちそろか

同

紫の色に心はあらねどもゝふかくヤア人をば

ヤア思ひそめつるか

同

十七が親にかくしてかねつけてゝ僮にヤアふ

ちらし

る雪ヤアノ扱はをかくす

ヤンレめでたいは千世の初めの壽きをいわふた

めしの色々はエイ春のあしたの若水を君にさゝ

げてまいらしよのふかすのみこたち打つれて蓬

萊山の舞の袖かへすゝも梅のかほり香

此餘四季踊京鹿子踊君が羅踊の唱歌は松の落葉集に

出て江戸伊勢田舎芝居には古來より今にあれども京

大阪はなしと書り此書元祿十七年甲申三月に上木す

最早其頃に脇踊はなかりしと見へたり江戸三座脇狂

言

中村座 酒呑童子 壽大おどり

市村座 七福神 梅が枝大おどり

森田座 福神遊 花おどり

扱又二番目には一趣向ある其頃のはやり事を短き狂

言に取組若手の立役女がた衣裳を飾り三番續也劣ら
じとはげみし事にて中興迄は中通りより勤めし也夕
霧の狂言は元來京都にて二番目に若手の役者勤たる
狂言の趣向なりしが殊の外大當りにて三番續の狂言
惡しく見へしゆへ銀主方の望にて右の趣向を續狂言
へ取組色事仕の開山と呼れし坂田藤十郎藤屋伊左衛
門の役を勤めしが原來よく出來たる狂言を名人上手
にこなせし事なれば京都はいふに不及諸國へ大評判
の聞へありて前代未聞の大當り今に傳へて相勤る狂
言とは成ぬ其頃の根本を見る心得とも可成は續狂言
上二場なれば上の口明上の中入と名附け中の狂言二
場を中の口明中の中入といふ然るに中を四番目とい
ふは上の狂言に中入二つありても上一段の内中也又
同じ上より算へる時は中は二番目なれどもワキ狂言
を一番目とし二番目の離れ狂言を其次とし上を三番
とし中を四番目とする義也中古以來脇踊止んで能狂
言の萩大名又は薩摩守などを勤め脇狂言といひしが
寛政の頃より其儀も止しゆへ二番目を脇狂言と心得
たる人多し二番目に一趣向ある離れ狂言江戸三座は今
に中通りより勤れ共京大阪にては小詰出て小詰は部二
屋といふ

の替りは壬生のシャデンの鳴物にて物いはぬ花
盗人三の替りはかつこはうろくおれがするのをコレ
見をれヒウヤヒウにて濟し盆替りは井戸堀又は俵盜
人其餘駕籠ぬけ師匠釣りなど前狂言といひて數種あ
れ共當代は目をとめて見るべき程の上手なし昔はワ
キ第二と濟て幕を引やいなや長上下いたため附てさつ
ぱりと讀立る役割が一日の初めなるゆへ屹度なした
るものにて勿論口上役は大阪にて柳武兵衛、水島四
郎兵衛京都に角平宇右衛門、元海庄兵衛、松川六郎左
衛門など口跡よく遠音さしてあやよく聞へ役人替名
のいひたてつまづきなく適の聞ものなりしが今は二
番目の幕引と甲大鼓カチの音かしがましく早朝より見物
は大序の幕の早ふ鳴かしと苛つゆへ外題脇書の風流
役者替名附の觸紙を讀とも聞人なし口上役携へ出る役
割附を觸紙といふ
口上役幕外へ出て二役觸れ或は聲ふれ病氣ふれ打出
しの切口上まで嚴重に勤るを大かぶきの格式とし濱
芝居にては此事なし

評書

古今著聞に云、春はさくらをもて第一とす秋は菊を
もて第一とすと宇治殿仰られければ公任卿梅の候は

んには櫻第一とてはいかゞ候べき略猶春の曙に紅梅の艶なる色すてがたしと申されけるはいにしへの粹なることぐさにしてこれらをよき品定の權輿ともいひつべし年毎の評判記はかの梅さくらの沙汰にひとしく技藝の功拙を論じて春秋の花實のあざやかなるが如し技藝の評書は西鶴團水の頃より昌んに成行其積自笑に移り其後其笑瑞笑など其意を續ぎし時は評判記といふもの京都を本阿彌のやうに思ひしかど浪華の二斗庵下物酒屋隣馬宿其外魚丸泊鶯など評して今猶年毎に出板なし當代にては大阪を本家とす評判記に著す位附の昇進は明暦萬治の頃より粗見へたり夫より物に准へ出せる事年々に其數不知といへ共位は上上吉を頭とす其後元祿の末より寶永正徳享保の頃に至り位を六品にわかつ

三が津總藝頭 無類

極上上吉至極上上吉
大至極上上吉

大上上吉

眞上上吉 功上上吉 至上上吉

外に盡の白字褒美附等の故實は好士の知れる所なれば爰に略す評書五つの傳の内に寸延尺墮の傳と號して一寸づゝ延て行人に逢ては行船の岸は跡へさがるやうに見ゆる段ありて次第に出世すると老こむ役者

の見合には細評祕事ある事也一年江島其積八文舍自笑と確執の事あり正徳四年午正月出板の評云役者同利講の序に江島其積その趣意を書り

東西／＼扱わけて御斷りを申ますは役者評判本は中比出水通和泉屋八左衛門と申草紙屋板行致し年々古板に書加へて或は役者舞臺鑑又は櫻欄帯などゝ外題を替て出し候所に此役者同利講の作者其積と申好者三箇津を三番にわけ一切づゝの序をつけ御慰に上中又は白字の上など申位附をいたして役者口三味線と題號をつけ麩屋町通八文字屋八左衛門へ遣はし申せば早速板行にいたしぬそれより毎年せがまれ乍斟酌年々仕り遣候所に又二條通正本屋九兵衛方より一とせ餘儀なく頼まれやむ事を得ずして役者一挺鼓と申を仕遣候然ども八文字屋と正本屋兩方かけ持に同じ事も成がたく正本屋方は團水と申好人へたのみ八文字屋方は例年たへず仕遣候五六年以來は評判の所計は先格を以て其年の狂言の當りを見て自分にも可成事と評判の仕方をおしえ八左衛門にいたさせ外題目録三箇津の序を仕り遣候然るに此作者其積一所の江島屋市郎左衛

門と申新本屋と役者評判本は向後八文字屋相仕に致され末々迄入魂にせらるゝ様にと作者色々申せども八文字や一人していつ迄も可仕由事切不同心にて都て江島や方をさして似せ本又はまぎらはしき草紙など出し候と八文字やより斷書出候段作者身に仕候ては心外の至りに存候抑々八文字や八左衛門と申草紙屋は何にて世間へ廣く名を發し候哉二條正本屋おなじく鶴やは古來より上るり本にて名を取八文字やは京芝居の歌舞妓本を板行仕候外さのみ家名を世間に御存知にても無之候然る所に此作者其積松本治太夫方へ淨るりを作り遣し其語り本を八文字やへ遣し板行させ候てより年々の評判本は申に及ばずけいせい色三味線又は曲三味線禁短氣傳受紙子色情雨ひいな形御伽曾我類の慰書數多作り遣はし候處に各々様の御意に入八文字屋ノと是より浮世本評判本の名取のやうに罷成候事八文字やの功にて候や作者其積が功にて候や此段憚ながら世上の人さま御了簡被成可被下候殊更作者の實名を出さず作者八文字自笑と致させ候程の深切をかへり見ず今にては八文字やと名を取

申上なればたとへば鳥が母と書て板行仕出候ても八文字やと申名にて賣申との所存高鳥盡て良弓藏るとやらんにて功を立遣候作者の申分も用ひず作者一所の江島屋をけづり一人の功に可仕存念是によつて當年より江島方に役者評判本板行仕候以來は毎年出し候間御求可被下候八文字屋には今迄八文字やと名を取らせ候作者の功を奪ひ自分の功に仕度存念有之候へば右の品世間へ披露いたす事氣の毒に存じかぶき本配りかんばん等に此方似せ本の或はまぎらはしき本のなどゝ小書をして八文字やより出し候右之通に少にても違ひたる事をかく長々敷書顯し板行に被成ものに候やまぎらはしきと申小書仕る手間にて眞實まぎらはしき事にて候はゞ此長口上をとめ申が眞にて候總じてまぎらはしきの似せ本のと申もたとへば八文字や八左衛門板などゝ仕出し候はゞまぎらはしき其可申あの方は八文字や板此方は江島屋板と仕候にまぎらはしきと申わけは無御座候八文字屋抑々の評判本又は當世本の作者は其積と申に紛れ無之候を其まゝ其作者の仕りたるふりにて新作出し候八文字や

こまぎらはしきとは申べけれ近頃片腹いたいせんさく此方のは數年御なじみの作者御佳例の評判本新規の作の八文字や評判と御見まがへ不被遊御求御覽可被下候扱京しばゐの評判は一座元づゝ座分に仕候間御しんべうに御一覽奉願上候追附評判のはじまりさやうに御心得なされませふ

ゑじま屋市郎左衛門

其磧の傳は古老云、京都京極通誓願寺は淨土宗の本山にして本尊は春日神の御作の大佛也此等の門前に昔餅を賣る家あり大佛餅とて世にもてはやし繁昌して富巨萬の財主と成厥后豐太閤洛東六波羅の南に方廣寺大佛を建立せらるゝゆへ又他家の餅屋大佛餅とて新に店を開きて繁昌連綿たり京極通の初めの餅屋は業を轉じ誓願寺通柳馬場へ變宅なし子孫自然と蒼に募り遊里に巨萬の財を費し酒に落たる風流家にて傾城禁短氣の類數百部の書を著して自笑にあたふ衣德は其磧といひ通稱江島や市郎左衛門此家は大佛餅の根元とす

八文舍自笑は京都駄や町の書林八文字や八左衛門といひ性は安藤氏也延享一年丑十一月十一日歿す年八

十餘京都二條寺町本覺寺に墓ありむかしは折々半切摺にせし役者附に藝風の評を書加へ位付を冠らしめてこれを賣たりはなはだ能なるものなれども一座の魁首或は其比の花がたならでは載ざるゆへ此評判に洩ざるを譽とす其圖を左に摸寫す

(圖組版の都合にて次頁に入る……………)

……………編者誌す)

往古の評書に位附の外にその人物の品目を分ちたる書あり役者目利講といふ評書の目錄に正徳四年上水思入片岡仁左衛門、本實柴崎林左衛門當世音羽太郎、三郎、やつし大和山甚左衛門、りかう阪東彦三郎、こなれ榊山小四郎、根生藤川武左衛門、評ばん三浦義左衛門、一風村山平十郎、當風片山小左衛門、根ぬけ山田甚八、きれい百人一首源三郎、人相澤井甚右衛門、功者竹島瀧三郎、名取山本歌右衛門、なじみ荻野長太夫、愛敬かつらぎ常世、思入野崎和歌浦、こなれ佐野川花妻、娘風水木染之助、里から花井小山三、一種梨園頼話とて安永三年の雜評あり

山景新報

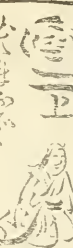
正陰書藝新刊

▲めんでいす
けいせうふみおたふみ
おとよりしす



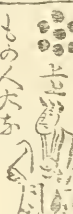
あふぎのて
あふぎもすいりて

▲めんでいす
おひめいふみ
のり



いふまふいふ
こころかんりこころ
いふまふいふ

▲海ふさてい
かせとよせい



もの人あ
あふぎのて
あふぎもすいりて

▲めんでいす
おひめいふみ
のり



いふまふいふ
こころかんりこころ
いふまふいふ

梨園頼話首題

維此冊子細論劇場標題初挂姓字終揚圖黑船使示姉
川腸褒貶不笑巧拙實詳昔時自笑簡易何當

浪華 斜旋子識

標題

南雅置酒

漁江吹笙

珉子借面

里聲奏箏

華曉花圃

三蝶蘭亭

讀多夜雨

睦友晨風

慶子湖柳

鯉長丹楓

虎宥藥鑄

平久酒池

孤立瀟灑

岩止怪奇

四聲燕子

棣石海棠

富尾輕薄

朱連濃粧

與山紅畫

其答白衣

伯子使蚓

都舟盆魚

歌七貧士

一光官厨

九子書婦

黑稻博徒

八甫高低

英子風流

可慶茗話

志山花談

由男大商

雷子少年

杉鳥周鼎

里環般盤

舍柳園圃

梅幸雪梅

梨園頼話

頼題逸人撰

余暇日遊于書肆一偶看架插小冊子乃採讀之所
所謂評瓦舍衆伎一者也其辭固鄙俚無足見者

且視其所評騭者似未必盡當稱技或過其實然至瑕庇一不_レ論之矣今夫俳伶之於道大槩有_二三日技曰貌曰聲然技有_二工拙貌有_二妍醜聲有_二清濁苟至_二具美於三途者寥々乎無幾矣是故雖_二由男梅幸微瑕猶不能_レ無_レ之況其碌々者乎而今特舉其長而不_レ謂其短一別爲論之偏矣夫評者能褒貶其長短之謂也今評而無褒貶豈得謂評焉乎于茲余有意補其向未盡者雖然余亦自_レ幼不甚好_二雜戲故所見者固寡今舉其所識者一二而聊戲評騭之爾甲午冬日記

南雅(櫻山四良三)

如窮措大置酒雖不至_二腥羶粗極雅致

漁江(三樹德二郎)

如月下吹笙風韻清爽氣格高朗

珉獅(嵐雛助)

如英雄欺人又似樹牡丹於百畝富麗不_レ可及若其作愁貌似_二借面弔喪雖_二勉強痛哭原非_レ出_二子肺腑

里聲(尾上糸助)

如少女奏_レ箏雖_レ非_二大雅音情致有_レ餘

華曉(中村喜代三)

如藝花圃雖_二爛熳悅目如_二總雜何

三蝶(嵐三十郎)

如癡子日臨_二蘭亭積_二功久而終不_レ似然還優_二黃米者流縱逸破_レ法

讚多(姉川大吉)

如_二蕉窓夜雨雖_二風致有_レ餘恨景物蕭條

睦友(嵐文五郎)

如晨風體小而伉健適利雖_二鴻雁能當_レ之又似_二駿馬馳_レ郊一瞬千里亦別無_二雅觀

慶子(中村富十郎)

如西湖烟柳綽約近_二人情又似_二西施毛嬙無_レ論才藝却_レ扇一顧粉黛無_レ色

鯉長(中村糸太郎)

如霜後丹楓惜其景在_二秋冬之際然却優_二于桃李多_レ媚而少_二風致又若_二替者彈_二琵琶初似_レ不_レ可_二甚聽者然至其妙處使人酸鼻

虎宿(中村十藏)

如藥鑄鼎雖燦爛鑠眼素非三代物

平久(坂東三八)

如酒池肉林直是豐饒耳又似武人弄三絃抗浪中時見癡態

孤立(生島柏木)

如清流短棹復瀟灑一覽而已

岩止(坂東岩五郎)

如霸王樹怪々奇々見者無不解頤

四聲(花桐豐松)

如燕子花雖復嫣然不作空谷幽蘭之清雅

棣石(山科甚吉)

如雨中海棠柳陰鶯話

富尾(藤川柳藏)

如輕薄少年頗有才氣然不免疎率

朱連(嵐七三郎)

如醜女濃粧強顰笑

奥山(淺尾爲十郎)

如紅毛畫雖精工驚目惜乏雅色

其答(澤村國太郎)

如白衣大士似嬌艷而乏媚態又似雨後間鶯

幽艷閑雅恨微有澁音

伯子(市川吉太郎)

如夜蛙伏蚓聲振月露非無清致然不協律

都丹(三枅字八)

如盆池金魚粗足清甌耳本非江湖中拘

歌七(中村歌右衛門)

如貧士表鮮衣座語則可也若起行則時露襤褸

一光(三枅大五郎)

如太官舊厨雖有大宇時不能無宿味

丸子(中村治良三)

如密婦衣繡雖復華整不堪動止

黑稻(三枅他人)

如博徒家無擔石一擲百萬又似貧寺啓龕雖復臚列不堪僣詐

八甫(藤川八藏)

如孔北海志大而才短又似吃人勉作雅言乍高乍低

英子(小川吉太郎)

如風流少年、凡百伎藝無不_レ通獨不_レ涉世務、

可慶(市野川彦四郎)

如書評著話、非無_レ清致、然亦與易_レ盡

志山(市山助五郎)

如父老入_二少年場_一、強滑稽劇談、雖_レ出_二一二笑話_一、
不堪_二陳腐_一、

由男(中山文七)

如都下大商、錢帛米穀俱足、獨法書名不_レ真

雷子(嵐三五郎)

如千金少年、銅山金埒口不_レ言_二米鹽_一、

杉鳥(嵐三右衛門)

如商彝固鼎、敦古可_二貴重_一、而不_レ便_二于世用_一、又似_二
殘荷帶_二疎雨_一、雖_二衰落_一、亦自有_レ態

里環(嵐吉三郎)

如老婆茗話事々皆實際、又似_二讀_二周詰般盤信屈琴
牙_一、

舍柳(中山來助)

如園圃假山池、大費_二人力_一、而竟不_レ及_二真者_一、

梅幸(尾上菊五郎)

如雪裡寒梅、風骨勁雄氣韻清雅、又似_二宋儒說_一、經拾

文貴質惜終墮_二于理窟_一、
書梨園類話後

此書也細_二論舞伎_一、而盡矣更世之論_二舞伎_一、也從_二己
之所_一、好而論_二之、然十之七八多不_レ當也、凡論_二舞伎_一、
者以_二士農工商_一之能仿_二佛子彼_一、而爲_二工矣
士不_レ士農不_レ農工不_レ工商不_レ商、則爲_二之拙_一、亦不_レ
可_レ哉、今世若_二梅幸英子鯉長慶子_一、者意用任_二其能_一、
細心竭_二其巧_一、使_二視者自酸感_一、矣是伎之爲_二工者_一也、
若_二由男八甫珉子其答_一、者滿腔盡_二其情_一、而忽理戾_二
其性_一、矣加之僻錯惡情、還而至_レ敗、與是爲_二之拙_一、亦不_レ
可_レ哉、余好_二雜劇_一、故知_二此書之能辨_二工拙_一、減否_一、矣余
亦私謂_二馬梅美鯉慶_一、於_レ伎獨質也、由八珉其於_レ伎猶文
也、此之暴子弟使_二少年徒好_二其文_一、而暫極_二耳目之
美_一、矣彼是歟、非歟、吾與質矣、甲午朞月望後三日

北窓散人書

其積時代の評書には三都の序文に各一趣向ありしが
近來は書林丁數を厭ひて其事止みぬ元祿寶永正徳頃
の序文を集めて役者萬人かつらと題せし小冊ありこ
れを見れば八文舎の草紙氣質もの、作意にひとしく
面白きもの也、淨瑠璃太夫の評判は今昔あやつり年代

記浪華の蘆間の磔といふ三本の外はいまだ閱せず是を思へばあやつりよりは歌舞妓芝居に華あればこそ元祿の頃より百三十餘年の今に至り年毎に出板して役者評判記は俳書の春の部正月の季にも入べきものを

今古
参考
南水漫遊續編二の巻終

今古參考
南水漫遊續編

三の卷

一 劇場顔見世

一 顔見世狂言

一 戯子乗込

一 極り番附

并 古今座組の辨

天和年間極り附

江戸番附

紋番附

役割番附

今古南水漫遊續編三の卷

颯々亭南水主人著

劇場顔見世

歌舞妓芝居の顔見世といへる事住古京都村山又兵衛
中興芝居の祖なり若き時明暦萬治の頃までは一座みな我抱にて
興行なしもし新參の役者出勤する時は正月二日の初
芝居より五日の間諸見物へ目見へをさする是を今年
は村山座に顔見世が幾人り有とて群集して見に行た
る事也又兵衛六十八歳の時京都に芝居三軒大阪にも
三軒出來て役者も數多に成りけるゆへ毎年同じ顔計
りにて興行するもいかゞとて互ひに入替て座を組た
り然れども其役者に暇を遣すにあらず約束ほど勤め
て又元へ戻りたるに其後松本名左衛門座より一年抱
といふ事を初め京大阪新抱の分は一年ならでは住ざ
るやうに成たり嵐三右衛門太夫元をせし時より一座
の役者十月晦日切に暇を遣はし霜月朔日より新抱の
役者計りにて顔見世を初む其頃東都の俳士寶齋其

角大阪に下り居合されしにや五元集に霜月朔日の例
をと前書にて

諸人や嵐芝居を冬ごもり

と繁昌を賀して送られたり嵐座の芝居大入にて遅く
行かば場處も有まじとて見物夜中より群集して後には
初夜頃よりも詰かけくるゆへ是を嘉例となし顔見
世には夜芝居興行する事とは成りぬ其後寶曆八寅年
十一月二日より翌卯年顔見世角の芝居におゐて
座元中山文七

江戸

市川竹十郎	中山新九郎	中山東助
松山三十郎	中村四郎五郎	阪東岩五郎
山下治兵衛	三樹大五郎	中山文七
嵐松之丞	三名川才藏	山下金作
姉川大吉	中村小伊三	中村喜代三郎
これ迄夜分七日の仕來りの所此年奉願上日數十日夜		
顔見世と成り又明和元年十一月二日より翌酉年顔		
見世角の芝居にて夜十日又晝十日の顔見世を初む		
尾上七三郎	藤川八藏	中山來助
市の川彦四郎	中山新九郎	桐の谷權十郎
淺尾爲十郎	桐島儀左衛門	中山文七

中村千藏

太夫

中山與三郎 佐野川花妻

中村糸太郎 桐の谷秀松 芳澤崎之助

顔見世棧敷の直上りせしは寶曆九卯年十一月二日よ

り翌辰年の顔見世に角の芝居へ江戸表より中村富十

郎罷上り福源氏壽卷といふ顔見世狂言古今例な

き大入にて夜十日の内棧敷直段一間分十五貫文まで

せしを昔より聞も及ばぬ事にて全く慶子一人の手柄

といひあへり

市川枳藏 市の川彦四郎 中山來助

中山新九郎 中山文七 坂東岩五郎

山下次郎三 坂東國五郎 三榑大五郎

三條浪江 中村花咲 嵐松之丞

山下金作 嵐小伊三 中村しん

中村富十郎

又珍らしき趣向せし顔見世は明和四亥年十一月五日

より翌子年角の芝居中山來助座にて

源平 男女相性鑑

といふ外題にて

坂東滿藏 中山來助 市の川門三郎

坂東豐三郎 桐の谷權十郎 笠屋又藏

嵐七五郎 桐島儀左衛門 市の川彦四郎

澤村國太郎 姉川きく八 花桐豐松

嵐 雖治 芳澤あやめ

座附の役者に縁引の綱を取らせて即座に顔見世狂言

とす則狂言作者の口上招牌に

乍憚口上

一何がな御なぐさみにと存じ當顔見世は男女の相

性にて狂言の儀お目通りにて座附の役者に縁引

の綱を取らせ引合し立役女形の相性にて善惡を

定め直に取組御覽に入候不都合なる芝居お目ま

だるく思召可被遊候へ共お取立の程總座中共奉

願上候以上 作者 並木正三

其後明和七寅年閏六月十二日より角の芝居にて

蚊追店 屋の敵打 催馬樂踊始

といふ外題にて右の狂言未明より初め式三番座附引

合有て大切天下茶屋の場にて座中殘らず風流大おど

り見物人の場のうへに大きな團を釣りてあをぐ仕

かけなど其餘年毎に珍らしき趣向あり又寛保三年亥

年かほみせ大西芝居中村十藏座三外題を初る

工藤祐經大磯通、夫形葛葉故郷通、伊達與作龜山通、
寶曆十三年未十一月一日より翌申年顔見世中の芝居
三枅大五郎座

嵐 七五郎 嵐 三五郎 坂東岩五郎

嵐 小六 三枅貫藏 染川此兵衛

中村吉右衛門 三枅大五郎 山下金作

中村富之助 嵐 雛助 桐の谷秀松

中村糸太郎

右の一座顔見世狂言に淨瑠璃もの源平時代を取合三
場とすいづれも諸見物よく知れる當り狂言

上の巻

冬籠紅梅鞭

中の巻

艶源平躑躅

下の巻

嫩騎千本櫻

明和二年酉の十一月朔日より翌戌年顔見世中の芝居
三枅大五郎中村歌右衛門合座元にて狂言は六番續初
日後日と一夜替りに勤めし事あり
三枅大五郎一座

坂東三八 嵐 三五郎 嵐 藤十郎
中村十藏 中村團藏 山下新五郎
坂東岩五郎 桐島儀左衛門 三枅大五郎
姉川大吉 中村千藏 市川萬九郎
三枅長太郎 山下福太郎 生島金作
三條浪江 嵐 雛助

中村歌右衛門一座

中村吉右衛門 嵐 吉三郎 嵐 七五郎

市の川彦四郎 三枅貫藏 山下次郎三

染川此兵衛 坂東豊三郎 中村歌右衛門

山下金作 桐の谷秀松 坂東豊吉

嵐 松之丞 中村玉柏 嵐 三勝

嵐 小六

鶴の丸の軍勢は伊豆源氏の
出陣 大座附 瀬賑 凱歌
祇園守の弓勢は鞍馬源氏の
門出

西十二月五日より中村歌右衛門一座の役者は北の新
地中村龜菊座へ引こし同十二月一日より三枅大五郎
一座ばかりにて初鑑源氏譜といふ狂言を勤む寶曆七
年丑の十一月二十日より翌寅とし顔見世を竹田石井

龜谷三座の子供役者打寄角の芝居にて興行す座元嵐
桑松竹田座

竹田徳次郎 同 太吉 同 金才

同 元市 同 槌松 同 米松

同 門吉 同 鳴五郎 同 伊勢松

竹田與市

竹田嘉吉 玉川大次郎 中村吉次

中村繁藏 花桓豊松 市川萬五郎

大和川金道 中村松右衛門

石井座

竹田吉三郎 同 岩松 同 万徳

同 百松 嵐 七藏 同 元二

同 春藏 同 小三郎 同 徳松

石場音松

姉川みな二 同 外山 阪東菊松

嵐 豊松 市川源三郎 桐の谷山吾

姉川ときわ 萩野千藏

龜谷座

柏井森藏 中村國藏 阪東喜藏

龜谷喜吉 十木菊松 龜谷次郎吉

同 松八 同 梅八 同 彌大郎

同 竹八

山下龜松 十木市松 玉川富瀧

市村さの八 嵐 辨之助 淺尾十次郎

龜谷鶴八 嵐 國市

竹田座狂言

鬼一法眼三略卷

二の切

假名手本忠臣藏

四つ目

大塔宮 蟻 鎧

四の切

龜谷座

御所櫻堀川夜討

四の切

戀女房染分手綱

勘 當

源平布引瀧

二の切

其後ちうかぶき役者にて又候や寅の年顔見世興行に
及ぶ其一座は

おはつ

徳兵衛 浮名曾根崎

ふどや橋のだん

柏井森藏 花桐喜太郎 中村國藏
大和川元藏 淺尾爲十郎 中村次郎藏
澤村竹八 嵐 七五郎 十木升藏
中村松兵衛 山下龜松

顔見世狂言

翁艸五色英

夫より二の替り雙手綱浪華濱荻五月替り加賀國篠原合戦七月替り琵琶湖王代文集大切都風流大おどり相勤顔見世より打續き興行せし處竹田石井龜谷三座の子供役者追々成人に付十五歳以下より相成不申様此一件元祖中山新九郎頭取にて度々奉願上指留に相成候春顔見世の初りは天明四年辰の正月角の芝居藤川菊松座におゐて市川團藏市川友藏大谷廣右衛門江戸登り延著に及び夫ゆへ顔見世を正月に勤む

蓬萊山御慶顔見世

天明八年申の十月十九日より北の新地芝居にて歌舞妓役者あやつりと一座にて顔見世を勤む

座元坂東岩吉

人形 吉田文吾 同 吉田文藏
同 吉田三吉 同 吉田清七

淨瑠璃 竹本岩太夫 同 竹本美和太夫

淨瑠璃 竹本岡太夫

人形 豐松定藏 同 吉田新吾

同 吉田岩五郎 人形 吉田文三郎

立役 關三十郎 敵役 坂東岩右衛門

立役 中村京十郎 若女形 三掛徳次郎

同 市山太次郎 同 淺尾富三郎

若女形 山下金作 敵役 山村友右衛門

立役 坂東岩五郎 實惡 山村儀右衛門

難有神徼烏帽二折

顔見世狂言

四季人情の差別冬は人氣陰に落入寒氣にとむられ他出を好まぬゆへ新參の役者を抱て顔見世といふ儀式をなし表に花麗を飾り大桃燈炭薪の積物にて人氣を動かせ陽氣を專一として狂言も理屈めかすさらくとなし立ものゝ役者を異形なる化物につかひ又は其頃の流行もの風説事或は樂家の縁儀を祝しおかしみを趣向の種とし見物の肩のつかへぬやうにざわつきたる方をよしとし上の巻はお定りの三番叟座附手打三社にて見物少し勞るゝゆへ狂言はおかしみを第一

として腹をよぢらせさへすれば見所すくなく狂言く

さき事はなくとも濟たり化物變化を其場の頭となし

人間を次へ廻すたとへば海中に住む狸々が上使に來

り女房の人魚が跡追ふて來ての濡事人魚の油を敵役

に吞せば後室や親仁が俄に子供と成るといふやうな

嘘を趣向とし中の卷は見物役者を見る心に成ゆへ

たい役者に曲のある業をさせ下の卷は夜更て人氣勞

れる時分なれば鳴物の笛鼓賑はしき合方にて眠りを

覺させ狂言もさら／＼とたゞ景様を第一としおかし

みに理屈を附く女がた立役の心得て有る事也顔見世

狂言はねち合事あしく段取は引上げ／＼およぐやう

にすべし少しにても下に置ば狂言めいりて見物寝む

たく成もの也顔見世は座並によるといへども京下り

江戸登りなどの新參の役者に分に過たる役を附け古

參は立者にて新參の方へ譲りて役をするが大法也

上の卷は古參の若手陽氣なる立者の場とし中の卷は

古參の立者女役のふけ役など登り役者か花がたの新

參あらば座頭此場に出る下の卷は下り役者花がたの

新參色女形などの場也もし新參に立者なく中役者の

新參なれど座頭出て新參の役者を助けて目出度と歌

幕にて打出す

戯子乗込

梅幸集に云尾上菊五郎安永三年大阪へは三十二年ぶ

り十月二十六日の乗込の勢ひ花々しく川船のかざり

も艀おびたしく牽頭並に所の若手／＼も別舟にて

出迎ひに迎ひ出る船は前以て云ひ合せ船幕の染立て

艀には吹貫幟など飭り立てはやし物して賑ひしに船

陸とも人群集いふもさら也此後大阪乗込の迎ひ船は

凡此幕幟なども用ひて是を賑ひの例の始ともなりし

程の事ぞかし兎角此仕合男ともいひ立やぐら太鼓の

勢ひも高々とひらきて三番も鳴やならず待兼山の人

群て大木戸のエイトウ／＼略下近來文化十二亥年霜月

七日江戸表より登り役者中村歌右衛門市川市藏改名

蝦十郎藤川友市市川門之助乗込の賑ひ是又前代未聞

の大群集せし事は諸人よく知れり乗込の夜舞臺にて

太夫元と一座の役者盃あり又樂屋大部屋と云ふ所に

於て堂島大連中判中大判形りとして盃事の儀式あり

極り番附

顔見世役者極り番附は芝居の表飭り八枚の表附に同

じ往古の座組といへるは立者の立役一人中位の實事

仕の立役一人やつしがた一人やつしの替りにも遣ふべき若立役一人實惡一人中老の敵役一人若き敵役一人立ものゝ女形一人けいせいに遣ふ若き女形一人上手の道外一人若き道外一人親仁方一人花車形一人上手の若衆がた一人又若衆がた一人斯の通りの座組にて興行するにもし一座の内に不快の者出来ても一座にて格別をとらぬ代り役の勤まる様を第一と心がけ置し也然るに享保以後元文の頃より故實を失ひ近頃にては一向餘風もなくよき役なれば道外方を立役より勤め親仁がた花車形は敵役より勤め若衆方は女形より勤めるへ往古の座組はなくても事濟やうに成來れり中興より表八枚とて立役八人女がた四人と定め今に八枚の役者といひ四枚の女形に入しと出世を悦べり此外に中通り八人これは八枚の役者に病氣ある時の代り仕也誰が代りは誰々と年中極り有て初日出ぬ先より其の後々の狂言を覺置事也此内に親仁方花車形道外方の三人は別也今は女形より花車形に廻り敵役より親仁方を兼色事仕より道外方を廻るなど混雜して右三人の別ものなし中女形は何人とも定りなし皆制外と名附け女形の代り又は娘がた丹前の若衆

方を勤めしにて四枚の女形に出世する事也部家は小詰といひて十二人あるもの也

立役 花がた

立役 色事仕

立役 つまし

立役 中軸

敵役

實敵

實惡

立役 座頭

若女形 四 若女形 二

若女形 三 若女形 一

近來は役者多く相成八枚の立役は十枚十二まいにも成り四枚の女形は六枚八枚にも成て制外も女形と混雜なし立役も中通りと八枚との間に役附の中通りといふものは出来たり

立役 花方役がらに構はず

立役 色立役又は色事仕

立役 見合

立役

小サマつまし爰を四枚目のくゝりと云

立役

實惡

此間を中軸といふ座頭も居はる事あり

立役

時によつて甲乙あり

實敵

おくれし方年功の者か若過ぎたるか

敵役

見合

實敵

實敵の本座

實惡

定りの役者を置

立役

座頭中に居ても別座の者すはる

時に寄り二枚目に
成女形を爰に置は
兩方を細く書也

二枚目色女がた若
手の所けいせい事
は二枚目の役也

若女形

五

若女形

若女形

若女形

六

若女形

若女形

若女形

四

女形の座頭の所なれば下の女がた同
様に若過たる時は中々太く書て兩脇
を少し細く書く大ていふけ女形の座
也

右の座ならび表看板を表附といふは角紙に大關關脇

小結前頭の順を兵附(ヒヤウブツ)(ツハモ)といふに准て芝居にて

も表附と呼ぶにや一説其昔は今の如く八枚看板は無

之狂言の役割を書記して木戸口に張り見物の評判を
乞しゆへ評附といふとも顔見世極り番附當時にて
は京大阪は趣き同じ江戸番附の
事典に著す立役といふは全體女形
の外は實事仕てき役道外まで一統の號なれども自然
と其頭に立ゆへ實事仕の事のみに成たり其中にも色
事仕荒事仕和實など、分れ大阪にてやつし役と呼ぶ
もの江戸にて濡事仕といふ江戸のやつしとは勤る所
の役は貴賤老若の隔なく様々に打扮もの當代兼とい
ふ字を冠しむ中村歌右衛門などをやつしといふべき
歟荒事は元祖市川團十郎より初りたり立役の長たる
さばき役は役者の甲乙に因といへども先づ大切に
實惡を取て押へ萬事家國を納めるを役とし又辛抱立
役は世話場にて匿ひ者又は何角を身に引受るを役と
し跡は見合たるべし色事仕は太序にて女形をとら
へ放埒なる體を專一といひづれの場にてても色女形を
相手に和らき事を役と見て道行景事を受取場とし
甲乙によらず目うへの女形にさへ相手になれば自然
と役柄よく見ゆる也

敵役元は惡人がたといへり元祿の中頃より敵役と書
ててき役と呼しがいつの程よりか敵役と定まり實惡

といふは染川十郎兵衛其事實事仕にて初て山椒太夫の三郎の役を勤しより實惡の號起れり其後篠塚治郎左衛門といふ名人敵役より立役實事仕のためを指て一座の助けと成しより此仕内を飲込みしは山中平九郎早川傳五郎藤川武左衛門片岡仁左衛門などしつとりとなし笑はせて當りを取事なきは實惡といふ所へ魂を居たる故也昔の敵役は惡にのみ心をそめて仕打も憎てい也當世は兎角上手だてをして當たがり敵役と實役の仕打に差別見へず狂言は敵の役なれどもわざと實事仕のやうなる事多し昔の敵役にも惡人方といふものと倭人方といふ仕分けあり惡人方といふは見懸よりおそろしく作りなし惡を顯はしてするをいふ倭人方といふはぬつべりとして能き人のやうに見せ底心に惡工みある仕様也此倭人の仕打今いふ實惡と成れり又本心は實儀あれどもわざと惡と見せて狂言の詰りに實を顯はすは實惡には非ず實方が狂言の迫りにて斯の如し是を實惡と心得たるは非也死際に惡念發起して實心に成て死するは敵役が善心にひるがへすといふ迄にて是も實惡の號には叶ひ難し色惡は江戸にて水木竹十郎といふものもと女形にて後

に立役と成り又享保五子とし市村座にて色惡といふ事を初たりおどけ敵といふは三代目大谷廣右衛門はなつたらしと異名取りたる役者より初まり安永の末江戸より中島三津右衛門大阪へ登り中の芝居にて大惡と記させし事あれ其前にもいふ如く當時の敵役は惡に手薄きゆへ大惡などいふ事稀也其外戲臺の通言に世話敵手代敵伯父敵平敵といふ事あり公家惡といふもの山中平九郎を祖とす

東武の柳樽に公家惡は一段高く無理をいふ伯父敵をエンデン敵といふは燕手とてつばめのはねをひろげたる如きかつらをきるゆへ也燕手をよこ訛りてエンデンと呼びならはせり

實惡の役者甲乙に寄といへども大方大序二つ目中入といふ役場とし實敵は伯父敵が本役にて二つ目あたりにて亡び後々は外役にて出る實惡は切迄の通り役也敵役は定りなし道外を兼たる者は小幕をば役場と見るべし道外古書には道化道戲とも書たり往古女かぶきの時は道外といふもの舞の間におどけ事をなして見物を笑はせしより始まり其後物眞似狂言盡の續き狂言に成りては猶々見物の退屈すべき理屈めきたる仕組

の中へ出て笑はしたる事ゆへ狂言の筋へ道外を取込
んで高給の者を抱たる事也夫ゆへ道外一通りを修行
して名人上手と呼れしも多し又半道とて實事仕の内

より人を笑はする仕内ありしが今は色事仕の常が半
道のやうに成り誠の道外は有ても無てもものやうに成

ぬ當時も江戸三座にも昔の通り道外を急度立て笑ひ
を催さす事古風に叶へり或書に齋藤道三が従者に道

家某といふ者半額の異舛也道外の名これより起れり
といへり淨瑠璃あやつり芝居にても正徳の頃迄は五

段の淨瑠璃短きゆへ間の物にのろま人形といふ道外
或はからくりなど有しが正徳五年竹本義太夫座にて

國性爺合戦の時より此事なく其後豊竹座にも止みた
りのろま人形といふは能の間語りの如くなる物ゆへ能の眞
似人形といひしをノロマ人形と略せしにや我もしらす扱又

おどけたる場をチャリ場といふ事享保二十一年三月
豊竹座にて和田合戦四の口河内太夫の場にて鶴ヶ岡

の別當阿闍梨手負の眞似して追人を欺く其文節配り
おかしく大當りせしより阿闍梨場と稱し其後阿

の字を略してシャリ場といひしがいつしかチャ
リ場と轉じかぶきにては敵役の小暮チャリ場とす

女形の初めは承應元年江戸市村座へ上方より右近源

左衛門といふ役者下りて練組の浴衣をかぶり女形と
いふ事を初め其後万之助といふ若衆勝れて女に似た
りとして其頃堺の平井卜養の狂歌に

女かと思れば男の万之助

ふたなり平のこれも面影

たそがれの日記に糸縷權三郎女形の始り也とあり名
古屋山左衛門の糸捻の所作を傳へたる者かかぶき物

眞似名代の中に糸縷權三郎といふ者見へたり女形を
太夫と號する事は往古女かぶきの故實を失はざる也

江戸三座にては櫓下に立女形の名を記し是を櫓三枚
の女形と稱し大阪にては女形を櫓の左右に揚てこれ

を四天と呼ぶあやめ草に曰四十過ても若女形といふ
名ありたい女形とばかりもいふべきを若といふ字の

備はりたるにて花やかなる心の失ざるやうにすべし
わづかなる事ながら此若といふ一字女形の大事の文

字と心得べしと教ぬ女形の習ひは先づ手の突やうに
も十九通り有といふ傾城事家老の妻町人の女房娘そ

の役々に寄り仕打は勿論萬事心得有べし手の突やう
だに心懸ずは況や仕打の差別有べきや色女形は大舛

色事仕に同じ併し富十郎糸太郎などの大立者にては

振袖を著る女形には口傳あり女形の受取場といふ極
 りはなくけいせいと外題を出し役者の甲乙に依て女
 形を狂言の筋につかふゆへいづれが役場とも定め難
 しいか程の立者にてても女形は男に随ふと云女の情に
 よるゆへ我意を出さぬ定法にて立役によつて附迫れ
 り譬ば前文七に一鳳あやめ、前の三五郎に國太郎、二
 代目文七にいろは、皆立役の役がらより女形の役も
 附て出る女房は男の善惡に随ふ道理也然れども女形
 にて一座の魁首と成たるは古今に芳澤あやめ中村富
 十郎兩人にて評書にも三箇津總藝頭といふ位を冠ら
 しむ丹前の名目嵐三右衛門若衆方といふは半立役にし
 て敵役をきめお姫様をかばふ類ひ千本櫻の小金吾な
 どの役がらを勤しゆへ大かた立役へ拔たり近世の若

大和屋甚兵衛役者附

ねのとしがほみせ

衆方は武門の小姓立には仕立すべたつくやうに成て
 大方女形と成れり今の角鬘といふ名目を附る半立役
 は其昔の若衆方に近し
 子役といふ事は元祿十年市川柏蘊十歳の時九歳とて
 初めて堺町中村座へ出しより初む其以前は若衆形よ
 り勤し也右あらましの名目は當時表附に顯はし又は
 極り番附に記せるのみにて此餘花車がた親仁等の名
 は其勤る趣にて別に仔細なし顔見世役者附今古の
 けちめを知らしめんが爲左に著す番附は貞享元子
 年の顔見世なるゆへ天和三年の暮の役者附にて噺
 子方狂言つくり及び六十五人と記せしも古雅に覺
 ぬ

大和屋甚兵衛は大阪にて嵐岩井に續き年久しき名

同	わが女がた	立役	同	立やく
一松	本三四郎	一藤	田小平次	一齋
同		同		藤義兵衛
一大	夫市彌	同	下山半左衛門	一山
		同		本源十郎
		同		一富川
		同		岩右衛門
		同		一長
		同		松里兵衛

同藤田鶴松
同桐山三之丞
同岩井小源次
同吉川勘彌
同高濱勘三郎

同一座本甚兵衛
同岩倉萬右衛門
同阪田銀右衛門
一惡人がた服部二郎右衛門

同岡本左五衛門
同一村山勘七郎
同袖川辰右衛門
同いづみ三左衛門
同むめづ小右衛門
一同おの山宇次衛門

同長島庄左衛門
一しやみせん田宮八郎左衛門
一同太左衛門
一同二郎兵衛
一小つづみ源七
一同源左衛門
一同大つづみ次左衛門

太夫

上村辰彌
上村吉彌

袖

嶋

市

彌

一わか衆がた上村數馬
一同竹中半三郎
一同上村千之介
一同荒川左近
一同入江花之丞
一同山下いつれ
一同山上下いつれ
一同尾上源太郎

一牛だう一齋藤新八
一同田坂戸平
一おやかた一川上三郎左衛門
一同竹本庄左衛門
一同一小舞六郎兵衛
一同最上藤八
一同南部兵六

立やく一西森右衛門
一同大澤園七
一同柳原平右衛門
一同小林小左衛門
一かしきた一小勘太郎次
一同原田傳助
一同松井勘四郎
一同松永宇兵衛
一子やく和屋牛松
一きやうげんつくり一富永平兵衛

一かつみ九郎兵衛
一同喜右衛門
一同ふへ新介
一同六左衛門
一同たいこ大介
一同仁兵衛
一地うたひ茂右衛門
一同左兵衛
一同五郎兵衛
一同市兵衛
合六十五人

代にて其子藤吉は京都にて座元を勤め後の甚兵衛左のみ上手とも呼ばれざりしが三代目甚兵衛は水木辰之助水木辰之助寛延元年顔見世大阪中の芝居にて大和屋甚兵衛と改名弟子水木染之助より出て水木竹之助とて若女がた京にて座元なりしが辰之助と改め其後立役と成大阪にて大和屋甚兵衛と改めたり前の甚兵衛に由縁有ゆへの事にや

座本の
紋
座本
来る霜月吉日より何の年顔見世極り役者附

子役
丹前
角鬘
若衆方

八枚の
表附

長うたつみうた		部屋		小話の事	
はやし		十二人		極り	
かた		ふり附		口上	
後見		紋附の由通り			

此所へ	太夫な	書事も	あり
若女がた	若女がた	若女がた	若女がた

中通り	花車親仁方
上るり太夫三味せん	狂言方
立作者	頭取

千秋萬歳樂叶吉祥日 角の芝居 内茶屋

扱又狂言作りを極り番附に載る事延寶八申の年暮の顔見世役者附に富永平兵衛きやうげんつくりと出せしが權輿にて近世は番附の居所その甲乙むづかしく成たり

狂言方といふは作者に非ず狂言に附事諸事を支配する役也然れ共番附にはやはり狂言作者と記す

狂言作者——二枚目作者

同——狂言方 二

同——同 四

狂言作者——三枚目作者

同——同 三

同——同 一

狂言作者——立作者

「右中

——狂言作者

狂言作者

——狂言作者——立作者

「左吉

兩方二枚目三枚目の差別なき同様の時は如斯書く併ながら左の方少しよろし

「狂言方にて少々狂言も書る人

狂言作者

狂言作者

狂言作者

狂言作者

狂言作者——立作者——狂言作者

「二枚目なしに三枚目の居所

狂言作者——狂言作者——二枚目

狂言作者——狂言方

狂言作者——同

狂言作者——立作者

「客座にて跡よりスケに入れば爰に置く

是は何れも京大阪の式法にて江戸三座は番附の書法違ふゆへ左に記す

寶曆六年子の顔見世中の芝居坂東豊三郎座極り役者附江戸番附に仕初め近世専らこれを用ゆ

女形立役作者等場所不定箱の廣きと狭きとにて甲乙を分ち座頭の所計り立役に定まり女形槽下は別也總面は鱗形の内へ少しにても多く出たるをよしとす建もの、繪は手に寶物の類ひを持つ書法に故實ある事も也

別產

女々

作高
浮るり

恒志齋

作爲
既而
乃夫
之元

1

女

三

別座
客座

座頭ヲキ

中村座

此所な下
駒箱と云
也
仔細有所

○女四○立四○八○十二○十六

上下見合同位

いとくさく

う段を本座と

し上の段劣り

た
る
か

役者の甲乙にて見るべし左もなくば通例の順並びにて上下見合にするもあり上の段を細字にて下の段太字に書もあり別座客座の有は臨時の事にて又年かさの者若手の花がたへ座を譲る事もありて一決なしがたし

今古
參考 南水漫遊續編

四の卷

一 小夜嵐

並 丹前六法

同唱歌

嵐氏叶の紋

嵐三右衛門木戸札

一 市川柏蔭登阪

並 顔見世極り附

鳴神狂言根本

一 最負

並 手打連

讃言

今古參考南水漫遊續編四の卷

颯々亭南水主人著

小夜嵐

小夜嵐とは狂言の外題にて元祖三右衛門家の藝とす
大阪の昔は嵐三右衛門岩井半四郎兩座を常太夫元と
して片岡仁左衛門大和屋甚兵衛も久敷座元なりしか
共嵐岩井の如くは續かず岩井半四郎大阪根生の役者なり共
當時にては江戸役者とのみ心得し
人多其頃は他國の人大阪へ來りても嵐三右衛門芝居
と天王寺の塔を見ねば歸國して土産に成らざりしと
ぞ或書に嵐三右衛門芝居往古の鹽町難
波藥師の邊にて興行せし事ありとぞ元祖嵐三右衛門とい
ふは攝州西宮にて西崎新平とて屹度したる浪人の子
其父江戸へ下り魚問屋をして其子を三右衛門といへ
り元來有德者にして生質芝居を好み役者交りより終
に太夫元と成り西崎三右衛門といへり其弟も役者を
好み是を勘右衛門といひ嵐勘四郎父なり三右衛門一
年小夜嵐といふ狂言をして大當りせしより其後町を
通れば小夜嵐が通る嵐々と呼しより嵐三右衛門と改

名なし其子孫大阪三代の座元いづれも上手と呼ばれ
大阪根生の名物となれり當代かぶき役者に嵐苗氏を
名乗るものみな三右衛門勘右衛門兩家より分れざる
はなし三右衛門一流を仕出せし丹前六法といふもの
よしや嵐ともいひて江戸三茶通ひの風俗をうつした
るを起原とし江戸にては丹前といひ京にて六法大阪
にて出端ともだんじり共いひて高股立を取て振出せ
り承應明暦の頃は東都の祭禮ねり物にも此風俗をう
つし長き白柄大小卷羽織深編笠の打扮これを多門庄
左衛門初めて勤め續て村山四郎次元祖中村七三郎こ
れに工夫の振りを付て立髪丹前とて今に傳へて中村
一家の藝とし口傳あるよし中村傳九郎奴丹前芝垣丹
前といふ事を初め市村何江が狸々丹前てくない丹前
其外さゝや九兵衛鎌倉團右衛門など六法を振りしは
剃さげかづらほう髭の田夫野人の姿にて舞臺中をう
なり歩行しが元祖嵐三右衛門衣裳立派に著なし袴股
立長羽織立髪かづらにて笛つゝみ大鼓三味線に合し
風流に品を附て勤しより六法の龜鑑とす丹前の出端
の唱歌則嵐三右衛門が勤たる藤内だんじりの出端

二上り
藤内次郎殿わいの笛ふきのや役で紫竹漢竹のや

つこのほこりをさつ／＼ともはろふてのとうらいの／＼笛人の物はとらいの我が物はやらいのと合ふいたるはさつてもふいた笛ふきとどつとほめてとをしただんじり打てはやしただんじりうつたみさいな藤内三郎殿は小つゝみの名人であろふのどふにかゝがわくれくれないのしらべをちんどりかけにかけさせち／＼つちちふつほ／＼たつほ／＼たつた／＼／＼合うつたるはさつてもうつた小鼓とワツと響て通しただんじりうつたみさいなだんじりうつた見さいな藤内四郎殿はいの大鼓の役でしつたんにしつたん／＼／＼しつたんつゝなおん百姓明年は八たんじや三明年は十六たん／＼丹波の國の御百姓と合打たるはびやくらい上の町下の町ドツと響て通した藤内五郎殿はい大鼓打の役で大まいの太鼓をあそこらもとにおかせてきんのばちを手にもちつ／＼／＼つてん／＼てれつ／＼にはづんでんどんてれつ／＼つてん／＼とんからつとんとうつぼれたなるかならぬか戀の中の町なかの／＼中の町を通り給ふはなけれどなまだ

こつかんだあたミを見たかくまの小びぐにんが
ちとくわん／＼／＼／＼／＼くわんともなるは夜明
のかねはつん／＼つらいかづんでんとふから櫓
太鼓の音によりくる

此唱歌に合せたも六法の振りを諸見物よろこびしが
當世にてはさばかりの名人なきや又世上の人氣に應
ぜざるにや只所作の内に六法のふりを用ゆるのみに
して丹前の名目は若衆方か子役に冠らしめ極り番附
と殘れり

嵐の家の紋に角に小の字を附たるは小夜嵐の小の字
を用ひしなるべし好古家永田其道嵐座の木戸札を藏
す其頃はるかぶき芝居にも木戸札を嚴重に用ひたり
しが今は通り札の紙札を買ふ人も稀に成れり

(木戸札二枚圖略之)

因に云、元祖嵐小六やんごとなき御方尾州侯
なるよしより鍬
細工にて叶といふ字を彫りて給はりしより叶の丸を
紋に附たりしがお女がたの紋には強かりしゆへ◎
かくの如く三つ廻せり然共寶曆十四年より又もとの
角に小の字に戻りたるよし眠獅撰に見へたり近世に
ては嵐家又叶の丸を用ゆ

市川柏莖登阪

寛保元年酉十一月朔日より翌戊の年顔見世道頓堀戎橋角大西芝居佐渡島長五郎座へ江戸市川海老藏同團十郎罷上り顔見世目見へ狂言を勤む柏莖上阪の儀に附一條の奇話あり佐渡島長五郎江戸在住の時市川海老藏いふやう其許大阪へ歸られ太夫元を致さるゝならばいつにても登るべしといひける事有しゆへ一年大阪表道頓堀にて座元の時柏莖を相談に書狀下せし時返狀に給金二千兩にて手附金五百兩被下べしと申來る歌舞妓芝居初りて以來給金二千兩取たる役者聞も不及稀なる事を申越たりと甚面白く手附金五百兩調達して差下したりあの方にもよもやと思ひ居たりしにや大阪へ參りて其うつり挨拶有しに長五郎答に二千兩の給金取らるゝ役者古今になしそれを押出して申越るゝゆへ定めて夫程に格別の事有べしと存也と申けり扱々物數寄也と思ふのみ顔見世はうゐらう賣のせりふ先珍らしく大入にて二の替り曾我を出せし處散々不當りにて子息團十郎病氣を幸ひ十日餘りにて増休み扱三の替りの相談何をがなと樂屋表とも彼は申合けれ共思案に落す時に柏莖申候は此次は鳴

神を出さんといふ鳴神なれば狂言案じるにも不及とて古き狂言を序へ繼合せて綴り四番目にて鳴神上人を奴傳内役の山本京四郎が殺すといふ仕組にて詰に鳴神の亡靈雲の絶間に附したひがいこつの所作を思ひ附しに柏莖は生得狂言に切殺さるゝ事を忘みて勤す夫ゆへ四番目のがいこつの所影法師にて長五郎勤べしといふに付きさあらば殺さるべしと相談極り稽古いひ合濟て初日出せし處に糸寺禪正といふ侍と成り使者に來りての仕打通誠の武士と見へ外に此眞似するなしと大阪中の評判にて扱々上手也と感じさせ四番目は二役鳴神上人の段家の藝なれば手に入たる仕打鳴神の聞き近國は不及申遠國よりもいざ海老藏の鳴神見物せんと態々大阪へ來る人數おびたくし押も分られぬ大入にて京都の好人も大阪へ下りて見物したる人多し然其終に京都へ出勤なく是のみ残念也海老藏は不思議なる生質にて顔にさまゝの藝ありいづれ妙の字は通れ難ししかし歌舞妓狂言に殺さるゝ役を嫌ふもいか成事にやこれらも奇とすべし浪華の好古家其時の根本を藏す予借得て傳寫せり

来る雲月朔日より

戌のとし

座本 佐渡島長

五郎

かほみせ極り役者つけ

内ちや屋

若女がた 渡島幾世
一佐 渡島幾世
同 出下 吉 綱
同 勝山 清 太 郎
同 袖岡 笹 尾
同 竹島 善 七 郎
同 桐谷 房 次 郎
同 三保 木 常 六
同 山 下 鶴 松
同 花 桐 豐 松
若女形 井 花 千 世

立役江戸市川海老藏
立役江戸市川老藏
立役江戸市川十郎
立役江戸東豊三郎
敵役坂村次郎
一山中 村次郎
一山 中平十郎
一嵐 七 五
立役一山 本 京 四 郎
立役一佐 渡島長五郎

立役一中 山四郎五郎
同 一富岡 金 藏
同 一三條 幸 助
同 一大谷 彦 四 郎
同 一澤村 民 五 郎
同 一花 桐 伊 助
同 一成川 十 五 郎
同 一藤川 佐 四 郎
一藤川 善 藏
小うた 川 不 四 郎
同 一花 谷 又 七 郎
小うた 川 甚 九 郎
一四 川 六 三 郎
三みせん 岡 六 三 郎
同 一龍岡 六 三 郎
一松本 清 七
さみせん 井 平 七
小つみ 川 佐 七
同 一市 川 佐 七
同 一花 桐 嘉 七
小つみ 中 平 吉

若女形 京大

和川明石

若女形 尾上

菊五郎

太夫 佐渡島幾世

若女形 柴崎

民之助

若女形 山下

金作

ろなし所詮天下國土に雨ふらさじと祈り民を苦しめば御心をだやかならずこりさせ給ひなば吾願望なりぬべしといなかうどの一圖に思ひさだめ猶山ふかくわけのぼり壇上をかまへあかの水香花のたすけに一老黒雲坊白雲坊二人ばかりめしつれ一心不亂にいのりすまいて世界にあらゆる龍神龍女を壇上の弓手の瀧つぼに祕封しをさめぬれば四海大きにかんばつして春花咲ず秋實のらず草木こがれて鳥はぬぐらなく水かれて魚は陸にふためき民のなげきいふべからず帝大きになげかせ給ひ色々となぐさめ給へど上人のいかりいとつよくいまはせんかたなし此うへはとて諸卿をあつめ色々となげき給ひぬれど戒壇をゆるさるゝの外は上人の心をやはらぐる事なしと各々一とうに勅もん有時に文屋の豊秀卿の申さるゝには臣ひとつのかしこきはかり事あり女房の内にみめよくかたちうるはしき女をつかはし酒と色とをもつて心をとらかさば破戒せん事やすかるべしいかんと思ふにかの上人いまだ十二因のかけたる事あればこそいかる心あれ然らば肉身の上人などおちざらんとしたまへば

此儀もつともしかるべしさてたれか上臈をつかはしてんとりふゝさたし給ふ天那がすめ雲の絶間こそ當時すぐれたる女なれちゑさとかほよく詩歌はづかしからずこれにきはむべしと父にしかしが勅誼あれば天下への忠義民の爲とひめにもみことのりのおもむきなくゝのたまひやがて此山へのぼるよういぞ有ける

雷神不動北山櫻四段目

雲の絶間

一老

白雲

同

雷神上人

尾上菊五郎

佐渡島長五郎

市川助五郎

大勢

市川海老藏

道具建

本舞臺一面に岩山と成正面に高き五尺の壇上

なだれ七八尺の土手山上方上に四本柱七五三

引うしろ山見す松かゝり嶮岨なる岩組大瀧あり

瀧の本に大竹二本しめふと繩にて蛇形のしめ也

め也

幕上ると一老白雲坊玉だすきにてはな道より

聞たか聞たぞゝ聞たか聞たぞといひながら

出ぶたい先へ立やむ 初幕あけ

一らう聞いたかく

白うん聞いたぞく

一らう何を聞たぞ

白本堂のうしろで鶯を聞た

一らう たはけもの其やうな事ではない師の坊なる神

上人の此度の行法のわけを聞たかといふ事じや云

々ツリヤ師匠どのがござつた トおどろく

一セイ有り鼓笛

上るり 去ほどに鳴神上人君をうらみ奉り龍神龍女

の飛行をふうじ國土の雨をとちこもる此北山の

山ふかく露なめらかの岩づたひ壇上さしてのぼ

りける

上人だん上に打のぼりいかれる顔色柄香爐のけ

ぶりと共に立のぼる下には兩僧おそれをなし右

と左にすわりゐる鳴神上人太音上げ

海老 磐石垂羅只是家いにしへより雲井市朝 異本雲林市朝とあり

にとをざかる

世間に公道たるは唯白髪くろき筋なき瀧のいと岩

にくだかる水聲風聲清淨觀のゆかの上に感應のま

なじりをたれ大願成就なさしめ給へ南無大聖不動
明王く(咒あれど其はこゝにもらす)

此段にて上るりになり雲のたへ間はな道より

出る着ながしひつしごき片袖ぬぎかけ手に撞

木をもち首にしやうこをかけ花道幕の内にて

鳴らし念佛あり肩に衣かけ

上るり いたはしやたへま姫國土の爲夫の爲供人ひ

とりあらばこそさもおそろしき深山路のすそは

いばらにとぢられてあゆみかねつゝ行なやみや

うくとして北山の瀧のもとにぞ着にける

此間兩僧いねぶり居る

海老 鳥不啼山さらにかすかにて人跡まれなる深山に

遙か瀧つぽのもとにて女のこゑして念佛のこゑの

きこへるはハテあやしやな

ト下をみれば兩僧たわいなく寝むり居る

是一らうこれ白雲黒雲坊く兩僧だじやく千萬

と中けいにて壇上をたへけば兩人きもをつぶし

ハツとおどろき目をさまし

兩僧 イエもつたないねぶりは致しませぬ

あれほどねぶつたじやないか

わたしはねぶりはいたしませぬ云々あんまりたはぶれがあまつてナついくせつになつたわいな

△あつさわするりやかげわするゝじやの

△エ、づんとおかしやんせ

おくまいがなんとした

つめるぞへたゝくぞへ

たゝいて見や

たゝかいでか

と殿子のつぶりをびつしやり

一老白雲坊があたまをたゝく白雲いたがりさ

する思ひ入有

一老よいはかんにんせいゝゝゝ

△そのいひ上りがこうじておもしろないわしやも

ういぬる

イヤいなす事はならぬ

イヤいなにやおかぬとつゝと立ていのふとしたれ

ばわしがたもとをじつとひかへてそりやあんまり

むごいぞやといふてまた古歌を吟じさんしたその

歌は

○あすはまたたがなからんもしらぬ世に

二人あすはまたたがなからんも知らぬ世に

○あれ又下の句をわすれた○ア、なんとやらいふた

か明日はまたたがなからんもしらぬ世に

上人ともあるけふの日こそおしけれといふてとめた

であるの

ほんにそれゝゝそういふてとめさしやんしたわい

な

上人してゝゝどうじや

ヤなんぼそういふてとめさんしたとてもいのふと

いふてはもういなにやおかぬとはしつて出よふと

したればたもとを取てイヤやる事はならぬとひか

しやんすイヤいぬるイヤやらぬいぬるやらぬいぬ

るやらぬとひかふるたもとふり切てついと

上人咄しにうつり壇上よりまつさかさまに落

きをとりうしなふ

ヤアこりや師匠がおちられたは云々

△扱は我行法をやぶらんために雲のたへまといふ官

女をもつてこゝに來りしよなあハアゝゝゝゝ

そのたへまめをと髪逆のぼりいかれるまなこは

月日の如く大地もさけとふみとゝろかし飛まは

りさがすうしろに

みな／＼あとにつきてまはる此内始終かみなりなる

やあら無念くちおしやなあ寸善尺魔のせかけみつ法を破りしよなあよしわれ破戒の上からはいきながらなるいかづちと成てかの女めを引さかんにならんじやうかたき事がある天は三十三天地はこんりんならくのそこ雨となり風となり

うたい太鼓あり

風の神のみそらの雲／＼てん

／＼なるいかづちの上人の念力かれをおつかけんに 上るりかけ合ひ

西はちんせいきかいが島

上人 南はくまのなちの瀧

北は越後のあら海まで

上人 人間の通はぬ所

千里もゆけ

上人 萬里もとべいで△おつかけゆかん

此内壇上へあがり四方をのびあがり見てあれるなげ岩も有弟子坊主もさし上げなげる

とあとをしたふて大三重

かみなり大雨はな遙へとび上り／＼かけ入同宿共みな／＼師匠様／＼と跡より入る引幕
右此狂言古今秀魁好士爲群前代未聞也夜雨庵歡喜而終自一章書畢
夜雨庵 栢 薙

寶來や龜の背中の一世帶

鳴神の狂言は元祖市川團十郎工夫にて貞享元年東都堺町中村座にて門松四天王といふ名題にて初めて勤る栢薙これを受得て猶萬國に響かせ大阪表にても古今の大當りをなせりされば此仕打を大阪豊竹座にて爲永千蝶太郎兵衛事 糸仙人吉野櫻といふ淨るりに仕組寛

保三年亥八月朔日初日栢薙大西芝居にて大當りせし三年目に出し此戲文も大當りにてその譽を残す此仕打をやつし女鳴神とて女形の藝とするは元祿年中市村座にて弘徽殿后諍といふに狂言に袖岡政之助とて名代の女形初めて勤しより瀬川路考其外名人の女がた當りを取り元祖市川團十郎本國下總國成田山新成寺の不動尊を祈りて栢薙を設ぬよつて栢薙九藏の昔より信心ふかく開運を祈りしに果して上手名人と呼れ諸人に秀し稀者と成れり成田山の尊前に奉納の神鏡今に存すとぞ故に家號も成田屋十兵衛といひ一

世の内に不動の役を數度勤めしにて大當りならずといふ事なしこれ他の役者の及ばざる處いさゝか仕打もなくして見物を悦ばす事誠に奇妙とやいはんこれひとへに明王の加護にや正身の尊像とも見まがひ眼中すがうしてひとみをすゆる事時を移す正に精といひつべし元祖團十郎は推本才磨が門に遊び俳道に心ざし深く才牛と呼び栢莚も幼年より此道を好み寶井其角の門葉と成りて才牛齋三升といひ享保のころ海老藏と成て俳號も栢莚と改む委しくは栢莚句集に著す其書の中に

大阪へはじめて上りし時難本へ申遣しける

難波津にさくや着仕る

道頓堀の賑ふけしき芝居の櫓敷をならべしは餘の國にまさりて誠に歌舞の地なりけらし

歌舞の地や爰も蕪地や天王寺

栢莚大阪出勤中狂言の外題は

萬國太平記

頗見世狂言此狂言切にて市川團十郎病氣に附江戸へ歸國す

八的勢曾我

初日不當り

雷神不動北山櫻

戊辰正月十六日より七月十六日迄古今の大入

星合榮景清

日より

土佐次郎妹脊鑑八月二十日より九月十六日

東山殿旭扇

大切景事關羽を勤むこれを大阪の名殘狂言として目出度歸國に及び後年寶曆八年寅九月二十四日死去法譽栢莚隨性

因に云、尾上菊五郎傳梅幸集といふ追善の句集の附錄に一代の狂言記あり寛保二戌年は佐渡島長五郎座にて江戸より市川海老藏登り來り同座にて鳴神の雲の絶間は就中の大評判にて其暮海老藏江戸へ歸る時ともに附添行しが江戸への初下り也略下

同四東の春隅田川に班女と雲の絶間の役ますく出かし略下安永四未年京都藤川山吾座午霜月顔見世は津

守常陸之助やつぱり和らかみを専らにしてしつかりとし武道に和事仕の衣裳ののるは此人ならでとて悦

ぶ事もかはらず爰を以て華實對して役者也と京中の悦び殊更當年此座は尾上新七尾上松助俱に登り來り

し同座各弟子にて補助心も有りしや間の物糸寺彈正使者の場から鳴神上人もよく略下安永六酉年此暮又も

江戸へ歸るとて糸寺彈正と鳴神上人を勤む

量負

贈餘雜錄に云最負其形龜に似たり好んで重きを負ふと字義は力を起し力を助てと訓りこれ則最負の文字の本源にして四民最負の力によりて身を立家を齊へ名を後世に傳ふるの本也俳優家に於ては殊更最負を願ふ享保十六年亥の十月豊竹若太夫越前少掾藤原繁泰と勅許受領して祝儀の出語蓬萊山を勤む此時祝儀として天満橋三右衛門といへる人より初めて幟一本送りしにヒイキよりと記したり同十八年丑の二月豊竹要太夫初て出勤の節豊竹座の表に進物を飭り初め同二十一年^{元文と改元}辰の二月二代目竹本義太夫上總少掾と受領の祝儀に進物を表に飭るこれ淨るり芝居最負連の權輿とするか其後寶曆九年卯の春竹本座にて日高川入相花王狂言半に當芝居より出火に及びしが其頃は東西のあやつり昌んの時にして義太夫がたの最負より材木蒔縄竹など思ひ／＼に送りしゆへ日ならず假家芝居成就して用明天皇鐘入のだん吉例として相勤む右ふし事の正本に

乍憚口上

此度當芝居焼失仕候所町中様御ひいきの御力を以て人形衣裳小道具迄つゝがなく殊に芝居ふし

んの立具等下し給はり候によつて早速假家芝居成就仕候事難有奉存候右御禮の爲且は御ひいきの厚き次第を遠國までも風聴仕度候に付假家芝居興行の圖を爰にしるし申候尙御心がはりなく打つゝきはんじやう仕候様に奉願上候以上かやうに書記して假家芝居進物の圖あり

用明天皇

鐘入のだん

此ふし事は元祖竹本筑後當芝居興行の時語り置れ候其後竹本播磨相勤候此度門人竹本政太夫人形吉田文吾相勤申候淨るり人形共に前々とは遙におとり候へ共假家芝居興行のしるし昔のまねびと思召御見物に御來駕奉希候以上

寶曆九年卯五月

因に云江南の里俗日高川の狂言を勤ればかならず舞馬の災ひ有といひ傳へて忌み嫌ひ日高川にて出火なし人丸萬歲臺にて火留るといふ併し人丸の淨るりは豊竹座第一の不當りにて漸四の口箱かぶりの端場のみ殘たり作者豊竹應律福松藤助

偕又歌舞妓芝居に最負手打連といふものあり享保五年に笹瀬連初り同二十年に大手連明和七年に藤石連

此藤石連に寛政年中に絶たり

安永四年に花王連始りこれを歌舞妓の四連中といひ例年霜月顔見世の夜は年々に新作の唱歌珍らしき一趣向ある事世人よくしりて浪華の壯觀のひとつと成たり寶曆年中いまだ笹瀬大手のみにて有しが其頃より手打といふもの専ら昌んに成りあやつり座の趣向にさへ取組たり寶曆十三年末の十二月八日初日豊竹座番場忠太紅梅籠の四の切に

跡に附添ふ以前の連中左右にならぶ染頭巾笹瀬大手の紋じるし揃への腹巻かいぐ敷義經公の味方といふ印に附た笹りんどう清和源氏の世の字をすぐに合印生田の大手の二度のかけ景季様の高名を

略下

すぐに附たる紅梅籠
古老のいふ此文中には左右に並ぶ染頭巾とありて其頃までは手打連の頭巾笹瀬大手の合紋を染込たるをかぶりしが明和の末安永の頃には一樣に着附て黒き金巾木綿に帶は白統いさゝか金糸にて霞に觀せ水の類ひの縫箔を置き染込の頭巾と詵毛羽と變じ笹瀬大手の合紋を切附たり當世より見れば甚龜服なれども諸見物これを見て華美なる事といひあへり藤石花王の連中初り四連中と成しより互ひに手打の巧拙を爭

ひ天明の頃より手打の曲に合打といふ事を初め或は琴三絃を交へ近來は種々の造り物をせり出し釣もの遠見などゝ仰山に成行その趣向に應じて繫人の着附に引糸の仕かけありて目ざましき事筆紙に述がたしかゝる浮たる一群れの中にも老年の魁首ありて笹瀬大手は享保已來九十餘年の法令を亂さず其規模とするは本舞臺の大幕棧敷の高欄幕破風の鱗水引幕など年毎に新調して角中雨芝居へ送れり里俗女夫連中と呼び都鄙の見物笹瀬大手兩引の大幕を見ざれば大阪の歌舞妓芝居とは思はぬやうに成たり其外堂島の大連中は顔見世座附引合の砌り舞臺に一座の役者名苗氏定紋を書たる水引挑燈といふものを送り難喉場連中よりは櫓の茜染幕ぶたい階懸りの切幕顔見世表飾りの大釣挑燈を送るこれ昔より今に替らぬ定例とす其餘に最負連中あれ共恒例なし京都に大笹さゝ木みなと連といふ物ありて趣き大阪に同じぶたいの大幕は故實ある事にて大幕の上に永引幕を引初しは享保二年竹本座のあやつりより起り顔見世に譽詞といふものありこれはもと役者の出端を譽る狂言の仕組を見ならひたるもの歟往古のかぶき狂言には立役にて

も女がたにてもあれ出端を譽たり若立役を女形の譽詞に

ヨウ／＼立髮姿に伊達風流股だち袴すを高く龍田の川にあらね共紅葉の顔に薄化粧淺黄羽織の紐きやしやに結び留たる戀のく／＼り目は在原の業平もあんまり餘處にはござんすまいやりたい命切たい小ゆびかはるな替らじ二世までもとははす枕に憎まれて浮世も後世も後の日も思ひの淵に身はしづむ扱も／＼見事な御器量では有わいな

又見渡しはやしに景色をつらねるせりふあり

向ふに見ましたは鞍馬山でござりますあの山へ不淨なる者参りますれば大小の天狗怒りをなし惡風魔風しきりにして俄に引裂き梢にかけ置まするまつた心ある侍は僧正坊に願を懸け是を祈る輩は異國のはんくわい張良もあざむく程のむせいあり何ぼう恐ろしき御山なれば是より遙に御拜禮被成まして然るべう存ます

箇様のせりふにて當りを取たり見物の場より役者をつらね詞にて譽る事は江戸より初り京都の昔は譽る事なく面白き時は感じ入たる聲何處ともなくジャジ

ヤ／＼といひて暫し感聲止す是も狂言の間は鎮り居て幕を引と感聲の聞へたり大阪はヤツチャお出やり申たとほうかぶりして扇をかざして譽たる物は天和三年二月十一日九郎右衛門芝居にての八兵衛といふもの岩井歌之助を櫻によそへて譽しより譽詞といふ事發れり京は物やさしく初の程は譽たき詞をぬにした／＼め樂家へ持たせやりたる事なるに寶永の比より江戸大阪の風儀うつり暫らく／＼ちくとん計りと思ひの外長／＼とせしむだ言で譽て貰ふ役者の迷惑顔見附の座附のみならず狂言半端は猶更也東武のやなぎ櫓に

幽靈が消兼て居る譽詞

元祖嵐小六は初日に見物の譽し所は抜き又二日目に譽る處は抜して幕を引てより嗚呼と感させ見ざめのせぬ工夫せり又淨るりの太夫有隣大和は度々見物の譽る日は床よりおりて立腹なし扱ふ不作法なる見物なりといひしとあれども見物の高聲に譽るも最負の餘れる故なれば忌み嫌ふべき事にあらず

今古参考南水漫遊續編四の卷終

今古
參考 南水漫遊續編

五の卷

一 舞臺造物

並 破風

大臣柱

橋懸り

奥屏口

花道

鳥屋

棧敷

二の替りの櫻

一 狂言作例

並 往古稽古

書拔せりふ附

幕切

一 舞臺衣裳鬘の論

並 帽子品目

假頭

一千秋萬歲樂(吉祥日)

今古參考南水漫遊續編五の卷

颯々亭南水主人著

舞臺造物

京都北野の人枅にて出雲の於國が興行せし時は神樂殿の如く家造りし四本柱は多門持國廣目増長に表し是を芝家といひ國が舞の臺とせしより舞臺といふ其後處々にて興行するに芝居の中央に舞臺を方三間に立るゆへ名附て三間の間といふ爰にて藝をなす處也元は二間に四間の間にして四本柱を立し也其後破風造御免有しより大臣柱といふ陣中大將の座にして四方八方へ往來の人此處より明らかに見ゆる處なるゆへ鏡の間といふ又松の間ともいへり其次を梅の間といひ後の板を鏡板といふ是に松櫻を畫き今の能ぶたいの鏡板といふ處也橋がゝりは今ぶたいの陣中にて武者走るといひ枅形への通ひ道也奥屏口はぶたいの上臆病口と思へるは非也着物の衤形りに附たるゆへ衤やう口也ともいふ是一日の計策を廻らし萬事舞臺へ此

口より出て會釋する處也當代は舞臺の建やう異なりといへども三間の間定三間といふ大臣柱橋懸り奥屏口の舊名を用ひ其餘襖通り紋板通り切穴幕走り間懸け場表ふだい裏ぶたいなど、轆轤場などいふ名目數種あり然れ共假家建の芝居の時は舞臺には床几をならべ棧敷といふ事もなく高場といふべき處あり舞臺へ行かよふ幅せばき道を附け兩方に竹にて高欄のやうなる埒を結び見物より役者へ色々の送り物をするに時時の花を折添て遣はしけるゆへ今に役者の送り物を花といひ通ひの道を花道といふと古き名にしていつの頃よりか幅も廣く成し兩方の埒も取拂ひ役者の出這入をなす事と成り向ふを戸屋といへるは戸板にて圍ふゆへ也一説鳩の鳥屋に似たるゆへかく名附共いへり當時は附ぶたいをも本ぶたいといひて此處より向ふの鳥屋まで花道のあいだ十三間あり大歌舞妓の役者は三方正面むかふ十三間といふ事を心得ざれば一座の魁首に至り難し天和年中今の如く本舞臺に建てたれ共能舞臺の如く大臣柱かぎりなりしに本ぶたいの前へ附ぶたいといふもの出來たり砂ぶたいといふは又遙に後年の事也其頃は上棧敷計りにて下棧敷

は小佐川十右衛門京登り殊なふ繁昌せし時棧敷を懸
出す其時棧敷の下疊場を下棧敷とせしより大阪の芝
居も其通りになし新棧敷孫棧敷といふもの追々に出
來たるを見ても芝居の繁昌思ひやるべし二の替りを
一年中の曠とし衣裳に縫箔の手を盡し表の看板舞臺
の造物に華美を飭る其權輿は舞臺の前に作り花の櫻
の太木を植て是を二の替りの櫻とて見物の目を驚か
せしが例と成て今に釣枝の櫻はまた漸に梅の綻ぶ頃
より彌生の空の長閑き景色を顯して人の心をなぐさ
め花の頃には藤山吹の盛りを見せ初秋より萩すゝき
菊の花壇など都て時候の魁をなす事戲場の祕事とす
扱又舞臺の造物は寶永年中樋口半右衛門といふ者せ
り出し道具を工夫せしより正徳享保の頃江戸狂言作
者中村傳七引道具押出し引返しぶんまはしなど珍敷
道具を仕出したり中にも堺町中村座にて嫁入角田川
といふ狂言に兩國橋より三圍の堤まで凡一里餘の川
岸を引道具になす大形なる事古今の珍景なりとて大
入せしかど張骨に書割せし計りにて當代に思ひ合せ
ば手輕き事ども也大阪芝居にて舞臺の道具替りに黒
幕といふ物を用ゆる事佐渡島長五郎の工夫にて其後

安永四年竹本座のあやつりにて東海道七里艇梁とい
ふ新淨るりの時近松半二同東南浪幕といふものを工
夫し出し夫より山幕雪幕などいふ物を仕出し都て是
を道具幕と呼ぶ其外山中谷間などの景色を見するに
往古は山すだれとて山の書割計りなりしが享保六年
丑八月三日初日竹本座にて信州川中島合戦に張貫の
本山を作り初め江戸のぶんまはしといへる物も大阪
にて舞臺の下へぶたいの下を
ならくといふ人數を入て廻り道具とせ
しは寶曆八年寅十二月廿二日初日角の芝居にて三十
石艘始大切の幕明け造物二重舞臺金襖中門の外に高
札建て白梅の盛り總一面雪降りにて狂言色々有て後
中山來助淀與三右衛門役三枡大五郎河村瑞軒役姉川
大吉みゆき役遠攻にて見へに成りし其まゝ舞臺中一
面に廻り道具にて淀の城の景色雪ふりのてい水車廻
りあり真中に天道船有て此中に中村次郎三熊本辨三
作役白き繻絆すはうに成り山下金作けいせい揚世役
中村喜代三郎源八女ばうみふね役立廻りしてゐる兩
方に三十石の船二十計り繋ぎ附け侍大勢取まき皆々
弓張でうちんにて圍ふ目ざましき趣向は狂言作者の
名人並木正三獨樂まはしより思ひ寄たり此廻り道具

の飜り附より裏ぶたい表ぶたいといふ通言始り當世の新狂言はいづれの場にも返し道具とて造物を飜り替るに多く此廻り道具役者の見へよく利て舞臺にはえあるゆへ一日の狂言に數度用ゆるやうに成れり糺上げ道具は寶曆三年酉十二月二十八日初日大西芝居にてけいせい天羽衣の大切茶屋場中山新九郎此時仔細有て中山を虎屋金助本名北川惣左衛門役にて家根の上に大わらはに成中山文七與五郎役松島喜代藏女房お高役にて兩人死る此見へのまゝにて糺上る下座敷には中村歌右衛門赤松四郎役中村四郎五郎奴關内役中村十藏佐々羅三八本名細川勝元役にて皆々りしき形り樋よりしたゝる血汐を受て座元三條定助傾城浮島おしの役に右の血汐を吞し居る見へ則並木正三の工夫也此糺上げ道具初りしより其後寶曆七年丑の冬豐竹座のあやつりにて祇園祭禮信仰記四段目の切金閣三重をせり上げせり下げ道具とす中村阿契淺田一鳥の工夫なり又寶曆九年卯の四月十五月初日大西芝居にて奈良都大佛供養の大切に舞臺一面跡せり上しかけつくりの道具と成す竹田治藏の工夫寛政三亥正月十一日より角の芝居にてけいせい誰伏水寛政十一

年末八月八日初日中の芝居にて北國嫁威谷にもはすにせり上げ道具をなす中にも見物の目を驚かす目ざましきものはがんだう也前天神といひて小兒の戯ぶは天神の仕かけ也其はじめは寶曆十一年巳十二月廿四日初日中の芝居二の替り新狂言秋葉權現廻船斬大切の幕明は造物二重ぶたい一面の金ぶすま奥屏口中二階座敷のていにて段々狂言有て後此家體東西へ引込み本ぶたい一面の土手に成中村佐野八儲役にて嘉藤次役の庄五郎を追て出て立に成戸屋へ追込むト嵐雛助傾せい花月の役船岡軍次役の東九郎を追て出て立てあつて同じく戸屋へ追込むト岩田染松妮松がえ役にて春山丹下役の染川此兵衛と立しながら出て戸屋へ追込む都て箇様なる立て幾度もあるは大道具拵への間也右大土手一面に返し道具八間のあいだ結構なる御殿黒塗高欄附金襖真中に中村四郎五郎奴佐賀内本名月本圓秋役にて吹替の祐明をおさへ居る三枡大五郎玉島幸兵衛役藤川八藏徳島五兵衛役にて中村歌右衛門の日本駄右衛門役を取まき居る嵐三五郎月本始之助役竹中三吉松岡監物役にて詰かけ居る向ふの襖左右へひらく奥打拔きの大座敷中村糸太郎三津姫役雛助佐野八其外一座

殘らず夜討の出立にて奥深ふならび居る是大切打出
しの道具也扱又竹田近江が工夫せし見物の場を引割
せり上げ道具を出せしは明和三年戊の春竹本座にて
本朝廿四孝四の切雲霞の如く詰り居る見物を左右へ
引わけて丁の字形りの御殿をせり出して奇妙がらせ
しかど此道具も近年は數度に及びて左のみ珍らしく
も覺へず又無造作にして目新らしく見物の評よく當
りを取し田樂返しといふものは寛政元年堀江市の側
此太夫芝居にて有職鎌倉山四つ目城外殿中の道具か
はりまた一種引拔襖也寛政三年亥の四月五月初日角
の芝居にて開發廓歩尺に尾上新七城山の三次郎狐に
て正體を顯はす處襖の畫面亂菊計り殘して襖の地を
引拔たり其後寛政五年丑正月十七日初日中の芝居二
の替りけいせい揚柳櫻の序切揚屋の奥ざしき造物六
間の間一面の二重廻りやたい向ふ見附の襖總金地に
雪柳の畫此襖一面に仕かけあり舞臺見き上みの方返
し板にて雪の庭に成り色々狂言有て後チョン／＼に
て返し右揚屋の道具二重ぶたいはやはり其儘にて見
附の襖一面に金地引ぬき取るト畫きし雪の柳一面に
残り柳の枝悉くひらくと向ふへ出る仕かけ此後奥

深ふ白木綿の雪幕を張り雪の景色椽がわ蹴込み返る
と雪の上手に成り都て柳谷の道具と成れり其外ドン
デン返し打拔の遠見中遠見中引など、數種の造物を
用ゆるやうに成ぬ

狂言作例

夫狂言といふ事原俳優ワカザシにして八雲御抄に十名を出し
たまふ諷ひもの、類ひにて催馬樂細男ササキヲの舞田樂の曲
能狂言等の種々品かはれどもみな神を和め人をなぐ
さむる徳は同じ今の歌舞妓といへるものも文獻通考
に假婦妓カブメと見え日本後紀桓武天皇延暦十八年秋七月
癸卯朔云々。己酉停伊勢齋宮新嘗會、但以歌舞妓
供ツケ九月祭マツリかゝれば歌舞妓といへるはいと古き神事
によべる名なり今の狂言の趣向善を勧め惡を懲らし
他の爲に耳目を喜ばしめ自の爲に氣血をめぐらしむ
劍は篋に入れども武を磨く實事あり弓は囊に納れど
も亂を忘れぬ立入なすわざをきなれば豊かなる時も
て遊ぶ萬歳の聲ともいひつべし扱又役者の仕打に實
をして見せるは功者になくしては成らず然れ共歌舞妓
狂言と看板を出してする事ゆへ面白き事を次にして
本の事をして見せるはたとへば學問は十分に足りた

る僧の説法の下手なるが如し佛の本意と思へ共聴衆
 そろ／＼寝むたげが來れば參詣も遠ざかりされば何
 を以てか衆生を濟度せんや機によりて説るべし面白
 からず工夫なきを下手役者とす芝居に華實のふたつ
 ありてこれを相對する事かたし操り淨るりは陰に屬
 すれば實を以て結ぶを可也とし歌舞妓は陽氣の器な
 るゆへ實は薄くとも狂言の花あつて趣向は目ざまし
 きを好とす又役者の藝風にも華實のふたつありて花
 とするは見物の大入を取りて舞臺賑はしく棧敷の最
 負多きをいひ實とは狂言をそゝらず評判よりも見て
 面白くしまりあるをいふ狂言の趣向は陰陽和合なさ
 いれば見物大入を取事かたしたとへば美しき女形に
 難儀の體の狂言をさせ二の替りは春めきし櫻の木な
 どの下に雪の肌くゝり附られ居る粧ひ見物の受よき
 もの也櫻の咲しは陽の至つて盛んなる處美しき女の
 いましめられし姿は陰の凝しかたちにて其中には詞
 にも筆にも盡されぬ甚深微妙の色情は可愛らしさと
 むぎき體の面白さと有て見る人の氣を動かす事貴賤
 老若男女みな一同也此心得なき狂言作者はたとへ和
 漢の書籍に眼を晒し螢雪の勞を積とも詮なし芝居を

見に行は鬱情を散する爲なれば慰みに成趣向よし既
 に松といふ物はいつも縁の色をもちて眞實なる物な
 れども生けて慰みにはならず珍らしき椿はたつた二
 輪を金二步出して生けをき二日も立ぬに花は落ても
 生けて樂しむ方は此方にあり彈正左衛門でもなき人
 が彈正左衛門と替名を附け武士でもない身が兩刀を
 帶し顔に白粉を塗て出るからは是が實の仕打と思は
 れんより見物の心を引立てこそ肝要なれ往古は新狂
 言の相談極りて後一場づゝ仕組立の時其役人を呼寄
 せ圓居してせりふを口寫しに教へ一旦這入る所迄立
 て又小返しとて再返稽古し又次を作者せりふ工夫し
 て口寫し立る事也其座の立者出る時は其立者狂言を
 仕組し也中興狂言の趣向六ヶ敷成てより執筆に頭書
 せよとてせりふ附のいひ出しをひとくぐり程づゝ書
 しが當時にては書拔とて端役が心得ましたといふ一
 口の知れたせりふまで書て渡すやうに成ぬ狂言本は
 大阪にて根本江戸にて臺帳といふ今の如く委しく書
 事は金子一高より初むといへ共近來迄は此間思ひ入
 などゝせりふ附の外はト書といふ事さつとせしもの
 成しが當代は手を取て教ゆる如く書き昔は一座の立

者の宅にて荒立より稽古なし總稽古といふ事計り舞臺へかけて見物を禁じ仕組御目に不懸と木戸口へ張札を致せし也敵役のせりふ數は少なければ強く見へ多言なるは惡し立役女がた總體のせりふ早かる惡かる大事なし遅かる惡かる猶わるしとてせりふのいひ廻し早きはこらへらるゝ遅きは惡き中にも惡きと也吃のせりふはカキケコサシスセソ此文字計りを吃り其餘は吃るべがらず猶又心得べきは吃りおのが心に我は吃りなりと思ふゆへ人の聞を取しく思ひ嗜みゝ吃る然れども嬉しき時腹の立時又はおかしき時は我を忘れて吃る也初中後吃りは口の中にて吃るべしとぞ昔の狂言は役者の肌を見せるといふ事なく大肌を脱ぐ心の時は上着を脱て白むくと成り腹切とて白むく越しに刀を引廻す此事は今もありて白むくを肌として昔より傳へ見馴たる事ゆへ自然と見物も承知なしねりぐりとて赤き綿糸を以て血汐とす然るに近來は正眞の殺刹の如く物すぐく見せんとて蘇坊を用ひ渾身を朱に染る事とは成りぬ都て正眞をよしとすれども非人乞食の姿ばかりは奇麗に有たし非人敵打の狂言は中古姉川新四郎を當りを取る往昔荒木

與次兵衛手負の名人にて此狂言の元祖とす其時の打扮病かづらにて随分黒々と油を附け顔の作りも白粉濃く塗りて手足も美しくなす衣裳は白小袖の無地大廣袖紅絹裏花色の丸ぐけ帶を前にて結びたり役者舞臺にて尻からげる事は小佐川十右衛門より初め片岡仁左衛門との立合に兩人よき男ゆへ見事なりよし其時白紙の三里紙を當て足の飴りと成す事を初めしより當代にても奴の役を勤る時はかならず三里紙を用ゆ昔の狂言は當代の如く少しの見へにもかげ打といふ事なし龍を遣ふか又は鬼神などの出るには物の蔭より打しゆへかげといひ太刀打にも打事なかりしが次第に立廻りも大形に相成其うへ四人詰八人詰などの大だてには數種の名目有宙がへり、手ばひ、猿かへり、杉たち、ぎはつりふね、跡返り、胸返り、やなぎ、五段返り、あごつき、詰よせ、天地、ひざ詰、そつ首落し、千鳥、引廻しなどゝて目ざましき事共をなすに附け蔭打にも兩三人出て添蔭といふ事を仕初め柏子木二三挺にて打立る事とは成りて蔭といふ本意を失ふ明和の頃あやつり舞臺の趣向にて並木正三後見に出られし時黒き着附上下にて勤められし事ありかく有

べき事也狂言一場の終りに幕を切るといふ事は染川十郎兵衛より初め拍子まくゑら幕などに各々とたんの見へあり又淨瑠璃狂言には口幕は三重幕切は段切幕といふ三重の幕に品々あり天皇立の大序の幕はかならず大三重也大三重は眞の三重ともいひて是は初段の中入より外にはなし其餘は行草の三重也狂言の模様ばようの寄りて猛まう三重愁三重中愁ひ三重樂にていづれも口まく也序切二の切三の切四の切は段切まくといふ「譽を世々に殘しけりなどゝきつぱりと留る也大切五段目は打出し幕といひて往古は「仁義正しきものゝふの弓矢の家こそ久しけれと此文を諷ふ當代顔見世下の巻打出しに謠の和歌を揚るこれを和歌幕といへり延寶年中の頃迄は京大阪とも狂言の大切には其むかし出雲のお國が舞し時の打扮の如く天冠をいたいき白き衣を着し八人づゝ舞けるこれを天冠舞といふ則神道は乙女の祕事にしてこの舞を頌する時は一切の諸神微妙の妓樂の徳によりて感應なし給ふとぞ其祕文は

まんだらふれりとみふれりありやのゑやうどのと
みなればまいてもゝつきもせず

元祿年中に至りては或は佛道によせ天人などに打扮ても勤しゆへ是を天人踊といひしが此儀も寶永年中に止みたり田舎芝居銚子の浦方などにては何の狂言にても大切に張子の赤鬼を出さねば見物の歸らざる所もあり是等も往古の天冠舞天人踊などの餘風ならん

舞臺衣裳鬘の論

往古女形の帶は幅三寸五分四寸ほどなりしが萩野澤之丞といふ女がた鳴神の狂言に帶の見へあしきゆへ幅廣の帶を仕初しより今に専ら是を用ゆ吉彌むすびといふ事は延寶の頃上村吉彌といふ女がたむすび初めしより其風儀市中にうつりて今に用ゆ又男子の如く四角にするを輕留多結びといふ平十郎結びといふは三代目村山平十郎といへる立役立に結び出たるより初る扱又染色に小太夫鹿子といふものあり京大阪にては江戸鹿子といふ貞享より元祿に至りて江戸若女がた伊藤小太夫が好みにて其後専ら流行すまた宇源太染といふは小野川宇源太といひし若衆方の好み初め市松染は佐野川市松が思ひつき文彌染は若女形中村文彌はじむ享保二年江戸中村座へ下り其節木

戸若い者などへ遣す紫色にして大しぼり也小六染は嵐小六左まきの染もやうを着て出たるより初り小六紐といふもの菅笠の紐を糸組打を附たり町方にても専ら用ゆ龜藏小紋は濁水の模様にて江戸市村座の若太夫市村龜藏より初む總じて衣裳の端手なるを着る事染川十郎兵衛より發り其頃の衣裳といふは紅絹の無地に同糸にて大きな蕪を只二つ縫たるなどを物好きといへり又袖の火打をば鱗形に縫せたり又女がたのよき衣裳を着初しは峯の小ざらしより發り是迄は唐織は着ざりしよし西鶴の大鑑に見へたり後世二の替り衣裳とて縫箔手を盡すといへ共當世の如き華美なる事にあらず既に明和の初め山下金作薄雪姬を勤めし時の衣裳に緋ぢりめん金糸にて歌がるたの模様なりしが見物見事なりとて目を驚かせしとぞ扱又承應の頃の歌舞妓は立役てきやく何れも茶筌髪に結び女がたは今の如く野郎帽子女鬘などいふ物もなく月代の上に手拭を置き女の身振を寫せり是を古の太夫の代りば立て興行せしが鳥居庄七といふ女がた幅子を仕出しひらりと提て着たりしを皆々眞似び色は好み次第にて有しに玉川千之丞より黒き帽子を

上にて折込み兩方へさがらぬやうにしけるを風流の物すきといへり又一種澤之丞帽子といふは元祿の頃澤之丞といふ女形かづき始とおもの帽子共いへり其頃迄はふつゝかなる木綿衣裳をゆき短かに着なせし風俗に老若男女うつゝをぬかしぬ其後加茂川野鹽の兄に傳兵衛といふものやでんぼうしといふ物を工夫仕出し四角なる絹の四隅に鉛りにて鎮りを付て落ぬやうに拵へ出せしを其後水木辰之助加茂川のしほと申合せから川のしとは角の芝居の座元なるよし初編金屋金五郎道行の文中に見へたり色は紫に極め縮緬にて風流の帽子を作り水木ぼうし共あやめぼうしともいひ今の野郎帽子とは成りぬ扱また鬘の好みは其時代にて様々と變れり辰松風は卷たてながく高く上げて結ぶ幸助撫といふは立役桐の谷權十郎始め差髻は若女がた瀬川菊之丞始め三つ髻は中村八重桐調子丸といふ鬘は四天王寺伽藍鑑の狂言の時嵐三五郎の風也勝山は勝山仙州初めはらげ髪といへる事は樂屋入の急ぐより思ひ寄たる鬘なりしがいつとなく専ら用ゆるやうに成れり鬘に紐を付たる事は水木辰之助かづらに光澤を出しうつくしくなしたるは荻野八重桐也附髪は姉川新四郎ぶしやうかづら鬘かづら

は元祿より正徳頃の立役笹尾音十郎始む當無用ゆる鬘に數品の名目あれどもくだしくしければ爰に省く勢州古市中の地藏などの芝居にて鬘をクワトウと呼ぶは假頭のよび訛れる也宛委編に吳婦女盛んに粧ひて膳ひて風流をなす輩きびしく其髪を束ね其下へ角のまなへて入る時は兩耳を過す時はその鬘左右へ覆ひて見事なりと見それが後々かうじもて歷々の公王の婦女も緩鬘ユルビに髪をゆひ又髻カッラもの自ら傾てゆうにするを風流となせり又髻をも多く入れんとすれ共さかんに飭りをなすうへ思ふやうにも入られず常にはおもくして戴くも不自由ゆへまづ木や籠を頭のなりにして其うへに髪を装ひ名附て假髻カキといひ或は假頭カウとも名づく天寶の始め楊貴妃も常に假鬘をもつて首の飭りとすといふは是なり

千秋萬歲樂

雅樂一たび流れて猿樂と成り猿樂又流れて歌舞妓成るみな樂の流れなるゆへ劇場のならひにて都て物の納りに千秋萬歲樂といふ事を用ゆ樂説記聞曰千秋樂盤涉調の曲漢の文帝の作也民百姓畜田を作りて秋に縁有故に千秋樂に民を撫と撫育の心也萬歲樂平調の

曲隋の煬帝の作也又日本にては用明天皇故作玄給ふと根源抄に出す萬歲は命をのぶるに縁あるゆへにかくいふ也西峯松下氏云日本紀私記に云今俗曰阿良禮走師說此歌曲之終必重稱萬年阿良禮今故曰萬歲樂是古語之遺也

梁塵愚案抄 神樂歌

本

せんざいせんざいや千とせのせんざいや

末

まんざいまんざいやよろづよのまんざいや

説文に云秋は米穀熟する也とありてものゝ成就する時を秋といふ也麥が熟するゆへに四月をも麥秋といふ類也故に千秋も千年といふに同じ韓非子に云君をして千秋萬歳の聲を聴しめんとといふ事あり王維の詩にも萬歲千秋聖君に奉ずと作りて目出度事に用る詞也また吉祥日といふ事を書くも説苑に云吉祥及三子孫とありてこれもめでたき事也

今古
參考
南水漫遊續編五の卷大尾

新群書類從第二

終

水黒
谷川
不眞
倒道
校訂

明治三十九年七月二十日印刷

明治三十九年七月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

市島謙吉

編輯兼
發行者

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷者
本間季男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所

東京活版株式會社

大正十五年二月

黃代節 撰

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02977 5046